標準説教集

ジョン・ウェスレー
藤遥　制作

説教一　信仰による救い

オクスフォード大学聖母マリア教会にて。1738年6月18日。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われています」（エペソ二・八）

（一）　神が人に与えてくださった祝福は、すべて神のまったくの恵み、賜物、好意によるものです。それは価なしの、受けるに値しない好意です。まったく受けるに値しない好意です。人には、神のあわれみのほんのわずかさえ求める権利がありません。「土のちりで人を造り、命の息を吹きいれ」て生きた者としたのは、価なしの恵みでした（創世二・七）。その魂に神のかたちを刻み、「よろずの物をその足の下におかれた」のも、価なしの恵みでした（詩篇八・六）。同じ価なしの恵みが、今日に至るまで私たちに、いのちと息と万物とを与え続けています。私たちのあり方も、持ち物も、行いも、神の御手からほんのわずかなものさえ受けるに値しないからです。「神よ、私たちのすべてのわざは、あなたが私たちのうちでなし遂げられたものです」（イザヤ二六・一二）。ですから、これらもまた価なしのあわれみのしるしです。人のうちにどんな義が見いだされても、それもまた神の賜物です。

（二）　それでは、罪人は何によって自分の罪を、どんなに小さな一つでも償えるのでしょうか。自分の行いによってでしょうか。いいえ。たとえ行いがどれほど多く、どれほど聖くても、それは自分のものではなく、神のものです。けれども実際には、行いそのものがすべて汚れて罪深いものです。ですから、行いの一つひとつが新たな償いを必要とします。悪い木には悪い実しかなりません。人の心はまったく腐って、忌まわしいものになっています。「神の栄光を受けられなくなって」いるからです（ローマ三・二三）。神の栄光とは、偉大な造り主のかたちにかたどって、はじめに人の魂に刻まれた栄光の義のことです。ですから人には、申し立てられる義も行いも何一つありません。人の口は神の前でまったくふさがれています。

（三）　ですから、罪人が神の好意を得るとすれば、それは「恵みに恵みを加えられた」ことです（ヨハネ一・一六）。神がなおも私たちに新しい祝福を注いでくださるとしましょう。いや、あらゆる祝福の中で最も大きな救いを注いでくださるとしましょう。そのとき私たちは、これらのことについて何と言えるでしょうか。こう言うほかありません。「言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝します！」（第二コリント九・一五）。まさにそのとおりです。ここに、「まだ罪人であったとき、私たちのためにキリストが死んでくださったことによって、神は私たちに対する愛を示され」ました（ローマ五・八）。それは私たちを救うためでした。ですから、「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われています」（エペソ二・八）。恵みは救いの源であり、信仰は救いの条件です。

さて、神の恵みからもれることがないように（ヘブル一二・一五）、次のことを注意深く調べなければなりません。

【一】　私たちを救う信仰とは何か

【二】　信仰による救いとは何か

【三】　いくつかの反論への答え

【一】　私たちを救う信仰とは何か

（一）　第一に、それは単なる異教徒の信仰ではありません。神が異教徒に求めておられるのは、「神がおられることと、ご自身を求める者に報いてくださること」を信じることです（ヘブル一一・六）。そして、神を神としてあがめ、すべてのことに感謝して、神を求めるべきだと信じることです。また、同胞に対して正義とあわれみと真実という道徳的な徳を心して行い、神を求めるべきだと信じることです。ですから、ギリシア人やローマ人は、いやスキタイ人やインディアンでさえ、これだけのことを信じないなら弁解の余地がありませんでした。す

なわち、神の存在と属性、来るべき世での報いと罰、道徳的な徳を行う義務です。これは単なる異教徒の信仰にすぎないからです。

（二） 第二に、それは悪魔の信仰でもありません。悪魔の信仰は異教徒の信仰よりはるかに先まで進んでいますが、それでも違います。悪魔は、賢く力ある神がおられること、その神が恵み深く報い、正しく罰することを信じています。それだけでなく、イエスが神の子キリストであり、世の救い主であることも信じています。ですから、悪魔ははっきりとこう言っています。「あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」（ルカ四・三四）。あの不幸な霊は、聖者の口から出た言葉をすべて信じています。それは疑いようがありません。昔の聖なる人々が書いたほかの言葉も、すべて信じています。そのうちの二人について、悪魔はやむをえず、こう輝かしい証言をしました。「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救いの道を伝える方々です」（使徒一六・一七）。神と人との大敵は、これだけのことを信じ、信じておののいています（ヤコブ二・一九）。すなわち、神が肉において現れたこと（第一テモテ三・一六）、キリストが「あらゆる敵をその足もとに置く」こと（第一コリント一五・二五）、「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたもの」であることです（第二テモテ三・一六）。悪魔の信仰はここまで及んでいます。

（三） 第三に、私たちを救う信仰は、のちに説明する意味での信仰ですが、キリストがまだ地上におられたときに使徒たち自身が持っていた信仰にとどまるものでもありません。使徒たちは、「いっさいを捨ててイエスに従った」ほどにキリストを信じていました（ルカ五・一一）。そのころには奇跡を行う力があり、「あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす」こともできました（マタイ一〇・一）。そうです、「すべての悪霊を制する力と権威」も持っていました（ルカ九・一）。何よりも、主から遣わされて「神の国を宣べ伝え」ました（ルカ九・二）。

（四） では、私たちを救う信仰とは何でしょうか。まず一般的に答えると、それはキリストを信じる信仰です。キリストと、キリストを通して神とが、この信仰の本来の対象です。この点で、昔と今の異教徒の信仰とは十分に、まったく異なります。また、悪魔の信仰とは次の点で完全に異なります。それは単なる思弁や理屈、冷たくいのちのない同意、頭の中の観念の連なりではありません。心のありようでもあります。と申しますのも、聖書がこう言っているからです。「人は心に信じて義とされます」（ローマ一〇・一〇）。「自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われます」（ローマ一〇・九）。

（五） この点で、この信仰は、主が地上におられたときに使徒たち自身が持っていた信仰とも異なります。この信仰は、キリストの死が必要であり功績があること、またキリストの復活に力があることを認めます。キリストの死を、人を永遠の死から贖う唯一の十分な手段として認めます。キリストの復活を、私たちみなをいのちと不死に回復させるものとして認めます。キリストは「私たちの罪過のために死に渡され、私たちが義とされるために、よみがえらされた」からです（ローマ四・二五）。ですから、クリスチャンの信仰とは、キリストの福音全体に同意するだけではありません。キリストの血に全き信頼を置くことでもあります。キリストの生涯と死と復活の功績に信頼することです。私たちのために与えられ、私たちのうちに生きておられるキリストに、私たちの償い、私たちのいのちとして寄りかかることです。そしてその結果として、キリストと固く結び合い、キリストにすがりつくことです。キリストを私たちの「知恵、義、聖、あがない」として、ひと言で言えば私たちの救いとして、結び合うことです（第一コリント一・三〇）。

【二】 信仰による救いとは何か

第二に考えるのは、この信仰による救いとは何かということです。

（一） 第一に、ほかに何を含むにせよ、それは現在の救いです。この信仰にあずかる人々が地上で得られるもの、いや実際に得ているものです。使徒は、エペソの信徒たちに、そして彼らを通してあらゆる時代の信徒たちに、こう語っています。「あなたがたは救われるだろう」ではなく（それもまた真実ですが）、「あなたがたは信仰によって救われています」と（エペソ二・八）。

（二）　あなたがたは（ひと言でまとめれば）罪から救われています。これが信仰による救いです。これこそ、神が長子を世に送られる前に、御使いが予告した偉大な救いです。「その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからです」（マタイ一・二一）。ここにも聖書のほかの箇所にも、この救いを限る言葉や条件はありません。キリストはご自分のすべての民を、別の箇所の表現では「すべて彼を信じる者」を（ローマ一〇・一一）、すべての罪から救われます。原罪からも自罪からも、過去の罪からも現在の罪からも、「肉と霊との」罪からも救われます（第二コリント七・一）。キリストにある信仰によって、彼らは罪の罪責からも罪の力からも救われます。

（三）　第一に、過去のすべての罪の罪責からの救いです。全世界は神の前に罪ある者です。主が「もろもろの不義に目をとめられるならば、だれも立つことができ」ないほどです（詩篇一三〇・三）。また、「律法によっては、罪の自覚が生じるのみ」で、罪から解放されることはありません。ですから、「律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とされ」ません（ローマ三・二〇）。しかし今や、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」が、「すべて信じる人に」現されました（ローマ三・二二）。今や、「彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされ」ます（ローマ三・二四）。「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受けるべきあがないの供え物とされました。それは、過去に犯された罪の赦しのために（あるいは、赦しによって）、神の義を示すためでした」（ローマ三・二五）。今や、キリストは「私たちのためにのろいとなって」、私たちを「律法ののろい」から解き放ってくださいました（ガラテヤ三・一三）。キリストは「私たちを責める証書をぬり消し、これを取り除いて、十字架につけて」しまわれました（コロサイ二・一四）。「こういうわけで、今やキリスト・イエスを信じる者は罪に定められることがありません」（ローマ八・一）。

（四）　罪責から救われたので、彼らは恐れからも救われます。もちろん、父の心を損なうまいとする子としての恐れからではありません。あらゆる奴隷的な恐れからです。苦しみを伴う恐れ、罰への恐れ、神の怒りへの恐れからです。彼らはもはや神を厳しい主人とは見なさず、寛大な父として仰ぎます。「彼らは再び奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのです。その霊によって、彼らは『アバ、父よ』と呼びます。御霊みずから、彼らの霊と共に、彼らが神の子であることをあかししてくださいます」（ローマ八・一五～一六）。また、神の恵みから落ちてしまうことへの恐れからも、偉大で尊い約束からもれてしまうことへの恐れからも、救われています。落ちる可能性がなくなったわけではありません。こうして彼らは、「私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得て」います。「神の栄光にあずかる希望をもって喜んで」います。「彼らに賜わっている聖霊によって、神の愛が彼らの心に注がれて」います（ローマ五・一～二、五）。これによって彼らは確信します（いつもではないかもしれず、いつも同じほど強く確信するのでもありませんが）。「死も生も、現在のものも将来のものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、彼らを引き離すことはできません」（ローマ八・三八～三九）。

（五）　また、この信仰によって、彼らは罪の罪責からだけでなく、罪の力からも救われます。使徒はこう明言しています。「あなたがたが知っているとおり、彼は私たちの罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪もありません。すべて彼のうちにとどまる者は、罪を犯しません」（第一ヨハネ三・五～六）。また、「子たちよ。だれにも惑わされてはなりません。罪を犯す者は、悪魔から出た者です。信じる者はみな神から生まれたのです。すべて神から生まれた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生まれた者ですから、罪を犯すことができません」（第一ヨハネ三・七～九、五・一）。もう一つ挙げます。「すべて神から生まれた者は罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた者は自分を守り、悪しき者はその人に触れません」（第一ヨハネ五・一八）。

（六）　信仰によって神から生まれた者は、次のような罪を犯しません。

一、習慣的な罪を犯しません。習慣的な罪とは、罪が支配していることにほかなりません。けれども、信じる者のうちでは、罪は支配できません。

二、故意の罪を犯しません。信仰にとどまっているかぎり、その人の意志はあらゆる罪にまったく逆らっています。罪を死の毒として忌み嫌っています。

三、罪深い欲望をいだきません。その人は神の聖く完全なみこころを絶えず願っているからです。汚れた欲望に傾くことがあっても、神の恵みによって芽のうちに摘み取ります。

四、弱さによって罪を犯すこともありません。行いでも、言葉でも、思いでもそうです。その弱さには本人の意志が伴っていないからです。意志が伴わなければ、厳密には罪ではありません。

こうして、「神から生まれた者は罪を犯しません」（第一ヨハネ三・九）。罪を犯したことがないとは言えません。けれども今は、「罪を犯さない」のです（第一ヨハネ五・一八）。

（七）これが、信仰による救いです。この世においてさえ受けられる救いです。それは罪からの救い、また罪の結果からの救いです。この二つは、しばしば「義認」という言葉で言い表されます。義認という言葉は、最も広い意味では二つのことを含みます。一つは、キリストの償いが、いまキリストを信じる罪人の魂に実際に当てはめられ、罪責と罰から解放されることです。もう一つは、キリストが心のうちに形造られ、罪の力から解放されることです。ですから、このように義とされた者、すなわち信仰によって救われた者は、まことに新しく生まれたのです。御霊によって新しいいのちに生まれたのです。そのいのちは「キリストと共に神のうちに隠されて」います（コロサイ三・三）。その人は、生まれたばかりの乳飲み子のように、「混じりけのない」みことばの「乳」を喜んで受け、「それによっておい育ち」ます（第一ペテロ二・二）。自分の神である主の力によって、信仰から信仰へ、恵みから恵みへと進みます。そしてついに、「全き人となり、キリストの満ちみちた徳の高さにまで」至るのです（エペソ四・一三）。

【三】 いくつかの反論への答え

（一）これに対してよく出される第一の反論はこうです。「信仰のみによる救い、すなわち義認を宣べ伝えるのは、聖性と良きわざに反することを宣べ伝えることではないか」。これには短くこう答えられます。「ある人々のように、聖性や良きわざと切り離された信仰を語るなら、そのとおりでしょう。けれども私たちが語っているのは、そういう信仰ではありません。あらゆる良きわざと、あらゆる聖性を生み出す信仰です」。

（二）けれども、もう少し詳しく考えるのも有益でしょう。これは新しい反論ではなく、聖パウロの時代からある古いものだからです。当時すでにこう問われていました。「信仰のゆえに、私たちは律法を無効にするのか」（ローマ三・三一）。私たちはこう答えます。第一に、信仰を宣べ伝えない者こそ、明らかに律法を無効にしています。直接にあからさまに無効にする人は、本文の精神をすっかり食いつぶす限定や注釈を加えます。間接に無効にする人は、律法を守ることのできる唯一の手段を示しません。第二に、私たちは「律法を確立する」のです（ローマ三・三一）。律法の全き広がりと霊的な意味を示すことによって確立します。また、すべての人をあの生ける道へと招き、「律法の要求が」彼らのうちに「満たされる」ようにすることによって確立します（ローマ八・四）。こうした人々は、キリストの血だけに信頼しながら、キリストが定められたすべての定めを用います。「神が、彼らが良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて」くださった良い行いを、すべて行います（エペソ二・一〇）。そして、あらゆる聖く天的な心のありようを、すなわちキリスト・イエスにあったのと同じ思いを、喜び、また現します。

（三）「しかし、この信仰を宣べ伝えると、人は高ぶりに陥るのではないか」。私たちはこう答えます。教えそのものの性質からではありませんが、そうなることはありえます。ですから、信じる者はみな、偉大な使徒の言葉によって真剣に戒められるべきです。最初の枝は「不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのです。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなこともないでしょう。神の慈愛と峻厳とを見なさい。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられます。そうでないと、あなたも切り取られるでしょう」（ローマ一一・二〇～二二）。そこにとどまっているかぎり、その人は聖パウロの言葉を覚えているでしょう。パウロはまさにこの反論を予見して、こう答えています。「すると、ど

こに誇りがあるのでしょうか。まったくありません。なんの法則によってでしょうか。行いの法則によってでしょうか。そうではなく、信仰の法則によってです」（ローマ三・二七）。人が行いによって義とされるなら、その人には誇るものがあるでしょう。けれども、「働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人」には、誇るものがありません（ローマ四・五）。主題の聖句の前後の言葉も、同じ趣旨です。「あわれみに富む神は、罪過によって死んでいた私たちを、キリストと共に生かしてくださいました（あなたがたの救われたのは、恵みによるのです）。それは、キリスト・イエスにあって私たちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を示すためでした。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのです。それは、あなたがた自身から出たものではありません」（エペソ二・四～八）。あなたがたの信仰も救いも、あなたがた自身から出たものではありません。「神の賜物です」。価なしの、受けるに値しない賜物です。あなたがたを救う信仰も、神がご自分の善意と純粋な好意によってそれに結びつけてくださる救いも、賜物です。あなたがたが信じることが、神の恵みの一つの表れです。信じることによって救われていることが、もう一つの表れです。「決して行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです」（エペソ二・九）。信じる前の私たちのわざや義は、すべて、神から罪の宣告しか受けるに値しないものでした。信仰を受けるに値するどころではなかったのです。ですから信仰は、いつ与えられても、行いによるのではありません。信じてから行うわざによる救いでもありません。そのときには、神が私たちのうちで働いておられるからです。ですから、神がご自分の働きに報いを与えてくださっても、それは神のあわれみの豊かさを表すだけです。私たちには誇るものを何も残しません。

（四）「しかし、信仰のみによって価なしに救う、あるいは義とする神のあわれみをこのように語ると、人を罪にとどまらせることにならないか」。確かに、そうなりえますし、実際にそうなるでしょう。多くの人が「恵みが増し加わるために、罪にとどまる」でしょう（ローマ六・一）。けれども、その人たちの血は自分の頭に降りかかります。神の慈愛は人を悔い改めに導くはずのものです。心の誠実な人は、実際にそう導かれます。神のもとにまだ赦しがあると知れば、イエスにある信仰によって自分の罪もぬぐい去ってくださいと、大声で叫び求めます。人々がたゆまず熱心に叫び求め、神が定められたあらゆる手段で神を求め、神が来てくださるまで慰めを拒むとします。そのとき、「きたるべきかたがお見えになります。遅くなることはありません」（ヘブル一〇・三七）。また、神は短い時間に多くの働きをなさいます。使徒行伝には、神が人々の心にこの信仰を、天から落ちる稲妻のように起こされた例がたくさんあります。パウロとシラスが語り始めたその時刻のうちに、看守は悔い改め、信じ、バプテスマを受けました。ペンテコステの日には、聖ペテロの最初の説教で三千人が悔い改めて信じ、バプテスマを受けました。神はほむべきかな。神がいまも「救いを施す力ある」方であることの生きた証人が、今日も大勢います（イザヤ六三・一）。

（五）ところが、同じ真理を別の面から見て、正反対の反論が出されます。「人が自分にできるすべてのことをしても救われないなら、人は絶望に追いやられるではないか」。そのとおりです。自分のわざや功徳や義によって救われることに絶望させます。そして、そうあるべきなのです。自分の功徳をすっかり捨てるまで、だれもキリストの功徳に信頼できないからです。「自分の義を立てようと努め」る者は、神の義を受けられません（ローマ一〇・三）。律法による義に頼っているかぎり、信仰による義は与えられません。

（六）「けれども、これは慰めのない教えだ」と言われます。悪魔がそんなことを人に吹き込んだのは、いかにも悪魔らしいことです。真実もなく、恥も知らないのです。これこそ唯一の慰めとなる教えです。自らを滅ぼし、自らを罪に定めたすべての罪人にとって、「慰めに満ちて」います。「すべて彼を信じる者は、失望に終わることがありません。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んでくださる」のです（ローマ一〇・一一～一二）。ここに、天ほど高く、死よりも強い慰めがあります！　なんということでしょう！　すべての人にあわれみがあるのでしょうか。人のものを公然と奪っていたザアカイにもでしょうか。娼婦だったマグダラのマリヤにもでしょうか。だれかがこう言うのが聞こえるようです。「では私も、こんな私でも、あわれみを望んでよいのですね！」　そうです、望んでよいのです。だれにも慰められたことのない、悩める人よ！　神はあなたの祈りを退けられません。それどころか、もしかする

と一時間もしないうちに、神はこう言われるかもしれません。「しっかりしなさい。あなたの罪は赦されました」（マタイ九・二）。罪はもう二度とあなたを支配しないほどに、赦されるのです。そうです、「聖霊があなたの霊と共に、あなたが神の子であることをあかしして」くださいます（ローマ八・一六）。ああ、喜ばしい知らせです！「すべての民に与えられる大きな喜び」の知らせです（ルカ二・一〇）。「さあ、かわいている者はみな水に来なさい。来て、金を出さずに、ただで買い求めなさい」（イザヤ五五・一）。あなたの罪が何であっても、「紅のように赤くても」（イザヤ一・一八）、髪の毛より多くても、「主に帰りなさい。そうすれば、主はあなたにあわれみを施されます。私たちの神に帰りなさい。主は豊かに赦しを与えられます」（イザヤ五五・七）。

（七）　反論が出尽くすと、今度はただこう言われます。「信仰のみによる救いを、最初の教えとして宣べ伝えてはならない。少なくとも、すべての人に宣べ伝えるべきではない」。けれども、聖霊は何と言われるでしょうか。「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできません。この土台はイエス・キリストです」（第一コリント三・一一）。ですから、「彼を信じる者はみな救われる」ということが、私たちのすべての説教の土台です。そうでなければなりません。つまり、最初に宣べ伝えなければなりません。「それはそうだが、すべての人にではない」。では、だれには宣べ伝えてはならないのでしょうか。だれを除外すべきでしょうか。貧しい人でしょうか。いいえ。貧しい人こそ、福音を宣べ伝えられる特別な権利を持っています。学問のない人でしょうか。いいえ。神ははじめから、これらのことを学問のない、無学な人々に現してこられました。若い人でしょうか。決してそうではありません。何としても、「彼らがキリストのもとに来るままにしておきなさい。止めてはなりません」（マルコ一〇・一四）。罪人でしょうか。とんでもありません。「キリストが来られたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです」（ルカ五・三二）。除外するなら、むしろ金持ち、学のある人、評判のよい人、品行方正な人でしょう。確かに、そういう人たちは自分から聞くのを避けることがあまりにも多いのです。それでも私たちは、主の言葉を語らなければなりません。私たちが受けた命令の趣旨は、こうだからです。「出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ一六・一五）。だれかがその全部または一部をねじ曲げて自らの滅びを招くなら、その人は自分の重荷を負わなければなりません。それでもなお、「主は生きておられます。主が私たちに言われることを、私たちは語ります」（列王紀上二二・一四）。

（八）　とりわけ今この時に、私たちは「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われています」と語ります（エペソ二・八）。今日ほど、この教えを守ることが時宜にかなっているときはないからです。私たちの間でローマ・カトリックの惑わしが広がるのを効果的に防げるのは、この教えだけです。あの教会の誤りを一つずつ攻撃していては、きりがありません。けれども、信仰による救いは根元を打ちます。この教えが確立されるところでは、すべての誤りが一度に倒れます。私たちの教会が正しくも「キリスト教の堅固な岩であり土台」と呼ぶこの教えこそ、最初に教皇主義をこの国々から追い出しました。締め出しておけるのも、この教えだけです。この教えだけが、「洪水のように国中にあふれた」不道徳をせき止められます。大海を一滴ずつ汲み干せるでしょうか。それができるなら、悪徳を一つずつ戒めて、私たちを改めることもできるでしょう。しかし、「信仰に基づく神からの義」がもたらされるなら（ピリピ三・九）、その高ぶる波はとどめられます。「その恥を栄光とし」（ピリピ三・一九）、「自分たちをあがなってくださった主を」公然と「否定する」者たち（第二ペテロ二・一）の口をふさげるのは、この教えだけです。彼らは、神によって心に律法を書き記された人のように、律法について崇高に語ることができます。この点について彼らが話すのを聞くと、彼らは神の国から遠くないと思えるほどです。けれども、彼らを律法から福音へと連れ出してごらんなさい。信仰による義から始めてごらんなさい。キリストは「すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられた」方です（ローマ一〇・四）。そう語り始めると、ついさっきまで、あと一歩のクリスチャン、いや、まったくのクリスチャンにさえ見えた人々が、滅びの子であることを露呈します。彼らは、地獄の深みが天の高みから遠いのと同じほど、いのちと救いから遠いのです。神が彼らをあわれんでくださいますように！

（九）　ですから、「信仰による救い」が世に宣べ伝えられるたびに、敵はあれほど荒れ狂うのです。だからこそ敵は地と地獄を揺り動かし、最初にそれを宣べ

伝えた人々を滅ぼそうとしたのです。同じ理由で、敵は勢力を総動員しました。信仰だけが自分の王国の土台を覆すと知っていたからです。そして嘘と中傷のかぎりを尽くし、マルティン・ルターを脅して、この教えの復興を妨げようとしました。それも不思議ではありません。あの神の人がこう言っているとおりです。「強さを誇る武装した男が、一本の葦を手にして向かってくる小さな子供に行く手を阻まれ、ものともされなかったとしたら、どれほど怒り狂うことでしょう！」その子供が必ず自分を倒して足の下に踏みつけると知っていたなら、なおさらです。まことに、主イエスよ！　あなたの力は、いつもこのように「弱いところに完全にあらわれ」てきました（第二コリント一二・九）。ですから、キリストを信じる小さな子供よ、進み出なさい。キリストの「右の手は、あなたに恐るべきわざを教える」でしょう（詩篇四五・四）。あなたが生まれて間もない幼子のように無力で弱くても、あの強い男はあなたの前に立つことができません。あなたは彼に打ち勝ち、彼を従わせ、打ち倒し、足の下に踏みつけます。あなたは「救いの君」である偉大な方のもとで進みます（ヘブル二・一〇）。「勝利の上にもなお勝利を得ようとして」（黙示録六・二）、すべての敵が滅ぼされ、「死は勝利にのまれ」るまで進み続けます（第一コリント一五・五四）。

私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を賜わる神に、感謝します（第一コリント一五・五七）。父と聖霊と共にこのキリストに、賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いとが、世々限りなくありますように。アーメン。

説教二　あと一歩のクリスチャン

オクスフォード大学聖母マリア教会にて。1741年7月25日。

「あなたは、もう少しで私を説き伏せて、クリスチャンにしてしまいそうです」（使徒二六・二八）

ここまで進む人は大勢います。キリスト教がこの世に現れてから、どの時代にも、どの国にも、そういう人が大勢いました。もう少しでクリスチャンになるところまで、説き伏せられた人々です。けれども、ここまで進むだけでは、神の前で何の役にも立ちません。ですから、私たちは次のことをよく考えなければなりません。

第一に、あと一歩のクリスチャンであることには、何が含まれるか

第二に、まったくのクリスチャンであることには、何が含まれるか

【一】　あと一歩のクリスチャンとは

〔一〕（一）　さて、あと一歩のクリスチャンであることには、第一に、異教徒の正直が含まれます。このことに異論を唱える人はいないでしょう。ここで言う異教徒の正直は、異教の哲学者の書物で勧められているだけのものではないからです。ふつうの異教徒が互いに期待し合い、その多くが実際に行っていた正直のことです。その掟によって、彼らは次のように教えられていました。不正を行ってはならない。強盗によっても盗みによっても、隣人の持ち物を奪ってはならない。貧しい者をしいたげてはならず、だれからもゆすり取ってはならない。どんな取引でも、貧しい者をも富んだ者をも、だましたり出し抜いたりしてはならない。だれの権利もかすめ取ってはならない。そして、できることなら、だれにも何の借りも作ってはならない。

（二）　また、ふつうの異教徒は、正義だけでなく真実にもいくらか重きを置くべきだと認めていました。ですから、偽りの誓いを立てる者、つまり神を証人に立てて偽りを誓う者を忌み嫌いました。それだけでなく、隣人を中傷することで知られた者や、だれかを偽って訴える者も忌み嫌いました。じっさい、どんな種類であれ、わざと嘘をつく者も、それとほとんど変わらないほど低く見ていました。人類の恥、社会の害毒と見なしていたのです。

（三）　さらにまた、異教徒が互いに期待し合う、一種の愛と助けがありました。自分が損をせずに人に与えられる助けなら、どんなものでも期待し合ったのです。それは、費用も手間もかからない、人としてのささやかな務めにとどまりませんでした。食べ物に余りがあれば、飢えた者に食べさせることにも及びました。自分の余分な着物で、裸の者に着せることにも及びました。一般に、自分には要らない物を、それを必要とするだれにでも与えることにまで及んだのです。最も低く見積もっても、異教徒の正直はここまで及んでいました。これが、あと一歩のクリスチャンであることに含まれる第一のものです。

〔二〕（四）　あと一歩のクリスチャンであることに含まれる第二のものは、敬虔の形を持っていることです。キリストの福音が定めている敬虔の形です。本当のクリスチャンの外側を持っていることです。ですから、あと一歩のクリスチャンは、福音が禁じていることを何一つしません。神の名をみだりに唱えません。祝福して、のろいません。いっさい誓わず、その言葉は「しかり、しかり、否、否」です（マタイ五・三七）。主の日を汚さず、自分の門のうちにいる他国の人にさえ、それを汚させません。実際の姦淫や不品行や汚れを避けるだけではありません。直接にも間接にもそこへ向かう言葉やまなざしも、すべて避けます。いや、むだな言葉もすべて避けます。そしりも、陰口も、告げ口も、悪口も慎みます。「愚かな話や冗談」もすべて慎みます（エペソ五・四）。この冗談は原語ではエウトラペリア（機知）で、異教の道徳家はこれを一種の徳に数えていました。要するに、「人の徳を高めるのに役立つ」ものではない会話を、すべて慎むのです（エペソ四・二九）。そのような会話は、「神の聖霊を悲しませ」るからです。

私たちは「あがないの日のために、聖霊の証印を受けた」のです（エペソ四・三〇）。

（五）　その人は、「乱行のもと」となる酒を断ちます（エペソ五・一八）。宴会騒ぎや大食も断ちます。できるかぎり、あらゆる争いやいさかいを避けます。すべての人と平和に過ごそうと、絶えず努めます。不当な扱いを受けても、自分で復讐せず、悪をもって悪に報いません。隣人の過ちや弱さを、ののしったり、言い争ったり、あざけったりしません。だれに対しても、わざと不当な扱いをしたり、傷つけたり、悲しませたりしません。何事においても、あのわかりやすい掟に従って行い、語ります。「自分がされたくないことは、何であれ人にしてはならない」。

（六）　また、善を行うときも、費用のかからないたやすい親切にとどまりません。多くの人の益のために労苦し、苦しみを忍びます。なんとかして幾人かでも助けるためです。骨折りや痛みがあっても、「すべて自分の手のなしうる事は、力をつくして」行います（伝道九・一〇）。相手が友であっても敵であっても、悪人であっても善人であっても同じです。この務めにも、ほかのどんな務めにも怠ることがありません（ローマ一二・一一）。「機会のあるごとに、だれに対しても」善を行います（ガラテヤ六・一〇）。あらゆる種類の善を、人の体にも魂にも行うのです。悪人を戒め、無知な者を教え、揺れ動く者を力づけ、善人を励まし、悩む者を慰めます。眠っている者を目覚めさせようと努めます。神がすでに目覚めさせた人々を、「罪と汚れとを清める」ために開かれた泉へ導こうと努めます（ゼカリヤ一三・一）。彼らがそこで洗われ、清くなるためです。信仰によって救われた人々を励まし、万事につけキリストの福音を飾るように努めます。

（七）　敬虔の形を持つ人は、恵みの手段も用います。しかも、そのすべてを、機会のあるごとに用います。いつも神の家に通います。けれども、ある人々のような通い方はしません。その人々は、金の飾りや高価な衣服で身を固めて、あるいは派手で虚栄に満ちた装いで、いと高き方の前に出ます。そして、場違いな挨拶を交わしたり、ふまじめに浮かれてふるまったりします。そうして、敬虔の力ばかりか、敬虔の形を持っているという言い分さえ、自分から捨ててしまうのです。私たちの中にさえ、同じ非難を受ける人がひとりもいなければよいのですが！　そういう人は、この家に入ってきても、きょろきょろと見回していたりします。まったく気の抜けた、無頓着で無関心なそぶりを見せていたりします。これから始めることに神の祝福を求めて、ときには祈っているように見えることもあるでしょう。それでも、あの厳かな礼拝のあいだ、眠っているか、眠るのにいちばん楽な姿勢でもたれかかっています。あるいは、神が眠っておられるとでも思っているかのように、互いにおしゃべりをしています。まったく何もすることがないかのように、周りを見回しています。こういう人々には、敬虔の形があるとさえ言えません。そうではありません。敬虔の形だけでも持っている人は、あの厳かな礼拝のどの部分でも、真剣に、注意深くふるまいます。とりわけ主の食卓に近づくときには、軽々しい、不注意なふるまいはしません。その表情も身ぶりも態度も、ただこう語っています。「神様、罪人の私をおゆるしください」（ルカ一八・一三）。

（八）　これに、次のことを加えましょう。家長であれば、家庭の祈りを欠かさないこと。時間を取り分けて、ひとりで神に祈ること。日ごとにまじめにふるまうことです。この外面的な宗教を一貫して実践する人は、敬虔の形を持っています。その人があと一歩のクリスチャンであるためには、もう一つのものがあればよいのです。それは誠実です。

〔三〕（九）　誠実とは、これらの外面的な行いがそこから流れ出てくる、本物の、内面的な宗教の原理のことです。じっさい、これがなければ、私たちは異教徒の正直さえ持っていません。いや、異教のエピクロス派の詩人が求める程度の正直さえ持っていないのです。このあわれな男でさえ、正気に返ったときには、こうあかしすることができました。

Oderunt peccare boni, virtutis amore;（善人は徳を愛するゆえに罪を嫌い）

Oderunt peccare mali, formidine poenae.（悪人は罰を恐れるゆえに罪を嫌う）

ですから、ある人が罰を避けるためだけに悪を行わずにいるなら、異教の詩人はこう言います。「Non pasces in cruce corvos（おまえが十字架にかけられ

て、烏の餌になることはない）」。それで、「あなたはその報いを受けてしまっている」のです（マタイ六・二）。けれども、その詩人でさえ、このように害がないだけの人を、良い異教徒とさえ認めません。それなら、同じ動機から行動する人はどうでしょうか。つまり、罰を避けるため、友や利益や評判を失わないために行動する人です。その人が悪を行わないだけでなく、どれほど多くの善を行い、恵みの手段をすべて用いたとしてもです。この人があと一歩のクリスチャンだとさえ、決して言えません。心にこれより良い原理がないなら、その人はまったくの偽善者にすぎません。

（一〇）ですから、あと一歩のクリスチャンであることには、必ず誠実が含まれます。神に仕えようとする本物の意図、神のみこころを行おうとする心からの願いです。すべてのことで神に喜ばれようと、誠実に目指していることが、必ず含まれるのです。すべてのふるまいにおいて、すべての行いにおいて、することにもしないことにも、そうなのです。だれかがあと一歩のクリスチャンであるなら、この意図がその人の生涯全体を貫いています。善を行うときも、悪を断つときも、神の定めを用いるときも、この意図がその人を動かす原理なのです。

（一一）けれども、ここでおそらくこう問われるでしょう。「生きている人間で、ここまで進みながら、なおあと一歩のクリスチャンにすぎない者がありうるのか。まったくのクリスチャンであることに、これ以上の何が含まれうるのか」。私はこう答えます。第一に、ここまで進みながら、なおあと一歩のクリスチャンにすぎないことはありえます。そのことを私は、神のことばからだけでなく、経験の確かなあかしからも学んでいます。

（一二）兄弟たちよ、この点で、「あなたがたに対する私の大胆さ」は大きなものです（第二コリント七・四）。あなたがたと福音のために、私が自分の愚かさを屋根の上で言い広めても、「この不義は、どうか、ゆるしてください」（第二コリント一二・一三）。ですから、他人のことのように、自分のことを率直に語らせてください。あなたがたが高められるなら、私はおとしめられてもかまいません。私の主の栄光のためなら、もっと卑しめられてもかまいません。

（一三）私は何年ものあいだ、確かにここまで進んでいました。ここにいる多くの人が、そのことをあかしできます。私は努めてあらゆる悪を避け、良心に責められることのないようにしていました。時を生かして用い、すべての人にあらゆる善を行う機会を、一つ残らずとらえました。公の恵みの手段も、ひとりで用いる恵みの手段も、すべて絶えず念入りに用いました。いつでも、どこでも、変わらずまじめにふるまおうと努めました。しかも、私がその前に立っている神があかししてくださるとおり、このすべてを誠実に行っていました。神に仕えようとする本物の意図を持ち、すべてのことで神のみこころを行おうと心から願っていました。私は、その方に喜ばれたいと願っていたのです。私を召して、「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得」させようとされた方です（第一テモテ六・一二）。それでも、私の良心は聖霊によって、こうあかししています。そのあいだずっと、私はあと一歩のクリスチャンにすぎなかったのです。

【二】まったくのクリスチャンとは

「まったくのクリスチャンであることには、これ以上の何が含まれるのか」と問われるなら、私はこう答えます。

〔一〕（一）第一に、神への愛です。神のことばがこう言っているからです。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛しなさい」（マルコ一二・三〇）。この愛は、心全体を占め、あらゆる情愛をとらえます。魂の器をすっかり満たし、魂のあらゆる力を極みまで用います。このように主なる神を愛する人の霊は、絶えず「救主なる神を」喜びたたえます（ルカ一・四七）。その人の喜びは主にあります。主こそ、その人の主であり、すべてです。その人は主に「すべての事について、感謝し」ます（第一テサロニケ五・一八）。その人の「魂の慕うもの」は、神と「神の記念の名」です（イザヤ二六・八）。その心は、いつもこう叫んでいます。「私はあなたのほかに、だれを天にもち得ましょう。地にはあなたのほかに慕うものはありません」（詩篇七三・二五）。じっさい、神のほかに何を慕えるでしょうか。世も、世にあるものも慕いません。その人は世に対して十字架につけられ、世もその人に対して十字架につけられているからです（ガラテヤ六・一四）。その人は、「肉の欲、目の

欲、持ち物の誇」に対しても十字架につけられています（第一ヨハネ二・一六）。そうです、あらゆる種類の高ぶりに対して死んでいます。「愛は高ぶりません」と書いてあるとおりです（第一コリント一三・四）。かえって、「愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」（第一ヨハネ四・一六）。そのような人は、自分の目には無にも及ばない者なのです。

〔二〕（二） まったくのクリスチャンであることに含まれる第二のものは、隣人への愛です。私たちの主が、続く言葉でこう言われたからです。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛しなさい」（マルコ一二・三一）。「私の隣り人とはだれのことですか」と問う人がいれば（ルカ一〇・二九）、私たちはこう答えます。世界中のすべての人です。すべての肉なる者の霊の父である方の、子供たちひとりひとりです。私たちの敵も、神の敵であり自分自身の魂の敵でもある人々も、決して除外してはなりません。クリスチャンはだれでも、こうした人々をも自分自身のように愛します。いや、キリストが私たちを愛してくださったように愛するのです（エペソ五・二）。これがどのような愛かを、もっと十分に知りたい人は、聖パウロがこの愛について述べていることを考えるとよいでしょう。愛は「寛容であり、情深い」のです。「ねたむことをしません」（第一コリント一三・四）。軽はずみに、性急にさばくこともしません。愛は「高ぶりません」（第一コリント一三・四）。かえって、愛する人を、いちばん小さな者、すべての人に仕える者にします。愛は「不作法をしません」（第一コリント一三・五）。かえって、「すべての人に対しては、すべての人のように」なります（第一コリント九・二二）。愛は「自分の利益を求めません」。ただ他の人々の益を求めます。その人々が救われるためです。愛は「いらだちません」。怒りを追い出します。怒りを持っている人には、愛が欠けているのです。愛は「恨みをいだきません。不義を喜ばないで真理を喜びます。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐えます」（第一コリント一三・五〜七）。

〔三〕（三） まったくのクリスチャンであることに含まれるものが、もう一つあります。実際には前の二つから切り離せませんが、別に考えることはできます。それは、すべての土台である信仰です。神のことばは、全体を通して、信仰についてまことにすばらしいことを語っています。愛された弟子はこう言います。「すべて信じる者は、神から生まれた者です」（第一ヨハネ五・一）。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのです」（ヨハネ一・一二）。また、「私たちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力です」（第一ヨハネ五・四）。そうです、私たちの主ご自身がこう宣言しておられます。「御子を信じる者は永遠のいのちを持ちます」（ヨハネ三・三六）。「また、さばかれることがなく、死からいのちに移っているのです」（ヨハネ五・二四）。

（四） けれども、ここでだれも自分の魂を欺いてはなりません。「よく心に留めなければなりません。悔い改めと愛とあらゆる良きわざを生み出さない信仰は、あの正しい生きた信仰ではありません。死んだ、悪魔の信仰です。悪魔でさえ、次のことを信じているからです。キリストが処女から生まれたこと。あらゆる奇跡を行い、ご自分がまことの神であることを示されたこと。私たちを永遠の死から贖うために、私たちのために最も痛ましい死を苦しまれたこと。三日目によみがえられたこと。天に昇り、父の右に座しておられ、世の終わりに、生きている者と死んだ者とをさばくために再び来られることです。悪魔は、私たちの信仰のこうした箇条を信じています。同じように、旧約と新約に書かれていることをすべて信じています。それでも、これだけの信仰があっても、悪魔は悪魔にすぎません。まことのクリスチャンの信仰を欠いているので、滅びに定められた状態にとどまったままです」（説教集「人の救いについて」）。

（五） 私たちの教会の言葉で、さらに続けます。「正しい、まことのクリスチャンの信仰とは、聖書と私たちの信仰箇条が真実だと信じるだけではありません。キリストによって永遠の滅びから救われるという、確かな信頼と確信を持つことです。それは、人が神に対して持つ確かな信頼と確信です。キリストの功績によって自分の罪が赦され、神と和解して、その好意を受けているという信頼と確信です。そこから、神の戒めに従おうとする、愛に満ちた心が生まれます」。

（六） この信仰は、心のうちに住まわれる神の力によって、「心をきよめ」ます（使徒一五・九）。「高ぶり、怒り、欲望から」きよめ、「すべての不義から」きよめ（第一ヨハネ一・九）、「肉と霊とのいっさいの汚れから」きよめます（第二コリント七・一）。この信仰は心を、死よりも強い愛で満たします。神への愛

と、すべての人への愛です。その愛は神のわざを行い、すべての人のために費やし、また費やされることを誇りとします。キリストのゆえに受けるそしりを喜んで耐えます。すべての人からあざけられ、さげすまれ、憎まれることを耐えます。それだけでなく、神の知恵が許すかぎり、人や悪魔が悪意から加えるものは何であれ、喜んで耐えます。このように愛によって働く信仰を持つ人はだれでも、あと一歩のクリスチャンにとどまらず、まったくのクリスチャンです。

（七）けれども、これらのことの生きた証人はだれでしょうか。神の前では、「陰府も裸であり、滅びの穴もおおい隠すものは」ありません（ヨブ二六・六）。「人の心はなおさら」です（箴言一五・一一）。兄弟たちよ、その神の御前にいるつもりで、お願いします。ひとりひとり、自分の心にこう問うてください。「私はその中のひとりだろうか。異教徒の正直の掟が求めるほどにさえ、正義とあわれみと真実を行っているだろうか。もしそうなら、私はクリスチャンの外側だけでも、つまり敬虔の形を持っているだろうか。悪を断っているだろうか。神の書かれたことばが禁じていることは何であれ、断っているだろうか。手のなしうる善は何でも、力をつくして行っているだろうか。神のすべての定めを、機会のあるごとに真剣に用いているだろうか。そして、これらすべてを、すべてのことで神に喜ばれようとする誠実な意図と願いをもって行っているだろうか」。

（八）あなたがたの多くは、心の中でわかっているのではありませんか。自分は一度もここまで来たことがない。あと一歩のクリスチャンでさえなかった。異教徒の正直の基準にも、少なくともクリスチャンの敬虔の形にも届いていなかった、と。まして神は、あなたがたのうちに誠実を見られたことがありません。すべてのことで神に喜ばれようとする本物の意図を、見られたことがないのです。あなたがたは、自分の言葉と行いのすべてを、神の栄光のためにささげようと思ったことさえありません。仕事も、学問も、楽しみもです。自分のすることは何でも、「主イエスの名によって」なされるようにとは（コロサイ三・一七）、考えも願いもしませんでした。それが「キリストにより、神に喜ばれる霊のいけにえ」となるようにとも、考えも願いもしませんでした（第一ペテロ二・五）。

（九）けれども、たとえそう考え、願ったことがあったとしても、良い意図や良い願いがクリスチャンを造るでしょうか。決してそうではありません。それが良い実を結ばないかぎり、クリスチャンにはなりません。ある人はこう言っています。「地獄は善意で敷き詰められている」。ですから、何より大きな問いが、まだ残っています。神の愛が、あなたの心に注がれていますか。「わが神、わがすべて」と叫べますか。あなたが慕うのは神だけですか。神にあって幸いですか。神があなたの栄光、あなたの楽しみ、あなたの喜びの冠ですか。この戒めが、あなたの心に記されていますか。「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです」（第一ヨハネ四・二一）。それなら、あなたは自分を愛するように隣人を愛していますか。すべての人を、あなたの敵をも、神の敵をも、自分の魂のように愛していますか。キリストがあなたを愛されたように愛していますか。そうです、キリストがあなたを愛し、あなたのためにご自身をささげられたと信じていますか（ガラテヤ二・二〇）。キリストの血に信仰を持っていますか。神の小羊があなたの罪を取り除き、石のように海の深みに投げ入れてくださったと信じていますか（ミカ七・一九）。あなたを責める証書をぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれたと信じていますか（コロサイ二・一四）。あなたは本当に、キリストの血によるあがない、すなわち罪の赦しを受けていますか（エペソ一・七）。キリストの御霊が、あなたの霊と共に、あなたが神の子であることをあかししてくださっていますか（ローマ八・一六）。

（一〇）私たちの主イエス・キリストの父なる神は、いま私たちのただ中に立っておられます。この神はご存じです。だれでもこの信仰とこの愛を持たずに死ぬなら、その人は生まれなかったほうがよかったのです。ですから、「眠っている者よ、起きなさい」（エペソ五・一四）。あなたの神に呼ばわりなさい（ヨナ一・六）。主にお会いすることのできるうちに、呼び求めなさい（イザヤ五五・六）。神が「もろもろの善をあなたの前に通らせ」てくださるまで（出エジプト三三・一九）、神を休ませてはなりません。神があなたに主の名を宣べてくださるまで、休ませてはなりません。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」という名です（出エジプト三四・六～七）。だ

れにも、むなしい言葉で説き伏せられてはなりません。上に召してくださる神の賞与を得ないうちに、手前で休んではならないのです（ピリピ三・一四）。むしろ、昼も夜もキリストに叫び求めなさい。この方は、「私たちがまだ弱かったころ」、「不信心な者たちのために死んで」くださいました（ローマ五・六）。自分の信じてきた方を知るまで（第二テモテ一・一二）、「わが主よ、わが神よ」と言えるまで（ヨハネ二〇・二八）、叫び求めなさい。「失望せずに常に祈るべき」ことを覚えていなさい（ルカ一八・一）。あなたもまた天に手を上げて、世々限りなく生きておられる方にこう申し上げられるようになるまで、祈り続けなさい。「主よ、あなたはすべてをご存じです。私があなたを愛していることは、おわかりになっています」（ヨハネ二一・一七）。

（一一）　あと一歩にとどまらず、まったくのクリスチャンであるとはどういうことか。どうか私たちがみな、このようにして、それを身をもって知ることができますように。私たちは、「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされ」ます（ローマ三・二四）。「私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得て」いることを知ります。「神の栄光にあずかる希望をもって喜」びます。「私たちに賜わっている聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれて」います（ローマ五・一～二、五）。どうか、そのような者となれますように！

説教三　眠っている者よ、起きなさい

オクスフォード大学にて。1742年4月4日（日曜日）。文学修士、クライスト・チャーチ学寮特別研究員チャールズ・ウェスレー師による。

「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照してくださいます」（エペソ五・一四）

この言葉について語るにあたり、私は神の助けによって、次のことをします。

第一に、この言葉が語りかけている、眠っている者たちのことを述べます。

第二に、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい」という勧めを、強く説きます。

第三に、目を覚まして立ち上がる者に与えられた約束、「キリストがあなたを照してくださいます」を説き明かします。

【一】眠っている者とは

（一）まず、ここで語りかけられている、眠っている者たちについてです。眠りとは、人の生まれながらの状態のことです。アダムの罪が、その子孫をすべて投げ込んだ、魂の深い眠りです。それは、無気力と怠惰と愚鈍です。自分の本当の状態に気づかない無感覚です。人はみな、この状態で世に生まれます。そして、神の声に目覚めさせられるまで、そのままでいるのです。

（二）さて、「眠る者は夜眠る」のです（第一テサロニケ五・七）。生まれながらの状態は、まったくの暗闇の状態です。「暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう」状態です（イザヤ六〇・二）。まだ目覚めていないあわれな罪人は、ほかのことをどれほど知っていても、自分自身のことを知りません。この点では、「知らなければならないほどの事すら、まだ知っていない」のです（第一コリント八・二）。その人は、自分が堕落した霊であることを知りません。この世でのただ一つの務めは、堕落から立ち直ることです。自分が造られたときの神のかたちを取り戻すことです。そのことを知らないのです。「無くてならぬもの」は、ただ一つです（ルカ一〇・四二）。けれども、その人はその必要を認めません。それは、内側からの全面的な変化です。バプテスマが表している、「上から生まれる」ことです（ヨハネ三・三）。これが、あの全き一新の始まりです。霊と心とからだとがきよめられることの始まりです（第一テサロニケ五・二三）。「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」のです（ヘブル一二・一四）。

（三）その人は、あらゆる病に満ちているのに、自分はまったく健康だと思い込んでいます。「苦しみと、くろがねに」固く「縛られ」ているのに（詩篇一〇七・一〇）、自由の身だと夢見ています。悪魔が「十分に武装して」いる「強い人」のように（ルカ一一・二一）、その魂をすっかり支配しています。それなのに、その人は「平安、平安」と言っています（エレミヤ六・一四）。「下の陰府」が、その人を「迎え」ようと「動いて」います（イザヤ一四・九）。二度と帰れない穴が、その人をのみこもうと口を開けています。それでも、その人はなおも眠り続け、休んでいるのです。周りに火が燃えているのに、その人は悟りません。そうです、火がその人を焼いても、心にとめないのです（イザヤ四二・二五）。

（四）ですから、眠っている者とは、次のような人のことです。どうか、私たちがみな、このことを悟れますように！　それは、自分の罪に満足している罪人です。堕落した状態にとどまることに満足し、神のかたちを持たずに生きて死ぬことに満足している人です。自分の病も、そのただ一つの治療法も知らない人です。「迫ってきている神の怒りから」のがれよと（マタイ三・七）、一度も警告されたことのない人です。あるいは、その神の警告の声を少しも顧みなかった人です。自分が地獄の火の危険にあることを、まだ一度も悟ったことのない人です。魂の底から、「私は救われるために、何をすべきでしょうか」と叫んだことのない人です（使徒一六・三〇）。

（五） この眠っている者が、外面的に不品行でなければ、その眠りはたいてい何よりも深いものです。その人は、ラオデキヤの霊を持っているかもしれません。「冷たくもなく、熱くもない」人です（黙示録三・一五）。先祖の宗教を奉じる、穏やかで、分別があり、人に害を与えない、気だてのよい信者です。あるいは、熱心で正統的な人かもしれません。「私たちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活をして」いる人です（使徒二六・五）。パリサイ人とは、聖書の記すところによれば、自分を義とする人です。神に受け入れられる根拠として、自分の義を立てようと努める人です。

（六） これは、「敬虔の形を持ちながら、その力を捨てる」人です（第二テモテ三・五）。いや、敬虔の力がどこに見られても、ただの行きすぎ、ただの思い違いだと、おそらくのしるでしょう。その一方で、自分を欺くこのみじめな人は、神に感謝します。自分は「ほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者では」ない、と（ルカ一八・一一）。そうです、だれにも悪いことはしていない、と。その人は「一週に二度断食して」います。恵みの手段をすべて用い、教会にも聖餐にも欠かさず通います。そうです、「全収入の十分の一をささげて」います（ルカ一八・一二）。できるかぎりの善を行い、「律法の義については落ち度のない者」です（ピリピ三・六）。その人の敬虔に欠けているのは、力だけです。その宗教に欠けているのは、霊だけです。そのキリスト教に欠けているのは、真理といのちだけです。

（七） けれども、あなたがたは知らないのですか。このようなクリスチャンは、「人々の間で」どれほど「尊ばれ」ていても、「神のみまえでは忌みきらわれ」ます（ルカ一六・一五）。神の御子は「きのうも、きょうも、いつまでも」（ヘブル一三・八）、「偽善な律法学者、パリサイ人たち」にわざわいを宣告しておられます（マタイ二三章）。その人は、そのわざわいをことごとく受け継ぐ者なのです。その人は、「杯と皿との外側はきよめる」のですが、内側はあらゆる汚れに満ちています（マタイ二三・二五）。「悪い病がなおもその人につきまとい、その内なるものは、まったくの悪です」（詩篇四一・八、五・九）。私たちの主は、その人を「白く塗った墓」にたとえておられます。まさにふさわしいたとえです。その墓は、「外側は美しく見えますが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱい」なのです（マタイ二三・二七）。なるほど、骨はもう枯れてはいません。その上に「筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおった」のです。けれども、「息はその中に」ありません（エゼキエル三七・八）。生ける神の御霊がないのです。そして、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのもの」ではありません。「神の御霊があなたがたの内に宿っているなら」、あなたがたはキリストのものです（ローマ八・九）。けれども、そうでなければ、あなたがたは今もなお死のうちにとどまっています。神はそれをご存じです。

（八） ここで語りかけられている眠っている者には、もう一つの特徴があります。自分では知らないのに、死のうちにとどまっていることです。その人は神に対して死んでおり、「自分の罪過と罪とによって死んで」います（エペソ二・一）。「肉の思いは死」だからです（ローマ八・六）。こう書いてあるとおりです。「ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように」、「死が全人類にはいり込んだ」のです（ローマ五・一二）。それは、この世の死だけではありません。霊の死であり、永遠の死でもあります。神はアダムに、「それを取って食べると、きっと死にます」と言われました（創世二・一七）。からだが死ぬというのではありません。そのとき死ぬべき者となった、という意味でなら別ですが。霊において死ぬということです。つまり、あなたは魂のいのちを失う。神に対して死ぬ。あなたのいのちと幸いの本体である神から、切り離される、ということです。

（九） こうして初めて、私たちの魂と神との生きた結びつきが断たれました。そのため、私たちはいま、肉体の「生のさなかにあって」、霊の「死のうちにある」のです（祈祷書「埋葬式」）。そして、第二のアダムが私たちにとって「いのちを与える霊」となられるまで（第一コリント一五・四五）、私たちはこの状態にとどまります。キリストが死人をよみがえらせてくださるまでです。罪のうちに、快楽や富や名誉のうちに死んでいる者をです。けれども、死んだ魂が生きるには、その前に「神の子の声を聞く」（耳を傾ける）のです（ヨハネ五・二五）。自分が滅びた状態にあることに気づかされ、自分のうちに死の宣告を受けるのです（第二コリント一・九）。その人は、自分が「生けるしかばね」であ

ることを知ります（第一テモテ五・六）。神に対しても、神のすべてのことに対しても死んでいるのです。死体には、生きた人の働きをする力がありません。それと同じように、その人には、生きたクリスチャンの行いをする力がありません。

（一〇） 罪のうちに死んでいる者には、霊の「善悪を見わける感覚」がありません（ヘブル五・一四）。これは、まったく確かなことです。「目があっても見え」ず、「耳があっても聞え」ません（マルコ八・一八）。「主の恵みふかきことを味わい知」ることもありません（詩篇三四・八）。その人は、まだ一度も「神を見た」ことがありません（ヨハネ一・一八）。神の「み声を聞いたこと」もありません（ヨハネ五・三七）。「いのちのことば」に「手でさわった」こともありません（第一ヨハネ一・一）。イエスの名は「注がれたにおい油のよう」です（雅歌一・三）。その「衣はみな没薬、芦薈、肉桂で、よいかおりを放って」います（詩篇四五・八）。けれども、それもその人にはむなしいのです。死のうちに眠る魂は、こうしたものを何一つ感じ取りません。その心は「無感覚」になっていて（エペソ四・一九）、こうしたことを少しも悟りません。

（一一） こうして、霊の感覚を持たず、霊の知識の入り口を持たない「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれ」ません。いや、受け入れるどころか、「御霊によって判断されるべき」ものは何であれ、その人には「愚かなもの」にすぎないのです（第一コリント二・一四）。その人は、霊のことにまったく無知であるだけでは満足しません。霊のことが存在すること自体を否定します。霊で感じ取るということ自体が、その人には愚かさの極みなのです。その人はこう言います。「どうして、そんなことがあり得るのか」（ヨハネ三・九）。「どうして人が、自分は神に対して生きていると知ることができるのか」。あなたがたが、自分のからだがいま生きていると知っているのと同じように、知ることができるのです。信仰は魂のいのちです。このいのちがあなたがたのうちにとどまっているなら、それを自分に確かめるしるしは、ほかに要りません。原語でエレンコス・プネウマトス（御霊の確証）と言うものがあれば足ります。それは神から与えられる自覚であり、神のあかしです。人間の証人が一万人いるよりも、まさって大きなものです。

（一二） まだ目覚めていない、あわれな罪人よ。いま御霊が、あなたの霊と共に、あなたが神の子であることをあかししておられないなら（ローマ八・一六）、どうか御霊が悟らせてくださいますように。あなたが悪魔の子であることを、その証明と力によって悟らせてくださいますように。どうか、私が預言しているいま、「声があり」、「動く音があり」、「骨と骨が集まって相つらな」りますように（エゼキエル三七・七）。そのとき、「息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かしてください」（エゼキエル三七・九）。あなたがたも、心をかたくなにしてはなりません（ヘブル三・八）。聖霊に逆らってはなりません（使徒七・五一）。聖霊はいま来て、罪について、あなたがたの目を開こうとしておられます（ヨハネ一六・八）。あなたがたが「神のひとり子の名を信じることをしない」からです（ヨハネ三・一八）。

【二】「眠っている者よ、起きなさい」

（一） ですから、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい」。神はいま、私の口を通してあなたを呼んでおられます。堕落した霊よ、神はあなたに、自分自身を知りなさいと命じておられます。あなたの本当の状態と、この世でのただ一つの務めを知りなさいと命じておられるのです。「眠っている者よ、あなたはどうして眠っているのですか。起きて、あなたの神に呼ばわりなさい。神があるいは、あなたを顧みて、助けてくださるでしょう」（ヨナ一・六）。あなたの周りには、「激しい暴風」が起こっています（ヨナ一・四）。あなたは、滅びの深みに、神のさばきの淵に沈みかけています。そのさばきをのがれたいなら、自分からその中に身を投げなさい。「自分をさばきなさい。そうすれば、主にさばかれることはありません」（第一コリント一一・三一）。

（二） 起きなさい、起きなさい！ いま立ちなさい。「主の手から憤りの杯をうけて飲」むことのないためです（イザヤ五一・一七）。「みずから励んで」、主に「よりすが」りなさい（イザヤ六四・七）。主は「われわれの正義」であり（エレミヤ二三・六）、「救を施す力ある」方です（イザヤ六三・一）。「あなたの

身からちりを振り落しなさい」（イザヤ五二・二）。せめて、神の警告という地震に、揺り動かされなさい。目を覚まして、「おののきながら」ひれ伏した獄吏と共に（使徒一六・二九）、叫びなさい。「私は救われるために、何をすべきでしょうか」（使徒一六・三〇）。そして、「主イエスを信じ」るまで（使徒一六・三一）、決して休んではなりません。その信仰は、御霊の働きによって与えられる、主の賜物です。

（三）　私があなたがたのうちのだれかに、ほかの人以上に語りかけているとすれば、それは、この勧めは自分には関係ないと思っているあなたにです。「私は神の命によってあなたに申しあげることがあります」（士師三・二〇）。神の名によって、あなたに警告します。「迫ってきている神の怒りから」のがれなさい（マタイ三・七）。きよくない魂よ、死刑を言い渡されたペテロの姿に、自分の姿を見なさい。ペテロは暗い牢の中で、「二重の鎖につながれ、ふたりの兵卒の間に置かれて」横たわっていました。「番兵たちは戸口で獄を見張って」いました（使徒一二・六）。「夜はふけ」（ローマ一三・一二）、朝が近づいています。あなたが処刑のために引き出される朝です。そのような恐ろしい中で、あなたはぐっすり眠っています。悪魔の腕に抱かれて、穴の縁で、永遠の滅びのあごの中で、ぐっすり眠っているのです！

（四）　どうか、「主の使」があなたに臨み、「光」があなたの「獄内を照」しますように（使徒一二・七）。どうか、全能の御手に打たれて、起こされるのを感じますように。その御手は、こう言ってあなたを起こします。「早く起きあがりなさい。帯をしめ、くつをはきなさい。上着を着て、ついてきなさい」（使徒一二・七～八）。

（五）　永遠の霊よ、この世の幸福の夢から覚めなさい！　神はあなたを、ご自分のために造られたのではありませんか。それなら、あなたは神のうちに憩うまで、憩うことができません。さまよう者よ、帰りなさい！　あなたの箱舟へ飛んで帰りなさい。ここはあなたの家ではありません。ここに小屋を建てようと考えてはなりません（マタイ一七・四）。あなたは地上では、「旅びと」、「寄留者」にすぎません（詩篇三九・一二）。一日かぎりの被造物で、変わることのない状態へ、いま漕ぎ出そうとしているのです。急ぎなさい。永遠は目の前です。永遠は、この一瞬にかかっています。永遠の幸いか、永遠の悲惨かです！

（六）　あなたの魂は、どんな状態にありますか。私がまだ語っているうちに、神があなたの魂を取り去られるとしたら（ルカ一二・二〇）、あなたは死とさばきを迎える用意ができていますか。「目が清く、悪を見られない」方の前に（ハバク一・一三）、立つことができますか。あなたは、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者」となっていますか（コロサイ一・一二）。「戦いをりっぱに戦いぬき」、「信仰を守りとお」しましたか（第二テモテ四・七）。「無くてならぬもの」を、確かに手にしましたか（ルカ一〇・四二）。神のかたち、すなわち「真の義と聖と」を取り戻しましたか（エペソ四・二四）。「古き人を脱ぎ捨て」、「新しき人を着」ましたか（エペソ四・二二～二四）。キリストを着ていますか（ガラテヤ三・二七）。

（七）　あなたのあかりに油がありますか（マタイ二五・四）。あなたの心に恵みがありますか。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛し」ていますか（マルコ一二・三〇）。キリスト・イエスのうちにあったのと同じ思いが、あなたのうちにありますか（ピリピ二・五）。あなたは本当にクリスチャンですか。すなわち、「新しく造られた者」ですか。「古いものは過ぎ去」り、「すべてが新しくなった」のですか（第二コリント五・一七）。

（八）　あなたは、「神の性質にあずかる者」ですか（第二ペテロ一・四）。あなたが「にせもの」でないかぎり、「キリストがあなたのうちにおられる」ことを、知らないのですか（第二コリント一三・五）。神が「御霊をあなたに賜わったことによって」、あなたが「神におり、神が」あなたに「いますこと」を（第一ヨハネ四・一三）、知っていますか。「自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮」であることを、知らないのですか（第一コリント六・一九）。「自分のうちにこのあかしを持って」いますか（第一ヨハネ五・一〇）。神の国をつぐことの「保証」を持っていますか（エペソ一・一四）。あなたは「聖霊を受けた」のですか。それとも、「聖霊なるものがあること」さえ知らずに、この問いにぎょっとするのですか（使徒一九・二）。

（九） この問いがあなたの気にさわるなら、はっきり知っておきなさい。あなたはクリスチャンではなく、クリスチャンになりたいとも思っていないのです。いや、あなたの祈りそのものが、罪に変わっています。あなたは今日、神の聖霊の感動を求めて祈りました。けれども、そのようなものが受けられるとは、信じていなかったのです。そうして、あなたはおごそかに神をあざけったのです。

（一〇） それでも、私は神のことばと私たちの教会の権威によって、この問いを繰り返さなければなりません。「あなたは聖霊を受けたのですか」。受けていないなら、あなたはまだクリスチャンではありません。クリスチャンとは、「聖霊と力とを注がれ」た人のことだからです（使徒一〇・三八）。あなたはまだ、「清く汚れのない信心」にあずかっていません（ヤコブ一・二七）。宗教とは、神の性質にあずかることです。人の魂のうちにある神のいのちです。心のうちに形づくられたキリストです（ガラテヤ四・一九）。「あなたのうちにいますキリストであり、栄光の望み」です（コロサイ一・二七）。幸いであり、聖性です。地上で始まった天国です。あなたのうちにある神の国です（ルカ一七・二一）。それは「飲食ではなく」、外側のものでもなく、「義と、平和と、聖霊における喜びと」です（ローマ一四・一七）。あなたの魂にもたらされた、永遠の国です。「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安」です（ピリピ四・七）。「言葉につくせない、輝きにみちた喜び」です（第一ペテロ一・八）。あなたは、宗教がこのようなものだと知っていますか。

（一一） 「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題では」ありません。尊いのは、「愛によって働く信仰だけ」であり（ガラテヤ五・六）、「新しく造られること」です（ガラテヤ六・一五）。あなたは、このことを知っていますか。あの内側の変化、霊による誕生、死からのいのち、聖性が必要だと、わかっていますか。そして、それがなければ「だれも主を見ることはできない」と（ヘブル一二・一四）、心底から納得していますか。あなたはそれを求めて、骨を折っていますか。「ますます励んで」、自分の「受けた召しと選びとを、確かなものに」しようとしていますか（第二ペテロ一・一〇）。「恐れおののいて自分の救の達成に努め」ていますか（ピリピ二・一二）。「狭い戸口からはいるように」、もだえるほど「努め」ていますか（ルカ一三・二四）。あなたは、自分の魂のことに真剣ですか。そして、「人の心を探り知るかた」に（ローマ八・二七）、こう申し上げることができますか。「神よ、あなたこそ、私の慕い求めるものです（詩篇七一・五）。主よ、あなたはすべてをご存じです。私があなたを愛したいと願っていることは、おわかりになっています」（ヨハネ二一・一七）。

（一二） あなたは救われることを望んでいます。けれども、「あなたのうちにある望みについて」、どんな説明ができますか（第一ペテロ三・一五）。何も害を加えなかったからですか。多くの善を行ったからですか。それとも、ほかの人たちとは違うからですか。賢く、学があり、正直で、道徳的に善い人で、人々に重んじられ、評判がよいからですか。ああ、こうしたものはみな、あなたを決して神のもとへ連れて行きません。神の目から見れば、それは「息よりも軽い」のです（詩篇六二・九）。あなたは、神が「つかわされたイエス・キリスト」を知っていますか（ヨハネ一七・三）。キリストはあなたに、こう教えてくださいましたか。「私たちの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのです。それは、私たち自身から出たものではなく、神の賜物です。決して行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです」（エペソ二・八～九）。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださった」という確実な言葉を（第一テモテ一・一五）、あなたは自分の望みの土台のすべてとして受け入れましたか。次の言葉がどういう意味か、学びましたか。「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです」（マタイ九・一三）。「わたしは、失われた羊以外の者には、つかわされていません」（マタイ一五・二四）。あなたは、失われた者、死んだ者、すでに罪に定められた者ですか。聞く者は悟りなさい。自分が何に値する者か、知っていますか。自分に何が欠けているか、感じていますか。あなたは「こころの貧しい人」ですか（マタイ五・三）。神を求めて嘆き、「慰められるのを拒」んでいますか（詩篇七七・二）。放蕩息子は「本心に立ちかえ」りましたか（ルカ一五・一七）。そのために「気が狂った」と思われても（マルコ三・二一）、喜んで受け入れていますか。そう思うのは、彼が捨てた「いなご豆」を（ルカ一五・一六）、いまも食べている人々です。あなたは「キリスト・イエスにあって信心深く生きよう」とし

ていますか。そのために、「迫害を受け」ていますか（第二テモテ三・一二）。人々は、人の子のために、あなたに対して「偽って様々の悪口を言」っていますか（マタイ五・一一）。

（一三）　どうか、あなたがたがこれらすべての問いのうちに、死人を目覚めさせる声を聞きますように。「岩を打ち砕く鎚のよう」なみことばを、身に感じますように（エレミヤ二三・二九）。「きょう、あなたがたがみ声を聞いたなら」、「『きょう』というちに」、「あなたがたの心を、かたくなにしてはいけません」（ヘブル三・七～八、一三）。いま、霊の死のうちに「眠っている者よ、起きなさい」。永遠の死のうちに眠ることのないためです。自分の滅びた状態を感じ取り、「死人のなかから、立ち上がりなさい」。罪と死のうちにいる昔の仲間から離れなさい。イエスに従いなさい。そして、「その死人を葬ることは、死人に任せておき」なさい（マタイ八・二二）。「この曲った時代から救われ」なさい（使徒二・四〇）。「彼らの間から出て行き、彼らと分離しなさい」。「汚れたものに触てはならない。触なければ」、主はあなたを「受けいれ」てくださいます（第二コリント六・一七）。「キリストがあなたを照してくださいます」。

【三】「キリストがあなたを照してくださる」という約束

（一）　最後に、この約束を説き明かします。これは、なんと心強いことでしょう。あなたがだれであっても、主の呼びかけに従うなら、主の御顔をむなしく求めることは決してないのです！　あなたがいま「起き」て、「死人のなかから、立ち上が」るなら、主は「あなたを照す」と、固く約束しておられます。「主は恵みと誉とを与え」てくださいます（詩篇八四・一一）。この世では恵みの光を与え、「しぼむことのない栄光の冠」を受けるときには（第一ペテロ五・四）、栄光の光を与えてくださるのです。「あなたの光が暁のようにあらわれ出て」（イザヤ五八・八）、「あなたのやみは真昼のようにな」ります（イザヤ五八・一〇）。「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために」、あなたの心を照してくださいます（第二コリント四・六）。主を恐れる者には、「義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えて」います（マラキ四・二）。その日、あなたにこう言われます。「起きなさい、光を放ちなさい。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったからです」（イザヤ六〇・一）。キリストが、あなたのうちにご自分を現してくださるからです。キリストこそ、「まことの光」です（ヨハネ一・九）。

（二）　「神は光」です（第一ヨハネ一・五）。神は、目覚めて神を待ち望む罪人のひとりひとりに、ご自身を与えてくださいます。そのとき、あなたは「生ける神の宮」となります（第二コリント六・一六）。「信仰によって、キリストがあなたの心のうちに住」んでくださいます。そして、あなたは「愛に根ざし愛を基として」、「すべての聖徒と共に」理解することができるようになります。「人知をはるかに越えたキリストの愛」の「広さ、長さ、高さ、深さ」をです（エペソ三・一七～一九）。

（三）　兄弟たちよ、あなたがたは自分の受けた召しがわかるでしょう（第一コリント一・二六）。私たちは、「霊なる神のすまい」となるように召されています（エペソ二・二二）。私たちのうちに住まわれる御霊によって、この世で聖徒となり、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかる」ように召されているのです（コロサイ一・一二）。私たちに与えられている約束は、なんと「尊く、大いなる」ものでしょう（第二ペテロ一・四）。信じる私たちに、現に与えられているのです！　信仰によって、「私たちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊」だからです。この御霊こそ、すべての約束をまとめたものです。それは、「神から賜わった恵みを悟るため」です（第一コリント二・一二）。

（四）　キリストの御霊は、神の大いなる賜物です。神は「いろいろな時に、いろいろな方法で」（ヘブル一・一）、この賜物を人に約束してこられました。そして、キリストが「栄光を受け」られてからは（ヨハネ七・三九）、余すところなく与えてくださいました。先祖たちに前もって与えておられた約束を、神はこうして成就されたのです。「わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませます」（エゼキエル三六・二七）。「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えます」（イザヤ四四・三）。

（五）　あなたがたはみな、これらのことの生きた証人となることができます。罪の赦しと、聖霊の賜物の証人です。あなたが信じることができるなら、「信ずる者には、どんな事でもできます」（マルコ九・二三）。「あなたがたのうち主を恐れ」ながら、なお「暗い中を歩いて光を得」ない者は、だれですか（イザヤ五〇・一〇）。イエスの名によって、あなたに尋ねます。主の手は少しも「短くて、救い得ないのではない」と（イザヤ五九・一）、信じますか。主はいまも「救を施す力ある」方だと（イザヤ六三・一）、信じますか。主は「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」と（ヘブル一三・八）、信じますか。主はいまも「地上で罪をゆるす権威をもって」おられると（マタイ九・六）、信じますか。「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのです」（マタイ九・二）。神は、キリストにあって、あなたをゆるしてくださいました（エペソ四・三二）。これを「人間の言葉としてではなく」、事実そのとおり、神のことばとして受け入れなさい（第一テサロニケ二・一三）。そうすれば、あなたは信仰によって、価なしに義とされます（ローマ三・二四）。また、イエスを信じる信仰によって、きよめられます（使徒二六・一八）。そして、あなたも、ほかならぬあなたも、確かに認めるようになります（ヨハネ三・三三）。「神が永遠のいのちを私たちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにある」ということをです（第一ヨハネ五・一一）。

（六）　兄弟たちよ、あなたがたに率直に語らせてください（使徒二一・二九）。教会でいちばん軽んじられている者からであっても、この「勧めの言葉を受けいれて」ください（ヘブル一三・二二）。あなたがたが、「主が恵み深いかたであることを」「味わい知った」のなら（第一ペテロ二・三）、これらのことはそのとおりです。あなたがたの「良心も聖霊によって」、そう「あかし」しています（ローマ九・一）。「永遠のいのちとは、唯一の、まことの神」と、神が「つかわされたイエス・キリストとを知ること」です（ヨハネ一七・三）。このように体験によって知ること、ただこれだけが、まことのキリスト教です。キリストの御霊を受けた人が、クリスチャンです。御霊を受けていない人は、クリスチャンではありません。また、御霊を受けていながら、それを知らないということはありえません。私たちの主は、こう言われます。「その日には」（つまり、御霊が来られるときには）、「わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるでしょう」（ヨハネ一四・二〇）。これは、あの「真理の御霊」です。「この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができません。あなたがたはそれを知っています。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからです」（ヨハネ一四・一七）。

（七）　世は御霊を受けることができません。かえって、「父の約束」をまったく退け（使徒一・四）、反対し、冒涜します。けれども、これを「告白しない霊は、すべて神から出ているものでは」ありません。そうです、「これは、反キリストの霊です。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていましたが、今やすでに世にきています」（第一ヨハネ四・三）。聖霊の感動を否定する者は、だれであっても反キリストです。内に住まわれる神の御霊が、すべての信じる者に共通の特権であることを否定する者も、反キリストです。御霊は福音の祝福であり、「言いつくせない賜物」です（第二コリント九・一五）。すべての人への約束であり、本物のクリスチャンを見分ける基準です。

（八）　彼らがこう言っても、何の助けにもなりません。「私たちは、神の御霊の助けを否定しているのではない。否定しているのは、この感動だけだ。聖霊を受けて、それを感じるということだけだ。健全な宗教には居場所がないと私たちが言うのは、ただ、御霊を感じること、御霊に動かされること、御霊に満たされることだけだ」。けれども、これだけを否定することで、あなたがたは聖書全体を否定しているのです。神の真理と約束とあかしのすべてを否定しているのです。

（九）　私たちのすぐれた教会は、このような悪魔的な区別を少しも知りません。かえって、はっきりと語っています。「キリストの御霊を感じる」こと（三十九箇条第一七条）。「聖霊に動かされる」こと（祈祷書「司祭按手式」）。いのちと救いを受けられる名は、イエスの名のほかにないと知り、それを「感じる」こと（祈祷書「病者訪問」）。私たちの教会は、私たちみなに、「聖霊の感動」を求めて祈るように教えています（祈祷書「聖餐式」の特祷）。そうです、「聖霊に満たされ」るように祈ることを教えています（祈祷書「堅信式」）。いや、私たちの

教会の司祭はみな、按手によって聖霊を受けると、公に言い表しています。ですから、これらのどれかを否定することは、事実上、キリスト教の啓示全体を捨てることです。そして、英国国教会を捨てることでもあるのです。

（一〇）けれども、「神の知恵」は、いつも人には「愚かなもの」でした（第一コリント一・二一～二三）。ですから、福音の大いなる奥義が、昔と同じように今も、「知恵のある者や賢い者に隠され」ているのは（マタイ一一・二五）、不思議ではありません。この奥義が、ほとんどどこでも否定され、あざけられ、ただの狂気として退けられているのも、不思議ではありません。あえてそれを公言する人がみな、いまも狂人とか熱狂者とかの烙印を押されているのも、不思議ではないのです。これが、来るはずであった「背教」です（第二テサロニケ二・三）。あらゆる階層、あらゆる身分の人々の、全面的な背教です。私たちはいまでさえ、それが地をおおっているのを見ています。「エルサレムのちまたを行きめぐり」、「ひとりでもあるか捜してみなさい」（エレミヤ五・一）。心をつくして主なる神を愛し、力をつくして神に仕える人が、ひとりでもいるでしょうか。ほかの国は見ないとしても、私たちの国は、あふれる不敬虔の下で、なんと嘆いていることでしょう！　あらゆる種類の悪事が、日ごとに行われています。それも多くの場合、とがめられずに行われています。行っているのは、「故意に罪を犯す者」（民数一五・三〇）、「その恥」を「栄光」とする者たちです（ピリピ三・一九）。みだりな誓い、のろい、不敬、冒涜。偽り、中傷、悪口。安息日を破ること、大食、泥酔、復讐。淫行、姦淫、さまざまな汚れ。詐欺、不正、しいたげ、ゆすり。これらが洪水のように、私たちの国をおおっています。だれがそれを数え上げることができるでしょうか。

（一一）そのようなひどい忌まわしい行いから、身を清く保ってきた人々の間でさえ、どうでしょうか。怒りと高ぶり、怠惰と無為、柔弱と軟弱、ぜいたくと放縦、貪欲と野心が、どれほど多く見られることでしょう。称賛への渇き、世への愛、人への恐れが、どれほど多く見られることでしょう。その一方で、まことの宗教は、なんと少ないことでしょう。神が私たちに命じられたとおりに、神を愛し、隣人を愛している人が、どこにいるでしょうか。一方には、敬虔の形さえ持たない人々がいます。もう一方には、形だけを持つ人々がいます。こちらには口を開けた墓があり、あちらには白く塗った墓があるのです。ですから、人々が公に集まるところを、だれかが注意深く見るなら、まさにこう気づくでしょう。「一部はサドカイ人であり、一部はパリサイ人である」と（使徒二三・六）。残念ながら、私たちの教会での集まりも例外ではないと思います。一方の人々は、「復活とか天使とか霊とかは、いっさい存在しない」かのように（使徒二三・八）、宗教にほとんど関心を持ちません。もう一方の人々は、宗教をただの生気のない形にしています。まことの信仰も、神の愛も、聖霊における喜びもない、外面的な務めの退屈な繰り返しにしているのです！

（一二）この場にいる私たちを、例外とすることができればよいのですが！「兄弟たちよ。私の心の願い、あなたがたのために神にささげる祈は、あなたがたが救われること」です（ローマ一〇・一）。このあふれる不敬虔から救われることです。そして、その「高波」が、ここで「とどまる」ことです（ヨブ三八・一一）。けれども、本当にそうでしょうか。そうでないことは、神がご存じです。そうです、私たち自身の良心も知っています。あなたがたは、身を清く保ってはいません。私たちもまた「腐れはて」、憎むべき者となっています（詩篇一四・一）。もはや悟る者はほとんどいません。「霊とまことをもって」神を「礼拝」する者も（ヨハネ四・二四）、ほとんどいないのです。私たちもまた、「その心が定まりなく、その魂が神に忠実でないやから」です（詩篇七八・八）。神は確かに、私たちを「地の塩」と定められました。けれども、「もし塩のききめがなくなったら」、「もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけ」です（マタイ五・一三）。

（一三）そして、主はこう言われます。「わたしはこれらの事のために彼らを罰しないでいられましょうか。このような国民にあだを返さないでしょうか」（エレミヤ五・九）。そうです、主がいつつるぎに向かって、「つるぎよ、この地を行きめぐれ」と言われるか（エゼキエル一四・一七）、私たちにはわかりません。主は私たちに、悔い改めるための長い時を与えてこられました。「ことしも、そのままにして」くださっています（ルカ一三・八）。けれども、雷によって私たちに警告し、私たちを目覚めさせておられます。主の「さばきが地に行われ」ています（イザヤ二六・九）。私たちには、何よりも重いさばきを予期する

理由が十分にあります。私たちが「悔い改めて初めのわざを行」わないなら、主はすぐに来て、私たちの「燭台をその場所から取りのけ」られるでしょう（黙示録二・五）。宗教改革の原理に、福音の真理と単純さに立ち帰らないなら、そうなるのです。もしかすると、私たちはいま、私たちを救おうとする神の恵みの最後の働きかけに、逆らっているのかもしれません。もしかすると、私たちは「自分たちに対する神のみこころを無にし」（ルカ七・三〇）、神の使者たちを追い出してきたのかもしれません。そうして、もう少しで「悪の枡目を満たす」ところまで来ているのかもしれません（マタイ二三・三二）。

（一四）神よ、「怒る時にもあわれみを思いおこしてください」（ハバクク三・二）。私たちを滅ぼすことによってではなく、改めさせることによって、栄光をお受けください！　私たちが「むちと、それを定めた方とに聞き従う」ようにしてください（ミカ六・九）。あなたの「さばきが地に行われる」いま、「世に住む者」に「正義を学」ばせてください（イザヤ二六・九）。

（一五）兄弟たちよ、私たちが「眠りからさめるべき時が、すでにきて」います（ローマ一三・一一）。「大いなるラッパが鳴りひび」く前に（イザヤ二七・一三）、私たちの国が血に染まった野となる前に、目を覚まさなければなりません。どうか、「平和をもたらす道」が私たちの「目に隠され」る前に（ルカ一九・四二）、すぐにそれを悟ることができますように！「恵み深い主よ、私たちを回復し、私たちに対するあなたの憤りをおやめください」（詩篇八五・四）。「主よ、再び天から見おろして、このぶどうの木をかえりみてください」（詩篇八〇・一四）。私たちに、「神のおとずれの時」を知らせてください（ルカ一九・四四）。「私たちの救の神よ、み名の栄光のために私たちを助け、み名のために私たちを救い、私たちの罪をおゆるしください」（詩篇七九・九）。「そうすれば、私たちはあなたを離れ退くことはありません。私たちを生かしてください。私たちはあなたのみ名を呼びます。万軍の神、主よ、私たちをもとに返し、み顔の光を照してください。そうすれば私たちは救をえるでしょう」（詩篇八〇・一八～一九）。

「どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえてくださることができるかたに、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように。アーメン」（エペソ三・二〇～二一）。

説教四　聖書的キリスト教

オクスフォード大学聖母マリア教会にて。1744年8月24日。

（編者注）この説教は、はじめ単独の小冊子として出版されました。そこには「読者へ」という次の言葉が、著者の署名と共に添えられていました。「私は、この説教を書いたとき、その後半を印刷するつもりはまったくありませんでした。けれども、この説教について、偽りの、口ぎたない話が、国のほとんど隅々にまで広められています。そのため、語ったそのままの形で、全体を出版せざるをえなくなりました。道理をわきまえた人々が、自分で判断できるようにするためです」。

「人がラッパの音を聞いても、みずから警戒せず、ついにつるぎが来て、その人を殺したなら、その血は彼のこうべに帰します」（エゼキエル三三・四）

「一同は聖霊に満たされました」（使徒四・三一）

（一）　同じ言い方が、第二章にも出てきます。そこには、こう書いてあります。「五旬節の日がきて、みんなの者が」（使徒たちが、女たちやイエスの母、イエスの兄弟たちと共に）「一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきました。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまりました。すると、一同は聖霊に満たされ」ました。そのすぐに現れた結果の一つは、彼らが「いろいろの他国の言葉で語り出した」ことでした。「この物音に」「集まってきた」のは、パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、そのほかの他国人でした。彼らは、使徒たちが「生れ故郷の国語で」、「神の大きな働きを述べるのを聞」いたのです（使徒二・一～一一）。

（二）　この第四章には、使徒たちと兄弟たちが祈り、神をほめたたえていたとき、「その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ」たとあります（使徒四・三一）。ただし、ここには、前の場合のような目に見える現れはありません。また、聖霊の特別な賜物が、そのとき一同に、あるいはそのうちのだれかに与えられたとも書かれていません。特別な賜物とは、「いやしの賜物」や、ほかの「力あるわざ」、「預言」、「霊を見わける力」、「種々の異言」、「異言を解く力」などです（第一コリント一二・九～一〇）。

（三）　聖霊のこれらの賜物は、あらゆる時代を通じて教会にとどまるように定められていたのでしょうか。また、「万物更新の時」が近づくと（使徒三・二一）、回復されるのでしょうか。こうした問いに、決着をつける必要はありません。けれども、次のことには注意しておく必要があります。教会の初めのころでさえ、神はこれらの賜物を、控えめにしか分け与えられなかったのです。そのころでさえ、「みんなが預言者」だったでしょうか。「みんなが力あるわざを行う者」だったでしょうか。「みんながいやしの賜物を持って」いたでしょうか。「みんなが異言を語」ったでしょうか（第一コリント一二・二九～三〇）。決してそうではありません。おそらく、千人にひとりもいなかったでしょう。たぶん、教会の教師たちのほかにはいませんでした。それも、その一部だけでした（第一コリント一二・二八）。ですから、「一同は聖霊に満たされ」たのは、これよりもさらにすぐれた目的のためでした。

（四）　それは、キリストのうちにあった思いを、彼らに与えるためでした（ピリピ二・五）。御霊の聖なる実を与えるためでした。この思いと実とが、あらゆる時代のすべてのクリスチャンに欠かせないものであることは、だれも否定できません。これを持たない者は、だれであってもキリストのものではないからです（ローマ八・九）。彼らを「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意」で満たすためでした（ガラテヤ五・二二）。信仰（おそらく「忠実」と訳すこともできます）と、柔和と、自制とを授けるためでした（ガラテヤ五・二二～二三）。肉を、その「情と欲と共に」、その激情や欲望と共に、「十字架につけ」ることができるようにするためでした（ガラテヤ五・二四）。そして、その内側の変化の結果として、外側のあらゆる義を全うさせるためでした。キリストが「歩かれたよ

うに」歩ませるためでした（第一ヨハネ二・六）。「信仰の働き」、「望みの忍耐」、「愛の労苦」のうちに歩ませるためです（第一テサロニケ一・三）。

（五）　ですから、御霊の特別な賜物について、好奇心からの不要な詮索にかかずらうのはやめましょう。むしろ、御霊のふつうの実を、もっと近くから見てみましょう。この実が、あらゆる時代を通じてとどまることを、私たちは確信しています。それは、人の子らの間でなされる神の大いなるわざです。私たちはふつう、これを「キリスト教」という一語で言い表しています。ただし、ここで言うキリスト教は、一連の意見や教理の体系のことではありません。人の心と生活にかかわるものとしてのキリスト教です。このキリスト教を、三つの異なる面から考えてみるのが有益でしょう。

一、個人のうちに存在し始めるもの
二、人から人へ広がっていくもの
三、地をおおうもの

そして最後に、わかりやすい、実際的な適用をもって、これらの考察を締めくくるつもりです。

【一】　個人のうちに始まるキリスト教

（一）　まず、キリスト教の起こりを考えてみましょう。個人のうちに存在し始めるものとしてのキリスト教です。では、使徒ペテロが悔い改めと罪の赦しを宣べ伝えるのを聞いた人々のひとりを、思い浮かべてください。その人は「強く心を刺され」（使徒二・三七）、罪を悟らされ、悔い改め、そしてイエスを信じました。この信仰は、神の働きによるものです。それは、望んでいる事がらの実体、あるいは実在そのものであり（ヘブル一一・一）、見えない事がらをはっきりと示す証拠です。この信仰によって、その人はただちに「子たる身分を授ける霊を受け」ました。そして、いまや「その霊によって」、「アバ、父よ」と呼ぶようになったのです（ローマ八・一五）。このとき初めて、その人は「聖霊によって」、イエスを主と呼ぶことができました（第一コリント一二・三）。「御霊みずから」、その人の「霊と共に」、その人が「神の子であることをあかしして」くださったのです（ローマ八・一六）。このときこそ、その人は本当にこう言うことができたのです。「生きているのは、もはや、私ではありません。キリストが、私のうちに生きておられるのです。私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのです」（ガラテヤ二・二〇）。

（二）　ですから、その人の信仰の本質は、こうでした。それは、神から与えられたエレンコス（証拠、確信）です。父なる神が、その愛する御子を通して、罪人である自分を愛してくださっているという確信です。その人はいまや、愛する御子にあって受け入れられているのです。そして、その人は「信仰によって義とされたので」、「神に対して平和を得て」いました（ローマ五・一）。そうです、神の「平和が」その人の「心を支配して」いたのです（コロサイ三・一五）。その平安は、「人知ではとうてい測り知ることのできない」ものでした。原語でパンタ・ヌーン、すなわち、ただ理性によるだけのあらゆる理解を越えるものです。この平安が、その人の「心と思いとを」、あらゆる疑いと恐れから「守」っていました（ピリピ四・七）。その人は、「自分の信じてきたかたを知って」いたからです（第二テモテ一・一二）。ですから、その人は「悪いおとずれを恐れ」ることがありませんでした。その「心は主に信頼してゆるが」なかったからです（詩篇一一二・七）。人が自分に何をなしうるかを、恐れませんでした（ヘブル一三・六）。自分の「頭の毛までも、みな数えられている」ことを知っていたからです（マタイ一〇・三〇）。やみのあらゆる力をも、恐れませんでした。神がそれを日ごとに、その人の「足の下に踏み砕いて」おられたからです（ローマ一六・二〇）。何よりも、死ぬことを恐れませんでした。いや、「この世を去ってキリストと共にいること」を願っていました（ピリピ一・二三）。キリストは、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし」ました。そして、「死の恐怖のために一生涯」、そのときまで「奴隷となっていた者たちを」、「解き放」ってくださったのです（ヘブル二・一四～一五）。

（三）　ですから、その人の「魂は主をあがめ」、その「霊は救主なる神をたたえ」ました（ルカ一・四六～四七）。その人は、自分を父なる神と和解させてくださった方を、「言葉につくせない」「喜び」をもって喜びました（第一ペテロ

一・八)。この方にあって、「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けた」のです(エペソ一・七)。神の御霊が、その人の霊と共に、その人が神の子であることをあかししてくださいました。そのあかしを喜びました(ローマ八・一六)。そして、それにもまして、「神の栄光にあずかる希望をもって喜」びました(ローマ五・二)。神の栄光あるかたちを望み、自分の魂が「真の義と聖と」において(エペソ四・二四)、すっかり新しくされることを望んで喜びました。あの「栄光の冠」を(第一ペテロ五・四)、あの「朽ちず汚れず、しぼむことのない資産」を(第一ペテロ一・四)、望んで喜んだのです。

(四) また、「その人に賜わっている聖霊によって、神の愛がその人の心に注がれて」いました(ローマ五・五)。「その人は子であるので、神はその人の心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送ってくださった」のです(ガラテヤ四・六)。そして、子として神を愛するその愛は、絶えず増し加わっていきました。神が赦しの愛で自分を愛してくださっているというあかしを、「自分のうちに」持っていたからです(第一ヨハネ五・一〇)。また、自分が「神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えて」いたからです(第一ヨハネ三・一)。こうして、神はその人の目の慕うもの、心の喜びとなりました。この世においても永遠においても、その人の受ける分となったのです。

(五) このように神を愛する人は、兄弟をも愛さずにはいられませんでした。それも、「言葉や口先だけで」なく、「行いと真実とをもって」愛したのです(第一ヨハネ三・一八)。その人はこう言いました。「神がこのように私たちを愛してくださったのであるから、私たちも互に愛し合うべきです」(第一ヨハネ四・一一)。そうです、すべての人の魂を愛するべきです。神の「あわれみはすべてのみわざの上に」あるからです(詩篇一四五・九)。これにかなって、神を愛するこの人の思いは、神のゆえに、すべての人を包みました。一度も顔を合わせたことのない人も、例外ではありませんでした。「神の子孫」であり(使徒一七・二九)、御子がその魂のために死なれた、ということのほかには何も知らない人も、例外ではありませんでした。「悪人」も「恩を知らぬ者」も(ルカ六・三五)、例外ではありませんでした。敵は、なおさら例外ではありませんでした。主のゆえに自分を憎み、迫害し、はずかしめる人々です。こうした人々は、その人の心にも祈りにも、特別な場所を占めていました。その人は、「キリストも」私たちを「愛してくださった」ように、彼らを愛したのです(エペソ五・二)。

(六) そして、「愛は高ぶらない」のです(第一コリント一三・四)。愛は、それが宿るすべての魂を、ちりにまで低くします。ですから、その人は心がへりくだっていました。自分の目には、自分は小さく、卑しく、取るに足りない者でした。人からの誉を求めもせず、受けもしませんでした。「ただひとりの神からの誉」だけを求めたのです(ヨハネ五・四四)。柔和で寛容であり、すべての人に優しく、温順でした。忠実と真実とが、その人から離れることはありませんでした。それは、その人の「首に結」ばれ、「心の碑にしる」されていたのです(箴言三・三)。同じ御霊によって、その人は「何ごとにも節制」することができました(第一コリント九・二五)。「乳離れしたみどりごのように」、自分の魂を静めていました(詩篇一三一・二)。その人は世に対して十字架につけられ、世もその人に対して十字架につけられていました(ガラテヤ六・一四)。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」に(第一ヨハネ二・一六)、まさっていました。同じ全能の愛によって、その人は救われていました。怒りと高ぶりから、情欲と虚栄から、野心と貪欲から、そして、キリストのうちになかったあらゆる気質から救われていたのです。

(七) この愛を心に持つ人が、「隣り人に害を加えることはない」というのは(ローマ一三・一〇)、たやすく信じられるでしょう。その人が、知りながら、わざと、だれかに害を加えることはありえませんでした。残酷なことや悪いこと、不正な行いや不親切な行いからは、最も遠いところにいました。同じように気をつけて、その人は「口に門守を置いて、くちびるの戸を守」りました(詩篇一四一・三)。舌によって、正義やあわれみや真実に背くことのないためです。あらゆる偽りと虚言と欺きとを捨てました(エペソ四・二五)。その口には偽りがありませんでした(第一ペテロ二・二二)。だれをもそしらず(テトス三・二)、不親切な言葉がそのくちびるから出ることは、一度もありませんでした。

（八）　その人は、「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」ということばが真実であることを（ヨハネ一五・五）、深く感じていました。ですから、自分が神から「常に水をそそ」がれる必要があることも（イザヤ二七・三）、深く感じていました。そこで、その人は日ごとに、神のすべての定めを守り続けました。それは、神が人に恵みを注ぐために定められた通り道です。「使徒たちの教」を守り、魂のその糧を、心から喜んで受けました。「パンをさ」くことを続け、それが「キリストのからだにあずかること」であると知りました（第一コリント一〇・一六）。そして、大いなる会衆がささげる「祈」と賛美とを続けました（使徒二・四二）。こうして、その人は日ごとに恵みにおいて成長し（第二ペテロ三・一八）、力を増し、神を知る知識と神への愛とにおいて増し加わっていきました。

（九）　けれども、その人は、悪を行わないだけでは満足しませんでした。その魂は、善を行うことに渇いていたのです。その人の心は、いつもこう語っていました。「『わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのです』（ヨハネ五・一七）。私の主は、よい働きをしながら巡回されました（使徒一〇・三八）。私も、その御足の跡を踏み従わないでいられましょうか」（第一ペテロ二・二一）。ですから、その人は「機会のあるごとに」（ガラテヤ六・一〇）、善を行いました。もっと高い種類の善ができないときは、飢えている人に食べさせ、裸の人に着せました。みなしごや旅人を助け、病気の人や獄にいる人を見舞って助けました（マタイ二五・三五～三六）。全財産を、貧しい人々に施しました（第一コリント一三・三）。その人は、彼らのために働くことも、苦しむことも喜びました。ほかの人の益になることなら、何においても、とりわけ「自分を捨て」ることを喜んだのです（マタイ一六・二四）。彼らのためなら、手放すのが惜しすぎるものは何一つないと考えました。主のみことばを、よく覚えていたからです。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのです」（マタイ二五・四〇）。

（一〇）　これが、起こったばかりのころのキリスト教でした。これが、昔のクリスチャンでした。祭司長たちや長老たちのおどしを聞いて、「口をそろえて、神にむかい声をあげ」（使徒四・二四）、「一同は聖霊に満たされ」た人々は（使徒四・三一）、ひとりひとりがこのような人でした。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして」いました（使徒四・三二）。それほどに、彼らが信じた方の愛が、互いに愛し合うよう彼らに「強く迫って」いたのです（第二コリント五・一四）。「だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていました」（使徒四・三二）。それほど完全に、彼らは世に対して十字架につけられ、世も彼らに対して十字架につけられていたのです。「そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、共にパンをさき、祈をしていました」（使徒二・四二）。「そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれました。彼らの中に乏しい者は、ひとりもいませんでした。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、使徒たちの足もとに置きました。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられました」（使徒四・三三～三五）。

【二】　人から人へ広がるキリスト教

（一）　第二に、このキリスト教が人から人へと広がり、こうして少しずつ世に入っていく姿を見てみましょう。キリスト教についての神のみこころは、そのようなものだったからです。神は「あかりをつけて、それを枡の下におく」ために、ともされたのではありません。「家の中のすべてのものを照させる」ために、ともされたのです（マタイ五・一五）。このことを、私たちの主は、最初の弟子たちに告げておられました。「あなたがたは、地の塩です」、「世の光です」（マタイ五・一三～一四）。そして同時に、すべての弟子に向けた、あの命令を与えられたのです。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」（マタイ五・一六）。

（二）　実際、人を愛するこうした人々のうちの幾人かが、「全世界は悪しき者の配下にある」のを見たとしましょう（第一ヨハネ五・一九）。彼らが、その光景に、自分たちの主が死なれた人々の悲惨に、無関心でいられると思えるでしょうか。彼らの心は、その人々を思って痛まないでしょうか。悩みのあまり、溶け

去らないでしょうか。たとえ自分たちの愛する方からの命令がなかったとしても、「何もしないで、一日中」立っていることができたでしょうか（マタイ二〇・六）。むしろ、あらゆる手段を尽くして、この燃えさしのいくらかでも、炎の中から取り出そうと努めないでしょうか（アモス四・一一）。きっとそうするはずです。「羊のようにさ迷っていた」あわれな人々を、ひとりでも多く連れ戻そうとするはずです。「たましいの」大いなる「牧者であり監督であるかた」のもとへです。そのためなら、どんな骨折りも惜しまないはずです（第一ペテロ二・二五）。

（三） 昔のクリスチャンたちは、そのとおりにしました。「機会のあるごとに、だれに対しても」、「善を行」おうと努めたのです（ガラテヤ六・一〇）。「迫ってきている神の怒りから」のがれるように（マタイ三・七）、いまこそ、いまこそ「地獄の刑罰をのがれる」ように（マタイ二三・三三）、人々に警告しました。彼らは告げました。「神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていましたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられます」（使徒一七・三〇）。彼らは声高く叫びました。「心を翻しなさい、心を翻して、その悪しき道を離れなさい」（エゼキエル三三・一一）。「さもないと悪はあなたがたを滅ぼします」（エゼキエル一八・三〇）。彼らは、「節制」と「正義」について、人々と「論じ」ました。これは、人々を支配している罪とは反対の徳のことです。また、「未来の審判」について論じました。神が世をさばかれるその日に、悪を行う者の上に必ず下される、神の怒りのことです（使徒二四・二五）。

（四） そのさい、彼らはひとりひとりに、その必要に応じて語ろうと努めました。無頓着な人々、「暗黒と死の陰と」の中で（ルカ一・七九）平然と横たわっている人々には、雷のように叫びました。「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照してくださいます」（エペソ五・一四）。けれども、すでに眠りから覚まされ、神の怒りを感じてうめいている人々には、こう語りました。「父のみもとには、私たちのために助け主がおられます」。「彼は、私たちの罪のための、あがないの供え物です」（第一ヨハネ二・一～二）。一方、すでに信じた人々には、「愛と善行とを励むように」と（ヘブル一〇・二四）、「耐え忍んで善を行」うようにと（ローマ二・七）勧めました。そして、聖性において、ますます豊かになるように勧めました。「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」からです（ヘブル一二・一四）。

（五） そして、彼らの労苦は、主にあってむだになりませんでした（第一コリント一五・五八）。主の言葉は「早く広まり、また、あがめられ」ました（第二テサロニケ三・一）。「ますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった」のです（使徒一九・二〇）。けれども、それだけいっそう、つまずきもまた広がっていきました。世は全体として、つまずきました。彼らが「世のおこないの悪いことを、あかしている」からです（ヨハネ七・七）。快楽を好む人々もつまずきました。一つには、この人たちが、いわば自分たちの思いをとがめるために造られたかのようだったからです。快楽を好む人々は言いました。「あの男は、神を知っていると公言し、自分を主の子と呼んでいる。その生活はほかの人々とは違い、その歩みは異様だ。われわれの道を、汚れたものであるかのように避けている。そして、神が自分の父だと誇っている」（知恵の書二・一三～一六）。けれども、それ以上に、仲間の多くが連れ去られ、もはや自分たちと一緒に「度を過ごした乱行」に走らなくなったからです（第一ペテロ四・四）。名声のある人々もつまずきました。福音が広まるにつれて、民衆からの評価が下がったからです。また、多くの人が、もはや彼らにへつらいの称号を与えようとせず、神だけに帰すべき敬意を人に払おうとしなくなったからです。商売をする人々は、互いに呼び集めて言いました。「諸君、われわれがこの仕事で、金もうけをしていることは、ご承知のとおりだ。しかるに、諸君の見聞きしているように、あの者たちが、大ぜいの人々を説きつけて誤らせた。これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれがある」（使徒一九・二五～二七）。何よりも、宗教家と呼ばれる人々、外側だけの宗教の人々、「世の聖徒たち」がつまずきました。そして、機会があるたびに、こう叫ぼうと身構えていました。「イスラエルの人々よ、加勢にきてくれ」（使徒二一・二八）。「この者たちは、疫病のような人間で、世界中に騒ぎを起している」（使徒二四・五）。「この者たちは、いたるところで民とこの場所とにそむくことを、みんなに教えている」（使徒二一・二八）。

（六）　こうして、空は雲で黒くなり、嵐が激しく集まってきました。キリスト教が広まれば広まるほど、それを受け入れない人々の目には、害が大きくなったからです。「天下をかき回してきたこの人たち」に（使徒一七・六）、ますます激しく怒る人々の数が増えていきました。そのため、ますます多くの人々が叫ぶようになりました。「こんな者どもは地上から取り除いてしまえ。生かしておくべきではない」（使徒二二・二二）。そうです、彼らを殺す者はだれでも、それによって神に仕えることになるのだと、本気で信じたのです（ヨハネ一六・二）。

（七）　その一方で、人々は彼らに決まって「汚名を着せ」ました（ルカ六・二二）。そのため、「この宗派については、いたるところで反対」がありました（使徒二八・二二）。人々は彼らに対して、「様々の悪口を言」いました（マタイ五・一一）。彼らより前の「預言者たち」に対してしたのと、同じようにです（マタイ五・一二）。だれかが何かを言い立てれば、ほかの者たちはそれを信じました。こうして、つまずきは「天の星のように」おびただしく増えていきました（ヘブル一一・一二）。そしてここから、父があらかじめ定めておかれた時に、あらゆる形の迫害が起こりました。ある人々は、しばらくの間、恥とそしりを受けるだけで済みました。ある人々は、「自分の財産が奪われ」ました（ヘブル一〇・三四）。ある人々は「あざけられ、むち打たれ」、ある人々は「しばり上げられ、投獄される」目に会いました（ヘブル一一・三六）。またほかの人々は、「血を流すほどの抵抗」をしたのです（ヘブル一二・四）。

（八）　このときこそ、地獄の柱が揺り動かされ、神の国がますます広がっていったのです。罪人たちはいたるところで、「やみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰」らされました（使徒二六・一八）。神はご自分の子らに、「反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを」授けられました（ルカ二一・一五）。そして、彼らの生活は、その言葉に劣らない力を持っていました。けれども何よりも、彼らの苦難が、全世界に語りかけました。彼らは、「神の僕として、自分を人々にあらわし」ました。「患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも」そうしたのです（第二コリント六・四～五）。「海上の難」や「荒野の難」に会ったときも、「労し苦しみ」、「飢えかわき」、「寒さに凍え、裸でいた」ときも、そうでした（第二コリント一一・二六～二七）。彼らは「戦いをりっぱに戦いぬき」ました（第二テモテ四・七）。そのあと、「ほふられる羊のように」引かれて行き（ローマ八・三六）、自分たちの「信仰の供え物」の上に、ささげられました（ピリピ二・一七）。そのとき、ひとりひとりの血が声をあげました。異教徒たちも、「彼は死んだが、今もなお語っている」と認めたのです（ヘブル一一・四）。

（九）　こうして、キリスト教は地に広がっていきました。けれども、なんと早く、麦と共に「毒麦もあらわれ」たことでしょう（マタイ一三・二六）。「信心の奥義」と並んで（第一テモテ三・一六）、なんと早く、「不法の秘密の力」が働いたことでしょう（第二テサロニケ二・七）。なんと早く、サタンが自分の座を（黙示録二・一三）、「神の宮」の中にさえ見いだしたことでしょう（第二テサロニケ二・四）。ついに、「女は荒野へ逃げて行」き（黙示録一二・六）、「忠信な者は人の子らのなかから」再び「消えうせ」たのです（詩篇一二・一）。ここで私たちは、踏みならされた道を歩くことになります。その後の世代の、いまもやむことのない腐敗については、神が立てられた証人たちが、折にふれて詳しく書き記してきました。神はこの証人たちを立てて、ご自分が「岩の上に」「教会を建て」られたこと、「黄泉の力も」それに完全には「打ち勝つことはない」ことを示されたのです（マタイ一六・一八）。

【三】　地をおおうキリスト教

（一）　けれども、私たちは、「これよりも、もっと大きなこと」を見るのではないでしょうか（ヨハネ一・五〇）。そうです、世の初めからこれまでにあったどんなことよりも、大きなことを見るのです。サタンが、神の真実を損ない、その約束を無にすることができるでしょうか。できないなら、キリスト教がすべてに打ち勝ち、地をおおう時が来るはずです。しばらく立ち止まって、この不思議な光景を見渡してみましょう（これが、初めに予告した第三のことです）。キリスト教の世界という光景です。このことについて、昔の預言者たちは「たずね求め、かつ、つぶさに調べ」ました。このことを、「彼らのうちにいます」御霊が「あかし」したのです（第一ペテロ一・一〇～一一）。「終りの日に次のことが起

ります。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべて国はこれに流れてきます。こうして彼らはそのつるぎを打ちかえて、すきとし、そのやりを打ちかえて、かまとします。国は国にむかって、つるぎをあげず、彼らはもはや戦いのことを学びません」（イザヤ二・二、四）。「その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光があります。その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者をあがなわれます。主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から集められます」（イザヤ一一・一〇～一二）。「そのとき、おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれます。彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがないと、主は言われます。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからです」（イザヤ一一・六、九）。

（二） 大使徒の言葉も、同じ趣旨です。それがまだ一度も成就していないことは、明らかです。「神はその民を捨てたのでしょうか。断じてそうではありません」（ローマ一一・一）。「かえって、彼らの罪過によって、救が異邦人に及」んだのです（ローマ一一・一一）。「彼らの失敗が異邦人の富となったとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どんなにかすばらしいことでしょう」（ローマ一一・一二）。「兄弟たちよ。あなたがたに、この奥義を知らないでいてもらいたくありません。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであって、こうして、イスラエル人は、すべて救われるでしょう」（ローマ一一・二五～二六）。

（三） さて、「時の満ちる」ときが来て（ガラテヤ四・四）、預言が成就したとしましょう。なんという眺めでしょう！ すべてが平和で、「とこしえの平安と信頼」があります（イザヤ三二・一七）。ここには、武器のとどろきも、騒がしい物音も、「血にまみれた衣」もありません（イザヤ九・五）。「破壊はとこしえに終わり」ました（詩篇九・六）。戦いは地から絶えました（詩篇四六・九）。内輪の争いも、もう残っていません。兄弟が兄弟に逆らって立つこともありません。「内部で分れ争う」国や町が（マタイ一二・二五）、自らのはらわたを引き裂くこともありません。国内の不和は永久に終わり、隣人を「そこな」い、「やぶる」者は、ひとりも残っていません（イザヤ一一・九）。ここには、「賢い人」をさえ「愚かに」する「しえたげ」はありません（伝道七・七）。「貧しい者の顔をすり砕く」ゆすりもありません（イザヤ三・一五）。強盗も悪事も、略奪も不正もありません。すべての人が、「自分の持っているもので満足し」ているからです（ヘブル一三・五）。こうして、「義と平和とは互に口づけし」ました（詩篇八五・一〇）。義と平和とは「深く根ざして、国にはびこ」りました（詩篇八〇・九）。「義は地からはえ」、「平和は天から見おろして」います（詩篇八五・一一）。

（四） そして、義、すなわち正義と共に、あわれみもあります。地はもはや、「暴力のすまいで満ちて」いません（詩篇七四・二〇）。主は、血に飢えた者も悪意ある者も、ねたむ者も復讐する者も、滅ぼしてしまわれました。たとえ挑発されることがあっても、いまは「悪をもって悪に報い」ることを知る者は、だれもいません（ローマ一二・一七）。いや、実のところ、悪を行う者はいません、ひとりもいません。すべての人が「はとのように素直」だからです（マタイ一〇・一六）。彼らは信仰から来る「喜びと平安と」に満たされ（ローマ一五・一三）、一つの御霊によって、一つのからだに結び合わされています（エペソ四・四）。みなが兄弟として愛し合い（第一ペテロ三・八）、みなが「心を一つにし思いを一つにして」います（使徒四・三二）。「だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者が」ありません（使徒四・三二）。「彼らの中に乏しい者は、ひとりも」いません（使徒四・三四）。すべての人が、「自分を愛するように」「隣り人を愛」しているからです（マタイ二二・三九）。そして、みなが一つの規準によって歩んでいます。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにしなさい」（マタイ七・一二）。

（五） ですから、彼らの間では、不親切な言葉が聞かれることは決してありません。「舌の争い」も（詩篇三一・二〇）、どんな種類の争いもありません。のしりも悪口もありません。だれもが「口を開いて知恵を語」り、「その舌にはいつくしみの教」があります（箴言三一・二六）。同じように、彼らは詐欺も偽りもできません。その愛には偽りがありません（ローマ一二・九）。彼らの言葉

は、いつもその思いをそのまま言い表しています。それは、胸の内に開かれた窓のようです。だれでも望む人は、その窓から彼らの心をのぞき込み、そこに愛と神とだけがあるのを見ることができるのです。

（六） こうして、全能者にして主なる神が、「大いなる御力をふるって支配」なさるところでは（黙示録一一・一七、一九・六）、神は「万物をご自身に従わせ」られます（ピリピ三・二一）。すべての心を愛であふれさせ、すべての口を賛美で満たされるのです。「このような祝福をもつ民はさいわいです。主をおのが神とする民はさいわいです」（詩篇一四四・一五）。主は言われます。「起きなさい、光を放ちなさい。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったからです」（イザヤ六〇・一）。「あなたは、主なるわたしが、あなたの救主、また、あなたのあがない主、ヤコブの全能者であることを知るにいたります。わたしは、あなたのまつりごとを平和にし、あなたのつかさびとを正しくします。暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれません。あなたはその城壁を『救』ととなえ、その門を『誉』ととなえます」（イザヤ六〇・一六～一八）。「あなたの民はことごとく正しい者となって、とこしえに地を所有します。彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ、わが栄光をあらわすものとなります」（イザヤ六〇・二一）。「昼は、もはや太陽があなたの光とならず、夜も月が輝いてあなたを照しません。主はとこしえにあなたの光となり、あなたの神はあなたの栄えとなられます」（イザヤ六〇・一九）。

【四】 実際的な適用

こうして、始まるものとして、広がっていくものとして、地をおおうものとして、キリスト教を手短に考えてきました。残っているのは、わかりやすい、実際的な適用をもって、全体を締めくくることだけです。

（一） まず、お尋ねしたいのです。このキリスト教は、いまどこにあるのでしょうか。どうか教えてください。クリスチャンは、どこに住んでいるのでしょうか。住民がみな、このように聖霊に満たされている国は、どこにあるのでしょうか。その国では、みなが心を一つにし思いを一つにしています。自分たちのうちのひとりでも乏しくなるのを忍びず、いつも「それぞれの必要に応じて、だれにでも分け与え」ています（使徒四・三五）。住民はひとり残らず、神の愛に心を満たされ、自分を愛するように隣り人を愛するよう、その愛に強く迫られています。みなが「あわれみの心、謙そん、柔和、寛容を身に着け」ています（コロサイ三・一二）。言葉においても行いにおいても、正義やあわれみや真実に、少しも背くことがありません。あらゆる点で、人々からしてほしいと望むことを、すべての人にしています（マタイ七・一二）。そんな国が、どこにあるのでしょうか。この描写に当てはまらない国を、どうしてキリスト教国と呼ぶことができるでしょうか。それなら、私たちは地上でキリスト教国をまだ一度も見たことがないと、認めようではありませんか。

（二） 兄弟たちよ、「神のあわれみによってあなたがたに勧め」ます（ローマ一二・一）。あなたがたが私を狂人とか愚か者とか思うとしても、愚か者として、私を忍んでください（第二コリント一一・一、一六）。だれかが、あなたがたに向かって、「思いきって大胆に語る」ことが、どうしても必要なのです（第二コリント三・一二）。とりわけ、いまそれが必要です。これが最後の時でないと、だれにわかるでしょうか。正しい審判者が、いつ「わたしはもはや、この民のためのとりなしを聞かない」と言われるか、だれにわかるでしょうか。「たといこの地にノア、ダニエル、ヨブがいても、彼らはただ自分の命を救いうるのみです」（エゼキエル一四・一四）。私が語らないなら、だれがこのように大胆に語るでしょうか。ですから、私が、この私が語ります。生ける神にかけて、あなたがたにお願いします。私の手から祝福を受けることに対して、胸を固く閉ざさないでください。心の中で、こう言ってはなりません。

Non persuadebis, etiamsi persuaseris.（たとえ本当に納得させられても、あなたの説得には従わない）

言いかえれば、「主よ、あなたが選んでつかわす者を、つかわしてはならない。この男に救われるくらいなら、自分の血の中で滅びるほうがましだ！」と言わないでください。

（三） 兄弟たちよ、「こうは言うものの」、私は「更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信して」います（ヘブル六・九）。では、優しい愛をもっ

て、「柔和な心をもって」（ガラテヤ六・一）、お尋ねします。この町は、キリスト教の町でしょうか。キリスト教が、聖書的キリスト教が、ここに見られるでしょうか。私たちは、一つの共同体として見たとき、「聖霊に満たされ」ているでしょうか。その御霊の本物の実を、心に味わい、生活に現すほどに満たされているでしょうか。町の住民のことは言わないでおきます。すべての為政者、学寮と学館のすべての長や監督者、またそれぞれの団体の人々は、「心を一つにし思いを一つにして」いるでしょうか（使徒四・三二）。「神の愛が私たちの心に注がれて」いるでしょうか（ローマ五・五）。私たちの気質は、キリストのうちにあったものと同じでしょうか（ピリピ二・五）。そして、私たちの生活はそれにかなっているでしょうか。私たちは、「私たちを召してくださった聖なるかたにならって」、「あらゆる行いにおいて聖なる者」となっているでしょうか（第一ペテロ一・一五）。

（四）　どうか、心にとめてください。いまここで考えているのは、特異な考えではありません。私が問うているのは、あれこれの疑わしい意見についてではありません。私たちに共通のキリスト教の、疑う余地のない根本の部分についてです（もし、そのようなものがあるならば）。そして、その判定は、神のことばに導かれたあなたがた自身の良心に、ゆだねます。ですから、自分の心に責められない人は、責めを負わずに去ってください。

（五）　では、大いなる神を恐れつつ、その御前でお願いします。あなたがたも私も、まもなくこの神の前に出るのです。私たちの上に権威を持っておられる方々よ。私はその職のゆえに、あなたがたを敬っています。どうか、よく考えてください。神の前で偽る者のようにではなく、考えてください。あなたがたは、「聖霊に満たされ」ているでしょうか。あなたがたは、人々の間で神を代表するように任じられています。その神の生きた肖像となっているでしょうか。為政者たち、治める人たちよ、「わたしは言う、『あなたがたは神だ』」（詩篇八二・六）。あなたがたは、その職によって、それほど天の神に近く結ばれているのです！　それぞれの地位と身分において、あなたがたは私たちに、「われらの統治者なる主」を示さなければなりません（詩篇八・一）。あなたがたの心の思いのすべて、気質と願いのすべては、その高い召しにふさわしいでしょうか。あなたがたの言葉はみな、神の口から出る言葉のようでしょうか。あなたがたのすべての行いに、威厳と愛があるでしょうか。それは、言葉では言い表せない偉大さです。「神に満ちた」心からしか流れ出ない偉大さです。それでいて、「うじのような人、虫のような人の子」という性質とも矛盾しない偉大さです（ヨブ二五・六）。

（六）　尊敬すべき方々よ。あなたがたは特に、若者の柔らかい心を形づくるように召されています。そこから無知と誤りの影を追い払い、「救に至る知恵」を持つように（第二テモテ三・一五）、彼らを育てるように召されているのです。そのあなたがたは、「聖霊に満たされ」ているでしょうか。その重要な職がどうしても必要とする、あの「御霊の実」のすべてに満たされているでしょうか（ガラテヤ五・二二）。あなたがたの心は、神に対して全きものでしょうか。神の国を地上に打ち立てようとする愛と熱心に満ちているでしょうか。あなたがたは、自分にゆだねられた人々に、いつも思い起こさせているでしょうか。私たちのすべての学問の、ただ一つの理にかなった目的は、「唯一の、まことの神」と、神が「つかわされたイエス・キリストとを」知り、愛し、仕えることだと（ヨハネ一七・三）。日ごとに、彼らに説いて聞かせているでしょうか。ただ「愛はいつまでも絶えることがない」のだと（第一コリント一三・八）。一方、「異言はやみ」、哲学の「知識はすたれる」のだと。そして、愛がなければ、あらゆる学問は、きらびやかな無知、もったいぶった愚かさ、心の悩みにすぎないのだと。あなたがたの教えることはすべて、実際に、神への愛と、神のゆえのすべての人への愛とに向かっているでしょうか。彼らの学問の種類、方法、分量について何を定めるときも、この目的に目を注いでいるでしょうか。キリストのこの若い兵士たちは、どこにつかわされることになるでしょうか。どこであっても、ひとりひとりが「燃えて輝くあかり」となるように（ヨハネ五・三五）、「万事につけ」キリストの福音を「飾る」ように（テトス二・一〇）、願い、努めているでしょうか。そして、お尋ねすることを許してください。あなたがたは、自分が引き受けたこの大きな仕事に、全力を注いでいるでしょうか。これに「力をつくして」励んでいるでしょうか（伝道九・一〇）。魂のあらゆる能力を働か

せ、神が貸し与えてくださったあらゆるタラントを、力の限り用いているでしょうか。

（七）私がここで、あなたがたにゆだねられた人々がみな聖職者になるかのように語っている、と言わないでください。そうではありません。私はただ、彼らがみなクリスチャンになるはずの者として語っているのです。けれども、先人たちの恩恵にあずかっている私たちは、彼らにどんな模範を示しているでしょうか。特別研究員や給費生は、とりわけ、いくらかの地位と名声のある人々は、どんな模範を示しているでしょうか。兄弟たちよ、あなたがたは御霊の実に満ちあふれているでしょうか。へりくだった心、自己否定と克己、まじめさと落ち着いた精神、忍耐、柔和、慎み、自制に満ちあふれているでしょうか。すべての人にあらゆる善を行おうとして、疲れを知らず、休むことなく努めているでしょうか。人々の外側の必要を満たし、その魂を、神を知るまことの知識と神への愛へと導こうと努めているでしょうか。これが、学寮の特別研究員のおおよその姿でしょうか。そうではないのではないかと、私は恐れます。むしろ、高ぶりと傲慢、短気と気むずかしさ、怠惰と無為、大食と好色、さらには、ことわざになるほどの役立たずぶりさえ、私たちは非難されてきたのではないでしょうか。それも、いつも敵からというわけではなく、まったく根拠がないわけでもないのではないでしょうか。どうか、神がこのはずかしめを私たちから「ころがし去」ってくださいますように（ヨシュア五・九）。その記憶さえ、永久に消えうせますように！

（八）私たちの多くは、もっと直接に神にささげられた者であり、聖なる務めに仕えるように召された者です。では、私たちは「言葉にも、行状にも、愛にも」、霊にも、「信仰にも、純潔にも」、ほかの人々の「模範」となっているでしょうか（第一テモテ四・一二）。私たちの額に、そして心に、「主に聖なる者」と刻まれているでしょうか（出エジプト二八・三六）。私たちは、どんな動機からこの職に就いたのでしょうか。本当に澄んだ目で（マタイ六・二二）、この職に就いたのでしょうか。「神の栄光を広め、神の民の徳を高めるために、この務めを引き受けるよう、聖霊によって内から動かされたと信じて、神に仕えるため」だったでしょうか（祈祷書「執事按手式」）。そして、「神の恵みによって、この職に自分をまったくささげると、はっきり決心し」たでしょうか（祈祷書「司祭按手式」）。私たちは、できるかぎり、この世のあらゆる心づかいと学びとを捨て、わきに置いているでしょうか。この一つのことに自分をまったくささげ、あらゆる心づかいと学びとを、こちらへ向けているでしょうか。私たちは「よく教えることができ」るでしょうか（第一テモテ三・二）。「ほかの者たちにも教えることのできる」ように（第二テモテ二・二）、「神に教えられ」ているでしょうか（ヨハネ六・四五）。私たちは神を知っているでしょうか。イエス・キリストを知っているでしょうか。神は「御子を私たちの内に啓示して」くださったでしょうか（ガラテヤ一・一六）。神は私たちに「力を与えて、新しい契約に仕える者と」してくださったでしょうか（第二コリント三・六）。それなら、私たちの「使徒職の印」は、どこにあるのでしょうか（第一コリント九・二）。「罪過と罪とによって死んでいた」人のうち（エペソ二・一）、だれが私たちの言葉によって生かされたでしょうか。私たちは、魂を死から救おうとする燃える熱心を持っているでしょうか。その人々のために、しばしば「パンを食べることを忘れ」るほどの熱心を持っているでしょうか（詩篇一〇二・四）。私たちは率直に語り、「真理を明らかにし、神のみまえに、すべての人の良心に自分を推薦」しているでしょうか（第二コリント四・二）。私たちは、世と世のものとに対して死に、すべての「宝を」「天に、たくわえ」ているでしょうか（マタイ六・二〇）。私たちは、神からゆだねられた者たちの「上に権力をふるって」いるでしょうか（第一ペテロ五・三）。それとも、いちばん小さい者となり、「みんなに仕える者」となっているでしょうか（マルコ九・三五）。「キリストのゆえに受けるそしり」を負うとき（ヘブル一一・二六）、それを重荷に感じるでしょうか。それとも、それを喜ぶでしょうか。一方の頬を打たれるとき、腹を立てるでしょうか。侮辱を忍べないでしょうか。それとも、「悪人に手向か」わずに、「ほかの頬をも向け」るでしょうか（マタイ五・三九）。「善をもって悪に勝」つでしょうか（ローマ一二・二一）。私たちは、苦々しい熱心を持っていて、そのために「迷っている人々」と（ヘブル五・二）、激しく、感情的に争ってしまうでしょうか。それとも、私たちの熱心は愛の炎であって、そのために、私たちのすべて

の言葉が、優しさとへりくだりと「知恵にかなう柔和」とに導かれているでしょうか（ヤコブ三・一三）。

（九） もう一つ。この地の若者たちについては、何と言えばよいでしょうか。あなたがたは、クリスチャンの敬虔の形か力か、どちらかを持っているでしょうか。あなたがたは、謙遜で、素直に教えを受け、忠告を聞き入れるでしょうか。それとも、頑固で、わがままで、向こう見ずで、高ぶっているでしょうか。目上の人々に、親に対するように従っているでしょうか。それとも、心からの敬意を払うべき人々を、軽んじているでしょうか。あなたがたの楽な務めに、勤勉に励んでいるでしょうか。力をつくして学問に打ち込んでいるでしょうか。「今の時を生かして用い」（エペソ五・一六）、毎日に詰め込めるだけの仕事を詰め込んでいるでしょうか。むしろ、あなたがたは自分でもわかっているのではありませんか。来る日も来る日も、むだに過ごしていることを。キリスト教に何の役にも立たない書物を読んだり、賭け事をしたり、あるいは、自分でも何をしているのかわからないことをしたりしているのです。あなたがたは、時間よりも財産のほうを上手に管理しているでしょうか。主義として、「何人にも借りがあってはならない」と心がけているでしょうか（ローマ一三・八）。「安息日を覚えて、これを聖とし」ているでしょうか（出エジプト二〇・八）。その日を、もっと直接に神を礼拝することに費やしているでしょうか。神の家にいるとき、神がそこにおられることを思っているでしょうか。「見えないかたを見ているようにして」ふるまっているでしょうか（ヘブル一一・二七）。「自分のからだを清く尊く保つ」すべを知っているでしょうか（第一テサロニケ四・四）。あなたがたの間に、泥酔や汚れがあるのではありませんか。そうです、あなたがたのうちには、「その恥」を「栄光」とする者がいるのではありませんか（ピリピ三・一九）。あなたがたの多くは、「神の名を、みだりに唱え」ているのではありませんか（出エジプト二〇・七）。それも、おそらく習慣のように、悔いも恐れもなく唱えているのではありませんか。そうです、あなたがたのうちには、誓いを破った者が大勢いるのではありませんか。しかも、その数はどんどん増えているのではないかと、私は恐れます。兄弟たちよ、驚かないでください。神とこの会衆の前で告白します。私自身も、その中のひとりでした。私は、あのすべての慣例を守ると、おごそかに誓いました。そのころの私は、その慣例について何も知りませんでした。あの規則を守るとも誓いました。けれども、私はその規則を、そのときも、それから何年もの間も、読み通すことさえしなかったのです。これが偽誓でないなら、何が偽誓でしょうか。そして、もしこれが偽誓なら、なんと重い罪が、そうです、並々ならぬ深い色に染まった罪が、私たちの上にのしかかっていることでしょう！ いと高き方は、それに目をとめておられないでしょうか。

（一〇） あなたがたの多くが軽薄な世代になっているのは、その結果の一つではないでしょうか。神に対しても、互いに対しても、自分の魂に対しても軽薄な世代です。実際、あなたがたのうちで、一週間のうちにただ一時間でも、ひとりで祈って過ごす人が、なんと少ないことでしょう！ ふだんのふるまいの中で、少しでも神のことを考える人が、なんと少ないことでしょう！ あなたがたのうちのだれが、御霊の働き、人の魂のうちになされる御霊の超自然的な働きを、少しでも知っているでしょうか。ときおり教会で聞くのを別にすれば、聖霊についての話に、あなたがたは耐えられるでしょうか。だれかがそういう話を始めたら、それは偽善か熱狂かのどちらかだと、決めてかかるのではありませんか。全能の主なる神の名によって、お尋ねします。あなたがたは、何の宗教を信じているのですか。あなたがたは、キリスト教の話にさえ耐えられず、耐えようともしません。ああ、兄弟たちよ、これがなんというキリスト教の町でしょうか！「主よ、今はあなたが御手を下される時です」（詩篇一一九・一二六）。

（一一） 実際、キリスト教が、聖書的キリスト教が、再びこの地の宗教となる見込みは、どれほどあるでしょうか。いや、人間的な言い方をすれば、その可能性は、どれほどあるでしょうか。私たちのうちのあらゆる身分の人々が、「聖霊に満たされ」た者として語り、生きるようになる可能性が、どれほどあるでしょうか。このキリスト教は、だれによって回復されるのでしょうか。あなたがたのうちの、権威ある方々によってでしょうか。では、あなたがたは、これが聖書的キリスト教だと確信しているでしょうか。それが回復されることを願っているでしょうか。それを回復する器となれるなら、財産も自由もいのちも、「少しも惜しいとは思わない」でしょうか（使徒二〇・二四）。けれども、あなたがたにこの願いがあるとしても、その結果を生むのにふさわしい力を、だれが持って

いるでしょうか。あなたがたのうちのある人々は、何度か弱々しい試みをしたかもしれません。けれども、その成果はなんと小さかったことでしょう！　それでは、キリスト教は、若く、無名で、取るに足りない者たちによって回復されるのでしょうか。あなたがた自身がそれを忍べるかどうか、私にはわかりません。あなたがたのうちのある人々は、こう叫ぶのではないでしょうか。「若者よ、そんなことをするのは、私たちを侮辱することだ」（ルカ一一・四五）。けれども、あなたがたがそのように試される心配はありません。それほどまでに、不義が洪水のように私たちをおおっているのです。それでは、私たちを改めて、「初めの愛」に立ち帰らせるために（黙示録二・四）、神は何をつかわされるのでしょうか。きびしんでしょうか。疫病でしょうか（これらは、罪ある国に神がつかわされる最後の使者です）。それとも、つるぎ、すなわちローマ教の「他国の軍」でしょうか（ヘブル一一・三四）。いいえ、「主よ、むしろ、私たちをあなたの手に陥らせてください。私たちを人の手には陥らせないでください」（サムエル記下二四・一四）。「主よ、お助けください、私たちは死にそうです」（マタイ八・二五）。「私たちを泥の中に沈まぬよう助け出してください」（詩篇六九・一四）。ああ、「私たちに助けを与えて、あだにむかわせてください。人の助けはむなしいのです」（詩篇六〇・一一）。「あなたには、できないことはありません」（マルコ一四・三六）。「あなたの大いなる力により、死に定められた者を守りながらえさせてください」（詩篇七九・一一）。あなたがよいと思われる方法で、私たちを守ってください。「私たちの思いのままにではなく、みこころのままになさってください」（マタイ二六・三九）。

説教五　信仰による義認

「働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められます」（ローマ四・五）

（一）　罪人は、すべての者の主であり審判者である神の前で、どのようにして義とされるのでしょうか。これは、すべての人の子にとって、並々ならず重要な問いです。この問いには、私たちのすべての希望の土台が含まれています。私たちが神と敵対しているかぎり、この世においても永遠においても、まことの平安も、確かな喜びもありえないからです。自分の心が自分を責めているのに、どんな平安がありうるでしょうか。まして、「私たちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じ」の神が責めておられるなら（第一ヨハネ三・二〇）、なおさらです。「神の怒りが」私たちの「上にとどまる」かぎり（ヨハネ三・三六）、この世でも来たるべき世でも、どんな確かな喜びがありうるでしょうか。

（二）　それなのに、この重要な問いは、なんとわずかしか理解されてこなかったことでしょう！　多くの人が、これについて、なんと混乱した考えを抱いてきたことでしょう。実際、混乱しているだけではありません。しばしば、まったくの誤りです。光がやみに反するように、真理に反しています。神の託宣とも、信仰の類比の全体とも、まったく相いれない考えです。こうして彼らは、土台そのものについて誤っているので、その上に建てることなどできませんでした。少なくとも、「金、銀、宝石」で建てることはできませんでした。それらは、火で「ためす」ときにも耐えたはずです。彼らが建てたのは、「草」や「わら」だけでした（第一コリント三・一二～一三）。それは神に喜ばれず、人の益にもなりません。

（三）　この主題は、きわめて重要です。私は、自分にできるかぎり、その重要さにふさわしく語りたいと思います。また、真理を誠実に求める人々を、「空論」や「言葉の争い」から守りたいと思います（第一テモテ一・六、六・四）。すでに多くの人がそれによって陥った思いの混乱を、晴らしたいと思います。そして、この大いなる「信心の奥義」について（第一テモテ三・一六）、正しく的確な理解を与えたいと思います。そのために、次のことを示すよう努めます。

第一に、この義認の教理全体の、一般的な土台は何か。
第二に、義認とは何か。
第三に、義とされるのはだれか。
第四に、どのような条件で義とされるのか。

【一】　義認の教理全体の土台

まず第一に、この義認の教理全体の、一般的な土台が何かを示します。

（一）　人は、神のかたちに造られました（創世記一・二七）。人を造られた方が聖であるように、人も聖でした（第一ペテロ一・一六）。万物の造り主が慈悲深いように、人も慈悲深い者でした（ルカ六・三六）。天の父が完全であられるように、人も完全でした（マタイ五・四八）。神が愛であるように、人も愛のうちに住み、そうして神のうちに住んでいました。神もまた、人のうちに住んでおられました（第一ヨハネ四・一六）。神は人を、「ご自身の永遠性のかたち」として造られました（知恵の書二・二三）。栄光の神を映す、朽ちることのない肖像として造られたのです。ですから人は、神がきよいように、罪のあらゆる汚れからきよい者でした。人は、どんな種類、どんな程度の悪も知りませんでした。内にも外にも罪がなく、汚れのない者でした。人は、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる」自分の「神を愛し」ていました（マルコ一二・三〇）。

（二）　このように正しく完全な人に、神は完全な律法を与えられました。そして、それに完全に、余すところなく従うことを求められました。神は、あらゆる点で完全に従うことを求められました。しかも、少しも途切れることなく従うことをです。人が「生きた者となった」瞬間から（創世記二・七）、その試みの

期間が終わるときまでです。少しでも足りないことは、容赦されませんでした。実際、その必要もありませんでした。人は、課せられた務めを十分に果たすことができたからです。あらゆる良い言葉とわざのために、「完全にととのえられ」ていたからです（第二テモテ三・一七）。

（三）　人の心には、愛の律法が余すところなく書き記されていました（おそらく人は、この律法に直接背いて罪を犯すことはできなかったでしょう）。神は、その主権的な知恵によって、これに特別に命じられた掟を一つ加えるのがよいとされました。「園の中央にある木の実は、取って食べてはなりません」（創世記三・三）。そして、これに罰を添えられました。「それを取って食べるその日に、きっと死ぬでしょう」（創世記二・一七）。

（四）　これが、楽園での人の状態でした。人は、神の価なしの、受けるに値しない愛によって、聖であり、幸いでした。神を知り、神を愛し、神を喜んでいました。これこそ、実質において、永遠のいのちです（ヨハネ一七・三）。人は、すべてのことで神に従い続けるなら、この愛のいのちに永遠にとどまるはずでした。けれども、どれか一つでも神に背くなら、すべてを失うはずでした。神は言われました。「その日に、きっと死ぬでしょう」（創世記二・一七）。

（五）　人は、実際に神に背きました。「食べるな」と神が「命じた木から取って食べ」たのです（創世記三・一七）。そしてその日に、人は神の正しいさばきによって、罪に定められました。またそのとき、前もって警告されていた宣告が、人の上に実行され始めました。その実を味わった瞬間に、人は死んだのです。人の魂は死にました。神から切り離されたのです。魂は、神から切り離されると、もはやいのちを持ちません。からだが魂から切り離されると、いのちを持たないのと同じです。人のからだもまた、朽ちるもの、死ぬものとなりました。そのため、死はそのとき、からだをも捕らえたのです。こうして人は、すでに霊において死に、神に対して死に、罪のうちに死んでいたので、永遠の死へと急いでいました。それは、「からだも魂も」「滅ぼ」されることです（マタイ一〇・二八）。「消えない火の中」で滅ぼされるのです（マルコ九・四三）。

（六）　こうして、「ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいって」きました。「こうして」、「死が全人類にはいり込んだ」のです（ローマ五・一二）。全人類は、私たちすべての共通の父であり代表者であったその人のうちに、含まれていたからです。このように、「ひとりの罪過のために」（ローマ五・一五）、すべての人が死んでいます。神に対して死に、罪のうちに死んでいます。やがて崩れ去る、朽ちるべき、死ぬべきからだに住み、永遠の死の宣告の下にあります。「ひとりの人の不従順によって」、すべての人が「罪人とされた」ように（ローマ五・一九）、そのひとりの罪過によって、「すべての人が罪に定められた」のです（ローマ五・一八）。

（七）　私たちは、そうです、全人類は、このような状態にありました。そのとき、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださいました」。それは、私たちが「滅びないで、永遠のいのちを得るため」でした（ヨハネ三・一六）。「時の満ちるに及んで」（ガラテヤ四・四）、御子は人となられました。人類のもう一人の共通のかしら、全人類の第二の共通の親、また代表者となられたのです。そのような方として、御子は「われわれの悲しみをにな」われました（イザヤ五三・四）。「主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれ」たのです（イザヤ五三・六）。そのとき御子は、「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれ」ました（イザヤ五三・五）。御子は「自分を、とがの供え物と」されました（イザヤ五三・一〇）。とがある者のために、その血を注ぎ出されました。「十字架にかかって、私たちの罪をご自分の身に負われ」ました。「その傷によって」、私たちが「いやされ」るためです（第一ペテロ二・二四）。そして、ただ一度ささげられた、ご自身という一つの供え物によって、御子は「私とすべての人とをあがなわれ」ました（祈祷書「教理問答」）。それによって、「全世界の罪のために、完全で、欠けるところのない、十分な犠牲と償いとをささげ」られたのです（祈祷書「聖餐式」）。

（八）　神の御子は、「すべての人のために死を味わわれ」ました（ヘブル二・九）。このことのゆえに、神はいま、「世をご自分に和解させ」、以前の「罪過の責任を」世に「負わせることを」されません（第二コリント五・一九）。こうして、「ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及」んだのです（ローマ五・一八）。ですから神はいま、その愛する御子のゆえに、ただ一つの条件で、

次のことをしてくださいます。御子が私たちのためにしてくださったこと、苦しんでくださったことのゆえにです。その条件を果たす力も、神ご自身が与えてくださいます。神は、私たちの罪に当然下されるべき罰を免じてくださいます。私たちを、再びご自分の恵みのうちに置いてくださいます。そして、死んでいた私たちの魂を、霊のいのちに回復してくださいます。それは、永遠のいのちの保証です。

（九）ですから、これが、義認の教理全体の一般的な土台です。最初のアダムは、私たちすべての父であっただけでなく、代表者でもありました。その罪によって、私たちはみな、神の恵みを受けられなくなりました。みな「怒りの子」となりました（エペソ二・三）。使徒の言い方によれば、「すべての人が罪に定められた」のです（ローマ五・一八）。それと同じように、第二のアダムが、私たちすべての代表者として、罪のための犠牲をささげられました。そのため神は、全世界に新しい契約を与えるほどに、世と和解されたのです。その契約の明白な条件がひとたび果たされるなら、私たちは、もはや「罪に定められることがない」のです（ローマ八・一）。むしろ、私たちは「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされ」るのです（ローマ三・二四）。

【二】義認とは何か

（一）けれども、「義とされる」とはどういうことでしょうか。「義認」とは何でしょうか。これが、私が示そうと予告した第二のことです。すでに述べたことから明らかなように、義認とは、実際に正しく義なる者とされることではありません。それは「聖化」です。聖化は、確かにある程度、義認の直接の実です。けれども、それでも神の別の賜物であり、まったく異なる性質のものです。一方は、神が御子を通して私たちのためにしてくださることです。他方は、神が御霊によって私たちのうちに働いてくださることです。ですから、「義とされる」や「義認」という語が、「聖化」をも含むほど広い意味で使われている例も、まれには見つかるかもしれません。けれども、ふつうの用法では、両者ははっきり区別されています。聖パウロも、霊感を受けたほかの記者たちも、そう区別しています。

（二）また、義認とは私たちを訴えから、特にサタンの訴えから解放することだ、という考えがあります。これは、こじつけの思いつきです。聖書のどんな明白な本文からも、たやすく証明できるものではありません。この事がらについての聖書の説明全体は、上に述べたとおりです。そこには、あの訴える者も、その訴えも、まったく入っていないように見えます。確かに、サタンが人を「訴える者」であり（黙示録一二・一〇）、とりわけそう呼ばれていることは、否定できません。けれども、あの大使徒は、義認についてローマ人にもガラテヤ人にも書き送りました。そのすべての中で、このことに多少なりとも触れているとは、決して見えません。

（三）また、義認とは、律法が私たちに対して起こす訴えから、私たちを解放することだ、という考えもあります。これも、聖書の明白なあかしから証明するよりは、当然のこととして決めてかかるほうが、はるかにたやすいものです。少なくとも、この無理で不自然な言い方が、次のことと少しでも違うことを意味するなら、の話です。すなわち、私たちは神の律法に背き、そのため地獄の刑罰に値する者となりました。けれども神は、義とされた者には、彼らが当然受けるべきであった罰を下されません。

（四）まして義認は、神がご自分の義とする人々について欺かれている、ということでは決してありません。神が、実際にはそうでない者を、そうであると考えておられる、ということではありません。人々を、実際とは違う者と見なしておられる、ということでもありません。義認は、神が物事の本当の性質に反して私たちを判断される、ということでは決してありません。私たちを実際よりもよい者と評価される、ということでもありません。私たちが不義であるのに、義であると信じておられる、ということでもありません。決してそうではありません。全知の神のさばきは、いつも真理に従っています。ほかの人が潔白であり、義であり聖であるからといって、私をそうだと考え、そうだと判断すること。そのようなことは、誤りのない神の知恵と決して両立しません。神が、このようにして私をキリストと混同されることは、ありえません。ダビデやアブラハムと混

同されることがありえないのと、同じです。神から悟りを与えられた人は、だれでも、偏見なしにこのことを考えてみてください。そうすれば、このような義認の考えが、理性とも聖書とも両立しないことに、気づかずにはいられないでしょう。

（五）義認についての、聖書のわかりやすい考えは、赦し、すなわち罪の赦しです。義認とは、父なる神のわざです。神は、御子の血によるあがないの供え物のゆえに、このわざをなさいます。過去に犯された罪を赦して、「神の義」（あるいは、あわれみ）を「示」されるのです（ローマ三・二五）。これが、聖パウロがこの手紙全体を通して示している、無理のない自然な説明です。パウロ自身、とりわけこの章と次の章で、このように説明しています。たとえば、本文から一節おいた次の節で、パウロはこう言います。「不法をゆるされ、罪をおおわれた人たちは、さいわいです。罪を主に認められない人は、さいわいです」（ローマ四・七～八）。神は、義とされた人、すなわち赦された人の「罪を」、その人を罪に定めるために「認め」られることはありません。この世においても、来たるべき世においても、神はその罪のゆえにその人を罪に定められません。その人の罪、思いと言葉と行いにおける過去のすべての罪は、おおわれ、消し去られています。それらの罪は、まるでなかったかのように、思い出されることも、その人に不利に持ち出されることもありません。神は、その罪人が当然受けるべきであった苦しみを、その人に下されません。神の愛する御子が、その人のために苦しまれたからです。私たちは、「愛する御子によって」受け入れられ（エペソ一・六）、御子の「血によって」神と「和解させ」られます（コロサイ一・二〇）。そのときから、神は私たちを愛し、祝福し、私たちの益のために見守ってくださいます。まるで、私たちが一度も罪を犯したことがないかのようにです。

確かに使徒は、ある箇所で、この語の意味をずっと広げているように見えます。そこで使徒はこう言っています。「律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるのです」（ローマ二・一三）。ここで使徒は、私たちの義認を、大いなる日の判決に結びつけているようです。私たちの主ご自身も、明らかにそうしておられます。主はこう言われます。「あなたは、自分の言葉によって義とされます」（マタイ一二・三七）。主はこれによって、「審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならない」ことを示しておられるのです（マタイ一二・三六）。けれども、聖パウロがこの語をそのような遠い意味で使っている例を、ほかに挙げることは、おそらくほとんどできないでしょう。パウロの書いたものの全体の趣旨を見れば、そう使っていないことは明らかです。いま私たちの前にある本文では、なおさらそうです。この本文は、すでに「走るべき行程を走りつく」した人々について語っているのではありません（第二テモテ四・七）。いままさに「出発」したばかりの人々、自分の「参加すべき競走を」走り始めたばかりの人々について語っているのです（ヘブル一二・一）。これは否定できません。

【三】義とされるのはだれか

（一）さて、考えるべき第三のことは、こうです。義とされるのはだれでしょうか。使徒は、はっきりと答えています。不信心な者です。「彼」（すなわち神）は、「不信心な者を義とする」かたです（ローマ四・五）。あらゆる種類、あらゆる程度の不信心な者であり、しかも不信心な者だけです。「正しい人」が「悔改めを必要としない」ように（ルカ一五・七）、その人は赦しも必要としません。赦しを必要とするのは、罪人だけです。赦されうるのは、罪だけです。ですから、赦しは直接に罪にかかわります。この点では、ほかの何ものにもかかわりません。赦してくださる神が「あわれ」まれるのは、私たちの「不義」です。神が「もはや」「思い出すことはしない」と言われるのは、私たちの「罪」です（ヘブル八・一二）。

（二）ところが、このことをまったく考えていないように見える人々がいます。人は義とされる前に、聖化されていなければならない、すなわち聖でなければならない、と激しく主張する人々です。とりわけ、あらゆる点での聖性、あるいは従順が義認に先立たなければならない、と断言する人々がそうです。（ただし、終わりの日の義認のことを言っているのなら、話は別です。それは、いまの問題とはまったく関係がありません。）それどころか、この想定そのものが、まったく不可能です。神への愛のないところに、聖性はありません。そして、神

が私たちを愛してくださっていると感じることからでなければ、神への愛は生まれないからです。それだけでなく、この想定は、ひどく、本質的に不合理で、自己矛盾しています。赦されるのは、聖徒ではなく罪人であり、しかも罪人として赦されるからです。神が義とされるのは、信心深い者ではなく、不信心な者です。すでに聖である者ではなく、聖でない者です。神がどんな条件でこれをなさるのかは、まもなく考えます。けれども、それが何であるにせよ、聖性ではありえません。それを聖性だと主張するなら、「神の小羊」はすでに取り除かれていた罪だけを「取り除く」、と言うことになります（ヨハネ一・二九）。

（三）では、よい羊飼は、すでに見つかっている者だけを、尋ね出して救われるのでしょうか。いいえ。主は「失われたものを尋ね出して救う」方です（ルカ一九・一〇）。主は、赦しのあわれみを必要とする者を赦されます。主は、あらゆる種類、あらゆる程度の罪人を、罪の罪責から（そして同時に、罪の力から）救われます。それまでまったく不信心であった人々です。そのうちに「父の愛」がなかった人々です（第一ヨハネ二・一五）。ですから、そのうちには「善なるものが宿っていない」人々です（ローマ七・一八）。よい気質、まことにクリスチャンらしい気質は何一つなく、あるのは悪い、忌まわしい気質ばかりでした。高ぶり、怒り、世への愛です。これらは、「神に敵する」「肉の思い」の、まぎれもない実です（ローマ八・七）。

（四）病人、すなわち罪の重荷に耐えられない人々こそ、医者を必要とします。罪責を負い、神の怒りの下でうめく人々こそ、赦しを必要とします。この人々は、思いと言葉と行いにおけるすべての不信心のゆえに、「すでにさばかれて」います（ヨハネ三・一八）。神によってだけでなく、千人の証人によるかのように、自分の良心によってもさばかれています。この人々は、「不信心な者を義とする」方を求めて、大声で叫びます。その方は、イエスによるあがないによって（ローマ三・二四）、不信心な者を、「働き」のない者を義とされるのです（ローマ四・五）。働きがないとは、義とされる前には、良いことを何一つ、本当に徳のあることも聖なることも行わない、ということです。行うのは、「いつも悪い事ばかり」です（創世記六・五）。神の愛がその心に「注がれる」までは（ローマ五・五）、その人の心は、必然的に、本質的に悪いからです。木が悪いうちは、実も悪いのです。「悪い木が良い実をならせることはできない」からです（マタイ七・一八）。

（五）こう反論されるかもしれません。「いや、人は義とされる前にも、飢えている人に食べさせたり、裸の人に着せたりできる。そして、これは良きわざではないか」。答えはたやすいことです。確かに人は、義とされる前でも、これらのことができます。そして、これらはある意味で「良きわざ」です。それは「良いことであって、人々の益とな」ります（テトス三・八）。けれども、だからといって、それが厳密な意味でそれ自体よいものであるとか、神の目によいものであるとかいうことにはなりません。まことの「良きわざ」はすべて（私たちの教会の言葉を借りれば）、「義認のあとに続く」ものです。それは「まことの生きた信仰から」「生じる」ものです。だからこそ、よいものであり、「キリストにあって神に受け入れられる」のです（三十九箇条第一二条）。同じ理由によって、「義認の前になされたわざ」は、クリスチャン的な意味では、どれも「よくありません」。「それはイエス・キリストを信じる信仰から生じるものではない」からです（もっとも、神についてのある種の信仰からは生じるかもしれません）。「いや、むしろ、それは神が望み、命じられたとおりに行われていません。ですから、罪の性質を持っていることを、私たちは疑いません」（三十九箇条第一三条）。ある人々には、どんなに奇妙に見えようともです。

（六）これを疑う人々は、ここに挙げられている重い理由を、よく考えていないのかもしれません。義認の前になされたわざは、なぜどれも、本当の意味で、正しい意味でよいものでありえないのか、という理由です。その論証は、明らかに次のとおりです。

神が望み、命じられたとおりに行われていないわざは、どれもよくありません。

ところが、義認の前になされたわざは、どれも、神が望み、命じられたとおりに行われていません。

ゆえに、義認の前になされたわざは、どれもよくありません。

第一の命題は、自明です。第二の命題は、義認の前になされたわざはどれも、神が望み、命じられたとおりに行われていない、ということです。これも同じよ

うに明白で、否定できないことがわかるでしょう。次のことを考えさえすればよいのです。神は、私たちの「いっさいのことを、愛をもって」（エン・アガペー）「行」うように望み、命じておられます（第一コリント一六・一四）。愛をもって、すなわち、すべての人への愛を生み出す、神への愛をもってです。けれども、「父の愛」（私たちの父としての神への愛）が私たちのうちにない間は（第一ヨハネ二・一五）、私たちのわざは、どれもこの愛をもって行うことができません。そして、この愛は、私たちが「子たる身分を授ける霊」を受けるまでは（ローマ八・一五）、私たちのうちにありえません。その霊は、私たちの「心の中に」、「『アバ、父よ』と呼ぶ」霊です（ガラテヤ四・六）。ですから、もし神が「不信心な者を義とする」ことをされず、（この意味で）「働き」のない者を義とされないとしましょう。そうであれば、「キリストの死はむだであった」ことになります（ガラテヤ二・二一）。そうなれば、キリストが死なれたにもかかわらず、「生ける者はひとりも」「義とされない」のです（詩篇一四三・二）。

【四】 どのような条件で義とされるのか

（一） では、まったく「不信心」で、そのときまで「働き」がない人は、どのような条件で義とされるのでしょうか。ただ一つの条件によってです。それは信仰です。その人は、「不信心な者を義とするかたを信じる」のです（ローマ四・五）。そして、「彼を信じる者は、さばかれません」（ヨハネ三・一八）。そうです、その人は「死からいのちに移っている」のです（ヨハネ五・二四）。「それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義」（あるいは、あわれみ）「であって、すべて信じる人に与えられるものです」（ローマ三・二二）。「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受けるべきあがないの供え物とされました」（ローマ三・二五）。「こうして、神みずからが義となり」、（その義と矛盾することなく）「さらに、イエスを信じる者を義とされるのです」（ローマ三・二六）。「私たちは、こう思います。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのです」（ローマ三・二八）。律法の行いによるのではない、すなわち、それに先立って道徳律法に従うことによるのではありません。実際、人はそのときまで、道徳律法に従うことができなかったのです。ここで言われているのが道徳律法であり、道徳律法だけであることは、続く言葉から明らかです。「すると、信仰のゆえに、私たちは律法を無効にするのでしょうか。断じてそうではありません。かえって、それによって律法を確立するのです」（ローマ三・三一）。私たちは、信仰によってどんな律法を確立するのでしょうか。儀式の律法ではありません。モーセの祭儀の律法ではありません。決してそうではありません。愛の大いなる不変の律法、神と隣人とを愛する聖なる愛の律法です。

（二） 信仰とは、一般的に言えば、神から与えられた超自然的な「エレンコス」、すなわち「見えない事がら」についての「証拠」あるいは「確信」です（ヘブル一一・一）。見えない事がらとは、過去のもの、未来のもの、あるいは霊的なものであるため、からだの感覚では見いだせないもののことです。義とする信仰には、「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」たという（第二コリント五・一九）、神から与えられた証拠、あるいは確信が含まれます。それだけではありません。キリストがほかならぬ私の罪のために死なれ、「私を愛し、私のためにご自身をささげられた」という（ガラテヤ二・二〇）、確かな信頼と確信も含まれるのです。罪人がこのように信じるなら、それがいつであっても、神はその不信心な者を義とされます。幼いころでも、働き盛りのときでも、年老いて白髪になったときでもです。神は、御子のゆえに、その人を赦し、罪から解き放ってくださいます。その人のうちには、それまで、よいものは何一つなかったのです。確かに神は、それより前に、その人に悔い改めを与えておられました。けれども、その悔い改めとは、あらゆる善が欠けていること、あらゆる悪が宿っていることを、深く感じることにほかなりませんでした。その人は、キリストを通して初めて神を信じたときから、善を持ち、善を行うようになります。その善は、どんなものであれ、信仰が「見いだす」のではありません。信仰が「もたらす」のです。これは、信仰の実です。まず木が良く、それから実も良くなるのです。

（三） この信仰の性質を、私たちの教会の言葉よりもうまく言い表すことは、私にはできません。「救いの唯一の手だては」（義認はその一部です）、「信仰

です。それは、次のことを確かに信頼し、確信することです。神は、キリストの死と受難の功績のゆえに、私たちの罪を赦してくださったし、これからも赦してくださいます。私たちを再びご自分の恵みのうちに受け入れてくださいました。けれども、ここで私たちは、移ろいやすい、揺れ動く信仰によって、神の前でどっちつかずに迷うことのないよう、気をつけなければなりません。ペテロは、水の上を歩いてキリストのもとへ行こうとしたとき、信仰がくじけたので、おぼれかけました。それと同じように、私たちも、揺れ動いたり疑ったりし始めるなら、ペテロのように沈んでしまうおそれがあります。ただし、水の中にではなく、地獄の火の底知れぬ穴の中にです」（説教集「受難についての第二の説教」）。

「ですから、確かで揺るがない信仰を持ちなさい。キリストの死が全世界のために有効である、と信じるだけではありません。キリストがほかならぬあなたのために、完全で十分な犠牲をささげ、ほかならぬあなたの罪を完全にきよめてくださった、と信じるのです。そうすれば、あなたは使徒と共に、キリストは私を愛し、私のためにご自身をささげられた、と言うことができます。これこそ、キリストをあなた自身のものとし、その功績をあなた自身に当てはめることだからです」（説教集「聖餐についての説教」第一部）。

（四）私は、この信仰が義認の要件、すなわち「義認の条件」であると断言します。それによって私が言いたいのは、第一に、信仰なしには義認はない、ということです。「信じない者は、すでにさばかれています」（ヨハネ三・一八）。そして、信じないでいるかぎり、そのさばきは取り除かれません。むしろ、「神の怒りがその上にとどまる」のです（ヨハネ三・三六）。「救いうる名は」、ナザレのイエスの名を「別にしては、天下のだれにも与えられていない」のです（使徒四・一二）。罪に定められた罪人を罪の罪責から救うことのできる功績も、このイエスの功績のほかにありません。それと同じように、イエスの功績にあずかる道も、「イエスの名」を「信じる信仰」によるほかにありません（使徒三・一六）。ですから、この信仰がないかぎり、私たちは「約束されたいろいろの契約に縁が」ありません。「イスラエルの国籍がなく」、「この世の中で」「神もない者」なのです（エペソ二・一二）。人が（いわゆる）徳をどれほど持っていても、（そう見なされている）良きわざをどれほど行っても、それは何の益にもなりません。ここで私が言うのは、福音が宣べ伝えられている人々のことです。「外の人たちをさばくのは、私のすることでしょうか」（第一コリント五・一二）。その人は、イエスを信じるまでは、依然として「怒りの子」であり（エペソ二・三）、依然として「のろいの下に」あります（ガラテヤ三・一〇）。

（五）ですから、信仰は義認の「必要な」条件です。そうです、義認の「唯一必要な」条件です。これが、注意深く心にとめるべき第二の点です。信仰は「神の賜物」です（エペソ二・八）。神が、「働き」のない「不信心な者」に信仰を与えられる、まさにその瞬間に、その人の「信仰が義と認められる」のです（ローマ四・五）。その人には、それより前には、義がまったくありません。消極的な義、すなわち罪のなさすらありません。けれども、その人が信じる、まさにその瞬間に、「その信仰が義と認められる」のです（ローマ四・五）。といっても（前に述べたように）、神が、その人を実際とは違う者だと考えておられるのではありません。そうではなく、神は「私たちの罪のために」キリストを「罪とされ」ました（第二コリント五・二一）。すなわち、キリストを罪人として扱い、私たちの罪のゆえにキリストを罰されました。それと同じように、私たちがキリストを信じたときから、神は私たちを義と見なしてくださるのです。すなわち、神は私たちの罪のゆえに私たちを罰されません。そうです、私たちを、罪責のない者、義なる者であるかのように扱ってくださるのです。

（六）「信仰は義認の『唯一の条件』である」という命題に、同意しにくいと感じる人がいるなら、それはきっと、この命題を理解していないからです。私たちがこれによって言いたいのは、次のことです。信仰は、それなしにはだれも義とされない、ただ一つのものです。赦しのために、直接に、欠くことができず、絶対に必要な、ただ一つのものです。一方で、人がたとえ信仰のほかのすべてを持っていても、信仰がなければ、義とされることはできません。他方で、たとえほかのすべてを欠いていても、信仰があれば、義とされないことはありえません。たとえば、どんな種類、どんな程度でもよいので、ひとりの罪人を思い浮かべてください。その人は、自分がまったく不信心であることを、心の底から感じています。善を思うことも、語ることも、行うこともまったくできないこと、地

獄の火にまったくふさわしい者であることを感じています。さて、この罪人が、助けもなく望みもないまま、キリストにある神のあわれみに、自分をまったくゆだねるとしましょう。実際、神の恵みによらなければ、そうすることはできません。その人がその瞬間に赦されることを、だれが疑えるでしょうか。その罪人が義とされる前に、何かそれ以上のものが「欠くことができず必要」だと、だれが断言するでしょうか。

さて、世の初めから、このような例が一つでもあったとしましょう（実際、そういう例は、幾千万とあったのではないでしょうか。いまもあるのではないでしょうか）。そうであれば、信仰が、上に述べた意味で、義認の唯一の条件であることは、明らかです。

（七）私たちは、あわれな、罪ある、罪深い虫けらです。私たちが受けている祝福は、どんなものであれ、恵みによって、ただ好意によって受けているのです。当然の支払いとして受けているのではありません（ローマ四・四）。舌を冷やす一滴の水から、永遠における計り知れない栄光の富に至るまで、そうです。このような者が、神に向かって、神のなさることの理由を問うのは、ふさわしくありません。「ご自分のなさることについて、だれにも説明をされない」方を（ヨブ三三・一三）問いただし、神にこう詰め寄るのは、ふさわしくありません。「なぜ、あなたは信仰を、義認の条件、唯一の条件とされたのか。なぜ、『信じる者は』、そしてその者だけが、『救われる』と定められたのか（マルコ一六・一六）」。これこそ、聖パウロがこの手紙の第九章で強く主張している点です。すなわち、赦しと受け入れの条件は、私たちによるのではなく、「召したかたによって」決まるのでなければならない、ということです（ローマ九・一二）。神が、私たちの思いによらず、ご自分のみこころのままに、ご自分の条件を定められても、「神の側に不正がある」のではありません（ローマ九・一四）。神は正当にこう言うことがおできになります。「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみます」（ローマ九・一五）。すなわち、イエスを信じる者をあわれむ、ということです。受け入れられるための条件を選ぶことは、「人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによる」のです（ローマ九・一六）。その神は、ご自分の価なしの愛、受けるに値しない者へのいつくしみによるのでなければ、だれをも受け入れられません。「だから、神はそのあわれもうと思う者をあわれみ」ます。すなわち、ご自分の愛する御子を信じる者をあわれまれます。そして、「かたくなにしようと思う者を」、すなわち信じない者を、「かたくなになさる」のです（ローマ九・一八）。つまり、ついには、その心のかたくなさのままに放っておかれるのです。

（八）けれども、神が義認の条件を「主イエス・キリストを信じるなら、あなたは救われます」と定められた理由の一つは（使徒一六・三一）、「高ぶりを人から除」くためだったと（ヨブ三三・一七）、へりくだって考えてよいでしょう。高ぶりは、すでに神の御使たちさえも滅ぼし、「天の星の三分の一」を投げ落としていました（黙示録一二・四）。また、誘惑する者は、あなたがたは「神のように」なると言いました（創世記三・五）。そのとき、アダムが自分の堅固さを失い、罪と死とを世にもたらしたのも、大部分は高ぶりのためでした。ですから神は、アダムとそのすべての子孫のために、彼らを本当にへりくだらせ、ちりにまで低くするような和解の条件を定められました。それは、神にふさわしい知恵の現れでした。そして、信仰こそ、そのような条件です。信仰は、とりわけこの目的にかなっています。この信仰によって神に近づく者は、ただ自分の悪だけに、自分の罪責と無力さだけに、目を注がなければならないからです。自分のうちにあると思われる善にも、どんな徳や義にも、少しも目を向けてはなりません。その人は、内側も外側も「ただの罪人」として来なければなりません。自分で自分を滅ぼし、自分で自分を罪に定めた者として来るのです。神のもとに携えて行くのは、不信心だけです。自分のものとして申し立てるのは、罪と悲惨だけです。その人の「口がふさがれ」、神の「前に」まったく「罪ある者」として立つとき（ローマ三・一九）、そのようにして初めて、そのようにしてだけ、その人は「イエスを仰ぎ見」ることができます（ヘブル一二・二）。自分の「罪のための」、完全で唯一の「あがないの供え物」として仰ぐのです（第一ヨハネ二・二）。このようにしてだけ、その人は「キリストのうちに自分を見いだす」ようになり、「信仰に基く神からの義を受け」ることができるのです（ピリピ三・九）。

（九）　この言葉を聞き、あるいは読んでいる、不信心なあなたよ！　卑しく、無力で、みじめな罪人よ！　私は、「万民の審判者なる神」の前で（ヘブル一二・二三）、あなたに命じます。あなたのすべての不信心を携えたまま、まっすぐに神のもとへ行きなさい。多かれ少なかれ自分の義を申し立てて、自分の魂を滅ぼすことのないよう、気をつけなさい。まったく不信心な者として、罪ある者、失われた者、滅びた者として、地獄に値し、地獄に落ちかけている者として行きなさい。そうすれば、あなたは神の前に恵みを得、神が不信心な者を義とされることを知るでしょう。そのような者として、すなわち破滅した、無力な、罪に定められた罪人として、あなたは「そそがれた血」のもとへ導かれます（ヘブル一二・二四）。こうして、「イエスを仰ぎ見」なさい（ヘブル一二・二）。そこに、あなたの「罪を取り除く神の小羊」がおられます（ヨハネ一・二九）。わざを申し立ててはなりません。自分の義を申し立ててはなりません！　謙遜も、悔恨も、誠実も申し立ててはなりません！　決していけません。それこそ、まさに、あなたを「あがなってくださった主を否定」することです（第二ペテロ二・一）。そうではありません。ただ「契約の血」だけを申し立てなさい（ヘブル一〇・二九）。あなたの高慢な、かたくなな、罪深い魂のために支払われた、あがないの代価だけを申し立てなさい。いま、自分の内側と外側の不信心を見て、感じているあなたは、だれでしょうか。「あなたがその人です」（サムエル記下一二・七）。私は、私の主のために、あなたが欲しいのです！　信仰による神の子として、ほかならぬあなたを、主のものとして求めます！　「主がお入り用なのです」（マタイ二一・三）。自分は地獄にこそふさわしいと感じているあなたこそ、神の栄光を現すのにふさわしいのです。それは、神の価なしの恵みの栄光です。不信心な者を、働きのない者を義とする恵みの栄光です。ああ、早く来なさい！　「主イエスを信じなさい」（使徒一六・三一）。そうすれば、あなたも、ほかならぬあなたも、神と和解させられるのです。

説教六　信仰による義

「モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています。しかし、信仰による義は、こう言っています。『あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな』。それは、キリストを引き降ろすことです。また、『だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな』。それは、キリストを死人の中から引き上げることです。では、なんと言っているでしょうか。『言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある』。この言葉とは、私たちが宣べ伝えている信仰の言葉です」（ローマ一〇・五～八）

（一）使徒はここで、モーセによって与えられた契約を、キリストによって与えられた契約と対立させているのではありません。もし私たちがそう考えたことがあるなら、それは次のことに気づかなかったからです。この言葉は、前半だけでなく後半も、モーセ自身がイスラエルの民に語ったものです。しかも、当時の契約について語ったものです（申命記三〇・一一、一二、一四）。聖パウロがここで対立させているのは、恵みの契約と行いの契約です。恵みの契約は、神がキリストを通して、あらゆる時代の人々と結ばれたものです。ユダヤ人の時代より前にも、その時代にも、また神が肉において現れて以来も、そうです。行いの契約は、アダムが楽園にいたときに、アダムと結ばれたものです。ところが、一般には、これが、神が人と結ばれた唯一の契約だと考えられていました。使徒がここで書いているユダヤ人たちは、特にそう考えていました。

（二）使徒がこの章の初めで、深い愛情をこめて語っているのは、この人々のことです。「私の心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることはあかしますが、その熱心は深い知識によるものではありません。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからです」（ローマ一〇・一～三）。ここで「神の義」とは、ただ神の恵みとあわれみから流れ出る義認のことです。神は、愛する御子を通して、イエスにあるあがないによって、私たちの罪を価なしに赦してくださるのです。「自分の義」とは、「不信心な者を義とするかた」を信じる前の（ローマ四・五）、自分の聖性のことです。彼らは、それを赦しと受け入れの根拠にしようとしました。そのため彼らは、生き方を誤って、死を招いているのです。

（三）彼らは、「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられた」ことを知りませんでした（ローマ一〇・四）。キリストは、ただ一度ささげられたご自身という供え物によって、最初の律法、すなわち最初の契約を終わらせられたのです。この契約は、実は神がモーセに与えられたものではなく、罪のない状態にあったアダムに与えられたものです。その厳格な趣旨は、少しも割り引かれることなく、「これを行え、そして生きよ」というものでした。そして同時に、キリストは、あのよりすぐれた契約を、私たちのために買い取ってくださいました。「信じよ、そして生きよ」という契約です。信じなさい、そうすれば、あなたは救われます。今、救われるのです。罪の罪責からも、罪の力からも救われ、したがって、罪の報酬からも救われるのです。

（四）そして今も、同じように知らない人が、なんと多いことでしょう。キリストの名で呼ばれている人々の中にさえ、多くいるのです。今も「神に対して熱心」でありながら、その熱心が「深い知識によるものではない」人が（ローマ一〇・二）、なんと多いことでしょう。彼らは今なお、赦しと受け入れの根拠として、「自分の義を立てようと努め」ています。そのため、「神の義に従」うことを、激しく拒んでいるのです（ローマ一〇・三）。兄弟たちよ、確かに、私の心の願い、あなたがたのために神にささげる祈は、あなたがたが救われることです（ローマ一〇・一）。そこで、この大きなつまずきの石を、あなたがたの道から取り除くために、次のことを示すよう努めます。

第一に、律法による義とは何か、また「信仰による義」とは何か。

第二に、律法の義に頼ることの愚かさと、信仰による義に従うことの知恵。

【一】 律法による義と信仰による義

（一） まず第一に、律法による義は、こう言っています。「もし人が、これを行うならば、これによって生きるでしょう」（レビ記一八・五）。これらのことをすべて、絶えず、完全に守り行いなさい。そうすれば、あなたは永遠に生きる、というのです。この律法、すなわちこの契約は（ふつう「行いの契約」と呼ばれます）、神が楽園で人に与えられたものです。人は、聖であり幸いである状態に造られました。この契約は、人がその状態に永遠にとどまる条件として、あらゆる部分で完全な従順を求めました。何一つ欠けたところのない、全き従順です。

（二） この契約は、人が、すべての義を満たすことを求めました。内なる義も外なる義も、消極的な義も積極的な義もです。人は、あらゆる無益な言葉を慎み、あらゆる悪いわざを避けるだけでは足りませんでした。あらゆる情愛、あらゆる願い、あらゆる思いを、神のみこころに従わせなければなりませんでした。人を造られた方が聖であるように、人も、心においても、あらゆるふるまいにおいても、聖であり続けなければなりませんでした（第一ペテロ一・一五）。神がきよくあられるように、心のきよい者でなければなりませんでした（第一ヨハネ三・三）。天の父が完全であられるように、完全でなければなりませんでした（マタイ五・四八）。心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる自分の神を愛さなければなりませんでした（マルコ一二・三〇）。神が人を愛されたように、人も、神の造られたすべての魂を愛さなければなりませんでした。このすべてに及ぶ慈愛によって、人は神のうちに住み（神は愛です）、神も人のうちに住まれるはずでした（第一ヨハネ四・一六）。そして、力をつくして主なる自分の神に仕え、すべてのことにおいて、ひたすら神の栄光を目指すことが求められたのです。

（三） これらが、律法の義の求めたことでした。それを行う人が、それによって生きるためです。けれども、律法の義は、さらに求めました。神へのこの全き従順、この内と外との聖性、心も生活も神のみこころにかなうこと。これらが、程度においても完全であることです。外なる律法についても、内なる律法についても、その一点一画に少しでも足りないところがあれば、割り引きも容赦もまったくありえませんでした。外のことにかかわる戒めをすべて守ったとしても、それで十分ではありませんでした。どの戒めも、力をつくして、最高の度合いで、最も完全な仕方で守らなければならなかったのです。また、あらゆる力、あらゆる能力で神を愛しても、それだけでは、この契約の求めにこたえたことになりませんでした。その一つ一つの力を限りまで用い、魂にできるかぎりのすべてをもって、神を愛さなければならなかったのです。

（四） 律法の義は、もう一つのことを、欠くことのできないものとして求めました。このすべてにわたる従順、心と生活とのこの完全な聖性が、まったく途切れずに続くことです。それは、神が人を造り、その鼻にいのちの息を吹き入れられた瞬間から始まります（創世記二・七）。そして、試みの日々が終わり、人が永遠のいのちに堅く立てられるときまで、少しも休まず続かなければなりませんでした。

（五） ですから、律法による義は、こう言っています。「神の人よ、愛のうちに、あなたが造られた神のかたちのうちに、しっかりと立ちなさい。いのちにとどまりたいと思うなら、いましめを守りなさい。いましめは今、あなたの心に書き記されています。心をつくして、主なるあなたの神を愛しなさい。神が造られたすべての魂を、自分のように愛しなさい。神のほかに、何も望んではなりません。あらゆる思い、あらゆる言葉とわざにおいて、神を目指しなさい。からだや魂のただ一つの動きにおいても、神からそれてはなりません。神こそ、あなたの目標であり、上への召しの賞与なのです。あなたのうちなるすべてのものに、その聖なるみ名をほめさせなさい（詩篇一〇三・一）。あなたの魂のあらゆる力、あらゆる能力に、あらゆる種類、あらゆる程度において、ほめさせなさい。あなたが存在するあらゆる瞬間に、ほめさせなさい。『そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られます』（ルカ一〇・二八）。あなたの光は輝き、あなたの愛はますます燃え上がります。そしてついに、あなたは天にある神の家に迎え入れられ、世々限りなく神と共に支配するのです」。

（六） 「しかし、信仰による義は、こう言っています。『あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな』。それは、キリストを引き降ろすことです」（ローマ一〇・六）。これは、天に上ることが、何か不可能な務めであるか

のように考えるな、ということです。あなたが受け入れられるために、前もって果たすよう神から求められた務めであるかのようにです。「また、『だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな』。それは、キリストを死人の中から引き上げることです」（ローマ一〇・七）。これは、あなたが受け入れられるためには、それがまだなされずに残っているかのように考えるな、ということです。「では、なんと言っているでしょうか。『言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある』。この言葉とは、私たちが宣べ伝えている信仰の言葉です」（ローマ一〇・八）。この言葉の趣旨に従えば、あなたは今、永遠のいのちの相続人として受け入れられることができます。この言葉は、神が今、キリスト・イエスを通して、罪深い人と結ばれた新しい契約なのです。

（七）「信仰による義」とは、義認の条件のことです。神が、そのひとり子の功績ととりなしによって、堕落した人に与えられた条件です。そして、もし私たちが最後までそのうちに耐え忍ぶなら、それは結果として、今の救いと最終的な救いとの条件でもあります。これは、アダムが堕落してまもなく、アダムに部分的に啓示されました。アダムとその子孫に与えられた最初の約束に、含まれていたのです。それは、女のすえが、へびの「かしらを砕」く、という約束です（創世記三・一五）。アブラハムには、天からの神の使によって、もう少しはっきりと啓示されました。使はこう言いました。「主は言われました。『わたしは自分をさして誓います。地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るでしょう』」（創世記二二・一六、一八）。それは、モーセに、ダビデに、そしてその後の預言者たちに、さらに十分に知らされました。そして彼らを通して、それぞれの時代の神の民の多くに知らされました。それでも、この人々の大部分でさえ、それを知らずにいました。それをはっきり理解していた人は、ごくわずかでした。今、キリストは私たちに、「福音によっていのちと不死とを明らかに示され」ました（第二テモテ一・一〇）。けれども、昔のユダヤ人には、それほど明らかには示されていなかったのです。

（八）さて、この契約は、罪深い人に向かって、「罪のない従順を果たせ、そして生きよ」とは言いません。もしそれが条件であれば、キリストが人のためになさったこと、苦しまれたことのすべても、人には何の益にもなりません。いのちを得るために、「天に上」って「キリストを引き降ろす」よう求められると、変わらないでしょう。あるいは、目に見えない世界である「底知れぬ所に下」って、「キリストを死人の中から引き上げる」よう求められるのと、変わらないでしょう（ローマ一〇・六〜七）。この契約は、不可能なことを行うよう求めはしません。（もっとも、この契約の求めることも、ただの人には不可能でしょう。けれども、神の御霊に助けられた人には不可能ではありません。）不可能なことを求めるのは、人間の弱さをあざけることにほかならないでしょう。実際、厳密に言えば、恵みの契約は、私たちの義認のために絶対に欠かせないこととして、何かを行うよう求めることはまったくありません。ただ、信じることだけを求めます。神は、御子のゆえに、また御子のなさったあがないの供え物のゆえに、「働きはなくても」「不信心な者を義とする」かたです。そして、その人の信仰を義と認められます（ローマ四・五）。その神を信じることだけを求めるのです。そのように、アブラハムも「主を信じ」ました。「主はこれを彼の義と認められ」たのです（創世記一五・六）。「そして、アブラハムは割礼というしるしを受けましたが、それは」「信仰によって受けた義の証印」でした。それは、アブラハムが「信じて義とされるに至るすべての人の父とな」るためでした（ローマ四・一一）。「しかし『義と認められた』と書いてあるのは、アブラハムのためだけではなく、私たちのためでもあって、私たちの主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じる私たちも、義と認められるのです。主は、私たちの罪過のために死に渡され、私たちが義とされるために、よみがえらされたのです」（ローマ四・二三〜二五）。「義と認められた」というのは、信仰が義と認められた、ということです。私たちにも、信仰が義と認められます。すなわち、私たちが神に受け入れられるために、信仰が完全な従順の代わりとなるのです。また、「私たちが義とされるために」とは、信じる者に、罪の赦しと、来たるべき第二のいのちとを、確信させるため、ということです。

（九）では、赦しの契約、受けるに値しない者への愛の契約、赦しのあわれみの契約は、何と言っているでしょうか。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなた」は「救われます」（使徒一六・三一）。あなたが信じるその日に、あなたはきっと生きるでしょう。あなたは、神の恵みのうちに回復されます。そし

て、神に喜ばれることのうちに、いのちがあるのです。あなたは、のろいからも、神の怒りからも救われます。あなたは生かされて、罪の死から義のいのちへと移されます。そして、イエスを信じ続けて最後まで耐え忍ぶなら、あなたは決して第二の死を味わいません。むしろ、あなたの主と共に苦しんだ者として、主と共に生き、世々限りなく主と共に支配するのです。

（一〇） さて、「言葉はあなたの近くにあ」ります（ローマ一〇・八）。このいのちの条件は、明白で、やさしく、いつも手の届くところにあります。神の御霊の働きによって、それは「あなたの口にあり、心にある」のです。あなたが「自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じ」、「自分の口で、イエスは主であると告白」する、その瞬間に、「あなたは救われ」ます（ローマ一〇・九）。イエスを、あなたの主、あなたの神と言い表すのです。そのとき、あなたは罪の宣告から救われ、以前の罪の罪責と罰から救われます。そして、生涯の残りのすべての日に、まことの聖性をもって神に仕える力を持つようになります。

（一一） では、「律法による義」と「信仰による義」との違いは何でしょうか。最初の契約、すなわち行いの契約と、第二の契約、すなわち恵みの契約との違いは何でしょうか。本質的で、変わることのない違いは、こうです。一方の契約は、それを与えられる人が、すでに聖であり幸いであることを前提としています。神のかたちに造られ、神の恵みを享受している人です。そして、その人がその状態に、愛と喜び、いのちと不死のうちに、とどまり続けるための条件を定めています。他方の契約は、それを与えられる人が、今は聖でなく不幸であることを前提としています。その人は、神の栄光あるかたちを失い、神の怒りがその上にとどまっています（ヨハネ三・三六）。その魂は、罪によってすでに死んでいます。そして、その罪によって、からだの死へ、さらに永遠の死へと急いでいます。そして、この状態にある人のために、条件を定めています。失った真珠を取り戻し、神の恵みと神のかたちを回復し、魂のうちに神のいのちを取り戻すための条件です。神を知り、神を愛する者に、再びされるための条件です。神を知り、神を愛することこそ、永遠のいのちの始まりなのです。

（一二） また、行いの契約は、完全な人に、神の律法のあらゆる点への、完全で途切れのない従順を求めました。それは、人が神の恵みのうちに、神を知り神を愛することのうちに、聖性と幸いのうちに、とどまり続けるためでした。これに対して、恵みの契約は、人が神の恵みと神のいのちを回復するために、ただ信仰だけを求めます。それは生きた信仰です。神によって、従わなかった者を義とされる方を信じる、生きた信仰です。

（一三） さらにまた、行いの契約は、アダムとそのすべての子らに、自分で代価を支払うことを求めました。その代価と引き換えに、神のこれからのすべての祝福を受けるはずだったのです。けれども、恵みの契約では、私たちには支払うものが何もないので、神は私たちをみな、価なしに「ゆるして」くださいます（ルカ七・四二）。ただ、私たちのために代価を支払ってくださった方を、信じさえすればよいのです。その方は、ご自身を「私たちの罪のための、あがないの供え物」としてくださいました。「全世界の罪のため」の供え物です（第一ヨハネ二・二）。

（一四） このように、最初の契約は、今はすべての人の子から遠く離れたものを求めました。すなわち、罪のない従順です。それは、「罪のうちにみごもられ、罪のうちに生まれた」者からは、遠く離れています（祈祷書「幼児洗礼式」）。これに対して、第二の契約は、すぐ近くにあるものを求めます。あたかも、こう言っているかのようです。「あなたは罪です！　神は愛です！　あなたは罪によって、神の栄光を受けられなくなっています（ローマ三・二三）。けれども、神にはあわれみがあります。ですから、あなたのすべての罪を、赦してくださる神のもとに携えて来なさい。そうすれば、罪は雲のように消え去ります。もしあなたが不信心でなかったら、神があなたを不信心な者として義とされる余地はなかったでしょう。けれども今、『信仰の確信に満たされつつ』近づきなさい（ヘブル一〇・二二）。神が仰せられると、そのようになるのです（詩篇三三・九）。『恐れることはない。ただ信じなさい』（マルコ五・三六）。正しい神ご自身が、イエスを信じる者をすべて義とされるからです」。

【二】 律法による義に頼る愚かさと、信仰による義に従う知恵

（一） これらのことを考えれば、第二に示そうと予告したことを示すのは、たやすいでしょう。すなわち、「律法による義」に頼ることの愚かさと、「信仰による義」に従うことの知恵です。

「律法による義」の条件は、「これを行え、そして生きよ」です。今なおこの義に頼る人々の愚かさは、次のことから十分に明らかになるでしょう。彼らは、出発から間違っています。その最初の一歩が、根本的な誤りです。なぜなら、この契約の条件によって何かの祝福を求めようと考えるには、その前に、自分がこの契約の相手と同じ状態にあると想定しなければならないからです。けれども、この契約は、罪のない状態にあったアダムと結ばれたものです。ですから、これはなんとむなしい想定でしょう。そのような土台の上に立つ建物は、全体がなんと弱いことでしょう。このように砂の上に建てる人々は、なんと愚かなことでしょう。彼らは、一度も考えたことがないように見えます。行いの契約が人に与えられたのは、人が「罪過と罪とによって死んでいた」ときではありません（エペソ二・一）。人が神に対して生きていたとき、罪を知らず、神が聖であるように聖であったときなのです。また、彼らは忘れています。この契約は、ひとたび失われた神の恵みと神のいのちを回復するために定められたものでは、決してありません。ただ、それを保ち、増し加えるためのものでした。それが永遠のいのちにおいて完成するときまでです。

（二） このように「律法による自分の義」を立てようとしている人々は（ピリピ三・九）、律法が欠くことのできないものとして求める従順、あるいは義が、どのようなものかを考えてもいません。それは、あらゆる点で完全で、欠けのないものでなければなりません。そうでなければ、律法の求めにこたえないのです。けれども、あなたがたのうちのだれが、そのような従順を果たすことができるでしょうか。したがって、それによって生きることができるでしょうか。あなたがたのうちのだれが、神の外なる戒めでさえ、その一点一画まで全うしているでしょうか。神の禁じておられることを、大小にかかわらず何一つ行わない人がいるでしょうか。神の命じておられることを、何一つ怠らない人がいるでしょうか。無益な言葉を一つも語らない人がいるでしょうか。その語ることがいつも「聞いている者の益になる」人がいるでしょうか（エペソ四・二九）。「飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のために」している人がいるでしょうか（第一コリント一〇・三一）。まして、神の内なる戒めのすべてを全うすることなど、なおさらできません。内なる戒めは、あなたがたの魂のあらゆる気質、あらゆる動きが、主に聖なるものであることを求めるのです。あなたがたは、「心をつくして」「神を愛」することができるでしょうか（マタイ二二・三七）。すべての人を自分の魂のように愛することができるでしょうか。「絶えず祈」り、「すべての事について、感謝」することができるでしょうか（第一テサロニケ五・一七～一八）。いつも神を自分の前に置くことができるでしょうか。あらゆる情愛、願い、思いを、神の律法に従わせることができるでしょうか。

（三） さらに、考えてください。律法の義が求めるのは、神のあらゆる戒めに従うことだけではありません。消極的な戒めにも積極的な戒めにも、内なる戒めにも外なる戒めにも、完全な程度で従うことを求めるのです。どんな場合でも、律法の声はこうです。「あなたは、力をつくして、主なるあなたの神に仕えなければなりません」。律法は、どんな割り引きも許しません。どんな欠けも大目に見ません。従順の満ちた量に少しでも足りなければ、律法はそれをことごとく罪に定め、ただちに違反者にのろいを宣告します。律法は、変わることのない正義の規則だけを顧みて、「私はあわれみを示すことを知りません」と言うのです。

（四） それなら、だれが、このような審判者の前に出ることができるでしょうか。この審判者は、「誤ったことに厳しく目をとめる」方です（詩篇一三〇・三）。「生ける者はひとりも」「義とされない」法廷で（詩篇一四三・二）、さばかれたいと願う人々は、なんと浅はかなことでしょう。アダムの子孫は、ひとりも義とされないのです。たとえば、私たちが今、力をつくして、すべての戒めを守っているとしましょう。それでも、これまでのただ一度の違反が、いのちを求める私たちの権利を、すっかり打ち砕いてしまいます。もし私たちが、どれか一つの点でも、かつて罪を犯したことがあるなら、この義はもう終わりです。律法は、完全で、しかも途切れのない従順を果たさない者を、すべて罪に定めるから

です。ですから、律法の宣告によれば、どんな程度であれ一度でも罪を犯した者には、神に「逆らう者たちを焼きつくす激しい火」を「恐れつつ待つことだけ」が残るのです（ヘブル一〇・二七）。

（五）それなら、堕落した人がこの義によっていのちを求めるのは、愚かさの極みではないでしょうか。人は、「不義のなかに生れ」、その「母は罪のうちに」その人を「みごも」ったのです（詩篇五一・五）。人は、生まれながら、すっかり「地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なもの」です（ヤコブ三・一五）。まったく腐敗し、忌まわしい者です。人のうちには、恵みを見いだすまで、「善なるものが宿っていない」のです（ローマ七・一八）。それどころか、人は自分の力では、よい思いを一つも思うことができません。実に、人はまったく罪そのものであり、不信心のかたまりにすぎません。息をするたびに罪を犯しています。言葉と行いにおける人の自罪は、その頭の毛よりも多いのです（詩篇四〇・一二）。このような者は、汚れた、罪ある、無力な虫けらです。その者が、自分の義によって受け入れられようとし、「律法による義」によって生きようと夢見るのです。なんと愚かな、なんと無分別なことでしょう！

（六）さて、「律法による義」に頼ることの愚かさを証明する考察は、どれも同じように、「信仰に基く神からの義」に従うことの知恵を証明します（ピリピ三・九）。これは、先に述べた考察の一つ一つについて、たやすく示すことができるでしょう。けれども、それはさておきます。信仰による義に従う第一歩は、自分の義を捨てることです。この一歩が知恵であることは、次のことから明らかです。それは、真理に従って、物事の本当の性質に従って、行動することなのです。自分の義を捨てるとは、私たちが実際にある本当の状態を、口でだけでなく心でも認めることにほかなりません。すなわち、次のことを認めることです。私たちは、腐敗した、罪深い性質を持って、この世に生まれてきます。その性質は実に、たやすく想像することも、言い表す言葉を見つけることもできないほど、腐敗しています。そのため私たちは、あらゆる悪に傾き、あらゆる善を嫌います。私たちは、高ぶり、我意、手に負えない激情、愚かな欲望、卑しく度を越した情愛に満ちています。世を愛する者であり、神よりも快楽を愛する者です（第二テモテ三・四）。私たちの生活は、心より少しもましではなく、多くの点で不信心で、聖でないものでした。そのため、言葉と行いにおける私たちの自罪は、天の星のように数多いのです。これらすべてのゆえに、私たちは、目が清く、悪を見られない方に（ハバクク一・一三）、喜ばれていません。その方から受けるに値するのは、憤りと怒りと死だけです。死は、罪の当然の報酬です（ローマ六・二三）。私たちは、自分のどんな義によっても（実際、義など何一つ持っていないのです）、自分のどんなわざによっても（わざは、それの実る木と同じです）、神の怒りをなだめることも、当然受けるべき罰をそらすこともできません。そうです、もし自分の思いのままに放っておかれるなら、私たちはただ悪から悪へと落ちていくだけです（第二テモテ三・一三）。ますます深く罪に沈み、悪いわざによっても、肉の思いの悪い気質によっても、ますます神を怒らせます。そしてついには、自分の不義の枡目を満たし、すみやかな滅亡を自分の身に招くのです（第二ペテロ二・一）。そして、これこそ、私たちが生まれながらにある状態そのものではないでしょうか。ですから、これを心でも口でも認めること、すなわち、自分の義、「律法による義」を捨てることは、物事の本当の性質に従って行動することです。したがって、それはまことの知恵の現れなのです。

（七）「信仰による義」に従うことの知恵は、さらに次のことを考えると明らかになります。それは、神の義だということです。ここで私が言うのは、それが、神ご自身の選び定められた、神との和解の方法だということです。神は、知恵の神としてそれを選ばれただけではありません。天と地と、ご自分の造られたすべての被造物との、主権ある主として選ばれたのです。さて、人が神に向かって「あなたは何をするのか」と言うのは、ふさわしくありません（ヨブ九・一二）。まったく分別のない者でなければ、だれも自分よりも力強い者と争うことはしません（伝道の書六・一〇）。そのまつりごとがすべての物を統べ治める方と、争うことはしません（詩篇一〇三・一九）。それと同じように、神の選ばれたことは何であれ、それに従うのが、まことの知恵であり、健全な分別のしるしです。すべてのことと同じく、このことでも、こう言うのです。「それは主です。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」（サムエル記上三・一八）。

（八）さらに、次のことも考えてみてください。神が罪深い人に、ご自分と和解する道を少しでも与えてくださったのは、ただ恵みにより、価なしの愛によ

り、受けるに値しないあわれみによることでした。私たちが神の御手から断ち切られず、神の記憶からすっかり消し去られなかったのも、そうです。神の敵は、はなはだしく神にそむき、長い間かたくなに神に逆らってきました。それでも神は、そのやさしいあわれみにより、受けるに値しない者へのいつくしみにより、敵がなお神の前に恵みを得る方法を定めてくださいます。ですから、その方法がどんなものであれ、それをあらゆる感謝をもって受け入れるのが、疑いもなく私たちの知恵です。

（九） もう一つだけ、考えるべきことを挙げましょう。最善の手段によって最善の目的を目指すのが、知恵です。さて、どんな被造物にとっても、追い求めうる最善の目的は、神のうちにある幸いです。そして、堕落した被造物が追い求めうる最善の目的は、神の恵みと神のかたちを回復することです。天の下で人に与えられた、最善の、いや唯一の手段があります。神の恵みを取り戻すための、また神のかたちを取り戻すための手段です。神の恵みは、いのちそのものにもまさります。神のかたちは、魂のまことのいのちです。その手段とは、「信仰による義」に従うこと、神のひとり子を信じることです。

【三】 心のうちで言ってはならないこと

（一） ですから、赦されて、神の恵みのうちに和解させられたいと願うあなたは、だれであっても、心のうちでこう言ってはなりません。「私はまず、これをしなければならない。まず、あらゆる罪に打ち勝たなければならない。あらゆる悪い言葉とわざをやめ、すべての人にあらゆる善を行わなければならない」。あるいは、「私はまず教会に行き、主の晩餐にあずかり、もっと説教を聞き、もっと祈らなければならない」。ああ、兄弟よ！ あなたはすっかり道を踏み外しています。あなたは今なお、「神の義を知らないで」います。そして、和解の根拠として、「自分の義を立てようと努め」ているのです（ローマ一〇・三）。あなたは、神と和解させられるまでは、罪を犯すほかに何もできないことを、知らないのでしょうか。それなのに、なぜ、「まずこれとこれをしなければならない。それから信じよう」と言うのでしょうか。いいえ、まず信じなさい！ 主イエス・キリストを信じなさい。あなたの罪のための、あがないの供え物である方を信じなさい。まず、この良い土台を据えなさい。そうすれば、あなたはすべてのことをよく行えるようになります。

（二） また、心のうちで、こう言ってもなりません。「私はまだ受け入れられない。まだ十分に良い者ではないから」。だれが、神に受け入れられるに値するほど良い者でしょうか。これまでにだれか、そうであったでしょうか。そのために十分に良い者であったアダムの子が、かつてひとりでもいたでしょうか。万物の終わりに至るまで、ひとりでもいるでしょうか。そしてあなたについて言えば、あなたはまったく良い者ではありません。あなたのうちには、善なるものが宿っていません（ローマ七・一八）。そして、イエスを信じるまでは、決して良い者にはならないでしょう。むしろ、自分がますます悪くなっていくのに気づくでしょう。けれども、受け入れられるために、もっと悪くなる必要があるでしょうか。あなたは、もう十分に悪いのではありませんか。確かにそうです。神はそれをご存じです。あなた自身も、それを否定できません。それなら、ぐずぐずしてはなりません。今、すべての準備ができています。「すぐ立って」、「あなたの罪を洗い落しなさい」（使徒二二・一六）。泉は開かれています。今こそ、小羊の血で自分を洗って白くするときです。今、主は「ヒソプをもって」あなたを「清め」てくださいます。そして、あなたは「清くなる」でしょう。主はあなたを「洗って」くださいます。そして、あなたは「雪よりも白くなる」でしょう（詩篇五一・七）。

（三） 「でも、私はまだ十分に悔いていない。自分の罪を十分に感じていない」と言ってはなりません。それは、私も知っています。あなたが自分の罪を今よりも千倍も感じ、千倍も悔いてくれたらと、神に願います。けれども、それを待っていてはなりません。神は、あなたが信じる前にではなく、信じることによって、あなたをそのようにしてくださるかもしれません。あなたは、多くを赦されたので多く愛するようになるまでは、多くは泣かないかもしれません。それまでの間、イエスを仰ぎ見なさい。ごらんなさい、イエスはなんとあなたを愛しておられることでしょう。イエスがあなたのために、まだなさっていないことで、ほかに何がおできになったでしょうか。

ああ、神の小羊よ、あなたのような痛みが、あなたのような愛が、かつてあったでしょうか。

イエスをじっと見つめなさい。イエスがあなたを見つめ、あなたのかたくなな心を砕いてくださるまでです。そのとき、あなたの「頭が水となり」、あなたの「目が涙の泉とな」るでしょう（エレミヤ九・一）。

（四）また、「キリストのもとに行く前に、私はもっと何かしなければならない」とも言ってはなりません。確かに、もしあなたの主が来られるのを遅らせられるなら、主の現れを待つのがふさわしく、正しいことでしょう。主の命じられたことを何であれ、力の及ぶかぎり行いながら待つのです。けれども、そのように想定する必要はありません。主が遅れて来られると、どうしてわかるのでしょうか。主は、上からの日の光のように、朝の光より先に現れてくださるかもしれません。ああ、主に時を指定してはなりません！　いつでも主を待ち望みなさい。今、主は近くにおられます！　戸口まで来ておられます！

（五）また、罪が消し去られる前に、もっと誠実になるのを待とうとするのは、何のためでしょうか。神の恵みに、もっとふさわしい者になるためでしょうか。ああ、あなたは今なお、「自分の義を立てようと」しているのです（ローマ一〇・三）。神があわれんでくださるのは、あなたがそれにふさわしいからではありません。神のあわれみは尽きることがないからです（哀歌三・二二）。あなたが正しいからではありません。イエス・キリストが、あなたの罪をあがなってくださったからです。

また、誠実さに何かよいものがあるとしても、なぜ、信仰を持つ前にそれを期待するのでしょうか。信仰こそ、本当によいもの、聖なるものすべての、唯一の根なのです。

何よりも、あなたはいつまで忘れているのでしょうか。罪が赦される前に、あなたが何を行い、何を持っていても、それは、赦しを得るために、神の前で何の役にも立たないのです。そうです、それはみな、うしろに投げ捨て、足で踏みつけ、ないものと見なさなければなりません。そうでなければ、あなたは決して神の前に恵みを得られないでしょう。そうするまでは、あなたは、ただの罪人として恵みを求めることができないからです。罪ある、失われた、破滅した罪人として、神に申し立てるものも、ささげるものも何一つ持たずに、求めることができないからです。申し立てるのは、ただ神の愛する御子の功績だけです。御子は、あなたを「愛し」、あなたの「ためにご自身をささげられた」のです（ガラテヤ二・二〇）。

（六）結びに言います。人よ、あなたはだれであってもかまいません。自分のうちに死の宣告を受け、自分が罪に定められた罪人であると感じ、神の怒りが自分の上にとどまっているあなたに（ヨハネ三・三六）、主はこう言われます。「これを行え」（わたしのすべての戒めに完全に従え）、「そして生きよ」ではありません。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなた」は「救われます」と言われるのです（使徒一六・三一）。「信仰の言葉」は、「あなたの近くにあ」ります（ローマ一〇・八）。今、この瞬間に、この時に、今のあなたの状態のままで、罪人であるそのままで、ありのままのあなたで、福音を信じなさい。そうすれば、「わたしは」あなたの「不義をあわれみ、もはや」あなたの「罪を思い出すことはしません」（ヘブル八・一二）。

説教七　神の国への道

「神の国は近づきました。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ一・一五）

この言葉は、おのずから私たちに、次のことを考えさせます。

第一に、まことの宗教の性質。主はここで、それを「神の国」と呼び、それが「近づいた」と言われます。

第二に、そこに至る道。主はそれを、「悔い改めて福音を信ぜよ」という言葉で示しておられます。

【一】　まことの宗教の性質

（一）　まず第一に、まことの宗教の性質を考えましょう。主はここで、それを「神の国」と呼んでおられます。偉大な使徒も、ローマ人への手紙で同じ表現を使っています。そこで使徒は、主の言葉をこう説明してもいます。「神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜びとです」（ローマ一四・一七）。

（二）　「神の国」、すなわちまことの宗教は、「飲食では」ありません。回心していないユダヤ人が律法に熱心だったことは、よく知られています。けれども、キリストの信仰を受け入れた人々の多くも、それにもかかわらず「律法に熱心な人たち」でした（使徒二一・二〇）。それも、モーセの儀式律法に熱心だったのです。ですから彼らは、素祭や灌祭について、また清い食物と汚れた食物の区別について、律法に書かれていることは何でも自分で守りました。それだけではありません。「異邦人」（すなわち異教徒）「の中から神に帰依している人たち」にも（使徒一五・一九）、同じことを激しく迫ったのです。そうです、ある人たちは、異邦人のところへ行く先々で、こう説くほどでした。「割礼を受け」、律法を守らなければ、「救われない」（使徒一五・一、二四）。ここで律法とは、儀式律法の全体のことです。

（三）　これらの人々に反対して、使徒は、ここでも、ほかの多くの箇所でも、こう宣言しています。まことの宗教は、飲食にあるのではなく、どんな儀式を守ることにあるのでもありません。実に、どんな外面的なものにもありません。心の外にあるものには、何一つないのです。その本質のすべては、「義と、平和と、聖霊における喜び」にあるのです。

（四）　まことの宗教は、どんな外面的なものにもありません。形式や儀式にもありません。それが最もすぐれた種類のものであってもです。形式や儀式が、どれほどふさわしく、意味深いものだとしましょう。内なるものを、どれほどよく表すものだとしましょう。どれほど役に立つものだとしましょう。目に見えるものの先にはほとんど思いの及ばない一般の人々だけでなく、分別のある人、すぐれた能力を持つ人にとってさえ、役に立つとしましょう。確かに、ときにはそうでありうるのです。そうです、ユダヤ人の場合のように、神ご自身が定められたものだとしましょう。それでも、その定めが効力を持っている期間でさえ、まことの宗教は、おもにそこにあるのではありません。いや、厳密に言えば、まったくそこにはないのです。まして、人が定めただけの儀式や形式については、なおさらそう言わなければなりません。キリストの宗教は、これらすべてよりも、はるかに高くそびえ、はるかに深いところにあります。これらは、それぞれの場所ではよいものです。ただし、実際にまことの宗教に役立っているかぎりにおいてです。人間の弱さを折々に助けるものとしてだけ用いられているなら、それに反対するのは迷信でしょう。けれども、だれも、それ以上のものにしてはなりません。それ自体に何かの価値があるとか、それがなければ宗教は成り立たないとか、だれも夢にも思ってはなりません。そう思うなら、それを主の憎まれるものにしてしまうでしょう。

（五）　宗教の性質は、これら礼拝の形式や儀式にあるどころではありません。厳密に言えば、どんな種類の外面的な行いにもないのです。確かに、悪徳に満ちた不道徳な行いをする人は、宗教をまったく持つことができません。自分が同じ立場にあったら人にしてほしくないことを、人にする人もそうです。また、

「なすべき善を知りながら行わな」い人も（ヤコブ四・一七）、本当の宗教を持つことはできません。これも確かです。けれども人は、外面的な悪を避け、善を行っていても、なお宗教を持っていないことがありえます。そうです、ふたりの人が同じ外面的なわざを行うことがあります。たとえば、飢えた人に食べさせることや、裸の人に着せることです。そのとき、一方は本当に宗教的で、もう一方はまったく宗教を持っていない、ということがありえます。一方は神への愛から行い、もう一方は称賛を愛する心から行うかもしれないからです。ですから、次のことは明らかです。まことの宗教は、おのずからあらゆる良い言葉と良いわざに導きます。けれども、その本当の性質は、さらに深いところに、すなわち「かくれた内なる人」にあるのです（第一ペテロ三・四）。

（六） 私が心と言うのは、こういうわけです。宗教は、正統信仰、すなわち正しい見解にあるのでもないからです。見解は、厳密には外面的なものではありません。けれども、心のうちにではなく、理解力のうちにあるのです。人は、あらゆる点で正統的でありうるでしょう。正しい見解を奉じるだけでなく、あらゆる反対者に対して、熱心にそれを守るかもしれません。主の受肉についても、永遠にほむべき三位一体についても、神の託宣に含まれるほかのあらゆる教理についても、正しく考えるかもしれません。三つの信条、すなわち使徒信条、ニカイア信条、アタナシオス信条のすべてに同意するかもしれません。それでも、その人がまったく宗教を持っていないことはありうるのです。ユダヤ人やトルコ人や異教徒と同じように、持っていないことがありうるのです。その人は、ほとんど悪魔と同じくらい正統的であるかもしれません。（もちろん、まったく同じではありません。人はみな何かで誤りますが、悪魔が誤った見解を持っているとは、とても考えられないからです。）それでいて、その間ずっと、悪魔と同じように、心の宗教とはまったく無縁であるかもしれないのです。

（七） これだけが、本当の意味での宗教です。これだけが、神のみまえに、きわめて尊いものです（第一ペテロ三・四）。使徒は、そのすべてを三つの項目にまとめています。「義と、平和と、聖霊における喜び」です。まず第一は、義です。義については、主の言葉を思い起こせば、迷うことはありません。主は、義の二つの大きな枝を述べておられます。この二つに、「律法全体と預言者とが、かかっている」のです（マタイ二二・四〇）。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ。これがいちばん大切な、第一のいましめです」（マルコ一二・三〇、マタイ二二・三八）。これが、クリスチャンの義の、第一の大きな枝です。あなたは、主なるあなたの神によって喜びをなすのです（詩篇三七・四）。あらゆる幸いを神のうちに求め、神のうちに見いだすのです。神は、この世でも永遠にも、あなたの「盾」となられます。あなたの受ける「報いは、はなはだ大きい」のです（創世記一五・一）。あなたの骨はことごとく、こう言うでしょう（詩篇三五・一〇）。「私はあなたのほかに、だれを天にもち得ましょう。地にはあなたのほかに慕うものはありません！」（詩篇七三・二五）「わが子よ、あなたの心をわたしに与え」よ、と言われる方がおられます（箴言二三・二六）。あなたは、その方の言葉を聞き、それを行うのです。そして、あなたは心を、魂の最も奥深いところを、神にささげます。神がそこを、競う者なく治められるためです。そうしたら、あなたは心に満ちあふれる思いで、こう叫んでよいのです。「わが力なる主よ、私はあなたを愛します。主はわが岩、わが城、私を救う者、わが神、わが寄り頼む岩、わが盾、わが救の角、わが高きやぐらです」（詩篇一八・一～二）。

（八） そして、「第二もこれと同様」です（マタイ二二・三九）。クリスチャンの義の第二の大きな枝は、第一の枝と密接に、切り離せないほどに結びついています。それは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という戒めです（マルコ一二・三一）。「愛せよ」とは、こういうことです。最もやさしい善意をもって、最も熱心で心からの情愛をもって、隣り人を抱きしめるのです。あらゆる悪を防ぎ、取り除き、できるかぎりの善をもたらそうとする、最も燃える願いをもって抱きしめるのです。「あなたの隣り人」とは、あなたの友、親族、知人だけではありません。徳のある人、親しみ深い人、あなたを愛してくれる人だけでもありません。あなたに先に親切にしてくれる人や、親切を返してくれる人だけでもありません。すべての人の子、すべての人間、神の造られたすべての魂です。一度も会ったことがなく、顔も名も知らない人も、例外ではありません。「恩を知らぬ者」や「悪人」だと知っている人も（ルカ六・三五）、今なおあなたを侮辱し迫害する人も、例外ではありません。その人を、あなたは自分のよう

に愛さなければなりません。その人のあらゆる幸いを、自分の幸いと同じように、変わらず渇き求めるのです。その人の魂やからだを悲しませ傷つけるものから、自分を守るのと同じように、たゆまず心を配ってかばうのです。

（九） さて、この愛こそ「律法を完成するもの」であり（ローマ一三・一〇）、クリスチャンの義のすべてをまとめたものではないでしょうか。愛は、すべての内なる義をまとめたものです。愛には、必ず「あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容」が含まれるからです（コロサイ三・一二）。「愛は高ぶらない」ので、謙遜が含まれます。愛は「いらだたない」で、「すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」ので、慈愛と柔和と寛容が含まれます（第一コリント一三・四～七）。また、愛は、すべての外なる義をまとめたものです。言葉によっても行いによっても、「愛は隣り人に害を加えることは」しないからです（ローマ一三・一〇）。愛は、だれをも、すすんで傷つけたり悲しませたりすることはできません。また、愛は良いわざに熱心です（テトス二・一四）。人を愛する者はみな、「機会のあるごとに、だれに対しても」「善を行」います（ガラテヤ六・一〇）。かたより見ず、偽りなく、「あわれみと良い実とに満ち」ているのです（ヤコブ三・一七）。

（一〇） けれども、まことの宗教、すなわち神と人とに対して正しい心には、聖性だけでなく幸いも含まれています。まことの宗教は、「義」であるだけでなく、「平和と、聖霊における喜び」でもあるからです。その平和とは何でしょうか。それは「神の平安」です。神だけが与えることができ、世が奪い去ることのできない平安です。「人知ではとうてい測り知ることのできない」平安（ピリピ四・七）、ただ理性で考えるだけではとらえきれない平安です。それは、「きたるべき世の力」を（ヘブル六・五）、超自然的に感じ取ること、神から与えられる味わいなのです。「生れながらの人」は、この世のことにどれほど賢くても、この平安を知りません。実に、今の状態のままでは、それを知ることもできません。それは「御霊によって判断されるべきであるから」です（第一コリント二・一四）。それは、あらゆる疑い、あらゆる苦しい不確かさを追い払う平安です。神の御霊が、クリスチャンの霊と共に、その人が「神の子」であることをあかししてくださるからです（ローマ八・一六）。また、この平安は恐れを、「懲らしめが伴」う恐れをすべて、追い払います（第一ヨハネ四・一八）。神の怒りへの恐れ、地獄への恐れ、悪魔への恐れ、そして特に、死への恐れです。神の平安を持つ人は、もしそれが神のみこころなら、「この世を去ってキリストと共にいること」を願うのです（ピリピ一・二三）。

（一一） この神の平安が魂のうちに据えられるところには、どこでも、「聖霊における喜び」もあります。聖霊によって、永遠にほむべき神の御霊によって、心のうちに造り出される喜びです。聖霊こそ、私たちのうちに、キリスト・イエスを通して神を喜ぶ、静かでへりくだった喜びを造り出してくださる方です。キリストは、私たちに「今や和解を得させて」くださった方です（ローマ五・一一）。この「和解」は、ギリシャ語でカタラゲーン（καταλλαγήν）、すなわち神との和解です。また聖霊は、王である詩人の宣言が真実であることを、大胆に確かめさせてくださいます。「そのとががゆるされ、その罪がおおい消される者はさいわいです」（詩篇三二・一）。聖霊こそ、クリスチャンの魂に、むらのない、ゆるぎない喜びを吹き込んでくださる方です。それは、自分が神の子であるという御霊のあかしから生まれる喜びです。聖霊はまた、その人を「言葉につくせない」喜びにあふれさせ（第一ペテロ一・八）、「神の栄光にあずかる希望をもって喜」ばせてくださいます（ローマ五・二）。それは、神の栄光あるかたちへの希望です。そのかたちは、今は部分的に、やがては完全に、その人に「現される」のです（ローマ八・一八）。また、その人のために天にたくわえられている、「しぼむことのない栄光の冠」への希望です（第一ペテロ五・四、一・四）。

（一二） この聖性と幸いは、一つに結び合わされて、聖書の中で、ときには「神の国」と呼ばれます（本文の主の言葉がそうです）。また、ときには「天国」と呼ばれています。それが「神の国」と呼ばれるのは、それが、神が魂のうちに支配されることの、じかの実だからです。神が大いなる御力をふるい（黙示録一一・一七）、私たちの心に王座を据えられるやいなや、心はたちまちこの「義と、平和と、聖霊における喜び」で満たされます。また、それが「天国」と呼ばれるのは、それが、ある程度まで、魂のうちに開かれた天だからです。これを経験する人はだれでも、御使たちと人々の前で、こう断言できるからです。

永遠のいのちは勝ち取られ、
栄光は地上に始まった。

それは、聖書の一貫した趣旨のとおりです。聖書は、いたるところであかししています。「神が永遠のいのちを私たちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにある」のです。「御子を持つ者はいのちを持」っています（第一ヨハネ五・一一～一二）。御子を持つとは、御子が心のうちで治めておられることです。その人は、いのちを、永遠のいのちを持っているのです。「永遠のいのちとは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」（ヨハネ一七・三）。これを与えられた人々は、たとえ燃える炉の中にいても（ダニエル三章）、確信をもって神にこう語りかけることができます。

主よ、あなたの力に守られて安らかに、
神の子よ、エホバよ、私たちはあなたを拝します。
人の姿をとって降り、現れてくださった方を。
あなたに、絶えることのないハレルヤがささげられますように。
天にあるあなたの王座にささげるように、私たちはここで賛美をささげます。
あなたの臨在が現されるところ、そこが天なのですから。

（一三）そして、この「神の国」、すなわち天国は、「近づいた」のです。この言葉が最初に語られたとき、それは、そのとき「時は満ちた」ということを意味していました（マルコ一・一五）。神は「肉において現れ」（第一テモテ三・一六）、人々の間にご自分の国を打ち立て、ご自分の民の心のうちに支配しようとしておられたのです。では、今も時は満ちているのではないでしょうか。主はこう言われるからです。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのです」（マタイ二八・二〇）。「あなたがた」とは、主の名によって罪の赦しを宣べ伝える人々のことです。ですから、キリストの福音が宣べ伝えられるところでは、どこでも、キリストのこの国が近づいているのです。それは、あなたがたひとりびとりから遠く離れてはいません（使徒一七・二七）。もしあなたがたが、「悔い改めて福音を信ぜよ」という主の声に聞き従うなら、今この時に、その国に入ることができるのです。

【二】　神の国に至る道

（一）「これは道だ、これに歩みなさい」（イザヤ三〇・二一）。まず第一に、「悔い改め」なさい。すなわち、自分自身を知りなさい。これが、信仰に先立つ最初の悔い改めです。すなわち、罪の自覚、自分を知ることです。ですから、「眠っている者よ、起きなさい」（エペソ五・一四）。自分が罪人であること、またどのような罪人であるかを知りなさい。あなたの最も奥深い性質の腐敗を知りなさい。その腐敗によって、あなたは原初の義から、はるかに遠く離れています（三十九箇条第九条）。その腐敗によって、「肉の欲するところ」はいつも「御霊に反」しています（ガラテヤ五・一七）。それは、「肉の思い」のためです。「肉の思いは神に敵する」ものであり、「神の律法に従わず、否、従い得ない」のです（ローマ八・七）。あなたは、魂のあらゆる力、あらゆる能力において腐敗していることを知りなさい。その一つ一つにおいて、すっかり腐敗しているのです。「もろもろの基はゆり動」いています（詩篇八二・五）。あなたの悟りの目は暗くなっていて、神をも、神のことをも見分けることができません。無知と誤りの雲があなたの上にとどまり、死の陰であなたをおおっています。あなたは、神のことも、世のことも、自分のことも、知らなければならないほどには、まだ何も知っていません（第一コリント八・二）。あなたの意志は、もはや神の意志ではありません。まったくひねくれ、ゆがんでいます。あらゆる善、神の愛されるすべてのものを嫌い、あらゆる悪、神の憎まれるあらゆる忌まわしいものに傾いています。あなたの情愛は神から離れ、地の全面に散らされています。あなたのあらゆる感情、すなわち願いと嫌悪、喜びと悲しみ、望みと恐れは、すべて調子が狂っています。程度がふさわしくないか、ふさわしくない対象に向けられているのです。そのため、あなたの魂には「完全なところがな」いのです。預言者の強い表現を借りれば、「足のうらから頭まで」、「傷と打ち傷と生傷ばかり」なのです（イザヤ一・六）。

（二）これが、あなたの心の、あなたの最も奥深い性質の、生まれながらの腐敗です。そのような悪い根から、どんな枝が育つと期待できるでしょうか。ここから不信仰が生じます。不信仰は、いつも「生ける神から離れ去」ります（ヘ

ブル三・一二）。そして、こう言います。「主とはいったい何者か」（出エジプト五・二）。「これに仕えねばならないのか」（ヨブ二一・一五）。「ふん、神よ、あなたは気にもかけない」（詩篇一〇・一三）。ここから、神に頼らない自立心が生じます。「いと高き者のようになろう」とするのです（イザヤ一四・一四）。ここから、あらゆる形の高ぶりが生じます。高ぶりは、あなたにこう言わせます。「自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もない」（黙示録三・一七）。この悪い泉から、苦い流れが流れ出ます。虚栄、称賛への渇き、野心、貪欲、「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」です（第一ヨハネ二・一六）。ここから、怒り、憎しみ、悪意、復讐、ねたみ、そねみ、邪推が起こります。ここから、あらゆる愚かで有害な欲が起こります。その欲は今、あなたを「多くの苦痛をもって」「刺しとお」しています。そして、早いうちに止めなければ、ついにはあなたの魂を永遠の滅びに沈めるでしょう（第一テモテ六・九～一〇）。

（三）　では、このような枝に、どんな実がなるでしょうか。苦く、いつも悪い実ばかりです（創世記六・五）。高ぶりからは、争いが生じます（箴言一三・一〇）。むなしい自慢が生じ、人からの誉れを求めて受けることが生じます。こうして、神がほかの者に与えることのできない栄光を（イザヤ四二・八）、神から奪うのです。肉の欲からは、大食や酒酔い、享楽や好色、不品行、汚れが生じます。こうして、聖霊の宮として造られたからだを（第一コリント六・一九）、さまざまに汚すのです。不信仰からは、あらゆる悪い言葉と悪いわざが生じます。けれども、そのすべてを数え上げようとすれば、時間が足りないでしょう（ヘブル一一・三二）。あなたが語った無益な言葉のすべてです。その言葉は、いと高き方を怒らせ、イスラエルの聖者を悲しませてきました。あなたが行った悪いわざのすべてです。それ自体がまったく悪いわざか、少なくとも神の栄光のために行われなかったわざです。あなたの自罪は、言い表せないほど多く、あなたの頭の毛よりも多いのです（詩篇四〇・一二）。だれが、海の砂や雨のしずくを、あるいはあなたの不義を、数えることができるでしょうか。

（四）　あなたは、「罪の支払う報酬は死である」ことを知らないのでしょうか（ローマ六・二三）。それは、この世の死だけでなく、永遠の死です。「罪を犯した魂は必ず死ぬ」のです（エゼキエル一八・四）。「主がその口で語られた」からです（イザヤ一・二〇）。その魂は、第二の死を死ぬのです（黙示録二〇・一四）。これが宣告です。終わりのない死によって罰せられること、「主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受ける」ことです（第二テサロニケ一・九）。あなたは知らないのでしょうか。すべての罪人は、ギリシャ語で言えば、エノコス・エスティ・テー・ゲエンネー・トゥー・ピュロス（ἔνοχος ἐστι τῇ γεεννῃ τοῦ πυρος）なのです（マタイ五・二二）。これを「地獄の火の危険がある」と訳すのは正確でなく、あまりにも弱すぎます。むしろ、「地獄の火の宣告を受けている」のです。すでに刑を言い渡され、今まさに処刑へと引かれて行くところなのです。あなたは、永遠の死に値する罪を負っています。それは、あなたの内と外との悪に対する、正当な報いです。その宣告が今、執行されても、それは正しいことです。あなたは、これがわかりますか。これを感じていますか。自分が神の怒りと永遠の刑罰に値することを、心の底から確信していますか。もし今、神が地に命じて口を開かせ、あなたをのみつくさせたとしても、神はあなたに少しも不当なことをなさらないのではありませんか。あなたが今、生きながら陰府に下り、消えない火の中に落ちたとしても、そうではありませんか（民数記一六・三〇、マルコ九・四三）。もし神があなたに本当に悔い改めさせてくださったなら、あなたは、そのとおりだと深く感じているはずです。そして、あなたが滅ぼし尽くされず、地の面から一掃されずにいるのは、ただ神のあわれみによるのだと感じているはずです。

（五）　では、神の怒りをなだめ、あなたのすべての罪をつぐない、当然受けるべき罰を逃れるために、あなたは何をするのでしょうか。ああ、あなたは何もできません。ただ一つの悪いわざ、悪い言葉、悪い思いについてさえ、神につぐないをすることは、何一つできないのです。今、すべてのことをよく行えたとしましょう。今この時から、魂が神のもとに帰るときまで、完全で途切れのない従順を果たせたとしましょう。それでも、過去のことをつぐなうことはできません。負債を増やさないことは、負債を払うことにはなりません。負債は、今までと同じだけ大きく残るでしょう。そうです、地上のすべての人と天のすべての御使とが、今もこれからも従順を尽くすとしましょう。それでも、ただ一つの罪についてさえ、神の正義を満たすことは決してできないでしょう。それなら、自分

にできる何かによって自分の罪をつぐなおうと考えたのは、なんとむなしいことだったでしょう。ひとりの魂をあがなうには、全人類が支払えるよりも、はるかに多くの代価がかかります。ですから、もし罪責を負った罪人にほかの助けがなかったなら、その人は疑いもなく、永遠に滅びるほかなかったでしょう。

（六） けれども、これからの完全な従順が、過去の罪をつぐなえると仮定してみましょう。それでも、あなたには何の益にもなりません。あなたは、それを果たすことができないからです。そうです、どれか一つの点でさえ、できないのです。今、始めてごらんなさい。試してごらんなさい。あなたにからみつく、あの外面的な罪を、かなぐり捨ててごらんなさい（ヘブル一二・一）。あなたにはできません。それなら、どうして、あなたの生活を、あらゆる悪からあらゆる善へと変えることができるでしょうか。実に、まずあなたの心が変えられなければ、それは不可能です。木が悪いままであるかぎり、良い実をならせることはできないからです（マタイ七・一八）。けれども、あなたは、自分の心を、あらゆる罪からあらゆる聖性へと変えることができるでしょうか。罪のうちに死んでいる魂、神に対して死に、世に対してだけ生きている魂を、生かすことができるでしょうか。それは、死んだからだを生かし、墓に横たわる人をよみがえらせることができないのと同じです。そうです、あなたは、自分の魂を少しも生かすことができません。死んだからだに少しもいのちを与えられないのと同じです。このことについて、あなたは大きなことも小さなことも、何一つできません。あなたはまったく無力なのです。自分がどれほど罪責を負い、どれほど罪深いかだけでなく、どれほど無力であるかを深く感じること。これこそ、「悔いのない」悔い改めであり（第二コリント七・一〇）、神の国の先触れなのです。

（七） あなたは今、自分の内と外との罪を、いきいきと自覚しているとしましょう。自分がまったく罪責を負い、まったく無力であることを自覚しているとしましょう。それに、ふさわしい情愛が加わるとしましょう。すなわち、自分の受けたあわれみを軽んじてきたことを、心から悲しむこと。自責の念と、自分を罪に定める思いとで、口をふさがれること（ローマ三・一九）。目を天に向けることさえ恥じること（ルカ一八・一三）。あなたの上にとどまる神の怒りを（ヨハネ三・三六）、あなたの頭上にかかる神ののろいを恐れること。神を忘れ、私たちの主イエス・キリストに聞き従わない者たちを焼きつくそうとしている、激しい火を恐れること（ヘブル一〇・二七、第二テサロニケ一・八）。その激しい火を逃れたいと、悪を行うことをやめ、善を行うことをならいたいと、切に願うこと（イザヤ一・一六～一七）。そうであるなら、私は主の名によって、あなたに言います。「あなたは神の国から遠くありません」（マルコ一二・三四）。もう一歩で、あなたはそこに入るでしょう。あなたは「悔い改め」ています。今、「福音を信じ」なさい。

（八） 福音とは、良い知らせ、罪責を負った無力な罪人への良いおとずれのことです。その最も広い意味では、イエス・キリストによって人に与えられた啓示の全体を指します。また、ときには、主が人々のうちに宿っておられた間に（ヨハネ一・一四）、なさったこと、苦しまれたことの記録の全体を指します。そのすべての中心は、こうです。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださいました」（第一テモテ一・一五）。あるいは、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださいました」。それは、私たちが「滅びないで、永遠のいのちを得るため」です（ヨハネ三・一六）。あるいは、「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのです。彼はみずから懲しめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのです」（イザヤ五三・五）。

（九） これを信じなさい。そうすれば、神の国はあなたのものです。信仰によって、あなたは約束のものを得るのです。「神は、まことに悔い改め、その聖なる福音を偽りなく信じるすべての者を、赦し、罪から解き放たれます」（祈祷書「朝の祈り」）。神があなたの心に、「しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と語られるやいなや（マタイ九・二）、神の国が来ます。あなたは、「義と、平和と、聖霊における喜びと」を持つのです。

（一〇） ただ、この信仰の性質について、自分の魂を欺かないように気をつけなさい。ある人々は愚かにも、信仰とはただの同意だと考えてきました。聖書の真理や、信条の箇条や、旧約と新約に含まれるすべてのことに、ただ同意することだと言うのです。けれども、信仰はそのようなものではありません。悪霊どもでさえ、私やあなたと同じように、それを信じています！　それでも、悪霊ど

もは今なお悪霊なのです（ヤコブ二・一九）。信仰とは、それに加えて、キリスト・イエスを通して神のあわれみに寄せる、確かな信頼です。赦してくださる神への信頼です。信仰とは、神から与えられる証拠、あるいは確信です。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その」以前の「罪過の責任をこれに負わせることを」なさらなかった、という確信です（第二コリント五・一九）。特に、神の御子が私を愛し、私のためにご自身をささげられたという確信です（ガラテヤ二・二〇）。また、ほかならぬこの私が、今、十字架の血によって神と和解させられているという確信です（コロサイ一・二〇）。

（一一）　あなたは、このように信じていますか。それなら、神の平安があなたの心にあり、「悲しみと嘆きとは逃げ去」ります（イザヤ三五・一〇）。あなたは、もはや神の愛を疑いません。それは真昼の太陽のように明らかです。あなたは叫びます。「主よ、私はとこしえにあなたのいつくしみを歌い、私の口をもってあなたのまことをよろずよに告げ知らせます」（詩篇八九・一）。あなたは、もはや地獄も死も恐れません。かつて「死の力を持つ者」であった「悪魔」も恐れません（ヘブル二・一四）。そうです、神ご自身をさえ、苦しみをもって恐れることはありません。ただ、神のみこころをそこなうことを恐れる、子としてのやさしい恐れを持つだけです。あなたは信じていますか。それなら、あなたの「魂は主をあがめ」、あなたの「霊は救主なる神をたたえ」ます（ルカ一・四六〜四七）。あなたは、「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるし」を受けたことを喜びます（エペソ一・七）。あなたは、「子たる身分を授ける霊」を喜びます（ローマ八・一五）。その霊は、あなたの心の中で「アバ、父よ」と呼ぶのです（ガラテヤ四・六）。あなたは、「不死に満ちた希望」を喜びます（知恵の書三・四）。前のものに向かってからだを伸ばし、「目標を目ざして」、上に召してくださる神の「賞与」を得ようとすることを喜びます（ピリピ三・一三〜一四）。神がご自分を愛する者たちのために備えられた、あらゆる良いものを、切に待ち望むことを喜びます（第一コリント二・九）。

（一二）　あなたは今、信じていますか。それなら今、「神の愛が」あなたの「心に注がれている」のです（ローマ五・五）。あなたは神を愛します。神がまず私たちを愛してくださったからです（第一ヨハネ四・一九）。そして、神を愛するので、兄弟をも愛します（第一ヨハネ四・二一）。「愛、喜び、平和」に満たされて、あなたは「寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」にも満たされます。また、同じ御霊のほかのすべての実にも満たされます（ガラテヤ五・二二〜二三）。一言で言えば、聖なる、天的な、神的な、あらゆる心の状態に満たされるのです。あなたは今や覆いを取り除かれ、「顔おおいなしに、主の栄光を」見つめています。主の栄光ある愛を、あなたがそれに似せて造られた栄光あるかたちを見つめています。そのとき、あなたは「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」のです。「これは霊なる主の働きによる」のです（第二コリント三・一八）。

（一三）　この悔い改め、この信仰、この平安、喜び、愛、栄光から栄光へのこの変化。世の知恵は、これを狂気、ただの熱狂、まったくの乱心だと決めつけてきました。けれども、神の人よ（第一テモテ六・一一）、あなたはそれを気にかけてはなりません。それらのどれにも、心を動かされてはなりません。あなたは、自分の信じてきたかたを知っています（第二テモテ一・一二）。あなたの冠がだれにも奪われないようにしなさい（黙示録三・一一）。すでに達し得たところを堅く守り、それに従って進みなさい（ピリピ三・一六）。尊く、大いなる約束のすべてを得るまで、追い求めなさい（第二ペテロ一・四）。また、まだ神を知らないあなたも、むなしい人々のために、キリストの福音を恥じるようになってはなりません（ローマ一・一六）。自分が知りもしないことをそしる人々に（ユダ一〇）、何事についても、うろたえさせられてはなりません（ピリピ一・二八）。神はまもなく、あなたの憂いを喜びに変えてくださいます（ヨハネ一六・二〇）。ああ、あなたの手をなえさせてはなりません！　もうしばらくすれば、神はあなたの恐れを取り去り、慎みの霊を与えてくださいます（第二テモテ一・七）。あなたを「義とする者が近くおられ」ます（イザヤ五〇・八）。「だれが」「罪に定めるのでしょうか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し」、今も、あなたの「ためにとりなして」くださるのです（ローマ八・三四）。

今、あなたのすべての罪を、それがどれほど多くても、携えたまま、神の小羊に身を投げかけなさい。そうすれば今、「私たちの主また救主イエス・キリスト

の」国に「入る恵みが」、あなたに「豊かに与えられる」のです（第二ペテロ一・一一）。

説教八　御霊の最初の実

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者」、すなわち「肉によらず霊によって歩く」者は、「罪に定められることがありません」（ローマ八・一）

（一）「キリスト・イエスにある者」と言うとき、パウロが明らかに意味しているのは、キリストを本当に信じている人々のことです。すなわち、「信仰によって義とされ」、「私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」人々です（ローマ五・一）。このように信じる人々は、もはや肉に従って歩きません。腐敗した性質の衝動に、もう従わないのです。彼らは「肉によらず霊によって歩く」のです。彼らの思いも、言葉も、行いも、すべて、ほむべき神の御霊の導きのもとにあります。

（二）「こういうわけで、今や」このような人々は、「罪に定められることがない」のです。彼らは、神から罪に定められることがありません。神が彼らを、「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって」義としてくださったからです（ローマ三・二四）。神は彼らの「すべての不義をゆるし」（詩篇一〇三・三）、すべての罪をぬぐい去ってくださいました。また、彼らは、自分の内側からも罪に定められることがありません。彼らが受けたのは、「この世の霊ではなく、神からの霊」であり、それは「神から賜わった恵みを悟るため」だからです（第一コリント二・一二）。この御霊は、彼らの「霊と共に」、彼らが「神の子であることをあかしして」くださいます（ローマ八・一六）。これに、彼らの「良心のあかし」が加わります。自分たちは「この世で」、単純さと、神にかなう誠実さとをもってふるまってきた。「人間の知恵によってではなく神の恵みによって」ふるまってきた。良心は、そうあかしするのです（第二コリント一・一二）。

（三）けれども、この聖句は、たびたび誤解されてきました。それも、きわめて危険なしかたで誤解されてきたのです。実に多くの「無学で心の定まらない者たち」が、この聖句に「無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いて」きました（第二ペテロ三・一六）。ギリシャ語ではホイ・アマテイス・カイ・アステーリクトイ（οἱ ἀμαθεῖς καὶ ἀστήρικτοι）です。神に教えられておらず、そのため「信心にかなう真理」に堅く立っていない人々のことです（テトス一・一）。そこで私は、できるかぎりはっきりと、次のことを示したいと思います。第一に、「キリスト・イエスにある者」、「肉によらず霊によって歩く」者とはだれか。

第二に、そのような人々が、どのように「罪に定められることがない」のか。

最後に、いくつかの実践的な結論を引き出して終わります。

【一】キリスト・イエスにある者とはだれか

（一）まず第一に、「キリスト・イエスにある者」とはだれかを示しましょう。それは、キリストの名を信じる人々ではないでしょうか。「自分の義ではなく」、「信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに」見いだされる人々ではないでしょうか（ピリピ三・九）。このように、「その血によるあがない」を受けている人々こそ（エペソ一・七）、まさに「キリストにある」と言われるのです。彼らはキリストのうちにおり、キリストも彼らのうちにおられるからです（ヨハネ六・五六）。彼らは「主につく者」として、「主と一つの霊になる」のです（第一コリント六・一七）。枝がぶどうの木に接がれるように、彼らはキリストに接がれています。彼らは、肢体がかしらに結ばれるように、キリストに結び合わされています。それは言葉では言い表せないしかたです。以前には、彼らの「心に思い浮びもしなかった」しかたです（第一コリント二・九）。

（二）さて、「すべて彼におる者は、罪を犯しません」（第一ヨハネ三・六）。その人は「肉によらず」歩むのです。パウロのいつもの言葉づかいでは、肉とは、腐敗した性質のことです。パウロはガラテヤ人に書き送るとき、この意味で肉という言葉を使っています。「肉の働きは明白です」（ガラテヤ五・一九）。ま

た、その少し前では、こう言います。「御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはありません」（ガラテヤ五・一六）。「御霊によって歩」く者は「肉の欲を満たす」ことがない。このことを証明するために、パウロはすぐにこう付け加えます。「なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからです（この二つは互に相さからうのです）。それは、あなたがたが自分でしようと思うことを、しないためです」（ガラテヤ五・一七）。これが、言葉どおりの訳です。ギリシャ語ではヒナ・メー・ハ・アン・テレーテ・タウタ・ポイエーテ（ἵνα μὴ ἃ ἂν θέλητε, ταῦτα ποιῆτε）です。「その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる」ではありません。それでは、肉が御霊に打ち勝つかのようです。この訳は、使徒の原文と何の関係もないだけではありません。使徒の議論全体を無価値にしてしまいます。そうです、使徒が証明しようとしていることの、まさに正反対を主張しているのです。

（三） キリストに属し、キリストのうちにとどまる人々は、「自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまった」のです（ガラテヤ五・二四）。彼らは、あの肉の働きをすべて避けます。すなわち、姦淫と「不品行」、「汚れ」と「好色」、「偶像礼拝、まじない、敵意、争い」、「そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ」、殺人、「泥酔、宴楽」を避けます（ガラテヤ五・一九～二一）。性質の腐敗が導く、あらゆるたくらみ、言葉、行いを避けるのです。彼らは、自分のうちに苦い根があることを感じています。けれども、「上から力を授けられ」（ルカ二四・四九）、それをいつも足の下に踏みつけています。ですから、その「苦い根がはえ出て」、彼らを「悩ま」すことはできません（ヘブル一二・一五）。それどころか、新たな攻撃を受けるたびに、それはただ、新たに賛美する機会となります。こう叫ぶ機会となるのです。「感謝すべきことには、神は私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を賜わったのです」（第一コリント一五・五七）。

（四） 彼らは今、心においても生活においても、「霊によって歩」いています。彼らは御霊に教えられて、神と隣り人とを愛します。その愛は、「永遠のいのちに至る水が、わきあがる」泉のようです（ヨハネ四・一四）。また、彼らは御霊に導かれて、あらゆる聖なる願いに、あらゆる神的な、天的な気質に入っていきます。そしてついには、心に起こる思いの一つ一つが、「主に聖なる」ものとなるのです（出エジプト二八・三六）。

（五） 「霊によって歩く」人々は、また御霊に導かれて、あらゆる聖なるふるまいに入ります。彼らの言葉は、「いつも、塩で味つけられた、やさしい言葉」です（コロサイ四・六）。神への愛と神への恐れという塩で、味つけられているのです。彼らは、「悪い言葉をいっさい」「口から出」しません。良い言葉だけを語ります。「人の徳を高めるのに役立つような言葉」、「聞いている者の益になる」言葉を語るのです（エペソ四・二九）。また、彼らは、次のことにも昼も夜も励みます。ただ神に喜ばれることだけを行うことです。すなわち、外に現れるすべてのふるまいにおいて、キリストに従うことです。キリストは、私たちが「御足の跡を踏み従うようにと、模範を残され」た方です（第一ペテロ二・二一）。隣り人とのすべての交わりにおいて、公正とあわれみと真実のうちに歩むことです。そして、生活のどんな状況においても、「何事をするにも、すべて神の栄光のために」することです（第一コリント一〇・三一）。

（六） この人々こそ、まことに「霊によって歩く」人々です。彼らは「信仰と聖霊とに満ち」ています（使徒六・五）。そして、神の御霊の本物の実を、心のうちに持ち、生活のうちに、言葉と行いのすべてにおいて現しています。その実とは、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」です（ガラテヤ五・二二～二三）。また、そのほか「すべて愛すべきこと」、「称賛に値するもの」です（ピリピ四・八）。彼らは、「万事につけ、私たちの救主なる神の」福音を「飾る」のです（テトス二・一〇）。そして、すべての人に、十分な証拠を示します。自分たちが、まことに、「イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊」によって動かされているという証拠です（ローマ八・一一）。

【二】 どのように罪に定められることがないのか

（一） 私は第二に、このように「キリスト・イエスにある者」、このように「肉によらず霊によって歩く」者が、どのように「罪に定められることがない」

のかを示すと述べました。

まず第一に、キリストを信じてこのように歩む人々は、過去の罪のために「罪に定められることがない」のです。神は、過去の罪のどれについても、彼らを罪に定められません。その罪は、まるでなかったかのようになっています。その罪は、石のように「海の深みに投げ入れ」られました（ミカ七・一九）。神は「もはや」その罪を「思い出すことは」なさいません（ヘブル八・一二）。神は御子を「立てて」、彼らのために「その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされ」ました。そうして、「今までに犯された罪」の赦しについて、彼らにご自分の「義を示」されたのです（ローマ三・二五）。ですから神は、そのどれ一つも、彼らの責めとはなさいません。その罪は、「その記憶さえ消えうせ」たのです（詩篇九・六）。

（二）　また、彼らは、自分の胸のうちでも罪に定められることがありません。罪責の意識も、神の怒りへの恐れもありません。彼らは、「自分のうちにこのあかしを持って」います（第一ヨハネ五・一〇）。自分が「そそがれた血」にあずかっていることを（ヘブル一二・二四）、意識しているのです。彼らは、「再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのでは」ありません。疑いや、責めさいなむ不確かさをいだかせる霊を受けたのではありません。彼らは、「子たる身分を授ける霊を受けた」のです（ローマ八・一五）。その霊は、彼らの心の中で「アバ、父よ」と呼ぶのです（ガラテヤ四・六）。こうして、彼らは「信仰によって義とされ」（ローマ五・一）、神の平安が彼らの心を支配しています（コロサイ三・一五）。その平安は、赦してくださる神のあわれみを絶えず感じることから流れ出ます。また、神に対して正しい良心が応答することから流れ出ます（第一ペテロ三・二一）。

（三）　ある人は、こう言うかもしれません。「けれども、キリストを信じる者も、ときには神のあわれみを見失うことがあるではないか。ときには、深い闇がその人に下って、もはや『見えないかた』を見ることができなくなる（ヘブル一一・二七）。あがないの血にあずかっているという、自分のうちのあかしを、もはや感じなくなる。そのとき、その人は内側で罪に定められる。再び、自分のうちに死の宣告を受けるのではないか（第二コリント一・九）」。私は答えます。仮にそうだとしましょう。その人が神のあわれみを見ていないとしましょう。それなら、その人は信じる者ではありません。信仰には光が、魂を照らす神の光が含まれているからです。ですから、だれでもこの光を失うかぎり、その間は信仰を失っているのです。確かに、キリストを本当に信じる人も、信仰の光を失うことがありえます。そして、それを失うかぎり、しばらくの間、再び罪に定められることがありえます。けれども、それは、今「キリスト・イエスにある」人々、今キリストの名を信じている人々のことではありません。彼らが信じ、霊によって歩んでいるかぎり、神も彼らを罪に定めず、彼ら自身の心も彼らを罪に定めないからです。

（四）　第二に、彼らは、現在の罪のために、すなわち、今神の戒めに背いていることのために、罪に定められることはありません。彼らは戒めに背かないからです。彼らは「肉によらず霊によって歩く」のです。これが、彼らが神を愛していることの、絶えることのない証拠です。ヨハネがあかししているとおり、「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ること」だからです（第一ヨハネ五・三）。「すべて神から生れた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができません」（第一ヨハネ三・九）。その神の種、すなわち、愛に満ちた聖なる信仰がその人のうちにとどまっているかぎり、その人は罪を犯すことができないのです。その人がこの信仰のうちに自分を守っているかぎり、「悪しき者が手を触れるようなことは」ありません（第一ヨハネ五・一八）。さて、まったく犯していない罪のために、その人が罪に定められないことは明らかです。ですから、このように「御霊に導かれる」人々は、「律法の下にはいない」のです（ガラテヤ五・一八）。すなわち、律法ののろいや、律法による罪の宣告の下にはいないのです。律法は、それを破る者のほかは、だれも罪に定めないからです。たとえば、「あなたは盗んではならない」という神の律法は（出エジプト二〇・一五）、盗む者のほかは、だれも罪に定めません。また、「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という律法は（出エジプト二〇・八）、それを聖としない者だけを罪に定めます。けれども、御霊の実を「否定する律法は」ありません（ガラテヤ五・二三）。使徒は、テモテへの第一の手紙の、あの忘れがたい言葉で、こ

のことをさらにくわしく宣言しています。「私たちが知っているとおり、律法なるものは、法に従って用いるなら、良いもの」です。ただしそれは、神の律法を用いて人に罪を自覚させたり、人を導いたりするときに、次のことを知り、覚えている場合です。ホティ・ディカイオー・ノモス・ウー・ケイタイ（ὅτι δικαίῳ νόμος οὐ κεῖται）。これは、「律法は正しい人のために定められたのではない」い、という意味ではありません。「律法は正しい人に対して置かれていない」という意味です。律法は、正しい人に対して何の力もなく、その人を罪に定める力もないのです。律法が置かれているのは、「不法な者と法に服さない者、不信心な者と罪ある者、神聖を汚す者と俗悪な者」に対してです。「これは、祝福に満ちた神の栄光の福音が示すところ」です（第一テモテ一・八～九、一一）。

（五）第三に、彼らは、内なる罪のために罪に定められることはありません。その罪が今なお残っているとしてもです。性質の腐敗は、信仰によって神の子となった人々のうちにさえ、なお残っています。彼らのうちには、高ぶりと虚栄の種、怒りと情欲と悪い願いの種、そうです、あらゆる種類の罪の種があります。このことは、あまりにも明らかで、否定することはできません。毎日経験することだからです。そのためにパウロは、コリントの人々に語るとき、こうしています。パウロは、そのすぐ前に、彼らが「キリスト・イエスにあって」きよめられた人々だとあかししていました。また、「神によって召され、御子」「イエス・キリストとの交わり」に、すなわち御子にあずかることに、「はいらせていただいた」人々だとも、あかししていました（第一コリント一・二、九）。それなのに、こう宣言しているのです。「兄弟たちよ。私はあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話しました」（第一コリント三・一）。「キリストにある幼な子」とあります。ですから、彼らが「キリストにある」者だったことがわかります。彼らは、低い段階にある信者だったのです。それなのに、彼らのうちには、なんと多くの罪が残っていたことでしょう！「神の律法に従わ」ない、あの「肉の思い」が（ローマ八・七）、なんと多く残っていたことでしょう！

（六）けれども、それにもかかわらず、彼らは罪に定められません。彼らは、自分のうちに肉を、悪い性質を感じています。自分の「心は」「偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」ことを（エレミヤ一七・九）、日ごとに強く感じています。けれども、彼らはそれに屈しません。「悪魔に機会を与え」ません（エペソ四・二七）。あらゆる罪と、すなわち高ぶりや怒りや欲望と、絶えず戦い続けています。そのため、肉に支配されず、なお「霊によって歩」んでいます。そうであるかぎり、「キリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」のです。神は、彼らの従順を、不完全ではあっても誠実なものとして、喜んでくださいます。そして彼らは、「神に対して確信を持」っています（第一ヨハネ三・二一）。自分が神のものであることを、「神が」彼らに「賜わった御霊によって知る」からです（第一ヨハネ三・二四）。

（七）いや、第四に、彼らは、自分のするすべてのことに罪がまといついていることを、絶えず自覚しています。思いにおいても、言葉においても、行いにおいても、完全な律法を全うしていないことを意識しています。自分が、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる」自分の「神を愛」してはいないことを知っています（マルコ一二・三〇）。最善のつとめにさえ、高ぶりや我意が多かれ少なかれ忍び込み、混じり込むのを感じています。神とのもっと直接の交わりの中でさえ、そうです。「大いなる会衆」と共に集まるときも（詩篇二二・二五）、心の「思いと志とを見分ける」方に（ヘブル四・一二）、ひそかに魂を注ぎ出すときも、そうです。彼らは、さまよう思いや、情愛の死んだような鈍さを、絶えず恥じています。それでも、彼らは、神からも自分の心からも、罪に定められることがありません。このような多くの欠けを思うと、彼らはただ、いっそう深く感じるようになるだけです。自分にはいつも、あの「そそがれた血」が必要だと感じるのです（ヘブル一二・二四）。その血は、神の耳に、彼らのために語ってくれます。また、父のみもとにいる「助け主」が必要だと感じるのです（第一ヨハネ二・一）。この方は、「いつも生きていて彼らのためにとりなしておられる」のです（ヘブル七・二五）。このような欠けは、彼らを、「自分の信じてきたかた」から遠ざけるどころではありません（第二テモテ一・一二）。むしろ、いっそう近くへと彼らを押しやるのです。一瞬一瞬、なくてはならないと感じている方のもとへです。同時に、この必要を深く感じれば感じるほど、彼らはいっそう切に願い、いっそう励むようになります。主イエ

スを「受けいれたのだから、彼にあって歩」こうとするのです（コロサイ二・六）。

（八）第五に、彼らは、ふつう弱さの罪と呼ばれるもののために、罪に定められることはありません。むしろ、それをただ弱さと呼ぶほうがよいかもしれません。このように罪を弱さと結びつけると、罪を少しでも認めたり、軽く見たりしているように思われかねないからです。けれども、このようにあいまいで危険な表現を、どうしても残さなければならないとしましょう。それなら私は、弱さの罪とは、意図しない過ちのことだと言いたいと思います。たとえば、本当だと信じていることを言ったのに、実際には偽りだとわかるような場合です。あるいは、知らずに、そのつもりもなく、隣り人を傷つけてしまう場合です。もしかすると、その人に善を行おうとしたときに、そうなるかもしれません。これらは、聖なる、「神に喜ばれ、かつ全き」神の御旨からそれたものです（ローマ一二・二）。けれども、厳密には罪ではありません。「キリスト・イエスにある者」の良心に、何の罪責ももたらしません。それは、神と彼らとの「間を隔て」ることがなく（イザヤ五九・二）、神の御顔の光をさえぎることもありません。それは、「肉によらず霊によって歩く」という彼らの全体の性格と、少しも矛盾しないからです。

（九）最後に、彼らは、自分の力ではどうしようもないことについては、何であれ、「罪に定められることがない」のです。それが内的なことでも外的なことでも、何かをすることでも、何かをしないでおくことでも、そうです。たとえば、聖餐式が行われるのに、あなたがそれにあずからないとします。なぜあずからないのでしょうか。病気で床についているからです。ですから、あずからずにいるほかはありません。そして同じ理由で、あなたは罪に定められないのです。選ぶ余地がないので、罪責もないのです。「心から願って」いるなら、「持たないところによらず、持っているところによって、神に受けいれられる」のです（第二コリント八・一二）。

（一〇）確かに、信じる者も、ときには悲しむことがあるでしょう。魂が切に願うことを、行えないからです。大いなる会衆と共に神を礼拝することを妨げられるとき、その人はこう叫ぶかもしれません。「神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぎます。わが魂はかわいているように神を慕い、いける神を慕います。いつ、私は行って神のみ顔を見ることができるでしょうか」（詩篇四二・一～二）。その人は、再び「多くの人と共に群れをなして行き」、「彼らを神の家に導」きたいと、切に願うかもしれません（詩篇四二・四）。ただ、心の中では、なお「私の思いのままにではなく、みこころのままに」と言っているのです（マタイ二六・三九）。けれども、それでも行けないなら、その人は、罪に定められていると感じることはありません。罪責も、神のご不興も感じません。むしろ、その願いを喜んで手放し、こう言うことができます。「わが魂よ、神を待ち望め。私はなお、わが助け、わが神なる主をほめたたえます」（詩篇四二・一一）。

（一一）ふつう不意打ちの罪と呼ばれるものについて判断するのは、もっと難しいことです。たとえば、いつもは忍耐をもって自分の魂を保っている人が、突然の激しい誘惑にあって、あの「きわめて尊い律法」にそぐわない言い方や行いをしてしまう場合です。「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という律法です（ヤコブ二・八）。このような性質の違反について、一般的な規則を定めるのは、たぶん容易ではないでしょう。一般に、人が不意打ちの罪のために罪に定められるとも、定められないとも、言うことはできません。けれども、信じる者が不意打ちによって過ちに陥るときは、いつでも、多かれ少なかれ罪に定められるようです。その度合いは、その人の意志がどれほど同意していたかによります。罪深い願いや言葉や行いは、自発的である度合いがそれぞれ違います。その度合いに応じて、神のご不興も、魂の負う罪責も、大きくも小さくもなると考えてよいでしょう。

（一二）けれども、もしそうなら、大きな罪責をもたらし、重く罪に定められる不意打ちの罪もあるかもしれません。ある場合には、私たちが不意打ちを受けるのは、故意の、とがめられるべき怠慢のせいだからです。あるいは、魂の眠気のせいだからです。その眠気は、誘惑が来る前に防ぐことも、振り払うこともできたはずなのです。人は、試練と危険が迫っていることを、神から、あるいは人から、前もって警告されているかもしれません。それなのに、心の中で、「しばらくまどろみ、手をこまぬいて、またしばらく休む」と言うかもしれません

（箴言六・一〇）。さて、そのような人が、避けることのできたわなに、あとで気づかずに陥ったとしましょう。気づかずに陥ったということは、言い訳になりません。その人は、危険を予見し、避けることができたはずだからです。このような場合には、たとえ不意打ちであっても、陥ることは、実際には故意の罪です。そして、故意の罪である以上、その罪人は、神からも自分の良心からも、罪に定められずにはすみません。

（一三）　一方、突然の攻撃もありえます。世から、あるいは「この世の神」から（第二コリント四・四）、そして、しばしば私たち自身の悪い心から来る攻撃です。私たちが予見しなかった、また、ほとんど予見できなかった攻撃です。信じる者でさえ、信仰が弱いうちは、こうした攻撃に押し倒されることがあるかもしれません。たとえば、意志がほとんど同意していないのに、ある程度の怒りに、あるいは人を悪く思うことに、押し流されるかもしれません。さて、このような場合、ねたむ神は（出エジプト二〇・五）、疑いもなく、その人に、愚かなことをしたと示されるでしょう。その人は、完全な律法から、キリストのうちにあった思いから、それてしまったことを自覚するでしょう。そして、「神のみこころに添うた悲しみ」をもって悲しみ（第二コリント七・一〇）、愛のうちに神の前で恥じ入るでしょう。けれども、その人が罪に定められる必要はありません。神は、その人の愚かさを責めず、むしろあわれんでくださいます。「父がその子供をあわれむように」です（詩篇一〇三・一三）。また、その人の心も、その人を罪に定めません。その悲しみと恥のただ中でも、なおこう言うことができます。「私は信頼して恐れることはありません。主なる神はわが力、わが歌であり、わが救となられたからです」（イザヤ一二・二）。

【三】　実践的な結論

（一）　残っているのは、これまで考えてきたことから、いくつかの実践的な結論を引き出すことだけです。まず第一に、「キリスト・イエスにある」者、「肉によらず霊によって歩く」者が、過去の罪のために「罪に定められることがない」としましょう。それなら、「なぜこわがるのですか」、「信仰の薄い者」よ（マタイ八・二六）。あなたの罪が、かつては浜べの砂よりも多かったとしても、今キリスト・イエスにあるあなたに、それが何の関係があるでしょうか。「だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのでしょうか。神は彼らを義とされるのです。だれが」「罪に定めるのでしょうか」（ローマ八・三三～三四）。あなたが若い時から、「愛する御子」によって受けいれられたその時までに犯したすべての罪は（エペソ一・六）、もみがらのように吹き去られました。過ぎ去り、失われ、のみ込まれ、もう思い出されることはありません。あなたは今、「霊から生れ」ています（ヨハネ三・六）。それなのに、生まれる前に行ったことで、心を乱したり恐れたりするのでしょうか。恐れを捨て去りなさい！　あなたは、恐れるためにではなく、「愛と慎みとの霊」にあずかるために召されたのです（第二テモテ一・七）。自分の召しを知りなさい！「救主なる神をたたえ」（ルカ一・四七）、キリストを通して父なる神に感謝しなさい！

（二）　あなたは、こう言うでしょうか。「けれども私は、キリストの『血によるあがない』を受けてから（エペソ一・七）、また罪を犯してしまった。だからこそ、私は『みずから恨み、ちり灰の中で悔い』ているのだ（ヨブ四二・六）」。あなたがみずから恨むのは、ふさわしいことです。そして、あなたを「この事にかなう者にして」くださったのは、神なのです（第二コリント五・五）。けれども、あなたは今、信じていますか。神は再び、あなたにこう言わせてくださったでしょうか。「私は知る、私をあがなう者は生きておられます」（ヨブ一九・二五）。「私がいま」生きているのは、「神の御子を信じる信仰によって」です（ガラテヤ二・二〇）。それなら、その信仰が再び、過去のすべてを帳消しにします。あなたは罪に定められることがありません。あなたが神の御子の名を本当に信じるときにはいつでも、そのときより前のあなたの罪はすべて、朝の露のように消えうせます。それなら今、キリストが与えてくださった自由のうちに、「堅く立って」いなさい（ガラテヤ五・一）。キリストは、もう一度、あなたを罪責と罰から解放してくださいました。それだけでなく、罪の力からも解放してくださったのです。ああ、「二度と奴隷のくびきにつながれてはなりません！」（ガラテヤ五・一）。罪の奴隷となる、卑しい、悪魔的なくびきにつながれてはなりません。悪い願い、悪い気質、悪い言葉、悪い行いの奴隷となるくびきにも、つな

がれてはなりません。それは、地獄のこちら側で最もつらいくびきです。奴隷のように人を苦しめる恐れや、罪責や、自分を罪に定める思いのくびきにも、つながれてはなりません。

（三） けれども第二に、「キリスト・イエス」のうちにとどまる者はみな、「肉によらず霊によって歩く」のでしょうか。それなら、こう結論せざるをえません。今、罪を犯している者はだれでも、「この事にあずかることができない」のです（使徒八・二一）。その人は、今すでに、自分の心によって罪に定められています。けれども、もし私たちが「心に責められる」なら、すなわち、自分の良心が、私たちに罪責があるとあかしするなら、疑いもなく、神も私たちを罪に定められます。「神は私たちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じだから」です（第一ヨハネ三・二〇）。ですから、たとえ自分自身を欺くことができても、神を欺くことはできません。また、「私はかつて義とされた。私の罪はかつて赦されたのだ」と言おうとしてはなりません。私はそれを知りません。罪が赦されたのか、そうでないのか、議論するつもりもありません。これほど時がたった今では、いくらかでも確かに知ることは、ほとんど不可能かもしれません。それが本当の、まことの神のみわざだったのか。それとも、あなたが自分の魂を欺いていただけなのか。けれども、このことを、私はこの上なく確かに知っています。「罪を犯す者は、悪魔から出た者です」（第一ヨハネ三・八）。ですから、あなたは「自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者」です（ヨハネ八・四四）。それは否定できません。あなたは、あなたの「父のわざを行っている」からです（ヨハネ八・四一）。ああ、むなしい望みで自分を欺いてはなりません！自分の魂に、「平安、平安」と言ってはなりません。「平安がない」のですから（エレミヤ六・一四）。大声で叫びなさい！「深い淵から」神に「呼ばわ」りなさい（詩篇一三〇・一）。もしかしたら、神があなたの声を聞いてくださるかもしれません。初めのときのように、神のもとに来なさい。みじめな者、貧しい者、罪深い者、あわれむべき者、目の見えない者、裸な者として来なさい（黙示録三・一七）。そして、気をつけて、魂を休ませないようにしなさい。赦してくださる神の愛が、再び現されるまでです。神があなたの「背信をいや」し（エレミヤ三・二二）、「愛によって働く信仰」で、再びあなたを満たしてくださるまでです（ガラテヤ五・六）。

（四） 第三に、「霊によって歩く」人々は、内なる罪がなお残っていても、それに屈しないかぎり、そのために罪に定められることがないのでしょうか。自分のするすべてのことに罪がまといついていても、そのために罪に定められることがないのでしょうか。それなら、不信心のために「心を悩ま」してはなりません（詩篇三七・一）。たとえそれが、まだあなたの心に残っていてもです。あなたがまだ、神の栄光あるかたちに達していないからといって、嘆いてはなりません。高ぶりや我意や不信仰が、あなたのすべての言葉と行いにまといついているからといっても、嘆いてはなりません。また、自分の心のこのすべての悪を知ることを、恐れてはなりません。「知られているように」、自分を知ることを恐れてはなりません（第一コリント一三・一二）。そうです、「思うべき限度を越えて思いあがることなく」いられるように（ローマ一二・三）、神に願いなさい。あなたの絶えざる祈りを、こうしなさい。

私の魂が耐えられるだけ、示してください、
生まれながらの罪の深さを。
すべての不信仰を明らかにしてください、
うちにひそむ高ぶりを。

けれども、神があなたの祈りを聞き、あなたの心の覆いを取り除かれるときが来ます。あなたがどんな霊に属しているかを、あますところなく示されるときが来ます。そのときは、あなたの「信仰がなくならないように」気をつけなさい（ルカ二二・三二）。信仰の盾が、もぎ取られることのないようにしなさい（エペソ六・一六）。へりくだりなさい。ちりの中に身を低くしなさい。自分を無と見なしなさい。「無きもの」以下の、「むなしいもの」と見なしなさい（イザヤ四〇・一七）。けれども、それでも、「心を騒がせるな、またおじけ」てはなりません（ヨハネ一四・二七）。「ほかならぬこの私にも、父のみもとには助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる」（第一ヨハネ二・一）。この確信を、なおしっかりと保ちなさい。「天が地よりも高いように、主の愛は、私の罪よりもなお高い」。ですから、神は罪人のあなたを、あわれんでくださいます！　ま

さにあなたのような罪人を、あわれんでくださるのです！「神は愛です」（第一ヨハネ四・八）。そして、キリストは死んでくださったのです！　ですから、「父ご自身が」あなたを「愛しておいでになる」のです（ヨハネ一六・二七）。あなたは神の子です！　ですから、神はあなたに、「良い物を拒まれることは」決してありません（詩篇八四・一一）。今あなたのうちで十字架につけられている「罪のからだ」全体が、「滅び」ることは良いことでしょうか（ローマ六・六）。それは成し遂げられます！　あなたは、「肉と霊とのいっさいの汚れから」きよめられるのです（第二コリント七・一）。あなたの心に、ただ神への純粋な愛のほかは何も残らないことは、良いことでしょうか。元気を出しなさい！　あなたは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛」するようになるのです（マルコ一二・三〇）。「約束をしてくださったのは忠実なかた」であり（ヘブル一〇・二三）、「このことをしてくださる」のです（第一テサロニケ五・二四）。あなたのなすべきことは、忍耐して、「信仰の働きと、愛の労苦と」を続けることです（第一テサロニケ一・三）。そして、晴れやかな平安のうちに、へりくだった確信のうちに、待つことです。静かに身をゆだね、しかも切に期待しながら、「万軍の主の熱心がこれをなされる」まで待つことです（イザヤ九・七）。

（五）　第四に、「キリストにある」人々、「霊によって歩く」人々が、弱さの罪のために罪に定められないとしましょう。意図しない過ちのためにも、自分ではどうしようもない何事のためにも、罪に定められないとしましょう。それなら、キリストの血を信じるあなたよ、このことでサタンにつけ込まれないように気をつけなさい。あなたは今なお、愚かで弱く、目が見えず、無知です。どんな言葉でも言い表せないほど弱いのです。あなたの心にまだ思い浮かびもしないほど愚かです。「知らなければならないほどの事すら、まだ知って」いません（第一コリント八・二）。あなたには、まだ弱さと愚かさがあります。まだ避けることのできない、その実もあります。けれども、そのどれにも、あなたの信仰を、神への子としての信頼を、揺るがさせてはなりません。主にある平安や喜びを、かき乱させてはなりません。ある人々は、故意の罪について、ある規則を与えています。その規則は、故意の罪の場合には危険かもしれません。けれども、弱さともろさの場合にだけ当てはめるなら、疑いもなく賢明で安全です。「神の人よ」（第一テモテ六・一一）、あなたは倒れたのですか。それでも、そこに倒れたまま、思い悩み、自分の弱さを嘆いていてはなりません。むしろ、柔和にこう言いなさい。「主よ、あなたが御手で私をささえてくださらなければ、私は一瞬ごとに倒れます」。そして、起き上がりなさい！　踊りあがって、歩きなさい！　自分の道を進みなさい！　あなたの「参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬ」きなさい（ヘブル一二・一）。

（六）　最後に、信じる者は、不意打ちを受けて、魂が忌みきらうことに陥ったとしても、罪に定められる必要はありません（ただし、不意打ちを受けたのが、自分の不注意や故意の怠慢のせいではない場合です）。ですから、信じるあなたが、このように過ちに陥ったなら、主に向かって悲しみなさい。それは尊い香油となるでしょう。主の「み前に」「心を注ぎ出」しなさい（詩篇六二・八）。あなたの悩みを、主に打ち明けなさい。そして、力のかぎり主に祈りなさい。主は、あなたの「弱さを思いやることのできないようなかたではない」のです（ヘブル四・一五）。あなたの魂を「強め、力づけ、不動のものとして」くださるように（第一ペテロ五・一〇）、もう二度と倒れないようにしてくださるように、祈りなさい。けれども、それでも主は、あなたを罪に定められません。なぜ、あなたは恐れなければならないのでしょうか。あなたには、「懲らしめが伴」う恐れなど（第一ヨハネ四・一八）、まったく必要ありません。あなたは、あなたを愛してくださる方を愛するのです。それで十分です。愛が増せば、力も増すでしょう。そして、心をつくして主を愛するやいなや、あなたは「なんら欠点のない、完全な、でき上がった」者となるのです（ヤコブ一・四）。平安のうちに、その時を待ちなさい。「平和の神」が、あなたを「全くきよめて」くださる時です。そして、あなたの「霊と心とからだとを完全に守って、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして」くださる時です（第一テサロニケ五・二三）。

説教九　奴隷の霊と子たる身分を授ける霊

「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのです。その霊によって、私たちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）

（一）　パウロはここで、信仰によって神の子となった人々に語っています。パウロは言います。まことに神の子であり、神の御霊を飲んだあなたがたは（第一コリント一二・一三）、「再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのでは」ありません。「あなたがたは子であるのだから、神は」あなたがたの「心の中に」、「御子の霊を送って」くださったのです（ガラテヤ四・六）。あなたがたは、「子たる身分を授ける霊を受けた」のです。「その霊によって、私たちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）。

（二）　奴隷と恐れの霊は、この愛に満ちた、子たる身分を授ける霊から、遠くかけ離れています。奴隷的な恐れだけに動かされている人々は、「神の子」と呼ぶことはできません。けれども、そのうちのある人々は、神の僕と呼ばれてよいでしょう。その人々は、天国から「遠くない」のです（マルコ一二・三四）。

（三）　けれども、残念ながら、人類の大部分は、ここにさえ達していないようです。いや、キリスト教世界と呼ばれているものの大部分でさえ、そうなのです。彼らは、まだ遠く離れています。その思いのどこにも、神がいないのです（詩篇一〇・四）。神を愛する人々は、わずかに見いだされるでしょう。神を恐れる人々は、それよりいくらか多くいます。けれども、大部分の人々は、「目の前には、神に対する恐れがな」く（ローマ三・一八）、心のうちに神への愛もありません。

（四）　あなたがたの多くは、神のあわれみによって、今はもっと良い霊にあずかっています。そのあなたがたも、かつては彼らと同じであり、同じように罪に定められていました。そのときを、おそらく覚えているでしょう。けれども、初めはそれを知りませんでした。日ごとに罪の中に、「血の中にころがりまわって」いたのにです（エゼキエル一六・六）。やがて、ときが来て、あなたがたは恐れの霊を受けました。受けたと言うのは、これもまた神の賜物だからです。そののち、恐れは消えうせ、愛の霊があなたがたの心を満たしたのです。

（五）　第一の心の状態にある人、すなわち恐れも愛もない人は、聖書では「生れながらの人」と呼ばれています（第一コリント二・一四）。奴隷と恐れの霊の下にある人は、ときに「律法の下にある」と言われます（ローマ六・一四）。もっとも、この表現は、ユダヤ教の制度の下にある人を指すことのほうが多いのです。あるいは、ユダヤの律法のすべての儀式と祭儀を守る義務があると、自分で考えている人を指します。けれども、恐れの霊を愛の霊に取りかえた人は、まさに「恵みの下にある」と言われるのです。

さて、私たちがどのような霊に属しているかを知ることは、きわめて大切です。そこで私は、次のことをはっきりと示したいと思います。

第一に、「生れながらの人」の状態。
第二に、「律法の下にある」人の状態。
第三に、「恵みの下にある」人の状態です。

【一】　生れながらの人の状態

（一）　まず第一に、生れながらの人の状態です。聖書は、これを眠りの状態として描いています。そのような人に向かう神の声は、「眠っている者よ、起きなさい」です（エペソ五・一四）。その人の魂は、深い眠りの中にあるからです。霊の感覚は目覚めておらず、霊的な善も悪も見分けません。その「心の目」は閉じています（エペソ一・一八）。固く封じられて、見ることがありません。「雲と暗やみ」が、絶えずその目をおおっています（詩篇九七・二）。その人は、「死の陰の谷」に横たわっているからです（詩篇二三・四）。ですから、その人には、霊的なことを知るための入り口がありません。魂の通り道は、すべてふ

さがれています。そのため、自分にとって最も大切なことについて、ひどく愚かな無知の中にあるのです。その人は、神についてまったく無知です。神について、「知らなければならないほどの事」を何も知りません（第一コリント八・二）。神の律法にも、まったくうとい者です。律法の本当の、内的な、霊的な意味を知らないのです。あの福音的な聖性についても、思いも及びません。それなしには「だれも主を見ることはできない」聖性です（ヘブル一二・一四）。また、自分の「いのちは、キリストと共に神のうちに隠されている」人々だけが見いだす幸いについても（コロサイ三・三）、思いも及びません。

（二） まさにそのために、すなわち、ぐっすり眠っているために、その人は、ある意味で安らかです。目が見えないので、安心してもいます。その人は、「ふん、私はわざわいにあうことがない」と言います（詩篇一〇・六）。四方からその人をおおう闇が、その人を一種の平安のうちに保っているのです。もっとも、平安が「悪魔のわざ」と（第一ヨハネ三・八）、また「地につく」「悪魔的な」思いと（ヤコブ三・一五）、両立できるかぎりでの平安です。自分が穴のふちに立っていることが見えないので、それを恐れません。知らない危険におののくことはできません。恐れるだけの悟りがないのです。なぜ、その人は神を少しも恐れないのでしょうか。神をまったく知らないからです。その人は、心のうちで「神はない」と言わないかもしれません（詩篇一四・一）。あるいは、神は天の円の上に座していて、地で行われることを見おろそうとはしない、と言わないかもしれません。それでも、「神はあわれみ深い」と言って、同じように満足しています。実質においては、エピクロス派と何も変わらないのです。あわれみという、大ざっぱな考えの中に、すべてを一度にのみ込ませてしまうのです。神の聖性も、罪への本質的な憎しみも、神の正義も、知恵も、真実も、ごちゃまぜにのみ込ませてしまうのです。ほむべき神の律法に従わない者に宣告された報復も、少しも恐れません。律法を理解していないからです。その人は、大切なのは、こうすること、すなわち外面で非の打ちどころがないことだと思い込んでいます。律法が、心のあらゆる気質、願い、思い、動きにまで及ぶことが見えないのです。あるいは、律法を守る義務はもうなくなったと思っています。キリストが「律法や預言者を廃するために」来たと思っています（マタイ五・一七）。「おのれの民を」罪「から」ではなく、罪の中にいるままで「救う」ために来た、と思っているのです（マタイ一・二一）。聖性なしに天国へ連れて行くために来た、と思っているのです。キリストご自身が、こう言われたにもかかわらずです。「律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのです」（マタイ五・一八）。また、「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのです」（マタイ七・二一）。

（三） その人が安心しているのは、自分自身についてまったく無知だからです。そのため、「そのうち悔い改める」と言います。いつなのかは、はっきりわかりません。けれども、死ぬまでのいつかには、と言うのです。それがまったく自分の力の内にあると、決めてかかっているのです。「その気になれば、何がそれを妨げるだろうか。一度決心しさえすれば、必ずやり遂げられるのだ！」というわけです。

（四） けれども、この無知が最もはなはだしく目立つのは、学者と呼ばれる人々においてです。生れながらの人が学者であるなら、自分の理性の能力について、意志の自由について、長々と論じることができます。人を道徳的な主体とするには、そのような自由が絶対に必要だ、と論じることができるのです。その人は本を読み、議論し、論証してみせます。人はだれでも、自分の望むとおりにすることができる。自分の目に最も良いと思うとおりに、自分の心を悪にも善にも向けることができる、と。こうして、「この世の神」は、その人の心に、盲目のおおいを二重にかけます。「キリストの栄光の福音の輝き」が、決してその心を照らすことのないようにするためです（第二コリント四・四）。

（五） 自分と神とについての同じ無知から、生れながらの人のうちに、ときには一種の喜びが生じることもあります。自分の知恵と善良さを、自分で祝うという喜びです。また、世が喜びと呼ぶものを、その人はしばしば持っているかもしれません。さまざまな種類の快楽を持つこともあるでしょう。「肉の欲」、「目の欲」、「持ち物の誇」を満たす快楽です（第一ヨハネ二・一六）。とりわけ、多くの財産を持ち、豊かな富を楽しんでいるなら、「紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮」すこともできます（ルカ一六・一九）。そして、このように

「みずから幸な時に」は、疑いもなく、人々はその人をほめるでしょう（詩篇四九・一八）。「あの人は幸いな人だ」と言うでしょう。実際、この世の幸いの中身は、これに尽きるからです。着飾り、訪ね合い、おしゃべりをし、食べ、飲み、「立って戯れ」ることです（出エジプト三二・六）。

（六）　このような境遇にある人は、へつらいと罪という麻薬を飲まされています。その人が、ほかの白昼夢と並んで、自分は大きな自由のうちに歩んでいると思い込んだとしても、驚くにはあたりません。その人は、なんとたやすく思い込むことでしょう。自分は、あらゆる俗な誤りからも、教育による偏見からも自由だ。自分の判断はまったく正しく、あらゆる極端から離れている、と。その人はこう言うかもしれません。「私は、弱く狭い魂の持つあらゆる熱狂から自由だ。迷信からも自由だ。迷信は、いつも『義に過ぎ』る愚か者や臆病者の病だ（伝道七・一六）。偏狭からも自由だ。偏狭は、自由で寛大な考え方を持たない人々に、いつもつきまとうものだ」。そして、悲しいことに、その人がまったく自由であるのは確かなのです。「上からの知恵」からも（ヤコブ三・一七）、聖性からも、心の宗教からも自由です。キリストのうちにあった思いのすべてから、すっかり自由なのです。

（七）　その間ずっと、その人は「罪の奴隷」だからです（ヨハネ八・三四）。日ごとに、多かれ少なかれ罪を犯しています。それでも、心を悩ませません。ある人々の言い方を借りれば、「奴隷になったことなどは、一度もない」のです（ヨハネ八・三三）。罪に定められているとも感じません。その人は、こう言って満足しています（キリスト教の啓示が神から出たものだと信じている、と公言していてもです）。「人間はもろいものだ。私たちはみな弱い。人にはだれでも弱さがある」。もしかすると、聖書を引用するかもしれません。「だって、ソロモンも言っているではないか。『正しい人は、日に七たび罪に倒れる』と（箴言二四・一六）。隣り人よりも良い者であるかのように装う人々は、疑いもなく、みな偽善者か熱狂者だ」。いつか、まじめな思いが心にとどまることがあっても、その人はそれをできるだけ早く押し殺します。「神はあわれみ深く、キリストは罪人のために死んでくださったのだから、なぜ恐れることがあるだろうか」と言うのです。こうして、その人は、自ら進んで罪の奴隷のままでいます。「滅びのなわめ」に甘んじ（ローマ八・二一）、内にも外にも汚れたまま、それで満足しているのです。罪に打ち勝たないだけでなく、打ち勝とうと努めもしません。とりわけ、自分に「からみつく罪」に打ち勝とうとしないのです（ヘブル一二・一）。

（八）　これが、すべての生れながらの人の状態です。その人が、ひどい、恥ずべき違反者であっても、もっと評判の良い、品のある罪人であっても、同じです。後者は、敬虔の形は持っていても、その力は持っていません（第二テモテ三・五）。けれども、そのような人は、どのようにして罪を自覚させられるのでしょうか。どのようにして悔い改めに導かれるのでしょうか。どのようにして律法の下に置かれ、恐れをいだかせる奴隷の霊を受けるのでしょうか。これが、次に考えるべき点です。

【二】　律法の下にある人の状態

（一）　神は、「暗黒と死の陰と」の中に眠っていた人の心に触れられます（ルカ一・七九）。何か恐るべき摂理によって触れられることもあります。また、みことばによって触れられることもあります。そのみことばは、御霊の証明を伴って当てはめられるのです（第一コリント二・四）。その人は、恐ろしく揺り動かされて眠りから覚め、自分の危険に気づきます。一瞬のうちにかもしれませんし、少しずつかもしれませんが、その人の心の目が開かれます。そして今初めて、おおいが一部取り除かれて（第二コリント三・一六）、自分が置かれている本当の状態を見分けるのです。恐ろしい光が、その人の魂に差し込みます。それは、「底知れぬ所」から（黙示録二〇・一）、最も深い淵から、「硫黄の燃えている火の池」から（黙示録一九・二〇）、ほのかに照り出ると思えるような光です。その人はついに、愛に満ちた、あわれみ深い神が、「焼きつくす火」でもあることを見ます（ヘブル一二・二九）。神は正しい、恐るべき神であることを見ます。「おのおのに、そのわざにしたがって報いられる」神です（ローマ二・六）。不信心な者を、あらゆる「無益な言葉」について（マタイ一二・三六）、いや、「心に思いはかること」についてさえ（創世六・五）、さばかれる神です。そ

の人は今、はっきりと悟ります。大いなる聖なる神は、「目が清く、悪を見られない」方です（ハバクク一・一三）。神は、ご自分に逆らうすべての者に報復する方であり、悪しき者に面と向かって報いる方です。そして、「生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいこと」なのです（ヘブル一〇・三一）。

（二） 今、神の律法の内的な、霊的な意味が、その人にぎらぎらと照りつけ始めます。その人は、「戒めは限りなく広い」ことを悟ります（詩篇一一九・九六）。その光から隠れるものは何もないことを悟るのです（詩篇一九・六）。その人は確信します。律法のどの部分も、ただ外面の罪や従順にかかわるだけではない。魂のひそかな奥底で起こることにもかかわる。その奥底は、神の目のほかにはだれの目も見通すことができない、と。今、その人が「あなたは殺してはならない」と聞けば（出エジプト二〇・一三）、神は雷のように語られます。「兄弟を憎む者は人殺しです」（第一ヨハネ三・一五）。兄弟にむかって「ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれる」のです（マタイ五・二二）。律法が「あなたは姦淫してはならない」と言えば（出エジプト二〇・一四）、主の声がその人の耳に響きます。「情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのです」（マタイ五・二八）。こうして、その人は、あらゆる点で、「神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭」いことを感じます。みことばは、その人の「精神と霊魂と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとお」すのです（ヘブル四・一二）。自分が「こんなに尊い救をなおざりにして」きたことを（ヘブル二・三）、自覚しているので、なおさらそう感じます。また、自分が「神の子を踏みつけ」てきたことを、自覚しているからです。神の子は、その人を罪から救おうとしてくださったのにです。そして、「契約の血を汚れたもの」とし、ありふれた、きよめる力のないものと見なしてきたことを、自覚しているからです（ヘブル一〇・二九）。

（三） その人は、「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされている」ことを知っています。「この神に対して、私たちは言い開きをしなくてはならない」のです（ヘブル四・一三）。そのように、自分自身も裸であることを見ます。自分が「つづり合わせ」た「いちじくの葉」を（創世三・七）、すべてはぎ取られています。宗教や徳を装うみすぼらしい見せかけも、神に罪を犯したことへのみじめな言い訳も、すべてはぎ取られているのです。今、その人は、自分を昔のいけにえのように見ます。いわば首から下まで切り裂かれ、内側のすべてがさらけ出されているのです。その人の心はむき出しになり、それがすべて罪であることを見ます。心は「よろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」のです（エレミヤ一七・九）。心は、舌では言い表せないほど、まったく腐敗し、忌まわしいものです。そこには「善なるものが宿っていない」こと（ローマ七・一八）、ただ不義と不信心だけがあることを見ます。心のあらゆる動き、あらゆる気質と思いが、「いつも悪い事ばかり」なのです（創世六・五）。

（四） その人は、ただ見るだけではありません。言い表せない魂の動きによって、自分のうちに感じるのです。自分は、心の罪のためだけでも、「消えない火」の中に投げ込まれて当然だ（マルコ九・四三）。たとえ生活に責められるところがなかったとしても、そうだ、と。もっとも、その生活に責められるところがないことはなく、ありえません。「悪い木が良い実をならせることはできない」からです（マタイ七・一八）。その人は感じます。「罪の支払う報酬は」、すなわち罪の正当な報いは、何よりも自分の罪の報いは、「死である」と（ローマ六・二三）。それは「第二の死」（黙示録二〇・一四）、死ぬことのない死、「からだも魂も地獄で滅ぼ」されることです（マタイ一〇・二八）。

（五） ここで、その人の心地よい夢は終わります。惑わしの安らぎも、偽りの平安も、むなしい安心も終わります。その喜びは今、「雲のように消えうせ」ます（ヨブ三〇・一五）。かつて愛した快楽も、もはや楽しませてはくれません。快楽は味がしなくなります。その人は、吐き気を催させる甘さを忌みきらいます。快楽を「負うのに疲れ」るのです（イザヤ一・一四）。幸いの影は逃げ去り、忘却の中に沈みます。こうして、その人はすべてをはぎ取られ、「休み場を求めて」あちこちとさまよいますが、「見つからない」のです（マタイ一二・四三）。

（六） あの麻薬の煙が今は消え去り、その人は、痛む心の苦しみを感じます。魂の上に解き放たれた罪は、完全な悲惨であることを知ります。それが高ぶりでも、怒りでも、悪い願いでも、我意でも、悪意でも、ねたみでも、復讐心で

も、そのほかの何であってもです。その人は、失った祝福と、身に降りかかったのろいのために、心の悲しみを感じます。このように自分を滅ぼし、自分に与えられたあわれみを侮ったことへの、悔恨を感じます。恐れも感じます。神の怒りと、その怒りがもたらすものとを、生々しく感じるからです。自分が受けて当然の罰、頭上にかかっているのが見える罰を、生々しく感じるからです。死への恐れを感じます。死は、その人にとって地獄の門、永遠の死への入り口だからです。悪魔への恐れを感じます。悪魔は、神の怒りと正しい報復とを執行する者だからです。人への恐れを感じます。人々がその人のからだを殺すことができれば、それによって、からだも魂も地獄に突き落とすことになるからです。恐れは、ときにはきわめて高まります。そのため、あわれな、罪深い、罪責を負った魂は、何にでも、何でもないものにも、影にも、「木の葉の動く」のにも、おびえるのです（レビ二六・三六）。そうです、ときには狂気と紙一重にさえなるかもしれません。人を「酒にではなく酔っている」者にし（イザヤ五一・二一）、記憶や悟りや、あらゆる生まれつきの能力の働きを止めてしまうのです。ときには、絶望のまさに瀬戸際にまで近づくかもしれません。そのため、死という名前にさえおののく人が、それでも、いつでも死に飛び込もうとするかもしれません。いのちよりもむしろ「息の止まること」を選ぼうとするのです（ヨブ七・一五）。このような人が、昔のあの人のように、「心の激しい騒ぎによってうめき叫」ぶのも無理はありません（詩篇三八・八）。こう叫ぶのも無理はありません。「人の心は病苦をも忍ぶ、しかし心の痛むときは、だれがそれに耐えましょうか」（箴言一八・一四）。

（七）今、その人は、本当に罪から抜け出したいと願い、罪と格闘し始めます。けれども、力のかぎり努めても、打ち勝つことができません。罪のほうが、その人よりも強いのです。その人は、なんとかして逃れたいと思います。けれども、固く「閉じこめられて、のがれることはできません」（詩篇八八・八）。罪を犯すまいと決心しても、なお罪を犯し続けます。わなを見て、それを忌みきらいながら、その中に駆け込むのです。その人の誇る理性は、この程度にしか役に立ちません。ただ罪責を重くし、悲惨を増すだけなのです。これが、その人の意志の自由です。悪に対してだけ自由なのです。「不義を水のように飲む」自由（ヨブ一五・一六）、生ける神からますます遠くさまよう自由、ますます「恵みの御霊を侮る」自由なのです（ヘブル一〇・二九）。

（八）自由になろうと努め、願い、骨折れば骨折るほど、その人は自分の鎖を感じます。罪の重い鎖です。サタンはそれでその人を縛り、「その欲するままに」とりこにして引いて行くのです（第二テモテ二・二六）。どれほど不平を言っても、その人はサタンの僕です。逆らっても、勝つことはできません。その人は、罪のために、なお奴隷の状態と恐れの中にあります。たいていは、何か外面の罪のためです。生まれつきか、習慣か、外の事情によって、特に陥りやすい罪のためです。けれども、いつも必ず、何か内なる罪のためです。何か悪い気質や、汚れた情愛のためです。その罪にいらだてばいらだつほど、罪はますます勢いを増します。鎖にかみつくことはできても、断ち切ることはできません。こうして、その人は果てしなく苦闘します。悔い改めては罪を犯し、また悔い改めては罪を犯します。ついには、このあわれな、罪深い、無力な者は、「途方にくれ」（詩篇一〇七・二七）、ただうめくことしかできなくなります。「私は、なんというみじめな人間なのでしょう。だれが、この死のからだから、私を救ってくれるでしょうか」（ローマ七・二四）。

（九）「律法の下にある」人、恐れと奴隷の霊の下にある人の、この格闘の全体を、使徒は前の章で見事に描いています。目覚めた人の身になって語っているのです。使徒は言います。「私はかつては、律法なしに生きていました」（ローマ七・九）。私には、多くのいのちと知恵と力と徳がありました。そう思っていたのです。「戒めが来るに及んで、罪は生き返り、私は死にました」（ローマ七・九～一〇）。戒めが、その霊的な意味において、神の力をもって私の心に来ました。そのとき、私の生まれながらの罪はかき立てられ、いらだち、燃え上がりました。そして、私の徳はすべて死に絶えたのです。「そして、いのちに導くべき戒めそのものが、かえって私を死に導いて行くことがわかりました。なぜなら、罪は戒めによって機会を捕え、私を欺き、戒めによって私を殺したからです」（ローマ七・一〇～一一）。戒めは、思いがけず私に臨み、私の望みをすべて殺しました。そして、生のさなかにあって私は死のうちにあったことを、はっきりと示したのです。「このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒め

も聖であって、正しく、かつ善なるものです」（ローマ七・一二）。私はもはや、律法を責めません。自分自身の心の腐敗を責めるのです。私は、「律法は霊的なものである」と認めます。「しかし、私は肉につける者であって、罪の下に売られているのです」（ローマ七・一四）。私は今、律法の霊的な性質を見ます。そして、肉につける、悪魔的な自分の心が、「罪の下に売られ」、まったく奴隷にされているのを見ます。金で買われ、まったく主人の意のままにされた奴隷のようにです。「私は自分のしていることが、わかりません。なぜなら、私は自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからです」（ローマ七・一五）。これが、私のうめいている奴隷の状態です。これが、私の厳しい主人の暴虐です。「善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がありません。すなわち、私の欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っているのです」（ローマ七・一八～一九）。私は、「善をしようと欲している私に、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見ます」。この法則とは、内側から強いる力のことです。「すなわち、私は、内なる人としては神の律法を喜んでいる」のです（ローマ七・二二～二三）。喜んでいるとは、同意しているということです。内なる人とは、私の「心」のことです（ローマ七・二三）。使徒は、すぐあとに続く言葉で、自分でそう説明しています。また、ホ・エソー・アントローポス（ὁ ἔσω ἄνθρωπος）、すなわち内なる人という言葉は、ほかのギリシャ語の著作家たちもみな、そう理解しています。「私の肢体には別の律法があって」、すなわち別の強いる力があって、「私の心の法則に対して戦いをいどみ」ます。心とは、内なる人のことです。「そして、肢体に存在する罪の法則」、すなわち罪の力「の中に、私をとりこにしているのを見ます」（ローマ七・二三）。いわば、私を征服者の戦車の車輪につないで引きずり、私の魂が忌みきらうことそのものの中へ連れて行くのです。「私は、なんというみじめな人間なのでしょう。だれが、この死のからだから、私を救ってくれるでしょうか」（ローマ七・二四）。だれが、この無力な、死につつある生から、罪と悲惨の奴隷の状態から、私を救ってくれるでしょうか。このことがなされるまでは、「私自身は、心では神の律法に仕えている」のです。「私自身」とは、むしろ「あの私」、アウトス・エゴー（αὐτὸς ἐγω）、すなわち、私が今その身になって語っているあの人のことです。「心」とは、内なる人のことです。私の心、私の良心は、神の側にあります。「肉では」、すなわちからだでは、「罪の律法に仕えている」のです（ローマ七・二五）。逆らうことのできない力に押し流されているのです。

（一〇） これは、「律法の下にある」人の、なんと生き生きとした肖像でしょうか。振り払うことのできない重荷を感じている人の肖像です。自由と力と愛とを慕いあえぎながら、なお恐れと奴隷の状態の中にいる人の肖像です！　そのみじめな人は、「だれが」、この罪の奴隷の状態から、「この死のからだから、私を救ってくれるでしょうか」と叫びます（ローマ七・二四）。神がその人に、あなたの主イエス・キリストによる神の恵みが救う、と答えてくださるときまで、そうなのです。

【三】 恵みの下にある人の状態

（一） そのとき、このみじめな奴隷の状態は終わります。その人は、もはや「律法の下にあるのではなく、恵みの下にある」のです（ローマ六・一四）。第三に、この状態を考えなければなりません。それは、神の前に、すなわち父なる神の前に、「恵みを得た」人の状態です（創世六・八）。また、聖霊の恵み、すなわち聖霊の力が、心のうちに支配している人の状態です。使徒の言葉で言えば、「子たる身分を授ける霊を受け」、「その霊によって」今、「アバ、父よ」と呼ぶ人の状態です（ローマ八・一五）。

（二） その人は「その悩みのうちに主に呼ばわったので、主は」その人を「その悩みから助け出し」ます（詩篇一〇七・六）。その人の目は、以前とはまったく違うしかたで開かれます。愛に満ちた、恵み深い神を見るために開かれるのです。その人が、「どうぞ、あなたの栄光を私にお示しください」と呼び求めていると（出エジプト三三・一八）、魂の奥底で声を聞きます。「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名をあなたの前にのべましょう。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれみます」（出エジプト三三・一九）。まもなく、「主は雲の中にあって下り」、「主の名を宣べられ」ます（出エジプト三四・五）。そのとき、その人は見ます。肉と血の目によって

ではありませんが、見るのです。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」を見るのです（出エジプト三四・六～七）。

（三）　今、天の、いやしの光が、その人の魂に差し込みます。その人は、「その刺した者を見」ます（ゼカリヤ一二・一〇）。そして、「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神」が、その人の「心を照して」くださいます（第二コリント四・六）。その人は、イエス・キリストの御顔に輝く、神の栄光ある愛の光を見ます。その人は、感覚では「まだ見ていない事実」について（ヘブル一一・一）、神からの確証を持っています。「神の深み」についての確証です（第一コリント二・一〇）。とりわけ、神の愛についての確証です。イエスを信じる者を赦してくださる、神の愛についての確証です。その光景に圧倒されて、その人の魂全体が叫びます。「わが主よ、わが神よ」（ヨハネ二〇・二八）。その人は、自分のすべての不義が、あの方の上に「おかれた」のを見るからです（イザヤ五三・六）。あの方は、「十字架にかかって」、それを「ご自分の身に負われた」のです（第一ペテロ二・二四）。その人は、自分の罪を「取り除く神の小羊」を見つめます（ヨハネ一・二九）。今、その人は、なんとはっきりと見分けることでしょう。「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」（第二コリント五・一九）、「私たちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、私たちが、彼にあって神の義となるため」だったことを（第二コリント五・二一）。また、自分自身も、あの「契約の血」によって（ヘブル一〇・二九）神と和解させられたことを、なんとはっきりと見分けることでしょう！

（四）　ここで、罪の罪責も力も終わります。その人は今、こう言うことができます。「私はキリストと共に十字架につけられました」（ガラテヤ二・一九）。それでも、私は生きています。「生きているのは、もはや、私ではありません。キリストが、私のうちに生きておられるのです」。「私がいま肉にあって」、すなわちこの死ぬべきからだにあって、「生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのです」（ガラテヤ二・二〇）。ここで、悔恨も、心の悲しみも、痛む心の苦しみも終わります。神は、その人の嘆きを喜びに変えてくださいます（詩篇三〇・一一）。神は「傷つけ」ましたが、今はその御手が「包み」ます（ヨブ五・一八）。ここで、あの恐れをいだかせる奴隷の状態も終わります。「その心は主に信頼してゆるがない」からです（詩篇一一二・七）。その人は、もはや神の怒りを恐れることはありません。その怒りが今は自分から離れ去ったことを、知っているからです。神を、もはや怒れる審判者としてではなく、愛に満ちた父として仰ぐからです。悪魔を恐れることもありません。悪魔は、「上から賜わるのでなければ」、「なんの権威もない」と知っているからです（ヨハネ一九・一一）。地獄も恐れません。天の御国の世継ぎだからです。したがって、死を恐れることもありません。その人はかつて、「死の恐怖のために」長年のあいだ「奴隷となっていた」のです（ヘブル二・一五）。むしろ、その人は知っています。「地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてある」ことを（第二コリント五・一）。そして、「天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら」、「苦しみもだえて」いるのです（第二コリント五・二）。この地上の家を脱ぎ捨てたいと、うめいています。「死ぬべきものがいのちにのまれてしまう」ためです（第二コリント五・四）。その人は知っているからです。その人を「この事にかなう者にしてくださったのは、神」です。「神はその保証として御霊を」その人に「賜わった」のです（第二コリント五・五）。

（五）　そして、「主の霊のあるところには、自由があります」（第二コリント三・一七）。罪責と恐れからの自由だけではありません。罪からの自由です。あらゆるくびきの中で最も重いくびき、あらゆる奴隷の状態の中で最も卑しい奴隷の状態からの自由です。その人の労苦は、今は「むだになることはない」のです（第一コリント一五・五八）。「わなは破れて」、その人は「のがれ」ました（詩篇一二四・七）。その人は、努めるだけでなく、勝ちを得ます。戦うだけでなく、打ち勝ちもするのです。その人は、「もはや、罪の奴隷となることがない」のです（ローマ六・六）。その人は、「罪に対して死んだ者であり」、「神に生きている者」です（ローマ六・一一）。罪は今、その人の「死ぬべきからだ」においてさえ支配せず、その人は「その情欲に従」いません（ローマ六・一二）。その人は、自分の「肢体を不義の武器として罪にささげ」ず、「義の武器として神に

ささげ」ます（ローマ六・一三）。今、「罪から解放され、義の僕となった」からです（ローマ六・一八）。

（六）　こうして、その人は、「私たちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得て」おり（ローマ五・一）、「神の栄光にあずかる希望をもって喜んで」います（ローマ五・二）。そして、あらゆる罪に、すなわちあらゆる悪い願い、気質、言葉、行いに打ち勝つ力を持っています。その人は、「神の子たちの栄光の自由」の生きた証人です（ローマ八・二一）。神の子たちはみな、「同じ尊い信仰」にあずかっており（第二ペテロ一・一）、自分たちは「子たる身分を授ける霊を受けた」と、声を合わせてあかしします。「その霊によって、私たちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）。

（七）　彼らのうちに絶えず「働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせる」のは、この御霊です。御霊は、ご自分のよしとされるところに従って、そうしてくださるのです（ピリピ二・一三）。彼らの心に「神の愛」と、すべての人への愛とを「注」いでくださるのも、この御霊です（ローマ五・五）。こうして御霊は、彼らの心をきよめて、世への愛から、「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」から解き放ってくださいます（第一ヨハネ二・一六）。彼らが怒りと高ぶりから、あらゆる卑しい、度を越した情愛から救い出されるのも、この御霊によります。その結果、彼らは悪い言葉と行いから、あらゆる汚れたふるまいから救い出されます。だれに対しても悪を行わず、あらゆる「良いわざに熱心」になるのです（テトス二・一四）。

（八）　全体をまとめましょう。生れながらの人は、神を恐れも愛しもしません。律法の下にある人は、神を恐れます。恵みの下にある人は、神を愛します。第一の人は、神のことについて光を持たず、まったくの闇の中を歩みます。第二の人は、地獄の苦しい光を見ます。第三の人は、天の喜ばしい光を見ます。死の中に眠っている人は、偽りの平安を持っています。目覚めた人には、平安がまったくありません。信じる人は、まことの平安を持っています。神の平安が、その心を満たし、支配しているのです。異邦人は、洗礼を受けていてもいなくても、思い込みの自由を持っています。それは実は放縦です。ユダヤ人、すなわちユダヤ教の制度の下にある人は、重い、つらい奴隷の状態にあります。クリスチャンは、「神の子たちの」まことの「栄光の自由」を楽しんでいます（ローマ八・二一）。目覚めていない悪魔の子は、自ら進んで罪を犯します。目覚めた人は、心ならずも罪を犯します。神の子は「罪を犯さない」のです。自分を守っており、「悪しき者が手を触れるようなことはない」のです（第一ヨハネ五・一八）。結論として言えば、生れながらの人は、打ち勝ちもせず、戦いもしません。律法の下にある人は、罪と戦いますが、打ち勝つことができません。恵みの下にある人は、戦って打ち勝ちます。そうです、「愛してくださったかたによって」、「勝ち得て余りがある」のです（ローマ八・三七）。

【四】　実際的な適用

（一）　人の三つの状態、すなわち生れながらの状態、律法の状態、福音の状態について、ありのままに述べてきました。ここから明らかなように、人類を誠実な者と不誠実な者とに分けるだけでは十分ではありません。人は、これらのどの状態においても誠実でありえます。「子たる身分を授ける霊」を持っているときだけでなく、「恐れをいだかせる奴隷の霊」を持っている間も、そうです（ローマ八・一五）。いや、この恐れも愛も持っていない間でさえ、誠実でありうるのです。疑いもなく、誠実なユダヤ人や誠実なクリスチャンがいるのと同じように、誠実な異邦人もいるからです。ですから、誠実であるということは、その人が神に受けいれられた状態にあることを、決して証明しません。

ですから、ただ自分が誠実であるかどうかだけでなく、「はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味」しなさい（第二コリント一三・五）。あなたがたの魂を支配している原理は何か、念入りに吟味しなさい。それは、あなたがたにとってきわめて大切なことだからです。それは神への愛でしょうか。神への恐れでしょうか。それとも、そのどちらでもないのでしょうか。むしろ、世への愛ではないでしょうか。快楽への愛、あるいは利得や安楽や評判への愛ではないでしょうか。もしそうなら、あなたがたは、ユダヤ人のところまでも来ていません。まだ、ただの異邦人なのです。あなたがたの心のうちに、天があるでしょうか。いつも「アバ、父よ」と呼ぶ、子たる身分を授ける霊を持っているで

しょうか。それとも、悲しみと恐れに打ちのめされて、「陰府の腹の中から叫ぶ」ように、神に叫んでいるでしょうか（ヨナ二・二）。それとも、このことのすべてにうとく、私の言っていることが思いも寄らないのでしょうか。異邦人よ、仮面を脱ぎなさい！　あなたは一度も「キリストを着た」（ガラテヤ三・二七）ことがないのです！　素顔で立ちなさい！　天を仰ぎなさい。そして、「世々限りなく生きておられるかた」の前で（黙示録四・九）、認めなさい。あなたは、神の子たちの中にも、神の僕たちの中にも、何の分も持っていないのです！

あなたがだれであっても、問います。あなたは罪を犯していますか、いませんか。犯しているなら、それは自ら進んでですか、心ならずもですか。どちらの場合でも、あなたがだれのものであるかを、神はあなたに告げておられます。「罪を犯す者は、悪魔から出た者です」（第一ヨハネ三・八）。自ら進んで罪を犯しているなら、あなたは悪魔の忠実な僕です。悪魔は、必ずあなたの働きに報いるでしょう。心ならずも犯しているなら、それでもあなたは悪魔の僕です。神があなたを、悪魔の手から救い出してくださいますように！

あなたは日ごとに、あらゆる罪と戦っていますか。そして日ごとに、「勝ち得て余りがある」でしょうか（ローマ八・三七）。それなら、私はあなたを神の子と認めます。ああ、あなたの栄光ある自由のうちに堅く立ちなさい！　あなたは戦っているけれども、打ち勝っていないのですか。勝利を得ようと努めているけれども、得ることができないのですか。それなら、あなたはまだキリストを信じる者ではありません。けれども、追い求めて行きなさい。そうすれば、主を知るようになるでしょう。それとも、あなたはまったく戦わず、気楽な、怠惰な、流行に従う生活を送っているのですか。ああ、あなたはよくも、キリストの名を名のってきたものです。ただ、その名を異邦人の間で辱めるためにです。眠っている者よ、「起きて」、「淵が」あなたを「のむ」前に（詩篇六九・一五）、「あなたの神に呼ばわりなさい」（ヨナ一・六）。

（二）　多くの人が、「思うべき限度を越えて思いあが」り（ローマ一二・三）、自分がどんな状態にあるかを見分けないのは、なぜでしょうか。その理由の一つは、おそらく、魂のこれらの状態が、しばしば混じり合っていることでしょう。ある程度まで、一人の同じ人のうちに同時にあるのです。たとえば、経験の示すところでは、律法の状態、すなわち恐れの状態は、しばしば生れながらの状態と混じり合っています。罪の中でどれほどぐっすり眠っている人でも、ときには多かれ少なかれ目を覚ますものだからです。神の御霊は、人に呼ばれるのを待たれません。そのように、ときには、御霊はご自分の声を聞かせられます。御霊は彼らに「恐れを起させ」ます。そのため、少なくともしばらくの間は、異邦人も「自分がただ、人であることを」知るのです（詩篇九・二〇）。彼らは罪の重荷を感じ、「迫ってきている神の怒りから」のがれたいと切に願います（マタイ三・七）。けれども、それは長続きしません。彼らは、罪の自覚の矢が魂の奥深くまで刺さるのを、めったに許しません。すぐに神の恵みを押し殺し、また「どろの中にころがって」行くのです（第二ペテロ二・二二）。

同じように、福音の状態、すなわち愛の状態は、しばしば律法の状態と混じり合っています。奴隷と恐れの霊を持つ人々のうちで、いつまでも望みのないままでいる人は、ほとんどいないからです。知恵ある、恵み深い神は、そうなることをめったに許されません。「主は」「われらのちりであることを覚えていられる」からです（詩篇一〇三・一四）。また、神は、肉も、ご自分の造られた霊も、ご自分の前で衰え果てることを望まれません（イザヤ五七・一六）。ですから、神は、良いと思われるときに、暗黒に住む者に夜明けの光を与えられます（ルカ一・七九）。神は、ご自分の「もろもろの善」の一部を彼らの「前に通らせ」（出エジプト三三・一九）、ご自分が「祈を聞かれる方」であることを示されます（詩篇六五・二）。彼らは、「イエス・キリストに対する信仰によって与えられる」約束を（ガラテヤ三・二二）、まだはるか遠くにではあっても、見るのです。そして、これによって励まされ、「参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬ」こうとするのです（ヘブル一二・一）。

（三）　多くの人が自分を欺くもう一つの理由は、こういうことです。人はかなり先まで進んでいながら、なお生れながらの状態に、よくても律法の状態にとどまっていることがありえます。そのことを考えないのです。人は、あわれみ深い、慈悲深い気質を持っているかもしれません。人当たりがよく、礼儀正しく、気前がよく、友好的であるかもしれません。ある程度の柔和、忍耐、節制や、そのほか多くの道徳的な徳を持っているかもしれません。あらゆる悪徳を振り払

い、もっと高い徳に達したいという多くの願いを、感じるかもしれません。多くの悪を避けるかもしれません。正義やあわれみや真実にはなはだしく反することは、すべて避けるかもしれません。多くの善を行い、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ（マタイ二五・三五～三六）、やもめや孤児を見舞うかもしれません（ヤコブ一・二七）。公の礼拝に出席し、ひそかに祈り、多くの信仰書を読むかもしれません。それでも、これらすべてにもかかわらず、ただの生れながらの人であるかもしれません。自分自身も神も知らないかもしれません。恐れの霊にも愛の霊にも、同じようにうといかもしれません。「悔い改めて福音を信」じたことがないかもしれないのです（マルコ一・一五）。

けれども、これらすべてに、深い罪の自覚と、神の怒りへの大きな恐れとが加わったとしましょう。あらゆる罪を捨て去り、「すべての正しいことを成就する」ことへの激しい願いが加わったとしましょう（マタイ三・一五）。たびたび「望みをいだいて喜び」（ローマ一二・一二）、愛のひらめきがしばしば魂に触れたとしましょう。それでも、これらは、その人が恵みの下にあること、まことの、生きた、クリスチャンの信仰を持っていることを、証明しません。子たる身分を授ける霊がその人の心にとどまり、絶えず「アバ、父よ」と呼ぶことができるのでなければ、証明しないのです。

（四）　ですから、キリストの名で呼ばれているあなたよ、気をつけなさい。「上に召してくださる」その召しの目標に（ピリピ三・一四）、達しそこなうことのないようにしなさい。生れながらの状態にとどまって安んじることのないように、気をつけなさい。良いクリスチャンと見なされている非常に多くの人々が、その状態にとどまっています。また、律法の状態にとどまって安んじることのないように、気をつけなさい。人々に高く評価されている人々は、たいてい、その状態で生き、死ぬことに満足しています。いや、あなたが達するまで追い求めて行くなら、神はあなたのために、もっと良いものを備えておられます。あなたが召されたのは、「悪霊ども」のように「おののく」ためではありません（ヤコブ二・一九）。神の御使たちのように、喜び、愛するためです。あなたは、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛」するのです（マルコ一二・三〇）。あなたは「いつも喜んで」いるのです。「絶えず祈」るのです。「すべての事について、感謝」するのです（第一テサロニケ五・一六～一八）。あなたは、神のみこころを、「天に行われるとおり、地にも」行うのです（マタイ六・一〇）。ああ、「何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知」りなさい（ローマ一二・二）。今、自分自身を、「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげ」なさい（ローマ一二・一）。あなたが「達し得たところ」を、しっかりと保ちなさい（ピリピ三・一六）。「前のものに向かってからだを伸ばしつつ」、保ちなさい（ピリピ三・一三）。そして、そのときまで保ちなさい。「平和の神が」、あらゆる良いわざにおいてあなたを全うしてくださるときまでです。「イエス・キリストによって、みこころにかなうことを」、あなたのうちに行ってくださるときまでです。「栄光が、世々限りなく神にあるように、アァメン」（ヘブル一三・二〇～二一）。

説教十　御霊のあかし（一）

「御霊みずから、私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかししてくださいます」（ローマ八・一六）

（一）　なんと多くのむなしい人々が、この聖句に無理な解釈をほどこしてきたことでしょう（第二ペテロ三・一六）。彼らは、自分の言っていることも主張していることも、わからないのです（第一テモテ一・七）。そうして、自分の魂に大きな損失を、いや、滅亡をさえ招いてきたのです。なんと多くの人々が、自分の想像の声を、神の御霊のこのあかしと取り違えてきたことでしょう。そこから、悪魔のわざを行いながら、自分は神の子だと、愚かにも思い上がってきたのです。このような人々こそ、本当の意味での熱狂者です。それも、この言葉の最も悪い意味においてです。けれども、彼らにそのことを悟らせるのは、なんと難しいことでしょう。とりわけ、あの「迷いの霊」を深く飲み込んでいる場合には、そうです（第一ヨハネ四・六）。そうなると、彼らは、自分の本当の姿を悟らせようとするどんな努力も、神に敵対することだと見なすでしょう。彼らは、自分たちの霊の激しさと性急さを、熱心に「信仰のために戦う」ことだと呼びます（ユダ三）。その激しさが、彼らを、誤りを悟らせる普通の方法のどれもが届かないところに置いてしまうのです。ですから、まさに「人にはそれはできません」と言ってよいでしょう（マタイ一九・二六）。

（二）　多くの分別のある人々は、この惑わしの恐ろしい結果を見て、それからできるだけ遠ざかろうと努めています。そういう人々が、ときにはもう一方の極端に傾いたとしても、だれが驚くでしょうか。このあかしについては、ほかの人々がひどく誤ってきました。ですから、彼らが、このあかしを持っていると言う人をすぐには信じなくても、驚くことはありません。ひどく乱用されてきた言い回しを使う人を、みな熱狂者と決めつけそうになっても、無理はありません。それどころか、ここで言われているあかし、すなわち証言を、普通のクリスチャンの特権ではないのではないかと疑っても、無理はないのです。むしろ、使徒の時代にだけ属していたと彼らが考える、あの特別な賜物の一つではないか、と疑うのです。

（三）　けれども、私たちは、どちらかの極端に走らなければならないのでしょうか。中道を進むことはできないのでしょうか。あの迷いと熱狂の霊からは、十分に距離を保ちます。それでいて、神の賜物を否定せず、神の子たちの大きな特権も手放さない道です。確かに、できます。そのために、神の御前で、神を恐れつつ、次のことを考えましょう。

第一に、私たちの霊のあかし、すなわち証言とは何か。神の御霊のあかしとは何か。そして、御霊はどのようにして「私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかしして」くださるのか（ローマ八・一六）。

第二に、神の御霊と私たち自身の霊との、この共同のあかしは、生れながらの心の思い上がりや悪魔の惑わしから、どのようにしてはっきりと確かに見分けられるのか。

【一】　私たちの霊のあかしと神の御霊のあかし

（一）　まず、私たちの霊のあかしとは何かを考えましょう。けれども、ここで私は、ある人々にぜひ注意してほしいのです。神の御霊のあかしを、私たち自身の霊の理性的なあかしの中にのみ込ませてしまおうとする人々です。この聖句で、使徒は、私たち自身の霊のあかしだけを語っているどころではありません。そもそも、それを語っているのかどうかさえ疑わしいのです。使徒は、神の御霊のあかしだけを語っているのではないでしょうか。原文は、そのように理解して差し支えないと思われます。使徒は、直前の節で、こう言ったばかりです。あなたがたは、「子たる身分を授ける霊を受けたのです。その霊によって、私たちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）。そして、すぐにこう続けています。アウト・ト・プネウマ・スュンマルテュレイ・トー・プネウマティ・ヘー

モーン・ホティ・エスメン・テクナ・テウー（αὐτὸ τὸ Πνεῦμα συμμαρτυρεῖ τῷ Πνεύματι ἡμῶν, ὅτι ἐσμὲν τέκνα θεοῦ）。いくつかの写本では、初めの語句がト・アウト・プネウマ（τοαὐτο Πνεῦμα）となっています。これは、こう訳すことができます。「同じ御霊が、私たちの霊に、私たちが神の子であることをあかしされる」（ローマ八・一六）。前置詞のスュン（συν）が表しているのは、ただ次のことです。御霊は、私たちが「アバ、父よ」と呼べるようにしてくださるのと同時に、このことをあかしされるのです。けれども、私はこのことで争いません。ほかの多くの聖句と、すべての本当のクリスチャンの経験とが、十分に示しているからです。すべての信者のうちには、自分が神の子であるという、神の御霊のあかしと、自分自身の霊のあかしとの両方があるのです。

（二）　後者、すなわち自分自身の霊のあかしについて言えば、その土台は、神の子たちのしるしを描いている数多くの聖句に置かれています。それらの聖句は、走りながらも読みうるほど明らかです（ハバクク二・二）。また、古今の多くの著作家たちが、それらのしるしを集め、最も強い光のもとに示してきました。さらに光が必要な人も、それを受けることができます。神のみことばの奉仕に連なること、ひそかに神の前でみことばを思いめぐらすこと、神の道を知っている人々と語り合うことによってです。また、神がその人に与えた理性、すなわち悟りがあります。宗教は、これを消すためではなく、完成させるためのものです。使徒の次の言葉のとおりです。「兄弟たちよ。物の考えかたでは、子供となってはいけません。悪事については、すなわち邪悪については、「幼な子となるのはよいが、考えかたでは、おとなとなりなさい」（第一コリント一四・二〇）。この理性によって、人はだれでも、聖書の示すしるしを自分に当てはめ、自分が神の子かどうかを知ることができるのです。たとえば、その人が、第一に、次のことを知っているとします。「すべて神の御霊に導かれている者は」、すなわち、あらゆる聖い気質と行いへと導かれている者は、「神の子」なのです（ローマ八・一四）。これについては、聖書という誤りのない保証があります。第二に、自分はそのように「神の御霊に導かれている」と知っているとします（ローマ八・一四）。そうすれば、たやすくこう結論するでしょう。「だから、私は神の子である」。

（三）　ヨハネが第一の手紙で述べている、あの明らかな言葉のすべても、これと一致しています。「もし、私たちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのです」（第一ヨハネ二・三）。「彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのです。それによって、私たちが彼にあることを知るのです」（第一ヨハネ二・五）。すなわち、私たちがまことに神の子であることを知るのです。「彼の義なるかたであることがわかれば、義を行う者はみな彼から生れたものであることを、知るでしょう」（第一ヨハネ二・二九）。「私たちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っています」（第一ヨハネ三・一四）。「それによって、私たちが真理から出たものであることがわかります」。そして、「神のみまえに心を安んじて」いられるのです（第一ヨハネ三・一九）。それは、私たちが「言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合」っているからです（第一ヨハネ三・一八）。「神が」愛の「御霊を私たちに賜わったことによって、私たちが神に」とどまっていることを「知る」のです（第一ヨハネ四・一三）。また、「神が私たちのうちにいますことは、神が私たちに賜わった」従順な「御霊によって知るのです」（第一ヨハネ三・二四）。

（四）　これらの言葉を書いたときの使徒ヨハネと、彼が書き送ったキリストにある父たちを考えてみましょう。世の初めから今日まで、神の恵みと、私たちの主イエス・キリストを知る知識とにおいて、彼らより進んだ神の子は、おそらくいなかったでしょう。それにもかかわらず、使徒自身も、神の聖所のあの柱たちもみな（黙示録三・一二）、これらのしるしを決して軽んじませんでした。自分たちが神の子であることのしるしとして、信仰を確かにするために、自分の魂に当てはめたのです。それは明らかです。けれども、これはすべて理性的な証拠にすぎません。私たちの霊、すなわち私たちの理性や悟りのあかしにすぎないのです。すべては、次のことに帰着します。これらのしるしを持つ者は、神の子である。ところが、私たちはこれらのしるしを持っている。ゆえに、私たちは神の子である。

（五）　けれども、私たちがこれらのしるしを持っていることは、どのようにしてわかるのでしょうか。この問いが、まだ残っています。私たちが本当に神と

隣り人とを愛し、神の戒めを守っていることは、どのようにしてわかるのでしょうか。注意してください。この問いの意味は、ほかの人々にではなく、私たち自身にどのようにしてわかるのか、ということです。それなら、この問いを出す人に、私は尋ねたいと思います。あなたは、自分が生きていること、今、痛みの中ではなく安らかな状態にあることが、どのようにしてわかるのですか。それを直接に自覚しているのではありませんか。同じ直接の自覚によって、あなたは、自分の魂が神に対して生きているかどうかを知るでしょう。高ぶった怒りの痛みから救われ、柔和で、しとやかな霊の安らぎを持っているかどうかを、知るでしょう（第一ペテロ三・四）。同じ手段によって、自分が神を愛し、神を喜び、神を楽しんでいるかどうかも、感じ取らずにはいられません。同じ手段によって、あなたは、自分を愛するように隣り人を愛しているかどうかを（マタイ二二・三九）、直接に確信するはずです。すべての人を心からいつくしみ、優しさと寛容に満ちているかどうかを、確信するはずです。また、神の子たちの外面のしるしは、ヨハネによれば、神の戒めを守ることです。神の恵みによって、このしるしが自分にあるかどうかも、あなたは自分の胸のうちで疑いなく知っています。あなたの良心は、日ごとにあなたに知らせます。神の名を口にするときは、いつも、まじめさと敬虔な思い、畏敬と神への恐れをもっているかどうかを、知らせるのです。「安息日を覚えて、これを聖と」しているかどうかも（出エジプト二〇・八）、「父と母を敬」っているかどうかも（出エジプト二〇・一二）、知らせます。人々からしてほしいと望むことを、すべての人にしているかどうかも（マタイ七・一二）、「自分のからだを清く尊く保」っているかどうかも（第一テサロニケ四・四）、知らせます。「飲むにも食べるにも」節度を守り、「すべて神の栄光のために」しているかどうかも（第一コリント一〇・三一）、知らせるのです。

（六）　さて、これこそが、まさしく私たち自身の霊のあかしです。すなわち、私たちの「良心のあかし」です（第二コリント一・一二）。神が私たちに、心において聖く、外のふるまいにおいても聖くあるようにしてくださった、という良心のあかしです。それは、子たる身分を授ける霊のうちに、またその霊によって、ある気質を受けたという自覚です。神のみことばが、神の養子とされた子たちのものとして挙げている気質です。すなわち、神とすべての人とに向かう、愛に満ちた心です。その心は、子供らしい信頼をもって父なる神により頼み、神のほかには何も望まず、「思いわずらいを、いっさい神にゆだね」ます（第一ペテロ五・七）。そして、すべての人の子を、熱い、優しい情愛をもって抱くのです。それは、神の御霊によって、私たちが内側で「御子のかたちに似たもの」とされているという自覚です（ローマ八・二九）。また、私たちが神の前で、正義とあわれみと真実のうちに歩み、「みこころにかなうことを、行っている」という自覚です（第一ヨハネ三・二二）。

（七）　けれども、これに加えられ、これと結び合わされている、神の御霊のあかしとは何でしょうか。御霊は、どのようにして「私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかしして」くださるのでしょうか（ローマ八・一六）。「神の深み」を説明する言葉を（第一コリント二・一〇）、人間の言葉の中に見つけるのは困難です。実際、神の子たちが経験することを十分に言い表す言葉は、一つもありません。けれども、おそらく、こう言うことができるでしょう。神に教えられた人がいれば、この表現を正し、和らげ、あるいは強めてほしいと願いつつ、言うのです。御霊のあかしとは、魂の上に与えられる内的な印象です。それによって、神の御霊が私の霊に、直接にあかしされるのです。私が神の子であることを、あかしされるのです。イエス・キリストが「私を愛し、私のためにご自身をささげられた」ことを（ガラテヤ二・二〇）、あかしされるのです。また、私のすべての罪が「ぬぐい去」られ（使徒三・一九）、ほかならぬこの私が神と和解させられたことを、あかしされるのです。

（八）　神の御霊のこのあかしは、事柄の性質そのものからして、私たち自身の霊のあかしに先立つはずです。このことは、次の一つのことを考えるだけで明らかでしょう。私たちは、心において聖く、生活において聖くなければ、自分がそうであると自覚することはできません。内にも外にも聖いという、私たちの霊のあかしを持つことはできないのです。ところが、そもそも聖くなるためには、まず神を愛さなければなりません。それが、すべての聖性の根だからです。そして、神が私たちを愛しておられることを知るまでは、私たちは神を愛することができません。私たちが神を愛するのは、「神がまず私たちを愛してくださった」

からです（第一ヨハネ四・一九）。また、神の御霊が私たちの霊にあかししてくださるまでは、私たちに対する神の赦しの愛を知ることはできません。ですから、神の御霊のこのあかしは、神への愛とすべての聖性とに先立たなければなりません。したがって、それらについての私たちの内的な自覚、すなわち、それらについての私たちの霊のあかしにも、先立たなければならないのです。

（九） 神の御霊が私たちの霊に、こうあかししてくださるときがきます。「神はあなたを愛し、あなたの罪のために、ご自分の御子をあがないの供え物として与えられました（第一ヨハネ四・一〇）。神の御子はあなたを愛し、その血によって、あなたを罪から洗い清められました」（黙示録一・五）。そのとき、そしてそのときに初めて、私たちは神を愛するのです。「神がまず私たちを愛してくださった」からです（第一ヨハネ四・一九）。そして、神のために、兄弟をも愛するのです。そして、私たちは、このことを自覚せずにはいられません。私たちは、「神から賜わった恵みを悟る」のです（第一コリント二・一二）。私たちは、自分が神を愛し、神の戒めを守っていることを知っています。そして、「それによって」また、私たちが「神から出たもの」であることを知るのです（第一ヨハネ三・一九、四・六）。これが、私たち自身の霊のあかしです。私たちが神を愛し、神の戒めを守り続けるかぎり、このあかしは、神の御霊のあかしと結び合わされ続けます。そして、「私たちが神の子であること」をあかしし続けるのです（ローマ八・一六）。

（一〇） 私は、私たち自身の霊のあかしからさえ、神の御霊の働きを締め出そうとしているのではありません。これについて述べてきたことを、そう受け取られては困ります。決してそうではありません。御霊は、私たちのうちに、あらゆる良いことを行われるだけではありません。ご自分のわざを照らし、ご自分が行われたことをはっきりと示してくださるのです。そのため、パウロは、私たちが御霊を受けた大きな目的の一つとして、このことを語っています。それは、「神から賜わった恵みを悟るため」なのです（第一コリント二・一二）。御霊は、私たちの単純さと神にかなう誠実さについて、私たちの「良心のあかし」を強めてくださいます（第二コリント一・一二）。そして、私たちが今、神に喜ばれることを行っていることを、もっと豊かな、もっと強い光のうちに見分けさせてくださるのです。

（一一） それでもなお、こう尋ねられるかもしれません。「神の御霊は、どのようにして、『私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかし』されるのか（ローマ八・一六）。どのようにして、あらゆる疑いを締め出し、私たちが本当に神の子であることを示されるのか」。その答えは、これまでに述べてきたことから明らかです。まず第一に、私たちの霊のあかしについて考えましょう。魂は、自分が神を愛し、神を楽しみ、神を喜んでいるとき、それをじかに、はっきりと感じ取ります。地上の何かを愛し、楽しんでいるときと同じように感じ取るのです。魂は、自分が存在しているかどうかを疑えないのと同じように、自分が愛し、楽しみ、喜んでいるかどうかを疑うことはできません。ですから、次の推論が正しいとしましょう。

今、神を愛し、へりくだった喜びと、聖なる楽しみと、従順な愛とをもって、神を楽しみ、神を喜んでいる者は、神の子である。

ところが、私はこのように神を愛し、神を楽しみ、神を喜んでいる。

ゆえに、私は神の子である。それなら、クリスチャンは、自分が神の子であることを、決して疑うことはできません。前の命題については、聖書が神から出たものであることと同じほど、十分な確信を持っています。また、自分がこのように神を愛していることについては、内的な証拠を持っています。それは、自明と言うほかない証拠です。こうして、私たち自身の霊のあかしは、最も深い内なる確信をもって、私たちの心に示されます。それは、私たちが本当に神の子であることを、あらゆる理にかなった疑いを越えて示すほどなのです。

（一二） 神のあかしが、どのようにして心に示されるのか。そのしかたを、私はあえて説明しようとは思いません。このような知識はあまりに不思議で、私には思いも及びません。これは高くて達することはできません（詩篇一三九・六）。風が吹き、私はその音を聞きます。けれども、それがどのようにしてきて、どこへ行くかは知りません（ヨハネ三・八）。人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれも知りません。それと同じように、神の事柄のしかたも、神の御霊以外には、だれも知らないのです（第一コリント二・一一）。けれど

も、事実は知っています。神の御霊は、信者に、その人が子とされていることについて、確かにあかしを与えてくださいます。そのあかしが魂に臨んでいる間は、信者は、自分が本当に神の子であることを疑えません。日の光をいっぱいに浴びて立っている間、太陽が輝いていることを疑えないのと同じです。

【二】 思い上がりや惑わしとの見分け方

（一） 神の御霊と私たちの霊とのこの共同のあかしは、生れながらの心の思い上がりや悪魔の惑わしから、どのようにしてはっきりと確かに見分けられるのか。これが、次に考えるべきことです。神の救いを願うすべての人にとって、このことを最も深い注意をもって考えることは、きわめて大切です。自分の魂を欺きたくないなら、そうしなければなりません。この点での誤りは、一般に、最も致命的な結果をもたらすことが知られています。誤る人は、取り返しがつかなくなるまで、自分の誤りにめったに気づかないので、なおさらそうなのです。

（二） まず第一に、このあかしは、生れながらの心の思い上がりから、どのようにして見分けられるのでしょうか。確かに、一度も罪を自覚させられたことのない人は、いつでも自分にへつらいがちです。とりわけ霊的なことにおいて、「思うべき限度を越えて思いあが」りがちです（ローマ一二・三）。ですから、肉の思いによっていたずらに誇る人が（コロサイ二・一八）、まことのクリスチャンのこの特権について聞いたとします。その人が、すぐに自分はもうそれを持っていると思い込むようになっても、少しも不思議ではありません。その人は、疑いもなく、自分をまことのクリスチャンの一人に数えているのです。そのような例は、今、世にあふれています。また、いつの時代にもあふれていました。それでは、私たちの霊と共にされる御霊の本当のあかしは、この滅びを招く思い上がりから、どのようにして見分けられるのでしょうか。

（三） 私は答えます。聖書には、両者を見分けるためのしるしが、たくさんあります。聖書は、信者の霊と共にされる神の御霊の、まことの、本物のあかしについて、最も明らかなしかたで描いています。そのあかしに先立つもの、伴うもの、続くものを描いているのです。これらを注意深く量り、心にとめる人は、暗きを光とする必要はありません（イザヤ五・二〇）。その人は、これらすべての点で、御霊の本当のあかしと見せかけのあかしとの間に、大きな違いがあることを見て取るでしょう。その違いはあまりに大きいので、両者を混同する危険はありません。混同する可能性もない、と言ってよいほどです。

（四） 神の賜物を持っているとむなしく思い上がっている人も、本当に望むなら、これらのしるしによって、確かに知ることができるでしょう。自分はこれまで、「迷わす力」に引き渡され、「偽りを信じる」ままにされてきたのだ、と（第二テサロニケ二・一一）。聖書は、その賜物に先立ち、伴い、続くものとして、明らかな、わかりやすいしるしを示しているからです。少し考えれば、そのしるしが自分の魂に一度も見られなかったことを、その人は疑いの余地なく確信するでしょう。たとえば、聖書は、悔い改め、すなわち罪の自覚が、この赦しのあかしに必ず先立つものとして描いています。こう言われています。「悔い改めなさい、天国は近づきました」（マタイ三・二）。「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ一・一五）。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために」、「バプテスマを受けなさい」（使徒二・三八）。「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」（使徒三・一九）。これに従って、私たちの教会も、悔い改めを、赦しの前に、すなわち赦しのあかしの前に、いつも置いています。「神は、まことに悔い改め、その聖なる福音を偽りなく信じるすべての者を、赦し、その罪を解かれます」（祈祷書「朝の祈り」）。「全能の神は、心からの悔い改めとまことの信仰をもってご自分に立ち帰るすべての者に、罪の赦しを約束されました」（祈祷書「聖餐式」）。けれども、その人は、この悔い改めさえ知りません。砕けた悔いた心を、一度も知ったことがないのです（詩篇五一・一七）。その人にとって、「罪を思い出すこと」が「つらい」ことは一度もなく、「罪の重荷」が「耐えがたい」ことも一度もありませんでした（祈祷書「聖餐式」）。その言葉を唱えるとき、その人は、自分の言うことを本気で言ったことがありません。神にお世辞を言っただけなのです。先立つべき神のこのわざが欠けていることだけからでも、その人には、十分すぎるほどの理由があります。自分はただの影をつかんだだけで、神

の子たちの本当の特権を、まだ一度も知ったことがないのだ、と信じるべき理由です。

（五） また、聖書は、神から生れることを、広大な、力強い変化として描いています。神から生れることは、私たちが神の子であるというあかしに先立たなければなりません。それは、「やみから光へ」の変化であり、サタンの支配から「神のみもとへ」の変化です（使徒二六・一八）。「死からいのちへ移」ることであり（第一ヨハネ三・一四）、死人からのよみがえりなのです。使徒は、エペソ人にこう書いています。神は、「自分の罪過と罪とによって死んでいた」あなたがたを、生かしてくださいました（エペソ二・一）。また、こうも書いています。神は、「罪過によって死んでいた私たちを、キリストと共に生かし」、「キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせてくださったのです」（エペソ二・五～六）。けれども、今話している人は、このような変化について、何を知っているでしょうか。このことのすべてに、まったくうといのです。これは、その人にはわからない言葉です。その人は、自分はいつもクリスチャンだった、と言います。そのような変化が必要だったときを、一度も知らないのです。このことからも、その人は、少し考えてみさえすれば、知ることができるでしょう。自分は「霊から生れる者」ではない（ヨハネ三・六）。まだ一度も神を知ったことがない。生まれつきの声を、神の声と取り違えてきたのだ、と。

（六） けれども、その人が過去に何を経験し、何を経験しなかったかは、考えないでおきましょう。今あるしるしによって、私たちは、神の子と、思い上がった自己欺瞞者とを、たやすく見分けることができます。聖書は、主の御霊のあかしに伴う、主にある喜びを、へりくだった喜びとして描いています。それは、人をちりにまで低くする喜びです。赦された罪人に、こう叫ばせる喜びです。「私はまことに卑しい者です（ヨブ四〇・四）。私は何者なのでしょう。私の父の一族は何者なのでしょう（サムエル記上一八・一八）。今は私の目であなたを拝見いたします。それで私はみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（ヨブ四二・五～六）。そして、へりくだりのあるところには、どこにでも、柔和、忍耐、慈愛、寛容があります。そこには、柔らかな、従順な霊があります。言葉では言い表せない、穏やかさと優しさ、魂の柔らかさがあるのです。けれども、思い上がった人が持っていると思っている御霊のあかしに、これらの実が伴っているでしょうか。まったく逆です。その人は、神の恵みに確信を持てば持つほど、高ぶります。ますます自分を高くし、ふるまいのすべてが、ますます傲慢で、思い上がったものになります。自分が強いあかしを持っていると思えば思うほど、周りのすべての人に対して横柄になります。どんな忠告も、ますます受けいれられなくなり、反対されることに、ますます我慢できなくなるのです。もっと柔和で、優しく、教えを受けやすくなるのではありません。もっと「聞くに早く、語るにおそく」なるのでもありません（ヤコブ一・一九）。かえって、ますます聞くにおそく、語るに早くなります。だれからも、ますます学ぼうとしなくなります。気質はますます激しく荒々しくなり、ふるまいはますますせっかちになるのです。そうです、ときには、その人の様子にも、話し方にも、物腰のすべてにも、一種の荒々しさが現れるかもしれません。まるで、事を神の御手から取り上げて、自分で「逆らう者たちを焼きつくす」つもりであるかのようです（ヘブル一〇・二七）。

（七） もう一つあります。聖書は教えています。「神を愛するとは」、すなわち神を愛していることの確かなしるしとは、「その戒めを守ること」です（第一ヨハネ五・三）。また、主ご自身もこう言われます。「わたしのいましめを」、「守る者は、わたしを愛する者です」（ヨハネ一四・二一）。愛は、喜んで従います。愛する方に喜ばれることなら、どんな点でも、喜んで行います。神を本当に愛する人は、神のみこころを、「天に行われるとおり、地にも」行おうと急ぎます（マタイ六・一〇）。けれども、神を愛していると称する、思い上がった人の特徴は、これでしょうか。いいえ、その人の愛は、神の戒めに従わない自由を、守るのではなく破る自由を、その人に与えるのです。その人も、神の怒りを恐れていたころは、神のみこころを行おうと骨折ったかもしれません。けれども今は、自分は「律法の下にあるのではな」いと考えて（ローマ六・一四）、もう律法を守る義務はないと思っています。そのため、以前ほど「良いわざに熱心」ではありません（テトス二・一四）。悪を避けることにも、自分の心を見張ることにも、自分の舌に用心することにも、以前ほど気を配りません。「自分を捨て、

日々自分の十字架を負」うことにも（ルカ九・二三）、以前ほど熱心ではありません。一言で言えば、自分は自由だと思い込んでから、その人の生活の形全体が変わってしまったのです。その人は、もはや「信心のために自分を訓練」することはありません（第一テモテ四・七）。「血肉」とだけでなく、「もろもろの支配と、権威と」格闘することもありません（エペソ六・一二）。苦難を耐え忍ぶことも、苦闘して「狭い戸口からはいるように努め」ることも（ルカ一三・二四）、もうしないのです。いいえ、その人は、天国へのもっと楽な道を見つけたのです。広い、平らな、花の咲く小道です。その道で、その人は自分の魂にこう言うことができます。「たましいよ、さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ」（ルカ一二・一九）。ここから、否定できない明らかさで、次のことが帰結します。その人は、自分自身の霊のまことのあかしを持っていないのです。自分の持っていないしるしを、持っていると自覚することはできません。あのへりくだり、柔和、従順を持っていないのです。また、真理の神の御霊が、偽りをあかしされることはありません。明らかに「悪魔の子」である者を、神の子だとあかしされることはないのです（第一ヨハネ三・一〇）。

（八）あわれな自己欺瞞者よ、自分の正体を見なさい！　自分は神の子だと確信しているあなたよ。「自分のうちにこのあかしを持っている」と言い（第一ヨハネ五・一〇）、そのためにすべての敵をあなどっているあなたよ。あなたは、「はかりで量られて、その量の足りないことがあらわれ」ました（ダニエル五・二七）。それも、聖所のはかりで量られたのです。主の言葉があなたの魂を試し、あなたが「捨てられた銀」であることを明らかにしました（エレミヤ六・三〇）。あなたは、心がへりくだっていません。ですから、今日に至るまで、イエスの御霊を受けていないのです。あなたは、優しくも柔和でもありません。ですから、あなたの喜びには何の価値もありません。それは、主にある喜びではないのです。あなたは、主の戒めを守っていません。ですから、主を愛していないのです。また、「聖霊にあずかる者」でもありません（ヘブル六・四）。したがって、神の言葉が示しうるかぎり確かに、明らかに、次のことが言えます。神の御霊は、あなたの霊と共に、あなたが神の子であることをあかししてはおられません。ああ、神に叫び求めなさい。あなたの目から「うろこのようなものが落ち」るように（使徒九・一八）。あなたが知られているとおりに、あなた自身を知るように（第一コリント一三・一二）。自分のうちに死の宣告を受けるように。そして、死人を生かす声を聞くまで、叫び求めなさい。その声は、こう言うのです。「しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのです（マタイ九・二）。あなたの信仰があなたを救ったのです」（マタイ九・二二）。

（九）「けれども、本当のあかしを自分のうちに持っている人は、どのようにして、それを思い上がりと見分けることができるのか」。では、お尋ねしますが、あなたは、昼と夜とをどのようにして見分けるのですか。光と闇とを、また、星の光やちらちらするろうそくの光と、真昼の太陽の光とを、どのようにして見分けるのですか。両者の間には、それ自体に備わった、明らかな、本質的な違いがあるのではありませんか。そして、あなたの感覚が正しく整っていれば、その違いを、すぐに直接感じ取るのではありませんか。同じように、霊的な光と霊的な闇との間には、それ自体に備わった、本質的な違いがあります。義の太陽が私たちの心を照らす光と（マラキ四・二）、自分でおこした火花から生じるだけの、あのちらちらする光との間にも（イザヤ五〇・一一）、本質的な違いがあるのです。そして、この違いもまた、私たちの霊の感覚が正しく整っていれば、すぐに直接感じ取られるのです。

（一〇）私たちがこれらを見分けるしかたについて、もっと細かな、哲学的な説明を求める人がいます。神の声を知る基準、すなわち内在的なしるしについて、説明を求めるのです。けれども、それは決して答えられることのない要求です。神を最も深く知っている人でさえ、答えられないのです。パウロがアグリッパの前で弁明したとき（使徒二六章）、あの賢いローマ人が、こう言ったとしましょう。「あなたは、神の御子の声を聞いたと言う。どうして、それが御子の声だとわかるのか。どんな基準、どんな内在的なしるしによって、神の声を知るのか。この声を、人の声や御使の声と見分けるしかたを、説明してみよ」。使徒自身が、そのようなくだらない要求に、一度でも答えようとしたと思えるでしょうか。それでも、疑いもなく、使徒はその声を聞いた瞬間に、それが神の声であることを知ったのです。けれども、どのようにしてそれを知ったのかを、だれが説明できるでしょうか。おそらく、人にも御使にもできないでしょう。

（一一）もっと身近な話をしましょう。いま神が、ある魂に、「あなたの罪はゆるされたのです」と語られるとしましょう（ルカ七・四八）。神は、その魂がご自分の声を知ることを望んでおられるはずです。そうでなければ、むだに語られることになります。そして、神は、これを成し遂げることがおできになります。神が望まれるときには、いつでも、それを行う力が神にあるからです。そして、実際に成し遂げられます。その魂は、「この声は神の声だ」と、まったく確信するのです。けれども、自分のうちにそのあかしを持っている人も、それを持っていない人に説明することはできません。また、説明できると期待すべきでもありません。経験のない人々に神の事柄を証明する自然の手段や、説明する自然の方法があるとしましょう。それなら、生れながらの人も、神の御霊の事柄を見分け、知ることができるでしょう。けれども、それは使徒の主張にまったく反します。使徒は、「御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」と言っているのです（第一コリント二・一四）。御霊によって、すなわち霊の感覚によって判断されるべきなのですが、生れながらの人は、その感覚を持っていません。

（一二）「けれども、自分の霊の感覚が正しく整っていることを、私はどのようにして知るのか」。これもまた、きわめて大切な問いです。人がこの点で誤るなら、果てしない誤りと惑わしの中を走り続けることになりかねないからです。「では、私がそうなっていないこと、御霊の声を取り違えていないことを、どのようにして確信できるのか」。それは、あなた自身の霊のあかしによってです。神に対する正しい良心の応答によってです（第一ペテロ三・二一）。御霊があなたの霊のうちに結ばせた実によって、あなたは神の御霊のあかしを知るでしょう。それによって、あなたは、自分が惑わされていないこと、自分の魂を欺いていないことを知るでしょう。心を支配する御霊の直接の実は、愛、喜び、平和、あわれみの心、謙そん、柔和、慈愛、寛容です（ガラテヤ五・二二～二三、コロサイ三・一二）。そして、外に現れる実は、だれに対しても善を行うこと（ガラテヤ六・一〇）、だれにも悪を行わないこと、光の中を歩くことです（第一ヨハネ一・七）。すなわち、神のすべての戒めに、熱心に、一貫して従うことです。

（一三）同じ実によって、あなたは、神のこの声を、悪魔のどんな惑わしからも見分けるでしょう。あの高ぶった霊は、あなたを神の前にへりくだらせることはできません。悪魔は、あなたの心を柔らかくすることはできませんし、しようともしません。あなたの心を溶かして、まず神を慕う切なる嘆きに、次に子としての愛に変えることも、できませんし、しようともしません。あなたが隣り人を愛せるようにするのは、神と人との敵ではありません。あなたが柔和、慈愛、忍耐、節制を身に着け（コロサイ三・一二）、神の武具で身を固められるようにするのも（エペソ六・一一）、神と人との敵ではないのです。悪魔は、内部で対立し分争することはありません（マルコ三・二六）。自分のわざである罪を滅ぼす者でもありません。いいえ、「悪魔のわざを滅ぼ」すために来られるのは、神の御子だけです（第一ヨハネ三・八）。ですから、聖性は神から出たものであり、罪は悪魔のわざです。それと同じほど確かに、あなたのうちにあるあかしは、サタンからではなく、神から出たものです。

（一四）ですから、あなたはこう言ってよいのです。「言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝します（第二コリント九・一五）。私に、自分の信じてきたかたを知らせてくださる神に、感謝します（第二テモテ一・一二）。神は、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を、私の心の中に送ってくださいました（ガラテヤ四・六）。その御霊は今も、私の霊と共に、私が神の子であることをあかししてくださるのです！」（ローマ八・一六）。そして、あなたの口だけでなく、あなたの生活も、神の誉をあらわすようにしなさい。神は、あなたに証印をおし（第二コリント一・二二）、ご自分のものとされました。ですから、神のものであるあなたのからだと霊とをもって、「神の栄光をあらわしなさい」（第一コリント六・二〇）。愛する者よ、あなたが「この望みをいだいている」なら、「彼がきよくあられるように、自らをきよく」しなさい（第一ヨハネ三・三）。あなたが「神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか」を見つめなさい（第一ヨハネ三・一）。そうしつつ、「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清く」なりなさい（第二コリント七・一）。そして、あなたの思いも言葉も行いも、すべてを、聖なる、霊のいけにえとしなさい。「イ

エス・キリストにより、神によろこばれる」いけにえとしなさい（第一ペテロ二・五、ローマ一二・一）。

説教十二　私たちの霊のあかし

私たちの喜びは、私たちの「良心のあかし」です。良心は、私たちが「この世で」、単純さと神にかなう誠実さとをもってふるまってきたと、あかしします。「人間の知恵によってではなく神の恵みによって」ふるまってきたと、あかしするのです（第二コリント一・一二）。

（一）　これは、キリストを本当に信じるすべての信者の声です。信仰と愛のうちにとどまっているかぎり、そうなのです。主は、「わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがありません」と言われます（ヨハネ八・一二）。そして、信者は、光を持っている間は、その光を喜びます。信者は、「主キリスト・イエスを受けいれた」ように、キリストにあって歩みます（コロサイ二・六）。そして、キリストにあって歩んでいる間は、使徒の勧めが、日ごとにその魂のうちに実現します。「主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい」（ピリピ四・四）。

（二）　けれども、私たちは、砂の上に自分の家を建てないようにしなければなりません。そうでないと、雨が降り、風が吹き、洪水が押し寄せてその家に打ちつけるとき、倒れてしまいます。その倒れ方はひどいのです（マタイ七・二六～二七）。そこで、この説教では、クリスチャンの喜びの本質と根拠とは何かを示そうと思います。大まかに言えば、それが、あの幸いな平安、霊の穏やかな満足であることは、わかっています。ここで使徒が述べているような、良心のあかしから生じる平安と満足です。けれども、これをもっと深く理解するには、使徒の言葉を一つ残らず量ってみる必要があるでしょう。そうすれば、良心とは何を指し、良心のあかしとは何を指すのかが、たやすく明らかになります。また、このあかしを持つ人が、どのようにしていつも喜んでいるのかも（第一テサロニケ五・一六）、明らかになるでしょう。

（三）　まず第一に、良心とは何を指すのでしょうか。だれもが口にするこの言葉は、どういう意味なのでしょうか。この問題については、これまでに、大部の書物が数多く書かれてきました。それを説明するために、古今の学問の宝が残らずあさられてきました。それを考えると、この意味を見いだすのは、きわめて難しいことのように思われるでしょう。けれども、そうした手の込んだ研究のすべてによっても、この問題にはあまり光が当てられてこなかったように思われます。むしろ、そうした著作家の多くは、問題を混乱させてきたのではないでしょうか。「無知の言葉をもって」、「計りごとを暗く」してきたのではないでしょうか（ヨブ三八・二）。それ自体は明らかで、わかりやすい主題を、わかりにくくしてきたのではないでしょうか。難しい言葉を脇に置きさえすれば、正直な心の人はだれでも、すぐにこの事柄を理解するでしょう。

（四）　神は、私たちを考える存在として造られました。今あることを知覚し、過ぎたことを省みる、すなわち振り返ることのできる存在です。とりわけ、私たちは、自分の心や生活の中で起こることを、何でも知覚できます。自分が感じることや行うことを、何でも知ることができます。それも、それが起こっている間にも、起こったあとにも、知ることができるのです。人間は自覚をもつ存在だと言うとき、私たちが意味しているのは、このことです。人間は、自分にかかわる今のことと過ぎたことについて、自覚、すなわち内なる知覚を持っています。自分の気質と外の行いについても、それを持っているのです。けれども、私たちがふつう良心と呼んでいるものは、これ以上のものを含んでいます。良心とは、ただ今の生活を知ることや、これまでの生活を覚えていることではありません。過ぎたことや今のことを覚え、それをあかしすることは、良心の務めの一つ、それも最も小さな務めにすぎません。良心の主な仕事は、弁明したり訴えたり、よしとしたり退けたり、無罪としたり罪に定めたりすることです。

（五）　確かに、近ごろの著作家の中には、これに新しい名をつけ、道徳感覚と呼ぶことにした人々もいます。けれども、古い言葉のほうが、新しい言葉よりよいように思われます。古い言葉のほうが、人々の間でよく使われ、なじみがあ

り、そのためにわかりやすいからです。この理由だけでも、そう言えるのです。また、クリスチャンにとっては、もう一つの理由からも、古い言葉のほうがよいことは否定できません。それが聖書の言葉だからです。神の知恵が、霊感による書物の中で用いることにした言葉だからです。

聖書の中で、とりわけパウロの手紙の中で、この言葉が一般に用いられている意味があります。その意味に従えば、良心とは、一つの能力、すなわち力だと理解してよいでしょう。神が、この世に生れてくるすべての魂に植えつけられた力です。それは、何が正しく何が誤っているかを知覚する力です。自分の心や生活において、自分の気質、思い、言葉、行いにおいて、それを知覚するのです。

（六）けれども、人が正しいことと誤ったことを判断する規準は何でしょうか。良心は何によって導かれるべきなのでしょうか。使徒がほかの箇所で教えているように、異邦人の規準は、神の指によって「その心にしるされている」律法です（ローマ二・一五）。彼らがこの規準によって歩んでいるかどうかを、「彼らの良心も共にあかしをして」います。そして、「その判断が」その間に「あるいは訴え、あるいは弁明し」ます。すなわち、彼らを無罪とし、弁護するのです。原文では、エー・カイ・アポログーメノーン（ἢ καὶ ἀπολογουμένων）です（ローマ二・一四～一五）。けれども、クリスチャンにとって正しいことと誤ったことの規準は、神の言葉、すなわち旧約と新約の書物です。預言者たちと昔の聖なる人々が、「聖霊に感じ」て書いたもののすべてです（第二ペテロ一・二一）。神の霊感を受けて書かれた聖書のすべてです。聖書は確かに、教えるのに、すなわち神のみこころのすべてを教えるのに有益です。それに反することを戒めるのにも、誤りを正しくするのにも有益です。また、義に導くのに、すなわち義のうちに私たちを訓練するのに有益です（第二テモテ三・一六）。

これが、クリスチャンの足のともしび、そのすべての道の光です（詩篇一一九・一〇五）。クリスチャンは、これだけを、正しいことと誤ったこと、本当に善であることと悪であることの規準として受けいれます。聖書が、直接に、あるいは明らかな帰結として命じていることのほかは、何も善とは見なしません。聖書が、明文で、あるいは否定できない推論によって禁じていることのほかは、何も悪とは見なしません。聖書が、直接にも明らかな帰結としても、禁じも命じもしていないことがあります。クリスチャンは、それを、どうでもよい性質のもの、それ自体としては善でも悪でもないものだと信じます。聖書こそが、すべてのことにおいて良心を導くべき、外からの規準の全体であり、ただ一つの規準だからです。

（七）そして、良心が実際にこれによって導かれているなら、その人は、神に対する正しい良心の応答を持っているのです（第一ペテロ三・二一）。正しい良心とは、使徒がほかの箇所で、「良心に責められることのない」状態と呼んでいるものです（使徒二四・一六）。使徒は、あるときには、こう言い表しています。「私は今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがって行動してきました」（使徒二三・一）。同じことを、別のときには、こう言い表しています。「私はまた、神に対しまた人に対して、良心に責められることのないように、常に努めています」（使徒二四・一六）。さて、このためには、どうしても必要なことがあります。第一に、神の言葉を正しく理解することです。すなわち、そこに示されている、私たちについての神の聖なる、喜ばれる、完全な御旨を、正しく理解することです（ローマ一二・二）。規準の意味を知らなければ、その規準によって歩むことはできないからです。第二に、自分自身を本当に知ることが必要です（これに達している人は、なんと少ないことでしょう）。自分の心と生活、すなわち内の気質と外のふるまいとを知ることです。それらを知らなければ、それらを規準と照らし合わせることはできないからです。第三に、私たちの心と生活が、あの規準と一致していることが必要です。すなわち、私たちの気質とふるまい、あるいは思いと言葉と行いが、書かれた神の言葉と一致していることです。これがなければ、たとえ良心があっても、それは悪い良心でしかありえないからです。第四に、規準とのこの一致を、内側で知覚することが必要です。そして、この習慣となった知覚、この内なる自覚そのものが、まさしく正しい良心なのです。使徒の別の言い方で言えば、「神に対しまた人に対して、良心に責められることのない」状態です（使徒二四・一六）。

（八）けれども、このように責められることのない良心を持ちたいと願う人は、正しい土台をすえるように気をつけなさい。覚えておきなさい。良心のこの土台として、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにも

でき」ません。「この土台はイエス・キリスト」です（第一コリント三・一一）。また、心にとめておきなさい。生きた信仰によるのでなければ、だれもキリストの上に建てることはできません。次のようにはっきりあかしできるまでは、だれも「キリストにあずかる者」ではないのです（ヘブル三・一四）。「私がいま生きているのは、神の御子を信じる信仰によって、生きているのです」。今、私の心に現されている方、「私を愛し、私のためにご自身をささげられた」方を信じる信仰によってです（ガラテヤ二・二〇）。信仰だけが、見えない事柄の証拠であり、確信であり、論証です。信仰によって、私たちの悟りの目が開かれ、そこに神の光が注ぎ込まれます。そうして私たちは、神の「おきてのうちのくすしき事を見」るのです（詩篇一一九・一八）。そのすぐれていること、純粋であることを見ます。おきての高さ、深さ、長さ、広さを見ます（エペソ三・一八）。おきてに含まれるすべての戒めについても、それを見るのです。信仰によって、私たちは、「キリストの顔に輝く神の栄光の」光を見つめます（第二コリント四・六）。そして、鏡に映すように、自分のうちにあるすべてのものを、いや、魂の最も奥の動きをも見て取るのです。また、信仰によってだけ、神のあの祝福された愛が、「私たちの心に注がれ」ます（ローマ五・五）。この愛によって、私たちは、キリストが私たちを愛されたように、互いに愛し合うことができるのです（ヨハネ一三・三四）。信仰によって、神のイスラエル全体に（ガラテヤ六・一六）、あの恵み深い約束が成就します。「わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう」（ヘブル八・一〇）。書きつけるとは、刻みつけることです。こうして、彼らの魂のうちに、神の聖なる、完全な律法との全き一致が生み出されます。そして、「すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」るのです（第二コリント一〇・五）。

悪い木が良い実をならせることができないように、良い木が悪い実をならせることもできません（マタイ七・一八）。ですから、信者の心は、そして同じように信者の生活も、神の戒めという規準に、すっかりかなっています。それを自覚して、信者は神に栄光を帰し、使徒と共にこう言うことができるのです。私たちの喜びは、私たちの「良心のあかし」です。良心は、私たちが「この世で」、単純さと神にかなう誠実さとをもってふるまってきたと、あかしします。「人間の知恵によってではなく神の恵みによって」ふるまってきたと、あかしするのです（第二コリント一・一二）。

（九）　私たちはふるまってきた、とあります。使徒は原文で、これをただ一語で言い表しています。アネストラフェーメン（ἀνεστραφημεν）です。けれども、その意味はきわめて広いのです。それは、私たちの物腰のすべてを含みます。いや、魂にかかわることも、からだにかかわることも、内外のあらゆる事柄を含むのです。それは、私たちの心、舌、手、からだの各部分のあらゆる動きを含みます。私たちのすべての行いと言葉に及び、私たちのすべての力と能力の用い方に及びます。神に対しても人に対しても、私たちが受けたあらゆる賜物を用いるしかたに及ぶのです。

（一〇）　私たちは「この世で」ふるまってきた、とあります（第二コリント一・一二）。それも、不信心な者たちの世においてです。神の子たちの間でだけではありません（それなら、比べれば小さなことでしょう）。悪魔の子たちの間で、悪のうちにある人々の間で、ふるまってきたのです。原文ではエン・トー・ポネーロー（ἐν τῷ πονηρῷ）、すなわち「悪しき者の」うちにある人々です（第一ヨハネ五・一九）。これは、なんという世でしょう！　この世は、自分が絶えず吐き出している霊に、なんと深くしみとおっていることでしょう。私たちの神は、善にして善を行われます（詩篇一一九・六八）。それと同じように、この世の神とその子らはみな（第二コリント四・四）、悪であり、許されるかぎり、神のすべての子たちに悪を行います。彼らは、その父と同じように、いつも待ち伏せしています。「食いつくすべきものを求めて歩き回って」いるのです（第一ペテロ五・八）。欺きや力ずく、ひそかな策略やあからさまな暴力を用いて、世のものでない人々を滅ぼそうとします（ヨハネ一七・一六）。絶えず私たちの魂に戦いをいどみます（第一ペテロ二・一一）。古い武器や新しい武器、あらゆる種類のたくらみによって、魂を連れ戻そうと骨折ります。悪魔のわなへ（第二テモテ二・二六）、滅びにいたる広い道へ（マタイ七・一三）、連れ戻そうとするのです。

（一一）　私たちは、このような世で、単純さと神にかなう誠実さとをもって、生活のすべてにおいてふるまってきた、とあります。第一に、単純さをもっ

てです。これは、私たちの主が、目が「澄んで」いることとして勧めておられるものです（マタイ六・二二）。主はこう言われます。「目はからだのあかりです。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいでしょう」（マタイ六・二二）。その意味は、こうです。目がからだにとって果たす役割を、意図は、すべての言葉と行いにとって果たします。ですから、あなたの魂のこの目が澄んでいれば、あなたのすべての行いとふるまいは、光に満ちるでしょう。天の光、すなわち愛と平和と聖霊における喜びの光に満ちるのです（ローマ一四・一七）。

私たちの心が単純であるのは、心の目がひたすら神に注がれているときです。すべてのことにおいて、ただ神だけを目指しているときです。神を、私たちの神、私たちの受ける分、私たちの力、私たちの幸いとして目指すのです。また、私たちのはなはだ大きい報いとして（創世記一五・一）、時においても永遠においても、私たちのすべてとして目指すのです。これが単純さです。揺るがない目当て、ひたむきな意図があるときです。神の栄光をあらわし、神の祝福されたみこころを行い、またそれを忍ぼうとする意図です。その意図が、私たちの魂全体を貫き、心全体を満たし、すべての思いと願いと目的の、絶えない泉となっているときです。

（一二）第二に、私たちは「この世で」、神にかなう誠実さをもってふるまってきた、とあります（第二コリント一・一二）。単純さと誠実さとの違いは、主に次の点にあるように思われます。単純さは意図そのものにかかわり、誠実さはその実行にかかわるのです。そして、この誠実さは、ただ言葉にだけでなく、先に述べたような、ふるまいの全体にかかわります。ここでは、パウロ自身がときに用いる、狭い意味で理解してはなりません。真実を語ること、偽りや悪巧みや見せかけを避けること、という意味ではないのです。もっと広い意味で、単純さによって目指す的に、実際に当たることとして理解すべきです。ですから、ここで誠実さが意味するのは、次のことです。私たちが、実際に、すべてを神の栄光のために語り、行うことです（第一コリント一〇・三一）。私たちのすべての言葉が、ただ神の栄光を目指すだけでなく、実際にそれに役立つことです。私たちのすべての行いが、一筋の流れとなって、この大きな目的に一貫して仕えることです。そして、生涯を通して、まっすぐ神に向かって、絶えず進んでいることです。聖なる道という大路を（イザヤ三五・八）、正義とあわれみと真実の小道を、着実に歩み続けることです。

（一三）使徒は、この誠実さを、神にかなう誠実さ、すなわち神の誠実さと呼んでいます。エイリクリネイア・テウー（εἰλικρίνεια θεοῦ）です。それは、私たちがこれを、異邦人の誠実さと取り違えたり、混同したりしないためです。（異邦人の間にも一種の誠実さがあり、彼らはそれを少なからず尊んでいました。）また、すべてのクリスチャンの徳と同じく、この誠実さの対象と目的とを示すためでもあります。最終的に神に向かわないものは、何であれ、世の貧弱な諸要素の中に沈んでしまうからです。神の誠実さと呼ぶことで、使徒は、その与え主をも指し示しています。「光の父」です。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物」は、この方から「下って来る」のです（ヤコブ一・一七）。このことは、続く言葉で、もっとはっきりと示されています。「人間の知恵によってではなく神の恵みによって」（第二コリント一・一二）。

（一四）「人間の知恵によってではなく」とあります（第二コリント一・一二）。使徒は、こう言っているかのようです。「私たちは、生れながらの悟りの力によっては、この世でこのようにふるまうことはできません。生れながらに身につけた知識や知恵によっても、できません。良識の力によっても、善良な性質の力によっても、よいしつけの力によっても、できません。そうした力では、この単純さを得ることも、この誠実さを実践することもできないのです。それは、私たちの生れつきの勇気と決意のすべてを、また哲学の教えのすべてを、はるかに超えています。習慣の力も、人間の教育の最も精緻な規則も、私たちをここまで訓練することはできません。私パウロも、あらゆる利点に恵まれていましたが、ここに達することはできませんでした。肉にあったかぎり、すなわち生れながらの状態にあったかぎり、達することはできなかったのです。ただ人間の知恵、生れながらの知恵で追い求めていたからです」。

けれども、確かに、もしだれかにできたとすれば、パウロ自身こそ、その知恵によってそこに達しえたでしょう。生れつきの賜物にも教育の賜物にも、パウロ以上に恵まれた人は、ほとんど考えられないからです。パウロの生れつきの能力は、当時地上にいたどんな人にも、おそらく劣らなかったでしょう。そのうえ、

学問のあらゆる恩恵を受けていました。タルソの大学で学び、のちにガマリエルのひざもとで育てられたのです（使徒二二・三）。ガマリエルは、知識においても高潔さにおいても、当時ユダヤ民族全体の中で最も重んじられていた人です。また、宗教教育のありとあらゆる利点も備えていました。パリサイ人であり、パリサイ人の子であって（使徒二三・六）、最も厳格な派で訓練されたのです（使徒二六・五）。その派は、際立った厳格さによって、ほかのすべての派と区別されていました。そしてこの点で、パウロは、「同年輩の多くの者にまさって」「精進し」ていました。神に喜ばれると思うことには何であれ、「だれよりもはるかに熱心であ」りました（ガラテヤ一・一四）。また、「律法の義については落ち度のない者」でした（ピリピ三・六）。けれども、それによって、この単純さと神にかなう誠実さに達することはできませんでした。それはすべて、むだな骨折りにすぎませんでした。パウロは、そのことを深く、身にしみて感じ、ついにこう叫ばずにはいられなかったのです。「私にとって益であったこれらのものを」、「私の主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに」、「損と思うようになりました」（ピリピ三・七～八）。

（一五）　パウロがここに達しえたのは、ただ私たちの主イエス・キリストを「知る知識の絶大な価値」によってでした（ピリピ三・八）。言いかえれば、「神の恵みによって」です（第二コリント一・一二）。これは、ほぼ同じ意味の、別の言い方です。「神の恵み」は、ときには、あの価なしの愛、受けるに値しないあわれみを指します。それによって、罪人である私が、キリストの功績のゆえに、今、神と和解させられているのです。けれども、この箇所では、むしろ聖霊なる神の力を意味しています。神のよしとされるところに従って、私たちの「うちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせる」力です（ピリピ二・一三）。前の意味での神の恵み、すなわち神の赦しの愛が、私たちの魂に示されるとします。するとすぐに、あとの意味での神の恵み、すなわち神の御霊の力が、魂のうちに働き始めます。そして今や、私たちは、人にはできなかったことを、神によって行うことができます（マタイ一九・二六）。今や、私たちは、ふるまいを正しく整えることができます。私たちを強くしてくださるキリストによって、あの愛の光と力のうちに、何事でもすることができます（ピリピ四・一三）。今や、私たちは、「良心のあかし」を持っています。人間の知恵によっては、決して持てなかったあかしです。私たちが「この世で」、単純さと神にかなう誠実さとをもってふるまっていると、良心があかしするのです（第二コリント一・一二）。

（一六）　これこそが、まさしくクリスチャンの喜びの根拠です。ですから、今や、このあかしを自分のうちに持つ人が、どのようにしていつも喜んでいるのかが、たやすくわかるでしょう。その人は、こう言うことができます。「私の魂は主をあがめ、私の霊は救主なる神を」喜びます（ルカ一・四六～四七）。私は神を喜びます。神は、受けるに値しないご自分の愛により、価なしの優しいあわれみにより、「この救いの状態に私を召してくださった」のです（祈祷書「教理問答」）。私は今、神の力によって、その状態に立っています。私は喜びます。神の御霊が、私の霊にあかししてくださるからです。私が小羊の血によって買い取られたことを、あかししてくださるのです。また、小羊を信じて、私が「キリストの肢体、神の子、天の御国を継ぐ者」とされていることを（祈祷書「教理問答」）、あかししてくださるのです。私は喜びます。私に対する神の愛を感じることが、同じ御霊によって、私のうちに、神を愛する心を生み出したからです。また、神のために、すべての人の子を、神が造られたすべての魂を愛する心を生み出したからです。私は喜びます。キリストのうちにあった思いを（ピリピ二・五）、神が私のうちに感じさせてくださるからです。それは、単純さです。心のあらゆる動きにおいて、ひたすら神に目を注ぐことです。「私を愛し、私のためにご自身をささげられた」方に（ガラテヤ二・二〇）、魂の愛の目をいつも注ぐ力です。考えること、語ること、行うことのすべてにおいて、ただ神だけを、神の栄光あるみこころだけを目指す力です。それは、純粋さです。神のほかには何も望まないことです。「肉を、その情と欲と共に十字架につけ」（ガラテヤ五・二四）、「上にあるものを思」い、「地上のものに心を引かれ」ないことです（コロサイ三・二）。それは、聖性です。神のかたちの回復であり、魂が神に「かたどって」新しくされることです（創世記一・二六）。そして、それは、神にかなう誠実さです。私のすべての言葉と行いを、神の栄光に役立つように導く誠実さです。このことでも、私は喜んでいますし、また喜ぶでしょう（ピリピ一・一

八）。私の良心が、聖霊によって私にあかしをしているからです（ローマ九・一）。聖霊が絶えず良心に注ぎ込まれる光によって、私が「召されたその召しにふさわしく歩」んでいることを（エペソ四・一）、あかししているのです。私が「あらゆる種類の悪から遠ざか」り（第一テサロニケ五・二二）、蛇の前から逃げるように罪から逃げていることを、あかししているのです。私が、機会のあるごとに、だれに対しても、あらゆる種類の、できるかぎりの善を行っていることを（ガラテヤ六・一〇）、あかししているのです。私が、一歩一歩、主に従い、みこころにかなうことを行っていることを（第一ヨハネ三・二二）、あかししているのです。私は喜びます。神の聖霊の息吹によって、私のすべてのわざが神にあってなされていることを（ヨハネ三・二一）、見て、感じるからです。いや、私のすべてのわざを私のうちになし遂げてくださるのは神なのだと（イザヤ二六・一二）、見て、感じるからです。私は、心に輝く神の光によって、神の道を歩む力が自分にあることを見て、喜びます。神の恵みによって、その道から右にも左にもそれないことを見て（申命記五・三二）、喜ぶのです。

（一七）成熟したクリスチャンがいつも喜んでいる、その喜びの根拠と本質は、このようなものです。そして、これらすべてのことから、たやすく次のことを推論できます。第一に、これは生れながらの喜びではありません。それは、どんな自然の原因から生じるものでもありません。急に気分が高まることから生じるのではないのです。そういうことは、つかの間の喜びを与えるかもしれません。けれども、クリスチャンはいつも喜んでいるのです。この喜びは、からだの健康や安楽、体質の強さや丈夫さによるものではありえません。病気や痛みの中でも、同じように強いからです。いや、おそらく、それまでよりもはるかに強いのです。多くのクリスチャンは、からだが痛みにすり減らされ、病気でやつれ果てたときに、魂を満たした喜びを知っています。それに比べられるほどの喜びを、ほかには一度も経験したことがないのです。ましてや、外の繁栄や、人々の好意や、この世の財産の豊かさに、この喜びを帰することはできません。神の子たちは、あらゆる外の苦しみによって、信仰が火で試されたときにこそ、主を喜んできたからです。見たことはないが愛している方を、「言葉につくせない」喜びをもって喜んできたのです（第一ペテロ一・七～八）。そして確かに、「この世のちりのように、人間のくずのように」扱われた人々ほど喜んだ人々は（第一コリント四・一三）、ほかにいませんでした。彼らは、あらゆるものに欠けて、あちらこちらと歩きまわり（ヘブル一一・三七）、飢え、寒さに凍え、裸でいました（第二コリント一一・二七）。彼らは、「あざけられ」るだけでなく、「しばり上げられ、投獄されるほどのめに」も会いました（ヘブル一一・三六）。いや、ついには、喜びをもって「自分の行程を走り終え」さえすれば、「このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない」人々でした（使徒二〇・二四）。

（一八）これまでの考察から、第二に、次のことを推論できます。クリスチャンの喜びは、良心が盲目であることから、すなわち善悪を見分けられないことから生じるのではありません。それどころか、クリスチャンは、悟りの目が開かれるまでは、この喜びをまったく知りませんでした。霊的な善悪を見分けるのにふさわしい、霊の感覚を持つまでは（ヘブル五・一四）、この喜びを知らなかったのです。そして今、その魂の目はかすむことがありません。以前には、これほど鋭く見えたことはありませんでした。ごく小さなことも、すばやく感じ取ります。生れながらの人がすっかり驚くほどです。日の光の中では、ちりが見えます。それと同じように、光の中を（第一ヨハネ一・七）、造られたのではない太陽の光の中を歩む人には、罪のちりの一つ一つが見えるのです。その人は、もう良心の目を閉じることもありません。あの眠りは、その人から去ったのです。その魂は、いつもすっかり目覚めています。もうまどろむことも、手をこまぬいて休むこともありません（箴言六・一〇）！　その人は、いつも物見やぐらに立ち、主が自分について何と語られるかに耳を傾けています（ハバクク二・一）。そして、いつもこのことを、「見えないかたを見ている」ことを喜んでいるのです（ヘブル一一・二七）。

（一九）第三に、クリスチャンの喜びは、良心が鈍いこと、まひしていることから生じるのでもありません。確かに、そこから一種の喜びが生じることもあるでしょう。その「無知な心は暗くな」っている人々のうちにです（ローマ一・二一）。その心はまひし、何も感じず、感覚が鈍く、そのために霊的な悟りを欠いています。彼らは、心が無感覚で、何も感じないために、罪を犯すことさえ喜ぶかもしれません。そして、おそらく、それを自由と呼ぶでしょう！　けれど

も、それは実際には、魂の酔いにすぎません。霊の致命的なしびれ、焼き印をおされた良心の（第一テモテ四・二）、愚かな無感覚にすぎないのです。それとは反対に、クリスチャンは、最も鋭い感受性を持っています。以前には思いもよらなかったほどの感受性です。神の愛が心を支配するようになってから、クリスチャンは、かつてないほど柔らかな良心を持つようになりました。そして、神が日ごとの祈りを聞いてくださったことも、クリスチャンの誇りであり、喜びです。その祈りとは、こうです。

ああ、私の柔らかな魂が、逃れ去ることができますように。
忌まわしい悪が、初めて近づいてくるときに。
目のひとみのように敏く、
罪がかすかに触れても、気づくことができますように。

（二〇）　結論を述べます。クリスチャンの喜びは、従順の喜びです。神を愛し、神の戒めを守ることの喜びです。けれども、戒めを守ることによって、行いの契約の条件を果たそうとするかのように、守るのではありません。自分のどんな行いや義によって、神の赦しと受けいれを得ようとするかのように、守るのではないのです。そうではありません。私たちは、キリスト・イエスにある神のあわれみによって、すでに赦され、受けいれられています。また、自分の従順によっていのちを、罪の死からのいのちを得ようとするかのように、守るのでもありません。このいのちも、私たちは神の恵みによって、すでに持っているのです。神は、「罪過によって死んでいた私たちを」「生かし」てくださいました（エペソ二・五）。そして今、私たちは、私たちの主「キリスト・イエスにあって神に生きている」のです（ローマ六・一一）。けれども、私たちは、恵みの契約にしたがって、聖なる愛と幸いな従順のうちに歩むことを喜びます。私たちは、「恵みによって義とされ」て（テトス三・七）、「神の恵みをいたずらに受け」なかったことを知って喜びます（第二コリント六・一）。神は、価なしに私たちをご自分と和解させてくださいました。私たちが望んだり走ったりしたからではなく、小羊の血によってです。そして、私たちが、神が与えてくださった力によって、神の戒めの道を走っていることを（詩篇一一九・三二）、知って喜ぶのです。神は、「戦いのために」私たちに「力を帯びさせ」てくださいました（詩篇一八・三九）。そして私たちは、喜んで「信仰の戦いをりっぱに戦いぬ」くのです（第一テモテ六・一二）。私たちは、信仰によって私たちの心のうちに住んでおられる方によって（エペソ三・一七）、「永遠のいのちを獲得」することを喜びます（第一テモテ六・一二）。私たちの喜びは、これです。私たちの「父は今に至るまで働いておられ」ます（ヨハネ五・一七）。それと同じように、私たちも「神のわざを行う」のです（ヨハネ六・二八）。自分の力や知恵によってではなく、キリスト・イエスにあって価なしに与えられた、神の御霊の力によってです。どうか、神が、「みこころにかなうことを」何でも私たちのうちに行ってくださいますように（ヘブル一三・二一）！　神に、誉れが世々限りなくありますように！

〔この説教が、信仰の強い人々の経験を述べていることは、たやすく見て取れるでしょう。けれども、そのために、信仰の弱い人々が落胆するかもしれません。それを防ぐために、次の説教が役立つでしょう。〕

説教十六　恵みの手段

「あなたがたは、わが定めを離れて、これを守りませんでした」（マラキ三・七）

【一】　神の定めが退けられるようになったいきさつ

（一）　けれども、キリストが福音によっていのちと不死とを明らかに示された今も（第二テモテ一・一〇）、神の定めというものはあるのでしょうか。キリスト教の時代にも、神の恵みが通る普通の水路として、神が定められた手段はあるのでしょうか。使徒時代の教会では、こんな問いは決して出されなかったでしょう。出すとすれば、自分は異教徒だと公然と言う人だけだったでしょう。クリスチャン全体が、一致して認めていたからです。キリストは、ご自分の恵みを人の魂に伝えるために、ある外的な手段を定められた、と。彼らが絶えず行っていたことが、このことを議論の余地のないものにしていました。「信者たちはみな一緒にいて、いっさいの物を共有に」していた間（使徒二・四四）、「一同はひたすら、使徒たちの教を守り」、「共にパンをさき、祈をして」いたのです（使徒二・四二）。

（二）　けれども、時がたち、「多くの人の愛が冷え」たとき（マタイ二四・一二）、手段を目的と取り違える人々が現れ始めました。彼らは、宗教を、神のかたちにかたどって新しくされた心よりも、むしろあの外のわざを行うことに置くようになったのです。彼らは、次のことを忘れていました。すべての戒めは、「清い心と」「偽りのない信仰とから出てくる愛を目標として」います（第一テモテ一・五）。すなわち、心をつくして主なる神を愛し、自分のように隣人を愛することです（マタイ二二・三七～三九）。また、神の働きによる信仰によって、高ぶりと怒りと悪い欲から清められることです。また、ほかの人々は、こう考えたようです。宗教は、主としてこうした外的な手段にあるのではない。けれども、それらの中には、神が喜ばれる何かがある。律法の中には、もっと重要なことがあります。公平とあわれみと神に対する愛です（マタイ二三・二三、ルカ一一・四二）。それをきちんと守っていなくても、外的な手段の中には、自分を神の前に受けいれられる者にしてくれる何かがある、と考えたのです。

（三）　手段をこのように乱用した人々にとって、手段が、定められた目的に役立たなかったことは明らかです。むしろ、彼らの益となるはずのものが、彼らにとってつまずきのもととなりました。彼らは、そこで祝福を受けるどころか、自分の頭にのろいを招いただけでした。心と生活がもっと天的になるどころか、以前より倍もひどい地獄の子になったのです（マタイ二三・一五）。ほかの人々は、こうした手段が、あの悪魔の子たちに神の恵みを伝えなかったことを、はっきりと見て取りました。そして、この特別な例から、一般的な結論を引き出し始めました。こうした手段は、神の恵みを伝える手段ではない、という結論です。

（四）　それでも、神の定めを乱用する人々は、それを軽んじる人々よりも、はるかに多かったのです。ある人々が現れるまでは、そうでした。その人々は、すぐれた悟りを持っていただけでなく（ときには、かなりの学識も伴っていました）、愛の人とも見えました。真の内なる宗教を、経験によって知っている人々です。その中のある人々は、燃えて輝くあかりでした（ヨハネ五・三五）。その時代に名高い人々であり、キリストの教会に大きな功績のあった人々です。あふれ出る不信心に立ち向かって、破れ口に立ったからです（エゼキエル二二・三〇）。

これらの聖なる、尊敬すべき人々は、初めは、次のことを示そうとしただけだったと考えるべきでしょう。心の宗教がなければ、外の宗教には何の価値もない、ということです。「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことともって礼拝すべきである」ということです（ヨハネ四・二四）。ですから、神にささげられた心がなければ、外の礼拝はむだな骨折りだ、ということです。神の外的な定めは、内なる聖性を進めるときには大いに益になる。けれども、進めな

いときには、益もなくむなしく、むなしさよりも軽い、ということです。いや、それが、いわば内なる聖性の代わりに用いられるなら、主にとってまったく忌まわしいものだ、ということです。

（五）そのころ、神の定めは恐ろしく汚されていました。その汚れは教会全体に広がり、真の宗教を世からほとんど追い出していました。この人々のある者は、そのことを強く確信していました。彼らは、神の栄光を熱心に求め、魂をあの致命的な惑わしから取り戻そうと熱心に願いました。そのあまり、外の宗教はまったく無であるかのように語りました。キリストの宗教の中に何の場所もないかのように語ったのです。それも、不思議なことではありません。彼らがいつも十分に注意して語ったわけではなかったとしても、まったく驚くにはあたりません。そのため、不注意な聞き手は、彼らがすべての外的な手段を退けていると思ったかもしれません。外的な手段はまったく益がない。神が恵みを人の魂に伝える普通の水路として定められたものではない。彼らがそう考えている、と思ったのです。

いや、これらの聖なる人々のある者が、ついには自分自身この意見に陥ったことも、ありえないことではありません。とりわけ、自分で選んだのではなく、神の摂理によって、こうした定めのすべてから切り離された人々です。彼らは、おそらく、宿なしで（第一コリント四・一一）、あちらこちらとさまよっていたのでしょう。あるいは、岩の穴や土の穴に住んでいたのでしょう（ヘブル一一・三八）。この人々は、すべての外的な手段を奪われていながら、自分のうちに神の恵みを経験しました。そこから、わざと手段を断つ人々にも同じ恵みが与えられるだろう、と推論したのかもしれません。

（六）そして、経験が示すように、この考えはたやすく広がり、人々の心に忍び込みます。とりわけ、死の眠りからすっかり目覚めさせられ、自分の罪の重さを、負うことのできない重荷と感じ始めた人々の心に（詩篇三八・四）、忍び込むのです。こうした人々は、たいてい、今の状態に耐えられません。そこから逃れようとあらゆる道を試み、何か新しいもの、安らぎや幸いについての新しい提案があれば、いつでも飛びつこうとします。彼らは、おそらく、外的な手段のほとんどを試してみたのに、そこに安らぎを見いださなかったのでしょう。むしろ、後悔と恐れと悲しみと、罪に定められることとが、ますます増したのかもしれません。ですから、こうした人々に、そうした手段をすべて断つほうがよいと説き伏せるのは、たやすいことです。彼らは、（見たところ）むなしく努めることに、火のために労することに（ハバクク二・一三）、もう疲れています。ですから、何か口実があれば、喜んで、魂が楽しみを覚えないものを投げ捨てます。苦しい努力をやめ、怠惰な無為の中に沈み込んでしまうのです。

【二】恵みの手段とは何か

（一）この説教では、恵みの手段というものがあるかどうかを、詳しく調べてみようと思います。

私が恵みの手段と言うのは、神が定められた外的なしるし、言葉、行いのことです。それらは、神が人に恵みを伝えるための普通の水路となるように、という目的のために定められました。その恵みとは、先行する恵み、義とする恵み、聖とする恵みです。

私が、恵みの手段というこの言い方を使うのは、これよりよい言い方を知らないからです。また、この言い方が、何世紀もの間、キリスト教会で広く使われてきたからです。とりわけ、私たちの教会が使ってきました。私たちの教会は、恵みの手段と栄光の望みとのゆえに、神をほめたたえるように教えています（祈祷書「感謝の祈り」）。また、聖礼典とは、「内なる恵みの外なるしるしであり、私たちがその恵みを受ける手段」であると教えています（祈祷書「教理問答」）。恵みの手段のおもなものは、祈りです。ひそかな祈りも、大いなる会衆と共にする祈りも含みます。また、聖書を調べることです（これは、聖書を読み、聞き、思いめぐらすことを含みます）。そして、主の晩餐にあずかること、すなわち主を記念してパンを食べ、ぶどう酒を飲むことです。私たちは、これらが、神の恵みを人の魂に伝える普通の水路として、神によって定められたと信じています。

（二）けれども、私たちは、次のことを認めます。手段の価値は、すべて、それが宗教の目的に実際に役立っているかどうかにかかっています。したがっ

て、こうした手段はみな、目的から切り離されれば、無にも及ばない、むなしいものです。それが、実際に神を知ることと神を愛することに役立たないなら、神の前に受けいれられません。いや、むしろ、神の前に忌まわしいもの、神の鼻をつく悪臭です。神は、それを負うのに疲れておられます（イザヤ一・一四）。とりわけ、手段が、それが仕えるはずの宗教の、一種の代用品として用いられるとします。そうなれば、その途方もない愚かさと悪とを言い表す言葉は、なかなか見つかりません。それは、神の武器を神ご自身に向けることです。キリスト教を心に招き入れるために定められた、まさにその手段によって、キリスト教を心から締め出すことです。

（三）　私たちは、同じように、次のことも認めます。外的な手段は、どんなものであれ、神の御霊から切り離されれば、少しも益になりません。神を知ることにも神を愛することにも、いささかも役立ちません。疑いもなく、地上でなされる助けは、神ご自身がなさるのです。ご自分の全能の力によって、私たちのうちにみこころにかなうことを行われるのは、神だけです（ヘブル一三・二一）。外のものはみな、神がその中で、またそれによって働かれるのでなければ、無力で貧弱な諸要素にすぎません。ですから、どんな手段であれ、手段そのものに力があると思う人は、大いに思い違いをしています。「聖書も神の力も知らない」のです（マタイ二二・二九）。私たちは知っています。祈りの中で語られる言葉にも、読まれる聖書の文字にも、聞かれるその音にも、それ自体に宿る力はありません。主の晩餐で受けるパンとぶどう酒にも、ないのです。あらゆる良い贈り物の与え主（ヤコブ一・一七）、すべての恵みの源は、ただ神だけです。これらのどれかを通して、私たちの魂に何かの祝福が伝えられるなら、その力はすべて神から出ているのです。また、私たちは知っています。たとえ地の上に手段が一つもなくても、神は同じ恵みを与えることがおできになります。この意味では、神について言えば、手段などというものはない、と断言してよいでしょう。神は、どんな手段によっても、またまったく手段なしにでも、みこころにかなうことを何でも同じように行うことがおできになるからです。

（四）　さらに、私たちは、次のことも認めます。どんな手段を用いても、それが一つの罪をつぐなうことさえ、決してありません。罪人が神と和解させられるのは、ただキリストの血によってです。私たちの罪のためのあがないの供え物は、ほかにはなく（第一ヨハネ二・二）、罪と汚れとを清める泉も、ほかにはないからです（ゼカリヤ一三・一）。キリストを信じる者はみな、キリストのほかには功績がないことを、深く確信しています。自分のわざのどれにも、功績はありません。祈りを口にすることにも、聖書を調べることにも、神の言葉を聞くことにも、あのパンを食べ、あの杯を飲むことにも、功績はないのです。ですから、ある人々は、「キリストこそ、ただ一つの恵みの手段だ」と言います。この言い方が意味しているのが、キリストこそ恵みのただ一つの功績的原因だということだけだとします。それなら、神の恵みを知る人はだれも、それに反対できません。

（五）　もう一つあります。悲しい真実ですが、私たちは、次のことも認めます。クリスチャンと呼ばれる人々の大部分が、今日に至るまで、恵みの手段を乱用して、自分の魂を滅ぼしています。力のない敬虔の形に満足している人々は、疑いもなく、みなそうです。彼らは、自分はこれこれのことをしているから、もうクリスチャンだと、愚かにも思い上がっています。キリストが彼らの心にまだ一度も現されたことがなく、神の愛がそこに注がれたこともないのにです（ローマ五・五）。そうでなければ、ただこうした手段を用いているというだけで、必ずクリスチャンになれると思っています。彼らは、むなしい夢を見ているのです（おそらく、そのことにほとんど気づいていないでしょうが）。手段の中には何かの力があって、遅かれ早かれ（いつかはわからないが）、それによって必ず聖なる者にされる、という夢です。あるいは、手段を用いることには一種の功績があって、それが必ず神を動かす、という夢です。神は、自分に聖性を与えてくださるか、聖性がなくても自分を受けいれてくださるだろう、というのです。

（六）　彼らは、キリスト教の建物全体のあの大きな土台を、ほとんど理解していないのです。あなたがたは「恵みにより」救われている、という土台です（エペソ二・八）。あなたがたは、罪から、すなわち罪の罪責と力とから救われています。神の恵みのうちに、また神のかたちに、回復されています。それは、あなたがたのわざや功績や値打ちのためではありません。神の価なしの恵み、ただ神のあわれみにより、神の愛する御子の功績によるのです。あなたがたがこの

ように救われているのは、あなたがたのうちにある力や知恵や強さによるのではありません。ほかの被造物のうちにあるものによるのでもありません。ただ聖霊の恵み、すなわち聖霊の力によるのです。聖霊は、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさいます（第一コリント一二・六）。

（七）けれども、肝心の問いが残っています。自分はまだ救いを持っていないと悟った人は、こう言うかもしれません。「この救いが神の賜物であり、神のわざであることは、わかっている。けれども、どうしたら私はそこに達することができるのか」。あなたが、「信じなさい。そうしたら」、あなたは「救われます」と言えば（使徒一六・三一）、その人は答えます。「そのとおりだ。けれども、どうしたら信じられるのか」。あなたは答えます。「神を待ち望みなさい」。「わかった。けれども、どのように待てばよいのか。恵みの手段の中でか、その外でか。救いをもたらす神の恵みを、こうした手段を用いて待つのか、それとも捨てて待つのか」。

（八）これほど大切な点について、神の言葉が何の指示も与えていないとは、とうてい考えられません。神の御子は、私たち人間のため、私たちの救いのために、天から下って来られました。その御子が、私たちの救いに深くかかわるこの問いについて、私たちを迷わせたままにしておかれたとも、とうてい考えられないのです。

実際、御子は私たちを迷わせたままにはしておかれませんでした。私たちの行くべき道を示してくださいました（詩篇三二・八）。私たちは、神の言葉に尋ね、そこに何が書かれているかを調べさえすればよいのです。そして、その判決にただ従うなら、疑いの余地はまったく残りません。

【三】 神の定めた手段の中で恵みを待つこと

（一）この判決によれば、すなわち聖書の判決によれば、神の恵みを願う人はみな、神が定められた手段の中で恵みを待つべきです。手段を捨ててではなく、用いて待つべきなのです。

まず第一に、神の恵みを願う人はみな、祈りの道で恵みを待つべきです。これは、私たちの主ご自身のはっきりとした指示です。主は、山上の説教で、宗教が何にあるかを詳しく説明し、そのおもな部分を述べたあとで、こう付け加えておられます。「求めよ、そうすれば、与えられるでしょう。捜せ、そうすれば、見いだすでしょう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるでしょう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからです」（マタイ七・七～八）。ここで私たちは、このうえなくはっきりと指示されています。受けるために、すなわち受ける手段として、求めなさい。神の恵み、あの高価な真珠を（マタイ一三・四六）、見いだすために捜しなさい。神の国に入りたいなら、門をたたきなさい。すなわち、求め続け、捜し続けなさい、と。

（二）疑いが残らないように、主はこの点を、とりわけ念入りに説いておられます。主は、一人一人の心に訴えておられます。「あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるでしょうか。魚を求めるのに、へびを与える者があるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天にいますあなたがたの父は」、すなわち御使いと人との父、すべての肉なる者の霊の父は、「なおさら、求めてくる者に良いものをくださらないことがあるでしょうか」（マタイ七・九～一一）。あるいは、別の機会には、すべての良いものを一つにまとめて、こう言い表しておられます。「天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊をくださらないことがあるでしょうか」（ルカ一一・一三）。ここで特に注意すべきことがあります。求めるように指示された人々は、そのとき、まだ聖霊を受けていなかったのです。それでも主は、彼らにこの手段を用いるように指示し、それが効果のあるものになると約束しておられます。求めれば聖霊を受けることができる、と約束しておられるのです。そのあわれみがすべてのみわざの上にある方から（詩篇一四五・九）、受けることができるのです。

（三）神から何かの賜物を受けたいなら、この手段を用いることが絶対に必要です。そのことは、この言葉の直前にある、あの注目すべき箇所から、さらに明らかになります。主は、祈り方を教えたばかりの「彼らに言われ」ました。「あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に

行き、『友よ、パンを三つ貸してください』と言った場合、彼は内から、『面倒をかけないでくれ。いま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うでしょう。しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるでしょう。そこでわたしはあなたがたに言います。求めよ、そうすれば、与えられるでしょう」（ルカ一一・五、七～九）。「友人だからというのでは」「与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるでしょう」（ルカ一一・八）。私たちの祝福された主は、これ以上はっきりと宣言することがおできになったでしょうか。この手段によって、すなわちしきりに願い求めることによって、ほかの方法ではまったく受けられないものを、神から受けることができるのです。

（四）「また、イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられ」ました（ルカ一八・一）。この手段によって、願い求めることを何でも神から受けるまで、祈るべきなのです。「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいました。ところが、その同じ町にひとりのやもめがいて、彼のもとにたびたびきて、『どうぞ、私を訴える者をさばいて、私を守ってください』と願いつづけました。彼はしばらくの間きき入れないでいましたが、そののち、心のうちで考えました、『私は神をも恐れず、人を人とも思わないが、このやもめが私に面倒をかけるから、彼女のためになる裁判をしてやろう。そうしたら、絶えずやってきて私を悩ますことがなくなるだろう』」（ルカ一八・二～五）。この譬を、主ご自身が当てはめておられます。「この不義な裁判官の言っていることを聞きなさい（ルカ一八・六）。やもめが願い続けるから、断られても引き下がらないから、だから彼女のためになる裁判をしてやろう、と言うのです。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらないでしょうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるでしょう」（ルカ一八・七～八）。彼らが失望せずに祈るなら、そうしてくださるのです。

（五）　ひそかな祈りの中で神の祝福を待つように、という指示もあります。同じく十分で、はっきりとした指示です。主は、それを、あのよく知られた言葉で与えておられます。この手段によって、くちびるの求めがかなえられるという（詩篇二一・二）、確かな約束も一緒に与えておられます。「自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださる」でしょう（マタイ六・六）。

（六）　これ以上はっきりした指示がありうるとすれば、それは、神が使徒を通して与えておられる指示です。公の祈りも、ひそかな祈りも含めて、あらゆる種類の祈りと、それに伴う祝福とについての指示です。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に」、「願い求めるがよい。そうすれば、与えられるでしょう」（ヤコブ一・五）。神が与えてくださるのは、求める人にです。求めなければ、「求めないから得られない」のです（ヤコブ四・二）。

もし、こう反論されるとします。「けれども、これは、信じていない人々、神の赦しの恵みを知らない人々への指示ではない。使徒は、『ただ、信仰をもって願い求めなさい』と付け加えているからだ（ヤコブ一・六）。そうでなければ、『主から何かをいただけるもののように思うべきではない』とも言っている（ヤコブ一・七）」。私は答えます。この箇所の信仰という言葉の意味は、使徒自身が、まるでこの反論を封じるためであるかのように、続く言葉で定めています。「疑わないで、信仰をもって願い求めなさい」（ヤコブ一・六）。少しも疑わないで、ということです。原文ではメーデン・ディアクリノメノス（μηδὲν διακρινόμενος）です。すなわち、神が自分の祈りを聞き、心の願いをかなえてくださることを、疑わないのです。

この箇所の信仰を、クリスチャンの十全な意味でとるなら、それは、ひどく冒涜的な、ばかげた考えになります。そのことは、次のことからわかります。そう考えるなら、聖霊は、ある人に、それを神に求めるように指示されたことになります。その人は、自分には信仰（ここでは知恵と呼ばれています）がないと知っているのです。しかも、「そうすれば、与えられる」と確かに約束されたことになります（ヤコブ一・五）。そしてすぐに、求める前にそれを持っていなければ与えられない、と付け加えられたことになるのです！　けれども、だれがそんな考えに耐えられるでしょうか。ですから、先に引いた聖句からも、この聖句から

も、次のように推論しなければなりません。神の恵みを願う人はみな、祈りの道で恵みを待つべきです。

（七）第二に、神の恵みを願う人はみな、聖書を調べることの中で恵みを待つべきです。

この手段を用いることについての主の指示も、同じように明白です。主は、信じないユダヤ人たちに、聖書を調べなさい、と言われます。「この聖書は、わたしについてあかしをするもの」だからです（ヨハネ五・三九）。主が彼らに聖書を調べるように指示されたのは、まさに、彼らがご自分を信じるようになるためでした。

「これは命令ではない。彼らが聖書を調べていたと述べているだけだ」という反論は、恥知らずな偽りです。そう言い張る人々に、教えてもらいたいものです。エレウナテ・タス・グラファス（Ἐρευνᾶτε τὰς γραφάς）という言葉よりもはっきりと命令を言い表すことが、どうしてできるでしょうか。これは、これほどの語数で表せるかぎり、最も断固とした命令です。

また、この手段を用いることに、神からどれほどの祝福が伴うかは、ベレヤの人々について記されていることからわかります。彼らは、パウロの話を聞いたあと、「果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べて」いました。「そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった」のです（使徒一七・一一～一二）。彼らは、神が定められた道で、神の恵みを見いだしたのです。

確かに、「心から教を受けいれ」た人々の中には（使徒一七・一一）、聞くことによって信仰が与えられた人もいたでしょう。同じ使徒が「信仰は聞くことによる」と言うとおりです（ローマ一〇・一七）。その人々にとって、聖書を読むことは、信仰を確かにしただけだったのでしょう。けれども、先に述べたように、聖書を調べるという一般的な言葉には、聞くことも、読むことも、思いめぐらすことも含まれているのです。

（八）また、テモテへのパウロの言葉から、私たちは次のことを学びます。これは、神がまことの知恵を与えるだけでなく、それを確かにし、増し加える手段でもあるのです。「幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知って」います（第二テモテ三・一五）。同じ真理が、すぐあとに続く言葉で、考えうるかぎり最も十分に述べられています。すなわち、これこそ、神が豊かな恵みを人に伝えるために定められた大きな手段だ、という真理です。「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたもの」です。したがって、聖書はすべて、誤りなく真実です。そして、聖書は、「人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益」です。それは、「神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になる」ためです（第二テモテ三・一六～一七）。

（九）注意すべきことがあります。これは、第一に、また直接には、テモテが幼いときから知っていた聖書について言われているのです。それは旧約聖書だったはずです。新約聖書は、そのころまだ書かれていなかったからです。パウロは、「あの大使徒たちにいささかも劣ってはいない」人でした（第二コリント一一・五）。ですから、今の地上のどんな人にも劣らなかったと思います。そのパウロが、旧約聖書を軽んじることから、なんと遠く離れていたことでしょう！神の言葉の半分をそれほど軽く見ているあなたがた、これを見なさい。いつの日か、「驚け、そして滅び去れ」と言われることのないためです（使徒一三・四一）。いや、その半分について、聖霊ははっきりと宣言しておられるのです。それは、神が定められた手段として、まさにこのことに「有益」です。すなわち、「人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益」です。それは、「神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になる」ためです（第二テモテ三・一六～一七）。

（一〇）これは、神の人々、すなわち、すでに神のみ顔の光のなかを歩んでいる人々にとってだけ（詩篇八九・一五）、有益なのではありません。まだやみの中にいて、知らない方を捜し求めている人々にとっても、有益なのです。ペテロも、こう言います。私たちには、もっと確かな預言の言葉もある、と。文字どおりに訳せば、「こうして、預言の言葉は、私たちにいっそう確実なものになりました」です。原文ではカイ・エコメン・ベバイオテロン・トン・プロフェーティコン・ロゴン（καὶ ἔχομεν βεβαιότερον τὸν προφητικὸν λόγον）です。私たちが「そのご威光の目撃者」となり（第二ペテロ一・一六）、「おごそかな栄光

の中から」の「み声」を聞いたことによって（第二ペテロ一・一七～一八）、確実なものになったのです。この預言の言葉に（ペテロは聖書をこう呼んでいます）、「あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで」、「暗やみに輝くともしびとして」、「目をとめているがよい」のです（第二ペテロ一・一九）。ですから、その日が自分の心に明けることを願う人はみな、聖書を調べることの中で、その日を待ちなさい。

（一一）第三に、神の恵みが増し加えられることを願う人はみな、主の晩餐にあずかることの中で、それを待つべきです。これも、主ご自身が与えられた指示だからです。「主イエスは、渡される夜、パンをとり」、それを「さき、そして言われ」ました。取って食べなさい、「これは」「わたしのからだ」です。すなわち、わたしのからだの聖なるしるしです。「わたしを記念するため、このように行いなさい」。同じように、「杯をも」取って「言われ」ました。「この杯は、わたしの血による新しい契約」です。すなわち、その契約の聖なるしるしです。「わたしの記念として、このように行いなさい」。「あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに」、「主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせる」のです（第一コリント一一・二三～二六）。あなたがたは、この目に見えるしるしによって、神と御使いと人との前で、主の死を公に示すのです。主が天の雲に乗って来られるまで（マタイ二四・三〇）、主の死をおごそかに記念していることを、明らかにするのです。

ただ、「だれでもまず自分を吟味し」なさい（第一コリント一一・二八）。この聖なる制度の本質と目的とを理解しているかどうかを、吟味しなさい。キリストの死のさまとひとしくなることを（ピリピ三・一〇）、本当に願っているかどうかを、吟味しなさい。そして、少しも疑わずに、「それからパンを食べ杯を飲むべき」です（第一コリント一一・二八）。

ですから、ここでは、主が初めに与えられた指示を、使徒がはっきりと繰り返しています。「食べなさい。飲みなさい」（第一コリント一一・二八）。原文ではエスティエトー、ピネトー（ἐσθιετε, πινετε）で、どちらも命令法です。これらの言葉は、ただの許可を意味するのではなく、明白な、はっきりとした命令を意味しています。それは、信仰から来る喜びと平安とにすでに満たされている人々への（ローマ一五・一三）、あるいは、本心からこう言える人々すべてへの命令です。「罪を思い出すことは私たちにとってつらく、その重荷は耐えがたいのです」（祈祷書「聖餐式」）。

（一二）また、これが、神の恵みを受ける普通の、定められた手段でもあることは、その前の章にある使徒の言葉から明らかです。「私たちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかること」、すなわちキリストの血が分け与えられること「ではないでしょうか。私たちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないでしょうか」（第一コリント一〇・一六）。あのパンを食べ、あの杯を飲むことは、外の、目に見える手段ではないでしょうか。神はそれによって、あの霊的な恵みのすべてを、すなわち義と平和と聖霊における喜びとを（ローマ一四・一七）、私たちの魂に伝えてくださるのです。それは、私たちのためにただ一度裂かれたキリストのからだと、ただ一度流されたキリストの血とによって、買い取られたものです。ですから、神の恵みを本当に願う人はみな、あのパンを食べ、あの杯を飲みなさい。

【四】 いくつかの反論への答え

（一）けれども、神は、ご自分が尋ね求められる道を、このようにはっきりと示しておられます。それなのに、自分を見て賢いと思う人々は（箴言三・七）、これまで折にふれて、この道に対して数えきれないほどの反論を唱えてきました。そのいくつかを考えておく必要があるでしょう。それ自体に重みがあるからではありません。とりわけ近年、足のなえている者に道を踏みはずさせるために（ヘブル一二・一三）、たびたび使われてきたからです。いや、よく走り続けてきた人々を（ガラテヤ五・七）、悩ませ、くつがえすために使われてきたからです。彼らは、サタンが光の天使となって現れるまでは（第二コリント一一・一四）、よく走っていたのです。

その第一の、おもな反論は、これです。「あなたは、こうした手段を（あなたがそう呼ぶものを）、それに頼らずに用いることはできない」。お尋ねしますが、それはどこに書いてあるのですか。その主張について、はっきりした聖書の言葉

を示していただきたいのです。そうでなければ、私はそれを受けいれる気にはなれません。あなたが神より賢いとは、確信できないからです。

もし本当にあなたの言うとおりなら、キリストがそれを知っておられたはずなのは確かです。そして、知っておられたなら、きっと私たちに警告されたはずです。ずっと前に、それを明らかにされたはずです。ところが、キリストはそうされませんでした。イエス・キリストの啓示全体の中に、そんなことは一点一画もありません。ですから、私は、この啓示が神から出ていることを確信しているのと同じほど、あなたの主張が偽りであることを確信しています。

「それにしても、しばらく手段をやめてみるがよい。それに頼っていたかどうかがわかるだろう」。それでは、神に従うことに頼っているかどうかを知るために、神に背けというのですか！　あなたは、この勧めを公言するのですか。「善をきたらせるために」「悪をし」なさいと（ローマ三・八）、わざと教えるのですか。ああ、そのような教師たちに対する神の宣告に、おののきなさい！「彼らが罰せられるのは当然」なのです（ローマ三・八）。

「いや、手段をやめたときに心が乱れるなら、それに頼っていたことは明らかだ」。決してそうではありません。わざと神に背いたときに私の心が乱れるなら、それは、神の御霊がまだ私と争っておられることを明らかに示しています。けれども、わざと犯した罪に心が乱れないなら、私が正しからぬ思いにわたされていることは明らかです（ローマ一・二八）。

けれども、「それに頼る」とは、どういう意味ですか。その中に神の祝福を期待することですか。この道で待つなら、ほかの方法では得られないものを得ることができると信じることですか。それなら、私はそうしています。そして、神に助けられて、生涯の終りまでそうします。神の恵みによって、私は死ぬ日まで、このように手段に頼り続けます。すなわち、神は約束されたことを何でも、真実に成就してくださると信じるのです。そして、神はこの道で私を祝福すると約束しておられるのですから、そのお言葉どおりになると信頼しています。

（二）第二に、こう反論されてきました。「それは、行いによって救いを求めることだ」。あなたは、自分の使っているその言い方の意味がわかっているのですか。行いによって救いを求めるとは、何のことでしょうか。パウロの書いたものでは、それは次のどちらかを意味しています。一つは、モーセの律法の儀式のわざを守ることで、救われようとすることです。もう一つは、自分のわざのゆえに、自分の義の功績によって、救いを期待することです。けれども、私は、神の定められた道で待ち、神がそこで私に会ってくださると期待しているだけです。神がそうすると約束しておられるから、期待するのです。その中に、そのどちらが含まれているでしょうか。

私は確かに、神がそのお言葉を成就し、この道で私に会って祝福してくださることを期待しています。けれども、それは、私がしたわざのためでも、私の義の功績のためでもありません。ただ、神の御子の功績と苦しみと愛によるのです。この御子は、いつも神の心にかなう方です（マタイ三・一七）。

（三）第三に、「キリストこそ、ただ一つの恵みの手段だ」と、激しく反論されてきました。私は答えます。これは、ただの言葉遊びです。言葉の意味を説明してみなさい。そうすれば、この反論は消えてしまいます。私たちが「祈りは恵みの手段だ」と言うとき、それは、神の恵みが伝えられる水路という意味です。あなたが「キリストこそ恵みの手段だ」と言うとき、それは、恵みのただ一つの代価であり、恵みを買い取られたただ一人の方、という意味です。あるいは、「だれでも」キリスト「によらないでは、父のみもとに行くことはできない」という意味です（ヨハネ一四・六）。それを、だれが否定するでしょうか。けれども、これはまったく問題から外れています。

（四）第四に、こう反論されてきました。「けれども、聖書は、救いを待つようにと指示しているではないか。ダビデは、『わが魂は神をまつ。わが救は神から来る』と言っているではないか（詩篇六二・一）。イザヤも、『主よ、われわれはあなたを待ち望む』と言って、同じことを教えているではないか（イザヤ二六・八）」。これはみな、否定できません。救いは神の賜物なのですから、私たちは疑いもなく、救いを求めて神を待つべきです。けれども、どのように待てばよいのでしょうか。神ご自身が道を定めておられるなら、あなたは、神を待つのに、それよりよい道を見つけられるでしょうか。そして、神が道を定めておられることも、その道が何であるかも、すでに詳しく示しました。あなたが引く預言者の言葉そのものが、このことに疑いの余地をなくしています。その文全体は、

こうなっているからです。「主よ、あなたがさばきをなさる道で、われわれはあなたを待ち望みます」（イザヤ二六・八）。ここで言う「さばき」とは、神の定めのことです。ダビデも、まさに同じ道で待ちました。彼自身の言葉が、それを十分にあかししています。「主よ、私はあなたの救を望み、あなたの戒めをおこないます」（詩篇一一九・一六六）。「主よ、あなたの定めの道を私に教えてください。私は終りまでこれを守ります」（詩篇一一九・三三）。

（五）ある人々は言います。「そのとおりだ。けれども、神は別の道を定めておられる。じっと立って神の救いを見よ、という道だ」。

あなたが指している聖句を調べてみましょう。その第一のものは、前後の文脈と共に、こうなっています。

「パロが近寄った時、イスラエルの人々は目を上げて、非常に恐れました。かつモーセに言いました、『エジプトに墓がないので、荒野で死なせるために、私たちを携え出したのですか』。モーセは民に言いました、『あなたがたは恐れてはならない』。そして、じっと立って、主の救いを見なさい、と言いました。「主はモーセに言われました、『イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい』」（出エジプト一四・一〇～一六）。

これが、彼らがじっと立って見た神の救いでした。全力で前へ進むことによって、見たのです！

この言い回しが出てくるもう一つの箇所は、こうなっています。「ある人がきて、ヨシャパテに告げて言いました、『海のかなたから大軍があなたに攻めて来ます』。そこでヨシャパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせました。それでユダはこぞって集まり、主の助けを求めました。すなわちユダのすべての町から人々が来て主を求めました。そこでヨシャパテは主の宮で、会衆の中に立ちました。その時主の霊がヤハジエルに臨みました。ヤハジエルは言いました、『この大軍のために、おののいてはならない。あす、彼らの所へ攻め下りなさい。この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない』。進み出て、じっと立ち、主の救いを見なさい、とも言いました。「彼らは朝早く起きて出て行きました。そして彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け、アンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられました。おのおの互に助けて滅ぼしあいました」（第二歴代二〇・二～二三）。

ユダの人々が見た救いは、このようなものでした。けれども、これがみな、どうして、神が定められた手段の中で神の恵みを待つべきではないことの証明になるでしょうか。

（六）もう一つだけ、反論を挙げておきます。実のところ、これは、正しくはこの項目に属しません。けれども、あまりにもたびたび言い立てられてきたので、まったく素通りするわけにはいきません。

「パウロは、『もしあなたがたが、キリストと共に死んで』いるなら、なぜ『規定に縛られているのか』と言っているではないか（コロサイ二・二〇）。だから、クリスチャン、すなわちキリストと共に死んだ者は、もう定めを用いる必要はない」。

それでは、あなたは、「私がクリスチャンなら、キリストの定めに縛られない」と言うのですね！　確かに、これがばかげていることから、あなたはひと目でわかるはずです。ここで言われている規定は、キリストの定めではありえません。ユダヤ人の規定でなければならないのです。クリスチャンがもはやそれに縛られないことは、確かです。

そして、同じことが、すぐあとに続く言葉からも、否定しようもなく明らかです。「さわるな、味わうな、触れるな」（コロサイ二・二一）。これはみな、明らかに、ユダヤの律法の古い規定を指しています。

ですから、この反論は、すべての中で最も弱いものです。そして、何があろうと、あの大きな真理は揺るがずに立ち続けるはずです。神の恵みを願う人はみな、神が定められた手段の中で恵みを待つべきだ、という真理です。

【五】　手段を用いる順序と方法

（一）けれども、神の恵みを願う人はみな、神が定められた手段の中で恵みを待つべきです。これを認めたとしても、なお、こう問われるかもしれません。

それらの手段は、用いる順序についても方法についても、どのように用いるべきなのか、と。

前者について言えば、ある種の順序があることがわかります。神ご自身が、罪人を救いに導くときに、たいていこの順序でこうした手段を用いることをよしとされるのです。愚かで無感覚な哀れな人が、神のことなど少しも考えずに、自分の道を進んでいます。そこへ、神が思いがけず臨まれます。目を覚まさせる説教や会話によってかもしれません。何か恐ろしい摂理によってかもしれません。あるいは、外的な手段をまったく用いず、罪を悟らせる御霊が直接に打たれることによってかもしれません。今や、彼は、迫ってきている神の怒りからのがれたいと願うようになります（マタイ三・七）。そこで、どうすればそうできるかを聞くために、わざわざ出かけて行きます。心に語りかける説教者に出会うと、彼は驚き、果してそのとおりかどうかを知ろうとして（使徒一七・一一）、聖書を調べ始めます。聞けば聞くほど、読めば読むほど、彼は罪を深く悟り、昼も夜もそれを思うようになります（詩篇一・二）。おそらく、聖書で聞いたこと、読んだことを説明し、強く迫るような、ほかの本を見つけるでしょう。そして、こうしたすべての手段によって、罪を悟らせる矢が、彼の魂にいっそう深く突き刺さります。また、彼は、いつも心の一番上にある神の事柄について、話し始めます。いや、神と話し始めます。神に祈り始めるのです。もっとも、恐れと恥ずかしさのために、何と言えばよいのか、ほとんどわかりません。けれども、語れても語れなくても、祈らずにはいられません。たとえ「言葉にあらわせない切なるうめき」によってだけであっても、祈るのです（ローマ八・二六）。けれども、「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」が（イザヤ五七・一五）、自分のような罪人を顧みてくださるかどうか、疑っています。そこで、神を知る人々と、信仰のある人々と共に、大いなる会衆の中で祈りたいと願うようになります。ところが、そこで、ほかの人々が主の食卓に進み出るのを目にします。彼は考えます。「キリストは、『このように行いなさい』と言われた（ルカ二二・一九）。それなのに、どうして私はしないのか。私はあまりにも大きな罪人だ。ふさわしくない。値しない」。しばらくの間、こうしたためらいと戦ったあとで、彼はそれを突き破ります。こうして彼は、神の道を歩み続けます。聞き、読み、思いめぐらし、祈り、主の晩餐にあずかり続けるのです。やがて神は、みこころにかなうしかたで、彼の心に語りかけてくださいます。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」（ルカ七・五〇）。

（二）　神のこの順序に注意すれば、ある特定の魂にどの手段を勧めればよいかがわかります。愚かで無頓着な罪人に何かの手段が届くとすれば、それはおそらく、聞くことか会話でしょう。ですから、そのような人には、もし救いについて少しでも考えることがあるなら、これらを勧めるとよいでしょう。自分の罪の重さを感じ始めた人には、神の言葉を聞くことだけでなく、それを読むことも、もっと深く罪を悟る手段となるでしょう。おそらく、ほかのまじめな本を読むことも、そうなるでしょう。また、読んだことを思いめぐらし、それが心に十分な力を及ぼすように、勧めてもよいのではないでしょうか。そうです。そして、それについて恥じずに語るように、とりわけ同じ道を歩む人々の間で語るように、勧めてもよいでしょう。悩みと悲しみが彼を捕えるときには、神の前に魂を注ぎ出すように、「失望せずに常に祈る」ように（ルカ一八・一）、熱心に勧めるべきではないでしょうか。そして、彼が自分の祈りのむなしさを感じるときには、あなたは神と共に働く者となるべきではないでしょうか（第二コリント六・一）。主の家に上って、主を恐れるすべての人々と共に祈ることを、彼に思い起させるべきではないでしょうか。けれども、彼がそうするなら、主が死を前にして語られた言葉が、やがて思い起されるでしょう。それは、今こそ私たちが祝福された御霊の促しを後押しすべきときだという、はっきりとしたしるしです。こうして私たちは、神が定められたすべての手段を通して、一歩一歩、彼を導くことができます。自分の思いのままにではなく、ただ神の摂理と御霊が先立って道を開かれるままに導くのです。

（三）　けれども、聖書には、この点で特定の順序を守れという命令は見当たりません。それと同じように、神の摂理と御霊も、どれか一つの順序を、変わることなく守られるわけではありません。人によって導かれる手段も、その中で神の祝福を見いだす手段も、さまざまに変えられ、入れ替えられ、組み合わされます。そのしかたは千差万別です。それでもやはり、私たちの知恵は、神の摂理と御霊の導きに従うことです。この点で（とりわけ、私たち自身が神の恵みを求め

る手段については)、一つには、神の外的な摂理に導かれることです。摂理は、あるときはこの手段を、あるときはあの手段を用いる機会を与えてくれます。もう一つには、経験に導かれることです。神の自由な御霊が、どの手段によって私たちの心に最も働くことをよしとされるかを、経験が教えてくれるのです。その間、神の救いを求めてうめいているすべての人にとって、確かで一般的な規則は、これです。機会があるときにはいつでも、神が定められたすべての手段を用いなさい。神が、どの手段の中で、救いをもたらす恵みを携えてあなたに会ってくださるか、だれにわかるでしょうか。

(四) 手段を用いる方法について言えば、実際、手段が用いる人に何かの恵みを伝えるかどうかは、すべてその方法にかかっています。第一に、神はすべての手段にまさる方だということを、いつも生き生きと感じていなければなりません。ですから、全能の神に限界を設けないように気をつけなさい。神は、みこころにかなうことを何でも、みこころにかなうときにいつでも行われます。神は、ご自分が定められたどの手段の中ででも、その外ででも、恵みを伝えることがおできになります。おそらく、そうされるでしょう。「だれが、主の心を知っていたでしょうか。だれが、主の計画にあずかったでしょうか」(ローマ一一・三四)。ですから、一瞬一瞬、神が現れてくださるのを待ち望みなさい! それは、あなたが神の定めを行っているときかもしれません。その前か、あとかもしれません。あるいは、あなたが妨げられて定めを行えないときかもしれません。あなたは妨げられても、神は妨げられません。神は、いつでも救う用意があり、いつでも救うことができ、いつでも救おうと願っておられます。「それは主です。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」(サムエル記上三・一八)。

第二に、どの手段を用いる前にも、このことを魂に深く刻みつけなさい。これには何の力もありません。それ自体は、みすぼらしい、死んだ、むなしいものです。神から切り離されれば、枯れ葉であり、影にすぎません。私がこれを用いることにも、何の功績もありません。それ自体として神に喜ばれるものは、何もありません。それによって神から何かの恵みを受けるに値するものも、何もありません。いや、舌を冷やす一滴の水にさえ値しないのです(ルカ一六・二四)。けれども、神が命じられるから、私はするのです。神がこの道で待つように指示されるから、私はここで、神の価なしのあわれみを待つのです。私の救いは、そのあわれみから来るのです。

心にしっかりと定めなさい。オプス・オペラトゥム(opus operatum)、すなわち、ただなされたわざそのものは、何の益にもなりません。救う力は、神の御霊のほかにはなく、功績は、キリストの血のほかにはありません。したがって、神が定められたものでさえ、あなたが神だけに頼るのでなければ、魂に何の恵みも伝えません。その一方で、本当に神に頼る人は、神の恵みを受けそこなうことはありえません。たとえすべての外的な定めから切り離されても、たとえ地の中心に閉じ込められても、そうなのです。

第三に、すべての手段を用いるとき、ただ神だけを求めなさい。あらゆる外のものの中で、またそれを通して、ひたすら神の御霊の力と、神の御子の功績とに目を注ぎなさい。わざそのものにとどまってしまわないように気をつけなさい。そうなれば、すべてはむだな骨折りです。神に及ばないものは、何一つ、あなたの魂を満たすことはできません。ですから、すべての中に、すべてを通して、すべてにまさって、神に目を注ぎなさい。

また、すべての手段を、手段として用いることを忘れないでください。手段は、それ自体のためではなく、あなたの魂を真の義と聖とにおいて新しくするために定められたのです(エペソ四・二四)。ですから、手段が実際にそこに向かっているなら、それでよいのです。けれども、そうでないなら、それはふん土であり、かすです(ピリピ三・八)。

最後に、これらのどれかを用いたあとで、それを自分の手柄にしないように気をつけなさい。何か大きなことをしたかのように、自分を祝うことのないように気をつけなさい。それは、すべてを毒に変えることです。こう考えなさい。「もし神がそこにおられなかったなら、これが何の役に立つのか。私は罪に罪を加えてきたのではないか(イザヤ三〇・一)。主よ、いつまでなのですか(詩篇一三・一)。お救いください。でなければ、私は滅びます! ああ、この罪を私に負わせないでください!」(使徒七・六〇)。もし神がそこにおられたなら、もし神の愛があなたの心に流れ込んだなら、あなたは、いわば外のわざを忘れてしまっているでしょう。神がすべてにあってすべてであることを(第一コリント一

五・二八)、あなたは見、知り、感じているのです。へりくだりなさい。神の前にひれ伏しなさい。すべての誉れを神に帰しなさい。「すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神があがめられる」ようにしなさい(第一ペテロ四・一一)。あなたの骨に、ことごとく言わせなさい(詩篇三五・一〇)。「私はとこしえに」主の「いつくしみを歌い、私の口をもってあなたのまことをよろずよに告げ知らせます」(詩篇八九・一)。

説教十七　心の割礼

オクスフォード大学聖母マリア教会にて。1733年1月1日。

「文字によらず霊による心の割礼こそ割礼です」（ローマ二・二九）

（一）　ある優れた人が、悲しげにこう述べています。今、キリスト教の最も本質的な義務を説く人は、聞き手の大部分から、「新しい教」を伝える者と思われるおそれがある、と（使徒一七・一八～一九）。たいていの人は、今もその宗教を信じると言い表していながら、生活の中でその実質をすっかり失ってしまいました。そのため、キリストの霊を世の霊から区別する真理が一つでも示されると、彼らはすぐにこう叫びます。「君がなんだか珍らしいことをわれわれに聞かせているので、それがなんの事なのか知りたいと思うのだ」（使徒一七・二〇）。説教者は、ただ「イエスと復活とを」宣べ伝えているだけなのにです（使徒一七・一八）。そして、そこから必然的に出てくる結論を述べているだけです。キリストがよみがえられたのなら、あなたがたは世に対して死に、ひたすら神に対して生きるべきだ、という結論です。

（二）　これは、生れながらの人には「ひどい言葉」です（ヨハネ六・六〇）。生れながらの人は、世に対して生きていて、神に対しては死んでいるからです。彼は、これを神の真理として受けいれるようには、なかなか説き伏せられません。受けいれるとすれば、解釈で手加減を加えて、何の役にも立たず、何の意味も残らないようにしたときだけです。彼は、「神の御霊の」言葉を、そのわかりやすい、明白な意味のままでは「受けいれ」ません（第一コリント二・一四）。「それは彼には愚かなものだから」です。実際、「御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができ」ないのです（第一コリント二・一四）。それは、霊的な感覚によってしか知覚できません。ところが、彼のうちでは、その感覚がまだ一度も目覚めたことがありません。その感覚がないために、彼は、神の知恵であり神の力であるものを（第一コリント一・二四）、人間のむなしい空想として退けるほかないのです。

（三）　「文字によらず霊による心の割礼こそ割礼」です（ローマ二・二九）。キリストに本当に従う人、すなわち神に受けいれられた状態にある人には、見分けるしるしがあります。それは、外の割礼でも、バプテスマでも、ほかのどんな外の形でもありません。正しい魂の状態、すなわち、造り主のかたちに従って新しくされた心と霊です（コロサイ三・一〇）。これは、霊的にしか見分けられない大切な真理の一つです。使徒自身も、すぐあとの言葉で、このことをほのめかしています。「そのほまれは人からではなく、神から来る」のです（ローマ二・二九）。使徒は、こう言っているかのようです。「あなたがだれであっても、このように偉大な主人に従っているなら、期待してはいけません。主人に従わない世が、あなたに『良い忠実な僕よ、よくやった』と言うことはありません（マタイ二五・二一）。知っておきなさい。心の割礼は、あなたが召されたことの証印ですが、世にとっては愚かなものなのです。称賛は、あなたの主が現れる日まで、甘んじて待ちなさい。その日に、あなたは、人と御使いとの大いなる集まりの中で、神からほまれを受けるのです（第一コリント四・五）」。

私は、次のことをしようと思います。

第一に、この心の割礼が何にあるかを、詳しく調べます。

第二に、この探究から自然に生まれる反省を、いくつか述べます。

【一】　心の割礼とは何か

（一）　第一に、神からほまれを受ける心の割礼が、何にあるかを調べます。一般的に言えば、それは、聖書で聖性と呼ばれている、魂の習慣的な性向です。それは、直接には、罪から、すなわち「肉と霊とのいっさいの汚れから」清められることを含んでいます（第二コリント七・一）。そしてその結果として、キリスト・イエスのうちにもあった徳を身に着けることを含んでいます。また、「心

の深みまで新たにされて」（エペソ四・二三）、「天の父が完全であられるように」「完全な者とな」ることを含んでいます（マタイ五・四八）。

（二） もっと詳しく言えば、心の割礼は、謙遜、信仰、希望、愛を含んでいます。謙遜とは、自分自身についての正しい判断です。謙遜は、自分は完全だという高ぶったうぬぼれから、私たちの心を清めます。自分の能力や到達したものについての不当な思い込みからも、清めます。こうしたうぬぼれや思い込みは、腐敗した本性から生じる、まぎれもない実なのです。謙遜は、「自分は富んでいる」、賢い、「なんの不自由もない」というむなしい思いを（黙示録三・一七）、すっかり断ち切ります。そして、私たちが生れながら、みじめな者、貧しい者、あわれむべき者、目の見えない者、裸な者であることを悟らせます（黙示録三・一七）。謙遜は、次のことを悟らせます。私たちは、最もよい状態にあっても、自分自身としては、罪とむなしさばかりです。混乱と無知と誤りとが、私たちの悟りを支配しています。理に合わない、地につく、肉に属する、悪魔的な情念が（ヤコブ三・一五）、私たちの意志を支配する権威を奪っています。一言で言えば、私たちの魂には、健全なところが一つもありません。私たちの本性のもろもろの基は、ゆり動いているのです（詩篇八二・五）。

（三） 同時に、私たちは次のことを悟ります。私たちには、自分で自分を助ける力がありません。神の御霊がなければ、罪に罪を加えることしかできません（イザヤ三〇・一）。全能の力によって私たちのうちに働き、善を願わせ、また行わせてくださるのは、ただ神だけです。神の御霊の超自然的な助けがなければ、私たちは、良いことを一つ考えることさえできません。それは、自分で自分を造ることや、自分の魂全体を真の義と聖とにおいて新しくすることと同じほど（エペソ四・二四）、不可能なのです。

（四） 私たちの本性が罪深く無力であることについて、このように正しく判断するようになると、確かな結果が生じます。「人からの誉」を気にかけなくなるのです（ヨハネ五・四一）。その誉は、たいてい、私たちにあると思われている何かの長所に向けられるものです。自分を知っている人は、自分にふさわしくないと知っている称賛を、望みもせず、重んじもしません。ですから、彼は、「人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介し」ません（第一コリント四・三）。彼は、世が自分について言ってきたことを、有利なことも不利なことも、自分の胸のうちに感じていることと比べてみます。すると、彼には、こう考える十分な理由があります。この世の神と同じように（第二コリント四・四）、世もまた「初めから」「偽り者」だったのです（ヨハネ八・四四）。では、世のものでない人々に対しては、どうでしょうか（ヨハネ一七・一六）。神のみこころなら、彼は、その人々にこう思ってもらいたいと願うでしょう。この人は、主人の財産を任された忠実な管理人と認められたいと願っている、と。そう思ってもらえれば、仲間の僕たちに、もっと役に立てるようになるかもしれないからです。けれども、彼が彼らの賛同を願うのは、ただこの目的のためだけです。ですから、彼は、それにまったく頼ってはいません。神がお望みになることなら、神がそれを行う器に事欠くことは決してない、と確信しているからです。神は、これらの石ころからでも、みこころを行う僕を起すことがおできになるのです（マタイ三・九）。

（五） これが、あのへりくだった心です（ピリピ二・三）。キリストの模範に従い、その御足の跡を踏み従う人々は（第一ペテロ二・二一）、この心をキリストから学んだのです。彼らは、自分の病を知ることによって、その病の一部である高ぶりとむなしさから、ますます清められていきます。そして、この知識によって、心の割礼に含まれる第二のものを、進んで受けいれる心になります。それは信仰です。信仰だけが、彼らをいやすことができます。信仰こそ、彼らの病をいやすために天下に与えられた、ただ一つの薬なのです。

（六） 盲人の最良の手引き、やみにおる者の最も確かな光、愚かな者の最も完全な導き手は、信仰です（ローマ二・一九～二〇）。けれども、それは、神によって「要塞をも破壊するほどの力ある」信仰でなければなりません（第二コリント一〇・四）。すなわち、腐敗した理性のあらゆる偏見を打ち倒す信仰です。人々の間で敬われているあらゆる偽りの格言、あらゆる悪い慣習と習慣を打ち倒す信仰です。「神の前では愚かな」「この世の知恵」を、すべて打ち倒す信仰です（第一コリント三・一九）。また、「さまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」る信仰でなければなりません（第二コリント一〇・四～五）。

（七） このように「信ずる者には、どんな事でもできる」のです（マルコ九・二三）。彼は、「心の目を明らかに」されて（エペソ一・一八）、自分の召しが何であるかを見ます。それは、これほど高い代価を払って彼を買いとられた神の栄光を、自分のからだと霊とによってあらわすことです（第一コリント六・二〇）。そのからだと霊は、創造によってだけでなく、あがないによっても、今は神のものなのです。彼は、この「力」が「いかに絶大なものであるか」を感じます（エペソ一・一九）。神は、キリストを死人の中からよみがえらせました。同じように、罪によって死んでいた私たちをも（エペソ二・一）、「内に宿っている御霊によって」生かすことがおできになるのです（ローマ八・一一）。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力」です（第一ヨハネ五・四）。その信仰は、神が聖書の中で啓示されたことすべてに対する、揺るがない同意です。とりわけ、次の大切な真理に対する同意です。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきてくださいました」（第一テモテ一・一五）。「十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われました」（第一ペテロ二・二四）。「彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物です。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためです」（第一ヨハネ二・二）。〔この段落の以下の部分は、以前に語った説教に、今回加えたものです。〕けれども、その信仰は、それだけではありません。私たちの心にキリストが啓示されることでもあります（ガラテヤ一・一六）。それは、キリストの愛についての、神からの証拠、すなわち確信です。罪人である私に対する、価なしの、受けるに値しない愛についての確信です。また、キリストの赦しのあわれみに対する確かな信頼です。この信頼は、聖霊が私たちのうちに造り出してくださるものです。この信頼によって、まことの信者はみな、こうあかしすることができます。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられます」（ヨブ一九・二五）。私には、「父のみもとには」「助け主」がおられます。「義なるイエス・キリスト」が私の主であり、私の罪のための「あがないの供え物」です（第一ヨハネ二・一～二）。私は知っています。キリストは「わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられ」ました（ガラテヤ二・二〇）。キリストは私を、この私をさえ、神と和解させてくださいました（第二コリント五・一八）。私は、「その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受け」ているのです（エペソ一・七）。

（八） このような信仰は、それを吹き込まれる方の力を、必ずはっきりと示します。その方は、ご自分の子供たちを罪のくびきから解き放ち、彼らの「良心をきよめて死んだわざを取り除」いてくださるのです（ヘブル九・一四）。また、彼らを強めて、もはや罪に強いられて「その情欲に従」うことのないようにしてくださいます（ローマ六・一二）。彼らは、「肢体を不義の武器として罪にささげ」るのではありません（ローマ六・一三）。今は、「死人の中から生かされた者として、自分自身を」すっかり「神にささげ」るのです（ローマ六・一三）。

（九） このように信仰によって神から生れた人々は、希望によって、力強い励ましも受けています（ヘブル六・一八）。これが、心の割礼に含まれる次のものです。すなわち、彼ら自身の霊のあかしです。彼らの霊は、彼らの心の中であかしをされる御霊と共に、彼らが神の子であることをあかしするのです（ローマ八・一六）。実に、同じ御霊が、彼らのうちに、明るく晴れやかな確信を生み出してくださいます。自分の心は神に向かってまっすぐだ、という確信です。また、確かな保証を生み出してくださいます。自分は今、神の恵みによって、みこころにかなうことを行っている、という保証です（第一ヨハネ三・二二）。自分は今、いのちに至る道にいる。そして、神のあわれみによって、その道に最後まで耐え忍ぶ、という保証です（マタイ二四・一三）。神の御手からあらゆる良いものを受けるという、生き生きとした期待を彼らに与えてくださるのも、御霊です。天に彼らのためにたくわえてある、あの栄光の冠を（第一ペテロ一・四、五・四）、喜んで待ち望ませてくださるのも、御霊です。クリスチャンは、この錨によって（ヘブル六・一九）、悩み多いこの世の波の中でも、揺るがずに保たれます（祈祷書「幼児洗礼式」）。そして、思い上がりと絶望という、あの二つの致命的な岩のどちらにも、乗り上げずにすむのです。彼は、主がきびしい方だと思い違いをして落胆することもなく、主の慈愛の富を軽んじることもありません（ローマ二・四）。彼は、自分の前に置かれた競走の困難を、自分の力で打ち勝てないほど大きいとは考えません。また、自分が力を出しきらないうちに崩れてしまうほど、その困難が小さいとも思いません。彼がクリスチャンの戦いの中で

すでに得た経験は、彼に確信させます。自分の「手のなしうる事」を「力をつくして」行うなら（伝道九・一〇）、自分の「労苦がむだになることはない」と（第一コリント一五・五八）。同時に、その経験は、彼がむなしい考えをいだくことを許しません。ほかのやり方で何かを得られるとか、弱い心と萎えた手で、何かの徳を示し、何かの称賛を得られるとかいう考えです。実に、異邦人の偉大な使徒と同じ道を進む人でなければ（ローマ一一・一三）、それはできません。使徒は、こう言います。「わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしません。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのです。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れません」（第一コリント九・二六～二七）。

（一〇） キリストの良い兵卒はみな、同じ訓練によって、苦しみに耐えることに自分を慣らさなければなりません（第二テモテ二・三）。この訓練によって確かにされ、強められるなら、彼は、やみのわざを捨てることができます（ローマ一三・一二）。それだけでなく、神の律法に従わないあらゆる欲求と情愛をも、捨てることができるのです（ローマ八・七）。ヨハネが言うとおりです。「この望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよく」します（第一ヨハネ三・三）。彼が日ごとに心を配るのは、キリストにある神の恵みにより、また契約の血によって（ヘブル一〇・二九）、自分の魂の奥底を清めることです。かつて魂を支配し、汚していた欲から清めるのです。すなわち、汚れ、ねたみ、悪意、怒りから清めます。肉に従うあらゆる情念と気質、すなわち、生れながらの腐敗から生じたり、それを育てたりするものから、清めるのです。彼はよく知っているからです。からだそのものが神の宮である人は（第一コリント六・一九）、清くないもの、汚れたものを、何一つその中に入れてはなりません（使徒一〇・一四）。聖なる霊が宿ってくださる家には、聖なることがとこしえまでもふさわしいのです（詩篇九三・五）。

（一一） あなたがだれであっても、深い謙遜と揺るがない信仰とに、生き生きとした希望を加えたとします。そして、それによって、生れつきの汚れから心をかなり清めたとします。けれども、あなたのすることが、まだ一つ残っています（ルカ一八・二二）。もしあなたが完全になりたいと思うなら（マタイ一九・二一）、これらすべてに愛を加えなさい。そうです、愛を加えなさい。そうすれば、心の割礼を受けたことになります。「愛は律法を完成するもの」です（ローマ一三・一〇）。愛は、戒めが「目標としている」ものです（第一テモテ一・五）。愛については、まことにすばらしいことが語られています。愛は、あらゆる徳の本質であり、精神であり、いのちです。愛は、いちばん大切な第一の戒めであるだけではありません（マタイ二二・三八）。すべての戒めを一つにしたものなのです。「すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと」、また尊ぶべきこと、「徳といわれるもの、称賛に値するもの」（ピリピ四・八）。それらはみな、愛という一つの言葉に含まれています。ここに完全があり、栄光があり、幸いがあります。天と地のきわめて尊い律法は（ヤコブ二・八）、これです。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛」しなさい（マルコ一二・三〇）。

（一二） これは、神のほかに何かを愛することを禁じているのではありません。兄弟をも愛すべきことを含んでいるのです（第一ヨハネ四・二一）。また、神のほかのものに喜びを見いだすことを禁じているのでもありません（ある人々は、奇妙にもそう考えてきましたが）。そう考えるのは、聖性の泉である方を、直接に罪の張本人とすることです。神は、ご自分が与えてくださったいのちを保つには、被造物を用いる必要があるようにされました。そして、それを用いることに、喜びを切り離せないものとして結びつけておられるからです。ですから、それが神の戒めの意味であるはずは、決してありません。その本当の意味は、私たちの祝福された主も、その使徒たちも、たびたび、はっきりと語っておられます。誤解しようがないほどです。主も使徒たちもみな、口をそろえてあかしています。次のいくつかの宣言があります。あなたの神、「主は唯一の主です」（申命記六・四）。「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはなりません」（出エジプト二〇・三）。「力をつくして、主なるあなたの神を愛」しなさい（マルコ一二・三〇）。「彼につき従わなければなりません」（申命記一三・四）。あなたの「魂の慕うもの」は、主の「名」です（イザヤ二六・八）。これらの宣言の本当の意味は、ほかでもなく、こうだというのです。ただ一つの完全な善を、あなたがたのただ一つの究極の目的としなさい。ただ一つのものを、それ自体のた

めに願い求めなさい。すなわち、すべてにあってすべてである方を（第一コリント一五・二八）、享受することです。ただ一つの幸いを、自分の魂の前に置きなさい。すなわち、魂を造られた方と一つになることです。「父ならびに御子」との「交わり」を持つことであり（第一ヨハネ一・三）、主につく者として、主と一つの霊になることです（第一コリント六・一七）。ただ一つの目標を、時の終りまで追い求めなさい。すなわち、この世においても永遠においても、神を楽しむことです。ほかのものは、それがこの目標に役立つかぎりで願い求めなさい。被造物は、それが造り主へ導くものとして愛しなさい。けれども、一歩一歩進むたびに、これを、あなたがたが目を注ぐ、最後の栄光ある一点としなさい。すべての情愛、思い、言葉、行いを、これに従わせなさい。何を願い、何を恐れ、何を求め、何を避けるにしても、神のうちにある幸いのためにしなさい。何を思い、語り、行うにしても、そうしなさい。神こそ、あなたがたの存在の源であり、またただ一つの目的なのです。

（一三） 神のほかに、どんな目的も、どんな究極の目的も持ってはなりません。私たちの主も、こう言われます。「無くてならぬものは」「一つだけ」です（ルカ一〇・四二）。そして、あなたの目がひたすらこの一つのものに注がれているなら、「全身も明るい」でしょう（マタイ六・二二）。パウロも、こう言います。「ただこの一事を努めて」います（ピリピ三・一三）。「目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる」、その「賞与を得ようと努めて」いるのです（ピリピ三・一四）。ヤコブも、こう言います。「罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清く」しなさい（ヤコブ四・八）。ヨハネも、こう言います。「世と世にあるものとを、愛してはいけません」（第一ヨハネ二・一五）。「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たもの」だからです（第一ヨハネ二・一六）。外の感覚に心地よく触れて、肉の欲を満たすものに、幸いを求めることがあります。目新しさや壮大さや美しさによって、目の欲、すなわち想像の欲を満たすものに、幸いを求めることもあります。華やかさ、威厳、権力、またそれらに普通伴う称賛と賛嘆によって、持ち物の誇を満たすものに、幸いを求めることもあります。こうして幸いを求めることは、「父から出たものではな」いのです。たましいの父から来たのでもなく（ヘブル一二・九）、その父に認められているのでもありません。それは、「世から出たもの」です（第一ヨハネ二・一六）。それは、神が自分たちの王になるのを望まない人々の、目じるしなのです（ルカ一九・一四）。

【二】 この探究から生まれる反省

（一） 以上のように、私は、神からほまれを受ける心の割礼が何であるかを、詳しく調べてきました。第二に、この探究から自然に生まれる反省を、いくつか述べます。それは、だれもが、自分が世から出た者か、神から出た者かを、自分で判断するための、わかりやすい基準になるでしょう。まず第一に、これまで述べたことから明らかなことがあります。謙遜によって心に割礼を受けていなければ、だれも、神からほまれを受ける資格はありません。自分の目に、小さく、卑しく、つまらない者と見えていなければ、その資格はありません。また、生れつきの「本性の腐敗」を、深く悟っていなければなりません。人は、この腐敗によって、「本来の義から非常に遠く離れて」います（三十九箇条第九条）。そして、あらゆる悪に傾き、あらゆる善を嫌い、腐り果てた忌まわしい者になっています。人は、「神に敵する」「肉の思い」を持っています。それは、「神の律法に従わず、否、従い得ない」のです（ローマ八・七）。また、魂の奥底で、絶えずこう感じていなければなりません。神の御霊が自分の上にとどまっていなければ、良いことも、神に喜ばれることも、何一つ思えず、願えず、語れず、行えない、と。あえて言いますが、自分には神が必要だと感じるまでは、だれも、神からほまれを受ける資格はありません。実に、「ただひとりの神からの誉」を求めるまでは（ヨハネ五・四四）、その資格はないのです。また、人からの誉を、神からの誉に役立つかぎりでしか願わず、追い求めないようになるまでは、その資格はありません。

（二） これまで述べたことから自然に出てくる、もう一つの真理があります。信仰によって心に割礼を受けていなければ、だれも、神からの誉を得ることはできません。その信仰とは、神の働きによる信仰です。彼は、もはや感覚や欲

求や情念に導かれることを拒まなければなりません。世がひどく偶像視している、あの盲人を手引きする盲人（マタイ一五・一四）、すなわち生れながらの理性に導かれることも、拒まなければなりません。そして、信仰によって生き、信仰によって歩まなければなりません（第二コリント五・七）。「見えないかたを見ているようにして」、一歩一歩を進めなければなりません（ヘブル一一・二七）。「見えるものにではなく、見えないものに目を注」がなければなりません。「見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづく」のです（第二コリント四・一八）。そして、自分のすべての願いと計画と思い、すべての行いとふるまいとを、幕の内にはいった者として治めなければなりません（ヘブル六・一九～二〇）。その幕の内では、イエスが神の右に座しておられます（ヘブル一〇・一二）。

（三） 別の土台をすえることに、多くの時間と労力を費やしている人々がいます。その人々が、この信仰をもっとよく知ってくれればよいのですが。彼らは、宗教を、事物の永遠の適合性の上にすえます。徳そのものの優秀さと、徳から流れ出る行いの美しさの上にすえます。彼らの言う善悪の根拠や、存在するもののどうしの関係の上にすえるのです。クリスチャンの義務の根拠についてのこうした説明は、聖書の説明と一致するか、しないか、どちらかです。一致するなら、なぜ、雲のような用語で善意の人々を混乱させ、律法の中でもっと重要なことから（マタイ二三・二三）引き離すのでしょうか。その用語のために、最もやさしい真理が、説明されてかえってわかりにくくなっているのです。一致しないなら、彼らは、この新しい教えの作者がだれであるかを考えるべきです。キリスト・イエスの福音とは違う福音を宣べ伝える者が、天からの御使でありうるかどうかを、考えるべきです（ガラテヤ一・八）。もっとも、たとえ天からの御使であったとしても、私たちではなく神が、その者に宣告を下しておられます。「その人はのろわるべきです」（ガラテヤ一・八）。

（四） 私たちの福音は、信仰のほかに良きわざの土台を知らず、キリストのほかに信仰の土台を知りません。同じように、私たちの福音は、はっきりと教えています。キリストが私たちの信仰とわざとの創始者であることを否定するなら、私たちはキリストの弟子ではありません。キリストの御霊が、それを吹き込み、完成される方であることを否定しても、そうです。「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではありません」（ローマ八・九）。神に対して死んでいる者を生かすことができるのは、キリストの御霊だけです。彼らに、クリスチャンのいのちの息を吹きいれることができるのも、御霊だけです（創世記二・七）。そして、御霊だけが、恵みによって彼らに先立ち、彼らに伴い、彼らのあとに続くことがおできになります。そうして、彼らの良い願いを良い結果に至らせてくださるのです。このように「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子」なのです（ローマ八・一四）。これが、まことの宗教と徳とについての、神の短く、わかりやすい説明です。そして、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもでき」ません（第一コリント三・一一）。

（五） 第三に、これまで述べたことから、次のことを学ぶことができます。本当に「御霊に導かれている」人には（ローマ八・一四）、「御霊」が、その人の「霊と共に」、その人が「神の子であることをあかしして」くださいます（ローマ八・一六）。また、その人は、賞与と冠とを前に見て、「神の栄光にあずかる希望をもって喜んで」います（ローマ五・二）。ですから、神に仕えるときに自分の幸いを目当てにしてはならない、と教えてきた人々は、なんと大きく誤っていたことでしょう！ いや、むしろ私たちは、神から、たびたびはっきりと、「報いを望み見」るように教えられています（ヘブル一一・二六）。労苦を、「前におかれている喜び」と比べてみるように教えられています（ヘブル一二・二）。この「軽い患難」を、あの「重い栄光」と比べてみるように、教えられているのです（第二コリント四・一七）。実に、私たちは、「約束されたいろいろの契約に縁がなく」、「この世の中で」「神もない者」です（エペソ二・一二）。神が、「その豊かなあわれみにより」、私たちを「新たに生れさせて生ける望みをいだかせ」てくださるまでは、そうなのです（第一ペテロ一・三）。その望みとは、「朽ちず汚れず、しぼむことのない資産」を受け継ぐ望みです（第一ペテロ一・四）。

（六） けれども、もしこれらのことがそのとおりなら、ある人々は、今こそ、自分の魂に誠実に向き合うべきです。その人々は、喜ばしい確信を、自分のうちに見いだすどころではありません。自分がその契約の条件を満たし、その約

束を受けるという確信です。むしろ、契約そのものに文句をつけ、その条件を冒涜しています。条件がきびしすぎる、それに従って生きた人は今までだれもいないし、これからもいない、と不平を言うのです。これは、神をそしること以外の何でしょうか。神を、きびしい主人であるかのように言うのです。僕たちに、できるようにしてくださる以上のことを求める主人であるかのように、です。また、神が、ご自分の手で造られた無力なものをあざけって、不可能なことに縛りつけられたかのように言うのです。自分の力でも恵みによっても打ち勝てないところで、打ち勝てと命じられたかのように言うのです。

（七）この冒涜者たちを見ていると、反対の極端にいる人々が、自分には罪がないと思い込みかねません。その人々は、少しも骨を折らずに、神の戒めを果たそうと望んでいるのです。なんとむなしい望みでしょう！　アダムの子が、キリストと神との国を見ることを、いつか期待するとは。まず「狭い戸口からはいるように努め」ることも（ルカ一三・二四）、もだえ苦しむこともしないで、です。「罪のうちに」みごもられて生れ（詩篇五一・五）、心の奥底がまったく邪悪な者がいます。その者が、自分の主が「きよくあられるように」きよくされることを、一度でも考えるとは（第一ヨハネ三・三）。主の足跡を踏み従い、「日々自分の十字架を負う」のでなければ（ルカ九・二三）、そんなことはありえません。「右の手」を「切って捨て」、「右の目」を「抜き出して捨て」るのでなければ（マタイ五・二九～三〇）、ありえないのです。全般にわたる自己否定を、絶えず休みなく続けることもしないで、古い意見と情念と気質を振り払うことを夢見るとは！「霊と心とからだとを」「全くきよめ」られることを夢見るとは（第一テサロニケ五・二三）！

（八）先に引いたパウロの言葉から、これ以外の何を推論できるでしょうか。パウロは、キリストのために、「弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりと」の中に生きていました（第二コリント一二・一〇）。「しるしと奇跡と力あるわざ」に満ちていました（第二コリント一二・一二）。「第三の天にまで引き上げられ」たこともありました（第二コリント一二・二）。それでも、パウロは、この絶え間ない自己否定がなければ、自分のあらゆる徳は不確かになり、救いさえ危うくなると考えていました。最近のある著者が、力強く言い表しているとおりです。パウロは言います。「わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘は」しません（第一コリント九・二六）。この言葉によって、パウロは、はっきりと教えています。このように走らない人、このように日々自分を捨てない人は、目標のはっきりしない走り方をしているのです。「空を打つ」人と同じように、むだな戦いをしているのです（第一コリント九・二六）。

（九）最後に、これまで見てきたことから、次のことを推論できます。愛によって心に割礼を受けていない人は、「信仰の戦い」を戦うと言っても（第一テモテ六・一二）、むだなことです。朽ちない冠を得ようと望んでも（第一コリント九・二五）、むなしいのです。愛は、肉の欲も、目の欲も、持ち物の誇も断ち切ります（第一ヨハネ二・一六）。そして、からだも魂も霊も、人のすべてを、あのただ一つの目的を熱心に追い求めることに向けさせます。愛は、神の子にとって、それほど欠かせないものです。愛がなければ、だれでも、生きていても、神の前では死んだ者とみなされるのです。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じです。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しいのです」（第一コリント一三・一～二）。いや、「たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益」です（第一コリント一三・三）。

（一〇）ですから、ここに、完全な律法の要約があります。これこそ、まことの心の割礼です。霊を、それを授けた神に帰らせなさい（伝道一二・七）。霊のすべての情愛も、共に帰らせなさい。すべての川を、「その出てきた所に」また流れ帰らせなさい（伝道一・七）。神は、ほかのいけにえを私たちから求めようとはされません。心という、生きた供え物を選ばれたのです（ローマ一二・一）。それを、聖なる愛の炎の中で、キリストを通して、絶えず神にささげなさい。どんな被造物にも、心を神と分け合うことを許してはなりません。神は、ねたむ神だからです（出エジプト二〇・五）。神は、ご自分の王座をほかのものと

分け合うことはなさいません。競う者なしに治められるのです。神を究極の目当てとしない計画や願いは、一つもそこに入れてはなりません。これは、かつてあの神の子たちが歩んだ道です。彼らは、死んでも、今もなお私たちに語っています（ヘブル一一・四）。「神の御名をほめたたえるためでなければ、生きることを願ってはなりません。思いも言葉もわざも、すべて神の栄光に向けなさい。心をしっかりと神にすえなさい。ほかのものには、それが神のうちにあり、神から出ているかぎりで、心を向けなさい。魂を、神へのまったき愛で満たしなさい。神のためでなければ、何ものも愛さないほどにです」。「心の純粋な意図を持ちなさい。すべての行いにおいて、神の栄光を揺るがずに心にかけなさい」。「召しの祝福に満ちた望みに、目を注ぎなさい。世のすべてのものを、その望みに仕えさせなさい」。そのときこそ、そしてそのときになって初めて、キリスト・イエスのうちにもあった思いが、私たちのうちにもあることになります。それは、心のあらゆる動き、舌のあらゆる言葉、手のあらゆるわざにおいて、私たちが「神にかかわることのほかは何も追い求め」ないときです。「神のみこころに従うことしか」追い求めないときです。また、私たちも、自分の思いと言葉と行いを、「自分のこころのままを行うため」に向けないときです。私たちを「つかわされたかたのみこころを行うため」に向けるときです（ヨハネ六・三八）。そして、「飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のために」するときなのです（第一コリント一〇・三一）。

説教十八　新生のしるし

「霊から生れる者もみな、それと同じです」（ヨハネ三・八）

（一）「霊から生れる者」（ヨハネ三・八）、すなわち新しく生れた者は、みな、どのようにして神から生れるのでしょうか。新しく生れる、神から生れる、霊から生れるとは、どういう意味でしょうか。神の子である、あるいは子たる身分を授ける霊を持っているということには（ローマ八・一五）、何が含まれているのでしょうか。これらの特権が、神の価なしのあわれみによって、通常はバプテスマに結びつけられていることを、私たちは知っています。だからこそ、私たちの主は、少し前の節で、バプテスマを「水と霊とから生れ」ることと呼ばれたのです（ヨハネ三・五）。けれども、私たちが知りたいのは、これらの特権が何であるかです。新生とは何でしょうか。

（二）これを定義する必要は、おそらくないでしょう。聖書が定義を与えていないからです。けれども、この問いは、人の子のだれにとっても、きわめて重大なことです。「だれでも新しく生れなければ」、すなわち霊から生れなければ、「神の国を見ることはできない」からです（ヨハネ三・三）。そこで、私は、新生のしるしを、聖書に示されているとおりに、できるだけわかりやすく示そうと思います。

【一】信仰

（一）そのしるしの第一は、信仰です。信仰は、ほかのすべてのしるしの土台でもあります。パウロも、こう言います。「あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのです」（ガラテヤ三・二六）。ヨハネも、こう言います。「その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えた」のです（ヨハネ一・一二）。この「力」はエクスーシアン（ἐξουσίαν）で、むしろ権利、あるいは特権と訳してよいでしょう。「それらの人は」、信じたときに、「血すじによらず、肉の欲によらず」生れました。自然の出生によったのではありません。「また、人の欲にもよらず」生れました。人に養子として迎えられた子供とは違うのです。そういう子供には、養子になっても、内側に何の変化も起りません。信じた人々は、「ただ神によって生れた」のです（ヨハネ一・一三）。また、ヨハネは手紙の中でも、こう言います。「すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者です」（第一ヨハネ五・一）。

（二）けれども、使徒たちがここで語っているのは、ただ観念的な、あるいは思弁的な信仰ではありません。イエスはキリストである、という命題に、ただ同意することではありません。私たちの信条や、旧約・新約聖書に含まれるすべての命題に同意することでもありません。こうした信ずべき事柄のどれか、あるいは全部に、信ずべきものとして同意するだけのことでもありません。もしそうだと言うなら、悪霊どもが神から生れたと言うことになります（そんなことを、だれが聞いていられるでしょうか）。悪霊どもも、この信仰を持っているからです。悪霊どもは、「信じておののいて」います（ヤコブ二・一九）。イエスがキリストであることを信じています。また、聖書はすべて神の霊感によって与えられたので（第二テモテ三・一六）、神が真実であるように真実であることも、信じているのです。また、それは、神のあかしや奇跡の証拠に基づいて、神の真理に同意することだけでもありません。悪霊どもも、キリストの口から出る言葉を聞き、キリストが忠実な、まことの証人であることを知っていたからです（黙示録三・一四）。キリストは、ご自身について、またご自分をつかわされた父について、あかしをされました。彼らは、そのあかしを受けいれないわけにはいきませんでした。また、キリストが行われた力あるわざを見て、そこから、キリストが「神からこられたかた」であると信じました（ヨハネ一六・三〇）。それでも、この信仰がありながら、彼らは今も鎖につながれています。そして、「大いなる日のさばきのために」、「暗やみの中に閉じ込めておかれ」ているのです（ユダ六）。

（三） これらはみな、死んだ信仰にすぎないからです。まことの、生きた、クリスチャンの信仰は、それを持つ人がだれでも神から生れている信仰です。この信仰は、同意、すなわち理解力の働きであるだけではありません。神がその人の心のうちに造り出された性向です。すなわち、「神に対する確かな信頼と確信です。キリストの功績によって自分の罪が赦され、神と和解して恵みを受けている、という確信です」（説教集「人の救いについて」）。この信仰には、次のことが含まれています。まず、人が自分自身を捨てることです。次に、「肉を頼み」とすることを、すべて退けることです（ピリピ三・三）。それは、「キリストのうちに自分を見いだす」ようになり（ピリピ三・九）、キリストを通して受けいれられるためです。そして、「返すことができ」ず（ルカ七・四二）、自分のわざにも、どんな種類の自分の義にも頼まずに、神のもとに来ることです。失われた、みじめな、自分で自分を滅ぼし、自分で自分を罪に定めた、破滅した、無力な罪人として来るのです。口をすっかりふさがれ、神の前にまったく罪ある者として来るのです（ローマ三・一九）。このような罪の自覚は、自分が知りもしないことをそしる人々からは（ユダ一〇）、普通、絶望と呼ばれています。けれども、生きた信仰の前には、この自覚がなければなりません。また、救いはキリストからだけ来るという十分な確信がなければなりません。言葉では言い表せないほどの確信です。そして、その救いを切に願う心がなければなりません。生きた信仰とは、キリストに対する信頼です。キリストこそ、「私たちのために死によって身代金を払い、生涯によって律法を成就された」方です（説教集「人の救いについて」）。ですから、私たちを神から生れさせるこの信仰は、「私たちの信仰箇条をすべて信じることだけではありません。私たちの主イエス・キリストを通して、神のあわれみに寄せる、まことの確信でもあるのです」（説教集「人の救いについて」）。

（四） 私たちを神から生れさせるこの信仰には、直ちに、また絶えず結ばれる実があります。それは、信仰から決して切り離せない実です。一時間たりとも切り離せません。それは、罪に打ち勝つ力です。あらゆる種類の外の罪、あらゆる悪い言葉と行いに打ち勝つ力です。キリストの血がこのように当てはめられるところではどこでも、その血が「良心をきよめて死んだわざを取り除」くからです（ヘブル九・一四）。また、内の罪に打ち勝つ力でもあります。信仰が、あらゆる汚れた欲求と気質から、心をきよめるからです（使徒一五・九）。パウロは、ローマ人への手紙の第六章で、この信仰の実を詳しく述べています。パウロは言います。信仰によって「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれる」でしょうか（ローマ六・二）。「わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられました。それは、この罪のからだが滅び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためです」（ローマ六・六）。「このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきです」（ローマ六・一一）。「だから、あなたがたの死ぬべきからだを」さえ、「罪の支配にゆだね」てはなりません（ローマ六・一二）。「むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ」なさい（ローマ六・一三）。あなたがたは、「罪に支配されることは」ないからです（ローマ六・一四）。パウロはまた、「神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であった」が、「解放され」て、と言います。その明らかな意味は、こうです。神に感謝すべきです。あなたがたは、以前は罪の僕でしたが、今は「罪から解放され、義の僕となった」のです（ローマ六・一七～一八）。

（五） 神の子たちのこの計り知れない特権を、ヨハネも同じように力強く主張しています。特に、その前の部分、すなわち外の罪に打ち勝つ力について、そうです。ヨハネは、神の慈愛の富の深さに驚いた人のように、まずこう叫びました。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」。「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子です。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではありません。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っています。そのままことの御姿を見るからです」（第一ヨハネ三・一～二）。そして、すぐに、こう付け加えています。「すべて神から生れた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができません」（第一ヨハネ三・九）。けれども、ある人々は言うでしょう。「そのとおりだ。神から生れた者は、習慣的には罪を犯さないのだ」。習慣的に、とは！ それはどこから出てきたのでしょうか。私はそ

んな言葉を読んだことがありません。聖書には書かれていません。神ははっきりと、「罪を犯さない」と言われます。それなのに、あなたは「習慣的には」と付け加えるのです！　神の言葉に手を加え、この書の言葉に「書き加える」あなたは、いったい何者なのですか（黙示録二二・一八）。お願いですから、気をつけなさい。神が、あなたに「この書に書かれている災害を加えられる」かもしれません（黙示録二二・一八）！　とりわけ、あなたが付け加える注釈が、本文をすっかりのみ込んでしまうようなものであるときは、そうです。これは、メトディア・プラネース（μεθοδεία πλάνης）です（エペソ四・一四）。人を欺く巧みなやり方です。これによって、尊い約束がすっかり失われてしまうのです。また、キュベイア・アントローポーン（κυβεία ἀνθρώπων）です（エペソ四・一四）。人間のごまかしと言い逃れです。これによって、神の言葉が無にされるのです（マルコ七・一三）。ああ、気をつけなさい。あなたは、このようにこの書の言葉を取り除いています。その言葉から意味と精神をすっかり取り去って、まさに死んだ文字と呼ぶべきものだけを残しています。そんなことをすれば、神があなたの受くべき分を、いのちの書から取り除かれるかもしれません（黙示録二二・一九）！

（六）　使徒自身に、その言葉を、話の全体の流れによって解き明かしてもらいましょう。使徒は、この章の第五節で、こう言っていました。「あなたがたが知っているとおり、彼は」、すなわちキリストは、「罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪が」ありません（第一ヨハネ三・五）。使徒は、ここからどんな結論を引き出しているでしょうか。「すべて彼におる者は、罪を犯しません。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者です」（第一ヨハネ三・六）。使徒は、この大切な教えを強く説く前に、ぜひとも必要な警告を述べています。「子たちよ。だれにも惑わされてはなりません」（第一ヨハネ三・七）。多くの人が、あなたがたを惑わそうとするからです。不義であってもよい、罪を犯してもよい、それでも神の子でいられる、と説き伏せようとするのです！　「彼が義人であると同様に、義を行う者は義人です。罪を犯す者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです」（第一ヨハネ三・七～八）。そして、こう続きます。「すべて神から生れた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができません」（第一ヨハネ三・九）。使徒は、さらに付け加えます。「神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかです」（第一ヨハネ三・一〇）。この明らかなしるし（罪を犯すか、犯さないか）によって、両者は互いに区別されるのです。第五章の次の言葉も、同じ趣旨です。「すべて神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは知っています」。神から生れた者は自分を守り、「悪しき者が手を触れるようなことは」ありません（第一ヨハネ五・一八）。

（七）　この生きた信仰のもう一つの実は、平安です。私たちは、「信仰によって義とされた」のです。すべての罪を消し去っていただいたのです。ですから、「わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得て」います（ローマ五・一）。実に、私たちの主ご自身が、死なれる前の夜、ご自分に従うすべての者に、この平安を厳かに遺してくださいました。主は言われます。「わたしは平安をあなたがたに残して行きます」（ヨハネ一四・二七）。あなたがたとは、「神を信じ、またわたしを信じ」る人々のことです（ヨハネ一四・一）。「わたしの平安をあなたがたに与えます。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なります。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけ」てはなりません（ヨハネ一四・二七）。また、こうも言われます。「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためです」（ヨハネ一六・三三）。これが、「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安」です（ピリピ四・七）。それは、魂の静けさです。生れながらの人の心には、思い浮びもしなかったものです（第一コリント二・九）。霊の人でさえ、言い表すことのできないものです。そして、この平安は、地と地獄のすべての力をもってしても、その人から奪い去ることができません。波や嵐が打ちつけても、この平安は揺るぎません。岩を土台としているからです（マタイ七・二五）。この平安は、いつでも、どこでも、神の子たちの心と思いとを守ります（ピリピ四・七）。安楽なときも苦痛のときも、病気のときも健康なときも、豊かなときも乏しいときも、彼らは神にあって幸いなのです。彼らは、どんな境遇にあっても、足ることを学んでいます（ピリピ四・一一）。そうです、キリスト・イエスを通して神に感謝するこ

とを学んでいるのです。彼らは、「起ることはすべて最善である」と、よく確信しています。それが、彼らについての神のみこころだからです。こうして、人生のどんな移り変りの中でも、彼らの「心は主に信頼してゆるがない」のです（詩篇一一二・七）。

【二】 希望

（一） 神から生れた人々の、聖書による第二のしるしは、希望です。ペテロは、当時離散していた神の子たちすべてに向かって（第一ペテロ一・一）、こう言います。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより」、「わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ」てくださいました（第一ペテロ一・三）。使徒は、エルピダ・ゾーサン（ἐλπίδα ζῶσαν）、すなわち生き生きとした、あるいは生きている望みと言います。死んだ信仰があるように、死んだ望みもあるからです。それは、神から出たのではなく、神と人との敵から出た望みです。そのことは、その実によって明らかです。その望みは、高ぶりから生れたものであり、またあらゆる悪い言葉と行いを生み出すものだからです。ところが、この生ける望みを自分のうちに持つ人はみな、「召してくださった聖なるかたにならって」、聖なる者となっています（第一ペテロ一・一五）。キリストにある兄弟たちに向かって、心からこう言える人がいます。「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子です」。わたしたちは彼の「まことの御姿を見る」のです（第一ヨハネ三・二）。そう言える人はみな、「彼がきよくあられるように、自らをきよく」します（第一ヨハネ三・三）。

（二） この希望は、第一に、私たち自身の霊、すなわち良心のあかしを含んでいます。私たちが、単純さと神にかなう誠実さとをもって歩んでいるというあかしです（第二コリント一・一二）。第二に、神の御霊のあかしを含んでいます。御霊が、「わたしたちの霊と共に」、あるいはわたしたちの霊に、「わたしたちが神の子であることをあかしして」くださるのです（ローマ八・一六）。「もし子であれば、相続人でもあります。神の相続人であって」、「キリストと共同の相続人なのです」（ローマ八・一七）。

（三） 神の子たちのこの栄光ある特権について、神ご自身がここで何を教えておられるかを、よく見ましょう。ここで、あかしをすると言われているのはだれでしょうか。私たちの霊だけではなく、もう一つの霊、すなわち神の御霊です。「わたしたちの霊と共に」「あかしして」くださるのは、この御霊です（ローマ八・一六）。御霊は、何をあかししてくださるのでしょうか。「わたしたちが神の子であること」です（ローマ八・一六）。また、「もし子であれば、相続人でもあ」ること、「神の相続人であって」、「キリストと共同の相続人」であることです（ローマ八・一七）。ただし、それは、私たちが「キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている」ならば、のことです（ローマ八・一七）。すなわち、自分を捨て、日々自分の十字架を負い（ルカ九・二三）、キリストのために迫害やそしりを喜んで耐え忍んでいるならば、です。では、神の御霊は、だれのうちでこのあかしをしてくださるのでしょうか。神の子であるすべての人のうちでです。使徒は、その前の節で、まさにこの論拠によって、彼らが神の子であることを証明しています。使徒は言います。「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子です」（ローマ八・一四）。「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのです。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）。続いて、こうあります。「御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかししてくださいます」（ローマ八・一六）。

（四） 第十五節で言い方が変っていることは、注目に値します。「あなたがたは」「子たる身分を授ける霊を受けたのです。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのです」（ローマ八・一五）。神の子であるあなたがたはみな、本当に神の子であることによって、あの同じ子たる身分を授ける霊を受けています。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのです。この「わたしたち」とは、使徒、預言者、教師たちのことです（この語は、そう解しても不適当ではありません）。あなたがたが、その人たちを通して信じるようになった、その「わたしたち」です。「キリストに仕える者、神の奥義を管理している者」である、「わたしたち」です（第一コリント四・一）。私たちとあなたがたとは、主が一つであるように、御霊も一つです。信仰が一つであるように、望みも

一つです（エペソ四・四～五）。私たちとあなたがたとは、一つの「約束された聖霊の証印をおされた」のです（エペソ一・一三）。この聖霊は、あなたがたと私たちとが神の国をつぐことの「保証」です（エペソ一・一四）。同じ御霊が、あなたがたの霊と共に、また私たちの霊と共に、「わたしたちが神の子であることをあかしして」くださるのです（ローマ八・一六）。

（五）　こうして、聖書の言葉が成就します。「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるでしょう」（マタイ五・四）。次のことは、たやすく信じられるからです。神の御霊が私たちの霊と共にするこのあかしに、悲しみが先立つことはありえます。実際、ある程度は先立たなければなりません。私たちが恐れの下で、また神の怒りが自分の上にとどまっているという意識の下でうめいている間は、そうです（ヨハネ三・三六）。けれども、だれでも、このあかしを自分のうちに感じるとすぐに、その人の「憂いは喜びに変る」のです（ヨハネ一六・二〇）。それまでの苦痛がどれほどであっても、その「時がきた」とたんに、「もはやその苦しみをおぼえてはいない」のです（ヨハネ一六・二一）。神から生れた「喜びがあるため」です（ヨハネ一六・二一）。あなたがたの多くは、今、悲しんでいるかもしれません。自分が「イスラエルの国籍がな」い者だからです（エペソ二・一二）。自分にはこの御霊がないこと、自分が「この世の中で希望もなく神もない者」であることを、自分で知っているからです（エペソ二・一二）。けれども、助け主がくると（ヨハネ一六・七）、「あなたがたの心は喜びに満たされるでしょう」（ヨハネ一六・二二）。そうです、「あなたがたの喜びが満ちあふれるでしょう」（ヨハネ一六・二四）。そして、「その喜びをあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）。あなたがたは、こう言うでしょう。「わたしたちは、今や和解を得させてくださったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのです」（ローマ五・一一）。「わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに」「導き入れられ」ました（ローマ五・二）。この恵みとは、恵みの状態、すなわち神の恵みを受け、神と和解した状態のことです。そして、「神の栄光にあずかる希望をもって喜んで」いるのです（ローマ五・二）。ペテロは言います。神は、あなたがたを「新たに生れさせて生ける望みをいだかせ」てくださいました（第一ペテロ一・三）。その「あなたがたは」、「救にあずかるために、信仰により神の御力に守られている」のです（第一ペテロ一・五）。「そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試錬で悩まねばならないかも知れませんが、あなたがたは大いに喜んでいます」（第一ペテロ一・六）。「こうして、あなたがたの信仰はためされて」、「イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るでしょう」（第一ペテロ一・七）。「現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれています」（第一ペテロ一・八）。まことに、言葉につくせない喜びです！　聖霊によるこの喜びは、人の舌で言い表せるものではありません。それは「隠されているマナ」です。「これを受ける者のほかだれも知らない」のです（黙示録二・一七）。けれども、私たちは知っています。この喜びは、深い苦難の中でもなくならないばかりか、かえってあふれ出るのです。地上の慰めがみな尽きるとき、神の子たちにとって、「神の慰め」は「あまりに小さい」でしょうか（ヨブ一五・一一）。そうではありません。苦難がいちばん満ちあふれるとき、御霊の慰めは、いっそう満ちあふれます（第二コリント一・五）。そのため、神の子たちは、「滅び」が来るときも、それを「笑い」ます（ヨブ五・二二）。乏しさも、苦痛も、地獄も、墓も笑うのです。彼らは、「死と黄泉とのかぎを持って」おられる方を知っているからです（黙示録一・一八）。その方は、まもなくそれらを「底知れぬ所に投げ込」まれるのです（黙示録二〇・三）。また、彼らは、天からの大きな声を、今すでに聞いているからです。「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして」、彼らの神となられます（黙示録二一・三）。「人の目から涙を全くぬぐいとってくださいます。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもありません。先のものが、すでに過ぎ去ったからです」（黙示録二一・四）。

【三】　愛

（一）　神から生れた人々の、聖書による第三のしるしは、愛です。これは、すべてのしるしの中で最も大いなるものです（第一コリント一三・一三）。すなわち、彼らに「賜わっている聖霊によって」、彼らの「心に注がれている」「神の

愛」です（ローマ五・五）。彼らは「子であるのだから、神は」彼らの「心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送ってくださった」のです（ガラテヤ四・六）。彼らは、この御霊によって、神を、和解してくださった愛に満ちた父として、絶えず仰ぎ見ています。そして、日ごとの食物を（マタイ六・一一）、また魂のためであれからだのためであれ、必要なものをすべて、神に呼び求めます。彼らは、絶えず、神のみ前に心を注ぎ出します（詩篇六二・八）。「神に願い求めたことはすでにかなえられた」ことを、知っているからです（第一ヨハネ五・一五）。彼らの喜びは、神にあります。神は、彼らの心の喜びであり、彼らの「盾」であり、彼らの受ける「はなはだ大きい」「報い」です（創世記一五・一）。彼らの魂が慕うのは神です（イザヤ二六・八）。神の「みこころを行う」ことが、彼らの「食物」であり、飲み物です（ヨハネ四・三四）。そして、彼らは、髄とあぶらとで満たされるように満ち足り、その口は喜びのくちびるをもって神をほめたたえるのです（詩篇六三・五）。

（二）　また、この意味でも、「すべて生んでくださったかたを愛する者は、そのかたから生れた者をも愛するのです」（第一ヨハネ五・一）。その人の霊は、「救主なる神を」喜びます（ルカ一・四七）。その人は、「変らない真実をもって」、「主イエス・キリストを愛」します（エペソ六・二四）。その人は、「主につく者」として、主と一つの霊になっています（第一コリント六・一七）。その人の魂は主にすがり、主をことごとく麗しい方として選びます（雅歌五・一六）。主は、「万人にぬきんで」た方なのです（雅歌五・一〇）。その人は、次の言葉の意味を知り、また感じています。「わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のものです」（雅歌二・一六）。「あなたは人の子らにまさって麗し」い方です。あなたのくちびるは恵みに満ちています。神が、とこしえにあなたに油を注がれたからです（詩篇四五・二）！

（三）　神へのこの愛から必ず結ばれる実は、隣り人への愛です。神が造られたすべての魂への愛です。敵も除外しません。今、私たちを侮辱し、「迫害する者」も除外しません（マタイ五・四四）。それは、すべての人を自分自身のように、自分の魂を愛するように愛する愛です（マタイ二二・三九）。いや、私たちの主は、それをさらに強く言い表されました。主が私たちを愛されたように、私たちも「互に愛し合いなさい」と教えられたのです（ヨハネ一三・三四）。ですから、神を愛するすべての人の心に記されている戒めは、ほかでもなく、これです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」（ヨハネ一五・一二）。「主は、わたしたちのためにいのちを捨ててくださいました。それによって、わたしたちは愛ということを知った」のです（第一ヨハネ三・一六）。ですから、使徒が正しく推論しているとおり、「わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきです」（第一ヨハネ三・一六）。私たちが、自分にはそうする用意があると感じるなら、そのとき、私たちは本当に隣り人を愛しているのです。そのとき、「わたしたちは」このように「兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知って」います（第一ヨハネ三・一四）。「神が」愛の「御霊をわたしたちに賜わったことによって」、私たちは、自分が神から生れたことを知ります。「わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを」「知る」のです（第一ヨハネ四・一三）。「愛は、神から出たものなのです。すべて」このように「愛する者は、神から生れた者であって、神を知っています」（第一ヨハネ四・七）。

（四）　けれども、ある人は、こう尋ねるかもしれません。「使徒は、『神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである』と言っているではないか（第一ヨハネ五・三）」。そうです。そして、これは、神への愛であるのと同じ意味で、隣り人への愛でもあります。けれども、あなたは、ここから何を推論しようというのでしょうか。外面の戒めを守ることが、神を愛することのすべてだというのでしょうか。心をつくし、思いをつくし、精神をつくし、力をつくして神を愛することのすべてだと（マルコ一二・三〇）。また、自分のように隣り人を愛することのすべてだと（マタイ二二・三九）。神への愛は、魂の情愛ではなく、ただ外面の奉仕にすぎないというのでしょうか。隣り人への愛は、心の性向ではなく、ただ外面のわざを重ねることにすぎないというのでしょうか。使徒の言葉についてのこれほど途方もない解釈は、口にするだけで、十分に反駁されます。あの聖句の、明白で疑いようのない意味は、こうです。神のほかの戒めを守ることが、神への愛のしるし、すなわち証拠です。私たちが、いちばん大切な第一の戒めを守っていることの証拠なのです（マタイ二二・三八）。まことの愛が、ひ

とたび私たちの心に注がれるなら（ローマ五・五）、その愛は、私たちにそうするように強く迫るからです（第二コリント五・一四）。心をつくして神を愛する人はだれでも、力をつくして神に仕えずにはいられないのです。

（五） ですから、神への愛の第二の実は、愛する方へのあらゆる点での服従と、そのみこころに従うことです。もっとも、これは愛から区別できるかぎりで言えることです。それは、内面の、また外面の、神のすべての命令への服従です。心の服従であり、生活の服従です。あらゆる気質において、またあらゆるふるまいにおいて服従することです。そして、ここに最も明らかに含まれている気質の一つは、「良いわざに熱心な」ことです（テトス二・一四）。あらゆる仕方で、すべての人に善を行うことに、飢えかわくことです（ガラテヤ六・一〇）。彼らのために、人の子のだれのためにも、喜んで「費用を使い」、自分自身「をも使いつく」すことです（第二コリント一二・一五）。この世ではどんな報いも期待せず、ただ正しい人々の復活の際の報いだけを待ち望むのです（ルカ一四・一四）。

【四】 あなたがたは今、神の子か

（一） 以上のように、私は、聖書に示されている新生のしるしを、わかりやすく示してきました。こうして、神ご自身が、神から生れるとはどういうことかという、あの重大な問いに答えておられます。神の言葉に訴えるなら、「霊から生れる者もみな」、このような者です（ヨハネ三・八）。神の御霊の判断によれば、神の子であるとは、このことです。それは、キリストを通して神を信じ、「罪を犯さない」ほどになることです（第一ヨハネ三・九）。そして、いつでも、どこでも、「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安」を味わうことです（ピリピ四・七）。それは、神の愛する御子を通して（コロサイ一・一三）神に望みを置き、正しい「良心のあかし」を持つほどになることです（第二コリント一・一二）。それだけでなく、神の御霊のあかしも持つことです。御霊が、あなたがたの「霊と共に」、あなたがたが「神の子であることをあかしして」くださるのです（ローマ八・一六）。そこから、必ず喜びがわき出ます。あなたがたに「和解を得させて」くださった方にある喜びです（ローマ五・一一）。それは、このようにあなたがたを愛してくださった神を、あなたがたがこれまでどんな被造物をも愛したことのないほどに愛することです。そのため、あなたがたは、すべての人を自分自身のように愛さずにはいられなくなります。その愛は、あなたがたの心の中で絶えず燃えているだけではありません。あなたがたのすべての行いとふるまいに燃え上がり、あなたがたの全生涯を一つの「愛の労苦」とします（第一テサロニケ一・三）。次の命令への、一つの絶え間ない服従とするのです。「あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となりなさい（ルカ六・三六）。「主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければ」なりません（レビ記一九・二）。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ五・四八）。

（二） では、このように神から生れているあなたがたとは、どんな人々でしょうか。あなたがたは、「神から賜わった恵みを悟」っています（第一コリント二・一二）。あなたがたは、自分が神の子であることをよく知っており、「神のみまえに心を安んじて」いることができます（第一ヨハネ三・一九）。そして、これらの言葉に注意を払ってきたあなたがたはみな、感じずにはいられません。また、確かに知らずにはいられません。今この時、自分がこのような神の子であるか、そうでないかを、です。人にではなく、神に答えなさい！ 問題は、あなたがバプテスマでどんな者にされたかではありません（言い逃れをしてはいけません）。今、あなたがどんな者であるかです。子たる身分を授ける霊は（ローマ八・一五）、今、あなたの心のうちにおられるでしょうか。あなた自身の心に問うてみなさい。私は、あなたが水と霊とから生れたかどうかを尋ねているのではありません（ヨハネ三・五）。あなたが今、自分の内に宿っている聖霊の宮であるかどうかを尋ねているのです（第一コリント六・一九）。あなたが「キリストの割礼」を受けたことは認めましょう（コロサイ二・一一）。パウロは、バプテスマを力強くこう呼んでいます。けれども、キリストの霊、栄光の霊は、今、あなたに宿っておられるでしょうか（第一ペテロ四・一四）。そうでなければ、「あなたの割礼は無割礼となってしま」っているのです（ローマ二・二五）。

（三）　ですから、心の中で、「私はかつてバプテスマを受けた。だから、私は今、神の子だ」と言ってはいけません。ああ、その推論は決して成り立ちません。バプテスマを受けた大食する者や酒に酔う者が、なんと多いことでしょう。バプテスマを受けたうそつきや、いつも誓いの言葉を口にする者も、なんと多いことでしょう。バプテスマを受けたののしる者や悪口を言う者も、バプテスマを受けた不品行な者、盗む者、略奪する者も、なんと多いことでしょう（第一コリント六・九～一〇）。あなたがたは、どう思いますか。この人たちが、今、神の子なのでしょうか。まことに、あなたがたに言います。今挙げたどれか一つでも当てはまる人は、だれであっても、「自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者」です（ヨハネ八・四四）。「あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っている」のです（ヨハネ八・四一）。私は、あなたがたが自ら再び十字架につけている方の名によって（ヘブル六・六）、あなたがたに呼びかけます。また、その方が、割礼を受けたあなたがたの先人たちに語られた言葉によって、呼びかけます。「へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることが」できるでしょうか（マタイ二三・三三）。

（四）　まことに、新しく生れなければ、どうしてのがれることができるでしょう！　あなたがたは、今、罪過と罪とによって死んでいるからです（エペソ二・一）。ですから、あなたがたは新しく生れることができない、バプテスマのほかに新生はない、と言うとします。それは、あなたがたをみな、滅びの下に封じ込めることです。助けもなく、望みもないまま、地獄に引き渡すことです。そして、それが正しく、当然だと思う人もいるかもしれません。彼らは、万軍の主への熱心のあまり、こう言うかもしれません。「そうだ、罪びとなるアマレクびとを断ち滅ぼせ（サムエル記上一五・一八）！　このギベオンびとを滅ぼし尽せ！　彼らはそれに値するのだ」。確かに、彼らはそれより軽いものには値しません。けれども、私も、あなたがたも同じです。彼らと同じように、私が受けるべきものも、あなたがたが受けるべきものも、地獄です。私たちが今、消えない火の中にいないのは（マルコ九・四三）、ただあわれみによるのです。価なしの、受けるに値しないあわれみによるのです。あなたがたは言うでしょう。「けれども、私たちは洗われたのだ（第一コリント六・一一）。私たちは『水と霊から』新しく生れたのだ（ヨハネ三・五）」。彼らもそうでした。ですから、それは、あなたがたが今、彼らとまったく同じであるかもしれないことを、少しも妨げません。「人々の間で尊ばれるものは、神のみまえでは忌みきらわれる」ことを、知らないのですか（ルカ一六・一五）。世の聖徒たちよ、人々から尊ばれているあなたがたよ、出てきなさい。そして、あの人々に、だれが最初に石を投げつけるか、見てみなさい（ヨハネ八・七）。地上に生かしておく値打ちもない（使徒二二・二二）、あの哀れな者たちに、あの遊女、姦淫する者、人殺しに、です。ただ、まず、次の言葉が何を意味するかを学びなさい。「すべて兄弟を憎む者は人殺しです」（第一ヨハネ三・一五）。「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのです」（マタイ五・二八）。「不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないのですか」（ヤコブ四・四）。

（五）　「よくよく」あなたがたに「言っておきます」（ヨハネ三・三）。あなたがたも、「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。あなたがたも、「新しく生れなければ、神の国を見ることはでき」ません（ヨハネ三・三）。バプテスマで新しく生れた、という折れかけている葦のつえに、もう寄りかかってはいけません（イザヤ三六・六）。あなたがたがそのとき神の子とされ、天の御国の相続人とされたことを、だれが否定するでしょうか。けれども、それにもかかわらず、あなたがたは今、悪魔の子なのです。ですから、あなたがたは新しく生れなければなりません。事柄がはっきりしているのに、言葉の上であげつらう思いを、サタンにあなたがたの心に入れさせてはなりません。あなたがたは、神の子のしるしが何であるかを聞きました。自分の魂にそのしるしを持っていない人はみな、バプテスマを受けていても受けていなくても、そのしるしを受けなければなりません。そうでなければ、疑いもなく、永遠に滅びるのです。もしバプテスマを受けているなら、あなたがたのただ一つの望みは、これです。バプテスマによって神の子とされながら、今は悪魔の子となっている人々がいます。その人々も、もう一度、「神の子となる力」を受けることができるのです（ヨハネ一・一二）。失ったものを、もう一度受けることができるのです。すなわち、「子

たる身分を授ける霊」（ローマ八・一五）、彼らの「心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ」霊を（ガラテヤ四・六）、受けることができるのです。

「アァメン、主イエスよ」（黙示録二二・二〇）！　もう一度あなたの御顔をたずね求めようと、心を備える人々がいます。そのすべての人が、あの子たる身分を授ける霊をもう一度受けて、「アバ、父よ」と叫ぶことができますように。その人が今もう一度、あなたの名を信じて神の子となる力を与えられますように（ヨハネ一・一二）。そして、自分が、あなたの「血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受け」ていることを（エペソ一・七）、知り、また感じることができますように。自分が「神から生れた者であるから、罪を犯すことができない」ことを（第一ヨハネ三・九）、知り、また感じることができますように。その人が今、「新たに生れさせ」られて、「生ける望みをいだ」くことができますように（第一ペテロ一・三）。そして、あなたが「きよくあられるように、自らをきよく」することができますように（第一ヨハネ三・三）。そして、その人が「子であるのだから」（ガラテヤ四・六）、愛の霊、栄光の霊がその人に宿りますように（第一ペテロ四・一四）。その霊が、その人を「肉と霊とのいっさいの汚れから」きよめ、「神をおそれて全く清く」なることを教えてくださいますように（第二コリント七・一）！

説教十九　神から生れた者の大いなる特権

「すべて神から生れた者は、罪を犯しません」（第一ヨハネ三・九）

（一）　神から生れることは、義とされることとまったく同じだと、しばしば考えられてきました。新生と義認とは、同じ事柄を指す、違う言い方にすぎない、というのです。確かに、一方では、義とされた者はだれでも、神からも生れています。他方では、神から生れた者はだれでも、義ともされています。そうです、神のこの二つの賜物は、信じる者のだれにも、まったく同じ瞬間に与えられるのです。同じ一つの時点で、その人の罪は消し去られ、その人は神から新しく生れるのです。

（二）　けれども、義認と新生とが、時の上では互いに切り離せないことを認めるとしても、両者はたやすく区別されます。同じものではなく、性質のまったく異なるものだからです。義認は、関係の変化だけを意味します。新生は、実質の変化を意味します。神は、私たちを義とされるとき、私たちのために何かをしてくださいます。私たちを新たに生れさせるとき、私たちのうちにみわざをなさいます。前者は、神に対する私たちの外的な関係を変え、私たちは敵から子となります。後者によって、私たちの魂の最も奥が変えられ、私たちは罪人から聖徒となります。一方は、私たちを神の恵みへと回復させ、他方は、神のかたちへと回復させます。一方は罪の罪責を取り去ることであり、他方は罪の力を取り去ることです。ですから、両者は、時の上ではひとつに結ばれていても、まったく別の性質のものなのです。

（三）　このことを見分けないこと、すなわち、義とされることと新しく生れることとの大きな違いに気づかないことが、多くの人を混乱させてきました。この問題を論じてきた人々の考えに、ひどい混乱を引き起してきたのです。特に、神の子たちのこの大いなる特権を説明しようとしたときに、そうでした。どのようにして「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」のかを示そうとしたときです（第一ヨハネ三・九）。

（四）　このことをはっきりと理解するためには、次のことが必要でしょう。第一に、「すべて神から生れた者」という表現の本来の意味を考えること（第一ヨハネ三・九）。第二に、どういう意味で、その人が「罪を犯さない」のかを調べることです（第一ヨハネ三・九）。

【一】「すべて神から生れた者」の意味

（一）　第一に、「すべて神から生れた者」という表現の本来の意味を考えなければなりません（第一ヨハネ三・九）。「神から生れる」という表現は、聖書のあちこちに出てきます。それらの箇所全体から、一般に、次のことを学ぶことができます。この表現が意味するのは、ただバプテスマを受けることでも、どんな外面の変化でもありません。それは、大きな内面の変化です。聖霊の働きによって魂のうちに起される変化であり、私たちの存在のあり方全体の変化です。私たちは、神から生れたその瞬間から、以前とはまったく違うあり方で生きるからです。いわば、別の世界にいるのです。

（二）　この表現の根拠と理由は、たやすく理解できます。私たちがこの大きな変化を経るとき、新しく生れたと言うのは、まことにふさわしいことです。自然の出生と霊の出生とでは、その事情がとてもよく似ているからです。ですから、自然の出生の事情を考えることが、霊の出生を理解するいちばんたやすい道なのです。

（三）　まだ生れていない子供も、いのちのあるすべてのものと同じように、確かに空気によって生きています。けれども、空気を感じてはいません。ほかの何も感じていません。感じるとしても、ごくぼんやりと、不完全に感じるだけです。耳はほとんど聞えません。まったく聞えないかもしれません。聞くための器官が、まだ閉ざされているからです。目は何も見えません。目はしっかりと閉じ

られ、まったくのやみに包まれているからです。生れるときが近づくと、いのちのかすかな始まりがあるかもしれません。それに伴って、いくらか動くこともあるでしょう。それによって、ただの物質のかたまりとは区別されます。けれども、感覚はありません。魂へ通じるこれらの道は、どれもまだすっかり閉ざされています。そのため、この見える世界とは、ほとんど何の交わりもありません。そこで起ることについて、知識も、概念も、観念も、ほとんど持っていません。

（四）まだ生れていない子供が、見える世界をまったく知らないのは、その世界が遠く離れているからではありません（それはすぐ近くにあり、四方からその子を包んでいます）。一つには、その子に感覚がないからです。物質の世界と交わることは、感覚によってしかできません。その感覚が、まだその子の魂のうちに開かれていないのです。もう一つには、その間に厚いおおいがかけられていて、それを通しては何も見分けられないからです。

（五）けれども、子供は、この世に生れるとすぐに、まったく違うあり方で存在するようになります。今や、その子は、自分を取り巻く空気を感じます。空気は四方からその子のうちに流れ込み、その子はそれを、入ってくるのと同じ速さで、かわるがわる吐き返します。こうして、いのちの炎が保たれるのです。そこから、力と動きと感覚とが、絶えず増していきます。からだの感覚がみな、今や目覚め、それぞれにふさわしい対象を与えられているからです。

その子の目は、今や開かれて、光をとらえます。光は静かに目に流れ込み、光そのものだけでなく、数限りない、さまざまなものを見せてくれます。それらは、以前にはまったく知らなかったものです。その子の耳は開かれ、限りなく多様な音がどっと流れ込みます。どの感覚も、それぞれに特にふさわしい対象に向けて働きます。そして、魂は、これらの入口を通して、見える世界と自由に交わります。こうして、感覚でとらえられるものについて、日の下にあるすべてのものについて、ますます多くの知識を得ていくのです。

（六）神から生れる人も、同じです。あの大きな変化が起る前にも、その人は神によって生きています。いのちのあるものはみな、神のうちに「生き、動き、存在している」のです（使徒一七・二八）。それでも、その人は神を感じていません。神の臨在を感じず、内側で少しも意識していないのです。その人は、あの神のいのちの息に気づいていません。それがなければ、一瞬も生きていられないのにです。また、神のことを何一つ感じていません。神のことは、その人の魂に何の印象も残しません。神は、絶えず高い所からその人に呼びかけておられます。けれども、その人には聞えません。耳が閉ざされているので、まじない師がどんなに巧みにまじないをしても、その声はその人に届かないのです（詩篇五八・五）。その人には、神の御霊のことが見えません。その人の心の目は閉ざされ、まったくのやみがその魂全体をおおい、四方からその人を包んでいるからです。確かに、その人にも、いのちのかすかな夜明けがあるかもしれません。霊の動きの小さな始まりがあるかもしれません。けれども、まだ、霊のものを見分けることのできる霊の感覚がありません。そのため、その人は、神の御霊のことを見分けません。「御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」のです（第一コリント二・一四）。

（七）ですから、その人は、見えない世界とほとんど交わりがないので、その世界についてほとんど何も知りません。その世界が遠く離れているからではありません。そうではありません。その人は、その世界のただ中にいるのです。その世界は、その人を周りから取り囲んでいます。私たちが普通あの世と呼んでいる世界は、私たちひとりびとりから遠く離れてはいません（使徒一七・二七）。それは、上にも、下にも、四方にもあります。ただ、生れながらの人には、それが見分けられないのです。一つには、霊の感覚がないからです。私たちが神のことを見分けられるのは、霊の感覚によってだけです。もう一つには、間に厚いおおいがかけられていて、それを突き抜ける方法を知らないからです。

（八）けれども、その人が神から生れ、霊から生れるとき（ヨハネ三・八）、その存在のあり方は、なんと変ることでしょう！　今や、その人の魂全体が神を感じています。そして、確かな経験によって、こう言うことができます。あなたは私の床のまわりにも、私の道のまわりにもおられます（詩篇一三九・三）。私は、私のあらゆる道で、あなたを感じます。「あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます」（詩篇一三九・五）。神の霊、すなわち神の息が、新しく生れた魂に直接吹き込まれます。そして、神から来たその同じ息が、神へと帰っていきます。その息は、信仰によって絶えず受けられ、愛によっ

て、祈りと賛美と感謝によって、絶えず返されます。愛と賛美と祈りとは、本当に神から生れたすべての魂の息なのです。この新しい種類の霊の呼吸によって、霊のいのちは保たれるだけでなく、日ごとに増していきます。霊の力と動きと感覚も、ともに増していきます。魂の感覚がみな、今や目覚めていて、霊の善と悪とを見分けることができるからです。

（九）今や、その人の「心の目」は「明らかに」され（エペソ一・一八）、その人は「見えないかたを見て」います（ヘブル一一・二七）。その人は、神の「力」と愛とが、「信じる者にとっていかに絶大なものであるか」を見ています（エペソ一・一九）。神が罪人の自分をあわれんでくださること、神の愛する御子を通して神と和解していること（コロサイ一・一三）を、見ています。赦してくださる神の愛も、神の「尊く、大いなる約束」のすべても（第二ペテロ一・四）、はっきりと見てとっています。「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は」、その人の「心を照してくださった」のであり、今も照しておられます。それは、その人を照して、「キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにする」ためです（第二コリント四・六）。やみはすべて、今や過ぎ去りました（第一ヨハネ二・八）。その人は、神の御顔の光のうちにとどまっています。

（一〇）今や、その人の耳は開かれ、神の声は、もはやむなしく呼びかけることはありません。その人は、天の召しを聞いて（ヘブル三・一）、それに従います。自分の羊飼の声を知っているのです（ヨハネ一〇・四）。霊の感覚がみな今や目覚めているので、その人は、見えない世界とはっきりと交わっています。そのため、以前にはその人の「心に思い浮びもしなかった」ことを、ますます多く知るようになります（第一コリント二・九）。その人は今、神の平安とは何かを知っています（ピリピ四・七）。聖霊における喜びとは何かを知っています（ローマ一四・一七）。キリスト・イエスを通して神を信じる人々の心に注がれている、神の愛とは何かを知っています（ローマ五・五）。こうして、以前には神の光と声、神を知る知識と神の愛とをさえぎっていたおおいが、取り除かれます。霊から生れた人は、愛のうちにいて、「神におり、神も彼にいます」（第一ヨハネ四・一六）。

【二】どういう意味で「罪を犯さない」のか

（一）これまで、「すべて神から生れた者」という表現の意味を考えてきました（第一ヨハネ三・九）。第二に残っているのは、どういう意味で、その人が「罪を犯さない」のかを調べることです（第一ヨハネ三・九）。

さて、ここに、前に述べたように神から生れた人がいるとします。その人は、神からのいのちの息、すなわち神の御霊の恵み深い働きを、絶えず魂に受け、それを絶えず返しています。その人は、このように信じ、愛しています。信仰によって、神が自分の霊に絶えず働きかけておられるのを感じとり、一種の霊の応答によって、受けた恵みを返しています。絶え間ない愛と賛美と祈りとによって返しているのです。このような人は、こうして自分を守っている間は（第一ヨハネ五・一八）、罪を犯さないだけではありません。この「種が、その人のうちにとどまっている」かぎり、その人は、「神から生れた者であるから、罪を犯すことができない」のです（第一ヨハネ三・九）。

（二）私は、ここで、罪という言葉を、その平易で普通の受け取り方に従って、外の罪と解します。すなわち、律法を実際に、自分の意志で犯すことです。啓示された、書き記された神の律法を犯すことです。神のどんな戒めであれ、それを破るときに、神の戒めだと認めているものを破ることです。けれども、「すべて神から生れた者は」（第一ヨハネ三・九）、このように罪を犯しません。信仰と愛のうちに、また祈りと感謝の霊のうちにとどまっている間は、犯さないだけでなく、犯すことができないのです。その人は、このようにキリストを通して神を信じ、神を愛し、神のみ前に心を注ぎ出しています（詩篇六二・八）。そうしているかぎり、神のどんな命令も、自分の意志で破ることはできません。神が禁じておられると知っていることを、言うことも、行うこともできないのです。そのかぎり、その人のうちにとどまっているあの種が、その人を引きとめます。あの種とは、愛し、祈り、感謝する信仰です。この信仰によって、その人は、神のみまえで忌みきらわれる（ルカ一六・一五）と知っていることを、何であれ控えるのです。

（三）　けれども、ここで、すぐに一つの難問が出てきます。多くの人には、乗り越えられないと思えた難問です。そのために、彼らは使徒の明白な主張を否定し、神の子たちの特権を手放してしまいました。

実際、本当に神から生れていたことを否定できない人々がいます（神の御霊が、みことばの中で、彼らについてこの誤りのないあかしを私たちに与えておられるのです）。それでも、その人々が罪を犯すことができたばかりか、実際に犯したことは明らかです。それも、ひどい外の罪をです。彼らは、明白な、よく知っている神の律法を犯しました。神が禁じておられると知っていることを、言い、また行ったのです。

（四）　たとえば、ダビデは、イスラエルの王として油を注がれる前に（サムエル記下五・三）、疑いもなく神から生れていました。ダビデは、自分の信じてきたかたを知っていました（第二テモテ一・一二）。「信仰によって強められ、栄光を神に帰し」ていたのです（ローマ四・二〇）。ダビデは言います。「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがありません。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます。たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」（詩篇二三・一～二、四）。ダビデは、愛に満たされていました。その愛に迫られて、しばしばこう叫びました。「わが力なる主よ、わたしはあなたを愛します。主はわが岩、わが城」、「わが救の角、わが高きやぐらです」（詩篇一八・一～二）。ダビデは、祈りの人でした。生活のあらゆる場面で、神のみ前に魂を注ぎ出しました。また、賛美と感謝にあふれていました。ダビデは言います。あなたへの「さんびはわたしの口に絶え」ません（詩篇三四・一）。「あなたはわが神、わたしはあなたに感謝します。あなたはわが神、わたしはあなたをあがめます」（詩篇一一八・二八）。それなのに、このような神の子が、罪を犯すことができ、また実際に犯したのです。そうです、姦淫と殺人という恐ろしい罪をです。

（五）　聖霊がもっと豊かに与えられたあとにも、同じような悲しい実例には事欠きません。キリストが「福音によっていのちと不死とを明らかに示された」あとにもです（第二テモテ一・一〇）。それらも、疑いなく、私たちの教えのために書かれたのです（ローマ一五・四）。たとえば、使徒たち自身から、バルナバ、すなわち慰めの子と呼ばれた人がいます（使徒四・三六～三七）。そう呼ばれたのは、おそらく、持っていたものをすべて売り、その代金を持ってきて、貧しい兄弟たちを助けたからでしょう。彼は、アンテオケで重んじられ、すべての弟子の中からサウロと共に選ばれて、ユダヤの兄弟たちに援助を届けました（使徒一一・二九～三〇）。ユダヤから帰ると、このバルナバは、聖霊の特別な指示によって、ほかの預言者や教師たちの中から、厳かに聖別されました（使徒一三・一～四）。神が召された仕事に当らせるためです。その仕事とは、偉大な使徒に同行して異邦人の間に行き、どこででもその同労者となることでした。それなのに、そのバルナバが、のちにパウロと激しく言い争いました（使徒一五・三六～三九）。パウロが、兄弟たちを二度目に訪ねるにあたって、ヨハネを「連れて行かないがよいと考えた」からです（使徒一五・三八）。ヨハネは、「前にパンフリヤで一行から離れて、働きを共にしなかった」のです（使徒一五・三八）。そのため、バルナバ自身も働きから離れてしまいました。ヨハネを「連れてクプロに渡って行」ったのです（使徒一五・三九）。聖霊によってあれほど直接に結び合わされた人を、見捨てたのです。

（六）　この二つよりもさらに驚くべき実例を、パウロがガラテヤ人への手紙の中で挙げています。ペテロは、年長で熱心な、使徒たちの筆頭であり、主に最も目をかけられた三人のひとりでした。そのペテロが「アンテオケにきたとき、彼に非難すべきことがあったので、わたしは面とむかって彼をなじった」のです（ガラテヤ二・一一）。「ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしていた」からです（ガラテヤ二・一二）。異邦人とは、キリスト教の信仰に改宗した異教徒たちです。ペテロは、「どんな人間をも清くないとか、汚れているとか言ってはならない」と（使徒一〇・二八）、神から特別に教えられていたので、そうしていたのです。ところが、「彼らがきてからは」、ペテロは「割礼の者どもを恐れ」、「離れて行った」のです（ガラテヤ二・一二）。「そして、ほかのユダヤ人たちも彼と共に偽善の行為をし、バルナバまでがそのような偽善に引きずり込まれ」ました（ガラテヤ二・一三）。「彼らが福音の真理に従ってまっすぐに歩いていないのを見て、わたしは衆人の面前で」ペテロに「言った、『あなたは、ユダヤ人であるのに、異邦人のように生活していながら』」（す

なわち、モーセの儀式律法を顧みないでいながら)、『どうして異邦人にユダヤ人のようになることをしいるのか』」(ガラテヤ二・一四)。ここにも、疑いもなく神から生れていた人が犯した、明白で否定しようのない罪があります。けれども、これを、ヨハネの主張と、どのように調和させることができるのでしょうか。「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」という主張を(第一ヨハネ三・九)、明らかな文字どおりの意味に取るとすれば、です。

(七) 私は答えます。昔から気づかれてきたのは、次のことです。神から生れた者は、神の恵みによって、自分を守ることができます。そのように自分を守っているかぎり(第一ヨハネ五・一八)、「悪しき者が手を触れるようなことは」ありません(第一ヨハネ五・一八)。けれども、自分を守らず、信仰にとどまらないなら、その人も、ほかの人と同じように罪を犯すことがありえます。

ですから、次の二つがどうして両立するのかは、たやすく理解できます。これらの神の子のだれであれ、自分の確信を失うことがありえます(第二ペテロ三・一七)。それでも、使徒が宣言した神の大いなる真理は、堅く立って揺るぎません。神の恵みは、その人に十分でした(第二コリント一二・九)。それなのに、その人は、その恵みによって自分を守らなかったのです(第一ヨハネ五・一八)。その人は、一歩一歩、落ちていきました。まず、消極的な内の罪に落ちました。自分のうちにある「神の賜物を、再び燃えたたせ」ず(第二テモテ一・六)、「努めて祈」りませんでした(第一ペテロ四・七)。「上に召してくださる神の賞与を得ようと」、「目標を目ざして」進むこともしませんでした(ピリピ三・一四)。次に、積極的な内の罪に落ちました。心を悪に傾け、何かの悪い欲求や気質に身をまかせたのです。その次に、信仰を失いました。赦してくださる神を見ることを失い、そのため、神への愛も失いました。そうして弱くなり、ほかの人と同じようになったので、外の罪さえ犯しうるようになったのです。

(八) これを一つの具体的な例で説明しましょう。ダビデは神から生れ、信仰によって神を見ていました。真実をもって神を愛していました。ダビデは、心からこう言うことができました。「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得るでしょうか。「地には」、人であれ物であれ、あなたと比べて「慕うものは」ありません(詩篇七三・二五)。けれども、ダビデの心には、なおあの性質の腐敗が残っていました。それは、あらゆる悪の種です。

ダビデは、「王の家の屋上を歩いていた」とき(サムエル記下一一・二)、おそらく、自分の魂の愛する神をほめたたえていたのでしょう。そのとき、ふと見下ろして、バテシバを見たのです。ダビデは誘惑を感じました。悪へと傾く思いです。神の御霊は、そのことを確かに彼に悟らせてくださいました。ダビデは疑いもなく、その警告の声を聞き、それと知っていました。けれども、その思いにいくらか屈したので、誘惑が彼を支配し始めました。これによって、ダビデの霊は汚されました。彼は、なお神を見ていました。けれども、以前よりもぼんやりとでした。なお神を愛していました。けれども、以前と同じ程度にではありません。同じ強さ、同じ熱い思いをもってではありませんでした。それでも、神は再び彼を引きとめられました。神の御霊は悲しんでおられましたが(エペソ四・三〇)、そうされたのです。その声は、だんだんかすかになりながらも、なおささやきました。「罪が門口に待ち伏せています(創世記四・七)。わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われます(イザヤ四五・二二)」。けれども、ダビデは聞こうとしませんでした。もう一度見たのです。神をではなく、禁じられたものを見たのです。そして、ついに生れながらの性質が恵みにまさり、彼の魂に情欲を燃え上がらせました。

今や、ダビデの心の目は再び閉ざされ、神は彼の視界から消えうせました。信仰、すなわち神との神聖な、超自然の交わりも、神への愛も、ともにやみました。そのとき、ダビデは、戦場にはせ入る馬のように突き進み(エレミヤ八・六)、知りながら外の罪を犯したのです。

(九) あなたがたは、恵みから罪へと進む、疑いようのない道すじを見ています。それは、このように一歩一歩進んでいきます。

一、愛し、勝利する信仰という神の種が、神から生れた人のうちにとどまっています(第一ヨハネ三・九)。その人は、神の恵みによって自分を守り(第一ヨハネ五・一八)、「罪を犯すことができ」ません(第一ヨハネ三・九)。

二、誘惑が起ります。世からであれ、肉からであれ、悪魔からであれ、かまいません。

三、神の御霊が、罪が近づいていると警告し、いっそう努めて祈るように命じられます（第一ペテロ四・七）。

四、その人は、誘惑にいくらか屈します。すると、誘惑が快く思えてきます。

五、聖霊は悲しまれ（エペソ四・三〇）、その人の信仰は弱まり、神への愛は冷えていきます（マタイ二四・一二）。

六、御霊は、もっと厳しくその人に忠告し、言われます。「これは道だ、これに歩みなさい」（イザヤ三〇・二一）。

七、その人は、耳に痛い神の声から顔をそむけ、耳に快い誘惑者の声に聞き従います。

八、悪い欲がその人の魂に生じて広がり、ついに信仰も愛も消えうせます。そのとき、その人は外の罪を犯しうるようになります。主の力がその人から去ってしまったからです。

（一〇）これを別の例で説明しましょう。使徒ペテロは、信仰と聖霊とに満ちていました（使徒六・五）。こうして自分を守り（第一ヨハネ五・一八）、神に対しまた人に対して、良心に責められることのない状態を保っていました（使徒二四・一六）。

ペテロは、このように単純さと神にかなう誠実さとをもって歩んでいました（第二コリント一・一二）。それで、「ヤコブのもとからある人々が来るまでは、彼は異邦人と食を共にしていた」のです（ガラテヤ二・一二）。神がきよめたものは、清くないものでも汚れたものでもないと、知っていたからです（使徒一〇・一五）。

けれども、「彼らがきてからは」（ガラテヤ二・一二）、ペテロの心に誘惑が起りました。「割礼の者どもを恐れ」（ガラテヤ二・一二）、神のほまれよりも、この人たちの好意とほまれを重んじようとする誘惑です（ヨハネ一二・四三）。割礼の者どもとは、割礼やモーセの律法のほかの儀式に熱心な、ユダヤ人の改宗者たちのことです。

ペテロは、罪が近づいていると御霊から警告を受けました。それにもかかわらず、いくらかそれに屈しました。人を恐れるという罪深い恐れに屈したのです。そして、それに応じて、信仰と愛とが弱まりました。

神は、悪魔に機会を与えたことについて（エペソ四・二七）、再びペテロに忠告されました。それでも、ペテロは自分の羊飼の声に聞き従おうとせず、あの奴隷のような恐れに身をゆだね、そのため御霊を消してしまいました（第一テサロニケ五・一九）。

すると、神は見えなくなり、信仰と愛とが消えて、ペテロは外の罪を犯しました。ペテロは、まっすぐに歩かず、「福音の真理に従って」歩かず（ガラテヤ二・一四）、クリスチャンの兄弟たちから「離れて行った」のです（ガラテヤ二・一二）。そして、その悪い手本によって、あるいは勧めによってさえ、異邦人にまで「ユダヤ人のようになることをしい」たのです（ガラテヤ二・一四）。異邦人が、再び「奴隷のくびきにつながれ」るようにしたのです（ガラテヤ五・一）。「キリストは」彼らを「解放してくださった」のにです（ガラテヤ五・一）。

こうして、次のことは疑いもなく真実です。神から生れた人は、自分を守っているなら、罪を犯さず、また犯すことができません。それでも、自分を守らないなら、あらゆる罪を、むさぼるように犯すことがありうるのです。

【三】ここから学ぶこと

（一）これまで考えてきたことから、第一に、ある問いにはっきりと答えることを学べます。反論の余地のない答えです。その問いは、心の誠実な多くの人を、しばしば悩ませてきました。「罪は、信仰を失うことに先立つのか、それとも、あとに続くのか。神の子は、まず罪を犯し、それによって信仰を失うのか。それとも、まず信仰を失い、それから罪を犯しうるようになるのか」。

私は答えます。信仰を失う前には、少なくとも何かの怠りの罪、何かの内の罪が、必ず先立ちます。けれども、外の罪を犯す前には、信仰を失うことが先立たなければなりません。

信じる者は、自分の心を調べれば調べるほど、次のことを確信するでしょう。愛によって働く信仰は（ガラテヤ五・六）、努めて祈っている魂から（第一ペテロ四・七）、内の罪も外の罪も締め出す、ということです。それでも、私たち

は、そのときにも誘惑を受けることがある、ということです。特に、私たちにからみつく罪の誘惑を受けます（ヘブル一二・一）。魂の愛のまなざしが、ゆるぎなく神に注がれているなら、誘惑はすぐに消え去る、ということです。けれども、そうでないなら、どうでしょうか。使徒ヤコブの言葉で言えば（ヤコブ一・一四）、私たちがエクセルコメノイ（ἐξελκόμενοι）となるとします。自分の欲によって神から引き離されるのです。また、デレアゾメノイ（δελεαζόμενοι）となるとします。目の前の快楽や約束された快楽のえさにかかるのです。すると、その欲が私たちのうちにはらんで、罪を生みます（ヤコブ一・一五）。そして、その内の罪によって私たちの信仰を滅ぼし、私たちを悪魔のわなに真っ逆さまに投げ込みます（第二テモテ二・二六）。そのため、私たちは、どんな外の罪でも犯しうるようになるのです。

（二）　これまで述べてきたことから、第二に、信じる者の魂のうちにある神のいのちとは何かを、学ぶことができます。それが本来何から成っているか、そこに直接に、また必然的に何が含まれているかを、学べるのです。そこに直接に、また必然的に含まれているのは、神の聖霊が絶えず吹き込まれることです。神が魂に息を吹き込み、魂が神から最初に受けたものを吐き返すことです。神が魂に絶えず働きかけ、魂が神に応答することです。神が、愛し赦してくださる神が、絶えずそこにいて、心に現され、信仰によって感じとられることです。そして、愛と賛美と祈りとが、絶えず神に返されることです。私たちは、心のすべての思い、舌のすべての言葉、手のすべてのわざ、からだと魂と霊のすべてをささげます。それらを、キリスト・イエスにあって神に喜ばれる、聖なる供え物とするのです（ローマ一二・一）。

（三）　そこから、第三に、魂のこの応答（それを何と呼ぶにせよ）が、どうしても必要であることを推論できます。魂のうちの神のいのちが続くためです。魂が神に応答しなければ、神は魂に働きかけ続けてはくださらないことは、明らかだからです。確かに、神は、慈しみの祝福をもって、私たちに先立ってくださいます。神がまず私たちを愛し（第一ヨハネ四・一九）、ご自身を私たちに現してくださいます。私たちがまだ遠く離れているうちに（ルカ一五・二〇）、神は私たちをご自分のもとへ呼び、私たちの心を照してくださいます（第二コリント四・六）。けれども、そのとき、私たちが、まず愛してくださった方を愛さないとします。その声に聞き従おうとせず、その方から目をそむけ、その方が注いでくださる光に心を向けようとしないとします。そうなれば、神の御霊は、いつまでも私たちと争ってはくださいません。御霊は、しだいに退き、私たちを自分の心のやみにまかせてしまわれます。私たちの魂が神に向かって息を返さないかぎり、神は私たちの魂に息を吹き込み続けてはくださいません。私たちの愛と祈りと感謝とが、神の喜ばれるいけにえとして（ヘブル一三・一六）、神に返らないかぎり、そうなのです。

（四）　最後に、偉大な使徒のあの勧めに従うことを学びましょう。「高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい」（ローマ一一・二〇）。死や地獄よりも、罪を恐れましょう。自分の偽る心に頼ることのないように、注意深い恐れを持ちましょう（苦しめるような恐れではありません）。立っている「者は、倒れないように気をつけ」なさい（第一コリント一〇・一二）。今、神の恵みのうちに、世に勝つ信仰のうちに（第一ヨハネ五・四）、堅く立っている人でさえ、内の罪に陥ることがありえます。そして、それによって、「信仰の破船に会」うことがありうるのです（第一テモテ一・一九）。そうなれば、外の罪が、なんとたやすく再びその人を支配することでしょう！　ですから、神の人よ（第一テモテ六・一一）、あなたはいつも目をさましていなさい。いつも神の声を聞くためです！　目をさましていなさい。いつでも、どこでも、神のみ前に心を注ぎ出して（詩篇六二・八）、絶えず祈るためです（第一テサロニケ五・一七）！　そうすれば、あなたはいつも信じ、いつも愛し、決して罪を犯すことはありません。

説教二十一　山上の説教（一）

「イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきました。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われました。『こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものです。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるでしょう』」（マタイ五・一～四）

（一）　私たちの主は、このころまでに「ガリラヤの全地を巡り歩いて」おられました（マタイ四・二三）。「ヨハネが捕えられた」ときから（マタイ四・一二）、そうしておられたのです。「諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え」ただけではありません。「民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった」のです（マタイ四・二三）。その当然の結果として、「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従」いました（マタイ四・二五）。「イエスはこの群衆を見て」、「山に登」られました（マタイ五・一）。この群衆は、たとえ近くに会堂があったとしても、どの会堂にも入りきらなかったでしょう。山には、四方から主のもとに来るすべての人が入れる場所があったのです。ユダヤ人のならわしのとおりに、イエスが「座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた」のです（マタイ五・一）。「そこで、イエスは口を開き」（これは、厳かな説教の始まりを表す言い方です）、「彼らに教えて言われ」ました（マタイ五・二）。

（二）　ここで語っておられるのがだれなのかに、目を留めましょう。どう聞くかに注意するためです（ルカ八・一八）。それは、天地の主、万物の造り主です。造り主として、ご自分の造られたすべてのものを思いのままに扱う権利を持っておられます。それは、私たちを治める主です。その国はとこしえの国であり（詩篇一四五・一三）、そのまつりごとはすべての物を統べ治めます（詩篇一〇三・一九）。それは、偉大な立法者です。ご自分のすべての律法を守らせる力を持っておられます。「救うことも滅ぼすこともできる」方だからです（ヤコブ四・一二）。そうです、「主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰」を与えることもできるのです（第二テサロニケ一・九）。それは、御父の永遠の知恵です。この方は、私たちの造られたさまを知り（詩篇一〇三・一四）、私たちの最も奥のなりたちまで理解しておられます。私たちが、神と、互いと、神の造られたすべてのものと、どのような関係にあるかを知っておられます。ですから、ご自分の定めるすべての律法を、神が私たちを置かれたあらゆる境遇にどう合わせればよいかを、知っておられるのです。それは、「すべてのものに恵みがあり、そのあわれみはすべてのみわざの上にある」方です（詩篇一四五・九）。愛の神です。この方は、永遠の栄光を捨てておのれをむなしくし（ピリピ二・七）、人の子らに御父のみこころを告げるために、御父から出てこられました。そして、再び御父のみもとに行かれます（ヨハネ一六・二八）。この方は、「盲人の目を開き」（イザヤ四二・七）、「暗黒」に「住む者を照」すために（ルカ一・七九）、神からつかわされたのです。それは、主の偉大な預言者です。この方について、神ははるか昔に厳かに宣言されました。「彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰します」（申命記一八・一九）。使徒の言い方では、こうです。「彼に聞きしたがわない者は、みな民の中から滅ぼし去られます」（使徒三・二三）。

（三）　では、この方は何を教えておられるのでしょうか。天から来られた神の御子が、ここで、天への道を示しておられます。私たちのために用意してくださった場所への道です（ヨハネ一四・二）。世が造られる前に御子が持っておられた栄光への道です（ヨハネ一七・五）。御子は、永遠のいのちに至るまことの道を教えておられます。御国に通じる王の道です。そして、ただ一つのまことの道です。ほかに道はないからです。ほかの道はみな、滅びに至ります（マタイ七・一三）。語っておられる方がどういう方かを考えれば、私たちは確信できま

す。この方は、神の完全で欠けのないみこころを告げてくださったのです。多すぎることは一画も語っておられません。御父から受けたこと以上は、何も語っておられないのです。少なすぎることもありません。神のみ旨をあますところなく伝えることを、ためらわれなかったのです（使徒二〇・二七）。まして、何か誤ったこと、ご自分をつかわされた方のみこころに反することを、語られたはずがありません。この方の言葉はみな、すべてのことについて真実で正しく、世々かぎりなく堅く立ちます（詩篇一一一・八）。

また、たやすく気づくことがあります。主は、これらの信ずべき、まことの言葉を（黙示録二二・六）説き明かし、確かなものとされます。そのとき、注意深く誤りを退けておられるのです。律法学者やパリサイ人の誤りを退けられるだけではありません。それは当時の誤った注釈で、その時代のユダヤ人の教師たちは、それによって神の言葉をゆがめていました。主は、救いと相いれない、実際の生活にかかわる誤りも、すべて退けておられます。それがキリスト教会にいつ起るものであってもです。どの時代、どの国であれ、クリスチャンの教師たち（そう呼ばれている人々）が、さまざまな注釈によって神の言葉をゆがめることがあります。そして、不注意な魂に、迷いの生活をして死を求めるように教えることがあります。主は、そのような注釈もすべて退けておられるのです。

（四）　ここから、私たちは自然に、主がここでだれを教えておられるのかに、目を向けることになります。使徒たちだけではありません。そうなら、山に登る必要はなかったでしょう。マタイの家でも、ほかのどの弟子の家でも、その一部屋に十二人は入れたはずです。また、主のもとに来た弟子たちが十二人だけだったということは、どこからも読み取れません。これは、原語ではホイ・マセータイ・アウトゥー（οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ）、すなわち「彼の弟子たち」です。この言葉は、無理に解釈しなくても、主から学びたいと願ったすべての人を指すと理解できます。けれども、これを疑いの余地のないものにしましょう。「イエスは口を開き、彼らに教えて」とあります（マタイ五・二）。その「彼ら」という語には、主と共に山に登ったすべての群衆が含まれています。それを否定しようもなく明らかにするには、七章の結びの節を見るだけで十分です。「イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆は」（ホイ・オクロイ、οἱ ὄχλοι）「その教にひどく驚」きました（マタイ七・二八）。すなわち、主の教え方に驚いたのです。「それは」群衆に、「律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからです」（マタイ七・二九）。

このとき主が救いの道を教えておられたのは、山の上で主と共にいた群衆だけではありません。すべての人の子ら、全人類でした。まだ生れていない子供たち、世の終りに至るまでの来るべきすべての世代でした。いつかこのいのちの言葉を聞くことになる人々みなです（使徒五・二〇）。

（五）　このあとに続く説教の一部については、だれもがこのことを認めています。たとえば、心の貧しさについて言われていることが、すべての人にかかわることを否定する人はいません。けれども、多くの人は、ほかの部分はそうではないと考えてきました。使徒たちだけに、あるいは最初のクリスチャンたちだけに、あるいはキリストの教役者たちだけにかかわる、と言うのです。一般の人々に向けたものでは決してなく、したがって一般の人々には何のかかわりもない、と考えるのです。

けれども、こう問うのは正当ではないでしょうか。この説教のある部分は、使徒たちや、使徒時代のクリスチャンたちや、キリストの教役者たちだけにかかわる。そのようなことを、だれが彼らに告げたのでしょうか。ただ言い張るだけでは、これほど重大な点を立証するのに十分ではありません。では、私たちの主ご自身が、ご自分の説教のある部分はすべての人にかかわるのではない、と教えておられるでしょうか。もしそうなら、疑いなく、主は私たちにそう告げられたでしょう。これほど必要な知らせを、言い落とされるはずがありません。では、主はそう告げておられるでしょうか。どこででしょうか。この説教そのものの中でしょうか。いいえ。ここには、そのことをほのめかす言葉さえ少しもありません。ほかのどこかで、ほかの説教の中で、そう言っておられるでしょうか。主が群衆に、あるいは弟子たちに語られたどの言葉の中にも、そのことにかすかにでも触れる言葉は、一つも見つかりません。使徒たちのだれか、あるいは霊感を受けたほかの記者が、そのような教えを書き残しているでしょうか。そのようなことはありません。神の言葉のどこにも、この種の主張は見当たりません。それな

ら、神よりもはるかに賢いこの人々は、いったいだれなのでしょうか。書かれていることをはるかに越えて賢いとは、何者なのでしょうか。

（六） おそらく彼らは、事柄の道理からして、そのような制限を設けなければならないのだ、と言うでしょう。もしそうなら、その理由は次の二つのどちらかのはずです。そのような制限がなければ、この説教は明らかにばかげたものになるか、聖書のほかの箇所と矛盾するか、です。けれども、そうではありません。一つ一つの項目を調べていけば、はっきりします。私たちの主がここで語られたことをすべて、すべての人に当てはめても、少しもばかげたことにはなりません。また、主が語られたほかの何とも、聖書のほかのどの箇所とも、矛盾することにはなりません。それどころか、さらに明らかになるでしょう。この説教は、すべての部分を人々一般に当てはめるか、どの部分も当てはめないか、どちらかなのです。すべての部分は互いにつながっているからです。アーチの石のように組み合わされていて、一つを取り去れば、建物全体がこわれてしまうのです。

（七） 最後に、私たちの主がここでどのように教えておられるかに、目を留めましょう。確かに、主はいつもそうでしたが、このときは特に、こう言われたとおりに語っておられます。「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」（ヨハネ七・四六）。昔の聖なる人々のようにではありません。彼らもまた「聖霊に感じ」て語ったのですが（第二ペテロ一・二一）、そのようにではないのです。ペテロやヤコブ、ヨハネやパウロのようにでもありません。彼らは確かに、主の教会の熟練した建築師でした（第一コリント三・一〇）。それでも、この点では、すなわち天の知恵の度合いでは、僕は主人に及びません（マタイ一〇・二四）。いいえ、ほかのときや、ほかの機会の主ご自身のようにでさえありません。ほかのときや場所で、主がご自分の宗教の全体の計画を一度に示そうとされたことは、見当たりません。キリスト教の全体の見通しを与えようとされたことも、あの聖性の性質を詳しく述べようとされたこともありません。それなしにはだれも主を見ることができない、あの聖性です（ヘブル一二・一四）。主は確かに、数え切れない機会に、その個々の部分を述べておられます。けれども、全体をまとめて見せようと意図して語られたのは、ここのほかにはありません。それどころか、聖書全体を見ても、この種のものはほかにありません。例外があるとすれば、神がシナイ山でモーセに与えられた、あの十の言葉、すなわち十誡でしょう（申命記四・一三）。それは、聖性を短く描いたものです。けれども、ここでさえ、両者の違いはなんと大きいことでしょう！「すでに栄光を受けたものも、この場合、はるかにまさった栄光のまえに、その栄光を失ったのです」（第二コリント三・一〇）。

（八） 何よりも、神の御子は、ここでなんと驚くべき愛をもって、御父のみこころを人に示しておられることでしょう！ 御子は、私たちを再び、「火が燃え、黒雲や暗やみやあらしにつつまれ」た山に連れて行かれるのではありません（ヘブル一二・一八）。主が「天に雷をとどろかせ」、「いと高き者がみ声を出されると、ひょうと燃える炭とが降ってき」たときがありました（詩篇一八・一三）。主は、そのときのように語られるのでもありません。今、主は、静かな細い声で（列王紀上一九・一二）、私たちに語りかけておられます。「こころの貧しい人たちは、さいわいです」（マタイ五・三）。すなわち、幸いなのです。幸いなのは、悲しんでいる人たち、柔和な人たち、義に飢えかわいている人たち、あわれみ深い人たち、心の清い人たちです（マタイ五・四～八）。終りにおいても、その途中においても幸いです。この世のいのちにおいても、永遠のいのちにおいても幸いです！ まるで、こう言われたかのようです。「さいわいを見ようとして、いのちを慕い、ながらえることを好む人はだれでしょうか（詩篇三四・一二）。見よ、わたしは、あなたがたの魂が慕い求めているものを示します！ あなたがたが長い間むなしく探してきた道を見なさい。それは楽しい道です（箴言三・一七）。静かで喜びに満ちた平安に至る道、地上の天と天上の天とに至る道です！」

（九） 同時に、主はなんと権威をもって教えておられることでしょう！「律法学者たちのようにではなく」と言われているのも（マタイ七・二九）、もっともです。主の語り方に、その語られる様子に目を留めなさい（とはいえ、それは言葉では言い表せません）！ 神の僕モーセのようにではありません。神の友アブラハムのようにでもありません（ヤコブ二・二三）。どの預言者のようにでも、どの人の子のようにでもありません。それは、人間を超えたものです。どん

な造られたものにもふさわしくないほどのものです。それは、万物の造り主であることを物語っています！　神が、神が現れておられます！　そうです、ホ・オーン（ὁ ὤν）、存在の中の存在、エホバ、自ら存在する方、至高者、万物の上にいます、永遠にほむべき神です（ローマ九・五）！

（一〇）　この神の説教は、最もすぐれた順序で語られていて、後の部分がみな前の部分を明らかにしています。この説教は、普通、三つの主な部分に分けられます。それは適切な分け方です。第一の部分は五章に、第二は六章に、第三は七章にあります。第一の部分では、すべてのまことの宗教の要約が、八つの項目にまとめて示されます。それらの項目は、五章の続く部分で説き明かされ、人の誤った解釈から守られています。第二の部分には、正しい意図のための規則があります。私たちは、すべての外の行いにおいて、この意図を保たなければなりません。そこに、この世の欲も、生活に必要なものについての思いわずらいさえも、まじえてはならないのです。第三の部分には、宗教の主な妨げについての警告があり、最後に全体の適用で結ばれています。

【一】　こころの貧しい人たちの幸い

（一）　私たちの主は、第一に、すべてのまことの宗教の要約を、八つの項目にまとめて示されます。そして、五章の終りまで、それらを説き明かし、人々の誤った解釈から守っておられます。

ある人々は、主がこれらの項目で、クリスチャンの歩みのいくつかの段階を示そうとされたのだ、と考えてきました。クリスチャンが約束の地への旅で、順に踏んでいく段階です。ほかの人々は、ここに挙げられた項目はみな、どのクリスチャンにもいつでも当てはまる、と考えてきました。けれども、その両方を認めてはいけないのでしょうか。両者の間に、どんな矛盾があるでしょうか。心の貧しさも、ここに挙げられたほかのどの気質も、まことのクリスチャンのうちに、いつでも見られます。程度の差はあっても、だれのうちにも見られるのです。これは疑いなく真実です。また、次のことも同じように真実です。まことのキリスト教は、いつも心の貧しさから始まり、ここに挙げられた順に進んでいきます。そして、ついに「神の人が」「完全にととのえられた者にな」るのです（第二テモテ三・一七）。私たちは、神のこれらの賜物のいちばん低いものから始めます。けれども、神から、もっと上へ進むように召されるときにも、それを手放すのではありません。すでに「達し得たところ」を（ピリピ三・一六）堅く保ちながら、なお前にあるものへと進んでいくのです（ピリピ三・一三）。キリスト・イエスにある神の最も高い祝福へと進むのです。

（二）　すべての土台は、心の貧しさです。ですから、私たちの主はここから始められます。主は言われます。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものです」（マタイ五・三）。

次のように考えても、無理はないでしょう。私たちの主は、周りにいた人々を見回されました。そして、そこには富んだ者は多くなく、むしろこの世の貧しい人たちがいるのに気づかれました（ヤコブ二・五）。そこで、それをきっかけに、この世のことから霊のことへと話を移されたのです。主は言われます。「こころの貧しい人たちは、さいわいです」（マタイ五・三）。「さいわい」とは、幸いということです。この節でも続く節でも、この語はそう訳すべきなのです。主は、外の境遇において貧しい人たちとは言っておられません。そのような人たちの中にも、王座の上の君主と同じほど、幸いから遠い人がいないとはかぎらないからです。主が言われるのは、「こころの貧しい人たち」です（マタイ五・三）。外の境遇がどうであれ、ある心の傾きを持っている人たちです。それは、この世でも来るべき世でも、本当の、実質のある幸いのすべてに至る第一歩となる心の傾きです。

（三）　ある人々は、ここでこころの貧しい人たちと言われているのは、貧しさを愛する人たちのことだ、と判断してきました。むさぼりから、金銭を愛することから解放されている人たち、富を望むよりもむしろ恐れる人たちのことだ、と言うのです。彼らがそう判断するに至ったのは、おそらく、その言葉そのものだけに考えを限ってしまったからでしょう。あるいは、パウロのあの重い言葉を考えたからでしょう。「金銭を愛することは、すべての悪の根です」（第一テモテ六・一〇）。そのため、多くの人が、富だけでなく、この世の財産をすべて、すっかり手放しました。ローマ教会で自発的な清貧の誓願が生じたのも、そこか

らのようです。この根本的な徳をこれほど際立った程度に持つことは、「天国」へ向かう大きな一歩に違いない、と考えられたのです（マタイ五・三）。

けれども、この人々は、次のことに気づいていなかったようです。第一に、パウロの言葉は、ある制限をつけて理解しなければなりません。そうでなければ、真実ではありません。金銭を愛することは、すべての悪の根、ただ一つの根ではないからです。悲しい経験が日々示しているとおり、世には悪の根がほかに数え切れないほどあります。パウロの意味は、それが非常に多くの悪の根だ、ということでしかありえません。おそらく、ほかのどんな悪徳よりも多くの悪の根なのです。第二に、「こころの貧しい」という表現をこの意味に取ると（マタイ五・三）、私たちの主の今の意図に少しも合いません。主の意図は、キリスト教の建物全体をその上に建てることのできる、全体の土台をすえることです。ある一つの悪徳を防ぐだけでは、その意図にはまったくかないません。ですから、たとえこれが主の意味の一部だと考えるとしても、それが全部であるはずはありません。第三に、これを主の意味の一部だと考えることさえできません。そう考えるなら、主に明らかな同語反復の罪を着せることになります。仮に、心の貧しさが、むさぼりや、金銭を愛することや、富を望むことからの解放にすぎないとします。そうなら、主があとで挙げておられることと重なってしまうからです。それは、心の清さの一部分にすぎなくなってしまいます（マタイ五・八）。

（四）　それでは、「こころの貧しい人たち」とは、だれのことでしょうか（マタイ五・三）。疑いもなく、へりくだった人たちです。自分自身を知っている人たち、罪を自覚している人たちです。神が、キリストを信じる信仰に先立つ、あの最初の悔い改めを与えてくださった人たちです。

このような人は、もはや、「自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もない」とは言えません（黙示録三・一七）。今は、自分が「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者」であることを知っているからです（黙示録三・一七）。その人は、自分が霊において本当に貧しいことを確信しています。霊の善いものが、何一つ自分のうちにとどまっていないのです。その人は言います。「わたしの内に」は、「善なるものが宿っていない」（ローマ七・一八）。宿っているのは、悪いもの、忌まわしいものばかりだ、と。その人は、罪という忌まわしいらい病を深く感じています。それは、母の胎から携えてきたもので、魂全体に広がり、魂のあらゆる力と機能をすっかり腐らせています。その人は、その悪い根から生じる悪い気質を、ますます多く見るようになります。霊の高ぶりと傲慢です。思うべき限度を越えて思いあがる方へと（ローマ一二・三）、いつも傾いていることです。虚栄心、人から来る評価や誉への渇き、憎しみやねたみ、嫉妬や復讐心、怒りや悪意や苦々しさです。神と人とに対する生れつきの敵意です。それは、数限りない形をとって現れます。世への愛、我意、愚かで有害な欲です。それらが、その人の魂の最も奥にこびりついているのです。その人は、自分が舌によってどれほど深く罪を犯してきたかを意識しています。汚れた言葉、慎みのない言葉、偽りの言葉、不親切な言葉によってではないとしても、話によって罪を犯してきました。「人の徳を高めるのに役立つ」のではない話（エペソ四・二九）、「聞いている者の益になる」のではない話によってです（エペソ四・二九）。ですから、そのような話は、神の目にはすべて悪い言葉であり（エペソ四・二九）、神の聖霊を悲しませるものでした（エペソ四・三〇）。その人の悪いわざも、今はいつも目の前にあります（詩篇五一・三）。数えようとしても、言い表せないほど多いのです。それは、雨のしずくや、海の砂や、永遠の日数を数えようとするようなものです。

（五）　その人の罪責も、今は目の前にあります。自分が受けて当然の刑罰を知っています。肉の思い（ローマ八・七）、すなわち自分の性質の全面的な、すみずみまでの腐敗のためだけでも、刑罰に値するのです。まして、すべての悪い欲と思い、すべての罪深い言葉と行いのためには、なおさらです！　その人は、それらのいちばん小さなものでさえ地獄の刑罰に値することを、一瞬も疑うことができません。地獄では、「うじがつきず、火も消えることがない」のです（マルコ九・四八）。何よりも、「神のひとり子の名を信じることをしない」罪責が（ヨハネ三・一八）、その人に重くのしかかっています。その人は言います。私は「こんなに尊い救をなおざりに」している（ヘブル二・三）。どうしてのがれられるだろうか！　「信じない者は、すでにさばかれています」（ヨハネ三・一八）。そして、「神の怒りがその上にとどまる」のです（ヨハネ三・三六）。

（六）　けれども、その人の魂は、神の正しい報復に引き渡されています。その魂を買いもどすために、どんな代価を払えるでしょうか（マタイ一六・二六）。「何をもって主のみ前に行」けばよいのでしょうか（ミカ六・六）。負っているものを、どうやって神に返せるでしょうか。たとえ、今この瞬間から、神のすべての命令に最も完全に従ったとしても、それは、ただ一つの罪の償いにもなりません。過去の不従順の、どの一つの行いの償いにもならないのです。その人は、今この瞬間から永遠に至るまで、自分にできるすべての奉仕を、もともと神に負っているからです。たとえそれを払えたとしても、以前にすべきだったことの償いには、少しもなりません。ですから、その人は、自分の過去の罪をあがなうことについて、まったく無力であることを知ります。神に何の償いをすることも、自分の魂のために何の身代金を払うことも、まったくできないのです。

けれども、仮に神が、ただ一つの条件で過去のすべてを赦してくださるとします。もう罪を犯さないこと、これから先は神のすべての命令に完全に、絶えず従うこと、という条件です。それでも、その人はよく知っています。それは自分に何の益にもなりません。自分には決して果たせない条件だからです。その人は、神の外面的な命令にさえ従えないことを知り、また感じています。心が生れながらの罪深さと腐敗のうちにあるかぎり、それらには従えないからです。悪い木が良い実をならせることはできないからです（マタイ七・一八）。けれども、その人は罪深い心を清めることができません。それは人にはできないことです（マタイ一九・二六）。ですから、神の戒めの道を歩み始めることさえ、どうすればよいのか、まったく途方に暮れています。その道を一歩進むことさえ、どうすればよいか分かりません。罪と悲しみと恐れとに取り囲まれ、のがれる道も見つからないので、その人は、ただ叫ぶほかはありません。「主よ、お助けください」（マタイ八・二五）、さもないと私は滅びます、と。

（七）　ですから、心の貧しさとは、私たちの前に置かれている競走を走りぬくときの（ヘブル一二・一）、第一歩です。そのかぎりでは、それは、内と外の罪、そして罪責と無力とを、正しく感じとることです。ある人々は、これを途方もなくも「謙遜の徳」と呼んできました。こうして、自分が滅びに値すると知っていることを誇るように、私たちに教えているのです！　けれども、私たちの主の表現は、まったく別の種類のものです。聞く人に伝えるのは、ただ欠乏そのもの、むき出しの罪、どうしようもない罪責と悲惨という観念だけです。

（八）　偉大な使徒は、罪人を神に導こうと努めるところで、これにちょうど合う語り方をしています。使徒は言います。「神の怒りは」、「人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示され」ます（ローマ一・一八）。使徒は、この告発をすぐに異邦人の世界に当てはめ、それによって、彼らが神の怒りの下にあることを証明します。次に、ユダヤ人も彼らにまさるところはなく（ローマ三・九）、したがって同じように罪に定められていることを示します。そして、これはすべて、彼らが「謙遜という気高い徳」を身につけるためではありません。「すべての口がふさがれ、全世界が神のさばきに服するため」なのです（ローマ三・一九）。

使徒はさらに、彼らが罪責を負っているだけでなく、無力でもあることを示します。次の言葉は、どれもはっきりとその趣旨を語っています。「律法を行うことによっては、すべての人間は」「義とせられません」（ローマ三・二〇）。「しかし今や」、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」が、「律法とは別に」「現されました」（ローマ三・二一～二二）。「わたしたちは、こう思います。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのです」（ローマ三・二八）。これらの言葉は、どれも同じ一点を目ざしています。「高ぶりを人から除き」（ヨブ三三・一七）、人をちりにまで低くすることです。しかも、自分の謙遜を徳として省みるようには教えません。人に、自分のまったくの罪深さと罪責と無力とについて、余すところのない、刺し通すような確信を起させるのです。この確信が、罪人を、すべてをはがされ、失われ、滅びかけた罪人を、その力強い助け手のもとに投げ出させます。義なるイエス・キリストのもとにです（第一ヨハネ二・一）。

（九）　ここで気づかずにはいられません。キリスト教は、異教の道徳が終るちょうどそのところから始まるのです。心の貧しさ、罪の自覚、自分を捨てること、自分の義を持たないこと（これがイエス・キリストの宗教の第一の点です）は、異教の宗教をすべて置き去りにします。このことは、この世の知者たちには、いつも隠されていました（マタイ一一・二五）。そのため、ローマの言葉全

体にも、謙遜を表す名前さえありません。アウグストゥスの時代に、あれほど磨かれたにもかかわらずです（よく知られているように、私たちがこの語を借りてきたもとの語は、ラテン語ではまったく別の意味を持っています）。いいえ、豊かなギリシャ語全体にも、偉大な使徒が作るまでは、そのような語は見当たりませんでした。

（一〇） ああ、彼らが言い表すことのできなかったものを、私たちが感じとることができますように！ 罪人よ、目をさましなさい！ 自分自身を知りなさい！ 知り、また感じなさい。あなたは「不義のなかに生れ」、「母は罪のうちに」あなたを「みごもりました」（詩篇五一・五）。そして、あなた自身も、善悪をわきまえられるようになってからずっと、罪に罪を積み重ねてきたのです！ 永遠の死に値する者として、神の力強い御手の下に沈みなさい（第一ペテロ五・六）。自分で自分を助けられるという思いを、すべて捨て、退け、忌みきらいなさい！ 主の血で洗われ、主の全能の御霊によって新たにされること（テトス三・五）を、あなたの望みのすべてとしなさい。主ご自身が、「十字架にかかって、わたしたちの罪を」すべて「ご自分の身に負われた」のです（第一ペテロ二・二四）！ そうすれば、あなたはあかしするようになります。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものです」（マタイ五・三）。

（一一） これが、あの天国、すなわち神の国です。それは、私たちのうちにあります（ルカ一七・二一）。それは、「義と、平和と、聖霊における喜びと」です（ローマ一四・一七）。では、「義」とは何でしょうか（ローマ一四・一七）。魂のうちにある神のいのちではないでしょうか。キリスト・イエスのうちにあった思い（ピリピ二・五）、心に刻まれた神のかたちではないでしょうか。そのかたちは、今や、造り主のかたちに従って新しくされているのです（コロサイ三・一〇）。それは、神がまず私たちを愛してくださったので（第一ヨハネ四・一九）神を愛し、神のゆえにすべての人を愛することではないでしょうか。

また、この「平和」（ローマ一四・一七）、すなわち神の平安とは（ピリピ四・七）、何でしょうか。それは、魂の静かな落ち着きではないでしょうか。イエスの血のうちにある、甘い安らぎではないでしょうか。それは、私たちが主にあって受けいれられていることに、何の疑いも残しません。天にいます私たちの父の（マタイ六・九）みこころにそむくことを恐れる、愛に満ちた子としての恐れのほかは、すべての恐れを締め出すのです。

この内なる御国には、「聖霊における喜び」も含まれています（ローマ一四・一七）。聖霊は、イエスによる「あがない」を（ローマ三・二四）、私たちの心に証印してくださいます。過去の罪の赦しのために私たちのものとされた、キリストの義を証印してくださるのです（ローマ三・二五）。聖霊は今、私たちに「神の国をつぐことの保証」を与えてくださいます（エペソ一・一四）。それは、かの日に、公平な審判者である主が授けてくださる冠を（第二テモテ四・八）、受けつぐことの保証です。これが「天国」と呼ばれるのも（マタイ五・三）、もっともです。それは、魂のうちにすでに開かれた天だからです。神の右にとこしえに流れる、あの楽しみの川が（詩篇一六・一一、三六・八）、初めてわき出たものだからです。

（一二） 「天国は彼らのものです」（マタイ五・三）。あなたがだれであれ、神があなたを「こころの貧しい」者とならせ（マタイ五・三）、自分が失われた者だと感じさせてくださったとします。それなら、あなたにはそれを受ける権利があります。偽りのない神の（テトス一・二）、恵み深い約束によるのです。それは、小羊の血によって、あなたのために買い取られています。それは、すぐ近くにあります。あなたは天の入口に立っているのです！ もう一歩で、あなたは義と平和と喜びの御国に入ります！ あなたは罪ばかりの者でしょうか。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ一・二九）。まったく聖くない者でしょうか。「父のみもと」にいるあなたの「助け主、すなわち、義なるイエス・キリスト」を見なさい（第一ヨハネ二・一）。自分のいちばん小さな罪さえ、あがなうことができないのでしょうか。「彼は」あなたのすべての「罪のための、あがないの供え物です」（第一ヨハネ二・二）。今、主イエス・キリストを信じなさい（使徒一六・三一）。そうすれば、あなたの罪はすべてぬぐい去られます（使徒三・一九）！ あなたは、魂もからだもまったく汚れているのでしょうか。ここに、「罪と汚れとを清める一つの泉」があります（ゼカリヤ一三・一）！ 「すぐ立って」、「あなたの罪を洗い落しなさい」（使徒二二・一六）！ もう、不信仰のゆえに神の約束を疑ってはなりません（ローマ四・二〇）！ 栄光を神に帰し

なさい（ローマ四・二〇）！　思い切って信じなさい！　今、心の底から叫びなさい。

そうです、私は降参します、ついに降参します。語りかけるあなたの血に、耳を傾けます。私のすべての罪とともに、私自身をあがなってくださる私の神に、ゆだねます。

（一三）　そのとき、あなたは主に学んで、「心のへりくだった者」となります（マタイ一一・二九）。これこそ、まことの、本物の、クリスチャンの謙遜です。それは、キリスト・イエスにあって私たちと和解してくださった神の愛を、感じとることから流れ出ます。この意味での心の貧しさは、罪責と神の怒りとを感じることが終るところから始まります。それは、すべての善い思いや言葉や行いについて、私たちがまったく神に頼っていることを、絶えず感じることです。神が「常に水をそそ」いでくださらなければ（イザヤ二七・三）、私たちはどんな善もまったく行えないことを、絶えず感じることです。また、人からほめられることを忌みきらうことです。すべての賛美は、ただ神にだけささげられるべきだと知っているからです。これには、愛に満ちた恥じらいと、神のみ前での優しいへりくだりとが伴います。神が赦してくださったと知っている罪についてさえ、そうなのです。また、まだ私たちの心に残っている罪についてもそうです。その罪のために私たちが罪に定められることはないと知っていても、そうなのです。それでも、生れつきの罪についての自覚は、日ごとにますます深くなります。私たちは、恵みにおいて成長すればするほど（第二ペテロ三・一八）、自分の心がはなはだしく悪に染まっていることを（エレミヤ一七・九）、ますます見るようになります。私たちは、主イエス・キリストを通して、神を知る知識と神への愛とにおいて進みます。進めば進むほど、ますます多くを見分けるようになります。神から遠く離れていること（エペソ四・一八）、肉の思いにある敵意（ローマ八・七）を見分けるのです。そして、真の義と聖とにおいて（エペソ四・二四）、まったく新しくされる必要があることを見分けるのです。救を得させる神の力を知らない人々には（ローマ一・一六）、これは大きな奥義に見えるかもしれません。

【二】　悲しんでいる人たちの幸い

（一）　確かに、内なる天国を知り始めたばかりの人には、このことはほとんど思いも及びません。その人は、「安らかな時に」こう言います。「わたしは決して動かされることはありません。主よ、あなたは」、「わたしをゆるがない山のように堅くされました」（詩篇三〇・六～七）。罪は、その人の足の下で完全に踏み砕かれているので、まだ自分のうちに罪が残っているとは、ほとんど信じられません。誘惑でさえ黙らされ、もう語りかけてきません。近づくこともできず、遠く離れて立っています。その人は、喜びと愛との戦車に乗って、高く運ばれています。「わしのように翼をはって」、舞い上がるのです（イザヤ四〇・三一）。けれども、私たちの主は、この勝ち誇った状態が長くは続かないことが多いのを、よくご存じでした。そこで、すぐに言い添えられます。「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるでしょう」（マタイ五・四）。

（二）　この約束が、何かこの世のことのためにだけ悲しんでいる人たちのものだ、と考えることはできません。この世の何かの苦難や失望のためだけに、悲しみや憂いのうちにいる人たちのものではないのです。たとえば、評判や友人を失ったり、財産が減ったりしたためにです。何かこの世のわざわいを恐れて、自分を苦しめている人たちにも、この約束を受ける資格はありません。思いわずらいのためにやつれていく人たちも同じです。地上のものへの欲、すなわち「心を悩ます」欲のためにやつれていく人たちも同じです（箴言一三・一二）。このような人たちが、「主から何かをいただける」と考えてはなりません（ヤコブ一・七）。主は、彼らの思いのうちにまったくおられないのです。だからこそ、彼らは、このように「影のように、さまよ」い、「むなしい事のために騒ぎまわる」のです（詩篇三九・六）。主は言われます。「あなたがたは、これをわたしの手から受けて、苦しみのうちに伏し倒れます」（イザヤ五〇・一一）。

（三）　私たちの主がここで語っておられる悲しむ人たちは、まったく別の理由で悲しんでいる人たちです。神を慕って悲しんでいる人たちです。彼らは、かつて神にあって、「言葉につくせない」「喜びにあふれて」いました（第一ペテロ一・八）。神が、「良きみ言葉」、すなわち赦しのみ言葉と、「きたるべき世の力と

を味わ」わせてくださったときです（ヘブル六・五）。けれども、今、神は「み顔を隠され」、彼らは「あわてふため」いています（詩篇一〇四・二九）。暗い雲にさえぎられて、神を見ることができないのです。見えるのは、誘惑と罪です。それらは、去ってしまって二度と戻らないと、彼らが甘く思い込んでいたものです。それらが再び起き上がり、激しく追ってきて、四方から彼らを取り囲んでいるのです。今、彼らの魂が彼らのうちに思いみだれ（詩篇四二・五）、悩みと苦しみが彼らに臨んでも（詩篇一一九・一四三）、不思議ではありません。彼らの大敵も、この機会を逃さずに利用します。そして、こう問いかけます。「おまえの神は、今どこにいるのか（詩篇四二・三）。おまえが口にしていたあの幸い、天国の始まりは、今どこにあるのか（ガラテヤ四・一五）。ほんとうに神が（創世記三・一）、『あなたの罪はゆるされた』と言われたのか（マタイ九・二）。神がそう言われたはずはない。それはただの夢、ただの惑わし、おまえ自身の想像の産物にすぎなかったのだ。罪がゆるされているなら、なぜおまえはこんなありさまなのか。ゆるされた罪人が、こんなに聖くないことがありうるのか」。そのとき、すぐに神に叫び求めないで、自分たちより賢い者と議論するとします。そうすれば、彼らは本当に憂いに沈み、心に悲しみを抱き、言い表せない苦しみのうちに置かれるでしょう。いや、神が再び魂を照し、過去のあわれみについての疑いをすべて取り去ってくださるときでさえ、そうなることがあります。信仰の弱い者は（ローマ一四・一）、これから先のことのために誘惑され、悩まされることがあるのです。特に、内の罪が再び生き返り、その人を倒そうとしてひどく押すときです（詩篇一一八・一三）。そのとき、その人は再びこう叫ぶかもしれません。

私には恐れという罪があります。私が
最後の糸をつむぎ終えるとき、岸辺で滅びるのではないかと！
信仰の破船に会い（第一テモテ一・一九）、のちの状態が初めよりももっと悪くなるのではないかと（マタイ一二・四五）。
私のいのちのパンが、すべて尽きてしまい、
変えられないまま、地獄に沈むのではないかと！

（四）　確かに、この苦しみは、「当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われ」ます。「しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な」実を「結ばせる」のです（ヘブル一二・一一）。ですから、このように悲しむ人たちは、さいわいです。ただし、彼らが「主を待ち望」み（詩篇二七・一四）、世のみじめな慰め手たちによって、道からそらされないならです。罪と愚かさとむなしさの慰めを、すべて断固として退けるならです。世のくだらない気晴らしや娯楽を、すべて退けるならです。「使えば尽きてしまう」楽しみ（コロサイ二・二二）、魂を麻痺させ、鈍らせるだけの楽しみを、すべて退けるならです。そのような楽しみは、魂が自分をも神をも感じないようにさせるのです。「せつに主を知ることを求め」（ホセア六・三）、ほかのすべての慰めをゆるぎなく拒む人たちは、さいわいです。彼らは、神の御霊の慰めによって慰められます。神の愛が新たに現されることによって慰められます。神が愛する御子にあって彼らを受けいれてくださったというあかしによって、慰められるのです。そのあかしは、もう二度と彼らから取り去られることはありません。この「信仰の確信」は（ヘブル一〇・二二）、すべての疑いも、苦しめるすべての恐れも、のみ尽くします。神が今、彼らに、永遠の宝の（ヘブル一〇・三四）確かな望みと、恵みによる「力強い励まし」とを（ヘブル六・一八）、与えてくださるからです。「いったん、光を受けて」、「聖霊にあずかる者とな」った人が（ヘブル六・四）、「そののち堕落」することがありうるかどうかを（ヘブル六・六）、彼らは論じません。今自分たちの上にとどまっている力によって、こう言えば十分なのです。「だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのでしょうか。わたしは確信します。死も生も、現在のものも将来のものも、高いものも深いものも、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできません」（ローマ八・三五〜三九）。

（五）　神がおられないことを悲しみ、御顔の喜びを取り戻す。この過程の全体は、私たちの主が受難の前夜に使徒たちに語られた言葉に、あらかじめ描かれているようです。「しばらくすればわたしを見なくなる、またしばらくすればわたしに会えるであろうと、わたしが言ったことで、互に論じ合っているのですか。よくよくあなたがたに言っておきます。あなたがたは泣き悲しみます」（ヨ

ハネ一六・一九〜二〇）。すなわち、わたしを見ないときにです。しかし、「この世は喜ぶでしょう」（ヨハネ一六・二〇）。あなたがたの望みが今や尽きたかのように、あなたがたに勝ち誇るのです。「あなたがたは憂えている」のです（ヨハネ一六・二〇）。疑いのために、恐れのために、誘惑のために、激しい慕わしさのためにです。しかし、「その憂いは喜びに変るでしょう」（ヨハネ一六・二〇）。あなたがたの魂の愛する方が（雅歌三・一）、帰ってこられることによってです。「女が子を産む場合には、その時がきたというので、不安を感じます。しかし、子を産んでしまえば、もはやその苦しみをおぼえてはいません。ひとりの人がこの世に生れた、という喜びがあるためです」（ヨハネ一六・二一）。「このように、あなたがたにも今は不安があります」（ヨハネ一六・二二）。悲しんで、慰められることもできません。「しかし、わたしは再びあなたがたと会うでしょう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるのです。「その喜びをあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）。静かな、内なる喜びに満たされるのです。「その喜びをあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）。

（六）　けれども、この悲しみは、助け主が帰ってこられることによって終ります。聖なる喜びにのみこまれるのです。それでも、神の子たちのうちには、別の悲しみがとどまっています。それは、さいわいな悲しみです。彼らは、なお人類の罪と悲惨とを悲しみます。「泣く者と共に泣」くのです（ローマ一二・一五）。自分のために泣かない人々のために、自分の魂に対して罪を犯している人々のために泣きます。ある程度まで罪から救われている人々の、弱さと不忠実とを悲しみます。「だれかが弱っているのに」、彼らも「弱らないでおれ」るでしょうか。「だれかが罪を犯しているのに」、彼らの「心が燃えないでおれ」るでしょうか（第二コリント一一・二九）。天と地の主の威光が絶えず汚されていることを、彼らは嘆いています。彼らは、いつもこのことを畏れをもって感じています。それが、彼らの霊に深い真剣さをもたらします。心の目が開かれてから（エペソ一・一八）、この真剣さは少なからず増しました。永遠という広大な大洋を、絶えず見るようになったからです。その大洋には、底も岸もありません。それは、すでに幾百万の幾百万倍もの人々をのみ込み、残っている人々をのみ込もうと、口を開けて待っています。彼らは、こちらに、天にある神の永遠の家を見ます（第二コリント五・一）。あちらに、おおい隠すもののない陰府と滅びの穴を見ます（ヨブ二六・六）。そこから、一瞬一瞬の重さを感じるのです。一瞬は、現れたかと思うと、永遠に去ってしまうのです！

（七）　けれども、神のこの知恵はみな、世には愚かなものです。悲しみや心の貧しさのことはすべて、世の人々には、愚かで退屈なことでしかありません。いや、それほど好意的な判断を下すなら、まだよいほうです。ただのふさぎ込みや憂鬱だと決めつけないなら、まだよいのです。まったくの狂気、錯乱だとさえ決めつけかねないのですから。神を知らない人々がこのような判断を下すのは、少しも不思議ではありません。二人の人が一緒に歩いていて、一方が突然立ち止まったとします。そして、ひどく恐れ驚いた様子で、こう叫んだとします。「なんという断崖の上に、私たちは立っているのだ！　見ろ、もう少しで粉々に砕けるところだ！　もう一歩で、あの巨大な淵に落ちてしまう！　止まれ！　世界をもらっても、私はこれ以上進まない！」ところが、もう一方の人は、少なくとも自分では同じように目が利くつもりでした。それなのに、前を見ても、そんなものは何も見えなかったとします。その人は、連れのことを何と思うでしょうか。気が狂った、頭がおかしくなった、と思うだけでしょう。「博学」の罪は犯していないとしても（使徒二六・二四）、宗教に凝りすぎて、きっと気が狂ったのだ、と思うだけでしょう！

（八）　けれども、神の子たち、すなわち「シオンの中の悲しむ者」たちは（イザヤ六一・三）、こうしたことのどれにも動かされてはなりません。目を開かれたあなたがたは、なお暗い中をさまよっている人々に（詩篇八二・五）、心を騒がせてはなりません。あなたがたは、影のようにさまよっているのではありません（詩篇三九・六）。神と永遠とは、実在するものです。天と地獄とは、まさに、あなたがたの前に開かれています。そして、あなたがたは大きな淵の縁に立っているのです（ルカ一六・二六）。その淵は、すでに言葉で言い表せないほど多くのものをのみ込んできました。あらゆる国民、部族、民族、国語の人々です（黙示録七・九）。そして、うわついた、みじめな人の子らを、彼らが見ていようといまいと、なおのみ込もうと口を開けています。ああ、大いに呼ばわりなさい。声を惜しんではなりません（イザヤ五八・一）！　時と永遠とを両方とも

手に握っておられる方に向かって、声をあげなさい。自分のためにも、兄弟たちのためにも、声をあげなさい。つむじ風のように臨む滅びから（箴言一・二七）、のがれるにふさわしい者とされるためです（ルカ二一・三六）！　あらゆる波と嵐を通り抜けて、望む港へと無事に導かれるためです（詩篇一〇七・三〇）！　自分のために泣きなさい。神があなたがたの目から涙をぬぐいとってくださるまで、泣きなさい（黙示録七・一七）。そして、そのときでさえ、地に臨む悲惨のために泣きなさい。万物の主が悲惨と罪とに終りを告げ、すべての顔から涙をぬぐい（イザヤ二五・八）、「水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちる」（イザヤ一一・九）ときまで、泣きなさい。

説教二十二　山上の説教（二）

「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐでしょう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるでしょう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるでしょう」（マタイ五・五～七）

【一】　柔和な人たちの幸い

（一）「冬は過ぎ」（雅歌二・一一）、「鳥のさえずる時がき」て、「山ばとの声が」地に「聞える」ときがきます（雅歌二・一二）。悲しむ者を慰める方が今や帰ってこられ、「いつまでも」彼らと「共に」おられるときです（ヨハネ一四・一六）。その方の臨在の輝きによって、雲が散ります。疑いと不確かさの暗い雲が散り、恐れの嵐が去り、悲しみの波が静まります。そして、彼らの霊は、再び救主なる神を喜びます（ルカ一・四七）。まさにそのとき、このみことばが際立って成就します。そのとき、その方に慰められた人々は、こうあかしすることができます。「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐでしょう」（マタイ五・五）。この「さいわい」とは、幸いということです。

（二）では、「柔和な人たち」とは（マタイ五・五）、だれのことでしょうか。何も知らないために、何事も悲しまない人たちではありません。善と悪とを見分けないために、起る悪に心を乱されない人たちでもありません。愚かな無感覚によって、人生の打撃から守られている人たちでもありません。生れつきであれ、修練によってであれ、木や石の徳を身につけ、何も感じないために何にも憤らない人たちでもありません。獣のように感じない哲学者たちは、この事柄にまったくかかわりがありません。無感動は、人間らしさから遠いのと同じほど、柔和からも遠いのです。ですから、次のことは、なかなか理解できません。もっと純粋だった時代のクリスチャンが、とりわけ教父のだれかが、どうしてこの二つを混同したのでしょうか。どうして、異教の最も忌まわしい誤りの一つを、まことのキリスト教の一部分と取り違えたのでしょうか。

（三）また、クリスチャンの柔和は、無知や無感覚を意味しないのと同じように、神への熱心がないことも意味しません。いいえ、柔和は、行き過ぎであれ不足であれ、あらゆる極端から離れています。柔和は、情を滅ぼすのではなく、釣り合わせます。自然の神は、情が恵みによって根こそぎにされることを、決して意図されませんでした。ただ、正しい規律のもとに置かれ、保たれることを意図されたのです。柔和は、心を正しく釣り合わせます。怒りについても、悲しみについても、恐れについても、はかりを平らに保ちます。人生のどんな境遇でも中庸を守り、右にも左にもそれないのです。

（四）ですから、柔和は、本来は私たち自身にかかわるもののようです。けれども、神にも隣り人にも関係づけることができます。心のこの正しい落ち着きが神にかかわるとき、それは普通、神へのゆだねと呼ばれます。私たちについての神のみこころなら、たとえ生れながらの性質には快くなくても、何であれ静かに受けいれることです。そして、絶えずこう言うのです。「それは主です。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」（サムエル記上三・一八）。これをもっと厳密に、私たち自身とのかかわりで考えるとき、私たちはそれを忍耐、あるいは満足と呼びます。ほかの人々に向けて働くとき、それは、善い人に対しては温和となり、悪い人に対しては親切となります。

（五）本当に柔和な人たちは、何が悪であるかを、はっきり見分けることができます。そして、それを忍ぶこともできます。この種のことはすべて感じとりますが、それでも柔和が手綱を握っています。彼らは、「万軍の神、主のために非常に熱心」です（列王紀上一九・一〇）。けれども、その熱心は、いつも知識に導かれています。そして、すべての思いと言葉と行いにおいて、神への愛と人への愛とによって和らげられています。神は、賢い目的のために、彼らの性質に

さまざまな情念を植えつけられました。彼らは、そのどれをも消し去ろうとは願いません。けれども、そのすべてを治めています。すべてを従わせ、ただその目的に仕えるためにだけ用いるのです。こうして、もっと荒々しく不快な情念でさえ、最も気高い目的に役立ちます。憎しみや怒りや恐れでさえ、罪に向けられ、信仰と愛とによって整えられるなら、魂の城壁ととりでのようになります。そのため、悪い者は近づいて魂を害することができません。

（六）　明らかに、この神聖な気質は、私たちのうちにとどまるだけでなく、日ごとに増し加わるべきものです。この気質を働かせ、それによって増し加える機会は、私たちが地上にいるかぎり、決してなくなりません。私たちに「必要なのは、忍耐」です。「神の御旨を行」い、また忍んで、「約束のものを受けるため」です（ヘブル一〇・三六）。私たちには、神へのゆだねが必要です。どんな境遇でも、こう言えるためです。「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさってください」（マタイ二六・三九）。また、私たちには、「だれに対しても親切」であることが必要です（第二テモテ二・二四）。特に、恩を知らない者や悪人に対してです（ルカ六・三五）。そうでなければ、善をもって悪に勝つどころか（ローマ一二・二一）、悪に負けてしまいます。

（七）　また、柔和が抑えるのは、外の行いだけではありません。昔、律法学者やパリサイ人はそう教えました。神に教えられていない、みじめな教師たちも、どの時代にも必ずそう教えるでしょう。私たちの主は、次の言葉で、この誤りを防ぎ、柔和の本当の広がりを示しておられます。「昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところです」（マタイ五・二一）。「しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して」理由もなく「怒る者は、だれでも裁判を受けねばなりません。兄弟にむかって」ラカ「と言う者は、議会に引きわたされるでしょう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるでしょう」（マタイ五・二二）。

（八）　私たちの主は、ここで、心の中にとどまる怒りさえ、殺人の項目に数えておられます。外に不親切な行いとなって現れず、激した言葉一つにさえならない怒りもです。

「兄弟に対して怒る者は」とあります（マタイ五・二二）。その兄弟とは、生きているどんな人のことでもあります。私たちはみな兄弟だからです。心に何かの不親切を、愛に反する何かの気質を感じる者もそうです。理由もなく、すなわち十分な理由もなく怒る者、あるいはその理由が求める以上に怒る者もそうです。そのような者は、「だれでも裁判を受けねばなりません」（マタイ五・二二）。原語では、エノコス・エスタイ（ἔνοχος ἔσται）です。その瞬間に、神の正しいさばきを受けるべき者となるのです。

けれども、エイケー（εἰκῇ）、すなわち「理由もなく」という語を省いている写本の読みのほうを、選びたくならないでしょうか。この語は、まったく余計ではないでしょうか。人に対する怒りが、愛に反する気質だとします。そうなら、どうしてそれに理由が、十分な理由がありうるでしょうか。神の目にその怒りを正しいとするような理由が、どうしてありうるでしょうか。

罪に対する怒りなら、私たちも認めます。この意味でなら、私たちは怒ることがあっても、罪を犯さずにいられます（エペソ四・二六）。この意味でなら、私たちの主ご自身も、一度怒られたことが記されています。「イエスは怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくななのを嘆」かれたのです（マルコ三・五）。主は、罪人のために嘆き、罪に対して怒られました。そして、これは疑いなく、神の前に正しいことです。

（九）　「兄弟にむかって」ラカ「と言う者は」とあります（マタイ五・二二）。怒りに身をまかせて、何かさげすみの言葉を口にする者のことです。注解者たちが指摘しているとおり、ラカはシリア語で、本来は、からっぽの、むなしい、愚かな、という意味です。ですから、気にくわない相手に対して使える言葉としては、これ以上ないほど穏やかな言い方です。それでも、私たちの主がはっきり言われるとおり、これを使う者は、「議会に引きわたされるでしょう」（マタイ五・二二）。むしろ、議会のさばきを受けるべき者となる、と言うべきです。その人は、全地をさばく方から（創世記一八・二五）、もっと重い刑を受けるべき者となるのです。

「また、ばか者と言う者は」とあります（マタイ五・二二）。悪魔に機会を与えて（エペソ四・二七）、ののしりの言葉を吐き出す者のことです。わざと人を

はずかしめ、侮る言葉を口にする者です。そのような者は、「地獄の火の刑を受けるべき者となります」（マタイ五・二二）。その瞬間に、最も重く罪に定められるべき者となるのです。注意すべきことがあります。私たちの主は、これらの者をみな、死刑を受けるべき者として描いておられるのです。第一の者は、絞首刑です。これは普通、下級の法廷で罪に定められた者に科されました。第二の者は、石打ちの刑です。これはしばしば、エルサレムの大議会で罪に定められた者に科されました。第三の者は、火あぶりの刑です。これは、最も重い罪を犯した者だけに、「ベンヒンノムの谷」で科されました（エレミヤ七・三一）。ゲー・エンノーン（Γη Εννων）です。私たちが「地獄」と訳している語は（マタイ五・二二）、明らかにここから取られています。

（一〇）　人は生れつき、ある務めをきちんと果たせば、神はほかの務めの欠けを大目に見てくださるだろう、と思い込みます。そこで、私たちの主は次に、このむなしい、しかしよくある思い込みを断ち切るように、気を配られます。主は、どんな罪人も神と取り引きすることはできない、と示されます。神は、ある務めを別の務めの代りに受けいれることも、従順の一部を全体の代りに受け取ることもなさらないのです。主は、私たちに警告されます。神への務めを果たしても、それで隣り人への務めを免れることはできない、と言われるのです。また、こうも警告されます。私たちに愛が欠けていれば、いわゆる敬虔のわざも、私たちを神に推薦するどころではない。かえって、その愛の欠如が、それらのわざをみな主に忌みきらわれるものにしてしまう、と言われるのです。

「だから、祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら」（マタイ五・二三）。あなたが兄弟に不親切にし、ラカとか「ばか者」とか言ったために（マタイ五・二二）、兄弟がうらみをいだいているのです。そのとき、供え物があなたの怒りのあがないになると思ってはなりません。悔い改めていない罪の罪責で良心が汚れているかぎり、供え物が少しでも神に受けいれられると思ってはなりません。「その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し」なさい（少なくとも、和解に向けて、自分にできることをすべてしなさい）。「それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい」（マタイ五・二四）。

（一一）　これほどあなたの魂に深くかかわることを、一刻も遅らせてはなりません。「あなたを訴える者と」、「早く仲直りをしなさい」（マタイ五・二五）。今、その場でです。「一緒に道を行く時には、その途中で」です（マタイ五・二五）。できるなら、相手が見えなくなる前にです。「そうしないと、その訴える者はあなたを裁判官にわた」すでしょう（マタイ五・二五）。すなわち、その人は、万民の審判者なる神に（ヘブル一二・二三）、訴えるのです。「裁判官は下役にわた」すでしょう（マタイ五・二五）。すなわち、神の怒りを執行するサタンに、わたすのです。「そして、あなたは獄に入れられるでしょう」（マタイ五・二五）。すなわち、地獄に入れられ、大いなる日のさばきのために、そこに閉じ込めておかれるのです（ユダ六）。「よくあなたに言っておきます。最後の一コドラントを支払ってしまうまでは、決してそこから出てくることはできません」（マタイ五・二六）。けれども、あなたには、それは決してできません。支払うものを何も持っていないからです。ですから、いったんその獄に入れられたなら、あなたの「苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼ」るほかありません（黙示録一四・一一）。

（一二）　その間にも、「柔和な人たちは」「地を受けつぐ」のです（マタイ五・五）。この世の知恵は、なんと愚かなのでしょう！　この世の賢い人たちは、柔和な人たちに何度も警告していました。こういう扱いに憤らないなら、こんなふうにおとなしく虐げられるままにしているなら、地上で生きてはいけない、と言うのです。生活に普通に必要なものも手に入れられず、持っているものさえ守れないだろう。平和も、安らかに持ち続けることも、何かを楽しむことも、望めないだろう、と言うのです。まったくそのとおりでしょう。もし世に神がおられないなら、あるいは、神が人の子らを気にかけておられないなら、です。けれども、神は、さばきのために、また地上のすべての柔和な人を助けるために、立ち上がられます（詩篇七六・九）。そのとき、神は、この異教の知恵をすべて、なんとあざ笑われることでしょう。そして、「人の怒り」を変えて、ご自分を「ほめたたえる」ものとされるのです（詩篇七六・一〇）。神は、いのちと信心とにかかわるすべてのものを（第二ペテロ一・三）彼らに備えるように、特別に心を配られます。人の暴力や詐欺や悪意にもかかわらず、ご自分の備えた

ものを彼らのために確保されます。そして、確保したものを、豊かに楽しませてくださいます（第一テモテ六・一七）。それが少なくても多くても、彼らには甘いのです。彼らは、耐え忍ぶことによって、自分の魂を自分のものとしています（ルカ二一・一九）。それと同じように、神が与えてくださったものを、何でも本当に自分のものとしているのです。彼らはいつも、自分の持っているもので満足し（ヘブル一三・五）、いつも喜んでいます。それが神のみこころにかなうので、彼らも喜ぶのです。ですから、彼らの心も願いも喜びも天にありながら、本当に「地を受けつぐ」と言うことができるのです（マタイ五・五）。

（一三）けれども、この言葉には、さらに深い意味もあるようです。柔和な人たちは、「義の住む新しい」「地」で（第二ペテロ三・一三）、もっと際立った分け前にあずかる、ということです。その嗣業の大まかな描写を、ヨハネが黙示録の二十章で与えています（詳しいことは、のちに知ることになるでしょう）。「またわたしが見ていると、ひとりの御使が、天から降りてきました。彼は、龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおきました。また見ていると、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいました。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配しました」（黙示録二〇・一～四）。「それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえりませんでした。これが第一の復活です。この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者です。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もありません。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配します」（黙示録二〇・五～六）。

【二】 義に飢えかわいている人たちの幸い

（一）私たちの主は、ここまで、主としてまことの宗教の妨げを取り除くことに、力を注いでこられました。そのような妨げとは、まず高ぶりです。これは、すべての宗教の第一の大きな妨げで、心の貧しさによって取り去られます。また、軽薄と無思慮です。これらは、聖なる悲しみによって取り除かれるまで、どんな宗教も魂に根づかせません。また、怒りや短気や不満です。これらはみな、クリスチャンの柔和によっていやされます。これらの妨げは、魂の悪い病です。それは、魂のうちに絶えず偽りの渇望を起し、魂を病んだ食欲で満たしていました。いったんこれらの妨げが取り除かれると、天から生れた霊に本来そなわっている食欲が戻ってきます。その霊は、義に飢えかわきます。そして、「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるでしょう」（マタイ五・六）。

（二）前に述べたように、義とは神のかたちであり、キリスト・イエスのうちにあった思いです（ピリピ二・五）。それは、聖なる天的な気質をすべて一つにしたものです。それは、私たちの父であり、あがない主である神への愛と、神のゆえにすべての人を愛する愛とから生れ、またそこに行き着きます。

（三）この義「に飢えかわいている人たちは、さいわいです」（マタイ五・六）。この表現を十分に理解するために、次のことに目を留めなければなりません。第一に、飢えと渇きは、からだのあらゆる欲求の中で、最も強いものです。同じように、魂のこの飢え、すなわち神のかたちを求めるこの渇きも、いったん心に目ざめると、最も強いものになります。霊のあらゆる欲求の中で、最も強いのです。そうです、それは、ほかのすべての欲求を、ただ一つの大きな願いの中にのみ込んでしまいます。私たちを造られた方のかたちに従って新しくされたい、という願いです（コロサイ三・一〇）。第二に、次のことに目を留めなければなりません。私たちが飢えかわき始めると、そのときから、その欲求はやみません。食べて飲むか、死ぬかするまで、ますます激しく、しつこく求め続けます。それと同じように、キリストのうちにあった思いのすべてに（ピリピ二・五）飢えかわき始めると、そのときから、この霊の欲求はやみません。ますますしつこく、その食物を求めて叫びます。霊のいのちが少しでも残っているかぎり、満たされる前にやむことは、決してありえません。第三に、飢えと渇きは、食べ物と飲み物のほかの何によっても満たされないことに、目を留めることができます。飢えている人に、ほかの全世界を与えたとしましょう。あらゆる優雅な衣服、あらゆる豪華な飾り、地上のあらゆる宝、そうです、幾千の金銀を（詩篇一一九・七二）与えたとします。どれほど栄誉を与えてもかまいません。それで

も、その人は見向きもしません。そのとき、そうしたものはみな、その人には何の値打ちもないのです。その人は、やはりこう言うでしょう。「私が欲しいのは、こういうものではない。食べ物をください。さもないと死んでしまう」。本当に義に飢えかわいている魂は、どれもまったく同じです。その人は、義のほかの何にも慰めを見いだせません。ほかの何によっても満たされないのです。ほかに何を差し出しても、軽んじられます。富であれ、栄誉であれ、快楽であれ、その人はやはりこう言います。「私が欲しいのは、こういうものではない！　愛をください。さもないと死んでしまう！」

（四）　このような魂、すなわち神を慕い、いける神を慕う魂を（詩篇四二・二）、世が宗教と見なすもので満足させることはできません。世が幸いと見なすもので満足させられないのと同じです。世の宗教には、三つのことが含まれます。

一、害を加えないこと、外の罪を避けることです。少なくとも、強盗、盗み、口ぎたない誓い言葉、泥酔のような、人目に立つ罪を避けることです。

二、善を行うこと、貧しい人を助けること、いわゆる慈善を行うことです。

三、恵みの手段を用いることです。少なくとも、教会に行き、主の晩餐にあずかることです。この三つのしるしの見られる人を、世は信心深い人と呼びます。けれども、これで、神に飢えている人が満足するでしょうか。いいえ。それは、その人の魂の食物ではありません。その人が求めているのは、もっと気高い種類の宗教、これよりも高く深い宗教です。このような貧しく浅い、形だけのものを、糧にすることはできません。「東風をもってその腹を満たす」ことができないのと同じです（ヨブ一五・二）。確かに、その人は、あらゆる種類の悪から遠ざかるように気をつけています（第一テサロニケ五・二二）。良きわざに熱心です（テトス二・一四）。神の定めをすべて守っています。けれども、そのすべてが、その人の慕い求めているものではありません。これは、その人が飽くことなく飢え求めている宗教の、外側にすぎないのです。キリスト・イエスにおいて神を知ることです。「キリストと共に神のうちに隠されている」いのちです（コロサイ三・三）。「主につ」き、「主と一つの霊にな」ることです（第一コリント六・一七）。「父ならびに御子」との「交わり」を持つことです（第一ヨハネ一・三）。「神が光の中にいますように」、「光の中を歩く」ことです（第一ヨハネ一・七）。「彼がきよくあられるように」きよくされることです（第一ヨハネ三・三）。これこそ、その人が渇き求めている宗教、渇き求めている義です。そして、このように神のうちに憩うまでは、憩うことができません。

（五）　このように「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるでしょう」（マタイ五・六）。彼らは、慕い求めているもので満たされます。真の義と聖とで満たされるのです（エペソ四・二四）。神は、ご自分のいつくしみの祝福で、ご自分の選ばれた者の繁栄で（詩篇一〇六・五）、彼らを満ち足らせてくださいます。天のパンで、ご自分の愛のマナで、彼らを養ってくださいます。ご自分の楽しみの川の水を、彼らに飲ませてくださいます（詩篇三六・八）。その水を飲む者は、いつまでも、かわくことがありません（ヨハネ四・一四）。ただ、いのちの水をますます多く求めて、かわくだけです。この渇きは、永遠に続きます。

苦しい渇きも、切ない願いも、
喜びに満ちたあなたの臨在が、取り去ります。
けれども、満たされた私の魂は、なおも求めます。
永遠のすべてにわたる愛を。

（六）　ですから、あなたがだれであれ、神があなたに、「義に飢えかわ」くことを与えてくださったなら（マタイ五・六）、神に叫び求めなさい。あの計り知れない賜物を決して失わないように、この神聖な食欲が決してやまないように、叫び求めなさい。多くの人があなたをしかって黙らせようとしても（マルコ一〇・四八）、気にかけてはなりません。そうです、ますます激しく叫びなさい。「イエスさま」、私を「あわれんでください」（ルカ一七・一三）。「あなたが聖なる方であるように聖なる者となるためでなければ（第一ペテロ一・一六）、私を生かしておかないでください」。もう、「かてにもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労」してはなりません（イザヤ五五・二）。幸いを地から掘り出せると、世のものの中に見つけられると、望めるでしょうか。ああ、世のあらゆる快楽を、足で踏みにじりなさい。世の栄誉をさげすみなさい。世の富を、ふん土やかすのように思いなさい（ピリピ三・八）。そうです、

日の下にあるすべてのものを、そう思いなさい。「キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに」です（ピリピ三・八）。あなたの魂が、初めにかたどって造られた神のかたちに（創世記一・二七）、すっかり新しくされるためです。世が宗教と呼ぶものによって、あのさいわいな飢え渇きを消してしまわないように、気をつけなさい。それは形式の、うわべの宗教です。心を以前のままに、地上的で肉的なままにしておく宗教です。敬虔の力のほかには、何によっても満足してはなりません。霊であり、またいのちである宗教（ヨハネ六・六三）のほかには、満足してはなりません。それは、あなたが神におり、神もあなたにいますことです（第一ヨハネ四・一六）。永遠に住む者となることです。そそがれた血によって（ヘブル一二・二四）、「幕の内」に入ることです（ヘブル六・一九）。「キリスト・イエスにあって」、「天上で座につ」くことです（エペソ二・六）。

【三】 あわれみ深い人たちの幸い

（一） 彼らは、神のいのちに満たされれば満たされるほど、ますます心優しく、ほかの人々を気づかうようになります。なおこの世の中で神もなく（エペソ二・一二）、なお罪過と罪とによって死んでいる人々を（エペソ二・一）、気づかうのです。このように人を気づかうことは、その報いを失いません。「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるでしょう」（マタイ五・七）。

私たちの主がここで使われた語は、もっと直接には、思いやりのある人たち、心の優しい人たちを意味します。神に飢えていない人々をさげすむどころか、その人々のために心から悲しむ人たちです。

兄弟愛のこの際立った部分が、ここでは、よくある言葉のあやによって、全体を表しています。ですから、この語の十分な意味での「あわれみ深い人たち」とは（マタイ五・七）、隣り人を「自分を愛するように」愛する人たちのことです（マタイ二二・三九）。

（二） この愛は、きわめて重要です。愛がなければ、「たとい」私たちが「人々の言葉や御使たちの言葉を語っても」、「預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても」、そうです、「自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても」、「いっさいは無益」なのです（第一コリント一三・一～三）。そのため、神の知恵は、使徒パウロを通して、この愛について十分で詳しい説明を与えてくださいました。それをよく考えれば、あわれみを受けるあわれみ深い人たちとはだれなのかが、最もはっきり分かるでしょう。

（三） 「愛は寛容であり」ます（第一コリント一三・四）。英語の聖書はこの語を「チャリティ」と訳していますが、それは愛のことです（全体を通して「愛」と訳してほしかったものです。そのほうがはるかに平明で、あいまいさの少ない語だからです）。キリストが私たちを愛してくださったように（ヨハネ一三・三四）隣り人を愛する愛は、寛容であり、すべての人に対して忍耐強いのです。愛は、神の子たちのあらゆるもろさ、無知、誤り、弱さを忍びます。そのあらゆるかたくなさと、信仰の小ささを忍びます。世の子らのあらゆる悪意と邪悪も忍びます。しかも、それをすべて、しばらくの間、短い期間だけでなく、最後まで忍ぶのです。敵が飢えるなら、なお食わせ、かわくなら、なお飲ませます（ローマ一二・二〇）。こうして、絶えず敵の「頭に燃えさかる炭火を積む」のです（ローマ一二・二〇）。それは、とかす愛の炭火です。

（四） 「善をもって悪に勝」つという（ローマ一二・二一）この望ましい目的に向かう一歩一歩において、「愛は情深い」のです（第一コリント一三・四）。原語はクレーステウエタイ（χρηστεύεται）で、たやすくは訳せない語です。愛は、柔らかく、穏やかで、慈しみ深いのです。陰気さからも、霊のあらゆるとげとげしさや、ひねくれた心からも、最も遠く離れています。そして、忍ぶ人に、最も好ましい優しさと、最も熱く細やかな情愛とを、同時に吹き込みます。

（五） したがって、愛は「ねたむことをしません」（第一コリント一三・四）。ねたむことはありえません。愛は、その有害な気質の正反対だからです。この人は、すべての人に細やかな情愛をいだいています。神の造られたすべての魂に、この世の祝福と霊の祝福のすべてを、この世と来るべき世のあらゆる良いものを、心から願っています。そのような人が、神がどの人の子に良い賜物を与えられても、それに心を痛めるはずはありません。自分も同じものを受けている

なら、ほかの人がその共通の恵みにあずかるのを、悲しまずに喜びます。受けていないなら、少なくとも兄弟は受けていて、その点で自分よりも幸いであることを、神に感謝します。そして、愛が大きければ大きいほど、すべての人の受ける祝福を、ますます喜びます。どんな被造物に対しても、どんな種類、どんな程度のねたみからも、ますます遠く離れるのです。

（六） 愛はウー・ペルペレウエタイ（οὐ περπερεύεται）です。これは、「高ぶらない」という意味ではありません（第一コリント一三・四）。それでは、すぐ次の言葉と同じになってしまいます。むしろ、この語の本来の意味でもあるとおり、さばくことに無謀でなく、性急でない、という意味です。愛は、だれをも性急に罪に定めません。ちょっと見ただけで、あるいは急いで見ただけで、厳しい判決を下すことはしません。まず、すべての証拠を量ります。特に、訴えられている人に有利な証拠を量るのです。本当に隣り人を愛する人は、世の大多数の人のようではありません。大多数の人は、きわめて微妙な事柄においてさえ、「少し見て、大いに推測し、そうして結論に飛びつく」のです。いいえ、その人は、用心深く、慎重に進みます。一歩一歩に気をつけます。そして、古代の異教徒のあの規則に、喜んで従います（ああ、それに比べて、今のクリスチャンはどう見えることでしょう！）。「私は、ある人がほかの人について言う悪口を、軽々しく信じない。それどころか、人が自分自身について言う悪いことさえ、たやすくは信じない。いつもその人に考え直す機会を与え、多くの場合は、人に相談する機会も与えよう」。

（七） 続いて、愛は「誇らない」とあります（第一コリント一三・四）。愛は、だれをも、「思うべき限度を越えて思いあが」るように傾けず（ローマ一二・三）、そうすることを許しません。むしろ、慎み深く思うようにさせます（ローマ一二・三）。そうです、愛は、魂をちりにまで低くします。高ぶりを生む、思いあがった考えを、すべて滅ぼします。そして、私たちに、無に等しい者であることを喜ばせます。小さく卑しい者、すべての人の中で最も低い者、すべての人に仕える者であることを、喜ばせるのです。「兄弟の愛をもって互にいつくしみ」合う人たちは（ローマ一二・一〇）、「進んで互に尊敬し合」わずにはいられません（ローマ一二・一〇）。同じ愛の心を持ち、心を合わせている人たちは（ピリピ二・二）、へりくだった心をもって「互に人を自分よりすぐれた者とします（ピリピ二・三）。

（八） 愛は「不作法をしません」（第一コリント一三・五）。粗野ではなく、だれに対しても、わざと気を悪くさせることはしません。愛は、「すべてに対して、義務を果し」、「恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬」います（ローマ一三・七）。全世界に、礼儀と丁重さと人情とを尽くします。それぞれの身分に応じて、「すべての人をうやま」うのです（第一ペテロ二・一七）。近ごろのある著述家は、良いしつけを、いや、その最高の段階である礼節を、こう定義しています。「人を喜ばせたいという絶えざる願いが、すべてのふるまいに現れること」。もしそうなら、クリスチャンほど、すなわちすべての人を愛する人ほど、しつけの良い人はいません。その人は、「徳を高めるために、その益を図って」すべての人を「喜ばす」ことを（ローマ一五・二）、願わずにはいられないからです。そして、この願いは隠すことができません。人とのあらゆる交わりに、必ず現れます。その人の「愛には偽りが」ないからです（ローマ一二・九）。その愛は、その人のすべての行いとふるまいに現れます。そうです、偽りなしに、その人を「すべての人に対しては、すべての人のように」ならせずにはおきません。「なんとかして幾人かを救うため」です（第一コリント九・二二）。

（九） そして、すべての人のようになるとき、愛は「自分の利益を求めません」（第一コリント一三・五）。すべての人を喜ばせようと努めるとき、人を愛する人は、この世での自分の利益に、まったく目を向けません。人の金や銀や衣服をほしがりません（使徒二〇・三三）。人々の魂の救いのほかは、何も望みません。そうです、ある意味では、この世の利益だけでなく、自分の霊の利益も求めない、と言うことができます。人々の魂を死から救い出そうと（ヤコブ五・二〇）全力を尽くしている間、その人は、いわば自分を忘れているからです。神の栄光を求めるあの熱心にのみ込まれているかぎり、自分のことは考えません。いや、ときには、愛があふれるあまり、自分自身を、魂もからだも、ほとんど捨ててしまうように見えることさえあります。モーセと共に、こう叫ぶのです。「ああ、この民は大いなる罪を犯し」ました。「今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば」と言いかけます。そして、「しかし、もしかなわなければ、どう

ぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」と叫ぶのです（出エジプト三二・三一～三二）。あるいは、パウロと共に、こう叫ぶのです。「わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいといません」（ローマ九・三）。

（一〇） このような愛が「いらだたない」のも（第一コリント一三・五）、不思議ではありません。原語はウー・パロクシュネタイ（οὐ παροξύνεται）です。注意してほしいことがあります。英語の聖書は、ここを「たやすくいらだたない」と訳しています。けれども、この「たやすく」という語は、奇妙にも訳に差し込まれたもので、原文にはありません。パウロの言葉は無条件なのです。愛は「いらだたない」のです（第一コリント一三・五）。だれに対しても、いらだって不親切になることはありません。確かに、いらだたせるきっかけは、しばしば起ります。さまざまな種類の、外からの挑発です。けれども、愛は挑発に屈しません。すべてに打ち勝ちます。あらゆる試練の中で、愛はイエスを仰ぎ見て（ヘブル一二・二）、主の愛によって勝ち得て余りがあります（ローマ八・三七）。

英語の聖書の訳者たちがこの語を差し込んだのは、いわば使徒を弁護するためだったのかもしれません。そうしなければ、使徒は、自分がこれほど美しく描いている当の愛に欠けているように見えかねない、と彼らは考えたのでしょう。彼らがそう考えたのは、使徒行伝のある言い回しのためのようです。その言い回しも、同じように、きわめて不正確に訳されています。パウロとバルナバが、マルコというヨハネのことで（使徒一五・三七）意見が分かれたとき、訳はこうなっています。「そして、ふたりの間の争いがあまりに激しかったので、ふたりは別れ別れになりました」（使徒一五・三九）。これを読むと、読者は自然に、二人とも同じように激しかったのだと考えてしまいます。パウロも、バルナバと同じほどいらだったのだと考えてしまうのです。けれども、問題の点については、疑いなくパウロが正しかったのです。以前に一行から離れたヨハネを（使徒一五・三八）、再び連れて行くのは、まったくふさわしくなかったからです。バルナバは、聖霊によって聖別されて当てられた仕事を（使徒一三・二）、捨ててしまうほどの怒りを示しました。けれども、原文は、そのような意味を少しも含んでいません。パウロがいらだったとは、まったく言っていないのです。原文は、ただ、カイ・エゲネト・パロクシュスモス（καὶ ἐγένετο παροξυσμός）、すなわち「そして、激しいいらだちが起りました」と言っているだけです（使徒一五・三九）。それは、怒りの発作です。その結果、バルナバはパウロを離れ、ヨハネを連れて、自分の道を行きました。それから、「パウロはシラスを選び、兄弟たちから」神の「恵みにゆだねられて、出発し」ました（使徒一五・四〇）。バルナバについては、そうは言われていません。「そしてパウロは」、予定していたとおり、「シリヤ、キリキヤの地方をとおって、諸教会を力づけ」ました（使徒一五・四一）。話をもとに戻しましょう。

（一一） 愛は、そうでなければ起るはずの無数のいらだちを、未然に防ぎます。愛は、悪を思わないからです（第一コリント一三・五）。確かに、あわれみ深い人も、悪い事柄を数多く知らずにはいられません。それを自分の目で見、自分の耳で聞かずにはいられません。愛は、その人の目をつぶすわけではないからです。ですから、そのようなことが行われているのを、見ないわけにはいきません。また、愛は、感覚を取り去らないのと同じように、理解力も取り去りません。ですから、それが悪いことだと、知らないわけにはいきません。たとえば、人が隣り人をなぐるのを見たり、神を汚す言葉を聞いたりするとします。そのとき、その人は、行われたことや語られた言葉を、疑うことはできません。それが悪であることも、疑えません。それでも、ウー・ロギゼタイ・ト・カコン（οὐ λογίζεται τὸ κακόν）、すなわち、愛は悪を思わないのです。ロギゼタイ、すなわち「思う」という語は、見ることや聞くことを指すのではありません。理解力の最初の、思わず起る働きを指すのでもありません。考えなくてもよいことを、わざわざ考えることを指すのです。悪が現れていないところに、悪を推し量ることです。見ていない事柄について、あれこれ推論することです。見も聞きもしなかったことを、想像することです。まことの愛は、これを跡形もなく滅ぼします。知りもしないことを想像するのを、すべて根こそぎにします。あらゆる邪推、あらゆる悪い疑い、悪をすぐに信じようとする心を、すべて締め出します。愛は、率直で、開けっぴろげで、人を疑いません。悪をたくらむことができないように、悪を恐れることもありません。

（一二）　愛は「不義を喜ば」ないのです（第一コリント一三・六）。不義を喜ぶことは、キリストの名を負う人々の間でさえ、よくあることです。彼らは、敵が倒れるとき（箴言二四・一七）、苦しみに陥っても、誤りに陥っても、罪に陥っても、平気でそれを喜ぶのです。実際、何かの党派に熱心に肩入れしている人々が、これを避けるのは、なんと難しいことでしょう！　反対の党派の人々に何かの欠点を見つけたとき、それを喜ばずにいるのは、なんと難しいことでしょう！　本当の欠点であれ、思い込みの欠点であれ、主義の欠点であれ、実践の欠点であれ、そうなのです。どんな主張であれ、それを熱心に擁護する人で、これを免れている人がいるでしょうか。そうです、まったく免れているほど冷静な人がいるでしょうか。敵が足を踏みはずし、それが自分の主張に有利になると思うとき、喜ばない人がいるでしょうか。愛の人だけです。愛の人だけが、敵の罪や愚かさのために泣きます。それを聞くことにも、言いふらすことにも、喜びを感じません。むしろ、それがいつまでも忘れられることを願うのです。

（一三）　けれども、その人は「真理を喜」びます（第一コリント一三・六）。それがどこに見いだされても、喜ぶのです。「信心にかなう真理」を喜びます（テトス一・一）。その真理は、ふさわしい実を結びます。心の聖性と、ふるまいの聖性です。意見について、あるいは実践のいくつかの点について、自分に反対する人々がいます。その人々も、それでもなお神を愛する人であり、ほかの点では責められるところのない人だと分かると（コロサイ一・二二）、その人は喜びます。その人々の良いうわさを聞くのを喜び、真実と正義にかなうかぎり、その人々の良いことを語るのを喜びます。実際、人類のどこに広がっていようと、善そのものが、その人の誇りであり喜びなのです。世界の市民として、世界のすべての住民の幸いに、自分もあずかろうとします。自分も人間なので、どんな人の幸福にも無関心ではいられません。神に栄光を帰し、人々の間に平和と善意とを広めるものなら、何でも喜びます。

（一四）　この愛は「すべてをおおいます」（第一コリント一三・七）。疑いもなく、パンタ・ステゲイ（πάντα στέγει）は、こう訳すべきです。そうでなければ、パンタ・ヒュポメネイ（πάντα ὑπομένει）、すなわち「すべてを耐える」と（第一コリント一三・七）、まったく同じになってしまうからです。あわれみ深い人は、不義を喜ばないので、不義を進んで口にすることもしません。どんな悪を見ても、聞いても、知っても、それを隠します。「ほかの人の罪に加わ」ることにならないかぎり（第一テモテ五・二二）、隠すのです。どこにいても、だれと一緒にいても、良くないと思うことを見たなら、それを口外しません。当の本人にだけは言います。そうすれば、兄弟を得ることができるかもしれないからです（マタイ一八・一五）。ほかの人の欠点や失敗を、話の種にするどころではありません。その場にいない人については、良いことを言えないかぎり、まったく話さないのです。告げ口をする者、陰口をたたく者、ひそひそと中傷する者、悪口を言う者は、その人にとっては、人殺しとまったく同じです。その人にとって、このように隣り人の評判を殺すことは、隣り人ののどをかき切るのと同じほど、ありえないことです。このように矢や燃え木や死をまき散らしておいて、「私はただ戯れただけではないか」と言う人がいます（箴言二六・一八～一九）。そうすることは、その人には、隣り人の家に火をつけて楽しむのと同じほど、思いもよらないことです。

　その人には、ただ一つだけ例外があります。ときには、ある悪をおおわないことが、神の栄光のため、あるいは（同じことですが）隣り人の益のためだ、と確信することがあります。その場合には、罪のない人の益のために、やむをえず罪のある人を明らかにします。けれども、その場合でさえ、次のようにします。

一、愛が、まさる愛が迫るまでは、まったく語りません。

二、善を行うとか、神の栄光を広めるとかいう、ばくぜんとした混乱した考えから語ることはできません。自分の追い求める何か特定の目的、何かはっきりした善を、明確に見ていなければなりません。

三、それでも、この手段こそがその目的に必要だと十分に確信しないかぎり、語ることはできません。ほかのどんな方法によっても、その目的はかなえられない。少なくとも、それほど効果的にはかなえられない。そう確信しなければならないのです。

四、そのうえで、この上ない悲しみと気の進まなさとをもって語ります。それを、最後の、最悪の薬として用いるのです。それは、絶望的な場合の、捨て身の治療法です。毒を追い出すためにしか決して用いてはならない、一種の毒です。

五、したがって、できるかぎり控えめに用います。しかも、恐れおののきながら、そうするのです（ピリピ二・一二）。語りすぎることによって、まったく語らない場合よりも、愛のおきてを破ってしまわないかと恐れるのです。

（一五）愛は「すべてを信じ」ます（第一コリント一三・七）。いつでも、最も良いほうに考えようとします。どんなことでも、最も好意的に解釈しようとします。だれの人柄にであれ、有利になりそうなことなら、いつでも信じようとします。どんな人についても、その人に罪がないこと、その人が誠実であることを、たやすく確信します（愛は、それを心から願っているのです）。少なくとも、その人がかつて道を踏み外したことがあるなら、その悔い改めが真実であることを、たやすく確信します。間違っていることは、何でも喜んで大目に見ます。罪を犯した人を、できるかぎり罪に定めないようにします。神の真理を裏切らずにできるかぎり、人間の弱さを酌量します。

（一六）そして、もう信じることができないときには、愛は「すべてを望み」ます（第一コリント一三・七）。だれかについて、何か悪いことが伝えられているでしょうか。愛は、その話が本当ではないこと、伝えられたことは実際には行われなかったことを望みます。それが行われたことは確かでしょうか。「けれども、伝えられているような事情のもとで行われたのではないかもしれない。だから、その事実を認めるとしても、言われているほど悪くはなかったと望む余地がある」。その行いが、見たところ否定しようもなく悪いものだったでしょうか。愛は、その意図はそうではなかったことを望みます。意図も悪かったことが明らかでしょうか。「それでも、それは、心に根づいた気質から出たのではないかもしれない。一時の激情から、あるいは何かの激しい誘惑から出たのではないだろうか。その誘惑が、その人にわれを忘れさせたのではないだろうか」。そして、行いも意図も気質も、どれも同じように悪いことが疑えないときでさえ、愛はなお望みます。神がついにその御腕をあらわし（イザヤ五二・一〇）、ご自分のために勝利を得られることを望みます（詩篇九八・一）。そして、この「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にある」ようになることを望むのです（ルカ一五・七）。

（一七）最後に、愛は「すべてを耐え」ます（第一コリント一三・七）。これで、本当にあわれみ深い人の姿が完成します。その人は、いくつかのこと、多くのことだけを耐えるのではありません。大部分のことでもなく、まったくすべてのことを耐えるのです。人の不正や悪意や残酷さが加えうるものなら、何でも忍ぶことができます。何ものも、耐えられないとは言いません。どんなことについても、「これは我慢できない」とは決して言いません。いいえ、その人は、自分を強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができます（ピリピ四・一三）。それだけでなく、何事でも忍ぶことができるのです。そして、忍ぶどんなことも、その人の愛を滅ぼさず、少しも損ないません。その愛は、何ものにも屈しません。それは、大いなる淵のただ中でさえ燃える炎です。その人の「愛は大水も消すことができない、洪水もおぼれさせることができません」（雅歌八・七）。その愛は、すべてに打ち勝ちます。時においても、永遠においても、「いつまでも絶えることがありません」（第一コリント一三・八）。

天の定めに従って、
知識はすたれ、預言はやみます。
けれども、いつまでも続く愛は、さらに広く治め、
時に縛られず、朽ちることもなく、
幸いな勝利のうちに、とこしえに生きて、
限りない善を広め、限りない賛美を受けます。

こうして、「あわれみ深い人たちは」「あわれみを受ける」のです（マタイ五・七）。彼らのすべての道に神の祝福があることによって、あわれみを受けます。彼らが兄弟たちにいだく愛を、神が今、千倍にして彼ら自身のふところに報い返してくださることによって、あわれみを受けます。それだけではありません。「世の初めから」彼らの「ために用意されている御国」があります（マタイ二五・三四）。そこで、「永遠の重い栄光を、あふれるばかりに」受けることによっても、あわれみを受けるのです（第二コリント四・一七）。

（一八）しばらくの間、あなたがたはこう言うかもしれません。「わざわいなるかな、わたしは」やむをえず「メセクにやどり、ケダルの天幕のなかに住んでいます」（詩篇一二〇・五）。あなたがたは心を注ぎ出して、地上から本当の、ま

ことの愛が失われたことを嘆くかもしれません。まことに、愛は失われてしまったのです。あなたがたは、こう言っても当然でしょう（ただし、昔の意味においてではありません）。「見よ、このクリスチャンたちは、なんと互に愛し合っていることか」。このクリスチャンの王国を見なさい。互にはらわたを引き裂き、火と剣とで互に荒らし合っています！　このクリスチャンの軍隊を見なさい。互に幾千、幾万もの人々を、生きたまま地獄に送り込んでいます。このクリスチャンの国民を見なさい。内輪の争いで燃え上がり、党派は党派と、派閥は派閥と争っています！　このクリスチャンの町々を見なさい。欺きと詐欺、しえたげと不正、そうです、強盗と殺人が、その通りを離れることがありません（詩篇五五・一一）。このクリスチャンの家庭を見なさい。ねたみ、嫉妬、怒り、家庭内のいさかいによって、数限りなく、果てしなく引き裂かれています。そうです、何よりも恐ろしく、何よりも嘆かわしいのは、このクリスチャンの教会です！　これらの教会は、平和の君（イザヤ九・六）であるキリストの名を負いながら、互に絶え間なく戦っています！「ガテにこの事を告げてはいけない」（サムエル記下一・二〇）。けれども、ああ、ユダヤ人からも、トルコ人からも、異教徒からも、どうしてこれを隠せるでしょうか。罪人を生きたまま焼いて改宗させています！「聖徒の血」に「酔いしれて」います（黙示録一七・六）。このほまれは、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」（黙示録一七・五）だけのものでしょうか。いいえ、決してそうではありません。宗教改革を経た教会（そう呼ばれている教会）も、すっかりその足跡を踏むことを覚えてしまいました。プロテスタントの教会も、権力を手にすると、血を流すまで迫害することを知っています。そのうえ、彼らもまた、なんと互をのろい合っていることでしょう！　互を最も深い地獄に落とそうとしています！　彼らの間には、どこにでも、なんという憤り、なんという争い、なんという悪意、なんという苦々しさがあることでしょう！　宗教の本質では一致していて、ただ意見や宗教の付随的なことで違っているだけのところでさえ、そうなのです。ただ「平和に役立つことや、互の徳を高めること」だけを（ローマ一四・一九）、追い求める人がいるでしょうか。ああ、神よ！　いつまでですか。あなたの約束はすたれるのでしょうか（詩篇七七・八）。小さい群れよ、それを恐れてはなりません（ルカ一二・三二）！　望み得ないのに、なおも望みつつ信じなさい（ローマ四・一八）！　地のおもてを再び新たにすることは（詩篇一〇四・三〇）、あなたがたの父のみこころなのです（ルカ一二・三二）。確かに、これらのことはみな終りを告げ、世に住む者は正義を学びます（イザヤ二六・九）。「国は国にむかって、つるぎをあげず、彼らはもはや戦いのことを学びません」（イザヤ二・四）。「主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち」ます（イザヤ二・二）。そして、「この世の国は」、私たちの神の「国とな」ります（黙示録一一・一五）。そのとき、「彼らは」主の「聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることが」ありません（イザヤ一一・九）。かえって、彼らは自分たちの「城壁を『救』ととなえ、その門を『誉』ととなえ」ます（イザヤ六〇・一八）。彼らはみな、しみも傷もなく（エペソ五・二七）、キリストが私たちを愛してくださったように、互に愛し合います（ヨハネ一三・三四）。刈り入れがまだであるなら、あなたはその初穂の一部となりなさい。自分を愛するように、あなたの隣り人を愛しなさい（マタイ二二・三九）。神である主が、すべての魂に対するそのような愛で、あなたの心を満たしてくださいますように。その魂のためになら、自分のいのちを捨てる覚悟ができるほどの愛です！　あなたの魂が、絶えず愛にあふれますように。不親切で聖くない気質をすべてのみ込み、主があなたを愛の国に召し上げてくださるまで、あふれますように。そこで、主と共に世々かぎりなく支配するためです！

説教二十三　山上の説教（三）

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るでしょう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるでしょう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものです。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいです。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きいのです。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのです」（マタイ五・八～一二）

【一】　心の清い人たちの幸い

（一）　隣り人への愛については、なんとすばらしいことが語られていることでしょう！　それは「律法を完成するもの」です（ローマ一三・一〇）。戒めが「目標としている」ものです（第一テモテ一・五）。この愛がなければ、私たちの持っているものも、行うことも、忍ぶことも、すべて神の目には何の値打ちもありません。ただし、それは、神への愛から生れる隣り人への愛のことです。そうでなければ、その愛そのものも、何の値打ちもありません。ですから、私たちは、自分の隣り人への愛がどんな土台の上に立っているかを、よく調べなければなりません。それは本当に、神への愛の上に建てられているでしょうか。神が「まず」私たちを「愛してくださったから」、私たちは神を愛しているでしょうか（第一ヨハネ四・一九）。私たちは、心が清いでしょうか。これこそ、決して揺るがされることのない土台だからです。「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るでしょう」（マタイ五・八）。

（二）　「心の清い人たち」とは（マタイ五・八）、神が、「彼がきよくあられるように」、その心をきよめてくださった人たちのことです（第一ヨハネ三・三）。彼らは、イエスの血を信じる信仰によって、あらゆる聖くない情からきよめられた人たちです。彼らは、「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ」、愛をもって「神をおそれて全く清く」なります（第二コリント七・一）。彼らは、神の恵みの力により、最も深い心の貧しさによって、高ぶりからきよめられています。柔和と優しさとによって、怒りから、またあらゆる不親切な情念や荒々しい情念から、きよめられています。今や魂全体をとらえている、あの義への飢え渇きによって、ほかの願いからきよめられています。神を喜ばせ、神を楽しみ、神をますます知り、ますます愛すること以外の、あらゆる願いからです。ですから、彼らは今、心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる彼らの神を愛しています（マルコ一二・三〇）。

（三）　けれども、どの時代の偽教師たちも、この心の清さを、なんとわずかしか顧みなかったことでしょう。彼らは人々に、神が名指しで禁じられた外の汚れを避けることだけを教えてきました。けれども、心には切り込みませんでした。そして、内なる腐敗を防がなかったことによって、実際にはそれを容認したのです。

この顕著な例を、私たちの主は、次の言葉で示しておられます。「『姦淫するな』と」昔の人々に「言われていたことは、あなたがたの聞いているところです」（マタイ五・二七）。そして、あの盲人を手引きする盲人たちは（マタイ一五・一四）、これを説明するとき、外の行いを避けることだけを人々に強く求めました。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのです」（マタイ五・二八）。神は、真実を心のうちに求められるからです（詩篇五一・六）。神は心を探り、思いを試みられます（エレミヤ一七・一〇）。あなたが心に不義をいだいているなら、主はお聞きにならないのです（詩篇六六・一八）。

（四）　また、汚れのきっかけとなるものを手放さずにいることについて、神はどんな言い訳もお認めになりません。ですから、「もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地

獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益です」（マタイ五・二九）。あなたの右の目ほど大切な人々が、あなたにこのように神に罪を犯させるきっかけとなるとします。魂に聖くない欲望をかき立てる手段となるとします。そうなら、ためらわずに、力ずくでその人々から離れなさい。「もしあなたの右の手が罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に落ち込まない方が、あなたにとって益です」（マタイ五・三〇）。あなたの右の手ほど必要に思える人が、罪のきっかけ、汚れた欲望のきっかけとなるとします。たとえそれが心の外に出ず、言葉にも行いにも決して現れないとしてもです。そうなら、自分を強いて、すっかり、最終的に別れなさい。一撃で切り離しなさい。その人々を神にゆだねなさい。快楽を失うことであれ、財産を失うことであれ、友を失うことであれ、どんな損失も、自分の魂を失うよりはましです。

このような完全で最終的な別れの前に、二つの段階だけは踏んでもよいでしょう。第一に、断食と祈りによって、汚れた霊を追い出せないかどうか、試みなさい。また、悪のきっかけとなると分かった行いや言葉や目つきを、どれも注意深く避けなさい。それによって追い出せないかどうかも、試みなさい。第二に、この方法で解放されないなら、その別れの時期と仕方について、あなたの魂を見守っている人に相談しなさい。少なくとも、神の道に経験のある人に相談しなさい。けれども、血肉に相談してはなりません（ガラテヤ一・一六）。そうしないと、あなたは「迷わす力」にゆだねられて、「偽りを信じる」ようになるかもしれません（第二テサロニケ二・一一）。

（五）　また、結婚そのものも、聖なる尊いものではありますが、欲望を野放しにする口実に使ってはなりません。確かに、「『妻を出す者は離縁状を渡せ』と言われてい」ます（マタイ五・三一）。そして、それで万事よしとされていました。夫が、妻を好まない、あるいはほかの女のほうが好きだ、ということのほかに、何の理由も挙げなくてもそうだったのです。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、不品行以外の理由で自分の妻を出す者は」（不品行とは姦淫のことです。ポルネイア（πορνεία）という語は、結婚していてもいなくても、不貞一般を意味します）、その女が再婚するなら、その女に「姦淫を行わせるのです。また出された女をめとる者も、姦淫を行うのです」（マタイ五・三二）。

この言葉では、あらゆる重婚がはっきり禁じられています。私たちの主はここで、夫が生きている女が再婚するのは姦淫である、と明言しておられるからです。同じ理屈で、男も、妻が生きているかぎり、再婚するのは姦淫です。そうです、たとえ二人が離婚していてもそうです。ただし、その離婚が姦淫のためだった場合は別です。その場合にだけ、再婚を禁じる聖句はありません。

（六）　これが、神の求められる心の清さです。神は、その愛する御子を信じる人々のうちに、この清さを造り出されます。そして、このように「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るでしょう」（マタイ五・八）。神は彼らに、「ご自身を」「あらわ」されます（ヨハネ一四・二一～二二）。それは、「世にはあらわそうとされない」ような仕方であるだけではありません（ヨハネ一四・二二）。ご自分の子供たちにさえ、いつもはあらわされないような仕方なのです。神は、御霊を最もはっきりと分け与え、「父ならびに御子」との最も親しい「交わり」を与えて（第一ヨハネ一・三）、彼らを祝福されます。ご自分の臨在を絶えず彼らの前に進ませ、御顔の光を彼らの上に照されます（詩篇四・六）。彼らの心は、絶えずこう祈ります。「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」（出エジプト三三・一八）。そして、神に願い求めたことは、かなえられるのです（第一ヨハネ五・一五）。彼らは今、信仰によって神を見ます（肉の幕が、いわば透き通るようにされているのです）。神のわざの中で最も低いこれらのものの中にさえ、神を見るのです。彼らを取り巻くすべてのもの、神が創造し造られたすべてのものの中に、神を見るのです。上は高い所に、下は深い所に、神を見ます。神がすべてのものを、すべてのもののうちに満たしておられるのを見ます（エペソ一・二三）。心の清い人たちは、すべてのものが神に満ちているのを見ます。天の大空に神を見ます。照りわたって動く月に（ヨブ三一・二六）、神を見ます。勇士のように、その道を喜び走る日に（詩篇一九・五）、神を見ます。神が「雲をおのれのいくさ車とし、風の翼に乗りある」くのを見ます（詩篇一〇四・三）。神が「地のために雨を備え」（詩篇一四七・八）、地の「もえ出るのを祝福し」（詩篇六五・一〇）、「家畜のために草をはえさせ、また人の

ために」青草を与えられるのを見ます（詩篇一〇四・一四）。万物の造り主が、万物を賢く治め、「その力ある言葉をもって万物を保っておられる」のを見ます（ヘブル一・三）。「主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう」（詩篇八・一）。

（七）心の清い人たちは、自分自身に、自分の魂やからだにかかわる神のすべての摂理の中に、もっと特別に神を見ます。神の御手が、いつも彼らの上にあって、彼らの益をはかっているのを見ます。神は、すべてのものを、重さと量りとに従って彼らに与えられます。彼らの頭の毛までも数え（マタイ一〇・三〇）、彼らとそのすべての所有物のまわりに、まがきを設けられます（ヨブ一・一〇）。そして、ご自分の知恵とあわれみの深さに従って、彼らの生涯のあらゆる事情を整えられるのです。

（八）けれども、彼らがもっと特別な仕方で神を見るのは、神の定めの中においてです。彼らは、大いなる会衆の中に出て（詩篇二二・二五）、「そのみ名にふさわしい栄光を主に帰」し、「聖なる装いをして主を拝」みます（詩篇九六・八〜九）。あるいは、「自分のへやにはい」り、そこで、「隠れた所においでになる」「父」の前に、魂を注ぎ出します（マタイ六・六）。神の言を調べることもあります（ローマ三・二）。キリストの使者たちが（第二コリント五・二〇）救いの良い知らせを告げるのを聞くこともあります。あるいは、あのパンを食し、あの杯を飲んで、主が天の雲に乗って「こられる時に至るまで、主の死を告げ知らせる」こともあります（第一コリント一一・二六）。神の定められたこれらすべての道において、彼らは、言い表せないほど神に近づくのです。彼らは、いわば顔と顔とを合わせて神を見ます。そして、「人がその友と語るように」、神と語ります（出エジプト三三・一一）。これは、天のあのすまい（ヨハネ一四・二）にふさわしい備えです。彼らはそこで、神のまことの御姿を見るのです（第一ヨハネ三・二）。

（九）けれども、ある人々は、神を見ることから、なんと遠かったことでしょう。彼らは、「昔の人々に『いつわり誓うな、誓ったことは、すべて主に対して果せ』と言われていた」ことを聞いて（マタイ五・三三）、それをこう解釈したのです。「主なるエホバをさして誓うときには、いつわり誓うな。そのような誓いは、『主に対して果せ』。けれども、ほかの誓いなら、主は顧みない」。

パリサイ人は、そう教えました。彼らは、普段の会話でのあらゆる誓いを許しただけではありません。神の固有の名をさして誓ったのでなければ、偽りの誓いさえ、小さなことと見なしたのです。

けれども、私たちの主はここで、あらゆる偽りの誓いと同じように、あらゆる普段の誓いも、無条件に禁じておられます。そして、同じ恐るべき事実によって、その両方の極悪さを示しておられます。すべての被造物は神のものであり、神はどこにでもおられ、すべてのうちに、すべての上におられる、という事実です。「わたしはあなたがたに言います。いっさい誓ってはならない。天をさして誓うな。そこは神の御座であるからです」（マタイ五・三四）。ですから、天をさして誓うのは、天の円の上に座しておられる方をさして誓うのと同じです。「また地をさして誓うな。そこは神の足台であるからです」（マタイ五・三五）。神は、天と同じように地にも、親しく臨んでおられます。「またエルサレムをさして誓うな。それは『大王の都』であるからです」（マタイ五・三五）。神は、その宮殿でよく知られています。「また、自分の頭をさして誓うな。あなたは髪の毛一すじさえ、白くも黒くもすることができません」（マタイ五・三六）。明らかに、頭でさえ、あなたのものではなく、神のものだからです。神だけが、天と地のすべてを意のままにされるのです。「あなたがたの言葉は」（マタイ五・三七）、すなわち互の会話、互の話は、「ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきです」。飾らない、まじめな肯定か否定であるべきなのです。「それ以上に出ることは、悪から来るのです」（マタイ五・三七）。原語は、エク・トゥー・ポネールー・エスティン（ἐκ τοῦ πονηροῦ ἐστιν）です。すなわち、悪い者から出るのです。それは悪魔から出たもので、悪魔の子らのしるしです。

（一〇）私たちの主はここで、為政者に求められたときに「真実と正義と」をもって「誓う」ことを（エレミヤ四・二）、禁じてはおられません。それは、次のことから明らかです。

一、この部分の教えが語られたきっかけからです。主がここで責めておられた悪習は、偽りの誓いと普段の誓いでした。為政者の前での誓いは、まったく問題に

なっていなかったのです。

二、主が全体の結論を述べておられる、その言葉そのものからです。「あなたがたの言葉は」、すなわち話は、「ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきです」（マタイ五・三七）。

三、主ご自身の模範からです。主は、為政者に求められたとき、ご自身、誓いのもとで答えられました。大祭司が主に、「あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ」と言いました（マタイ二六・六三）。するとイエスは、すぐに、そうだと答えられました。「あなたの言うとおりです」（すなわち、それは真実だ、ということです）。「しかし」（むしろ「そのうえ」と訳すべきです）、「わたしは言っておきます。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るでしょう」（マタイ二六・六四）。

四、神、すなわち父ご自身の模範からです。「神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証された」のです（ヘブル六・一七）。

五、パウロの模範からです。パウロは神の御霊を受けており、自分の主のみこころをよく理解していた、と私たちは考えます。パウロは、ローマ人には、神が自分の証人であると言って、祈るたびに絶えず彼らのことを覚えている、と書いています（ローマ一・九）。コリント人には、こう書いています。「わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためです」（第二コリント一・二三）。また、ピリピ人には、こう書いています。「わたしがキリスト・イエスの熱愛をもって、どんなに深くあなたがたを思っていることか、それを証明してくださるかたは神です」（ピリピ一・八）。ここから、否定しようもなく明らかになります。使徒が自分の主の言葉の意味を知っていたなら、その言葉は、重大な場合には、互の間でさえ誓うことを禁じていないのです。まして、為政者の前で誓うことを禁じているはずはありません。

六、最後に、偉大な使徒が厳粛な誓い全般について述べている、あの断言からです（もし主が誓いを全面的に禁じておられたなら、使徒が少しもとがめずにそれに触れることは、ありえなかったでしょう）。「いったい、人間は自分より上のものをさして誓う」のです（ヘブル六・一六）。すなわち、自分よりも偉大な方をさして誓うのです。「そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となる」のです（ヘブル六・一六）。

（一一）けれども、ほむべき私たちの主が、ここで教え込み、この例によって明らかにしておられる大切な教訓は、次のことです。神は、すべてのもののうちにおられます。私たちは、あらゆる被造物という鏡の中に、造り主を見なければなりません。どんなものも、神から切り離して用いたり眺めたりしてはなりません。そうすることは、実に一種の実践的な無神論です。むしろ、真に壮大な思いをもって、天と地とその中のすべてのものを見渡さなければなりません。それらはみな、神がたなごころの中に収めておられるものです。神は、親しく臨んでおられることによって、それらすべてを存在させておられます。造られた全体に行きわたり、これを動かしておられます。神は、真の意味で、宇宙の魂なのです。

【二】平和をつくり出す人たちの幸い

（一）私たちの主は、ここまで、主として心の宗教を教えることに力を注いでこられました。クリスチャンがどのような者であるべきかを示してこられました。主は続いて、クリスチャンが何をなすべきかも示されます。内なる聖性が、外のふるまいにどう現れるべきかを示されるのです。主は言われます。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるでしょう」（マタイ五・九）。

（二）「平和をつくり出す人たち」とあります（マタイ五・九）。原語は、ホイ・エイレーノポイオイ（οἱ εἰρηνοποιοὶ）です。よく知られているように、エイレーネー（εἰρήνη）、すなわち平和という語は、聖書では、あらゆる種類の善を意味します。魂にかかわるものであれ、からだにかかわるものであれ、あらゆる祝福を意味します。時にかかわるものであれ、永遠にかかわるものであれ、そうなのです。ですから、パウロが手紙の冒頭で、ローマ人やコリント人に恵みと

平安を祈るとき、それは、こう言っているのと同じです。「神の価なしの、受けるに値しない愛と恵みとの実として、あなたがたが、霊とこの世とのあらゆる祝福を享受するように。神がご自分を愛する者たちのために備えられた（第一コリント二・九）、あらゆる良いものを享受するように」。

（三）　ここから、「平和をつくり出す人たち」という語を、どれほど広い意味に理解すべきかが、たやすく分かります。文字どおりの意味では、この語は、神と人とを愛する人たちを指します。彼らは、あらゆる争いと口論、あらゆる不和と論争を、心から憎み、忌みきらいます。そこで、力のかぎり努めます。この地獄の火が燃えつかないように、燃えついたなら燃え上がらないように、燃え上がったなら広がらないように、努めるのです。彼らは、人々の荒れた心を静め、激しい情念を鎮め、争う人々の心を和らげ、できるなら互に和解させようと努めます。平和があるところではそれを保ち、平和がないところではそれを取り戻すために、罪のないあらゆる手立てを使います。自分のあらゆる力を、神から与えられたあらゆる賜物を用いるのです。人々の間に、互の善意を広め、固め、増し加えることが、彼らの心の喜びです。特に、神の子たちの間ではそうです。神の子たちが、比較的小さな事柄でどれほど分かれていても、そうなのです。神の子たちにとって、「主は一つ、信仰は一つ」です（エペソ四・五）。彼らはみな、「一つの望みを目ざして召された」のです（エペソ四・四）。それと同じように、みなが「召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努め」るように、と彼らは願うのです（エペソ四・一～三）。

（四）　けれども、この語の十分な広がりにおいては、平和をつくり出す人とは、次のような人のことです。その人は、機会のあるごとに、「だれに対しても」「善を行」います（ガラテヤ六・一〇）。その人は、神への愛とすべての人への愛とに満たされています。そのため、その愛の表し方を限ることができません。自分の家族や友人や知人に、自分の党派に、自分と同じ意見の人々に限ることはできないのです。いや、同じ尊い信仰を授かった人々にさえ（第二ペテロ一・一）、限ることができないのです。その人は、これらの狭い境界をすべて踏み越えます。すべての人に善を行うためです。何とかして、隣り人にも見知らぬ人にも、友にも敵にも、自分の愛を表すためです。その人は、機会のあるごとに、すなわち、できるかぎりのあらゆる機会に、すべての人に善を行います。そのために、「今の時を生かして用い」ます（エペソ五・一六）。あらゆる機会を買い取り、一時間一時間を活用し、ほかの人を益することのできる瞬間を、一瞬も失わないのです。その人の行う善は、ある特定の種類の善ではありません。善一般であり、あらゆる可能な仕方で行う善です。そのために、あらゆる種類の賜物を、からだと魂のあらゆる力と能力を、自分の財産も、影響力も、評判も、すべて用います。ただ、主人が来られるとき、こう言ってくださることだけを願っているのです。「良い忠実な僕よ、よくやった」（マタイ二五・二一）。

（五）　その人は、力のかぎり、すべての人のからだにも善を行います。「飢えた者に」自分の「パンを分け与え」、「裸の者」に衣を「着せ」ることを喜びます（イザヤ五八・七）。旅人がいるでしょうか。その人は、旅人を迎え入れ（マタイ二五・三五）、必要に応じて助けます。病気の人や獄にいる人がいるでしょうか。その人は、彼らを見舞い（マタイ二五・三六）、最も必要としている助けを与えます。そして、そのすべてを、人に対してするのではなく、こう言われた方を覚えて行うのです。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのです」（マタイ二五・四〇）。

（六）　まして、だれかの魂に何かの善を行うことができるなら、その人はどれほど喜ぶことでしょう。確かに、この力は神に属します（詩篇六二・一一）。心を変えるのは、神だけです。心が変わらなければ、ほかのどんな変化も、むなしさよりも軽いのです。けれども、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる方は（第一コリント一二・六）、おもに人を通して人を助けることを、よしとされます。ご自分の力と祝福と愛とを、ある人を通してほかの人に伝えることを、よしとされるのです。ですから、地上でなされる助けは神ご自身がなさるのだ、ということは確かです。それでも、だからといって、神のぶどう園で何もしないで立っている必要は（マタイ二〇・六）、だれにもありません。平和をつくり出す人は、何もしないでいることができません。いつもそこで働いています。神の御手の中の道具として、主人のために土地を整え、あるいは御国の種をま

き、あるいはすでにまかれたものに水をそそぎます。神が成長させてくださるかもしれないからです（第一コリント三・六）。その人は、受けた恵みの量りに従って、あらゆる努力を尽くします。ひどい罪人に忠告し、滅びにいたる広い道を（マタイ七・一三）まっしぐらに走っている人々を、連れ戻そうとします。あるいは、「暗黒」「に住む者を照し」ます（ルカ一・七九）。その人々は、「知識がないために滅ぼされ」ようとしているのです（ホセア四・六）。あるいは、「弱い者を助け」（第一テサロニケ五・一四）、「なえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐに」します（ヘブル一二・一二）。あるいは、足がなえて道を踏みはずした者を連れ戻し、いやします（ヘブル一二・一三）。また、すでに狭い戸口からはいろうと努めている人々を（ルカ一三・二四）力づけることにも、劣らず熱心です。立っている人々を強めて、彼らが「参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬ」けるようにします（ヘブル一二・一）。自分の信じてきたかたを知っている人々を（第二テモテ一・一二）、最も神聖な信仰の上に築き上げます（ユダ二〇）。その人々に、内にいただいた神の賜物を再び燃えたたせるように（第二テモテ一・六）勧めます。それは、彼らが日ごとに恵みにおいて成長し、「わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが」、彼らに「豊かに与えられる」ためです（第二ペテロ一・一一）。

（七）　このように、信仰の働きと愛の労苦とに（第一テサロニケ一・三）絶えず励んでいる人たちは、「さいわい」です（マタイ五・九）。「彼らは神の子と呼ばれる」のです（マタイ五・九）。「呼ばれる」とは、そうなる、ということです（よくあるヘブライ語の言い回しです）。神は、子たる身分を授ける霊を（ローマ八・一五）、彼らのうちに保ち続けてくださいます。そうです、その霊を、彼らの心にもっと豊かに注いでくださいます。ご自分の子供たちのあらゆる祝福をもって、彼らを祝福してくださいます。御使たちと人々との前で、彼らを子として認めてくださいます。「もし子であれば、相続人でもあります。神の相続人であって」、「キリストと共同の相続人なのです」（ローマ八・一七）。

【三】　義のために迫害されてきた人たちの幸い

（一）　これまでに描いてきたような人は、人々に最も愛される人になるはずだ、と思われるでしょう。その人は、まことのへりくだりに満ち、飾り気なくまじめで、温和で優しく、あらゆる利己的なたくらみから自由です。神に身をささげ、人々を活発に愛しています。けれども、私たちの主は、今の状態の人間の本性を、もっとよく知っておられました。そこで主は、この神の人の姿を描き終えるにあたって、その人が世でどんな扱いを覚悟しなければならないかを示されます。主は言われます。「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものです」（マタイ五・一〇）。

（二）　これを十分に理解するために、第一に、迫害されるのはだれか、を尋ねてみましょう。これは、パウロから、たやすく学ぶことができます。「その当時、肉によって生れた者が、霊によって生れた者を迫害したように、今でも同様です」（ガラテヤ四・二九）。使徒は、さらにこう言っています。「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受けます」（第二テモテ三・一二）。ヨハネも、同じことを教えています。「兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及びません。わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っています」（第一ヨハネ三・一三〜一四）。これは、こう言っているのと同じです。兄弟たち、すなわちクリスチャンを愛することができるのは、死からいのちへ移ってきた人たちだけだ、と。そして、私たちの主は、最もはっきりとこう教えておられます。「もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したでしょう。しかし、あなたがたはこの世のものではありません。だから、この世はあなたがたを憎むのです。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するでしょう」（ヨハネ一五・一八〜二〇）。

これらの聖句のすべてから、迫害されるのがだれであるかは明らかです。すなわち、正しい人たちです。「霊から生れる者」です（ヨハネ三・六）。「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者」みなです（第二テモテ三・一二）。「死からいのちへ移ってきた」人たちです（第一ヨハネ三・一四）。「この世のものではない」人たちです（ヨハネ一五・一九）。柔和で心のへりくだった人たち（マタイ一一・二九）、神を求めて悲しむ人たち、神のかたちに飢えている人たち、みなです。神と隣り人とを愛し、そのために、機会のあるごとに、だれに対しても善を行う人たち（ガラテヤ六・一〇）、みなです。

（三）第二に、なぜ彼らは迫害されるのか、と尋ねるなら、その答えも同じように明白です。それは、「義のため」です（マタイ五・一〇）。彼らが正しいからです。霊によって生れたからです（ガラテヤ四・二九）。「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする」からです（第二テモテ三・一二）。「この世のものではない」からです（ヨハネ一五・一九）。どんな口実が持ち出されても、これが本当の理由です。彼らの弱さが多くても少なくても、もしこのことがなければ、彼らは大目に見てもらえるでしょう。世は、自分のものを愛するでしょう（ヨハネ一五・一九）。彼らが迫害されるのは、心が貧しいからです。世に言わせれば、こうです。「意気地のない、卑しい、臆病な連中だ。何の役にも立たず、世の中で生きていく資格もない」。彼らが悲しんでいるからです。「あいつらは、まったく陰気で、重苦しく、のろまな連中だ。見る者の気分を、だれでも沈ませてしまう！　まるでどくろそのものだ。罪のない楽しみを台なしにし、どこへ行っても座をしらけさせる」。彼らが柔和だからです。「おとなしい、されるがままの愚か者だ。踏みつけられるのが、ちょうどお似合いだ」。彼らが義に飢えかわいているからです。「頭に血ののぼった熱狂者の一団だ。何だか分からないものを、口をあけて追い求めている。理にかなった宗教では満足せず、恍惚や内なる感情を求めて、狂ったように走り回っている」。彼らがあわれみ深く、すべての人を愛し、恩を知らない者や悪人をも（ルカ六・三五）愛するからです。「あらゆる悪事を助長している。いや、罰せずにおくことで、人々を悪事に誘っている。どうやら、自分自身はまだ宗教を持っていない連中らしい。主義のまったくいいかげんな連中だ」。彼らが心の清い人だからです。「自分たちの仲間のほかは、世の中の人をみな地獄に落とす、思いやりのない連中だ！　罪なしに生きると言い張って、神を偽り者にする（第一ヨハネ一・一〇）、神を汚すろくでなしどもだ！」何よりも、彼らが平和をつくり出す人だからです。あらゆる機会をとらえて、すべての人に善を行うからです。これこそ、彼らがどの時代にも迫害されてきた最大の理由です。万物更新の時まで（使徒三・二一）迫害される理由です。「あいつらが、自分の宗教を自分の中だけにしまっておくなら、まだ我慢もできる。だが、あの誤りを広め、あれほど多くの人にうつしているのは、我慢がならない。あいつらは世の中にさんざん害を与えているのだから、もうこれ以上大目に見るべきではない。なるほど、あの連中も、いくつかのことはそれなりにうまくやっている。貧しい者を何人か助けてもいる。だが、それも、仲間をもっと増やすため、つまり結局は、もっと害を与えるためにすぎないのだ！」世の人々は、本気でこう考え、こう語ります。そして、神の国が広まれば広まるほど、彼らの見方では、ますます害が大きくなります。平和をつくり出す人たちが、へりくだりや柔和やほかの神聖な気質を広めるようになればなるほど、そうなります。したがって、彼らは、その張本人たちにますます激しく怒り、ますます激しく迫害するのです。

（四）第三に、彼らを迫害するのはだれか、を尋ねてみましょう。パウロは、「肉によって生れた者」と答えます（ガラテヤ四・二九）。すなわち、「霊から生れ」ていない人（ヨハネ三・六）、少なくともそうなりたいと願っていない人は、だれでもそうです。少なくとも、「キリスト・イエスにあって信心深く生きよう」と努めていない人は（第二テモテ三・一二）、みなそうです。「死からいのちへ移って」きておらず、そのために「兄弟を愛」することのできない人は（第一ヨハネ三・一四）、みなそうです。また、「この世」です（ヨハネ一五・一八）。私たちの救主の言われるところでは、「わたしをつかわされたかたを」「知らない」人々です（ヨハネ一五・二一）。神を、すなわち愛し、赦してくださる神を、神ご自身の御霊の教えによって知らない人々です。

その理由は明らかです。この世の霊は、神からの霊と（第一コリント二・一二）、まっこうから対立しているからです。ですから、この世に属する人々が、神に属する人々と対立するのは、避けられないことです。両者の間には、あらゆ

る意見においても、願いにも、もくろみにも、気質にも、この上ない対立があります。そして、今までのところ、ひょうと子やぎとは、仲よく共に伏すことができません（イザヤ一一・六）。高ぶる者は、高ぶっているために、へりくだった人を迫害せずにはいられません。軽薄で浮ついた者は、悲しんでいる人を迫害せずにはいられません。ほかのあらゆる種類でも同じです。ほかに理由がなくても、性質が似ていないことが、絶えず敵意の根になるのです。ですから、たとえこの理由だけでも、悪魔のしもべたちはみな、神の子たちを迫害するのです。

（五）第四に、彼らはどのように迫害するのか、と尋ねるなら、大まかには、こう答えられます。彼らは、万物を賢く治める方が、ご自分の栄光に最もかなうと見られる、まさにその仕方と程度で迫害するのです。それは、神の子たちが恵みにおいて成長し、神ご自身の国が広がることに、最も役立つ仕方と程度です。神が世を治められるあらゆる面の中で、これほど驚嘆すべきものはありません。迫害する者の脅しにも、迫害される者の叫びにも、神の耳は決して鈍くありません（イザヤ五九・一）。神の目はいつも開いており、神の手は伸ばされていて、どんなに小さな事情をも導いておられます。嵐がいつ始まり、どれほど高まり、どちらに向かい、いつどのように終るか。それはすべて、神の誤ることのない知恵によって定められています。不信心な者は、神の剣にすぎません。神がみこころのままに用いられる道具です。そして、神の摂理の恵み深い目的が果たされると、その道具そのものは火に投げ込まれるのです。

まれな時代には、神は嵐が高まるのを許されました。キリスト教が初めて植えられ、地に根を下ろしつつあったときがそうです。また、キリストの純粋な教えが、私たちの国にもう一度植えられ始めたときもそうです。そのとき、神の子たちは、血を流すほどに抵抗することを求められました（ヘブル一二・四）。使徒たちについて神がこれを許されたのには、特別な理由がありました。彼らのあかしが、いっそう非の打ちどころのないものになるためです。けれども、二世紀と三世紀には激しい迫害が起りました。神がそれを許されたのには、別の、まったく異なる理由があったことを、教会の年代記から学びます。すなわち、「不法の秘密の力が」それほど強く「働いて」いたからです（第二テサロニケ二・七）。そのころすでに教会を支配していた、ひどい腐敗のためです。神は、あの厳しいけれども必要な刑罰によって、これらの腐敗を懲らしめ、同時にいやそうとされたのです。

私たちの国で起った大迫害についても、同じことが言えるかもしれません。神は、私たちの国を、とても恵み深く扱ってこられました。さまざまな祝福を、私たちの上に注いでこられました。国の外にも内にも平和を与え、年に似合わず賢く善い王を与えてくださいました。そして何よりも、福音の純粋な光を、私たちの間に昇らせ、輝かせてくださいました。けれども、神はどんな報いを受けられたでしょうか。「正義を望まれたのに、見よ、叫び」です（イザヤ五・七）。それは、しえたげと不正の叫び、野心と不義の叫び、悪意と詐欺と貪欲の叫びでした。そうです、そのころでさえ炎の中で息絶えた人々の叫びが、万軍の主の耳に達しました（ヤコブ五・四）。そのとき、神は立ち上がり、不義をもって真理をはばもうとする人々に対して（ローマ一・一八）、ご自分の訴えを守られたのです。そのとき神は、あわれみの混じったさばきによって、ご自分の民を迫害者の手に売りわたされました（士師記二・一四）。それは、ご自分の民のひどい背信を罰する苦しみであり、同時に、それをいやす薬でもありました。

（六）けれども、神が、拷問や死や鎖や投獄にまで至るほど嵐を高めることを許されるのは、まれです。それに対して、神の子たちは、もっと軽い種類の迫害には、しばしば耐えるよう求められます。親族に疎まれることも、しばしばあります。自分の魂のように愛していた友を失うことも、しばしばあります。彼らは、主の言葉が真実であることを知ります（主の来られた目的についてではなく、その結果についての言葉です）。「あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにきたと思っているのですか。あなたがたに言っておきます。そうではありません。むしろ分裂です」（ルカ一二・五一）。そしてここから、当然、商売や仕事を失い、したがって財産を失うことにもなります。けれども、これらの事情もすべて、同じように、神の賢い導きのもとにあります。神は、一人一人に、その人に最も益となるものを割り当てられるのです。

（七）けれども、神のすべての子たちにつきまとう迫害は、私たちの主が次の言葉で描いておられるものです。「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがた

は、さいわいです」（マタイ五・一一）。「ののしり、また迫害し」とは、ののしることによって迫害する、ということです。この迫害は、必ず来ます。それは、私たちが弟子であることのしるしそのものです。私たちが召されたことの証印の一つです。神のすべての子たちに確かに受け継がれる分け前です。もしそれがないなら、私たちは私生子であって、ほんとうの子ではありません（ヘブル一二・八）。御国に至るただ一つの道は、好評の中だけでなく、悪評の中をもまっすぐに通っています（第二コリント六・八）。柔和で、まじめで、へりくだり、熱心に神と人とを愛する人たちは、兄弟たちの間では好評を受けます。けれども、世では悪評を受けます。世は、彼らを「この世のちりのように、人間のくずのように」見なし、扱うのです（第一コリント四・一三）。

（八）　確かに、ある人々は、異邦人が全部救われるに至る前に（ローマ一一・二五）、十字架のつまずきがなくなるだろう（ガラテヤ五・一一）、と考えてきました。神は、まだ罪の中にいる人々にさえ、クリスチャンを尊敬させ、愛させるようになるだろう、と考えたのです。そうです、今でさえ、神がときに、人の激しい怒りだけでなく、侮りをも止められることは確かです。神は、しばらくの間、「その人の敵をもその人と和らがせ」（箴言一六・七）、最も激しい迫害者たちからも好意を受けさせてくださいます。けれども、この例外を別にすれば、十字架のつまずきは、まだなくなっていません。今でも、こう言うことができます。「もし」、「人の歓心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕では」ありません（ガラテヤ一・一〇）。ですから、あの快い考えに耳を貸してはなりません（それが血肉に快いことは疑いありません）。悪い人々は、善い人を憎み、さげすむふりをしているだけで、実は心の中では愛し、尊敬している、という考えです。そうではありません。悪い人々が、ときに善い人を雇うことはあるかもしれません。けれども、それは自分の利益のためです。善い人を信用することもあるかもしれません。その歩みがほかの人々とは違うことを知っているからです。けれども、それでも善い人を愛してはいません。神の御霊が悪い人々に働きかけておられるなら、その分だけは別です。私たちの救主の言葉は、はっきりしています。「もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したでしょう。しかし、あなたがたはこの世のものではありません。だから、この世はあなたがたを憎むのです」（ヨハネ一五・一九）。そうです（神の先行の恵みや特別な摂理によって生じる例外は別として）、世は、かつて彼らの主人を憎んだのと同じほど心から、本気で彼らを憎むのです。

（九）　残るのは、迫害に対して神の子たちはどうふるまうべきか、を尋ねることだけです。まず第一に、知りながら、あるいはわざと、迫害を自分に招いてはなりません。それは、私たちの主とすべての使徒たちの模範にも勧めにも反します。彼らは、迫害を求めないだけでなく、できるかぎり避けるように教えています。ただし、良心を損なわないかぎりです。いのちそのものよりも重んじるべき義を、少しも手放さないかぎりです。ですから、私たちの主は、はっきりこう言われます。「一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい」（マタイ一〇・二三）。これは、実際、それができる場合には、迫害を避けるための、最も非の打ちどころのない方法です。

（一〇）　けれども、この方法でも、ほかのどんな方法でも、いつも迫害を避けられると思ってはなりません。もし、そのむなしい思いが心に忍び込んできたら、あの切実な警告によって、それを追い払いなさい。「わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するでしょう」（ヨハネ一五・二〇）。「へびのように賢く、はとのように素直で」ありなさい（マタイ一〇・一六）。けれども、それで迫害から守られるでしょうか。あなたが、自分の主人よりも知恵があり、神の小羊よりも罪がないのでなければ（ヨハネ一・二九）、守られません。

また、迫害を避けよう、すっかり逃れようと願ってもなりません。そう願うなら、あなたは主のものではないからです。迫害を逃れるなら、祝福をも逃すことになります。義のために迫害される人たちの祝福です。義のために迫害されないなら、天国に入ることはできません。「もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるでしょう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むでしょう」（第二テモテ二・一二）。

（一一）　いや、むしろ、人々が主のためにあなたがたを迫害するときには、「喜び、よろこ」びなさい（マタイ五・一二）。ののしることによって、また「あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う」ことによって（マタイ五・一一）、迫害するときにもそうです。人々は、あらゆる種類の迫害に、必ずこの悪口を混ぜるでしょう。自分を弁解するために、あなたがたを中傷せずにはいられないのです。「あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのです」（マタイ五・一二）。預言者たちは、心においても生活においても、際立って聖い人たちでした。そうです、世の初めからいたすべての正しい人たちも、同じように迫害されたのです。喜びなさい。この印によっても、あなたがたは、自分がだれに属しているかが分かるからです。また、「天においてあなたがたの受ける報いは大きい」からです（マタイ五・一二）。それは、契約の血によって（ヘブル一〇・二九）買い取られた報いです。あなたがたの心と生活の聖性に応じて、また苦しみに応じて、価なしに与えられる報いです。「よろこ」びなさい（マタイ五・一二）。「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりに」あなたがたに「得させる」ことを知っているからです（第二コリント四・一七）。

（一二）　その間にも、どんな迫害によっても、へりくだりと柔和の道から、愛と善行の道から、それてはなりません。確かに、「『目には目を、歯には歯を』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところです」（マタイ五・三八）。そして、あなたがたのみじめな教師たちは、ここから、自分で復讐することを（ローマ一二・一九）あなたがたに許してきました。悪をもって悪に報いることを（ローマ一二・一七）、許してきたのです。「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪人に手向か」ってはなりません（マタイ五・三九）。このように、同じ仕方で仕返しをして、手向かってはならないのです。むしろ、そうするよりは、「もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。もし、だれかが、あなたをしいて一マイル行かせようとするなら、その人と共に二マイル行きなさい」（マタイ五・三九～四一）。

あなたの柔和を、それほど打ち勝ちがたいものにしなさい。そして、あなたの愛も、それにふさわしいものにしなさい。「求める者には与え、借りようとする者を断」ってはなりません（マタイ五・四二）。ただし、ほかの人のもの、自分のものでないものを、与えてはなりません。ですから、次のようにしなさい。

一、だれにも借りがないように気をつけなさい（ローマ一三・八）。あなたが借りているものは、自分のものではなく、ほかの人のものだからです。

二、自分の家族をかえりみなさい（第一テモテ五・八）。これも、神があなたに求めておられることです。家族のいのちと信心とを支えるのに必要なものも（第二ペテロ一・三）、あなたのものではありません。

三、そのうえで、残ったものはすべて、日ごとに、あるいは年ごとに、与えるか、貸すかしなさい。ただし、すべての人に与えたり貸したりすることはできないので、まず信仰の仲間のことを覚えなさい（ガラテヤ六・一〇）。

（一三）　義のために私たちを迫害する人々に対して、私たちは柔和と愛をいだき、親切を示さなければなりません。ほむべき私たちの主は、それを続く節でさらに描いておられます。ああ、その言葉が私たちの心に刻まれますように！「『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところです」（マタイ五・四三）。確かに、神が言われたのは、前半の「隣り人を愛し」だけでした（マタイ五・四三）。悪魔の子らが、後半の「敵を憎め」を付け加えたのです（マタイ五・四三）。「しかし、わたしはあなたがたに言います」（マタイ五・四四）。

一、「敵を愛し」なさい（マタイ五・四四）。あなたに対して最も激しい敵意をいだき、あなたにあらゆる悪が起るように願う人々にも、細やかな善意をいだくようにしなさい。

二、「のろう者を祝福し」なさい（ルカ六・二八）。心の苦々しさが、苦々しい言葉となってほとばしる人がいるでしょうか。あなたがいるときには絶えずあなたをのろい、ののしり、いないときには「様々の悪口を言う」人がいるでしょうか（マタイ五・一一）。それなら、なおさら祝福しなさい。その人々と話すときには、できるかぎり温和で柔らかな言葉を使いなさい。もっと良い手本を、その人々の前で繰り返し示すことによって、忠告しなさい。どう話すべきだったか

を、示してあげることによってです。また、その人々について話すときには、真実と正義の規則を破らないかぎり、言えるだけの良いことを言いなさい。

三、「憎む者に親切に」しなさい（ルカ六・二七）。その人々の憎しみが本物であるのと同じほど、あなたの愛も本物であることを、行いで示しなさい。悪に善をもって報いなさい。「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ一二・二一）。

四、ほかに何もできないとしても、少なくとも、「はずかしめる者」や「迫害する者のために祈」りなさい（ルカ六・二八、マタイ五・四四）。これができなくなることは、決してありません。その人々のどんな悪意も暴力も、あなたを妨げることはできません。神の前に魂を注ぎ出して、祈りなさい。かつてこのようなことをしたけれども、今は悔い改めている人々のためだけではありません。それは小さなことです。もし兄弟が「一日に七度」、「『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば」とします（ルカ一七・四）。すなわち、何度もあと戻りしたあとでも、本当にすっかり変わったと信じる理由をあなたに与えるとします。そうなら、あなたはその人を赦さなければなりません。その人を信頼し、ふところに迎え入れるほどに、赦さなければなりません。まるで、その人があなたに対して一度も罪を犯したことがなかったかのようにです。けれども、悔い改めずに、今もあなたをはずかしめ、迫害している人々のためにも祈りなさい。その人々のために、神と格闘しなさい。その人々を、ここまで赦しなさい。「七たび」までだけではなく、「七たびを七十倍するまで」赦しなさい（マタイ一八・二二）。彼らが悔い改めても、悔い改めなくても、そうです、悔い改めからますます遠ざかっていくように見えても、この親切を示しなさい。「天にいますあなたがたの父の子となるため」です（マタイ五・四五）。すなわち、その父の本当の子であることを示すためです。父は、ご自分の最もかたくなな敵にさえ、彼らの受けられるかぎりの祝福を与えて、ご自分のいつくしみを示されます。父は、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして」くださるのです（マタイ五・四五）。「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるでしょうか。そのようなことは取税人でもするではありませんか」（マタイ五・四六）。取税人は、宗教を持っているふりさえしない人々です。この世の中で神もない者だと（エペソ二・一二）、あなたがた自身が認めている人々です。「兄弟だけにあいさつをしたからとて」、「なんのすぐれた事をしているでしょうか」（マタイ五・四七）。ここで「あいさつ」とは、言葉や行いで親切を示すことです。「兄弟」とは、友人や親族のことです。宗教をまったく持たない人々よりも、何がすぐれているのでしょうか。「そのようなことは」取税人「でもしているではありませんか」（マタイ五・四七）。いや、彼らよりも良い模範に従いなさい。忍耐においても、寛容においても、あわれみにおいても、あらゆる種類の善行においても、そうしなさい。すべての人に対して、最も激しい迫害者に対してさえ、そうしなさい。クリスチャンであるあなたがたは、「あなたがたの天の父が完全であられるように」、程度においてではなくても、種類において、「完全な者となりなさい」（マタイ五・四八）。

【四】　キリスト教の本来の姿

見なさい、これが、偉大な創始者によって伝えられた、本来の姿のキリスト教です！　これこそ、イエス・キリストのまことの宗教です！　目の開かれた人に、主はこのような姿でそれを示されます。人がまねできるかぎりでの、神の肖像を見なさい！　神ご自身の御手によって描かれた肖像です。「見よ、侮る者たちよ。驚け、そして滅び去れ」（使徒一三・四一）。いや、むしろ、驚いて礼拝しなさい。むしろ、こう叫びなさい。「これが、ナザレのイエスの宗教なのか。わたしが迫害していた宗教なのか！　もう二度と、神を敵にまわす者とならないように（使徒五・三九）。主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」（使徒二二・一〇）。全体に、なんという美しさが現れていることでしょう！　なんという正しい釣り合いでしょう！　どの部分も、なんと正確に均整がとれていることでしょう！　ここに描かれた幸いは、なんと望ましいことでしょう！　その聖性は、なんと尊く、なんと麗しいことでしょう。これが宗教の精神、宗教の精髄です。これらこそ、まことにキリスト教の根本です。ああ、私たちが、これを聞くだけの者になりませんように。「自分の」「顔を鏡に映して見る人のよう」に、

「そこから立ち去ると、そのとたんに、自分の姿がどんなであったかを忘れてしま」う者になりませんように（ヤコブ一・二三～二四）。いや、むしろ、この「完全な自由の律法を一心に見つめてたゆまない」者となりましょう（ヤコブ一・二五）。その一行一行が私たち自身の心に書き写されるまで、休まずにいましょう。目をさまして祈り、信じ、愛し、勝利を目ざして励みましょう。そのすべての部分が、神の指によって刻まれて（出エジプト三一・一八）、私たちの魂に現れるようになるまで、そうしましょう。私たちが、「召してくださった聖なるかたにならって」、「聖なる者と」なり（第一ペテロ一・一五）、「天の父が完全であられるように」、「完全な者と」なるまで、そうしましょう（マタイ五・四八）！

説教二十四　山上の説教（四）

「あなたがたは、地の塩です。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされるでしょうか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけです。あなたがたは、世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいません。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのです。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」（マタイ五・一三〜一六）

（一）　聖性の美しさ、すなわち、神のかたちに従って新しくされた（コロサイ三・一〇）、あの心の内なる人の美しさがあります。それは、神が開いてくださったすべての目を、すなわち、照されたすべての理解力を、引きつけずにはいません。柔和で、へりくだった、愛に満ちた霊という飾りは（第一ペテロ三・四）、少なくとも是認を受けるでしょう。霊的な善悪をいくらかでも見分けることのできる人なら、だれからもです。浮わついた、考えのない世は、やみにおおわれています。人々がそのやみから抜け出し始めると、そのときから、彼らはこう悟らずにはいられません。私たちを造られた方の似姿にこのように変えられるのは、なんと望ましいことだろう、と。この内なる宗教には、神のかたちがはっきりと刻まれています。ですから、その神聖な起源を疑うことができるとすれば、その魂は、すっかり血肉に浸りきっているに違いありません。私たちは、この宗教についても、神の御子ご自身について言うのと同じように言うことができます。副次的な意味でではありますが、それは「神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿」なのです（ヘブル一・三）。原語は、アパウガスマ・テース・ドクセース・アウトゥー（ἀπαύγασμα τῆς δόξης αὐτοῦ）です。すなわち、「神の」永遠の「栄光の輝き出たもの」です（ヘブル一・三）。それでいて、その輝きは和らげられているので、人の子らでさえ、ここに神を見て、なお生きていることができます（出エジプト三三・二〇）。また、原語は、カラクテール・テース・ヒュポスタセオース・アウトゥー（χαρακτὴρ τῆς ὑποστάσεως αὐτοῦ）です。すなわち、「神の本質の刻印、押された印、生きた写し」です（ヘブル一・三）。神は、美と愛の泉であり、あらゆる卓越と完全の本源です。

（二）　ですから、もし宗教がこれ以上に及ばないなら、彼らは宗教について、何の疑いもいだかないでしょう。魂の熱意をすべて傾けてそれを追い求めることにも、何の異論もないでしょう。けれども、彼らはこう言います。「なぜ、宗教にほかの事柄がまとわりついているのか。行うことや忍ぶことを、なぜ宗教に背負わせる必要があるのか。そういうものこそ、魂の活力をくじき、魂を再び地に沈ませるのだ。『愛を追い求め』（第一コリント一四・一）、愛の翼に乗って舞い上がるだけで、十分ではないか。霊である神を（ヨハネ四・二四）、私たちの心の霊をもって礼拝すれば、それで足りるのではないか。外の事柄にわずらわされず、それについて考えることさえしなくてよいのではないか。思いのすべてを、高く天的な観想で満たすほうが、よいのではないか。外のことに少しもかかずらわず、ただ心の中で神と交わるほうが、よいのではないか」。

（三）　多くの著名な人々が、このように語ってきました。彼らは私たちに、「外のあらゆる行いをやめる」ように勧めました。世から完全に退き、からだを後に残すように勧めたのです。感覚でとらえられるすべてのものから、自分を引き離すように勧めました。外の宗教にはまったく心を向けず、すべての徳を意志の中で働かせるように勧めました。それが、はるかにすぐれた道であり、魂をいっそう完成させ、神にもいっそう喜ばれる道だというのです。

（四）　この、下からの知恵の傑作について、だれかが私たちの主に告げる必要はありませんでした。これは、サタンが主のまっすぐな道を曲げるために（使徒一三・一〇）用いてきたあらゆる策略の中で、最も見ばえのよいものです。ああ、サタンは折々に、なんという道具を見いだして、この務めに用いてきたこと

でしょう。その道具に、この地獄の大がかりな兵器を振るわせ、神の最も重要な真理のいくつかに逆らわせてきたのです。それは、「できれば、選民をも惑わそうとする」人々です（マタイ二四・二四）。信仰と愛の人々をさえ、惑わそうとするのです。そうです、彼らは、一時は、選民の少なからぬ数を惑わし、連れ去ってきました。その人々は、どの時代にも、金めっきのわなに陥り、わずかに歯の皮をもってのがれたのです（ヨブ一九・二〇）。

（五）　けれども、私たちの主は、ご自分の務めに何か欠けたところがおありだったでしょうか。この心地よい惑わしに対して、私たちを十分に守ってはくださらなかったでしょうか。「光の天使に擬装」したサタンに対して（第二コリント一一・一四）、ここで、私たちに堅固なよろいを着せてはくださらなかったでしょうか。そうです、まことに守ってくださいました。主はここで、ご自分が描いたばかりの、行い、忍ぶ宗教を、最もはっきりと、最も力強く弁護しておられます。行うことと忍ぶことについて語られたあとに、主がすぐに付け加えておられる言葉ほど、十分で明白なものがあるでしょうか。「あなたがたは、地の塩です。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされるでしょうか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけです。あなたがたは、世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいません。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのです。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」（マタイ五・一三〜一六）。

　これらの大切な言葉を十分に説明し、強く勧めるために、私は次のことを示したいと思います。

第一に、キリスト教は本質的に、人と交わる宗教であること。これをひとりきりの宗教に変えるのは、これを滅ぼすことであること。

第二に、この宗教を隠すことはできず、また隠すことは、この宗教の創始者の意図にまったく反すること。

第三に、いくつかの反論に答えます。そして、実践への適用をもって全体を結びます。

【一】　キリスト教は人と交わる宗教である

（一）　第一に、キリスト教が本質的に人と交わる宗教であることを示したいと思います。これをひとりきりの宗教に変えるのは、実にこれを滅ぼすことなのです。

　キリスト教と言うとき、私は、イエス・キリストがここで人に啓示された、神を礼拝する方法のことを言っています。これは本質的に人と交わる宗教だ、と言うとき、私は次のような意味で言っています。人との交わりがなければ、すなわち、ほかの人々と共に生き、語り合うことがなければ、この宗教は、うまく存続できないだけではありません。まったく存続できないのです。これを示すにあたって、私は、目の前にあるこの説教そのものから出てくる考察だけに限ります。そして、これが示されるなら、この宗教をひとりきりの宗教に変えるのは、疑いもなく、これを滅ぼすことになります。

　だからといって、人との交わりの中に、独りでいる時間や、退いて静まる時間を織り交ぜることを、決して責めることはできません。それは許されるだけでなく、有益なことです。いや、日々の経験が示すとおり、すでに本当のクリスチャンである人にも、そうなりたいと願う人にも、それは必要なことです。まる一日、絶えず人々と交わって過ごしながら、魂に損失を受けず、神の聖霊をいくらかでも悲しませずにいることは（エペソ四・三〇）、まずありえません。私たちは、毎日、少なくとも朝と夕には、世から退く必要があります。神と語り、隠れた所においでになる私たちの父と（マタイ六・六）、もっと自由に交わるためです。また、経験のある人なら、信仰のためにもっと長い期間退いて静まることさえ、責めることはできません。ただし、それが、神の摂理が私たちを置かれたこの世の仕事を怠ることにならないかぎりです。

（二）　けれども、そのように退くことが、私たちの時間をすべて飲み込んではなりません。そうなれば、まことの宗教を進めるのではなく、滅ぼすことになるでしょう。私たちの主が先の言葉で描かれた宗教は、人との交わりがなければ存続できません。すなわち、私たちがほかの人々と共に生き、語り合うことがなければ、存続できないのです。そのことは、次のことから明らかです。この宗教

の最も本質的な部分のいくつかは、私たちが世と交わりを持たなければ、そもそも成り立たないのです。

（三） たとえば、柔和ほどキリスト教にとって本質的な心の性質はありません。ところで、柔和は、神への服従や、痛みと病気の中での忍耐を意味します。その意味でなら、荒野でも、隠者の小部屋でも、まったくの孤独の中でも、存続できるかもしれません。けれども、柔和は、温和と優しさと寛容をも意味します（これも、同じように必ず意味するのです）。その意味での柔和は、ほかの人々との交わりがなければ、決して存在できません。天の下のどこにも、居場所がないのです。ですから、これをひとりきりの徳に変えようとするのは、これを地の表から滅ぼすことです。

（四） まことのキリスト教のもう一つの必要な部分は、平和をつくり出すこと、すなわち善を行うことです。これが、イエス・キリストの宗教のほかのどの部分とも同じように本質的であることを示すのに、これ以上強い論拠はありえません（ですから、ほかの論拠を挙げるのはばかげているでしょう）。それは、主がご自分の宗教の根本について定められた、もとの設計図の中に、これがここで組み込まれている、ということです。ですから、これを退けるのは、私たちの偉大な主人の権威に対する大胆な侮辱です。あわれみ深さや心の清さや、主の定められたほかのどの部分を退けるのと、同じ侮辱なのです。ところが、私たちを荒野へと招く人々はみな、明らかにこれを退けています。彼らは、キリストにある幼子にも、若者にも、父たちにも、まったくの孤独を勧めるのです。いったい、だれが断言するでしょうか。ひとりきりのクリスチャンが（そう呼ばれてはいますが、それはほとんど言葉の矛盾です）、あわれみ深い人でありうる、と。すなわち、あらゆる機会をとらえて、すべての人にあらゆる善を行う人でありうる、と。イエス・キリストの宗教のこの根本的な部分は、人との交わりがなければ、決して存続できません。私たちがほかの人々と共に生き、語り合うことがなければ、存続できないのです。これほど明白なことがあるでしょうか。

（五） 「それでも、善い人々とだけ交わるほうが、得策ではないか」と、当然尋ねる人もいるでしょう。「柔和であわれみ深く、心も生活も聖いと分かっている人々とだけ、交わるほうがよいのではないか。それとは反対の性格の人々もいる。私たちの主イエス・キリストの福音に従わず、おそらくは信じてもいない人々だ（第二テサロニケ一・八）。そういう人々とは、どんな付き合いも交わりも控えるほうが、得策ではないか。コリントのクリスチャンたちへのパウロの勧めも、これを支持しているように見える。『わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけないと書いた』（第一コリント五・九）。確かに、そのような人々と、またどんな不義を行う者とも、特別に親しく交際するのは勧められません。固い友情を結ぶほどに交際するのも、勧められません。そのような人と親密な関係を結んだり、続けたりするのは、クリスチャンにとって決して得策ではありません。それは、必ずその人を、多くの危険とわなにさらすことになります。そこから救い出されるという、理にかなった望みは持てないのです。

けれども、使徒は、神を知らない人々とでさえ、交わりを全然持ってはならない、と禁じているのではありません。使徒は言います。「もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになります」（第一コリント五・一〇）。使徒が、彼らにそうするよう勧めることは、決してありえませんでした。けれども、使徒はこう付け加えます。「兄弟と呼ばれる人で」、すなわちクリスチャンだと公言している人で、「不品行な者、貪欲な者、偶像礼拝をする者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪をする者があれば」（第一コリント五・一一）、「そんな人と交際をしてはいけない、食事を共にしてもいけない」と書いたのです（第一コリント五・一一）。これは当然、その人とのあらゆる親しさ、あらゆる親密な付き合いを断つことを意味します。けれども、使徒はほかの所でこう言っています。「しかし、彼を敵のように思わないで、兄弟として訓戒しなさい」（第二テサロニケ三・一五）。これは、このような場合でさえ、その人とのあらゆる交わりを捨ててはならないことを、はっきり示しています。ですから、ここには、悪い人々からでさえ完全に離れよ、という勧めはありません。そうです、まさにこの言葉は、それとはまったく反対のことを教えているのです。

（六） 私たちの主の言葉は、なおさらそうです。主は、世とのあらゆる交わりを断つように指示されるどころではありません。主の描かれるキリスト教によれば、世との交わりがなければ、私たちはまったくクリスチャンでありえないのです。次のことを示すのは、たやすいでしょう。主が御国への道として描かれた

あらゆる気質を十分に発揮するには、不信心な者や聖くない人々とさえ、ある程度の交わりがぜひとも必要です。それは、心の貧しさや悲しみを完全に働かせるためにも、欠かすことができません。ここで、すなわちイエス・キリストのまことの宗教の中で、位置を占めているほかのあらゆる心の性質についても、同じです。そうです、それらのいくつかにとっては、そもそも存在するために、それが必要なのです。たとえば、あの柔和がそうです。柔和は、「目には目を、歯には歯を」と要求するのではなく（マタイ五・三八）、悪に「手向か」いません。むしろ、「右の頬を打」たれるなら、「ほかの頬をも向け」させます（マタイ五・三九）。また、あのあわれみ深さがそうです。それによって私たちは、「敵を愛し」（マタイ五・四四）、「のろう者を祝福し」、「憎む者に親切に」し（ルカ六・二七～二八）、「はずかしめる者」や「迫害する者のために祈」ります（ルカ六・二八、マタイ五・四四）。さらに、義のために苦しむ（第一ペテロ三・一四）中で働く、あの愛とあらゆる聖い気質とが一つに結び合わさったものがそうです。明らかに、もし私たちが本当のクリスチャン以外のだれとも交わらないなら、これらはみな、存在しえないでしょう。

（七）実際、もし私たちが罪人たちから完全に離れてしまうなら、どうしてあの呼び名にふさわしくありうるでしょうか。主がまさにこの言葉で私たちに与えておられる呼び名です。「あなたがたは」（クリスチャンたちよ、へりくだって、まじめで、柔和なあなたがたよ。義に飢え、神と人とを愛し、すべての人に善を行い、そのために悪を忍ぶあなたがたよ。そのあなたがたは）、「地の塩です」（マタイ五・一三）。自分のまわりにあるものすべてに味をつけることこそ、あなたがたの本性です。あなたがたのうちにある神聖な味の本性は、あなたがたが触れるどんなものにも広がることです。四方に、あなたがたが共にいるすべての人々に、行きわたることです。神の摂理が、あなたがたをこのようにほかの人々と混ぜ合わせられたのは、大きな理由があってのことです。あなたがたが神から受けた恵みが、何であれ、あなたがたを通してほかの人々に伝えられるためです。あなたがたのあらゆる聖い気質と言葉と行いが、ほかの人々にも影響を及ぼすためです。この方法によって、世にある腐敗は、ある程度くいとめられるでしょう。そして、少なくともその小さな一部は、全体に広がる感染から救われ、神の前に聖く清いものとされるでしょう。

（八）主は続いて、受けた宗教を人に分け与えない人々の、絶望的な状態を示されます。それは、私たちが、できるかぎりすべてのものに、あらゆる聖い天的な気質で味をつけようと、いっそう熱心に励むためです。実際、その宗教が自分の心にとどまっているかぎり、それを分け与えずにいることは決してできないのです。「もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされるでしょうか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけです」（マタイ五・一三）。聖く、天に思いを向け、そのために良きわざに熱心であった（テトス二・一四）あなたがたが、もはや自分のうちにその味を持たないとします。そのために、もはやほかの人々に味をつけないとします。気が抜け、味がなくなり、死んだようになって、自分の魂には無頓着になり、ほかの人々の魂には役に立たなくなったとします。そうなら、あなたがたは、何によって塩味をつけられるのでしょうか。どうして元に戻れるでしょうか。どんな助けがあるでしょうか。どんな望みがあるでしょうか。味のなくなった塩が、その味を取りもどせるでしょうか。いいえ、できません。「もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて」、ちまたの泥のように（イザヤ一〇・六）、「人々にふみつけられるだけです」（マタイ五・一三）。限りない恥辱に沈められるだけなのです（ダニエル一二・二）。もしあなたがたが、一度も主を知らなかったなら、望みもあったかもしれません。「キリストのうちに」見いだされたことが一度もなかったなら（ピリピ三・九）、です。けれども、主がここで語られたこととちょうど並行する、主のあの厳かな宣言に、あなたがたは今、何と言うことができるでしょうか。「わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞ」かれます（ヨハネ一五・二）。「人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになります」（ヨハネ一五・五）。「人がわたしにつながっていないならば」、すなわち実を結ばないならば、「枝のように外に投げすてられて枯れます。人々はそれをかき集め」、もう一度植えるためではなく、「火に投げ入れ」るのです（ヨハネ一五・六）。

（九）　神の良きみ言葉を一度も味わったことのない人々に対しては（ヘブル六・五）、神は確かに、慈愛とあわれみとに富んだ方です（ヤコブ五・一一）。けれども、正義が行われる人々もいます。主が恵み深い方であることを味わい知りながら（第一ペテロ二・三）、そののち、かつて「自分に授けられた聖なる戒め」から離れ去った人々です（第二ペテロ二・二一）。「いったん、光を受け」た人々がいます（ヘブル六・四）。すなわち、イエス・キリストの顔に輝く神の栄光の知識を与えるために、神がかつてその心を照してくださった人々です（第二コリント四・六）。彼らは、キリストの血によるあがない、すなわち罪の赦しという（エペソ一・七）、「天よりの賜物を味わい」ました（ヘブル六・四）。「聖霊にあずかる者となり」ました（ヘブル六・四）。へりくだりと柔和とに、また、与えられた聖霊によって心に注がれた、神と人とへの愛に（ローマ五・五）、あずかったのです。そして、「堕落した」のです（ヘブル六・六）。原語はカイ・パラペソンタス（και παραπεσοντας）です。ここにあるのは仮定ではなく、事実の率直な宣言です。こういう人々が、「ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能です」（ヘブル六・六）。彼らは、「またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにする」からです（ヘブル六・六）。

けれども、だれもこの恐るべき言葉を誤解しないように、次のことに注意深く目を留めるべきです。

一、ここで語られているのはだれか、ということです。それは、かつてこのように「光を受け」た人々であり（ヘブル六・四）、その人々だけです。あの「天よりの賜物を味わい」、このように「聖霊にあずかる者とな」った人々だけです（ヘブル六・四）。ですから、これらのことを経験したことのない人はみな、この聖句とはまったく関係がありません。

二、ここで語られている堕落とは何か、ということです。それは、絶対的な、全面的な背教です。信者は、倒れても、堕落しないことがありえます。倒れても、また起き上がることがありえます。たとえ倒れて、罪に陥ることさえあっても、その状態は、恐ろしいものではあっても、絶望的ではありません。なぜなら、「父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられ」るからです（第一ヨハネ二・一）。「彼は、わたしたちの罪のため の、あがないの供え物です」（第一ヨハネ二・二）。けれども、何よりも、「罪の惑わしに陥って、心をかたくなにする」ことのないように（ヘブル三・一三）、気をつけなければなりません。ますます低く沈んでいき、ついには完全に堕落して、ききめのなくなった塩のようになることがないように（マタイ五・一三）、気をつけなければなりません。もし私たちが、体験による「真理の知識を受けたのちにも」、このようにことさらに罪を犯すなら、「罪のためのいけにえは、もはやあり得ません」（ヘブル一〇・二六）。ただ、「逆らう者たちを焼きつくす激しい火」を、「恐れつつ待つことだけがあります」（ヘブル一〇・二七）。

【二】　この宗教を隠すことはできない

（一）　「けれども、人々から完全に離れてはならないとしよう。神が私たちの心に造り出してくださった宗教で、人々に味をつけるべきだ、ということも認めよう。それでも、それを人知れず行ってはいけないのか。ひそかに、ほとんど気づかれない仕方で、それをほかの人々に伝えてはいけないのか。いつ、どのようにそれがなされたのか、ほとんどだれにも分からないように。ちょうど塩が、少しも音を立てず、外から少しも気づかれずに、味をつけるものに自分の味を伝えるように。もしそうなら、私たちは、世から出て行かなくても、世の中に隠れていることができる。その程度には、自分の宗教を自分の中にしまっておくことができる。そうすれば、助けることのできない人々の気を害することもない」。

（二）　血肉から出たこのもっともらしい理屈も、私たちの主はよくご存じでした。そして主は、これから考える言葉の中で、それに十分に答えておられます。その言葉を説明しながら、私は、第二に示すと予告したことを示したいと思います。まことの宗教が私たちの心にとどまっているかぎり、それを隠すことはできません。また、隠すことは、その偉大な創始者の意図にまったく反するのです。

まず第一に、イエス・キリストの宗教を持っている人はだれも、それを隠すことはできません。私たちの主は、二重のたとえによって、このことを反論の余地なく明らかにしておられます。「あなたがたは、世の光です。山の上にある町は

隠れることができません」（マタイ五・一四）。クリスチャンであるあなたがたは、気質においても行いにおいても、「世の光です」（マタイ五・一四）。あなたがたの聖性は、あなたがたを、中天の太陽のように目立たせます。あなたがたは、世から出て行くことができないのと同じように、すべての人の目に触れずに世にとどまることもできません。あなたがたは、人々から逃げてはなりません。そして、人々の間にいるかぎり、自分のへりくだりと柔和を隠すことはできません。天の父が完全であられるように完全な者となることを（マタイ五・四八）目ざさせる、ほかの心の性質も、隠すことはできません。愛は、光と同じように、隠すことができません。とりわけ、愛が行いとなって輝き出るとき、あなたがたが愛の労苦に（第一テサロニケ一・三）、あらゆる種類の善行に励むときは、なおさらです。クリスチャンを隠そうと思うのは、町を隠そうと思うのと同じです。そうです、神と人とを愛する、聖い、熱心な、活動的な人を隠すのは、山の上にある町を隠すのと同じです。

（三）　確かに、光よりもやみの方を愛する人々がいます。おこないが悪いからです（ヨハネ三・一九）。その人々は、あなたがたのうちにある光はやみだ、と証明しようとして、あらゆる骨折りをするでしょう。彼らは、あなたがたのうちにある善について、偽って悪口を、様々の悪口を言うでしょう（マタイ五・一一）。あなたがたの思いから最も遠いことを、あなたがたの罪として責めるでしょう。あなたがたのありのままの姿とすべての行いとは、まったく逆のことをです。そして、あなたがたは耐え忍んで善を行い（ローマ二・七）、主のためにすべてを柔和に忍びます。迫害のただ中で、穏やかにへりくだって喜びます。善をもって悪に勝とうと（ローマ一二・二一）、たゆまず労苦します。それらのことが、あなたがたを、以前よりもいっそう人目につく、目立つ者にするでしょう。

（四）　自分の宗教を捨てないかぎり、それが人に見られないようにすることは、それほど不可能なのです。光を消さないかぎり、光を隠そうと考えるのは、それほどむなしいのです。確かに、ひそかな、人目につかない宗教は、イエス・キリストの宗教ではありえません。隠すことのできる宗教は、どんなものであれ、キリスト教ではありません。もしクリスチャンを隠すことができるなら、クリスチャンは、山の上にある町にたとえられることはありえないでしょう。世の光に、すなわち、天から輝き、下の全世界から見られる太陽に、たとえられることもありえないでしょう。ですから、神によって心の深みまで新たにされた人は（エペソ四・二三）、その光を隠そうという思いを、決して心にいだいてはなりません。自分の宗教を自分の中にしまっておこうという思いも、いだいてはなりません。まして、まことのキリスト教を隠すことは、不可能であるだけではありません。その偉大な創始者の意図にまったく反することでもあるのです。

（五）　このことは、次の言葉からはっきり分かります。「また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいません」（マタイ五・一五）。これは、こう言っているのと同じです。人があかりをつけるのは、それをおおって隠すためではない。それと同じように、神が、ご自分の栄光ある知識と愛とで魂を照されるのは、それをおおい隠させるためではない。偽りの思慮によっても、恥によっても、わざとらしい謙そんによっても（コロサイ二・一八）、おおい隠させるためではない。荒野であれ、世の中であれ、人々を避けることによってであれ、人々と交わりながらであれ、それを隠させるためではない、と。「むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのです」（マタイ五・一五）。同じように、神の意図は、すべてのクリスチャンが、だれからもよく見える所に置かれることです。周りのすべての人を照し、イエス・キリストの宗教を目に見える形で表すためです。

（六）　このように、神は、どの時代にも、教えによってだけでなく、模範によっても、世に語ってこられました。福音の声が広まったどの国民の中でも、神は「ご自分のことをあかししないでおられたわけではありません」（使徒一四・一七）。言葉だけでなく生活によっても、神の真理をあかしする少数の人々を、残しておかれたのです。この人々は、「暗やみに輝くともしび」のようでした（第二ペテロ一・一九）。そして、折々に、ある人々を照し、残りの者を保つための手段となってきました。主のものとして一代に数えられる小さな種を、保つ手段となってきたのです。彼らは、少数のあわれな羊を世のやみから連れ出し、その足を平和の道へ導いてきました（ルカ一・七九）。

（七）　聖書も事物の道理も、これほど明白に、はっきりと語っています。ですから、反対の側からはたいしたことは言えないだろう、と思う人もいるでしょう。少なくとも、もっともらしいことは何も言えないだろう、と。けれども、そう思う人は、サタンの深みを（黙示録二・二四）ほとんど知らないのです。聖書と理性がこれほど語ったあとでも、ひとりきりの宗教を支持する口実は、きわめてもっともらしいのです。クリスチャンが世から出て行くこと、少なくとも世の中に身を隠すことを支持する口実は、そうなのです。ですから、そのわなを見抜くには神のあらゆる知恵が、そこからのがれるには神のあらゆる力が必要です。人と交わり、隠れず、活動するクリスチャンであることに対して持ち出されてきた反論は、それほど多く、強いのです。

【三】　反論に答える

（一）　これらの反論に答えることが、私の予告した第三のことでした。まず第一に、しばしばこう反論されてきました。宗教は外のことにあるのではなく、心に、魂の最も奥にある。宗教とは、魂と神との結合であり、人の魂のうちにある神のいのちである。外側だけの宗教には何の値打ちもない。神は、外の奉仕である「燔祭」を「喜ばれない」からだ（詩篇五一・一六）。清く聖い心こそ、神が「かろしめられ」ない「いけにえ」なのだ（詩篇五一・一七）、と。

私は答えます。宗教の根が心に、魂の最も奥にあることは、まったくそのとおりです。それが魂と神との結合であり、人の魂のうちにある神のいのちであることも、そのとおりです。けれども、この根が本当に心にあるなら、枝を出さずにはいません。その枝とは、外の従順の様々な実例です。それらは根と同じ性質にあずかっています。ですから、それらは宗教のしるしや表れであるだけでなく、宗教の実質的な部分なのです。

また、心に根を持たない、外側だけの宗教に何の値打ちもないことも、そのとおりです。神がユダヤ人の燔祭を喜ばれないように、そのような外の奉仕も喜ばれないことも、そのとおりです。清く聖い心が、神のいつも喜ばれるいけにえであることも、そのとおりです。けれども、神は、心から出てくる外の奉仕も、すべて喜ばれます。公のものであれ個人のものであれ、私たちの祈りといういけにえを、また、賛美と感謝といういけにえを、喜ばれます。へりくだって神にささげられ、すべて神の栄光のために用いられる、私たちの財産といういけにえを、喜ばれます。そして、私たちのからだといういけにえを喜ばれます。神はそれを特別にご自分のものとして求めておられます。使徒も、「神のあわれみによって」、からだを「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として」神に「ささげるように、私たちに勧めています（ローマ一二・一）。

（二）　これと密接に関係する第二の反論は、こうです。愛がすべてである。愛は「律法を完成するもの」であり（ローマ一三・一〇）、神のあらゆる戒めが「目標としている」ものである（第一テモテ一・五）。私たちが行うことも忍ぶことも、もし愛がなければ、いっさいは無益である（第一コリント一三・三）。だからこそ使徒は、「愛を追い求めなさい」と命じ（第一コリント一四・一）、これを「最もすぐれた道」と呼んでいるのだ（第一コリント一二・三一）、と。

私は答えます。偽りのない信仰から出てくる（第一テモテ一・五）、神と人とへの愛がすべてであり、律法を完成するものであり、神のあらゆる戒めの目標であることは、認めます。これがなければ、何を行っても、何を忍んでも、無益であることは、そのとおりです。けれども、だからといって、愛が、信仰や良きわざに取って代わるような意味ですべてである、ということにはなりません。愛は「律法を完成するもの」です（ローマ一三・一〇）。それは、私たちを律法から解き放つからではありません。律法に従うように私たちを駆り立てるからです。愛が、戒めが「目標としている」ものであるのは（第一テモテ一・五）、あらゆる戒めが愛へと導き、愛に集まるからです。愛なしに何を行っても、何を忍んでも、無益であることは、認めます。けれども同時に、愛をもって行い、忍ぶことは何であれ、決してその報いからもれることはありません（マタイ一〇・四二）。それがただ、キリストのためにそしりを受けることであっても、そうです。キリストの名のゆえに冷たい水一杯を飲ませることであっても、そうです。

（三）　「けれども、使徒は、『愛を追い求めなさい』と命じているではないか（第一コリント一四・一）。それを『最もすぐれた道』と呼んでいるではないか（第一コリント一二・三一）」。確かに使徒は、「愛を追い求めなさい」と命じて

います（第一コリント一四・一）。けれども、愛だけを追い求めよ、と命じているのではありません。使徒の言葉は、こうです。「愛を追い求めなさい。また、霊の賜物を」「熱心に求めなさい」（第一コリント一四・一）。そうです、「愛を追い求めなさい」（第一コリント一四・一）。そして、兄弟たちのために費用を使い、自分自身をも使いつくすことを願いなさい（第二コリント一二・一五）。「愛を追い求めなさい」（第一コリント一四・一）。そして、機会のあるごとに、だれに対しても善を行いなさい（ガラテヤ六・一〇）。

また、この愛の道を「最もすぐれた道」と呼んでいる、その同じ節で（第一コリント一二・三一）、使徒はコリント人に、愛のほかの賜物をも求めるように命じています。そうです、熱心に求めるように命じているのです。使徒は言います。「更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示しましょう」（第一コリント一二・三一）。何と比べて、すぐれているのでしょうか。前の節で挙げられている、いやしの賜物や、異言を語ることや、異言を解くことよりもです（第一コリント一二・三〇）。けれども、従順の道よりすぐれている、というのではありません。使徒は、従順の道について語っているのではありません。外の宗教について語っているのでもまったくありません。ですから、この聖句は、いま問題になっていることからは、まったく外れているのです。

けれども、仮に使徒が、内の宗教と同じく外の宗教についても語っていて、両者を比べていたとします。その比較の中で、内の宗教のほうをきわめて強く優先していたとします。（当然そうしてよいのですが）愛に満ちた心を、どんな外のわざよりも優先していたとします。それでも、そのどちらかを捨ててよい、ということにはならないでしょう。いいえ、神は、世の初めから、この二つを合わせてこられました。神が合わせられたものを、人は離してはなりません（マタイ一九・六）。

（四）「けれども、『神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである』（ヨハネ四・二四）。それで十分ではないか。いや、私たちは、そのために心の力のすべてを用いるべきではないか。外の事柄に心を配ることは、魂の足かせとなって、聖い観想の中に高く舞い上がれなくするのではないか。思いの活力をくじくのではないか。心をわずらわせ、乱す傾向が、もともとあるのではないか。それに対してパウロは、私たちが『思い煩わない』ようにし（第一コリント七・三二）、『余念なく主に奉仕』するように（第一コリント七・三五）望んでいるのだ」。

私は答えます。「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきです」（ヨハネ四・二四）。そうです、それで十分です。私たちは、そのために心の力のすべてを用いるべきです。けれども、それなら尋ねたいと思います。霊である神を、霊とまこととをもって礼拝するとは、どういうことでしょうか。それは、私たちの霊をもって神を礼拝することです。霊のほかにはできない仕方で、神を礼拝することです。それは、神を、賢く、正しく、聖い方として信じることです。目が清く、不義を見られない方として（ハバクク一・一三）信じることです。しかもなお、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、悪と、とがと、罪とを赦す方として（出エジプト三四・六～七）信じることです。私たちの罪をことごとくご自分の後に捨て（イザヤ三八・一七）、愛する御子にあって私たちを受け入れてくださる方として信じることです。それは、心をつくし、思いをつくし、精神をつくし、力をつくして（マルコ一二・三〇）、神を愛し、神を喜び、神を慕い求めることです。神がきよくあられるように、自らをきよくして（第一ヨハネ三・三）、愛する神にならうことです。そして、私たちの愛し、信じている神に、思いにおいても、言葉においても、行いにおいても従うことです。したがって、霊とまこととをもって神を礼拝することの一つの枝は、神の外の戒めを守ることです。ですから、霊をもってだけでなく、からだをもっても神の栄光をあらわすこと（第一コリント六・二〇）。心を神に引き上げながら、外の仕事をやり遂げること。日々の仕事を神へのいけにえとすること。神の栄光のために、売り買いし、飲み食いすること（第一コリント一〇・三一）。これは、荒野で神に祈るのと同じように、霊とまこととをもって神を礼拝することなのです。

（五）けれども、そうであるなら、観想は、霊とまこととをもって神を礼拝する一つの方法にすぎません。ですから、観想にすっかり身をゆだねてしまうのは、霊的な礼拝の多くの枝を滅ぼすことになるでしょう。その枝はどれも、同じ

ように神に喜ばれ、同じように魂に益をもたらすもので、害になるものではありません。なぜなら、神の摂理が私たちを召された外の事柄に心を配っても、クリスチャンの足かせにはならないからです。見えないかたをいつも見ていることの（ヘブル一一・二七）、少しの妨げにもなりません。そうなると考えるのは、大きな間違いです。外の事柄に心を配っても、その人の思いの熱は少しもくじかれません。その人の心がわずらわされたり、乱されたりもしません。すべてを主に対してするように（コロサイ三・二三）行う人には、不安な、害になる思い煩いも生じません。その人は、言葉によるとわざによるとを問わず、何をするにも、いっさい主イエスの名によってすることを学んでいるのです（コロサイ三・一七）。その人は、魂の目の一つだけを外の事柄に向けて動かし、もう一つの目を、動かずに神に注いでいます。あわれな隠遁者たちよ、これがどういう意味か学びなさい。自分の信仰の薄さを、はっきりと見分けるためです。そうです、もう自分を基準にしてほかの人をさばかないように、次の言葉がどういう意味か、学んできなさい（マタイ九・一三）。

主よ、あなたは優しい愛をもって
私の重荷をすべて負ってくださいます。
私の心を上にあるものへ引き上げ、
いつまでもそこに据えてくださいます。
騒がしく回る車輪の上に、私は静かに座ります。
忙しい群衆のただ中で、ひとり、
あなたの足もとで、心安らかに待ちます。
あなたのみこころが、すべて成るまで。

（六）けれども、最大の反論が、まだ残っています。彼らは言います。「私たちは、経験に訴える。私たちの光は確かに輝いていた。私たちは何年も外の事柄を用いてきた。それでも、何の益もなかった。私たちは、神の定めにすべてあずかった。だが、そのために少しも良くならなかった。実際、ほかのだれも良くならなかった。いや、かえって悪くなった。キリスト教が何を意味するかも知らないのに、そうしているからといって、自分をクリスチャンだと思い込んだからだ」。

その事実は認めます。あなたがたも、ほかの何万もの人々も、このように神の定めを誤用してきたことは、認めます。手段を目的と取り違えてきたのです。これらを行うこと、あるいはほかの何かの外のわざを行うことが、イエス・キリストの宗教だと思い込んできました。あるいは、それがその宗教の代わりに受け入れられると思い込んできたのです。けれども、誤用は取り除き、正しい用い方は残しなさい。今こそ、外の事柄をすべて用いなさい。ただし、真の義と聖とにおいて（エペソ四・二四）魂が新しくされることに、いつも目を向けて用いなさい。

（七）けれども、それだけではありません。彼らは断言します。「経験はまた、善を行おうとするのは、むだ骨にすぎないことを示している。人々が今にも永遠の火に落ちようとしているのなら、そのからだに食べさせたり着せたりして、何の役に立つのか。また、人が彼らの魂に、どんな善を行えるというのか。魂が変わるとすれば、それは神ご自身がなさることだ。そのうえ、すべての人は、善い人か、少なくともそうなりたいと願っている人か、さもなければ、かたくなに悪い人かのどちらかだ。前者は、私たちを必要としない。神に助けを求めればよいのだ。そうすれば与えられる。後者は、私たちからの助けを受け入れはしない。いや、私たちの主も、『真珠を豚に投げてやる』ことを禁じておられる（マタイ七・六）」。

私は答えます。

一、彼らが最後に滅びるにせよ、救われるにせよ、あなたがたは、飢えた人に食べさせ、裸の人に着せるように、はっきりと命じられています（マタイ二五・三五～三六）。もしそれができるのにしないなら、彼らがどうなるにせよ、あなたがた自身が永遠の火にはいってしまうのです（マタイ二五・四一）。

二、心を変えるのは神だけですが、神は普通、人を通してそれをなさいます。私たちの務めは、まるで自分で心を変えられるかのように熱心に、自分にできるすべてのことを行い、そのうえで結果を神にゆだねることです。

三、神は、子供たちの祈りに答えて、子供たちどうしを通して、あらゆる良い賜物において子供たちを築き上げられます。神は「すべての節々の助けにより」、「全身」を養い、強められるのです（エペソ四・一六）。ですから、「目は手にむ

かって、『おまえはいらない』とは言え」ません（第一コリント一二・二一）。いや、「頭は足にむかって」さえ、「『おまえはいらない』とも言えない」のです（第一コリント一二・二一）。

最後に、目の前の人々が犬や豚だと、どうして確信できるのでしょうか（マタイ七・六）。試してみるまでは、さばいてはなりません（マタイ七・一）。人よ、あなたが兄弟を得ないと（マタイ一八・一五）、どうして分かるのでしょうか（第一コリント七・一六）。神のもとで、その魂を死から救い出さないと（ヤコブ五・二〇）、どうして分かるのでしょうか。その人があなたの愛をはねつけ、良きみ言葉を汚すとき、そのときこそ、その人を神にゆだねるべきときです。

（八）「私たちは試してみた。罪人たちを改めさせようと努めた。それで、何の役に立ったか。多くの人には、何の感銘も与えられなかった。しばらくの間、変わった人がいても、その善良さは朝の露のようなもので、彼らはすぐに元どおり悪くなった。いや、以前よりも悪くなった。だから、私たちは彼らを傷つけ、自分自身も傷つけただけだった。私たちの心は、せき立てられ、かき乱され、おそらく愛ではなく怒りで満たされたのだから。だから、自分の宗教を自分の中にしまっておいたほうがよかったのだ」。

この事実も、本当である可能性は十分あります。あなたがたは善を行おうと試みたけれども、うまくいかなかったのでしょう。そうです、改まったように見えた人々が、再び罪に陥り、その人たちの後の状態は、初めよりももっと悪くなったのでしょう（第二ペテロ二・二〇）。けれども、何の不思議があるでしょうか。僕はその主人以上の者でしょうか（マタイ一〇・二四）。主は、どれほどたびたび罪人を救おうと努められたことでしょう。けれども、彼らは聞こうとしませんでした。あるいは、しばらく主に従ったあと、犬が自分の吐いた物に帰るように（第二ペテロ二・二二）、引き返していったのです。けれども、主は、だからといって、善を行おうと努めることをやめはされませんでした。あなたがたも、結果がどうであれ、やめてはなりません。命じられたとおりに行うのが、あなたがたの務めです。結果は神の御手の中にあります。あなたがたには、結果の責任はありません。すべてをよく治められる神に、それをゆだねなさい。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはなりません。実るのは、これであるか、あれであるか、あなたは知らないからです」（伝道一一・六）。

けれども、その試みは、あなたがた自身の魂をせき立て、いらだたせる、と言うのでしょう。おそらく、そうなったのは、まさに次の理由からでしょう。あなたがたが、結果に責任があると思っていたからです。けれども、だれも結果に責任はありませんし、実際、ありえないのです。あるいは、おそらく、あなたがたが油断していたからでしょう。自分の霊に気をつけていなかったからでしょう。けれども、これは神に従わない理由にはなりません。もう一度試みなさい。ただし、前よりも用心深く試みなさい。赦すときと同じように、「七たび」までだけではなく、「七たびを七十倍するまで」善を行いなさい（マタイ一八・二二）。ただ、経験によって賢くなりなさい。毎回、前よりも慎重に試みなさい。神の前に、もっとへりくだりなさい。自分では何一つできないことを（ヨハネ一五・五）、もっと深く確信しなさい。自分の霊に、もっと気を配りなさい。もっと優しく、もっと目をさまして祈りなさい。こうして、「あなたのパンを水の上に投げ」なさい。そうすれば、「多くの日の後、あなたはそれを得る」のです（伝道一一・一）。

【四】 実践への適用

（一） 光を隠すためのこうしたもっともらしい口実がどれほどあっても、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」（マタイ五・一六）。これが、私たちの主ご自身が、先の考察から引き出しておられる、実践への適用です。

「そのように、あなたがたの光を」「輝かし」なさい（マタイ五・一六）。その光とは、あなたがたの心のへりくだりです。あなたがたの優しさと、知恵にかなう柔和です（ヤコブ三・一三）。永遠の事柄に対するまじめで重い関心と、人々の罪と悲惨に対する悲しみです。全き聖性と、神にある満ちあふれる幸いとを求める、熱心な願いです。すべての人に対する細やかな善意と、至高の恩人である

神への燃える愛です。神があなたがたの魂を照してくださった、この光を、隠そうとしてはなりません。むしろ、それを人々の前に、あなたがたが共にいるすべての人の前に、あなたがたのふるまいの全体を通して輝かしなさい。あなたがたの行いにおいて、すべての人にできるかぎりの善を行うことにおいて、さらにいっそう際立って輝かしなさい。また、義のために苦しむことにおいて（第一ペテロ三・一四）、輝かしなさい。そのとき、あなたがたは、「天においてあなたがたの受ける報いは大きい」ことを知って、「喜び、よろこ」ぶのです（マタイ五・一二）。

（二）「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見」るようにしなさい（マタイ五・一六）。クリスチャンは、自分の宗教を隠そうともくろんだり願ったりすることなど、決してあってはなりません。それどころか、宗教を隠さないことを、光を枡の下におかないことを（マタイ五・一五）、あなたがたの願いとしなさい。光を「燭台の上において、家の中のすべてのものを照させる」ように（マタイ五・一五）、心がけなさい。ただし、そこで自分の誉れを求めないように、自分に何かの栄誉を願わないように、注意しなさい。むしろ、あなたがたの良きわざを見るすべての人が、「天にいますあなたがたの父をあがめる」ようになることを（マタイ五・一六）、ただ一つの目的としなさい。

（三）すべてのことにおいて、これをあなたがたの唯一の究極の目的としなさい。この目的のために、飾らず、隠しだてをせず、偽りのない者でありなさい。あなたがたの愛には偽りがあってはなりません（ローマ一二・九）。美しく、私心のない愛を、なぜ隠す必要があるでしょうか。あなたがたの口に偽りがないようにしなさい（黙示録一四・五）。あなたがたの言葉が、心のありのままの写しとなるようにしなさい。あなたがたのふるまいに、暗さや隠しだてがないようにしなさい。あなたがたの態度に、偽装がないようにしなさい。そのようなことは、ほかのもくろみを持っている人々に任せておきなさい。光に耐えられないもくろみを持つ人々にです。すべての人に対して、飾り気なく単純でありなさい。すべての人が、あなたがたのうちにある神の恵みを見ることができるためです。ある人々は心をかたくなにするでしょう。それでも、ほかの人々は、あなたがたがイエスと共にいた者であることを認めるでしょう（使徒四・一三）。そして、魂の偉大な監督であるかたのもとに立ち帰って（第一ペテロ二・二五）、「天にいますあなたがたの父をあがめる」でしょう（マタイ五・一六）。

（四）人々があなたがたを見て神をあがめるようにという、このただ一つの意図をもって、神の御名によって、神の偉大な力によって（エペソ六・一〇）、進んで行きなさい。たとえひとりで立つことになっても、それが神の道においてであるなら、恥じてはなりません。あなたがたの心にある光を、あらゆる良きわざにおいて、すなわち、敬虔のわざにおいても、あわれみのわざにおいても、輝かしなさい。そして、善を行う力を広げるために、あらゆるぜいたくを捨てなさい。食べ物にも、家具にも、衣服にも、不必要な出費はすべて切り捨てなさい。神のあらゆる賜物の、良い管理人でありなさい。神の賜物の中で最も低いこれらのものの、良い管理人でもありなさい。時間の不必要な浪費を、すべて切り捨てなさい。不必要な、あるいは役に立たない仕事を、すべて切り捨てなさい。そして、「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてな」しなさい（伝道九・一〇）。一言で言えば、信仰と愛に満ちていなさい。善を行いなさい。悪を忍びなさい。そして、このことにおいて、「堅く立って動かされず」にいなさい（第一コリント一五・五八）。そうです、「いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては」、あなたの「労苦がむだになることはないと」、あなたは「知っているからです」（第一コリント一五・五八）。

説教二十五　山上の説教（五）

「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはなりません。廃するためではなく、成就するためにきたのです。よく言っておきます。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのです。それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるでしょう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるでしょう。わたしは言っておきます。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできません」（マタイ五・一七～二〇）

（一）「侮られて人に捨てられ」た方には（イザヤ五三・三）、数多くの非難が浴びせられました。その中に、次の非難がないはずはありませんでした。この人は新奇なことを教える者であり、新しい宗教を持ち込む者だ、という非難です。この非難は、いっそうもっともらしく言い立てられたかもしれません。主の用いられた言い回しの多くが、ユダヤ人の間では普通のものではなかったからです。ユダヤ人は、それをまったく用いなかったか、用いても同じ意味ではなく、これほど十分で強い意味ではありませんでした。これに加えて、「霊とまことをもって」神を礼拝することは（ヨハネ四・二四）、いつでも新しい宗教に見えたに違いありません。これまで外側の礼拝しか、すなわち敬虔の形しか（第二テモテ三・五）、知らなかった人々にとってはそうです。

（二）また、そうであればよいと望んだ人々も、いたかもしれません。主は古い宗教を廃して、別の宗教を持ち込もうとしておられる、と望んだのです。その宗教なら天国へのもっと楽な道になるだろう、と彼らは都合よく考えたかもしれません。けれども、私たちの主は、この言葉で、そう望んだ人々のむなしい望みも、非難した人々の根拠のない中傷も、退けておられます。

私は、これらの言葉を、並んでいる順に考えていきます。一節ずつを、話の一つの区分とします。

【一】廃するためではなく、成就するために

（一）まず第一に、「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはなりません。廃するためではなく、成就するためにきたのです」（マタイ五・一七）。

モーセがイスラエルの子らに授けた祭儀律法、すなわち儀式律法があります。それは、昔のいけにえと宮の奉仕にかかわる命令と定めを、すべて含んでいました。私たちの主は、確かに、この律法を廃し、解き、まったく取り除くために来られたのです。このことは、使徒たちがみなあかししています。バルナバとパウロだけではありません。二人は、クリスチャンが「モーセの律法を守」るべきだと教える人々に、激しく反対しました（使徒一五・五）。ペテロだけでもありません。ペテロは、これを、すなわち祭儀律法を守らせようと言い張ることを、「神を試みる」ことだと呼びました（使徒一五・一〇）。また、「われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかったくびきをあの弟子たちの首にかけ」ることだと呼んだのです（使徒一五・一〇）。使徒たちも長老たちも兄弟たちも、みな心を一つにして集まり（使徒一五・二二）、こう宣言しました。この律法を守るように彼らに命じるのは、彼らの「心を乱」すことである（使徒一五・二四）、と。また、そのような負担を彼らに負わせないことに、「聖霊と」自分たちとは「決めた」、と（使徒一五・二八）。私たちの主は、この「証書を、その規定もろとも」ぬり消し、取り除いて、十字架につけてしまわれたのです（コロサイ二・一四）。

（二）けれども、十戒に含まれ、預言者たちが強く説いた道徳律法を、主は取り除かれませんでした。主が来られたのは、その一部でも取り消すためではありませんでした。これは、決して破られることのない律法です。天にある忠実な証人のように、堅く立っているのです。道徳律法は、儀式律法、すなわち祭儀律法とは、まったく違う土台の上に立っています。祭儀律法は、不従順で、かたく

な民を（出エジプト三二・九）、一時的に抑えるためだけに定められたものでした。それに対して、道徳律法は世の初めからありました。それは、「石の板にではなく」（第二コリント三・三）、すべての人の子らの心に書かれていたのです。人の子らが創造者の手から出てきたときにです。かつて神が指をもって書かれたその文字は（出エジプト三二・一八）、今では罪によって大部分がそこなわれています。けれども、私たちにいくらかでも善悪の意識があるかぎり、すっかり消し去られることはありえません。この律法のどの部分も、すべての人に対して、どの時代にも、効力を持ち続けなければなりません。それは、時や場所や、そのほか変わりうるどんな事情にもよらないからです。神の本性と人の本性、そして両者の変わることのない関係によるのです。

（三）「廃するためではなく、成就するためにきたのです」（マタイ五・一七）。ある人々は、私たちの主の意味をこう考えました。わたしは、律法に完全に従うことによって、これを成就するために来た、と。主が、この意味で律法のあらゆる部分を成就されたことは、疑う余地がありません。けれども、主がここで意図しておられるのは、それではないようです。それは、いまの説教のねらいとは関係がないからです。疑いもなく、ここでの主の意味は、次のとおりです（前後のすべてとも一致します）。わたしは、人々のあらゆる注釈に逆らって、律法をその完全な姿で確立するために来た。律法の中の暗いところ、あいまいなところを、すべて十分にはっきりと見えるようにするために来た。律法のあらゆる部分の、まことの十分な意味を明らかにするために来た。律法に含まれるあらゆる戒めの長さと広さ、すなわちその全範囲を示すために来た。また、その高さと深さ、すなわち、そのすべての部分にわたる、思いも及ばない清さと霊性を示すために来た、と。

（四）そして、私たちの主は、目の前にあるこの説教の前の部分でも後の部分でも、このことを十分に果たしておられます。この説教の中で、主は新しい宗教を世に持ち込まれたのではありません。初めからあった同じ宗教を持ち込まれたのです。その宗教の実質は、疑いもなく、創造と同じほど古いものです。それは人と同時に始まり、「人は生きた者となった」まさにそのときに（創世記二・七）、神から出たのです。実質は、と言ったのは、その宗教のいくつかの事情が、今では、堕落した被造物としての人にかかわっているからです。それは、続くすべての世代において、律法と預言者とによってあかしされてきた宗教です（ローマ三・二一）。けれども、その宗教がこれほど十分に説明され、徹底して理解されたことは、かつてありませんでした。その偉大な創始者ご自身がへりくだって、この確かな注解を人々に与えてくださるまでは、そうだったのです。その注解は、この宗教のすべての本質的な部分にわたっています。主は同時に、この宗教が決して変えられることなく、世の終りまで効力を持ち続けることを宣言されました。

【二】律法の一点、一画もすたることはない

（一）「よく言っておきます」（マタイ五・一八）。これは、語られることの重要さと確かさの両方を示す、厳かな前置きです。「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのです」（マタイ五・一八）。

「一点」（マタイ五・一八）。これは文字どおりには、イオタ一つも、ということです。最も小さな母音字一つも、ということです。「一画」も（マタイ五・一八）。原語はミア・ケライア（μία κεραία）で、子音字の角一つ、あるいは点一つのことです。これは、ことわざのような言い方です。道徳律法に含まれる戒めは、一つも廃されることがない、という意味です。どの戒めの最も小さな部分も、どれほど取るに足りないように見えても、廃されることはないのです。

律法から「すたることはなく」（マタイ五・一八）。原語は、ウー・メー・パレルテー・アポ・トゥー・ノムー（οὐ μὴ παρέλθῃ ἀπὸ τοῦ νόμου）です。ここで用いられている二重の否定は、意味を強めています。反論の余地をまったく残さないほどです。また、パレルテー（παρέλθῃ）という語は、注意すべきことに、何が起こるかを告げるただの未来形ではありません。何が起こらなければならないかを命じる、命令の力も持っているのです。これは権威の言葉です。語られた方の、主権ある意志と力を表しています。その方の言葉は天と地の法であり、世々限りなく堅く立つのです。

「天地が滅び行くまでは」、「一点、一画もすたることはな」いのです（マタイ五・一八）。あるいは、すぐあとで言われているとおり、ヘオース・アン・パンタ・ゲネータイ（ἕως ἂν πάντα γένηται）です。すなわち、すべてが（というより、すべての事物が）全うされるまで、万物が完成するまで、ということです。ですから、ここには、あのお粗末な言い逃れの入る余地はありません（ある人々は、この言い逃れを大いに喜んできました）。それはこういうものです。「律法は、律法全体が成就されるまでは、どの部分もすたることがなかった。けれども、律法はキリストによって成就された。だから、福音が確立されるためには、今は律法がすたらなければならない」。そうではありません。「ことごとく」という語は、律法全体を意味するのではなく、宇宙のすべての事物を意味しています。同じように、「全うされる」という語も、律法にかかわるのではなく、天と地のすべての事物にかかわっているのです。

（二）　これらすべてから、私たちは次のことを学ぶことができます。律法と福音との間には、少しも対立はありません。福音が確立されるために、律法がすたる必要はないのです。実際、どちらも他方に取って代わることはなく、両者は完全によく調和しています。そうです、まったく同じ言葉が、違う面から見れば、律法の一部でもあり、福音の一部でもあるのです。戒めとして見れば、それは律法の一部です。約束として見れば、福音の一部です。たとえば、「心をつくし」、「主なるあなたの神を愛せよ」（マタイ二二・三七）という言葉は、戒めとして見れば、律法の一部です。約束として見れば、福音の本質的な部分です。福音とは、約束の形で示された律法の命令にほかならないのです。ですから、心の貧しさも、心の清さも、そのほか神の聖なる律法で命じられていることは何であれ、みなそうです。福音の光で見れば、それらはどれも、尊く、大いなる約束にほかなりません（第二ペテロ一・四）。

（三）　ですから、律法と福音との間には、考えうるかぎり最も密接なつながりがあります。一方では、律法は絶えず福音のために道を備え、私たちに福音を指し示します。他方では、福音は絶えず私たちを、律法をもっと正確に満たすことへと導きます。たとえば、律法は私たちに、神を愛し、隣人を愛し、柔和で、へりくだった、聖い者であることを求めます。私たちは、自分がこうしたことに足りる者ではないと感じます。そうです、「人にはそれはできない」と感じるのです（マタイ一九・二六）。けれども、私たちは神の約束を見ます。その愛を私たちに与え、私たちをへりくだった、柔和な、聖い者にしてくださるという約束です。私たちは、この福音を、この喜ばしい知らせをとらえます。すると、私たちの信仰どおりに、私たちの身になります（マタイ九・二九）。キリスト・イエスにある信仰によって、「律法の要求が」私たち「において、満たされる」のです（ローマ八・四）。

さらに、次のことにも目を留めることができます。聖書のあらゆる命令は、おおわれた約束にほかならないのです。神は、あの厳かな宣言によって、ご自分の命じることを何でも与えると約束しておられるからです。その宣言とは、こうです。「わたしが、それらの日の後」、「立てようとする契約はこれである、と主が言われ」ます。「わたしの律法を」あなたがたの「思いの中に入れ」、あなたがたの「心に書きつけ」ます（ヘブル八・一〇）。それでは、神は私たちに、「絶えず祈」るように（第一テサロニケ五・一七）命じておられるでしょうか。「いつも喜んで」いるように（第一テサロニケ五・一六）命じておられるでしょうか。神が聖なる方であるように、「聖なる者にな」るように（第一ペテロ一・一五～一六）命じておられるでしょうか。それで十分です。神は、まさにこのことを私たちのうちに行ってくださいます。神の言葉どおり、私たちの身になるのです（ルカ一・三八）。

（四）　けれども、もしこれらのことがそのとおりなら、次のような人々をどう考えるべきか、迷うことはありません。教会のどの時代にも、神の命令のいくつかを変えたり、ほかのものに置き換えたりしようとした人々がいました。彼らの公言によれば、神の御霊の特別な導きによってです。キリストはここで、そのような主張をすべて判断するための、誤ることのない基準を与えておられます。キリスト教は、命令としても約束としても、神の道徳律法全体を含んでいます。ですから、キリストの言葉に聞くなら分かるとおり、キリスト教は、神のあらゆる経綸の最後のものです。神がそのように定めておられるのです。このあとに来るものは、ほかにありません。これは、万物の完成まで続くのです。したがって、そのような新しい啓示はみな、サタンから出たものであって、神から出たも

のではありません。もっと完全な別の経綸があるという主張は、みな当然くずれ去ります。「天地は滅びるでしょう」（マタイ二四・三五）。しかし、この「言葉は滅びることがありません」（マタイ二四・三五）。

【三】 最も小さいいましめの一つでも破る者

（一）「それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるでしょう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるでしょう」（マタイ五・一九）。

律法を説くことを、非難の的にする人々がいます。いったい、彼らはだれなのでしょうか。何者なのでしょうか。彼らは、自分たちの非難がだれの上に降りかかるのか、分からないのでしょうか。最後にはだれの頭に落ちかかるのか、分からないのでしょうか。このことで私たちを拒む者はだれでも、私たちをおつかわしになったかたを拒むのです（ルカ一〇・一六）。主は、世をさばくためではなく、救うために来られました（ヨハネ三・一七）。「福音によっていのちと不死とを明らかに示」すために、わざわざ来られたのです（第二テモテ一・一〇）。そのときでさえ、主のように律法を説いた人が、かつていたでしょうか。キリストがこの言葉で説いておられる以上に、はっきりと、厳しく、律法を説くことのできる人がいるでしょうか。そして、この言葉を改めることのできる人が、だれかいるでしょうか。説教の仕方を神の御子に教えることのできる人が、だれかいるでしょうか。御子が父から受けた使信を伝える、もっとよい方法を、だれが御子に教えるのでしょうか。

（二）「これらの最も小さいいましめの一つでも破り」（マタイ五・一九）。すなわち、これらのいましめのうちで最も小さいものの一つでも破る者は、ということです。注意すべきことに、私たちの主は、「これらのいましめ」（マタイ五・一九）という言葉を、律法と同じ意味で用いておられます。あるいは、律法と預言者と同じ意味で用いておられます。この二つは同じことです。預言者たちは、律法に何も付け加えず、ただ、聖霊に感じて（第二ペテロ一・二一）、律法を告げ、説明し、強く説いただけだからです。

「これらの最も小さいいましめの一つでも破」る者は（マタイ五・一九）。とりわけ、故意に、あるいは思い上がって破る場合です。

「これらの最も小さいいましめの一つ」（マタイ五・一九）、すなわち、これらのいましめのうちで最も小さいものの一つです。ここで、もう一つの言い訳が断たれています。多くの人々は、神を欺くことはできないのに、この言い訳によって、みじめにも自分の魂を欺いています。罪人は言います。「この罪は、小さいではないか（創世記一九・二〇）。主はこの事で、私をゆるしてくださるのではないか（列王紀下五・一八）。私は律法のもっと重要な事柄では（マタイ二三・二三）、罪を犯していないのだから、主はきっと、このことを厳しくとがめたりはなさらないだろう」。むなしい望みです。人間的な言い方をすれば、これは大きな戒め、あれは小さな戒め、と呼ぶことはできます。けれども、実際にはそうではありません。言葉を正確に使うなら、小さな罪などというものはありません。あらゆる罪は、聖く完全な律法にそむくことであり、天の偉大な主権者を侮辱することだからです。

（三）「またそうするように人に教えたりする者は」（マタイ五・一九）。ある意味では、こう言うことができます。どんな戒めであれ、公然と破る者はだれでも、ほかの人々に同じことを教えているのです。模範は語るからです。しかも多くの場合、教えよりも大きな声で語るのです。この意味で、明らかに、公然と酒に酔う者はみな、酩酊を教える教師です。安息日を破る者はみな、主の日を汚すことを、絶えず隣人に教えているのです。けれども、それだけではありません。習慣的に律法を破る者は、ここでとどまって満足することは、めったにありません。その人はたいてい、模範によってだけでなく言葉によっても、ほかの人々に同じことをするように教えます。とりわけ、かたくなになり（箴言二九・一）、懲しめを憎むとき（箴言一二・一）はそうです。そのような罪人は、まもなく罪の弁護者になります。捨てまいと決めているものを弁護し、離れようとしない罪の言い訳をします。こうして、自分の犯すあらゆる罪を、じかに教えるのです。

「天国で最も小さい者と呼ばれるでしょう」（マタイ五・一九）。すなわち、天国に何の分も持たない、ということです。その人は、地上にある天国とは無縁です。その嗣業に何の分け前もありません。あの「義と、平和と、聖霊における喜び」に（ローマ一四・一七）、少しもあずかっていないのです。したがって、やがて現されようとする栄光にも（ローマ八・一八）、何の分も持つことができません。

（四）ある人々は、このように「これらの最も小さいいましめの一つ」（マタイ五・一九）でも破り、ほかの人々にも破るように教えます。そういう人々でさえ、「天国で最も小さい者と呼ばれる」のです（マタイ五・一九）。キリストと神との国に、何の分も持たないのです（エペソ五・五）。このような人々でさえ、「外のやみに」投げ込まれ、「そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりする」のです（マタイ八・一二）。そうであるなら、私たちの主がこの言葉で、何よりもまず念頭に置いておられる人々は、どこに現れることになるでしょうか。それは、神からつかわされた教師という肩書きを持ちながら、自分で神の戒めを破る人々です。そうです、ほかの人々にもそうするように公然と教え、生活においても教理においても腐敗している人々です。

（五）このような人々には、いくつかの種類があります。第一の種類は、故意の、習慣的な罪の中に生きている人々です。普通の罪人でさえ、その模範によって教えるのです。まして罪深い教役者は、なおさらそうです。たとえ自分の罪を弁護したり、言い訳したり、軽く見せようとしたりしなくても、そうなのです。もしそうするなら、その人はまさに人殺しです。そうです、自分の会衆を殺す、人殺しの総大将です。その人は、死の領域を人で満たします。その人は、やみの君の最もえり抜きの道具です。その人がこの世を去るとき、「下の陰府は」その人のために「動いて」、その人の「来るのを迎え」ます（イザヤ一四・九）。また、その人が底知れぬ所に（黙示録二〇・一）沈んでいくときには、必ず大勢の人を引きずり込んでいきます。

（六）これに次ぐのは、人のよい、善良な種類の人々です。彼らは、気楽で、害のない生活を送ります。外の罪にも、内の聖性にも、わずらわされることがありません。どちらの方向にも目立たない人々です。宗教的であることでも、無宗教であることでも目立ちません。公にも私的にも、たいへん規則正しい生活をしていますが、隣人たちより少しでも厳格であろうとはしません。この種の教役者が破るのは、神の最も小さい戒めの一つや、いくつかだけではありません。神の律法の中で、敬虔の力にかかわる、大きく重要な部分をすべて破るのです。また、次のことを私たちに求める部分を、すべて破るのです。「地上に宿っている間を、おそれの心をもって過ごす」こと（第一ペテロ一・一七）。「恐れおののいて自分の救の達成に努め」ること（ピリピ二・一二）。いつも「腰に帯をしめ、あかりをともして」いること（ルカ一二・三五）。「狭い戸口からはいるように努め」ること、すなわち苦闘することです（ルカ一三・二四）。そして、その人は、生活のあり方全体と説教の大筋とによって、人々にそうするように教えます。その説教は、いつも、心地よい夢の中にいる人々をなだめる方向に向かいます。自分はクリスチャンだと思い込んでいるのに、実はそうでない人々をです。その人の務めに連なるすべての人に、このまま眠り続けて休んでいるように説き勧めるのです。ですから、その人も、その人に従う人々も、共にとこしえの燃える火の中で（イザヤ三三・一四）目をさますとしても、不思議ではありません。

（七）けれども、これらすべての上に、キリストの福音の敵の最上位にいる人々がいます。それは、公然と、はっきりと、律法そのものを「さばき」（ヤコブ四・一一）、「律法をそし」る人々です（ヤコブ四・一一）。彼らは、戒めを一つだけ破るように教えるのではありません。最も小さいものであれ、最も大きいものであれ、一つだけではなく、すべての戒めを一挙に破るように人々に教えるのです。「破る」の原語はリューサイ（λῦσαι）で、解く、ゆるめる、義務を解き放つ、という意味です。彼らは、何の包み隠しもなく、はっきりとこう教えます。「私たちの主は、律法をどうしたか。廃したのだ。義務はただ一つ、信じることだけだ。命令はみな、今の時代にはふさわしくない。律法が何を求めても、今ではだれも、一歩も進む必要はない。一文も施す必要はない。一口でも食べたり控えたりする必要はないのだ」。これは実に、傲然とことを運ぶことです。私たちの主に面とむかって逆らい（ガラテヤ二・一一）、主はつかわされて伝えるべき使信の伝え方をご存じなかった、と言うことです。主よ、どうぞ、この罪を

彼らに負わせないでください（使徒七・六〇）。父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです（ルカ二三・三四）。

（八） この強い惑わしに伴う事情の中で、何より驚くべきことは、次のことです。その惑わしに身をゆだねた人々は、キリストの律法をくつがえすことによって、キリストをあがめていると本気で信じているのです。キリストの教えを壊しながら、キリストの務めを光栄あるものとしていると（ローマ一一・一三）、本気で信じているのです。そうです、彼らがキリストをあがめるのは、ちょうどユダがしたのと同じです。ユダは、「先生、いかがですか」と言って、イエスに接吻したのです（マタイ二六・四九）。ですから、キリストは、彼らの一人一人に向かって、同じように正当にこう言うことができます。「あなたは接吻をもって人の子を裏切るのですか」（ルカ二二・四八）。キリストの血について語りながら、その冠を奪う人がいます。福音を推し進めるという口実で、キリストの律法のどこかを軽んじる人がいます。それは、接吻をもってキリストを裏切ることにほかなりません。実際、信仰を説くのに、直接にせよ間接にせよ、従順のどれかの部分を退けるような説き方をする人がいます。そういう人はだれも、この非難を免れることはできません。キリストを説くのに、神の戒めの最も小さいものを、どんな形であれ廃したり弱めたりするような説き方をする人も、同じです。

（九） 確かに、「神に選ばれた者たちの信仰」を（テトス一・一）、尊びすぎるということはありえません。そして、私たちはみな、こう宣言しなければなりません。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのです」（エペソ二・八）。「決して行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです」（エペソ二・九）。悔い改めるすべての罪人に向かって、声を上げて叫ばなければなりません。「主イエス」キリスト「を信じなさい。そうしたら、あなたは救われます」（使徒一六・三一）。けれども同時に、私たちは、すべての人に次のことを知らせるように心がけなければなりません。私たちが尊ぶのは、愛によって働く信仰だけです（ガラテヤ五・六）。また、私たちが信仰によって救われるのは、罪の罪責からだけでなく、罪の力からも救い出されるかぎりにおいてです。また、私たちが「信じなさい。そうしたら、あなたは救われます」（使徒一六・三一）と言うとき、それは、次のような意味ではありません。「信じなさい。そうしたら、あなたは、間に何の聖性もはさまずに、罪から天国へ一足飛びに移ります。信仰が聖性の代わりをします」。そうではなく、こういう意味です。「信じなさい。そうしたら、あなたは聖い者となります。主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたは平安と力とを共に得ます。あなたは、自分の信じる方から力を得て、罪を足の下に踏みつけます。心をつくし、主なるあなたの神を愛し、力をつくして神に仕える力を得ます（マルコ一二・三〇）。あなたは、『耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求める』力を得ます（ローマ二・七）。あなたは、神のすべての戒めを、最も小さいものから最も大きいものまで、行いもし、教えもします。あなたは、言葉によってだけでなく生活によっても、それを教えます。こうして、『天国で大いなる者と呼ばれ』ます（マタイ五・一九）」。

【四】 律法学者やパリサイ人の義にまさる義

（一） 私たちは、天国へ、すなわち光栄とほまれと朽ちぬものとへ（ローマ二・七）至る道として、ほかの道を教えるかもしれません。それがどんな道であっても、実は滅びに至る道です（マタイ七・一三）。それを信仰の道と呼ぼうと、ほかのどんな名で呼ぼうと、そうです。その道は、最後に人に平安をもたらしません。主はこう言われるからです。「わたしは言っておきます。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできません」（マタイ五・二〇）。

律法学者は、私たちの主に最も根強く、最も激しく反対した人々の一部として、新約聖書にたびたび出てきます。英語の呼び名は「書く人」を意味します。けれども、彼らは、その呼び名から思わされるような書記、すなわち書くことだけに携わる人々ではありませんでした。また、彼らは、私たちが普通に言う意味での法律家でもありませんでした。もっとも、英語の聖書は、ノミコイ（νομικοί）という語を「法律家」と訳しています。彼らの職務は、私たちの間の法律家の職務とは、何の共通点もありませんでした。彼らが通じていたのは、

神の律法であって、人の法律ではありませんでした。神の律法こそ、彼らの研究するものでした。律法と預言者を朗読し、解き明かすこと、とりわけ会堂でそうすることが、彼らの本来の固有の務めでした。彼らは、ユダヤ人の間の、通常の定まった説教者でした。ですから、原語の意味に注意を払うなら、この語を「神学者」と訳してもよいでしょう。この人々は、神学を職業としていたからです。また、彼らはたいてい、（その名が文字どおり示すとおり）文字の人、すなわち学問のある人々でした。当時のユダヤ人の国で、学識において最も重んじられていた人々だったのです。

（二）　パリサイ人は、ユダヤ人の中の、非常に古い一派、すなわち一団の人々でした。その名は、もともとヘブル語のパラシュ（פָּרַשׁ）という語から来ています。これは、分ける、区別する、という意味です。とはいえ、彼らが国民の教会から正式に分離したとか、その中に分裂を起こしたとかいうのではありません。彼らはただ、生活がほかの人々より厳格で、ふるまいがほかの人々より几帳面であることで、区別されていただけです。彼らは、ごく細かい点に至るまで律法に熱心でした。はっか、いのんど、クミンの十分の一まで、宮に納めていたのです（マタイ二三・二三）。そのために、彼らはすべての民から尊ばれ、一般に最も聖い人々と見なされていました。

律法学者の多くは、パリサイ派に属していました。たとえば、パウロ自身がそうです。パウロは、律法学者となるために教育を受けました。初めはタルソの大学で、その後エルサレムで、ガマリエルのひざもとで学んだのです（使徒二二・三）。ガマリエルは、当時その国にいた最も学識のある律法学者、すなわち律法の教師の一人でした。そのパウロが、議会の前で、自分についてこう言っています。「わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子です」（使徒二三・六）。また、アグリッパ王の前では、こう言っています。「わたしは、わたしたちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活をしていたのです」（使徒二六・五）。また、律法学者の全体が、たいていパリサイ人を重んじ、パリサイ人と歩調を合わせて行動していました。ですから、私たちの救い主は、両者を多くの点で同じように扱うべきものとして、たびたび並べて語っておられます。この箇所で両者が並べて挙げられているのは、宗教を最も際立って公言する人々としてであるようです。前者は最も賢い人々と見なされ、後者は最も聖い人々と見なされていました。

（三）　「律法学者やパリサイ人の義」が（マタイ五・二〇）、実際にどのようなものであったかを見定めるのは、難しくありません。私たちの主は、彼らの一人が自分について述べた、確かな記録を残しておられます。その人は、自分の義を、はっきりと詳しく描いています。その一部でも言い落としたとは考えられません。その人は確かに、「祈るために宮に上った」のです（ルカ一八・一〇）。けれども、自分の徳にすっかり心を奪われていたので、何のために来たのかを忘れてしまいました。注目すべきことに、その人は本当の意味ではまったく祈っていません。自分がどれほど賢く善い者であるかを、神に告げているだけです。「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています」（ルカ一八・一一～一二）。ですから、その人の義は、三つの部分から成っていました。第一に、その人は、自分は「ほかの人たちのような」者ではない、と言います（ルカ一八・一一）。暴利をむさぼる者でも、不正な者でも、姦淫をする者でもなく、「この取税人のような人間でもない」と言うのです（ルカ一八・一一）。第二に、「わたしは一週に二度断食して」いる、と言います（ルカ一八・一二）。そして第三に、「全収入の十分の一をささげてい」る、と言います（ルカ一八・一二）。

「ほかの人たちのような」者ではない（ルカ一八・一一）。これは小さな点ではありません。だれもがこう言えるわけではないのです。これは、その人がこう言っているのと同じです。「私は、習慣というあの大きな激流に、押し流されるままにはなりません。習慣によってではなく、道理によって生きています。人々の手本によってではなく、神の言葉によって生きています。私は、暴利をむさぼる者でも、不正な者でも、姦淫をする者でもありません。これらの罪は、神の民と呼ばれる人々の間でさえ、ありふれていますが、私は違います。（とりわけ、暴利をむさぼることは、国の隅々にまで満ちています。これは、法にかなった一種の不正であり、人間のどんな法律でも罰することができません。他人の無知や窮乏につけこんで利益を得ることです。）また、この取税人のような人間でもあ

りません。公然の罪や思い上がった罪を犯してはいません。外に現れる罪人ではありません。生活もふるまいも非の打ちどころのない、公正で正直な人間です」。

（四）「わたしは一週に二度断食して」います（ルカ一八・一二）。この言葉には、私たちが初めに気づくよりも多くのことが含まれています。厳格なパリサイ人はみな、毎週の断食を守っていました。すなわち、毎週月曜日と木曜日です。月曜日には、彼らの言い伝えによればこの日にモーセが二枚の石の板を受けたので、それを記念して断食しました。その板は、神が指をもって書かれたものです（出エジプト三一・一八）。木曜日には、モーセが、民が金の子牛の周りで踊るのを見て、その板を手から投げうったことを記念して（出エジプト三二・一九）、断食しました。これらの日には、午後三時まで、何の食物もとりませんでした。それは、宮で夕べのいけにえをささげ始める時刻でした。その時刻まで、彼らは宮の中に、その片隅や部屋や庭のどこかに、とどまっているのが習慣でした。あらゆるいけにえを手伝い、あらゆる公の祈りに加わる用意をしておくためです。その間の時間の一部を、彼らはいつも、神への個人的な祈りに用いました。残りは、聖書を調べること、すなわち律法と預言者を読み、それを思いめぐらすことに用いていました。パリサイ人の義の第二の部分である、「わたしは一週に二度断食して」いる（ルカ一八・一二）という言葉には、これだけのことが含まれているのです。

（五）「全収入の十分の一をささげています」（ルカ一八・一二）。パリサイ人は、これをこの上なく几帳面に行いました。最も取るに足りないものさえ、除こうとはしませんでした。そうです、はっか、いのんど、クミンさえ除きませんでした（マタイ二三・二三）。神に当然属すると信じるものは、最も小さな部分も、手もとに残そうとしませんでした。毎年、全財産のまるまる十分の一をささげ、また、何であれ、すべての収益の十分の一をささげたのです。

そうです、厳格なパリサイ人は（古代ユダヤの文書に通じた人々がたびたび指摘してきたとおり）、財産の十分の一を、祭司とレビ人を通して神にささげるだけでは満足しませんでした。さらにもう十分の一を、貧しい人々を通して神にささげました。しかも、それを絶えず行ったのです。彼らは、持っているすべてのものから、いつも十分の一としてささげていたのと同じ割合を、施しとして与えました。そして、これもまた、この上なく几帳面に計算しました。どの部分も手もとに残さず、神のものを神にすっかり返すためです（マタイ二二・二一）。彼らは、これを神のものと見なしていたのです。ですから、全体として、彼らは毎年、持っているすべてのもののまるまる五分の一を、手放していたのです。

（六）　これが、「律法学者やパリサイ人の義」でした（マタイ五・二〇）。それは多くの点で、多くの人がそれについていつもいだいてきた考えを、はるかに越える義でした。けれども、こう言う人もいるでしょう。「それはみな、偽りの見せかけにすぎなかった。彼らはみな、偽善者の集まりだったのだから」。疑いもなく、彼らのうちのある者はそうでした。本当は宗教をまったく持たず、神を恐れることも、神を喜ばせたいと願うこともない人々でした。彼らは、神からの誉を少しも気にかけず（ヨハネ五・四四）、ただ人のほまれだけを気にかけていました（ヨハネ一二・四三）。私たちの主が、多くの機会に、あれほど厳しく罪に定め、あれほど鋭くとがめておられるのは、この人々です。けれども、多くのパリサイ人が偽善者であったからといって、すべてがそうであったと考えてはなりません。実際、偽善は、パリサイ人の性格にとって、決して本質的なものではありません。偽善は、彼らの派を見分けるしるしではありません。私たちの主の説明によれば、それはむしろ、次のことです。彼らは、「自分を義人だと自任して他人を見下げている」のです（ルカ一八・九）。これこそ、彼らの本当の記章です。けれども、この種のパリサイ人は、偽善者ではありえません。その人は、普通の意味で誠実であるに違いありません。そうでなければ、「自分を義人だと自任」することはできないでしょう（ルカ一八・九）。ここで神に向かって自分をほめていたこの人は、疑いもなく、自分を義人だと思っていました。したがって、その人は偽善者ではありませんでした。自分に何の不誠実も自覚していなかったのです。その人はこのとき、思っているとおりのことを神に語ったのです。すなわち、自分はほかの人々よりはるかにすぐれている、と。

けれども、ほかに例がないとしても、パウロの例だけで、このことをまったく疑いのないものにするのに十分です。パウロは、クリスチャンになってから、こう言うことができました。「わたしはまた、神に対しまた人に対して、良心に責

められることのないように、常に努めています」（使徒二四・一六）。それだけでなく、パリサイ人であったときのことについてさえ、こう言うことができたのです。「兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがって行動してきました」（使徒二三・一）。ですから、パウロは、クリスチャンであったときと同じように、パリサイ人であったときにも誠実でした。パウロは、かつて迫害していた信仰を宣べ伝えていたとき（ガラテヤ一・二三）、偽善者ではありませんでした。教会を迫害していたときにも（ピリピ三・六）、同じように偽善者ではなかったのです。ですから、「律法学者やパリサイ人の義」には（マタイ五・二〇）、次のことも加えましょう。自分は義人であり、すべてのことにおいて「神に仕えている」のだという、誠実な確信です（ヨハネ一六・二）。

（七）それでも、私たちの主は言われます。「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできません」（マタイ五・二〇）。これは厳かで重い宣言です。キリストの名で呼ばれる人はみな、これをまじめに深く考えるべきです。けれども、私たちの義がどのようにして彼らの義にまさりうるかは、あとで問うことにしましょう。その前に、私たちが今、彼らの義に達しているかどうかを調べてみましょう。

第一に、パリサイ人は「ほかの人たちのような」者ではありませんでした（ルカ一八・一一）。外面において、際立って善い人でした。私たちはそうでしょうか。私たちには、少しでも人と違っていようとする勇気があるでしょうか。むしろ、流れのままに泳いでいるのではないでしょうか。人と違って見られたくないばかりに、宗教も道理も共に投げ捨ててしまうことが、たびたびあるのではないでしょうか。救いの道から外れることよりも、流行から外れることのほうを、しばしば恐れているのではないでしょうか。私たちには、潮の流れに逆らい、世に逆らって走り、「人間に従うよりは、神に従う」（使徒五・二九）勇気があるでしょうか。そうでなければ、パリサイ人は、まさに第一歩で私たちを置き去りにします。私たちが再び彼に追いつけるなら、まだよいほうです。

けれども、もっと身近に迫りましょう。私たちは、パリサイ人の第一の申し立てを、神に向かって用いることができるでしょうか。その申し立ては、要するにこうです。「私は何の害も行いません。外に現れる罪の中に生きていません。自分の心にとがめられるようなことは、何もしていません」。あなたは、していないでしょうか。それは確かでしょうか。自分の心にとがめられるような習慣の中に、生きていないでしょうか。あなたは、姦淫をする者ではないかもしれません。言葉においても行いにおいても、不品行ではないかもしれません。けれども、不正な者ではないでしょうか。正義の、またあわれみの、大いなる尺度はこうです。「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりに」しなさい（ルカ六・三一）。あなたは、この基準に従って歩んでいるでしょうか。人からしてほしくないことを、だれかにすることは、決してないでしょうか。いや、あなたは、はなはだしく不正な者ではないでしょうか。暴利をむさぼる者ではないでしょうか。売るときにも買うときにも、だれかの無知や窮乏につけこんで、利益を得てはいないでしょうか。あなたが商売をしているとします。あなたは、売る品の本当の値打ち以上のものを、要求したり受け取ったりしていないでしょうか。物を知らない人から、物を知っている人よりも多く、要求したり受け取ったりしていないでしょうか。小さな子供から、経験を積んだ商人よりも多く、要求したり受け取ったりしていないでしょうか。もしそうしているなら、なぜあなたの心はあなたをとがめないのでしょうか。あなたは、厚かましく暴利をむさぼる者です。差し迫った必要の中にいる人から、品物の通常の値段以上のものを要求していないでしょうか。その人は、あなただけが与えることのできる物を、しかもすぐに、手に入れなければならないのです。もしそうしているなら、これもまた、まぎれもない暴利です。実際、あなたは、パリサイ人の義に達していません。

（八）第二に、パリサイ人は（その意味を私たちの普通の言い方で表すなら）、あらゆる恵みの手段を用いました。彼は、たびたび、しかも長く、毎週二度断食しました。同じように、あらゆるいけにえに出席しました。公の祈りにも個人の祈りにも、また聖書を読むことにも聞くことにも、たゆみませんでした。あなたは、ここまでしているでしょうか。たびたび、しかも長く、一週に二度、断食しているでしょうか。していないのではないかと思います。少なくとも週に一度、「一年のすべての金曜日に」断食しているでしょうか（祈祷書「前夜祭・

断食・節制の日の表」）。（私たちの教会は、すべての会員に、はっきりと断固としてそうするように命じています。これらの日を、前夜祭や四旬節の四十日と同じく、断食または節制の日として守るように命じているのです。）一年に二度は断食しているでしょうか。私たちの中には、これさえ申し立てられない人がいるのではないかと思います。キリスト教のいけにえに出席し、それにあずかる機会を、一つも逃さずにいるでしょうか。自分をクリスチャンと呼びながら、それにまったく無頓着な人が、どれほど多いことでしょうか。何か月も、おそらくは何年も続けて、あのパンを食べず、あの杯から飲まない人が、どれほど多いことでしょうか。あなたは、毎日、聖書を聞くか、あるいは読んで思いめぐらしているでしょうか。大いなる会衆と共に祈りに加わっているでしょうか。機会があれば毎日、なければできるときにはいつでも、加わっているでしょうか。とりわけ、あなたが「覚えて、これを聖と」する日には（出エジプト二〇・八）、加わっているでしょうか。機会をつくり出そうと努めているでしょうか。人々があなたにむかって「われらは主の家に行こう」（詩篇一二二・一）と言うとき、あなたは喜ぶでしょうか。個人の祈りに熱心で、勤勉でしょうか。祈らずに一日を過ごすことは、一日もないでしょうか。むしろ、あなたがたのうちのある人々は、（パリサイ人のように）一日に何時間も祈りに費やすどころではありません。一時間でも十分だ、多すぎるほどだ、と思っているのではないでしょうか。あなたは、隠れた所においでになるあなたの父に（マタイ六・六）祈ることに、一日に、あるいは一週間に、一時間を費やしているでしょうか。いや、一か月に一時間でも費やしているでしょうか。生れてこのかた、一時間続けて個人の祈りをしたことがあるでしょうか。ああ、あわれなクリスチャンよ。そのパリサイ人が、さばきの場にあなたと共に立って、あなたを罪に定めるのではないでしょうか（マタイ一二・四一）。天が地よりも高いように（イザヤ五五・九）、その人の義は、あなたの義よりはるかに高いのです。

（九）第三に、パリサイ人は、持っているすべてのものから、十分の一をささげ、施しをしました。しかも、なんと惜しみなくしたことでしょう。ですから、彼は、私たちの言い方で言えば、多くの善を行う人でした。私たちは、この点で彼に達しているでしょうか。私たちのうち、だれが彼ほど良きわざに富んでいるでしょうか。私たちのうち、だれが全財産の五分の一を神にささげているでしょうか。元金からも、収益からもです。私たちのうち、だれが、（たとえば）年に百ポンドのうちから二十ポンドを、神と貧しい人々とにささげているでしょうか。五十ポンドのうちから十ポンドを、そして、それより多くても少なくても同じ割合で、ささげているでしょうか。あらゆる恵みの手段を用いること、神のあらゆる定めに出席すること、悪を避けて善を行うこと。これらにおいて、私たちの義は、いつになったら、少なくとも律法学者やパリサイ人の義に等しくなるのでしょうか。

（一〇）もっとも、たとえ私たちの義が彼らの義に等しくなるだけだとしても、それが何の益になるでしょうか。「わたしは言っておきます。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできません」（マタイ五・二〇）。けれども、私たちの義は、どのようにして彼らの義にまさることができるのでしょうか。クリスチャンの義は、どの点で、律法学者やパリサイ人の義にまさっているのでしょうか。クリスチャンの義は、第一に、その範囲において彼らの義にまさっています。パリサイ人の多くは、多くのことで厳格に几帳面でした。それでも、昔の人々の言伝えに（マタイ一五・二）力を得て、同じように重要なほかのことは、しなくてよいことにしていました。たとえば、彼らは第四の戒めを守ることにはきわめて几帳面で、安息日に麦の穂を手でもむことさえしませんでした（ルカ六・一～二）。けれども、第三の戒めを守ることには、まったく几帳面ではありませんでした。軽々しい誓いや、偽りの誓いさえ、ほとんど問題にしなかったのです。ですから、彼らの義は部分的でした。それに対して、本当のクリスチャンの義は、すべてにわたっています。本当のクリスチャンは、神の律法の一つの部分やいくつかの部分を守って、残りをなおざりにするのではありません。神のすべての戒めを守り、そのすべてを愛し、金よりも宝石よりも尊びます。

（一一）確かに、律法学者やパリサイ人の中には、すべての戒めを守ろうと努めた人々もいたかもしれません。そうであれば、彼らは、律法の義については、すなわち律法の文字によれば、落ち度のない者でした（ピリピ三・六）。けれども、それでもなお、クリスチャンの義は、律法学者やパリサイ人のこうした

義のすべてにまさっています。律法の文字だけでなく霊をも満たすからです。外の従順だけでなく、内の従順によっても満たすからです。この点で、すなわちその霊性において、クリスチャンの義は比べものになりません。これこそ、私たちの主が、この説教の全体を通して、あれほど詳しく証明しておられる点です。彼らの義は外面だけのものでした。クリスチャンの義は、内なる人にあります。パリサイ人は「杯と皿との外側はきよめ」ました（マタイ二三・二五）。クリスチャンは、内側が清いのです。パリサイ人は、良い生活を神にささげようと努めました。クリスチャンは、聖い心をささげようと努めます。前者は、罪の葉を、あるいは実をも、振り落としました。後者は、「斧」を「木の根もとに置」きます（マタイ三・一〇）。クリスチャンは、敬虔の外の形が、どれほど正確であっても、それだけでは満足しないからです。いのちが、御霊が、救いを得させる神の力が（ローマ一・一六）、魂の最も奥で感じられなければ、満足しないのです。

このように、害を行わないこと、善を行うこと、神の定めに出席すること（パリサイ人の義）は、すべて外のものです。それに対して、心の貧しさ、悲しみ、柔和、義に飢えかわくこと、隣人への愛、心の清さ（クリスチャンの義）は、すべて内のものです。平和をつくり出すこと（すなわち善を行うこと）や、義のために苦しむことでさえ、それに伴う祝福を受ける資格を持つのは、限られた場合だけです。それらがこうした内なる心の性質を含むかぎりにおいてです。すなわち、それらがこの心の性質から生れ、これを働かせ、これを強めるかぎりにおいてです。ですから、律法学者やパリサイ人の義は、外のものだけでした。それに対して、クリスチャンの義は、ある意味で、内のものだけである、と言うことができます。クリスチャンの行いも苦しみも、それ自体としては無に等しいからです。それらは、そこから生れてくる気質によってのみ、神の前に評価されるのです。

（一二）　ですから、クリスチャンという聖く尊い名を帯びているあなたは、だれであれ、次のことに気をつけなさい。第一に、あなたの義が、律法学者やパリサイ人の義に劣ることのないようにしなさい。「ほかの人たちのような」者であってはなりません（ルカ一八・一一）。勇気をもって、ひとりで立ちなさい。「手本に逆らって、際立って善い者」でありなさい。あなたが少しでも「多数に従」うなら、それは必ず「悪をおこな」うことになります（出エジプト二三・二）。習慣や流行ではなく、道理と宗教を、あなたの導き手としなさい。ほかの人々がどうしているかは、あなたには関係ありません。「ひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべき」なのです（ローマ一四・一二）。確かに、もしほかの人の魂を救うことができるなら、救いなさい。けれども、少なくとも一つの魂を、あなた自身の魂を救いなさい。死の道が広く、多くの人がそこを歩いているからといって（マタイ七・一三）、その道を歩いてはなりません。いや、まさにそのしるしによって、それが死の道だと分かるのです。あなたが今歩いている道は、広く、人通りの多い、流行の道でしょうか。それなら、その道は間違いなく滅びに至ります。ああ、付き合いで滅びてはなりません。悪をやめなさい。蛇の前から逃げるように、罪から逃げなさい。少なくとも、害を行ってはなりません。「罪を犯す者は、悪魔から出た者です」（第一ヨハネ三・八）。あなたは、そのような者の中に見いだされてはなりません。外の罪については、確かに神の恵みは、今でもあなたに対して十分です（第二コリント一二・九）。少なくとも、この点では、「神に対しまた人に対して、良心に責められることのないように」努めなさい（使徒二四・一六）。

第二に、神の定めについて、あなたの義が彼らの義に劣らないようにしなさい。あなたの仕事や体力が、一週に二度断食することを許さないとしても、自分の魂には誠実に向き合いなさい。そして、体力が許すかぎりたびたび断食しなさい。祈りの中で魂を注ぎ出す機会を、公のものも個人のものも、一つも逃してはなりません。あのパンを食べ、あの杯から飲む機会を、一つもなおざりにしてはなりません。それは、キリストのからだと血とにあずかることなのです（第一コリント一〇・一六）。熱心に聖書を調べなさい。できるかぎり読み、昼も夜もそれを思いなさい（詩篇一・二）。「キリストの使者」（第二コリント五・二〇）、すなわち「神の奥義を管理している者」（第一コリント四・一）が告げる、「和解の福音」（第二コリント五・一九）を聞く機会を、喜んですべてとらえなさい。あらゆる恵みの手段を用い、神のあらゆる定めに絶えず注意深く出席しなさい。そ

のようにして、「律法学者やパリサイ人の義」に（マタイ五・二〇）恥じない生き方をしなさい（少なくとも、それを越えられるようになるまでは）。

第三に、善を行うことにおいて、パリサイ人に劣ってはなりません。持っているすべてのものから、施しをしなさい。だれかが飢えているでしょうか。食べさせなさい。かわいているでしょうか。飲ませなさい。裸でしょうか。着物を着せなさい（マタイ二五・三五～三六）。あなたが世の富を持っているなら（第一ヨハネ三・一七）、あなたの善行を、わずかな割合に限ってはなりません。力の限りあわれみ深くありなさい。このパリサイ人と同じほどに、そうしてはいけない理由があるでしょうか。今、時のあるうちに、「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつく」りなさい（ルカ一六・九）。そうすれば、あなたが絶えるとき、彼らはあなたを「永遠のすまいに迎えてくれる」でしょう（ルカ一六・九）。あなたが絶えるときとは、この地上の幕屋がこわれるときのことです（第二コリント五・一）。

（一三） けれども、ここでとどまってはなりません。あなたの「義が律法学者やパリサイ人の義にまさ」るようにしなさい（マタイ五・二〇）。「律法をことごとく守」りながら、「その一つの点にでも落ち度があ」る（ヤコブ二・一〇）、という状態で満足してはなりません。神のすべての戒めを堅く守りなさい。そして、「すべての偽りの道を」心から「憎」みなさい（詩篇一一九・一二八）。神が命じられたことは、何でもすべて行いなさい。しかも、力をつくして行いなさい。あなたは、キリストから離れては何一つできません（ヨハネ一五・五）。けれども、あなたを強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができるのです（ピリピ四・一三）。

何よりも、清さと霊性において、あなたの義が彼らの義にまさるようにしなさい。どれほど正確な宗教の形も、あなたにとって何でしょうか。どれほど完全な外側の義も、何でしょうか。それらすべてよりも、もっと高く、もっと深く進みなさい。あなたの宗教を、心の宗教としなさい。心の貧しい者でありなさい。自分の目に、小さく、卑しく、取るに足りない、つまらない者でありなさい。あなたの「主キリスト・イエスにおける神の愛」に（ローマ八・三九）驚き、ちりにまで低くされなさい。まじめでありなさい。あなたも、すべての人の子らも、大きな淵の縁に立っています（ルカ一六・二六）。今にも、とこしえの栄光の中へか、とこしえの燃える火の中へか（イザヤ三三・一四）、落ち込もうとしているのです。このことを最も深く確信しなさい。そして、あなたの思いと言葉と行いの流れ全体が、その確信から流れ出るようにしなさい。柔和でありなさい。あなたの魂を、すべての人に対する温和と優しさと忍耐と寛容で満たしなさい。それと同時に、あなたのうちにあるすべてのものが、神を、いける神を慕ってかわくようにしなさい（詩篇四二・二）。神のみかたちに似た者として目ざめ、それに満ち足りることを、切に願うようにしなさい。神を愛し、すべての人を愛する者でありなさい。この心で、すべてのことを行い、すべてのことを忍びなさい。こうして、「律法学者やパリサイ人の義にまさ」りなさい（マタイ五・二〇）。そうすれば、あなたは「天国で大いなる者と呼ばれる」でしょう（マタイ五・一九）。

説教二十六　山上の説教（六）

自分の施しを、「見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないでしょう。だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならしてはなりません。よく言っておきます。彼らはその報いを受けてしまっています。あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせてはなりません。それは、あなたのする施しが隠れているためです。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう。また祈る時には、偽善者たちのようにしてはなりません。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好みます。よく言っておきます。彼らはその報いを受けてしまっています。あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう。また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈ってはなりません。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っています。だから、彼らのまねをしてはなりません。あなたがたの父」は、「求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのです。だから、あなたがたはこう祈りなさい。天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように。御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください。わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください」。国と力と栄光とは、とこしえにあなたのものだからです。アァメン。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるしてくださるでしょう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるしてくださらないでしょう」（マタイ六・一～一五）

（一）　前の章で、私たちの主は、内なる宗教を、そのさまざまな部分にわたって描かれました。主は、本当のキリスト教を形づくる魂の性向を、私たちの前に示されました。それは内なる気質です。「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」（ヘブル一二・一四）と言われる、あの聖性に含まれる気質です。また、それは心の思いです。この思いは、本来の泉から流れ出るときには、それ自体として本質的に善く、神に喜ばれるものです。本来の泉とは、キリスト・イエスによる神への生きた信仰のことです。この章で、主はさらに進んで、次のことを示されます。私たちのあらゆる行いも、清く聖い意図によって、聖く、善く、神に喜ばれるものとなりうるのです。それ自体としては善くも悪くもない行いでさえ、そうなのです。この意図なしに行われることは、何であれ神の前で何の価値もない、と主は詳しく宣言しておられます。それに対して、このように神にささげられた外のわざは、何であれ、神の目に非常に尊いのです。

（二）　主は、この意図の清さが必要であることを、まず、普通に宗教的な行いと見なされているものについて示されます。それらは、正しい意図をもって行われるなら、実際に宗教的な行いです。その一部は、普通、敬虔のわざと呼ばれます。残りは、愛のわざ、すなわちあわれみのわざと呼ばれます。後者のうちで、主はとくに施しを挙げられます。前者のうちでは、祈りと断食を挙げられます。けれども、これらについての指示は、愛のわざであれ、あわれみのわざであれ、あらゆるわざに同じように当てはめるべきです。

【一】　施しについて

（一）　まず第一に、あわれみのわざについてです。主は言われます。自分の施しを、「見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないでしょう」（マタイ六・一）。施しを「行わないように」（マタイ六・一）。ここでは施しだ

けが挙げられていますが、あらゆる愛のわざが含まれています。私たちが与えること、語ること、行うことで、隣人の益になるものは、みな含まれるのです。ほかの人が、体であれ魂であれ、何かの益を受けられるものは、みなそうです。飢えた人に食べさせること、裸の人に着せること、旅人をもてなし、助けること、病気の人や獄にいる人を訪ねることです。悩む人を慰めること、無知な人を教えること、悪い人に忠告すること、善を行う人を励まし、力づけることです。そのほかにもあわれみのわざがあれば、それも同じようにこの指示に含まれます。

（二）自分の施しを、「見られるために人の前で行わないように、注意しなさい」（マタイ六・一）。ここで禁じられているのは、ただ人の目の前で善を行うことではありません。ほかの人が私たちのすることを見るという、この事情だけでは、その行いは悪くも良くもなりません。禁じられているのは、人の前で、「見られるために」（マタイ六・一）、このねらいで、この意図だけからそれを行うことです。この意図だけから、と私は言います。場合によっては、これが私たちの意図の一部であってもよいからです。私たちは、自分の行いのいくつかが人に見られるように意図してもかまいません。それでも、その行いが神に喜ばれることはあるのです。私たちは、自分の光を人々の前に輝かそうと意図してもかまいません（マタイ五・一六）。ただし、良心が聖霊によって私たちにあかしをしているときです（ローマ九・一）。そのあかしとは、こうです。人々に良きわざを見させようとする私たちの究極の目的は、彼らが「天にいます」私たちの「父をあがめるように」することです（マタイ五・一六）。けれども、自分の栄光をねらって、どんな小さなことも行わないように注意しなさい。あなたがたのあわれみのわざの中に、人の賞賛を気にかける思いが少しも入り込まないように注意しなさい。自分の栄光を求め、人からの誉を得ようと少しでも意図するなら、このねらいで行われることは何であれ、何の値打ちもありません。それは主に対してなされたものではなく、主はそれを受け入れられません。あなたがたはこのことで、「天にいます」私たちの「父から報いを受けることがない」のです（マタイ六・一）。

（三）「だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならしてはなりません」（マタイ六・二）。「会堂」という語は、ここでは礼拝の場所を意味するのではありません。市場や取引所のような、人が公に集まる場所なら、どこでも意味するのです。大きな財産を持つユダヤ人の間では、とりわけパリサイ人の間では、よくあることでした。かなりの施しをしようとするとき、町の最も人目につく所で、自分の前でラッパを吹き鳴らさせたのです。その表向きの理由は、施しを受けさせるために、貧しい人々を呼び集めることでした。けれども、本当のねらいは、人にほめられることでした（マタイ六・二）。けれども、あなたは彼らのようになってはなりません。自分の前でラッパを吹き鳴らさせてはなりません。善を行うときに、見せびらかしてはなりません。ただ神からだけ来る誉を目指しなさい。人の賞賛を求める人々は、その報いを受けてしまっています（マタイ六・二）。彼らは、神からの賞賛を受けることはありません。

（四）「あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせてはなりません」（マタイ六・三）。これは、ことわざのような言い方です。その意味は、こうです。できるかぎりひそかに行いなさい。ともかくそれを行うことと両立するかぎり、ひそかに行いなさい（行わずにすませてはならないからです。ひそかにであれ公然とであれ、善を行う機会を一つも逃してはなりません）。また、最も効果のある仕方で行うことと両立するかぎり、ひそかに行いなさい。ここには、もう一つ例外を設けなければなりません。行った善を隠さないことで、自分がもっと多くの善を行えるようになるとします。あるいは、ほかの人がもっと多くの善を行うように奮い立たされるとします。心の中でそう確信しているなら（ローマ一四・五）、そのときは、隠さなくてもかまいません。そのときは、あなたの光を現し、「家の中のすべてのものを照させ」なさい（マタイ五・一五）。けれども、神の栄光と人々の益とのために、そうしないわけにいかない場合もあります。その場合を除いて、事柄の性質が許すかぎり、人に知られず、目に留まらないように行いなさい。「あなたのする施しが隠れているため」です（マタイ六・四）。「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・四）。それは、おそらくこの世においてでしょう。そのような例は、どの時代にも数多く記録されています。けれども、来るべき世においては、人と天使の大集会の前で、必ず報いてくださるのです。

【二】 祈りについて

（一） 愛のわざ、すなわちあわれみのわざから、私たちの主は、敬虔のわざと呼ばれるものに進まれます。主は言われます。「また祈る時には、偽善者たちのようにしてはなりません。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好みます」（マタイ六・五）。「偽善者たちのようにしてはなりません」（マタイ六・五）。ですから、偽善、すなわち不誠実こそ、祈りにおいて私たちがまず警戒すべきものです。心にもないことを口にしないように気をつけなさい。祈りとは、心を神に向かって上げることです。これがなければ、祈りの言葉はみな、ただの偽善です。ですから、祈ろうとするときにはいつも、ただ一つのねらいを持つようにしなさい。神と交わり、心を神に向かって上げ、神の前に心を注ぎ出すことです（サムエル記上一・一五）。偽善者たちのようであってはなりません。彼らは、「会堂や」、すなわち取引所や市場や、「大通りのつじに立って祈ることを好」みます（マタイ六・五）。「好む」とは、それを習いとしている、ということです。彼らは、人が最も多くいる所ならどこででも、「人に見せようとして」祈るのです（マタイ六・五）。これこそ、彼らがそこで繰り返した祈りの、ただ一つのねらいであり、動機であり、目的でした。「よく言っておきます。彼らはその報いを受けてしまっています」（マタイ六・五）。彼らは、天にいますあなたがたの父からは、何の報いも期待できません。

（二） けれども、私たちを天の報いから断ち切るのは、人の賞賛に目を向けることだけではありません。敬虔のわざであれ、あわれみのわざであれ、私たちのわざに神の祝福を期待する余地をなくすのは、それだけではないのです。この世のどんな報いをねらっても、意図の清さは同じように壊されます。私たちが利得や利益をねらって祈りを唱え、神の公の礼拝に出席し、貧しい人を助けるとします。それは、賞賛をねらって行ったのと少しも変わらず、神に喜ばれません。この世のどんなねらいも、永遠のこちら側にあるどんな動機も、行いを主に忌みきらわれるものにします。神の栄光と、神のための人々の幸いとを推し進めることと以外のねらいは、みなそうです。どんな行いも、人の目にどれほど美しく見えても、そうなるのです。

（三） 「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい」（マタイ六・六）。大いなる会衆の中で（詩篇二二・二五）、公に神をあがめ、神に祈り、神をほめたたえるべきときもあります。けれども、自分の求めるところを、もっと詳しく、もっと細かく神に申し上げたいときがあります（ピリピ四・六）。それが夕べであれ、朝であれ、真昼であれ（詩篇五五・一七）、「自分のへやにはいり、戸を閉じ」なさい（マタイ六・六）。できるかぎり、人目を避けなさい。（ただ、へやがあってもなくても、人目を避けられても避けられなくても、祈りをおろそかにしてはなりません。できることなら、神のほかにだれも見ていないときに、神に祈りなさい。それができないなら、それでも神に祈りなさい。）こうして、「隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい」（マタイ六・六）。神のみ前に心を注ぎ出しなさい（詩篇六二・八）。「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・六）。

（四） 「また、祈る場合」（マタイ六・七）、たとえ隠れた所であっても、「異邦人のように、くどくどと祈ってはなりません」（マタイ六・七）。原語は、メー・バッタロゲーセーテ（Μὴ βατταλογήσητε）です。何の意味もない言葉を、たくさん用いてはなりません。同じことを何度も繰り返して言ってはなりません。異邦人のように、祈りの実はその長さによると考えてはなりません。「彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思って」いるのです（マタイ六・七）。

ここでとがめられているのは、ただ祈りが長いことではありません。短いことがとがめられていないのと同じです。そうではなく、第一に、意味のない長さです。多くを語りながら、ほとんど何も、あるいはまったく何も意味しないことです。また、むなしい繰り返しを用いることです。繰り返しがすべていけないのではありません。私たちの主ご自身、三度、同じ言葉で祈られたからです（マタイ二六・四四）。とがめられているのは、異邦人がしたような、むなしい繰り返しです。彼らは、自分たちの神々の名を何度も何度も唱えました。クリスチャンの間でも（俗にそう呼ばれているだけですが）、同じことが行われています。ローマ・カトリック教徒の間だけではありません。彼らは、同じ一連の祈りを何度も

何度も唱えますが、自分の語ることを少しも感じていないのです。第二に、言葉かずが多ければ聞きいれられると考えることです（マタイ六・七）。神は祈りをその長さで測り、言葉の最も多い祈り、神の耳に最も長く響く祈りを最も喜ばれる、と思い込むことです。これらは、迷信と愚かさの例です。キリストの名で呼ばれるすべての人は、これを異邦人に任せておくべきです。栄光の福音の輝きに一度も照らされたことのない人々に、任せておくべきなのです（第二コリント四・四）。

（五）「だから、彼らのまねをしてはなりません」（マタイ六・八）。キリスト・イエスにある神の恵みを味わったあなたがたは、十分に確信しています。「あなたがたの父」は、「求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのです」（マタイ六・八）。ですから、あなたがたが祈る目的は、神に知らせることではありません。神があなたがたの必要をまだご存じないかのように、知らせるのではないのです。むしろ、あなたがた自身に知らせることです。その必要を感じる思いを、もっと深く心に刻むためです。また、あなたがたの必要をすべて満たすことのできるただひとりの方に、自分が絶えず頼っていることを、もっと深く心に感じるためです。祈りは、神を動かすためというより、あなたがた自身を動かすためです。神は、あなたがたが求めるよりも、いつももっと与えようとしておられます。あなたがた自身を動かすのは、神が備えてくださった良い物を、喜んで、すぐに受けられるようになるためです。

【三】 主の祈り

（一） 祈りの本当の性質と目的を教えられたあとで、私たちの主は、その例を付け加えられます。それは、あの神聖な祈りの形です。ここでは、おもにひな型として、すなわち私たちのあらゆる祈りの模範と基準として示されているようです。「だから、あなたがたはこう祈りなさい」（マタイ六・九）。それに対して、ほかの箇所では、主はまさにこの言葉を用いるように命じておられます。「彼らに言われた、『祈るときには、こう言いなさい』」（ルカ一一・二）。

（二） この神聖な祈りについて、全体として、次のことに目を留めることができます。第一に、この祈りは、私たちが道理にかなって、また罪を犯さずに祈り求めることのできるものを、すべて含んでいます。神に求める必要のあるもの、また神を怒らせずに求めることのできるものは、何一つ漏れていません。みな、直接にか間接にか、この包括的な祈りに含まれています。第二に、この祈りは、私たちが道理にかなって、また罪を犯さずに願うことのできるものを、すべて含んでいます。神の栄光のためになるものは、何でも含まれています。私たち自身だけでなく、天と地のあらゆる被造物にとって必要なもの、益になるものは、何でも含まれているのです。実際、私たちの祈りは、私たちの願いをはかる正しい試金石です。祈りの中に置くのがふさわしくないものは、願いの中に置くのもふさわしくありません。祈り求めてはならないものは、願ってもならないのです。第三に、この祈りは、神と人とに対する私たちの義務をすべて含んでいます。清く聖いことは何でも、神が人の子らに求められることは何でも、この祈りに言い表されているか、含まれています。神の目に喜ばれることは何でも、私たちが隣人の益となりうることは何でも、そうなのです。

（三） この祈りは、三つの部分から成っています。序言と、願いと、頌栄、すなわち結びです。序言の「天にいますわれらの父よ」（マタイ六・九）は、祈りの全体の土台を据えています。聞かれるという確信をもって祈るには、その前に、神についてまず知らなければならないことがあります。序言はそれを含んでいるのです。また、序言は、私たちがどのような気質をもって神に近づくべきかを、すべて指し示しています。私たちの祈りであれ生活であれ、神に受け入れられたいと願うなら、その気質こそ、何よりも欠かせないものです。

（四） 「われらの父よ」（マタイ六・九）。神が父であるなら、神は子らに対して善い方であり、愛に満ちた方です。ここに、祈りの第一の大きな理由があります。神は祝福しようとしておられます。私たちは祝福を求めましょう。「われらの父よ」（マタイ六・九）。それは、私たちの創造者、私たちの存在の造り主です。地のちりから私たちを起し、私たちに命の息を吹きいれ、こうして私たちを生きた者とされた方です（創世記二・七）。神が私たちを造られたのなら、求めましょう。神は、ご自分の手のわざに、どんな良い物も拒まれることはありませ

ん（詩篇八四・一一）。「われらの父よ」（マタイ六・九）。それは、私たちを守る方です。ご自分が与えたいのちを、日ごとに支えてくださる方です。その変わらない愛によって、私たちは今も、いつの瞬間も、命と息と万物とを受けています（使徒一七・二五）。ですから、ますます、はばかることなく神に近づきましょう。そうすれば、私たちは「あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受ける」ことができます（ヘブル四・一六）。何よりも、神は私たちの主イエス・キリストの父であり、主を信じるすべての者の父です。神は私たちを、「価なしに、神の恵みにより」、「イエスによるあがないによって」義としてくださいます（ローマ三・二四）。私たちのすべての罪を「ぬぐい去」り（詩篇五一・九）、私たちの「すべての」弱さを「いやし」てくださいました（詩篇一〇三・三）。子とすることと恵みとによって、私たちをご自分の子として受け入れてくださいました。また、私たちは「子であるのだから」、「わたしたちの心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送って」くださいました（ガラテヤ四・六）。また、私たちを「朽ちない種から」新たに生れさせ（第一ペテロ一・二三）、「キリスト・イエスにあって」新しく「造」ってくださいました（エペソ二・一〇）。ですから、私たちは、神がいつでも私たちの願いを聞きいれてくださることを知っています（ヨハネ一一・四二）。ですから、私たちは絶えず神に祈ります（第一テサロニケ五・一七）。私たちは、愛しているから祈るのです。そして、私たちが神を愛するのは、「神がまずわたしたちを愛してくださった」からです（第一ヨハネ四・一九）。

（五）「われらの父よ」（マタイ六・九）。今この方に呼ばわっている私だけの父ではなく、最も広い意味で、私たちの父です。神は、「すべての肉なる者の」霊の「神」であり、その父です（民数記一六・二二）。天使と人との父です。異教徒でさえ、神をそのような方と認めていました。パテール・アンドローン・テ・テオーン・テ（πατηρ ἀνδρῶν τε θεῶν τε）、すなわち人と神々との父と呼んだのです。神は宇宙の父であり、天と地にあるすべての家族の父です。ですから、神には、かたより見ることがありません（ローマ二・一一）。神は、ご自分の造られたすべてのものを愛しておられます。「主はすべてのものに恵みがあり、そのあわれみはすべてのみわざの上にあります」（詩篇一四五・九）。そして主は、おのれを恐れる者と、そのいつくしみを望む者とを喜ばれます（詩篇一四七・一一）。愛する御子によって神に信頼する人々を、喜ばれるのです。その人々は、自分が「その愛する御子によって」受け入れられていることを知っています（エペソ一・六）。けれども、「神がこのようにわたしたちを愛してくださったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきです」（第一ヨハネ四・一一）。そうです、すべての人を愛すべきです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった」からです（ヨハネ三・一六）。御子を死なせるほどに、愛してくださったのです。それは人々が「滅びないで、永遠の命を得るため」です（ヨハネ三・一六）。

（六）「天にいます」（マタイ六・九）。神は、いと高く、いと上なる方です（イザヤ五七・一五）。万物の上にいます、永遠にほむべき神です（ローマ九・五）。神は、天の円の上に座して、天と地のすべてのものを見ておられます。その目は、造られたものの全領域を見通しています。そうです、まだ造られていない夜の領域までも見通しているのです。神には、ご自分のわざがすべて知られています（使徒一五・一八）。あらゆる被造物のわざも、すべて知られています。それは、英語の聖書の言う「世の初めから」だけではありません（使徒一五・一八）。これは、貧しく、低く、弱い訳です。原語はアプ・アイオーノス（ἀπ᾽ αἰῶνος）で、永遠の昔から、とこしえからとこしえまで（詩篇九〇・二）、ということです。神は、人の子らだけでなく、天の万軍にも、驚きと畏れをもってこう叫ばせる方です。「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は」（ローマ一一・三三）。「天にいます」（マタイ六・九）。神は万物の主であり、支配者です。万物を見守り、治めておられます。あなたは、もろもろの王、もろもろの主の主、祝福に満ちた、ただひとりの力あるかたです（第一テモテ六・一五）。あなたは強く、大能を帯び（詩篇六五・六）、みこころにかなうすべての事を行われます（詩篇一一五・三）。あなたは全能者です。あなたが望まれるときにはいつでも、それを行う力があなたにあるからです。「天に」（マタイ六・九）。とりわけ天におられます。天はあなたの位です（イザヤ六六・一）。そこは、「あなたの栄光の」とりわけ「とどまる所」です（詩篇二六・八）。けれども、天にだけおられるのではありません。あなたは、天と地とに、すなわち空間の広がり全体に満

ちておられるからです（エレミヤ二三・二四）。「天も地も、あなたの栄光に満ちています。いと高き主よ、栄光があなたにありますように」（祈祷書「聖餐式」）。

ですから、私たちは「恐れをもって主に仕え」、畏敬をもって主を喜ぶべきです（詩篇二・一一）。ですから、私たちは、主なる王の目のもとに、そのみ前に絶えずいる者として、考え、語り、行うべきです。

（七）「御名があがめられますように」（マタイ六・九）。これは、この祈りそのものを形づくる六つの願いのうち、最初のものです。神の御名とは、神ご自身のことです。人に示されうるかぎりでの、神の本性のことです。ですから、それは神の存在と共に、神のあらゆる属性、すなわち完全さを意味します。まず、神の永遠性があります。それはとくに、エホバという、ほかのだれにも与えられない偉大な御名によって表されています。使徒ヨハネは、この御名をこう訳しています。ト・アルファ・カイ・ト・オーメガ、アルケー・カイ・テロス、ホ・オーン・カイ・ホ・エーン・カイ・ホ・エルコメノス（τὸ Ἄ καὶ τὸ Ὠ, ἀρχὴ καὶ τέλος, ὁ ὢν καὶ ὁ ἦν καὶ ὁ ἐρχόμενος）。すなわち、「アルパでありオメガ」、「初めであり終り」（黙示録一・八）、「今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者」です（黙示録一・八）。神の存在の満ちあふれがあります。それは、もう一つの偉大な御名、「わたしは、有って有る者」によって示されています（出エジプト三・一四）。神の遍在があり、神の全能があります。神は実に、物質の世界でただひとりの行為者です。あらゆる物質は、本質的に鈍く、自分では動かず、神の指に動かされるときにだけ動くからです。また、神は、見えるものと見えないものとを問わず、あらゆる被造物の働きの源です。被造物は、神の全能の力が絶えず流れ込み、働くのでなければ、働くことも存在することもできません。神の知恵があります。それは、見えるものから、すなわち宇宙のみごとな秩序から、はっきりと導き出されます。一体における三位、三位における一体があります。それは、書かれたみことばの、まさに最初の一行で、私たちに示されています。原語はバーラー・エロヒーム（בָּרָא אֱלֹהִים）で（創世記一・一）、文字どおりには「神々が創造した」です。複数の名詞が、単数の動詞と結びついているのです。また、それは、その後のあらゆる啓示の中でも示されています。その啓示は、すべての聖なる預言者と使徒たちの口を通して与えられたものです。神の本質的な清さと聖性があります。そして、何よりも神の愛があります。この愛こそ、神の栄光の輝きそのものです（ヘブル一・三）。

神が、すなわち神の御名が「あがめられ」（マタイ六・九）、栄光を帰されるように祈るとき、私たちは何を祈っているのでしょうか。神があるがままに知られるように、と祈っているのです。神を知ることのできるすべてのもの、すなわち知性あるすべての存在に知られるように祈るのです。その知識にふさわしい心の思いをもって知られるように祈るのです。また、上は天、下は地にあるすべてのものから、神がふさわしく敬われ、恐れられ、愛されるように祈っています。すべての天使と人から、そうされるように祈るのです。神は、まさにそのために、彼らを、永遠にご自分を知り、愛することのできる者として造られたのです。

（八）「御国がきますように」（マタイ六・一〇）。これは、前の願いと密接につながっています。神の御名があがめられるために、私たちは、神の国が、すなわちキリストの国が来るように祈るのです。この国が一人一人の人に来るのは、その人が「悔い改めて福音を信」じるときです（マルコ一・一五）。すなわち、その人が神に教えられて（ヨハネ六・四五）、自分自身を知るときです。それだけでなく、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストを知るときです（第一コリント二・二）。「永遠の命とは、唯一の、まことの神」と、神の「つかわされたイエス・キリストとを知ること」です（ヨハネ一七・三）。それと同じように、これを知ることが、地上で始まった神の国であり、信じる者の心に建てられた神の国です。「全能者にして主なる」神は、キリスト・イエスによって知られるとき、「王なる支配者であられ」ます（黙示録一九・六）。神は、ご自分の大いなる力をとって、万物をご自身に従わせられます（ピリピ三・二一）。神は、魂の中で、勝利の上にもなお勝利を得ようとして進んで行かれます（黙示録六・二）。万物をその足もとに従わせるまで（第一コリント一五・二七）、「すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」るまで（第二コリント一〇・五）、進んで行かれるのです。

やがて、神が御子に「もろもろの国を嗣業として」与え、「地のはてまでも」御子の「所有として与える」ときが来ます（詩篇二・八）。もろもろの国が「彼

の前にひれ伏し、もろもろの国民は彼に仕える」ときが来ます（詩篇七二・一一）。「主の家の山」、すなわちキリストの教会が、「もろもろの山のかしらとして堅く立」つときが来ます（イザヤ二・二）。「異邦人が全部救われるに至」り（ローマ一一・二五）、「イスラエル人は、すべて救われる」ときが来ます（ローマ一一・二六）。そのとき、「主は王となり、威光の衣をまと」っておられることが（詩篇九三・一）、明らかになります。主は、すべての人の魂に、もろもろの王の王、もろもろの主の主として（黙示録一九・一六）、現れてくださるのです。主の出現を待ち望むすべての人は（第二テモテ四・八）、主がそのときを早めてくださるように祈るのがふさわしいのです。主のこの国が、すなわち恵みの国が、すみやかに来て、地のすべての国をのみ尽くすように祈るのです。すべての人が主を王として受け入れ、その名を本当に信じて、義と平和と喜び（ローマ一四・一七）、聖性と幸いとに満たされるように祈るのです。やがて彼らは、ここから主の天の国へ移され、そこで主と共に世々限りなく支配するのです。

「御国がきますように」（マタイ六・一〇）という言葉で、私たちはこのことも祈っています。私たちは、神のとこしえの国が、すなわち天にある栄光の国が来るように祈るのです。それは、地上の恵みの国が続いて、完成したものです。したがって、この願いも、前の願いと同じく、知性あるすべての被造物のためにささげられています。彼らはみな、この大いなる出来事にかかわっているからです。それは、万物が最終的に新しくされることです。神は悲惨と罪、弱さと死とを終わらせ、万物をご自分の手に収め、よろずよに続く国を打ち立てられるのです。

これにぴったり対応するのが、埋葬式の祈りの中にある、あの厳かな言葉です。「どうか、恵み深いいつくしみによって、選ばれた者の数をすみやかに満たし、御国を早めてくださいますように。あなたの聖なる御名へのまことの信仰のうちに、世を去った人々がいます。私たちが、その人々すべてと共に、完全な成就と至福とを得ることができますように。それも、あなたのとこしえの栄光のうちで、体と魂の両方において得ることができますように」（祈祷書「埋葬式」）。

（九）「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」（マタイ六・一〇）。これは、神の国が来たところではどこでも、必ず、ただちに生じる結果です。神が信仰によって魂のうちに住み、キリストが愛によって心のうちで支配しておられるところでは、どこでもそうです。

おそらく多くの人は、いや、たぶん大部分の人は、この言葉を一見して、こう思い込みがちです。これは、ただ神にゆだねることを言い表したもの、あるいはそれを願うものにすぎない、と。私たちに関する神のみこころが何であれ、それを甘んじて受ける心構えを願うものだ、と思うのです。確かに、これは疑いもなく神聖ですぐれた気質であり、神の最も尊い賜物です。けれども、私たちがこの願いで祈り求めているのは、それではありません。少なくとも、この願いの主な、第一の意味では、そうではありません。私たちは、「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」（マタイ六・一〇）と言います。そのとき祈っているのは、神のみこころに受け身で従うことよりも、むしろ、進んで従うことなのです。

天にいる神の天使たち、すなわち今、喜びつつ神の御座を取り巻いている者たちは、みこころをどのように行っているでしょうか。彼らは、それを喜んで行います。神の戒めを愛し、神のみことばに喜んで聞き従います（詩篇一〇三・二〇）。みこころを行うことが、彼らの食べ物であり、飲み物です。それが、彼らの最高の栄光であり、喜びなのです。彼らは、それを絶えず行います。彼らの喜んでする奉仕には、途切れることがありません。彼らは、昼も夜も休むことなく（黙示録四・八）、すべての時間を用います。神の命令を果たし、神の計画を実行し、神の御旨の計りごとを成し遂げるために用いるのです（これは人間的な言い方です。そうでなければ、日、夜、時間という私たちの時の尺度は、永遠には存在しません）。そして、彼らはそれを完全に行います。天使の心には、どんな罪も、どんな欠けもありません。確かに、「星も彼の目には清くない」のです（ヨブ二五・五）。神の前で相共に歌う明けの星でさえ、そうです（ヨブ三八・七）。「彼の目には」（ヨブ二五・五）、すなわち神と比べれば、天使たちでさえ清くないのです。けれども、これは、天使たちがそれ自体として清くない、ということではありません。疑いもなく、彼らは清いのです。しみもなく、きずもないのです（第二ペテロ三・一四）。彼らは、まったく神のみこころにささげられ、すべてのことにおいて完全に従っています。

別の角度から見ると、次のことに目を留めることができます。天にいる神の天使たちは、神のみこころをすべて行います。そして、それ以外のことは何も行いません。神のみこころだと完全に確信していること以外は、何も行わないのです。また、彼らは、神のみこころをすべて、神の望まれるとおりに行います。神の喜ばれるやり方で行い、ほかのやり方では行いません。そうです、彼らがこれを行うのは、ただそれが神のみこころだからです。この目的のためであって、ほかの理由からではありません。

（一〇）ですから、神のみこころが「天に行われるとおり、地にも行われますように」（マタイ六・一〇）と祈るとき、その意味はこうです。地に住むすべての者が、すなわち全人類が、天にいます父のみこころを行うように、ということです。聖なる天使たちと同じように喜んで行うように、ということです。人々が、天使たちと同じように、喜んでする奉仕を少しも途切れさせず、絶えずそれを行うように、ということです。そうです、人々がそれを完全に行うように、ということです。「平和の神が」（ヘブル一三・二〇）、永遠の契約の血によって、あらゆる良きわざにおいて彼らを全うしてくださるように、ということです。彼らがみこころを行うためです。また、「みこころにかなうことを」すべて彼らのうちに行ってくださるように、ということです（ヘブル一三・二一）。

言い換えれば、私たちは、私たちとすべての人が、すべてのことにおいて神のみこころを残らず行うように祈っています。また、それ以外のことは何も行わないように祈っています。聖く、神に喜ばれるみこころでないことは、どんな小さなことも行わないように祈るのです。私たちは、神のみこころを残らず、神の望まれるとおりに、神の喜ばれるやり方で行うように祈ります。そして最後に、それが神のみこころだから行うように祈ります。私たちが何を考え、何を語り、何を行うにしても、これがただ一つの理由と根拠であるように祈るのです。全体にしてただ一つの動機であるように祈るのです。

（一一）「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」（マタイ六・一一）。前の三つの願いで、私たちはすべての人のために祈ってきました。今度は、とくに自分たちの必要が満たされるように願います。とはいえ、ここでも、祈りをまったく自分たちだけに限るように指示されているのではありません。この願いも、続く願いのどれも、地上のキリストの教会全体のために用いてよいのです。

「食物」（マタイ六・一一）とは、魂のためであれ体のためであれ、必要なすべてのものだと理解してよいでしょう。タ・プロス・ゾーエーン・カイ・エウセベイアン（τα πρὸς ζωὴν καὶ εὐσεβειαν）、すなわち「いのちと信心とにかかわる」ものです（第二ペテロ一・三）。私たちが理解するのは、ただ外側の食物、すなわち私たちの主が「朽ちる食物」と呼ばれるものだけではありません（ヨハネ六・二七）。それよりもはるかに、霊の食物、すなわち神の恵みです。「永遠の命に至る朽ちない食物」です（ヨハネ六・二七）。古代の教父の多くは、ここで聖餐のパンも理解すべきだと判断しました。聖餐のパンは、初めはキリストの教会全体で毎日受けられ、大いに重んじられていました。それは、神の御霊の恵みが神のすべての子らの魂に伝えられる大きな通路だったのです。多くの人の愛が冷えるまでは（マタイ二四・一二）、そうでした。

「日ごとの食物」（マタイ六・一一）。私たちが「日ごとの」と訳している語は、注解者によってさまざまに説明されてきました。けれども、最も平明で自然な意味は、次のものだと思われます。これは、古いものでも新しいものでも、ほとんどすべての訳に保たれています。すなわち、きょう一日に足りるもの、そして、次々に来る一日一日に足りるもの、という意味です。

（一二）「お与えください」（マタイ六・一一）。私たちは、何一つ権利として要求するのではなく、ただ価なしのあわれみによって求めるからです。私たちは、自分の吸う空気にも、自分を支える大地にも、自分を照らす太陽にも、値しません。私たちが値するのは、ただ地獄だけだ、と私たちは認めます。けれども、神は私たちを価なしに愛してくださいます。ですから、私たちは神に、与えてくださるように求めるのです。それは、神の手から受けるに値しないのと同じように、自分では手に入れることのできないものです。

とはいえ、神の善さや力は、私たちが何もせずに立っている理由にはなりません。神のみこころは、私たちがすべてのことにあらゆる勤勉を尽くすことです。成功が自分の知恵と力から自然に生じる結果であるかのように、最大限の努力を払うことです。そのうえで、まるで何もしなかったかのように、神に頼るべきで

す。神は、あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物を与えてくださる方です（ヤコブ一・一七）。

「きょうも」（マタイ六・一一）。私たちは、あすのことを思いわずらってはならないからです（マタイ六・三四）。まさにこの目的のために、知恵ある創造者は、人生をこのような短い時間の区切りに分けられました。区切りは互いにはっきりと分かれています。それは、私たちが毎日を、神からの新しい賜物として、神の栄光にささげることのできるもう一つの人生として見るためです。また、毎晩を人生の終わりのように見るためです。その向こうには、永遠のほかに何も見るべきものはないのです。

（一三）「私たちに罪を犯す者を私たちがゆるすように、私たちの罪過をおゆるしください」。神の惜しみない恵みがあらゆる被造物に流れ出るのを妨げうるのは、罪だけです。ですから、この願いは、前の願いに自然に続きます。それは、あらゆる妨げが取り除かれて、私たちが愛の神に、あらゆる良いものについて、もっとはっきりと信頼するためです。

「私たちの罪過」。この語は、本来は私たちの「負債」を意味します（マタイ六・一二）。聖書では、私たちの罪は、たびたびこのように表されています。罪を一つ犯すたびに、私たちは神に新しい負債を負うのです。私たちは神に、いわば一万タラントの負債を、すでに負っています（マタイ一八・二四）。それなら、神が「借金を返せ」と言われるとき（マタイ一八・二八）、私たちは何と答えることができるでしょうか。私たちは、まったく支払うことができません。返すものが何もありません。財産をすべて使い果たしてしまったのです（ルカ一五・一三）。ですから、神がその律法の厳しさに従って私たちを扱われるとします。正当に取り立てうるものを取り立てられるとします。そうなれば、神はこう命じられるほかありません。私たちの「手足をしばって」（マタイ二二・一三）、「獄吏に引きわた」せ、と（マタイ一八・三四）。

実際、私たちはすでに、自分の罪の鎖で手足をしばられています。罪は、私たち自身との関係で見れば、鉄の鎖であり、青銅のかせです。罪は傷です。世と肉と悪魔とが、この傷で私たちの全身を切り裂き、ずたずたにしたのです。罪は病です。私たちの血と気力を吸い尽くし、私たちを墓のへやへ下らせる病です。けれども、ここでのように神との関係で見れば、罪は負債です。計り知れないほど大きく、数えきれない負債です。ですから、返すものが何もない私たちは、神に叫び求めるのがふさわしいのです。私たちをみな、惜しみなく「ゆるして」くださるように、と（ルカ七・四二）。

「ゆるす」と訳されている語は、負債を免じることか、鎖を解くことかを意味します。そして、前者を得るなら、後者は当然ついてきます。負債が免じられるなら、鎖は手から落ちるのです。キリストにある神の価なしの恵みによって、私たちは「罪のゆるしを得」ます（使徒二六・一八）。そうするやいなや、主を「信じる信仰によって、聖別された人々に加わる」ことにもなるのです（使徒二六・一八）。罪は力を失いました。「恵みの下にある」人々を（ローマ六・一四）、すなわち神の恵みを受けている人々を、罪は支配することがありません。「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」ように（ローマ八・一）、彼らは罪責からだけでなく、罪からも解き放たれています。「律法の要求が」彼らに「おいて、満たされ」、彼らは「肉によらず霊によって歩く」のです（ローマ八・四）。

（一四）「私たちに罪を犯す者を私たちがゆるすように」。この言葉で、私たちの主ははっきりと宣言しておられます。私たちは、どんな条件で神にゆるされることを期待できるのか。また、どの程度に、どのようにゆるされることを期待できるのか。それを宣言しておられるのです。私たちがほかの人をゆるすなら、また、私たちがほかの人をゆるすように、私たちのすべての罪過と罪とはゆるされるのです。〔第一に、私たちがほかの人をゆるすなら、神は私たちをゆるしてくださいます。〕これは、この上なく大切な点です。私たちの祝福された主は、私たちがいつかこのことを忘れてしまわないかと、深く気づかっておられます。そのため、主はこれを祈りの本文に入れただけでなく、すぐあとで二度繰り返しておられます。主は言われます。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるしてくださるでしょう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるしてくださらないでしょう」（マタイ六・一四～一五）。第二に、私たちがほかの人をゆるすように、神は私たちをゆるしてくださいます。ですから、もし悪意や恨

みが、あるいは不親切や怒りの汚れが少しでも残っているとします。私たちが、すべての人の罪過を、はっきりと、完全に、心からゆるさないとします。そうすれば、私たちは自分自身のゆるしを、ひどく切り詰めてしまうのです。神は、私たちをはっきりと完全にゆるすことがおできになりません。いくらかのあわれみを示すことはおできになるでしょう。けれども、神が私たちのすべての罪をぬぐい去り、すべての不義をゆるされることを（詩篇一〇三・三）、私たち自身が拒むのです。

一方、私たちが心から隣人の罪過をゆるさないでいるとします。その間、この言葉を口にするたびに、私たちは神にどんな祈りをささげていることになるでしょうか。私たちは実に、神に公然と挑んでいるのです。最悪のことをしてみよと、神に挑戦しているのです。「私たちに罪を犯す者を私たちがゆるすように、私たちの罪過をおゆるしください」。これは、はっきり言えば、こういうことです。「私たちを少しもゆるさないでください。私たちは、あなたの手から何の恵みも望みません。私たちの罪を覚えておいてください。あなたの怒りが私たちの上にとどまりますように」。けれども、あなたがたは、そのような祈りを本気で神にささげることができるでしょうか。それでも神は、まだあなたがたを生きたまま地獄に投げ込んではおられないのです。ああ、これ以上、神を試みてはなりません。今、まさに今、神の恵みによって、自分がゆるされたいようにゆるしなさい。神がこれまであなたをあわれみ、これからもあわれんでくださるのと同じように、今、あなたの仲間をあわれみなさい（マタイ一八・二三）。

（一五）「わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください」（マタイ六・一三）。「わたしたちを試みに会わせないで」（マタイ六・一三）。「試み」と訳されている語は、どんな種類の試練をも意味します。英語のtemptation（誘惑）という語も、昔は善い意味にも悪い意味にもとれる語として用いられていました。もっとも、今では普通、罪への誘いの意味に解されています。ヤコブは、この語を両方の意味で用いています。初めは一般的な意味で、次に限られた意味で用いているのです。前の意味でとっているのは、次のように言うときです。「試錬を耐え忍ぶ人は、さいわいです」（ヤコブ一・一二）。ためされて、すなわち神に認められて、「いのちの冠を受ける」からです（ヤコブ一・一二）。すぐにヤコブは、後の意味でこの語をとって、こう付け加えます。「だれでも誘惑に会う場合、『この誘惑は、神からきたものだ』と言ってはなりません。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもなさいません」（ヤコブ一・一三）。「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ」るときです（ヤコブ一・一四）。「欲」とは欲望のことです。「引かれ」の原語はエクセルコメノス（ἐξελκόμενος）で、神から引き出されることです。人は、神のうちにいるときにだけ安全なのです。また、「さそわれる」ときです（ヤコブ一・一四）。魚がえさで捕えられるように、捕えられるのです。人がこのように引かれ、さそわれるとき、そのとき本当の意味で「誘惑に陥」るのです（マタイ二六・四一）。そのとき、誘惑は雲のように人をおおい、その魂全体に広がります。そうなれば、そのわなからのがれるのは、どれほど難しいことでしょう。ですから、私たちは神に、「わたしたちを試みに会わせ」ないように願うのです（マタイ六・一三）。すなわち（神はだれをも誘惑なさらないのですから）、私たちが誘惑に導かれるままにしておかれないように、と願うのです。「悪しき者からお救いください」（マタイ六・一三）。英語の聖書は「悪から」と訳していますが（マタイ六・一三）、むしろ「悪しき者から」です。原語はアポ・トゥー・ポネールー（ἀπὸ τοῦ πονηροῦ）です。ホ・ポネーロス（ὁ πονηρός）とは、疑いもなく、とりわけそう呼ばれる悪しき者のことです。それは、この世の君（ヨハネ一二・三一）、この世の神であり（第二コリント四・四）、不従順の子らの中に力強く働いている者です（エペソ二・二）。けれども、信仰によって神の子となった人々はみな、その手から救い出されています。悪しき者は、彼らに戦いを挑むかもしれません。実際、挑んでくるでしょう。けれども、彼らが自分の魂を裏切らないかぎり、勝つことはできません。しばらくの間は苦しめるかもしれませんが、滅ぼすことはできません。神が彼らの味方だからです。神は最後には必ず、「日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださ」います（ルカ一八・七）。主よ、私たちが試みられるとき、誘惑に陥らないようにしてください（マタイ二六・四一）。私たちのために、のがれる道を備えてください（第一コリント一〇・一三）。悪しき者が私たちに手を触れることのないようにしてください（第一ヨハネ五・一八）。

（一六）　この神聖な祈りの結びは、普通、頌栄と呼ばれます。それは厳かな感謝であり、神の属性とみわざとを簡潔に言い表したものです。国は、あなたのものだからです。すなわち、今あるもの、また、かつて造られたすべてのものに対する主権は、あなたのものです。そうです、あなたの国はとこしえの国、あなたのまつりごとはよろずよに絶えることがありません（詩篇一四五・一三）。力も、あなたのものです。それは、あなたがとこしえの御国で万物を治められる、執行の力です。あなたは、この力によって、あなたの治められるすべての所で、みこころにかなうすべての事を行われます（詩篇一三五・六）。栄光も、あなたのものです。それは、すべての被造物があなたにささげるべき賛美です。その賛美は、あなたの力と、あなたの国の偉大さとのためです。また、あなたが永遠の昔から行い、世々限りなく行われる、すべてのくすしきみわざのためです。とこしえに。アァメン。そうなりますように。真剣な読者には、ここに「主の祈りの言い換え」を付け加えても、喜ばれないことはないと思います。

　すべてのものの父よ、あなたの力ある声は
この全宇宙を呼び出しました。
あなたのあわれみは、すべての上に喜び、
限りない世々を通じて変わりません。
あなたは、みことばによって万物を保ち、
あなたの豊かな愛は、すべてのものに示されています。
あなたは、すべての被造物の呼び声を聞き、
すべての口を良い物で満たされます。
　あなたは天で、光の中の御座について治め、
自然の広がりは、あなたの下に広げられています。
地も、空も、海も、あなたの目の前に、
地獄の深いやみさえ、あらわにされています。
知恵と力と愛とは、あなたのものです。
私たちは、あなたの御顔の前にひれ伏し、
あなたの神聖な属性を告白し、
万物の主権者なる主をたたえます。
　主権者なる主よ、あなたを告白させてください、
地に、空に、天に動くすべてのものに。
あなたの力を敬い、あなたの善をほめたたえ、
あなたの鋭い目の前に、おののかせてください。
主によって生れたものたちよ、みな
あらゆる時間を賛美に用いなさい。
エホバは治めておられる。地よ、喜べ。
明けの星よ、喜び呼ばわれ。
　御父の永遠の愛の御子よ、
あなたの大いなる力をとってください。
地のすべての子らに、あなたのあわれみを味わわせ、
血を流されたあなたの恵みを、みなにあがめさせてください。
あなたの愛の勝利を現してください。
すべての心の中で、あなたおひとりが治めてください。
やがて、あなたのすべての敵があなたの支配を認め、
恵みが始めたことを、栄光が完成するときまで。
　恵みと、いやしと、力との御霊よ、
この地上の光と愛との泉よ、
あなたのいやしの力を、広く注いでください。
すべての国々の上に、それを流れさせてください。
完全な愛で、私たちの心を燃え立たせ、
私たちのうちで、信仰のわざを成し遂げてください。
そうすれば、天の万軍でさえ、
みこころを行うのに、地上の私たちより速く動くことはないでしょう。
　父よ、日ごとに、あなたの子らの必要に
新しい備えを与えるのは、あなたです。
あなたは野のゆりを装い、
若いからすの鳴く声を聞かれます。
私たちは思いわずらいをあなたにゆだね、あなたによって生きています。

あなたは、私たちのあらゆる必要をご存じです。
ああ、あなたの恵みで私たちを養い、
きょう、私たちの魂に生きたパンを与えてください。
　永遠の、傷のない神の小羊よ、
世の初めから、ほふられた方よ、
いつも、あなたの血を私たちに注いでください。
ああ、私たちをきよめ、いつまでもきよく保ってください。
すべての魂に向かって（あなたにすべての賛美がありますように）、
私たちのあわれみの心を動かしてください。
こうして、すべての人が、これを見て知りますように。
神が私たちのうちにおられることを。神は愛だからです。
　いのちの与え主であり、主である方よ、
あなたの力と守りの心づかいは、すべてのものに惜しみなく注がれます。
激しい誘惑のときには、あなたのもとへ、
罪とサタンから、私たちをのがれさせてください。
主よ、私たちはあなたのもの、あなたは私たちのものです。
私たちのうちに、あなたのすべての善を現してください。
私たちの心を新しくし、広げ、満たしてください。
平安と、喜びと、天と、神とで。
　祝福とほまれ、賛美と愛とが、
等しく、共に永遠なる三位の神よ、
下は地で、上は天で、
あなたのすべてのみわざから、あなたにささげられますように。
三たび聖なる方よ、国はあなたのもの、
全能の力はあなたのものです。
造られた自然が死に絶えるときも、
あなたの絶えることのない栄光は輝きます。

説教二十七　山上の説教（七）

「また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをしてはなりません。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのです。よく言っておきます。彼らはその報いを受けてしまっています」。あなたは、「断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためです。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・一六～一八）

（一）世の初めから、サタンは、神が合わせられたものを離そうと努めてきました（マタイ一九・六）。内なる宗教を外なる宗教から切り離し、その一方を他方と争わせようとしてきたのです。そして、この点で、サタンは、「彼の策略を知らない」人々の間で（第二コリント二・一一）、少なからぬ成功を収めてきました。

どの時代にも、神に対して熱心ではあっても、その熱心が深い知識によらない人々が大勢いました（ローマ一〇・二）。彼らは、「律法による義」（ローマ一〇・五）、すなわち外の務めを果たすことに、かたくしがみついてきました。けれども、その一方で、内なる義、すなわち「信仰に基く神からの義」（ピリピ三・九）には、まったく無頓着でした。また、反対の極端に走った人々も大勢いました。彼らは外の務めをすべて軽んじました。律法がその務めを果たすように命じるかぎりで、おそらく「律法をそしり、律法をさばく」ことさえしたのです（ヤコブ四・一一）。

（二）信仰と行いとが、これほどたびたび互いに争わされてきたのも、サタンのまさにこの策略によります。そして、神に対して本当に熱心であった多くの人々も、しばらくの間、どちらかの側のわなに陥りました。ある人々は、信仰を重んじるあまり、良きわざをまったく締め出しました。良きわざが私たちの義認の原因であることを否定しただけではありません。人は、イエスによるあがないによって価なしに義とされる（ローマ三・二四）ことを、私たちは知っているからです。良きわざが義認の必然の実であることも否定しました。それどころか、イエス・キリストの宗教の中に何かの場所を持つことさえ、否定したのです。ほかの人々は、この危険な誤りを避けようとするあまり、反対の方向へ同じほど行き過ぎました。良きわざが義認の原因であり、少なくとも先立つ条件であると主張したのです。あるいは、良きわざがすべてであるかのように、イエス・キリストの宗教の全体であるかのように語りました。

（三）同じように、宗教の目的と手段とが、互いに争わされてきました。善意のある人々の中には、宗教のすべてを次のことに置いているように見える人がいました。教会の祈りに出席すること、主の晩餐を受けること、説教を聞くこと、敬虔な書物を読むことです。その一方で、これらすべての目的である、神と隣人への愛をおろそかにしたのです。そして、まさにこのことのために、ほかの人々は、神の定めをおろそかにし、軽蔑さえする態度を、ますます固めました。神の定めは、それが打ち立てるはずの目的そのものを掘り崩し、覆すために、これほどみじめに悪用されたのです。

（四）けれども、恵みの手段のうちで、宗教的な断食ほど、人々が極端に走ったものはほとんどありません。それは、私たちの主が先に挙げた言葉で語っておられるものです。ある人々は、これを聖書と理性のすべてを越えて、どれほど高めてきたことでしょう。そして、ほかの人々は、これをまったく顧みませんでした。前者が重んじすぎたのと同じほど軽んじることで、いわば仕返しをしたのです。前者は、断食がすべてであるかのように語りました。目的そのものではないにしても、目的と必ず結びついているかのように語ったのです。後者は、断食がまったく無であるかのように、目的と何の関わりもない、実りのない骨折りであるかのように語りました。けれども、真理がその両者の間にあることは確かです。断食はすべてではありませんが、無でもありません。それは目的ではあり

ませんが、目的に至る尊い手段です。神ご自身が定められた手段です。ですから、それがふさわしく用いられるとき、神は必ず私たちに祝福を与えてくださいます。

このことを最もはっきりと示すために、私は次のことを明らかにしようと思います。

第一に、断食の性質とは何か、またそのいくつかの種類と程度とは何か。

第二に、断食の理由と根拠と目的とは何か。

第三に、断食に対する最ももっともらしい反論に、どう答えることができるか。

第四に、断食はどのような仕方で行うべきか。

【一】 断食の性質と種類

（一） まず第一に、断食の性質とは何か、またそのいくつかの種類と程度とは何かを、明らかにしようと思います。その性質について言えば、旧約と新約とを問わず、霊感を受けた書き手はみな、断食するという語をただ一つの意味にとっています。食べないこと、食物を断つことです。これはあまりにも明らかです。ですから、ダビデ、ネヘミヤ、イザヤ、その後に続いた預言者たちの言葉を引くのは、むだな骨折りでしょう。私たちの主と使徒たちの言葉を引くのも、同じです。彼らはみな、断食するとは定められた期間、食べないことだ、という点で一致しているのです。

（二） 昔の人々は、これにほかの事柄も付け加えるのが常でした。それらは、断食と必然のつながりを持たない事柄です。たとえば、衣服に構わないこと、いつもの飾りを外すこと、喪服を着ること、頭に灰をまくこと、素肌に荒布をまとうことです。けれども、新約聖書には、こうしたどうでもよい事柄はほとんど述べられていません。また、より純粋な時代のクリスチャンが、それらを重んじたようにも見えません。もっとも、悔い改める人の中には、内なるへりくだりの外のしるしとして、自分から進んでそれを用いた人もいたでしょう。まして、使徒たちや、彼らと同じ時代のクリスチャンが、自分の肉を打ったり裂いたりすることはありませんでした。このような苦行は、バアルの祭司や礼拝者にこそふさわしいものでした。異教徒の神々は悪霊にすぎませんでした。その祭司たちは、「大声に呼ばわり、彼らのならわしに従って」、「身を傷つけ、血をその身に流すに至った」のです（列王紀上一八・二八）。彼らの悪霊の神は、きっとそれを喜んだことでしょう。けれども、人のいのちを滅ぼすためではなく、救うために来られた方には（ルカ九・五六）、そのようなことが喜ばれるはずはありません。また、その方に従う者にもふさわしくありません。

（三） 断食の程度、すなわちその長さについて言えば、何日も続けて断食した人々の例があります。モーセ、エリヤ、そして私たちの祝福された主は、そのために超自然の力を授けられました。そして、「四十日四十夜」絶え間なく断食したと記されています（出エジプト三四・二八、列王紀上一九・八、マタイ四・二）。けれども、聖書がもっとたびたび述べる断食の期間は、朝から夕までの一日です。そして、これが古代のクリスチャンの間で普通に守られていた断食でした。けれども、そのほかに、彼らには半断食もありました（テルトゥリアヌスはこれをセミイェユニア（Semijejunia）と呼んでいます）。それは、一年を通じて、週の第四日と第六日（水曜日と金曜日）に行われました。その日、彼らは午後三時まで何も口にしませんでした。それは、公の礼拝から帰る時刻でした。

（四） これに近いのが、私たちの教会が「節制」という語でとくに意味していると思われるものです。これは、病気や体の弱さのために、完全には断食できないときに用いてよいものです。これは、少しだけ食べること、部分的に断つこと、いつもより少ない量の食物をとることです。聖書の中に、この例があったとは記憶していません。けれども、私はこれを責めることもできません。聖書が責めていないからです。これにも役に立つところがあり、神からの祝福を受けることもあるでしょう。

（五） 断食の最も低い種類は、もしそれを断食と呼べるならの話ですが、おいしい食物を断つことです。これについては、聖書にいくつもの例があります。ダニエルとその仲間たちの例のほかにもあるのです。ダニエルたちには、ある特別な考えがありました。「王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまい」と思ったのです（ダニエル一・八）。王は、その食物と酒を毎日彼らに与えるように定めていました。そこで彼らは、宦官の長に、食べるための野菜と飲むため

の水を求め、それを得ました（ダニエル一・八～一六）。断食と節制のために取り分けられた期間に、肉とぶどう酒を断つという、非常に古い習慣があります。これは、おそらくこの例を誤ってまねたことから生じたのでしょう。そうでなければ、むしろ次の考えから起こったのでしょう。肉とぶどう酒が最もおいしい食物だと想定したのです。そして、厳かに神に近づくそのようなときには、最もおいしくないものを用いるのがふさわしいと信じたのです。

（六）　ユダヤ人の教会には、定期の断食がいくつかありました。たとえば、七月の断食がそうです。これは、神ご自身が、最も厳しい罰をもって、全イスラエルに守らせるように定められたものです。主はモーセに言われました。「特にその七月の十日は贖罪の日です。あなたがたは」、「身を悩まし」、「あなたがたのために、あなたがたの神、主の前にあがないを」しなければなりません（レビ記二三・二六～二八）。「すべてその日に身を悩まさない者は、民のうちから断たれるでしょう」（レビ記二三・二九）。後の時代になると、ほかにもいくつかの定期の断食が加えられました。預言者ゼカリヤも、「七月の断食」だけでなく、「四月の断食と、五月の断食と」、「十月の断食」についても述べています（ゼカリヤ八・一九）。

古代のキリスト教会にも、同じように定期の断食がありました。それには、年ごとのものと週ごとのものがありました。前者は、復活祭の前の断食です。ある人々は四十八時間、ほかの人々はまる一週間、多くの人々は二週間、これを守りました。その間、毎日夕方まで何も口にしなかったのです。後者は、週の第四日と第六日の断食です。エピファニオスは、否定できない事実としてこれに触れています。この断食はエン・ホレー・テー・オイクーメネー（ἐν ὅλῃ τῇ οἰκουμένῃ）、すなわち人の住む全世界で守られている、と書いているのです。少なくとも、クリスチャンが住んでいるあらゆる場所で守られていたのです。私たちの教会の年ごとの断食は、「四旬節の四十日、四季の斎日、祈願日、いくつかの厳かな祝日の前夜祭すなわち前日」です。週ごとの断食は、「降誕日を除く、一年のすべての金曜日」です（祈祷書「前夜祭・断食・節制の日の表」）。

けれども、定められた断食のほかに、神を恐れるどの国民にも、臨時の断食がいつもありました。それは、それぞれの国の特別な事情や機会が求めるのに応じて、そのつど定められたものです。たとえば、「モアブびと、アンモンびと」が「ヨシャパテと戦おうと攻めてきた」ことがありました。そのとき、「ヨシャパテは」、「主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせ」ました（第二歴代二〇・一、三）。また、「ヨシヤの子エホヤキムの五年九月」、人々はバビロンの王を恐れていました。そのとき、ユダの君たちは、「エルサレムのすべての民」に、「主の前に断食を行うべきことを告げ示」しました（エレミヤ三六・九）。

同じように、一人一人の人も、自分の道に心を配り、へりくだって神と親しく歩みたいと願うなら、たびたび機会を見いだすでしょう。隠れた所においでになる父の前で、ひそかにこのように魂を悩ませる機会です。そして、ここで与えられている指示は、おもに、また何よりも、この種の断食に関わるものです。

【二】　断食の理由と根拠と目的

（一）　次に第二に、断食の根拠と理由と目的とは何かを示すことにします。

まず第一に、心が強く揺り動かされている人がいます。悲しみや恐れのような激しい感情にとらえられている人です。そういう人は、しばしばその感情にのみ込まれ、パンを食べることさえ忘れてしまいます（詩篇一〇二・四）。そのようなとき、彼らは食物をほとんど気にかけません。体を保つのに必要なものさえ気にかけず、まして、ごちそうや品数などは気にかけません。まったく別の思いで、頭がいっぱいだからです。こうして、サウルは言いました。「わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペリシテびとがわたしに向かっていくさを起し、神はわたしを離れ」ました（サムエル記上二八・一五）。そのとき、彼は「その一日一夜、食物をとっていなかった」と記されています（サムエル記上二八・二〇）。こうして、聖パウロと共に船に乗っていた人々もそうでした。「暴風は激しく吹きすさぶので」、「助かる最後の望みもなくなった」とき（使徒二七・二〇）、彼らは十四日もの間、「食事もせずに」、「何も食べないで」過ごしました（使徒二七・三三）。きちんとした食事を一度もとらなかったのです。また、こうして、ダビデと、彼と共にいたすべての人々もそうでした。彼らは、民が戦いから逃

げ、民の多くが倒れて死に、サウルとその子ヨナタンも死んだと聞きました。そのとき、「サウルのため、またその子ヨナタンのため」、「またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、夕暮まで食を断った」のです（サムエル記下一・一二）。

それどころか、心が深く何かに向けられている人は、どんな妨げにも我慢できず、必要な食物さえいやがることがよくあります。食物が、全注意を注ぎたいと願っている事柄から、思いをそらしてしまうからです。先に述べた場面で、サウルがそうでした。彼は「地に伸び、倒れ」、「その力はうせてしまった」のに（サムエル記上二八・二〇）、「わたしは食べません」と言いました。そして、「彼のしもべたちも、その女もしいてすすめ」るまで、食べなかったのです（サムエル記上二八・二三）。

（二） ですから、ここに断食の自然な根拠があります。深い苦しみの中にあり、罪の悲しみと神の怒りへの強い恐れとに押しつぶされている人がいるとします。その人は、何の規則がなくても、「パンを食べることを忘れ」るでしょう（詩篇一〇二・四）。それが神の命令であるかどうかを知りも考えもせずに、そうするのです。おいしい食物だけでなく、必要な食物さえ断つでしょう。ちょうど聖パウロがそうでした。彼はダマスコに連れて行かれたあと、「三日間、目が見えず、また食べることも飲むこともしなかった」のです（使徒九・九）。

そうです、嵐が激しくなるときがあります。「はなはだしい恐れが」、この世で神もなく過ごしてきた人を（エペソ二・一二）「おおい」ます（詩篇五五・五）。そのとき、その人の魂は「すべての食物をきら」うでしょう（詩篇一〇七・一八）。食物は不快で、わずらわしいものとなるでしょう。その人は絶え間なく叫びます。「主よ、お助けください」、私は滅びそうです、と（マタイ八・二五）。その叫びを妨げるものには、何であれ我慢できなくなるでしょう。

私たちの教会は、説教集「断食について」の第一部で、このことを何と力強く言い表していることでしょう。「人が自分の内に罪の重荷を感じ、その報いが滅びであることを知り、心の目で地獄の恐ろしさを見るとします。そのとき、人は震え、おののき、心の悲しみに内から打たれます。そして、自分を責めずにはいられず、全能の神に自分の嘆きを打ち明け、神にあわれみを呼び求めます。これが真剣になされると、その人の心はすっかりふさがれ〔奪われ〕ます。一方では悲しみと重苦しさで、他方では地獄と滅びのこの危険から救われたいという切なる願いで、ふさがれるのです。そのため、食べ物や飲み物への願いはすべて脇に置かれます。そして、この世のあらゆる物事と楽しみへのいとわしさ〔すなわち嫌悪〕が、それに代わって入ってきます。こうして、そのときには、泣き、嘆き、悲しむことほど、彼らの心にかなうものはありません。言葉と体のふるまいの両方で、生きることに疲れたことを示すことほど、心にかなうものはないのです」（説教集「断食について」第一部）。

（三） 断食のもう一つの理由、すなわち根拠は、こうです。今、神を恐れている人々の多くは、こうした正当なものを乱用して、どれほどたびたび神に罪を犯してきたかを深く感じています。彼らは、食べ過ぎによってどれほど多くの罪を犯してきたかを知っています。節度について、またおそらくは節酒についても、どれほど長く神の聖なる律法に背いてきたかを知っています。また、自分がどれほど肉の欲にふけってきたかを知っています。おそらく体の健康を損なうほどに、そして確かに、魂を少なからず傷つけるほどにです。こうして、彼らは絶えず、あの浮かれた愚かさを養い、増し加えてきたのです。あの心の軽さ、気質の浮つき、最も大切な事柄に対する陽気な無関心、霊の軽はずみと不注意をです。それらは、まさに魂の酩酊にほかなりませんでした。それらは、ぶどう酒や強い酒の飲み過ぎと同じように、彼らの最も高貴な能力をすべて麻痺させたのです。ですから、その結果を取り除くために、彼らは原因を取り除きます。あらゆる行き過ぎから遠ざかります。自分を永遠の滅びにもう少しで突き落とすところだったものを、できるかぎり断ちます。しばしば、まったく口にしません。そして、いつも、あらゆることにおいて控えめで節度を保つように気をつけます。

（四） 彼らはまた、食物に飽き足りることが（エゼキエル一六・四九）、何を増し加えたかをよく覚えています。霊の不注意と軽さだけでなく、愚かで汚れた欲望をも、そうです、不潔で卑しい情欲をも増し加えたのです。このことは、経験によって、まったく疑いの余地がありません。上品で規則正しい肉の楽しみでさえ、絶えず魂を肉的にし、滅びうせる獣と同じところにまで魂を沈めていきます（詩篇四九・一二）。食物の品数の多さとおいしさが、体だけでなく心にどれほどの影響を及ぼすかは、言い表すことができません。それは心を、機会が誘え

ばすぐに、あらゆる感覚の快楽に飛びつくばかりの状態にするのです。ですから、この根拠からも、賢い人はみな、自分の魂を抑え、低く保ちます。下等な欲望へのあらゆるふけりから、魂をますます引き離します。そうしたふけりは、本来、魂を地につなぎとめ、魂をおとしめ、汚すものだからです。ここに、断食のもう一つの絶えることのない理由があります。情欲と肉の楽しみの糧を取り除き、愚かで有害な欲と、卑しくむなしい情欲とを誘うものを、取り去ることです。

（五）　断食のもう一つの理由も、まったく省く必要はないでしょう（もっとも、それをあまり重んじるのがよいことかどうか、私には分かりません）。それは、ある善い人々が詳しく主張してきた理由です。すなわち、神の良い賜物を乱用したことのために、ときにはそれをまったく断つことで、自分を罰することです。こうして彼らは、自分自身に一種の聖なる報復を加えるのです。自分の健康のためになるはずのものを、つまずきの機会に変えてしまった、過去の愚かさと恩知らずとに対してです。彼らの考えでは、ダビデはこのことを念頭に置いていました。泣いて、断食をもって自分の魂を懲らしめた、すなわち罰した、と言ったときです（詩篇六九・一〇）。また聖パウロも、神のみこころに添うた悲しみがコリントの人々を「処罰に至らせた」と述べるとき（第二コリント七・一一）、そうでした。

（六）　断食の第五の、もっと重い理由は、それが祈りの助けになるということです。とくに、ひそかな祈りのために、もっと長い時間を取り分けるときにそうです。とりわけそのようなときに、神はしばしば、ご自分のしもべたちの魂を、地上のすべてのものの上に引き上げてくださいます。ときには、いわば第三の天にまで引き上げてくださるのです（第二コリント一二・二）。断食が神の手の中で、これほどたびたび、徳を強め、増し加える手段となってきたのは、おもに、それが祈りの助けになるからです。強められるのは、一つの徳、すなわち貞潔だけではありません（ある人々は、聖書にも理性にも経験にも何の根拠もないのに、むなしくそう思い込んできました）。霊の真剣さ、熱心、良心の鋭さと柔らかさ、世に対して死んでいることも強められます。したがって、神への愛と、あらゆる聖く天的な心の思いも、強められ、増し加えられるのです。

（七）　断食と、神がそれによって与えてくださる祝福との間に、何か自然な、あるいは必然のつながりがあるというのではありません。けれども、神は、あわれもうとするままに、あわれまれます（ローマ九・一五）。神は、ご自分の良しとされるものを何でも、ご自分が定めようとされるどんな手段によってでも、与えてくださいます。そして神は、どの時代にも、これを手段として定めてこられました。ご自分の怒りをそらし、私たちがそのつど必要とするどんな祝福をも得るための手段です。

これが神の怒りをそらすのに、どれほど力のある手段であるかは、アハブの著しい例から学ぶことができます。「アハブのように」、「悪を行うことに」身を売った者は「なかった」のです（列王紀上二一・二五）。身を売るとは、お金で買われた奴隷のように、自分をすっかり明け渡すことです。それでも、アハブが「衣を裂き、荒布を身にまとい、食を断ち」、「打ちしおれて歩いた」とき（列王紀上二一・二七）、主の言葉がエリヤに臨みました。「アハブがわたしの前にへりくだっているのを見ましたか。彼がわたしの前にへりくだっているゆえ、わたしは彼の世には災を下しません」（列王紀上二一・二八～二九）。

ダニエルが「断食をなし、荒布を着、灰をかぶって」神を求めたのも（ダニエル九・三）、この目的のため、すなわち神の怒りをそらすためでした。このことは、彼の祈りの全体の趣旨から、とくにその厳かな結びから明らかです。「主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように」、すなわちあわれみをなされたように、「あなたの聖なる山から、あなたの怒り」を「取り去ってください」。「しもべの祈」を「聞いてください」。「あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください」。「主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください」。「あなたご自身のために」（ダニエル九・一六～一九）。

（八）　神の怒りが起こるとき、断食と祈りによって神を求めることを、私たちは神の民からだけ学ぶのではありません。異教徒からさえ学ぶのです。ヨナが「四十日を経たらニネベは滅びる」と告げたとき（ヨナ三・四）、ニネベの人々は断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着ました（ヨナ三・五）。ニネベの王も、「その王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座

し」たのです（ヨナ三・六）。そして、王は「ニネベ中にふれさせて言」いました。「人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはなりません。物を食い、水を飲んではなりません」（ヨナ三・七）。（獣が罪を犯したとか、悔い改めることができたとかいうのではありません。そうではなく、人がその例によって諭されるためでした。人の罪のために、神の怒りがすべての被造物の上にかかっていることを、人が考えるためです。）「あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれません。だれがそれを知るでしょうか」（ヨナ三・九）。そして、彼らの骨折りはむだではありませんでした。神の激しい怒りは、彼らから取り去られました。「神は彼らのなすところ」を「見られ」ました（すなわち、神がご自分の預言者によって彼らのうちに起こされた、あの悔い改めと信仰との実を見られたのです）。そして、「彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめにな」りました（ヨナ三・一〇）。

（九）　そして、断食は、神の怒りをそらす手段であるだけではありません。私たちが必要とするどんな祝福をも得る手段なのです。こうして、ほかの部族がベニヤミンの人々の前に打ち負かされたことがありました。そのとき、「イスラエルのすべての人々」は「ベテルに上って行って泣き」、「その日夕暮まで断食し」ました（士師記二〇・二六）。すると、主はもう一度「のぼれ」と言われました。「わたしはあす彼らをあなたがたの手にわたします」（士師記二〇・二八）。こうして、サムエルは、イスラエルがペリシテびとに隷属していたとき、全イスラエルを集めました。人々は主の前で「その日、断食し」ました（サムエル記上七・六）。そして、「ペリシテびとはイスラエルと戦おうとして近づいて」きました。そのとき、「主は」、「大いなる雷をペリシテびとの上にとどろかせて、彼らを乱されたので、彼らはイスラエルびとの前に敗れ」ました（サムエル記上七・一〇）。エズラもそうでした。「わたしは」、「アハワ川のほとりで断食を布告し、われわれの神の前で身をひくくし、われわれと、われわれの幼き者」とのために、「正しい道を示されるように神に求め」ました（エズラ八・二一）。そして、「神はその願いを聞きいれられ」ました（エズラ八・二三）。ネヘミヤもそうでした。「わたしは」、「断食して天の神の前に祈って」言いました（ネヘミヤ一・四）。「どうぞ、きょう、しもべを恵み、この人の目の前であわれみを得させてください」（ネヘミヤ一・一一）。そして神は、王の目の前で、彼にあわれみを得させてくださいました。

（一〇）　同じように、使徒たちは、大切な事業に神の祝福を願うとき、いつも断食を祈りに結びつけました。こうして、次のように記されています。「アンテオケにある教会には」、「預言者や教師がい」ました（使徒一三・一）。「一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると」（それはきっと、まさにこの件で導きを得るためでした）、「聖霊が『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と告げ」ました（使徒一三・二）。そこで一同は、もう一度、「断食と祈とをして、手をふたりの上においた後、出発させ」ました（使徒一三・三）。

こうして、次の章にあるように、パウロとバルナバ自身もそうしました。彼らは、「ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ」ました（使徒一四・二一～二二）。そして、「教会ごとに彼らのために長老たちを任命し、断食をして祈り、彼らを」、「主にゆだね」たのです（使徒一四・二三）。

そうです、ほかの方法では得られない祝福が、この手段を用いることで得られます。私たちの主は、そのことをはっきりと宣言しておられます。弟子たちの問いに答えられた言葉の中でです。弟子たちは問いました。「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」（マタイ一七・一九）。イエスは言われました。それは、あなたがたが信じないからです、と。「よく言い聞かせておきますが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るでしょう」。そして、「あなたがたにできない事は、何もないでしょう」（マタイ一七・二〇）。「しかし、このたぐいは」、すなわちこの種の悪霊は、「祈と断食とによらなければ、追い出すことはできません」（マタイ一七・二一）。これらこそ、悪霊までがあなたがたに服従する（ルカ一〇・一七）、あの信仰を得るために定められた手段なのです。

（一一）　これらは定められた手段でした。神の民は、どの時代にも、これらの目的のための手段として断食を用いるように導かれてきました。それは、ただ理性の光や、いわゆる生れながらの良心の光によるのではありません。彼らは、

そのつど、神ご自身から、そのみこころのはっきりとした公然の啓示によって、それを教えられてきたのです。預言者ヨエルによる、あの著しい啓示がそうです。主は言われます。「あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ」（ヨエル二・一二）。「神があるいは立ち返り、思いかえして祝福をその後に残し」てくださらないと、「だれが知るでしょうか」（ヨエル二・一四）。「シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集しなさい」（ヨエル二・一五）。そのとき、「主は自分の地のために、ねたみを起し、その民をあわれまれ」ます（ヨエル二・一八）。そうです、「わたしは穀物と新しい酒と油とをあなたがたに送ります」。「わたしは重ねてあなたがたにもろもろの国民のうちでそしりを受けさせません」（ヨエル二・一九）。

また、これらの手段を用いるときに、神がご自分の民に期待するように示されるのは、この世の祝福だけではありません。神は、断食と嘆きと悲しみとをもってご自分を求める人々に、こう約束されました。わたしの「大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償います」（ヨエル二・二五）。それと同時に、こう付け加えておられます。「あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き」、「あなたがたの神、主のみ名をほめたたえ」ます（ヨエル二・二六）。「あなたがたはイスラエルのうちにわたしのいることを知り、主なるわたしがあなたがたの神であ」ることを知ります（ヨエル二・二七）。そして、すぐ後に、あの偉大な福音の約束が続きます。「わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぎます。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見ます。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぎます」（ヨエル二・二八～二九）。

（一二）　さて、昔の人々を励まして、この務めを熱心に、絶えず果たさせた理由は、どんなものであれ、今も同じ力をもって私たちを励まします。けれども、これらすべてにまさって、私たちには、たびたび断食する（第二コリント一一・二七）特別な理由があります。それは、私たちがその名で呼ばれている方の命令です。確かに、主はこの箇所で、断食も、施しも、祈りも、はっきりと命じてはおられません。けれども、どのように断食し、施しをし、祈るべきかについての主の指示は、そのような命令と同じ力を持っています。何かをこのように行えと私たちに命じることは、疑いもなく、そのことを行えという命令だからです。そもそも行われないなら、それをこのように行うことはできないのです。したがって、このような仕方で「施しをし、祈り、断食しなさい」と言うことは、はっきりとした命令です。これらの務めをすべて行え、という命令なのです。また、決して報いからもれることのない（マタイ一〇・四二）その仕方で行え、という命令でもあるのです。

そして、この務めを果たすことへの、さらにもう一つの動機と励ましがあります。それは、この務めをふさわしく果たすことに、私たちの主が恵み深く添えてくださった約束です。「隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・一八）。以上が、断食のはっきりとした根拠と理由と目的です。また、断食を続けることへの私たちの励ましです。自分の主よりも賢い人々が、断食に対して絶えずたくさんの反論を持ち出してきました。それでも、私たちは断食を続けるように励まされているのです。

【三】　断食への反論に答える

（一）　次に、これらの反論のうち、最ももっともらしいものを考えることにします。まず第一に、たびたびこう言われてきました。「クリスチャンは、食物ではなく、罪を断つべきだ。これこそ神がクリスチャンに求めておられることだ」。確かに神はそれを求めておられます。けれども、もう一方のことも求めておられるのです。ですから、こちらを行うべきであり、あちらもおろそかにしてはなりません（マタイ二三・二三）。

あなたの議論を、その全体の形で眺めてみなさい。そうすれば、その強さがどれほどのものか、たやすく判断できるでしょう。

クリスチャンが罪を断つべきであるなら、食物を断つべきではない。

ところで、クリスチャンは罪を断つべきである。

ゆえに、クリスチャンは食物を断つべきではない。

クリスチャンが罪を断つべきであることは、まったくそのとおりです。けれども、そこから、どうして食物を断つべきではないということになるのでしょうか。そうです、クリスチャンは、その両方を行うべきです。神の恵みによって、いつも罪を断つべきです。そして、たびたび食物を断つべきです。それによってかなえられると、経験と聖書がはっきり示している理由と目的のためにです。

（二）第二に、こう反論されてきました。「しかし、食物を断つよりも、高慢と虚栄、愚かで有害な欲、気むずかしさ、怒り、不満を断つほうが、よいのではないか」。疑いもなく、そのほうがよいのです。けれども、ここでも私たちは、あなたがたに主の言葉を思い起こさせる必要があります。「それもしなければならないが、これも見のがしてはなりません」（マタイ二三・二三）。実際、後者は前者のためにあるにすぎません。それは、あの大きな目的のための手段です。私たちは、次のことをねらって食物を断ちます。神の恵みは、神が定められたほかのあらゆる恵みの通り道と共に、この外の手段を通しても、私たちの魂に注がれます。その恵みによって、神の目に喜ばれないあらゆる情念と気質を断つことができるようになるためです。私たちが一方を控えるのは、上から力を授けられて（ルカ二四・四九）、もう一方を控えることができるようになるためです。ですから、あなたの議論は、あなたがねらったのとちょうど反対のことを証明しています。それは、私たちが断食すべきだということを証明しているのです。なぜなら、私たちが悪い気質と欲を断つべきであるなら、そのために、このように食物を断つべきだからです。こうした小さな自己否定は、神があの大いなる救いを授けるために選ばれた道なのです。

（三）第三の反論は、こうです。「しかし、実際にはそうはならない。私たちはたくさん、たびたび断食してきた。だが、それが何の役に立ったのか。私たちは少しも良くならなかった。そこに何の祝福も見いださなかった。それどころか、助けになるより、むしろ妨げになった。たとえば、怒りやいらだちを防ぐどころか、それらをひどく増し加える手段となった。そのため、私たちは他人にも自分にも耐えられなくなったのだ」。そういうことは、十分にありうるでしょう。断食するにせよ祈るにせよ、前よりもずっと悪くなるような仕方で、それを行うことはありうるのです。もっと不幸せになり、もっと聖くなくなるような仕方で、です。けれども、その落ち度は手段そのものにあるのではなく、それを用いる仕方にあります。それをなお用いなさい。ただし、違う仕方で用いなさい。神が命じられることを、神が命じられるとおりに行いなさい。そうすれば、疑いもなく、神の約束がたがうことはありません。神の祝福は、もはや差し止められることはありません。あなたがひそかに断食するとき、「隠れた事を見ておられる」方は、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・一八）。

（四）第四に、こう反論されてきました。「しかし、神がこのような小さなことに目を留められると思うのは、ただの迷信ではないか」。もしそうだと言うなら、あなたは神の子らのすべての世代を責めることになります。けれども、あなたは、この人たちはみな弱く迷信深い人間だった、と言うのでしょうか。あなたは、モーセとヨシュア、サムエルとダビデについて、そう断言するほど大胆になれるのでしょうか。ヨシャパテ、エズラ、ネヘミヤ、すべての預言者たちについても、そうでしょうか。そうです、これらすべての人にまさる方、すなわち神の御子ご自身についても、そう断言できるのでしょうか。確かなことがあります。私たちの主人も、そのしもべであるこれらすべての人々も、こう考えていたのです。断食は小さなことではなく、最も高い者よりもさらに高い方がそれに目を留められる、と。明らかに、主の使徒たちもみな、同じ考えでした。彼らが「御霊と知恵とに満ちた」者となってからも、そうでした（使徒六・三）。彼らは「聖なる者に油を注がれ」（第一ヨハネ二・二〇）、その油が「すべてのことを」彼らに「教え」ていました（第一ヨハネ二・二七）。そのときにも、彼らはなお、神の僕として自分を人々にあらわしていました（第二コリント六・四）。「左右に持っている義の武器により」（第二コリント六・七）だけでなく、断食によっても、そうしたのです（第二コリント六・五）。「花婿が奪い去られる」と、彼らは「その日には断食を」しました（ルカ五・三五）。また、彼らは（先に見たように）、神の栄光に深く関わることは、何であれ、祈りだけでなく厳かな断食もせずに企てることはありませんでした。収穫のために働き人を送り出すこと（マタイ九・三八）などが、そうです。

（五）第五に、ある人々は言います。「しかし、断食が本当にそれほど大切で、それほどの祝福を伴うのなら、いつも断食するのがいちばんよいのではない

か。ときどきするのではなく、絶えず断食を守り、いつでも、体の力が耐えられるかぎりの節制をするのが、いちばんよいのではないか」。だれも、こうすることをためらってはなりません。ぜひとも、いつでも、体の力が耐えられるかぎり、少なく質素な食物をとり、この点でできるかぎり自己否定をしなさい。そして、これは、神の祝福によって、先に述べた大きな目的のいくつかに役立つでしょう。それは、貞潔だけでなく、天に心を向けることにも、大きな助けとなるでしょう。地上のものから心を引き離し、上にあるものに心を向けることにも、助けとなるのです（コロサイ三・二）。けれども、これは断食ではありません。聖書の言う断食ではないのです。聖書全体のどこにも、これが断食と呼ばれているところはありません。これは、ある程度、断食の目的のいくつかにかないます。それでも、断食とは別のものです。ぜひともこれを実行しなさい。けれども、それによって神の命令を退けることのないようにしなさい。神のさばきをそらし、神の子らの祝福を得るために制定された手段を、退けることのないようにしなさい。

（六）　ですから、好きなだけ、絶えず節制をしなさい。このような意味での節制は、クリスチャンの節度にほかなりません。けれども、これは、あなたが厳かな断食と祈りのときを守ることを、少しも妨げる必要はありません。たとえば、あなたが突然、大きな悲しみと悔恨、すさまじい恐れとおびえに襲われたとします。そのとき、ふだんの節制や節度は、あなたがひそかに断食することを妨げないでしょう。そのような心の状態になれば、あなたはほとんど断食せずにはいられないでしょう。日ごとの食物をいやがるでしょう。体に必要な補給をとることさえ、ほとんど耐えられないでしょう。神が「滅びの穴から」あなたを「引きあげて」、あなたの「足を岩の上におき」、あなたの「歩みをたしかにされ」るまでは、そうなのです（詩篇四〇・二）。あなたが願いのあまり苦しみもだえ、神の祝福を求めて神と激しく格闘しているときも、同じでしょう。くちびるの求め（詩篇二一・二）がかなえられるまでパンを食べるなと、だれかに教えてもらう必要はないでしょう。

（七）　また、あなたがニネベにいたとします。そして、町中にこうふれられたとします。「人も獣も牛も羊もみな、何をも味わってはなりません。物を食い、水を飲んではなりません」（ヨナ三・七）。「ひたすら神に呼ばわり」なさい（ヨナ三・八）。そのとき、あなたが絶えず断食していることは、あの全体のへりくだりに加わらない理由になったでしょうか。疑いもなく、ならなかったでしょう。あなたも、ほかのだれとも同じように、その日には食物を味わわないように心がけたことでしょう。

同じように、イスラエルの人々のだれ一人として、七月の十日の断食を免除されはしなかったでしょう。節制をしていても、また絶えず断食を守っていても、そうです。「すべてその日に身を悩まさない者」、すなわち断食しない者は、「民のうちから断たれる」からです（レビ記二三・二九）。

最後に、バルナバとサウロを送り出す前に、アンテオケの兄弟たちが断食して祈ったとき、あなたが彼らと共にいたとします。あなたの節度や節制が、それに加わらない十分な理由になったと、いったい考えられるでしょうか。疑いもなく、もし加わらなかったなら、あなたはすぐにクリスチャンの共同体から断たれたことでしょう。あなたは、神の教会に混乱を持ち込む者として、当然、彼らの中から追い出されたことでしょう。

【四】　断食の仕方

（一）　最後に、断食が主に喜ばれる奉仕となるために、どのような仕方で断食すべきかを示します。まず第一に、目をひたすら主に注いで、主に対して断食しましょう。この点での私たちの意図は、これであり、これだけであるようにしましょう。それは、天にいます私たちの父をあがめることです（マタイ五・一六）。また、神の聖なる律法に対する数々の背きのために、悲しみと恥を言い表すことです。また、清める恵みが増し加えられるのを待ち望むことです。その恵みは、私たちの心を上にあるものへと引き寄せます（コロサイ三・二）。さらに、祈りに真剣さと熱心を加えることです。神の怒りをそらし、神がイエス・キリストにあって私たちに与えてくださった、尊く大いなる約束（第二ペテロ一・四）のすべてを得ることです。

神をあざけることのないように気をつけましょう。この世のねらいを少しでも混ぜるなら、とくに人の賞賛を求めるなら、祈りだけでなく断食も、主に忌みきらわれるものになってしまいます。そうならないように気をつけましょう。私たちの祝福された主は、本文の言葉で、とくにこのことに対して私たちを守っておられます。「また断食をする時には、偽善者がするように」してはなりません（マタイ六・一六）。神の民と呼ばれていた人々の中にも、そのような者があまりにも多くいました。「陰気な顔つきをする」とは（マタイ六・一六）、気むずかしい顔をし、わざと悲しげにし、表情を特別な形に作ることです。「彼らは」、「自分の顔を見苦しくする」のです（マタイ六・一六）。不自然にゆがめるだけでなく、ちりと灰で顔をおおうことによってもです。それは、「断食をしていることを人に見せよう」とするためです（マタイ六・一六）。これこそ、彼らのただ一つのねらいではないにしても、おもなねらいです。「よく言っておきます。彼らはその報いを受けてしまっています」（マタイ六・一六）。すなわち、人の感嘆と賞賛を受けてしまっているのです。あなたは、「断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい」（マタイ六・一七）。ほかのときにいつもしているとおりにしなさい。「それは断食をしていることが人に知れない」ためです（マタイ六・一八）。人に知られることを、あなたの意図の一部にしてはなりません。あなたが少しも望まないのに人々がそれを知るなら、それはかまいません。それで、あなたが良くなるわけでも、悪くなるわけでもないのです。むしろ、「隠れた所においでになるあなたの父に知られるため」です。「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は」、公然と「報いてくださるでしょう」（マタイ六・一八）。

（二）　けれども、この報いを願うなら、第二に、断食によって神から何かを受ける功績があると思い込まないように気をつけましょう。このことは、どれほどたびたび警告されても、されすぎることはありません。「自分の義を立てよう」とする願いが（ローマ一〇・三）、私たちすべての心にこれほど深く根を下ろしているからです。それは、救いを恩恵としてではなく、当然の支払いとして（ローマ四・四）手に入れようとする願いです。断食は、神が定められた一つの道にすぎません。その道で、私たちは、受けるに値しない神のあわれみを待ち望むのです。また、その道で、神は、私たちに何の功績もないのに、価なしに祝福を与えると約束してくださったのです。

（三）　だからといって、ただ外の行為を行えば、神から何かの祝福を受けると思ってはなりません。主は言われます。「このようなものは、わたしの選ぶ断食でしょうか。人がおのれを苦しめる日でしょうか。そのこうべを葦のように伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことでしょうか」（イザヤ五八・五）。どれほど厳格に行われても、これらの外の行為が、人が「おのれを苦しめる」ということの意味のすべてなのでしょうか（イザヤ五八・五）。「あなたは、これを断食ととなえ、主に受けいれられる日と、となえるでしょうか」（イザヤ五八・五）。決して、そうではありません。それがただ外の務めにすぎないなら、それはほとんどむだな骨折りです。そのような行いは、もしかすると体を苦しめるかもしれません。けれども、魂については、何の益にもなりません。

（四）　そうです、ときには体が苦しめられすぎて、自分の職業の務めに向かなくなることがあります。このことにも、私たちは注意深く気をつけなければなりません。健康は神の良い賜物として、守るべきものだからです。ですから、断食するときにはいつも、断食を自分の力に釣り合わせるように気をつけなければなりません。私たちは、殺人をいけにえとして神にささげてはなりません。魂を助けるために、体を滅ぼしてはならないのです。

けれども、こうした厳かなときには、体がひどく弱っていても、もう一方の極端を避けることはできます。昔、自分たちの断食を受け入れてくださらないと言って神に抗議した人々を、神はこの極端のゆえに責められたのです。彼らは言います。「われわれが断食したのに、なぜ、ごらんにならないのですか」（イザヤ五八・三）。主は言われます。「見よ、あなたがたの断食の日には、おのが楽しみを求め」ています（イザヤ五八・三）。食物をまったく断つことができないなら、少なくとも、おいしい食物を断つことはできます。そうすれば、私たちは、むなしく神の御顔を求めることにはならないでしょう。

（五）　けれども、体だけでなく、魂をも苦しめるように気をつけましょう。公の断食であれ、ひそかな断食であれ、そのときをみな、聖い心の思いを働かせるときにしましょう。砕けた悔いた心（詩篇五一・一七）に含まれる、あらゆる

聖い心の思いです。そのときを、敬虔な嘆きのとき、罪に対する神のみこころに添うた悲しみのときにしましょう。それは、コリントの人々の悲しみのような悲しみです。使徒はそれについて、こう言っています。「喜んでいます。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからです。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみこころに添うたことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのです。神のみこころに添うた悲しみは」、原語ではヘー・カタ・テオン・リュペー（ἡ κατὰ θεὸν λύπη）です。それは神に従う悲しみであり、神の御霊の尊い賜物です。この悲しみは神から流れ出て、魂を神へと引き上げます。この悲しみは、「悔いのない救を得させる悔改めに導」きます（第二コリント七・九～一〇）。そうです、神のみこころに添うた私たちの悲しみが、私たちのうちにも同じ内と外の悔い改めを生み出すようにしましょう。真の義と聖とにおいて神のかたちに新しくされる（エペソ四・二四）、同じ全き心の変化を生み出すようにしましょう。そして、私たちがあらゆるふるまいにおいて、神が聖であるように聖なる者となるまで（第一ペテロ一・一五）、同じ生活の変化を生み出すようにしましょう。その悲しみが、私たちのうちに同じ熱情を生み出すようにしましょう。しみもなくきずもなく、主のうちに見いだされようとする熱情です（第二ペテロ三・一四）。また、同じ弁明を生み出すようにしましょう。言葉よりも生活によって、悪のように見えるものすべてから遠ざかることによって、身の潔白を明かす弁明です。同じ義憤、すなわちあらゆる罪への激しい嫌悪を生み出しましょう。偽る自分の心に対する（エレミヤ一七・九）、同じ恐れを生み出しましょう。すべてのことにおいて、聖く、喜ばれる神の御旨にかなう者となりたいという、同じ愛慕を生み出しましょう。同じ熱意を生み出しましょう。神の栄光の手段となりうるもの、また私たちの主イエス・キリストを知る知識において成長する手段となりうるものに対する熱意です。そして、サタンとそのすべてのわざとに対する、また肉と霊とのいっさいの汚れ（第二コリント七・一）に対する、同じ報復の心を生み出しましょう（第二コリント七・一一）。

（六）　そして、断食には、いつも熱心な祈りを結びつけましょう。神の前に魂のすべてを注ぎ出し（サムエル記上一・一五）、罪を、それを重くするあらゆる事情と共に告白しましょう。神の力強い御手の下に自らを低くし（第一ペテロ五・六）、自分のあらゆる必要、あらゆる罪責と無力とを、神の前にさらけ出しましょう。このときは、自分自身のためにも、兄弟たちのためにも、祈りを広げるときです。今こそ、私たちの民の罪を嘆き、私たちの神の都のために大声で叫びましょう。主がシオンを築き（詩篇一〇二・一六）、その荒れたさまに御顔を輝かせてくださるように（ダニエル九・一七）、叫び求めましょう。こうして、昔の神の人々は、いつも祈りと断食とを結びつけていたことに、私たちは気づきます。先に引いたすべての例で、使徒たちもそうしました。そして、私たちの主も、いま見ている説教の中で、両者を結びつけておられます。

（七）　主に喜ばれる断食を守るために残っているのは、ただ一つです。それに施しを加えることです。力に応じて、人々の体にも魂にも、あわれみのわざを加えることです。「神は、このようないけにえ」をも「喜ばれ」ます（ヘブル一三・一六）。こうして、天使は、自分の家で断食し祈っていたコルネリオに、こう告げています。「あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられています」（使徒一〇・四）。そして、神ご自身が、このことをはっきりと詳しく宣言しておられます。「わたしが選ぶところの断食は、悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折るなどの事ではありませんか。また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これを着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではありませんか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなります。また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、あなたが叫ぶとき、『わたしはここにおる』と言われます」（イザヤ五八・六～九）。もし、断食するときに、あなたが飢えた者に心を注ぎ、「苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになります」（イザヤ五八・一〇）。「主は常にあなたを導き」、ひでりのときにもあなたの魂を満ち足らせ、「あなたの骨を強くされ」ます。「あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようにな」ります（イザヤ五八・一一）。

説教二十八　山上の説教（八）

「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはなりません。むしろ自分のために、天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからです。目はからだのあかりです。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいでしょう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いでしょう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなでしょう」（マタイ六・一九～二三）

（一）普通、宗教的な行いと呼ばれるものがあります。それが純粋で聖い意図から出て、それにふさわしい仕方で行われるなら、真の宗教の本当の枝です。私たちの主は、そうした行いから、日常の生活の行いへと進まれます。そして、施しや断食や祈りと同じように、普通の仕事においても、同じ意図の純粋さがどうしても必要であることを示されます。

そして、疑いもなく、「施しと祈りとを神に受け入れられるものにする」同じ意図の純粋さが、「私たちの労働や職業をも、神へのふさわしいささげものにしなければなりません。人が、世の中で名誉と富のある身分に自分を引き上げようとして仕事に励むなら、その人はもはや職業において神に仕えてはいません。そして、人に見られるために施しをする人や、人に聞かれるために祈る人と同じく、神からの報いを受ける資格はありません。むなしい地上の目論見は、施しや祈りにおいて許されないのと同じように、職業においても許されないからです。そうした目論見は、私たちの良きわざに」、すなわち宗教的な行いに、「混じるときに悪であるだけではありません。職業の普通の仕事に入り込むときにも、同じ悪い性質を持っています。もし世の職業においてそれを追い求めることが許されるなら、祈りにおいてもそれを追い求めることが許されるでしょう。けれども、施しと祈りとは、純粋な意図から出るときにだけ、神に受け入れられる奉仕となります。それと同じように、普通の職業も、同じ心の敬虔さをもって行われるときにだけ、神への奉仕と見なされるのです」。

（二）私たちの祝福された主は、このことを、力強く包括的な言葉で、最も生き生きと宣言しておられます。主はこの章全体を通して、その言葉を説き明かし、強調し、敷衍しておられるのです。「目はからだのあかりです。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいでしょう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いでしょう」（マタイ六・二二～二三）。目とは意図のことです。体にとって目であるものが、魂にとっては意図なのです。目が体のあらゆる動きを導くように、意図は魂のあらゆる動きを導きます。魂のこの目が澄んでいると言われるのは、ただ一つのものだけを見るときです。すなわち、私たちがほかに何の目論見も持たず、ただ神と、神が「つかわされたイエス・キリストとを知る」ことだけを目指すときです（ヨハネ一七・三）。神をふさわしい心の思いをもって知り、神が私たちを愛してくださったように神を愛することです。すべてのことにおいて神に喜ばれることです。（神を愛するように）心をつくし、思いをつくし、精神をつくし、力をつくして神に仕えることです（マルコ一二・三〇）。そして、この世においても永遠においても、すべてのものの中で、すべてのものにまさって、神を楽しむことです。

（三）「あなたの目が」このように「澄んでおれば」、すなわちこのように神に据えられているなら、「全身も明るいでしょう」（マタイ六・二二）。「全身」とは（マタイ六・二二）、体が目に導かれるように、意図に導かれるすべてのものです。あなたのあり方のすべて、あなたの行いのすべてです。すなわち、あなたの願い、気質、心の思い、またあなたの考えと言葉と行いです。これらのすべてが「明るい」でしょう（マタイ六・二二）。すなわち、神についての真の知識に満ちるのです。これが、ここで光という語によって理解してよい第一のことです。あなたは神の「光によって光を見る」でしょう（詩篇三六・九）。昔、「『や

みの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は」、あなたの「心を照して」くださるでしょう（第二コリント四・六）。神は、ご自分の栄光の知識によって、あなたの心の目を明らかにしてくださいます（エペソ一・一八、第二コリント四・六）。神の御霊は、あなたに神の深みを啓示してくださいます（第一コリント二・一〇）。聖なる方の息があなたに悟りを与え（ヨブ三二・八）、ひそかに知恵を知らせてくださいます（詩篇五一・六）。そうです、あなたが神から受ける油が、あなたのうちに「とどま」り、「すべてのことを」あなたに「教える」でしょう（第一ヨハネ二・二七）。

経験は、これを何とよく裏づけていることでしょう！　神が私たちの心の目を開いてくださったあとでさえそうです。私たちが神以外の何かを求めたり願ったりするなら、無知な心は何と早く暗くなることでしょう（ローマ一・二一）。すると、再び雲が魂の上にかかります。疑いと恐れが、再び私たちを圧倒します。私たちは吹きまわされ（エペソ四・一四）、いかになすべきかを知らず（第二歴代二〇・一二）、どの道を行くべきかも分からなくなります。けれども、神のほかに何も願わず、求めないとき、雲と疑いは消え去ります。「以前はやみであった」私たちが、「今は主にあって光となって」います（エペソ五・八）。今や、夜も昼のように輝きます（詩篇一三九・一二）。そして私たちは、正しい人の道は光であることを知ります。神は、私たちが行くべき道を示し、私たちの前に道をまっすぐにしてくださいます（詩篇五・八）。

（四）　ここで光によって理解してよい第二のことは、聖性です。あなたがすべてのことにおいて神を求めるなら、すべてのことの中に神を見いだすでしょう。神はあらゆる聖性の泉であり、ご自分の似姿で、すなわち正義とあわれみと真実とで、絶えずあなたを満たしてくださいます。あなたがイエスを、ただイエスだけを仰ぎ見るなら（ヘブル一二・二）、イエスのうちにあった思いに満たされるでしょう（ピリピ二・五）。あなたの魂は、それを造られた方のかたちに従って（コロサイ三・一〇）、日ごとに新しくされていくでしょう（第二コリント四・一六）。あなたの心の目が神から離れないとします。あなたが「見えないかたを見ているようにして」（ヘブル一一・二七）忍びとおし、天にも地にもほかに何も求めないとします。そのとき、あなたは主の栄光を見つつ、「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく」でしょう。それは「霊なる主の働きによる」のです（第二コリント三・一八）。

また、私たちがこのように「恵みにより」、信仰によって救われていることも（エペソ二・八）、日々の経験の事実です。心の目が開かれて、神の栄光ある愛の光を見るようになるのは、信仰によるのです。そして、心の目が、その光に、すなわちキリストにおいて世をご自分に和解させておられる神に（第二コリント五・一九）、しっかりと据えられているとします。そのかぎり、私たちは、神と人への愛に、柔和と慈愛と寛容とに、ますます満たされていきます（ガラテヤ五・二二～二三）。また、聖性のあらゆる実に満たされていきます。それは、キリスト・イエスによって、父なる神の栄光をあらわすものです（ピリピ一・一一）。

（五）　澄んだ目を持つ人を満たすこの光は、第三に、聖性だけでなく幸いをも含んでいます。確かに、「光は快いものです。目に太陽を見るのは楽しいことです」（伝道一一・七）。けれども、義の太陽が（マラキ四・二）絶えず魂の上を照しているのを見るのは、それよりどれほど楽しいことでしょう。もし何かキリストにある慰め、愛の励ましがあるなら（ピリピ二・一）、それは目の澄んだ人のものです。人知ではとうてい測り知ることのできない平安（ピリピ四・七）があるなら、それも目の澄んだ人のものです。神の栄光にあずかる希望をもっての喜び（ローマ五・二）も、そうです。こうして、その人は「全身も明るい」のです（マタイ六・二二）。その人は、神が光の中にいますように、光の中を歩みます（第一ヨハネ一・七）。いつも喜び、絶えず祈り、すべての事について感謝します（第一テサロニケ五・一六～一八）。キリスト・イエスにあって、神がその人に求めておられることを、何であれ楽しむのです。

（六）　「しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いでしょう」（マタイ六・二三）。「あなたの目が悪ければ」（マタイ六・二三）。ここから、澄んだ目と悪い目との間に、中間がないことが分かります。目が澄んでいなければ、それは悪いのです。私たちが何をするにしても、その意図がただ神だけに向けられていないとします。ほかの何かを求めるとします。そのとき、私たちの「知性も良心も汚れてしまって」います（テトス一・一五）。

ですから、何をするにしても神以外の目的を目指すなら、私たちの目は悪いのです。神を知り、神を愛し、すべてのことにおいて神に喜ばれ、神に仕えること。それ以外の何かを目当てにするなら、目は悪いのです。神を楽しみ、今も永遠にも神にあって幸いであること。それ以外の何かを目論むなら、目は悪いのです。

（七）　あなたの目がただ神だけに据えられていないなら、「全身も暗いでしょう」（マタイ六・二三）。おおいがなお、あなたの心にかかったままでしょう（第二コリント三・一五）。あなたの思いは、「この世の神」によって（第二コリント四・四）、ますますくらまされるでしょう。それは、「キリストの栄光の福音の輝き」が（第二コリント四・四）、あなたを照さないようにするためです。あなたは、神の事柄について、無知と誤りに満ちるでしょう。それを受けいれることも、判断することもできないのです（第一コリント二・一四）。また、神に仕えたいという願いがいくらかあるときでさえ、どのように仕えるべきかについて、迷いに満ちるでしょう。どこを向いても疑いと困難に出会い、逃れる道がまったく見えないのです。

そうです、あなたの目が澄んでいないなら、地上のものの何かを求めるなら、あなたは不信心と不義とに満ちるでしょう（ローマ一・一八）。あなたの願いも気質も心の思いも、みな道を外れ、みな暗く、卑しく、むなしいものになるでしょう。そして、あなたの心だけでなく、あなたのふるまいも悪くなるでしょう。それは、「塩で味つけられた」ものでも（コロサイ四・六）、聞く者に恵みを与えるにふさわしいものでも（エペソ四・二九）ありません。むしろ、むだで、益がなく、腐っていて、神の聖霊を悲しませる（エペソ四・三〇）ものとなるでしょう。

（八）　あなたの道には、破壊と不幸とがあります（ローマ三・一六）。あなたは「平和の道を知らない」からです（ローマ三・一七）。神を知らない人々には、平安がありません。落ち着いた、確かな平安はないのです。心をつくして神を求めない人には、だれであれ、真の満足も長続きする満足もありません。滅びるものの何かを目指しているかぎり、「すべて、きたらんとする事は皆空」です（伝道一一・八）。そうです、空であるだけでなく、霊の悩みです（伝道一・一四）。追い求めているときも、楽しんでいるときも、そうなのです。あなたは、まことにむなしい影の中を歩み、むなしく思い煩っています。あなたは、さわれるほどのくらやみの中を歩んでいます（出エジプト一〇・二一）。眠り続けなさい。けれども、休むことはできません。人生の夢は、痛みを与えることはできます。それはあなたも知っています。けれども、安らぎを与えることはできません。この世にも来るべき世にも、休みはありません。ただ、霊たちの中心である神のうちにだけ、休みがあるのです。

「もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなでしょう」（マタイ六・二三）。意図は、魂の全体を照し、知識と愛と平安とで魂を満たすはずのものです。そして実際、それが澄んでいるかぎり、ただ神だけを目指しているかぎり、そうするのです。もしこの意図が暗いとします。神以外の何かを目指し、その結果、魂を光ではなくやみで、無知と誤りで、罪と悲惨とで覆うとします。ああ、そのやみは、どれほど大きいことでしょう。それは、底知れぬ所の穴から立ちのぼる煙そのものです（黙示録九・二）！　最も深い淵に（詩篇八八・六）、死の陰の地に君臨する、夜そのものです！

（九）　ですから、「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはなりません」（マタイ六・一九）。もしたくわえるなら、あなたがたの目が悪いことは明らかです。目がただ神だけに据えられていないのです。

神の戒めの大部分について考えてみましょう。心に関わるものであれ生活に関わるものであれ、アフリカやアメリカの異教徒は、クリスチャンと呼ばれる人々とほぼ同じ水準に立っています。クリスチャンは（わずかな例外を除いて）、異教徒とほとんど同じ程度に、それを守っています。たとえば、イングランド生れの人々は、普通クリスチャンと呼ばれています。その大多数は、喜望峰の近くに住む異教徒の大多数と同じくらいに、酒を慎み、節度を保っています。同じように、オランダやフランスのクリスチャンは、チョクトーやチェロキーのインディアンと同じくらいに、へりくだっており、貞潔です。ヨーロッパの諸国民の大部分をアメリカの諸国民と比べるとき、どちらがすぐれているかを言うのは容易ではありません。少なくとも、アメリカの人々のほうが大きくまさっているわけで

はありません。けれども、いま私たちの前にある命令については、そう言い切ることはできません。ここでは、異教徒のほうがはるかにまさっているのです。異教徒は、食べるための質素な食物と、着るための質素な衣服のほかには、何も願わず、求めません。しかも、それをその日その日に求めるだけです。何も取っておかず、何もたくわえません。ただ、一年のある季節に、その季節が再びめぐって来るまでに必要なだけの穀物をたくわえるのは別です。ですから、異教徒は、この命令を知らないのに、絶えず、きちょうめんに守っているのです。彼らは、「自分のために」、「地上に、宝をたくわえ」ません（マタイ六・一九）。「虫が食い、さびがつき」（マタイ六・一九）、また「盗人らが押し入って盗み出す」ような（マタイ六・一九）、紫の衣や細布の蓄えも、金銀の蓄えも持たないのです。けれども、クリスチャンは、いと高き神の命令として受け入れていると公言しているものを、どのように守っているでしょうか。まったく守っていません！　少しも守っていないのです。そのような命令がかつて人に与えられたことなど、なかったかのようです。ほかの人々からも自分自身からも善いクリスチャンと見なされている人々でさえ、この命令にまったく注意を払いません。彼らの気の留め方から言えば、この命令は、いまだに元のギリシャ語の中に隠されたままであっても同じことでしょう。できるだけ多くの宝をたくわえ、できるかぎり財産を増やす。そのことを少しでもためらう人が、どのキリスト教の町に、五百人に一人でもいるでしょうか。確かに、これを不正な仕方ではしようとしない人々はいます。強奪も盗みもしない人々は大勢います。隣人をだまさない人々もいます。それどころか、隣人の無知や窮乏によってもうけようとしない人々もいます。けれども、これはまったく別の問題です。こうした人々でさえ、ためらうのは事柄そのものではなく、そのやり方なのです。彼らは、「地上に、宝をたくわえ」ること（マタイ六・一九）をためらうのではありません。不正直によってたくわえることをためらうのです。彼らがひるむのは、キリストに従わないことに対してではなく、異教徒の道徳を破ることに対してです。ですから、こうした正直な人々でさえ、追いはぎや押し込み強盗と同じく、この命令に従ってはいないのです。それどころか、彼らはそれに従おうと思ったことさえありません。若いころから、そんなことは一度も彼らの頭に浮かびませんでした。彼らは、クリスチャンの親や主人や友人に育てられましたが、この命令について何の教えも受けませんでした。教えられたとすれば、次のことだけです。できるだけ早く、できるだけ多くこの命令を破り、生涯の終わりまで破り続けよ、ということです。

（一〇）　世の中に、霊的な迷妄の例で、これ以上驚くべきものは一つもありません。まさにこうした人々の大部分が、聖書を読むか、聖書が読まれるのを聞いています。その多くは、主の日ごとにそうしています。彼らは、これらの言葉を百回も読み、また聞いてきました。それなのに、自分がそれによって罪に定められているとは、少しも思いません。親がむすこや娘をモレクにささげるのを禁じる言葉（レビ記一八・二一）が、自分を罪に定めるとは思わないのと同じです。ああ、神が、ご自分の声で、力強い声で、この哀れな自己欺瞞の人々に語ってくだされればよいのですが！　そうすれば、彼らもついに悪魔のわなから目ざめ（第二テモテ二・二六）、目からうろこが落ちるでしょう（使徒九・一八）！

（一一）　「地上に、宝をたくわえる」とはどういうことか（マタイ六・一九）、と問うのですか。これを徹底的に調べる必要があるでしょう。そこで、まず、この命令で禁じられていないことは何かに注目しましょう。そうすれば、禁じられていることは何かを、はっきりと見分けることができるでしょう。

第一に、この命令は、すべての人の前で正しいものを備えること（ローマ一二・一七）を、私たちに禁じてはいません。すべての人に、その当然受けるべきものを返せるように備えることも、禁じてはいないのです。それは、彼らが私たちに正当に求めうるもののすべてです。それどころか、私たちは、「何人にも借りがあってはならない」と神から教えられています（ローマ一三・八）。ですから、だれにも借りがないように、私たちは自分の職業においてあらゆる勤勉を尽くすべきです。これは、普通の正義のはっきりとした律法にほかなりません。私たちの主は、それを「廃するためではなく、成就するために」来られたのです（マタイ五・一七）。

第二に、主はここで、体に必要なものを自分のために備えることも、禁じてはおられません。食べるための質素で健康によい食物と、着るための清潔な衣服とを、十分に備えることです。そうです、神が私たちにその力を与えてくださるかぎり、これらのものを備えることも私たちの務めです。それは、私たちが「自分

で得たパンを食べ」（第二テサロニケ三・一二）、だれにも負担をかけないためです（第二テサロニケ三・八）。

第三に、自分の子供たちや自分の家族のために備えることも、禁じられてはいません。これもまた、異教徒の道徳の原則から言ってさえ、私たちの務めです。だれでも、自分の妻と子供たちのために、生活に必要な質素なものを備えるべきです。そして、自分が去って、もはや見られなくなったとき、彼らが自分でそれを備えることができるようにしておくべきです。私が言うのは、これら、すなわち生活に必要な質素なものを備えることです。ごちそうでも、ぜいたく品でもありません。しかも、彼ら自身の勤勉な労働によって備えることができるようにするのです。自分自身にであれ家族にであれ、ぜいたくや怠惰の手段を与えることは、だれの務めでもないからです。けれども、もしだれかが、自分の子供たちのために、ここまで備えないとします（自分の家のやもめたちのためにも同じです。聖パウロがテモテにあてたよく知られた言葉の中で語っているのは、おもにこのやもめたちのことです）。その人は、実際上、「その信仰を捨てたことになるのであって、不信者」、すなわち異教徒「以上にわるい」のです（第一テモテ五・八）。

最後に、この言葉は、世の仕事を続けていくのに必要なものを、そのつどたくわえることを禁じてはいません。ただし、先に述べた目的を果たすのに足りるだけの量と程度においてです。その量とは、次のことができるだけの量です。第一に、だれにも借りがないこと。第二に、自分のために生活の必需品を手に入れること。第三に、生きている間は家族にそれを与え、自分が神のもとへ去ったあとは、家族がそれを手に入れる手段を与えることです。

（一二）今や、ここで禁じられているものが何であるかを、はっきりと見分けることができます（見分けたくないのでなければ、ですが）。それは、先に述べた目的を果たすのに足りる以上に、この世の財を、わざと手に入れることです。世の財産をもっと多く、金銀をもっと多く増やそうと骨折ることです。これらの目的が求める以上のものをたくわえること、それこそが、ここではっきりと、絶対的に禁じられていることなのです。この言葉に何かの意味があるとすれば、それはこれに違いありません。ほかの意味にとることはできないからです。したがって、だれにも借りがなく、自分と家族のための衣食がある人がいるとします（第一テモテ六・八）。そのうえ、これらの道理にかなった目的を果たすのに足りるだけ、世の仕事を続ける蓄えもあるとします。繰り返して言います。すでにこのような状態にありながら、地上でなおいっそう多くの分け前を求める人がいます。その人は、だれであれ、自分をあがなってくださった主を（第二ペテロ二・一）、公然と、習慣的に否定して生きているのです。その人は、実際上「その信仰を捨てたことになるのであって」、アフリカやアメリカの「不信者以上にわるい」のです（第一テモテ五・八）。

（一三）世に住み、自分の住む世を愛する者たちよ、みな、これを聞きなさい（詩篇四九・一）。あなたがたは、「人々の間で尊ばれる」かもしれません（ルカ一六・一五）。けれども、あなたがたは「神のみまえでは忌みきらわれる」ものです（ルカ一六・一五）。いつまで、あなたがたの魂はちりについているのですか（詩篇一一九・二五）。いつまで、厚い泥で自分を重くするのですか。いつになったら目をさまし、公然の、信条の上での異教徒のほうが、あなたがたよりも天国に近いことを悟るのですか。いつになったら、良い方を、すなわちあなたがたから取り去られることのないものを、選ぶ気になるのですか（ルカ一〇・四二）。いつになったら、ほかのすべての宝を捨て、恐れ、忌みきらって、ただ「天に、宝をたくわえ」ることだけを求めるのですか（マタイ六・二〇）。もし「地上に、宝をたくわえ」ることを（マタイ六・一九）目指すなら、あなたがたは、ただ時間をむだにしているだけではありません。かてにもならぬもののために力を費やしているだけでもないのです（イザヤ五五・二）。もし成功したら、その実は何でしょうか。あなたがたは自分の魂を殺したのです！　魂のうちにある霊のいのちの最後の火花を、消してしまったのです！　今や、まことに、あなたがたは生のただ中で死の中にいます！　あなたがたは、生きている人間ですが、死んだクリスチャンなのです。「あなたの宝のある所には、心もあるからです」（マタイ六・二一）。あなたがたの心はちりの中に沈み、魂は地についています。あなたがたの心の思いは、上にあるものではなく、地上のものに向けられています（コロサイ三・二）。哀れないなご豆に（ルカ一五・一六）向けられているのです。それは、神のために造られた永遠の霊を、毒することはあっても、満

たすことはできません。あなたがたの愛も、喜びも、願いも、みな、使えば尽きてしまうもの（コロサイ二・二二）に置かれています。あなたがたは、天にある宝を投げ捨てました。神もキリストも失われたのです！　あなたがたが得たのは、富と、地獄の火です！

（一四）　ああ、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいこと」でしょう（マルコ一〇・二三）。主の弟子たちは、主がこのように語られるのを聞いて驚きました（マルコ一〇・二四）。けれども、主はそれを取り消すどころか、同じ大切な真理を、前よりも強い言葉で繰り返されました。「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」のです（マルコ一〇・二五）。自分の言葉の一つ一つがほめそやされる人々にとって、自分を賢いとしない（イザヤ五・二一）のは、何とむずかしいことでしょう！　貧しく、卑しく、教育のない群衆よりも自分がすぐれていると思わないのは、何とむずかしいことでしょう！　富のうちに、また富に頼るもののうちに、幸いを求めないのは、何とむずかしいことでしょう。肉の欲、目の欲、持ち物の誇を（第一ヨハネ二・一六）満たすことに、幸いを求めないのは、何とむずかしいことでしょう。ああ、富んでいる者たちよ、あなたがたは、どうして地獄の刑罰をのがれることができるでしょうか（マタイ二三・三三）。ただ、神にはすべてのことができます（マルコ一〇・二七）！

（一五）　また、たとえ成功しなくても、地上に宝をたくわえようと努めることの実は何でしょうか。「富むことを願い求める者は」（第一テモテ六・九）、原語ではホイ・ブーロメノイ・プルーテイン（οἱ βουλόμενοι πλουτεῖν）です。成功してもしなくても、富を願い、富を求めて努める者のことです。そういう者は、「誘惑と、わなとに陥」ります（第一テモテ六・九）。そのわなとは、悪魔のわな、悪魔の仕掛けです。また、「無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥る」のです（第一テモテ六・九）。これは原語ではエピテューミアス・アノエートゥス（ἐπιθυμίας ἀνοητους）で、理性とは何の関わりもない欲のことです。それは本来、理性ある不死の存在にではなく、ただ悟りのない獣にだけふさわしい欲です。その情欲は、「人を滅びと破壊とに沈ませる」のです（第一テモテ六・九）。すなわち、今の悲惨と永遠の悲惨とに沈ませるのです。ただ目を開きさえすれば、そのことの痛ましい証拠を毎日見ることができます。富むことを願い、富もうと決心し、すべての悪の根である金銭を欲しがった人々がいます。彼らは、すでに多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおしました（第一テモテ六・一〇）。そして、自分が向かっている地獄を、前もって味わっているのです！

ここで使徒が語る慎重さは、大いに注目に値します。使徒は、これを富んでいる人について無条件に断言してはいません。人は、自分に何の落ち度もなく、自分の選びに先立って働く摂理の支配によって、富んでいることもありうるからです。そうではなく、使徒はこれを、ホイ・ブーロメノイ・プルーテイン（οἱ βουλόμενοι πλουτεῖν）、すなわち富むことを願い、求める人々について断言しているのです。富は、危険なものではあっても、いつも「人を滅びと破壊とに沈ませる」とはかぎりません（第一テモテ六・九）。けれども、富を願うことは、必ずそうするのです。落ち着いて富を願い、熟慮の上で富を得ようと求める人々は、実際に全世界をもうけてももうけなくても、必ず自分の魂を損するのです（マタイ一六・二六）。これこそ、ご自分の血をもって自分を買い取ってくださった方を、わずかな金貨や銀貨で売り渡す人々です。彼らは、死と陰府と契約を結びます（イザヤ二八・一五）。そして、その契約は成り立つのです。彼らは、悪魔とその使たちと共に（マタイ二五・四一）、その受け継ぐものにあずかるにふさわしい者に、日ごとに自分をしているからです！

（一六）　ああ、だれが、このまむしの子らに、迫ってきている神の怒りからのがれるよう警告するのでしょうか（マタイ三・七）！　それは、彼らの門前に横たわる人々、足もとにへつらう人々、その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望む人々ではありません（ルカ一六・二〇〜二一）。彼らの好意を求めたり、そのしかめ面を恐れたりする人々でもありません。地上のことを思う人は、だれもそうではありません。けれども、地上にクリスチャンがいるとします。世に勝ち、神のほかに何も願わず、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたのほかにはだれも恐れない人がいるとします（マタイ一〇・二八）。神の人よ、あなたこそ、声を惜しまずに語りなさい。あなたの声をラッパのようにあげなさい（イザヤ五八・一）！　大声で叫び、この身分の高い罪人たちに、彼らが立っている絶望的な状態を示しなさい！　もしかすると、千人に一人は、聞く耳を持つかも

しれません（マタイ一三・九）。起き上がって、身からちりを振り落とし（イザヤ五二・二）、自分を地につなぎとめている鎖を断ち切って、ついには天に宝をたくわえるかもしれません。

（一七）そして、もしこの人々のうちのひとりが、神の大能の力によって目ざめ、「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と問うとします（使徒一六・三〇）。そのとき、神の言による答え（ローマ三・二）は、はっきりとして、余すところなく、明確です。神は、あなたに、「持っているものをみな売り払」いなさい、とは言われません（ルカ一八・二二）。確かに、人の心を見られる方は、ある特別な場合に、すなわち若い富んだ役人の場合に、これを命じる必要があると見られました。けれども、それを、後に続くすべての世代の、すべての富んだ人への一般の規則として定められたことはありません。神の一般の指示は、第一に、「高慢にな」らないことです（第一テモテ六・一七）。神は、人が見るようには見られません（サムエル記上一六・七）。神は、あなたの富や威光や供回りのゆえに、あなたを重んじられるのではありません。直接にであれ間接にであれ、あなたの富のおかげで得た資格や教養のゆえに、あなたを重んじられるのでもありません。富で買ったり手に入れたりできるもののゆえにでもありません。これらはみな、神の前では、ふん土やかすのようなものです（ピリピ三・八）。あなたにとっても、そうであるようにしなさい。これらのもののために、自分が少しでも賢い、すぐれていると思わないように気をつけなさい。別のはかりで自分を量りなさい。神があなたに分け与えてくださった信仰と愛の量りによってだけ（ローマ一二・三）、自分を評価しなさい。あなたの羊の群れの犬と一緒にいる者がいます（ヨブ三〇・一）。もしあなたが、その者よりも、神を知る知識と神への愛とを多く持っているとします。そうであれば、あなたはこの理由によってだけ、その者よりも賢く、すぐれ、価値があり、尊いのです。けれども、もしこの宝を持っていないなら、あなたはもっと愚かで、もっと卑しく、本当にもっと軽蔑すべき者です。あなたの家にいる最も身分の低い召使よりも、とは言いません。あなたの門前に横たわる、でき物だらけのこじきよりも、そうなのです（ルカ一六・二〇）。

（一八）第二に、「たよりにならない富に望みをお」いてはなりません（第一テモテ六・一七）。助けを得ようとして、富に頼ってはなりません。また、幸いを得ようとして、富に頼ってはなりません。

第一に、助けを得ようとして、富に頼ってはなりません。金や銀に助けを求めるなら、あなたはみじめな思い違いをしています。金銀は、あなたを悪魔の上に置くことができないのと同じく、世の上に置くこともできません。世も、この世の君も（ヨハネ一二・三一）、自分たちに対するそのような備えを、みなあざ笑っていることを知りなさい。悩みの日には、金銀はほとんど役に立たないでしょう。たとえ試練のときに残っていたとしてもです。けれども、残っているかどうかは確かではありません。富はどれほどたびたび、「自ら翼を生じて」、「飛び去る」ことでしょう（箴言二三・五）！　しかし、たとえ飛び去らないとしても、人生の普通の悩みにおいてさえ、富がどんな支えを与えてくれるでしょうか。あなたの目の喜ぶ者（エゼキエル二四・一六）、あなたの若い時の妻（箴言五・一八）が、一撃のうちに取り去られます。あなたの子、あなたのひとり子（創世記二二・二）、あるいはあなたと身命を共にした友（申命記一三・六）が、取り去られるのです。あなたの富は、息のない土くれを生き返らせ、さきほどまでそこに住んでいた者を呼び戻すでしょうか。富は、あなたを病気や疾患や痛みから守ってくれるでしょうか。こうしたものは、貧しい人だけを訪れるのでしょうか。いいえ、あなたの羊を飼う者や、あなたの土地を耕す者のほうが、あなたよりも病気や痛みが少ないのです。彼のもとには、こうした招かれざる客はめったに訪れません。たとえ訪れても、「雲をいただく宮殿」からよりも、小さな小屋からのほうが、たやすく追い払われるのです。そして、あなたの体が痛みによって懲らされ（ヨブ三三・一九）、やつれる病に衰えていく間、あなたの宝はどのようにあなたを助けるでしょうか。哀れな異教徒に答えさせましょう。

Ut lippum pictae tabulae, fomenta podagrum,
Auriculas citharae collecta sorde dolentes.
（ただれ目に描いた絵が、痛風に湿布が、耳垢がたまって痛む耳に竪琴が役立つほどにしか、役に立たない）

（一九）けれども、これらすべてよりも大きな悩みが、すぐそこに迫っています。あなたは死ぬのです！　ちりの中に沈み、あなたが取られた土に帰り（創

世記三・一九）、ありふれた土くれに混じるのです。あなたの体は、もとのように土に帰り、霊は、これを授けた神に帰るのです（伝道一二・七）。そして、そのときは近づいています。年月は、音もなく、しかし速い足取りで過ぎ去っていきます。おそらく、あなたの日はもう傾いています（ルカ二四・二九）。人生の昼は過ぎ、夕べの影があなたの上にかかり始めています。あなたは、確かな衰えが近づいているのを、自分の内に感じています。いのちの源は、みるみる衰えていきます。では、あなたの富に、どんな助けがあるでしょうか。富は死を甘くするでしょうか。あの厳かなときを、いとしいものにするでしょうか。まったく逆です。「ああ、死よ、自分の持ち物に囲まれて安らかに暮らす人にとって、おまえは何と苦いことでしょう」。「あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」（ルカ一二・二〇）という恐ろしい宣告は、その人にとって、何と受け入れがたいことでしょう。それとも、富は、招かれざる一撃を防ぎ、恐ろしいときを引き延ばしてくれるでしょうか。富は、あなたの魂を救って、死を見ないようにすることができるでしょうか（詩篇八九・四八）。過ぎ去った年月を取り戻すことができるでしょうか。定められた時に（ヨブ一四・五）、一か月を、一日を、一時間を、一瞬を加えることができるでしょうか。それとも、あなたがこの世で自分の分け前として選んだ良いものが、あの大きな淵を越えて（ルカ一六・二六）、あなたについて来るでしょうか。そうではありません。あなたは裸でこの世に来ました。裸で帰らなければなりません（ヨブ一・二一）。

Linquenda tellus, et domus, et placens Uxor; neque harum quas colis arborum Te, praeter invisas cupressos, Ulla brevem dominum sequetur!

（大地も家も、愛しい妻も、残して行かねばならない。あなたが育てている木々のうち、つかの間の主人であるあなたについて行くものは、忌まわしい糸杉のほかには一本もない）

これらの真理は、否定できないほど明白なので、かえって明白すぎて気づかれないのです。もしそうでなければ、死ぬべき人はだれも、たよりにならない富に助けを求めて頼ることなど、決してできないでしょう。

（二〇） また、幸いを得ようとして、富に頼ってはなりません。ここでも、富は「はかりの上で偽る」ものだと分かるでしょう。実際、このことは、すでに述べたことから、道理をわきまえた人ならだれでも推論できます。幾千の金銀も（詩篇一一九・七二）、それで買える利益や楽しみも、私たちが不幸になるのを防げないとします。そうであれば、それらが私たちを幸いにすることもできないのは明らかです。それらのただ中にいながら、こう叫ばずにはいられない人に、富はどんな幸いを与えることができるでしょうか。

私の新しい宮殿に、悲しい思いがなお立ち帰り、
金を塗った私の屋根の周りに、心配が漂いまとう。

実際、ここでは経験があまりにも豊かで、力強く、否定できないので、ほかの論証はすべて不要になります。ですから、事実に訴えましょう。富んだ人々、身分の高い人々だけが、幸いな人なのでしょうか。そして、そのひとりひとりは、自分の富の量に比例して、幸いであったりなかったりするのでしょうか。そもそも彼らは幸いなのでしょうか。私は、彼らはすべての人の中で最もあわれむべき者だ（第一コリント一五・一九）、と言いそうになりました。富んだ人よ、一度でいいから、心から真実を語りなさい（詩篇一五・二）。自分のためにも、兄弟たちのためにも、語りなさい！

有り余るものの中にあっても、なお何かが、
私にも、あなたにも、彼にも欠けている！
その手に入らない残酷な何かが、
ほかのすべてを蝕み、損なう。

そうです、あなたの疲れるむなしい日々が、死の夜に閉ざされるまで、そうなのです。

ですから、確かに、幸いを得ようとして富に頼ることは、日の下にあるあらゆる愚かさの中で、最大の愚かさです。あなたは、このことを確信していないのですか。それでもなお、金銭や、金銭で手に入るあらゆるものの中に、幸いを見いだせると期待できるのですか。なんと！ 金銀が、飲み食いが、馬や召使が、きらびやかな衣服が、娯楽や（いわゆる）楽しみが、あなたを幸いにできるのでしょうか。それらがあなたを幸いにできるのは、あなたを不死にできるのと同じことです！

（二一）　これらはみな、死んだ見せかけです。気に留めてはなりません。生ける神に頼りなさい（第一テモテ四・一〇）。そうすれば、あなたは全能者の陰に（詩篇九一・一）安全にいるでしょう。神の真実とまことが、あなたの大盾、また小盾となるでしょう（詩篇九一・四）。神は、悩める時のいと近き助けです（詩篇四六・一）。決して尽きることのない助けです。そうすれば、ほかの友がみな死んでも、あなたはこう言うでしょう。「主は生きておられます」、わが強い助け手は「ほむべきかな」と（詩篇一八・四六）。あなたが病の床に伏すとき、人の助けがむなしいとき（詩篇六〇・一一）、神はあなたを覚えてくださいます。地上のあらゆるものが何の支えも与えられないとき、神は、あなたが病むとき、あなたの床をすっかり整えてくださいます（詩篇四一・三）。神は、あなたの痛みを和らげてくださいます。神の慰めは（ヨブ一五・一一）、炎の中でさえ、あなたに手を打ち鳴らさせるでしょう。そして、やがてこの地上の家（第二コリント五・一）は、ほとんど揺り倒され、今にもちりの中に崩れ落ちようとするでしょう。そのときでさえ、神は、あなたにこう言うことを教えてくださいます。「死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」（第一コリント一五・五五）。墓よ、「おまえの勝利は、どこにあるのか」（第一コリント一五・五五）。「感謝すべきことには、神は」私の「主イエス・キリストによって」、私に「勝利を賜わ」ります（第一コリント一五・五七）。

ああ、助けのためだけでなく、幸いのためにも、神に頼りなさい。幸いの泉は、すべて神のうちにあります。「わたしたちにすべての物を豊かに備えて楽しませてくださる神に」頼りなさい（第一テモテ六・一七）。原語ではパレコンティ・プルーシオース・パンタ・エイス・アポラウシン（παρέχοντι πλουσίως πάντα εἰς ἀπόλαυσιν）です。神は、ご自分の豊かな、価なしのあわれみによって、いわばご自分の手でそれらを私たちに差し出してくださいます。それは、私たちがそれを神の賜物として、神の愛の保証として受け、自分の持っているすべてのものを楽しむためです。私たちが味わうすべてのものに味わいを与えるのは、神の愛です。神の愛が、すべてのものにいのちと甘さを吹き込みます。そのとき、あらゆる被造物が私たちを偉大な創造主へと導き、地のすべてが天へのはしごとなるのです。神は、ご自分の右にある喜びを（詩篇一六・一一）、感謝するご自分の子供たちに与えるすべてのものに注ぎ込まれます。その子供たちは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりを持ち（第一ヨハネ一・三）、すべてのものの中で、すべてのものにまさって、神を楽しむのです。

（二二）　第三に、財産を増やそうと求めてはなりません。「自分のために」（マタイ六・一九）、「地上に、宝をたくわえてはなりません」（マタイ六・一九）。これは、きっぱりとした、明文の命令です。「あなたは姦淫してはならない」（出エジプト二〇・一四）と少しも変わらないほど、はっきりしています。それなら、富んだ人が、自分をあがなってくださった主を否定せずに（第二ペテロ二・一）、さらに富むことが、どうしてできるでしょうか。そうです、すでに生活の必需品を持っている人が、それ以上のものを得ようとし、また目指すとします。それで罪がないということが、どうしてありうるでしょうか。私たちの主は言われます。「地上に、宝をたくわえてはなりません」（マタイ六・一九）。それにもかかわらず、あなたがお金や財産をたくわえ、またたくわえようとするとします。それは、「虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出す」ようなものです（マタイ六・一九）。家に家を建て連ね、田畑に田畑をまし加えようとするとします（イザヤ五・八）。それなら、なぜ自分をクリスチャンと呼ぶのですか。あなたは、イエス・キリストに従っていません。従おうとも思っていません。それなのに、なぜキリストの名で自分を呼ぶのですか。主ご自身が言われます。「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのですか」（ルカ六・四六）。

（二三）　あなたがたは、こう問うかもしれません。「だが、財産をたくわえてはならないなら、私たちは財産をどうすればよいのか。私たちには、使う必要のある以上のものがあるのだ。それを投げ捨てなければならないのか」。私は答えます。たとえ財産を海に投げ込んでも、火に投げ入れて焼き尽くしても、今よりはましな使い方でしょう。子孫のためにたくわえること、愚かさとぜいたくのために自分に費やすこと。財産を投げ捨てるやり方として、これほど有害なやり方は見つかりません。財産を投げ捨てるあらゆる方法の中で、この二つこそ最悪です。キリストの福音に最も反し、あなたがた自身の魂に最も有害なのです。

このうち後者が、あなたがた自身の魂にどれほど有害であるかは、近ごろのある著作家が見事に示しています。

「私たちがお金を浪費するなら、神から与えられたタラントを浪費する罪を犯すだけではありません。私たちは、自分にさらに害を加えるのです。この有益なタラントを、自分を堕落させる強力な手段に変えてしまうのです。お金は、誤って使われるかぎり、何かの誤った気質を支えるために使われ、何かのむなしい不合理な欲を満たすために使われるからです。そうした欲を、私たちはクリスチャンとして捨てなければならないのです。

「機知やすぐれた才能は、ただむだに費やされるだけでは済まず、それを持つ人をもっと大きな愚かさにさらします。それと同じように、お金も、ただむだに費やされるだけでは済みません。理性と宗教に従って使われないなら、お金は、それがなかった場合よりも愚かで、ぜいたくな生活を人々に送らせるのです。ですから、もしお金をほかの人に善を行うために使わないなら、自分を害するために使うことになるのです。あなたは、こういう人と同じことをしているのです。自分で飲めば血をたぎらせてしまうだけの強壮剤を、病気の友に与えることを拒む人です。余分なお金とは、まさにそういうものだからです。それを必要としている人に与えれば、それは強壮剤です。必要でもない何かのために自分に費やせば、それはあなたの心をたぎらせ、乱すだけです。

「富が本当に役に立つのでもなく、私たちが本当に必要としているのでもないところで、富を使うとします。そのとき、私たちは、ただ自分に大きな害を与えるために使っているだけです。不合理な欲を生み出し、悪い気質を養い、愚かな情念にふけり、むなしい心の傾きを支えるために使っているのです。ぜいたくな飲み食い、りっぱな衣服とりっぱな家、威儀と供回り、華やかな楽しみと娯楽。これらはどれもみな、本来、私たちの心を害し、乱すものだからです。それらは、私たちの本性のあらゆる愚かさと弱さとの糧であり、養分です。それらはみな、支えられるべきでない何かを支えるものです。それらは、神の事柄を味わう、あの心の慎みと敬虔さに反しています。それらは、私たちの心にかかる重しの数々です。それらのために、私たちは、考えと心の思いとを上にあるものへ引き上げることが、できにくくなり、またしたくなくなるのです。

「ですから、このように使われたお金は、ただ浪費され、失われるだけではありません。悪い目的とみじめな結果のために使われるのです。私たちの心を堕落させ、乱すために、私たちが福音の崇高な教えに従えなくなるようにするために、使われるのです。それは、貧しい人々にお金を渡さずにおいて、自分のために毒を買うようなものにすぎません」。

（二四）どんな道理にかなった目的のためにも必要でないものを、たくわえる人々も、同じように弁解の余地がありません。

「ある人が、手や目や足を持っていて、それを必要としている人々に与えることができるとします。その人が、それを目の見えない、足の不自由な兄弟たちに与える代わりに、箱にしまい込んで鍵をかけたとします。私たちは当然、その人を人でなしと見なすのではないでしょうか。目や手を必要としている人々にそれを与えれば、永遠の報いを受ける資格を得られます。それなのに、もしその人が、むしろそれをため込んで楽しむほうを選ぶとします。私たちは当然、その人を正気でないと見なすのではないでしょうか。

「さて、お金は、目や足と非常によく似た性質を持っています。ですから、貧しい人々や苦しんでいる人々は、必要な用のためにお金を必要としています。それなのに、私たちがそれを箱にしまい込んで鍵をかけるなら、あの人の残酷さから遠くありません。手や目を、それを必要としている人々に与えるよりも、ため込むほうを選ぶ人の残酷さです。もし、お金をよく用いて永遠の報いを受ける資格を得るよりも、それをたくわえるほうを選ぶなら、私たちは、あの人の狂気と同じ罪を犯しています。目や手を、必要としている人々に与えて永遠に祝福された者となるよりも、しまい込むほうを選ぶ人の狂気です」。

（二五）富んでいる者が天国にはいるのが、これほどむずかしい（マタイ一九・二三）もう一つの理由は、ここにあるのではないでしょうか。彼らの大多数は、のろいの下に、神の特別なのろいの下にあります（マラキ三・九）。彼らは、生活の全体の流れにおいて、絶えず神の物を盗み（マラキ三・八）、主人の財産を横領し、浪費しています（ルカ一六・一）。そして、まさにそのことによって、自分の魂を堕落させているのです。それだけではありません。彼らは、貧しい人、飢えた人、裸の人から盗み、やもめとみなしごを虐げています。そし

て、取り除くことができるのに取り除かない、あらゆる欠乏と苦しみと悩みとについて、自分に責任を負わせているのです。彼らが不必要にたくわえたり費やしたりするもの、それがないために滅びる人々がいます。そうです、そのすべての人々の血が、地から彼らを訴えて叫んでいる（創世記四・一〇）のではないでしょうか。ああ、彼らは、生ける者と死ねる者とをさばくかたに（第一ペテロ四・五）、どんな申し開きをするのでしょうか！

（二六）第四に、自分に必要でないものを用いる正しい方法は、私たちの主の言葉から学ぶことができます。それは、前に述べた言葉と対をなす言葉です。「自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい」（マタイ六・二〇）。あなたが余せるものは何でも、この世が与えうるよりも確かな保証のある所に預けなさい。あなたの宝を天の銀行にたくわえなさい。そうすれば、神はかの日に、それを返してくださいます。「貧しい者をあわれむ者は主に貸すのです」（箴言一九・一七）。その人が施すものは何であれ、その人に返されるのです。主は言われます。「それをわたしの借りにしておいて」ください（ピレモン一八）。けれども、そのうえ、「あなたが、あなた自身をわたしに負うている」のです（ピレモン一九）！

澄んだ目で、まっすぐな心で、貧しい人々に与えなさい。そして、「神にこれだけささげた」と書きつけなさい。なぜなら、主はこう言われるからです。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのです」（マタイ二五・四〇）。

これこそ、「忠実な思慮深い家令」（ルカ一二・四二）の務めです。何か特別な事情がそれを求めるのでなければ、その家令は、家も土地も元手も、多かれ少なかれ、売りはしません。また、それをむなしいことに浪費しないのと同じく、それを増やそうと願ったり努めたりもしません。そうではなく、主人がそれを自分の手にゆだねてくださった、あの賢く道理にかなった目的のために、それをすべて用いるのです。賢い家令は、いのちと信心とにかかわるもの（第二ペテロ一・三）を自分の家族に備えます。そのあと、そのつど残る「不正の富」（ルカ一六・九）のすべてで、自分のために友だちをつくります。それは、自分が尽きたとき、彼らが自分を「永遠のすまいに迎えてくれる」ためです（ルカ一六・九）。すなわち、いつであれ彼の地上の幕屋がこわれるときに（第二コリント五・一）、迎えてもらうためです。先にアブラハムのふところに送られた人々がいます（ルカ一六・二二）。彼らは、彼のパンを食べ、彼の羊の毛を着て（ヨブ三一・二〇）、その慰めのゆえに神をほめたたえた人々です。その人々が、彼をパラダイスに迎え、「天にある」、神の「永遠の家」に迎えるのです（第二コリント五・一）。

（二七）ですから、私たちは、私たちの偉大な主であり主人である方から権威を受けた者として、「この世で富んでいる」あなたがたに「命じ」ます（第一テモテ六・一七）。アガトエルゲイン（ἀγαθοεργεῖν）、すなわち習慣的に善を行い、良きわざを続けて生きるようにと命じるのです（第一テモテ六・一八）。天にいます「あなたがたの父」が「慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となりなさい（ルカ六・三六）。父は善を行い、やめることがありません。「慈悲深い者と」なりなさい（ルカ六・三六）。どこまでしょうか。あなたがたの力に応じて、神が与えてくださるあらゆる能力をもってです。これを、善を行うことのただ一つの尺度としなさい。世のけちな格言や習慣を尺度にしてはなりません。私たちは、あなたがたが「良いわざに富」むように命じます（第一テモテ六・一八）。多く持っているのですから、豊かに与えるように命じます。「ただで受けたのだから、ただで与え」なさい（マタイ一〇・八）。天のほかには、どこにも宝をたくわえないようにしなさい。ひとりひとりの必要に応じて、「惜しみなく施」しなさい（第一テモテ六・一八）。惜しげなく施し、貧しい者に与えなさい（詩篇一一二・九）。飢えた者に、あなたがたのパンを分け与えなさい（イザヤ五八・七）。裸の者に着せ、旅人をもてなし、獄にいる人々に救いの品を届けるか、送りなさい（マタイ二五・三五〜三六）。病人をいやしなさい（マタイ一〇・八）。奇跡によってではなく、時宜にかなったあなたがたの援助に神が祝福を与えてくださることによってです。ひどい欠乏のために今にも滅びようとした者の祝福が、あなたに来るようにしなさい（ヨブ二九・一三）。しえたげられる者を守り、みなしごのために弁護し（イザヤ一・一七）、やもめの心を喜び歌わせなさい（ヨブ二九・一三）。

（二八）　私たちは、主イエス・キリストの名によって、あなたがたが「人に分け与えることを喜」ぶように勧めます（第一テモテ六・一八）。原語ではコイノーニクース・エイナイ（κοινωνικοὺς εἶναι）です。すなわち、昔の信者たちと（外の境遇は同じでなくても）同じ霊を持つように勧めます。彼らは、エン・テー・コイノーニアー（ἐν τῇ κοινωνίᾳ）、すなわちあの祝福された聖い交わりのうちに、ひたすらとどまっていました（使徒二・四二）。その交わりでは、「だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた」のです（使徒四・三二）。家令になりなさい。神と貧しい人々との、忠実な思慮深い家令に（ルカ一二・四二）なりなさい。あなたがたが貧しい人々と違うのは、次の二つの点だけです。第一に、あなたがたの必要は、あなたがたの手に残っている主人の財産の分け前から、まず満たされること。第二に、あなたがたには、与える幸いがあることです（使徒二〇・三五）。こうして、「よい土台を自分のために築き上げ」なさい（第一テモテ六・一九）。今ある世においてではなく、むしろ「未来に備えて」築くのです（第一テモテ六・一九）。それは、永遠のいのちを得るためです。確かに、この世のものであれ永遠のものであれ、神のあらゆる祝福の大いなる土台は、主イエス・キリストです。キリストの義と血であり、キリストが私たちのためになさったこと、苦しまれたことです。そして、この意味では、ほかの土台を「すえることは、だれにもできません」（第一コリント三・一一）。そうです、使徒にもできず、天からの御使にもできません（ガラテヤ一・八）。けれども、キリストの功績によって、私たちがキリストの名によって行うことは何でも、良い報いを受ける土台となります。それは、「それぞれその働きに応じて報酬を得る」日のための土台です（第一コリント三・八）。ですから、あなたは「朽ちる食物のためではなく、永遠のいのちに至る朽ちない食物のために働」きなさい（ヨハネ六・二七）。ですから、今、「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてな」しなさい（伝道九・一〇）。ですから、次のようにしなさい。

良い機会を一つも見過ごすな。
飛び去る黄金のときをつかみ取り、
わずかな、はかない年月によって、永遠を確かなものとせよ！

あなたは、「耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものとを求め」なさい（ローマ二・七）。あらゆる良きわざを、絶えず熱心に行いながら、あの幸いなときを待ちなさい。王がこう言われるときです。「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれました」（マタイ二五・三五～三六）。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」（マタイ二五・三四）。

説教二十九　山上の説教（九）

「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからです。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできません。それだから、あなたがたに言っておきます。何を食べようか、何を飲もうかと、自分のいのちのことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらってはなりません。いのちは食物にまさり、からだは着物にまさるではありませんか。空の鳥を見なさい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしません。それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていてくださいます。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではありませんか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができるでしょうか。また、なぜ、着物のことで思いわずらうのですか。野の花がどうして育っているか、考えて見なさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、あなたがたに言いますが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるでしょうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらってはなりません。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものです。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じです。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるでしょう。だから、あすのことを思いわずらってはなりません。あすのことは、あす自身が思いわずらうでしょう。一日の苦労は、その日一日だけで十分です」（マタイ六・二四～三四）

（一）　アッスリヤの王は、イスラエルを捕囚として連れ去ったあと、諸国の民を連れてきて、サマリヤの町々に住まわせました（列王紀下一七・二四）。その民について、「彼らは主を敬ったが」、また「自分たちの神々にも仕えた」と記されています（列王紀下一七・三三）。霊感を受けた記者は言います。「これらの民は主を敬い」（列王紀下一七・四一）、主に外面の奉仕をささげました。これは、知識によるものではなかったとしても、彼らに神を恐れる心があったことのはっきりした証拠です。けれども、彼らは「またその刻んだ像にも仕えたが、その子たちも、孫たちも同様であって、彼らはその先祖がおこなったように今日までおこなっている」のです（列王紀下一七・四一）。

今日のクリスチャンの大部分の行いは、この昔の異教徒の行いに、何とよく似ていることでしょう！　彼らは「主を敬」っています（列王紀下一七・三三）。主に外面の奉仕もささげ、それによって、神を恐れる心がいくらかあることを示しています。けれども、彼らは同じように「自分たちの神々にも仕え」ているのです（列王紀下一七・三三）。アッスリヤ人に教えた者たちがいたように、今も「その国の神のおきてを」彼らに「教え」る者たちがいます（列王紀下一七・二七）。その神とは、今日までその国がその名を帯びている神であり、かつてそこで聖い礼拝をもって拝まれていた神です。「しかし」（列王紀下一七・二九）、彼らは主だけに仕えているのではありません。そうするほどには、主を敬っていないのです。かえって、「その民はおのおの自分の神々を造って」います（列王紀下一七・二九）。「民は皆住んでいる町々で」そうしているのです（列王紀下一七・二九）。「これらの民は主を敬」っています（列王紀下一七・四一）。主を拝む外面の形を捨ててはいません。けれども、「その刻んだ像に」仕えているのです（列王紀下一七・四一）。それは、しろがねとこがね、人の手のわざです（詩篇一一五・四）。金銭と快楽と称賛という、この世の神々が、彼らの奉仕をイスラエルの神と分け合っています。いや、分け合う以上のものを奪っているのです。「その子たちも、孫たちも」（列王紀下一七・四一）、これと同じならわしに

従っています。「彼らはその先祖がおこなったように今日までおこなって」いるのです（列王紀下一七・四一）。

（二） 人の普通の言い方に従って大まかに言えば、あの哀れな異教徒たちは「主を敬」ったと言われています（列王紀下一七・四一）。けれども、聖霊がすぐに、事の真実と本当の性質に従って、こう付け加えておられることに気づきます。彼らは主を敬わず、主がヤコブの子孫に命じられた律法と戒めにも従っていません（列王紀下一七・三四）。主は「彼らと契約を結び、彼らに命じて言われました（列王紀下一七・三五）。「あなたがたは他の神々を敬ってはなりません」。また、「彼らに仕え」てもなりません（列王紀下一七・三五）。「ただあなたがたの神、主を敬わなければなりません。主はあなたがたをそのすべての敵の手から救い出されるでしょう」（列王紀下一七・三九）。

誤ることのない神の御霊は、普通クリスチャンと呼ばれているこの哀れな人々に、同じ判決を下されます。実に、神の御霊によって心の目を開かれ（エペソ一・一八）、神の事柄を見分けるようになった人々もみな、同じ判決を下します。事の真実と本当の性質に従って言えば、彼らは主を敬わず、主に仕えてもいません。彼らは、主が彼らと結ばれた契約にも、主が彼らに命じられた律法と戒めにも、従っていないからです。その戒めとは、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」（マタイ四・一〇）というものです。彼らは今日まで、ほかの神々に仕えています。そして、「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできません」（マタイ六・二四）。

（三） だれであれ、これを目指すこと、すなわちふたりの主人に仕えようと試みることは、何とむなしいことでしょう！ そのような試みが避けようもなくどんな結果になるかは、たやすく見通せるではありませんか。「一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじる」のです（マタイ六・二四）。この文の二つの部分は、別々に述べられてはいますが、互いに結びつけて理解すべきです。後半は前半の結果だからです。人は、愛する者に自然に親しみます。その主人に固く結びついて、進んで、忠実に、勤勉に仕えるのです。その一方で、憎む主人を、少なくとも次の程度まではうとんじます。その命令をほとんど顧みず、従うとしても、いいかげんに、不注意に従うのです。ですから、世の知者たちがどう考えようと、「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできません」（マタイ六・二四）。

（四） ここで「富」と訳されている語は、原語ではマモンです。マモンは、富をつかさどると考えられていた異教の神の名です。ここでは、富そのもの、すなわち金と銀、あるいは一般に金銭を指しています。また、よくある言葉のあやによって、金銭で買えるすべてのもの、たとえば安楽や名誉や官能の快楽をも指しています。

けれども、ここで、神に仕えるとは何のことであり、富に仕えるとは何のことだと理解すべきでしょうか。

私たちは、神を信じないかぎり、神に仕えることはできません。これが、神に仕えることの、ただ一つの真の土台です。ですから、神を信じることが、神への奉仕の第一の大きな枝です。すなわち、「キリストにおいて世をご自分に和解させ」ておられる方として（第二コリント五・一九）、愛し、赦す神として、神を信じることです。

そして、このように神を信じることには、神を私たちの力として信頼することが含まれます。神から離れては、私たちは何一つできません（ヨハネ一五・五）。神は、刻々と上からの力を私たちに授けてくださいます（ルカ二四・四九）。その力がなければ、神に喜ばれることはできないのです（ヘブル一一・六）。また、神を私たちの助け、悩める時のただ一つの助けとして（詩篇四六・一）信頼することです。神は救いの歌で私たちを囲んでくださいます。また、神を私たちの盾、私たちの守り手として信頼することです。神は、私たちを囲むすべての敵の上に、私たちの頭をもたげてくださる方です（詩篇三・三、二七・六）。

それには、神を私たちの幸いとして信頼することも含まれます。神は、霊たちの中心であり、私たちの魂のただ一つの休み場です。私たちのあらゆる能力に見合い、神が私たちに与えられたすべての願いを満たすのに足りる、ただ一つの善です。

それにはまた（これは前のことと深く結びついていますが）、神を私たちの目的として信頼することも含まれます。すべてのことにおいて神に目を注ぐこと、

すべてのものを、ただ神を楽しむための手段として用いることです。どこにいても、何をしていても、見えない方が（ヘブル一一・二七）喜んで私たちを見ておられるのを見ることです。そして、キリスト・イエスにあって、すべてのことを神に帰することです。

（五）このように信じることが、神に仕えることによって理解すべき第一のことです。第二は、神を愛することです。

さて、聖書が述べる仕方で、神を愛するとはどういうことでしょうか。神ご自身が私たちに求め、求めることによって、私たちのうちに成し遂げると約束しておられる仕方で愛するとは、どういうことでしょうか。それは、神を唯一の神として愛することです。すなわち、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして」神を愛することです（マルコ一二・三〇）。それは、ただ神だけを、神ご自身のゆえに願うことです。ほかの何ものも、神との関わりにおいてでなければ願わないことです。神を喜ぶこと、主を喜びとすることです。神のうちに幸いを求めるだけでなく、見いだすことです。万人にぬきんでた方として（雅歌五・一〇）神を楽しむこと、私たちの神、私たちのすべてとして、神のうちに休むことです。一言で言えば、私たちをいつも幸いにするほどに、神を自分のものとすることです。

（六）神に仕えることによって理解すべき第三のことは、神に似ること、すなわち神に倣うことです。

古代の教父も、こう言っています。Optimus Dei cultus, imitari quem colis.（あなたが礼拝する方に倣うことこそ、神への最上の礼拝、すなわち最上の奉仕です）

ここで言うのは、心の霊において神に倣い、神に似ることです。真にクリスチャンらしく神に倣うことは、ここから始まるからです。「神は霊」です（ヨハネ四・二四）。神に倣い、神に似ようとする者は、「霊とまことをもって」そうしなければなりません（ヨハネ四・二四）。

さて、神は愛です（第一ヨハネ四・八）。ですから、心の霊において神に似る人々は、同じ姿に変えられます（第二コリント三・一八）。神が慈悲深いように、彼らも慈悲深いのです（ルカ六・三六）。彼らの魂は、愛そのものです。彼らは、親切で、情け深く、あわれみに富み、心が優しいのです。しかも、善良で寛容な人々にだけでなく、気むずかしい人々にもそうです（第一ペテロ二・一八）。そうです、彼らは神のように、すべての人を愛します。そして、そのあわれみは、神のすべてのみわざに及ぶのです（詩篇一四五・九）。

（七）神に仕えることによって理解すべきことが、もう一つあります。それは、神に従うことです。霊をもってだけでなく、体をもって神の栄光をあらわすこと（第一コリント六・二〇）、神の外面の戒めを守ることです。神が命じられたことを何でも熱心に行い、神が禁じられたことを何でも注意深く避けることです。澄んだ目と清い心とをもって、生活のあらゆる普通の行いをすることです。そのすべてを、聖い、燃える愛のうちに、イエス・キリストを通して神へのいけにえとしてささげることです。

（八）では次に、他方の、富に仕えることによって何を理解すべきかを考えましょう。第一に、それには、富に、金銭に、あるいは金銭で買えるものに、私たちの力として頼ることが含まれます。それを、手がけている事を何でも成し遂げるための手段とするのです。また、それに私たちの助けとして頼ることです。それによって、悩みの中で慰められ、悩みから救い出されることを期待するのです。

それには、幸いを求めて世に頼ることが含まれます。「人のいのち」（ルカ一二・一五）、すなわち人生の慰めが、たくさんの物を持つことにある、と考えることです。見えるもの（第二コリント四・一八）のうちに休みを求め、外の豊かさのうちに満足を求めることです。神の外では決して見いだせない満足を、世のもののうちに期待することです。

そして、こうしているなら、私たちは世を自分の目的とせずにはいられません。私たちの企てのすべてとは言わないまでも、少なくとも多くの企てや行いや目論見の、究極の目的とするのです。そうした企てにおいて、私たちは、永遠のものには何の顧慮もしないでしょう。ただ富を増やすこと、快楽や称賛を得ること、この世のものをもっと多く手に入れることだけを目指すのです。

（九）富に仕えることには、第二に、世を愛することが含まれます。世をそれ自体のゆえに願い、世のものに喜びを置き、それに心を向けることです。そこ

に自分の幸いを求めることです（実際には、それを見いだすことはできないのですが）。魂の全重量をかけて、この折れた葦のつえに寄りかかることです。けれども、日々の経験が示すように、それは私たちを支えることができず、ただ私たちの「手を刺し通す」だけです（イザヤ三六・六）。

（一〇） 世に似ること、世と同じ姿になることが、富に仕えることによって理解すべき第三のことです。目論見だけでなく、願いも気質も心の思いも、世のそれにふさわしいものを持つことです。地上の、肉的な思いを持ち、地上のものに鎖でつながれていることです。わがままで、度を越して自分を愛する者となり（第二テモテ三・二）、自分の到達したところを高く評価することです。人のほまれ（ヨハネ一二・四三）を願い、喜ぶこと、そしりを恐れ、避け、忌みきらうことです。忠告に耐えられず、すぐにいらだち、たちまち悪をもって悪に報いる（第一ペテロ三・九）ことです。

（一一） 富に仕えることは、最後に、外面で世の格言と習慣に合わせることによって、世に従うことです。ほかの人々が歩くように、ありふれた道を、広く、平らな、踏みならされた道を歩むことです。流行に従い、多数に従い（出エジプト二三・二）、ほかの隣人たちと同じようにすることです。すなわち、肉とその思いとの欲するままを行い（エペソ二・三）、自分の欲望と好みを満たすことです。自分自身にいけにえをささげ、言葉においても行いにおいても、ふだんの歩みの全体で、自分の安楽と快楽とを目指すことです。

さて、私たちは、このように神と富とに兼ね仕えることはできません（マタイ六・二四）。これ以上に、否定しようもなく明らかなことがあるでしょうか。

（一二） だれでも、両方に仕えては心安らかでいられないことが分かるのではないでしょうか。神と世との間でどっちつかずにふるまうなら、確かに両方に失望し、どちらにも休みを得られません。そのことが分かるのではないでしょうか。神を恐れてはいても愛してはおらず、神に仕えてはいても心をつくしてはいない人がいます。その人は、宗教の労苦だけを持ち、その喜びを持っていません。そういう人は、何と心安らかでない状態にいることでしょう。その人には、自分をみじめにするのに十分なだけの宗教はあっても、幸いにするのに十分なだけの宗教はありません。その宗教は、彼に世を楽しませず、世は、彼に神を楽しませません。こうして、両者の間で迷っているために（列王紀上一八・二一）、彼は両方を失い、神にも世にも平安を持たないのです。

（一三） だれでも、自分自身と矛盾せずに両方に仕えることはできない、と分かるのではないでしょうか。この二人の主人の両方に従おうと努め、「神と富とに兼ね仕え」ようとする人がいます（マタイ六・二四）。その人のふるまい全体には、絶えず矛盾が現れるに違いありません。これ以上にあからさまな矛盾が考えられるでしょうか。その人は、まことに「二つの道を行く罪人」です。一歩進んでは、一歩退くのです。一方の手で絶えず建て上げては、もう一方の手で引き倒しています。彼は罪を愛し、かつ憎みます。いつも神を求めていながら、いつも神から逃げているのです。したいと思い、したくないとも思います。一日として同じ人ではありません。いや、一時間続けて同じ人でいることもないのです。彼は、あらゆる種類の相反するものの寄せ集めであり、一つにごたまぜにされた矛盾の山です。ああ、どちらか一方に決めて、自分と矛盾しない者となりなさい！ 右に向かうか、左に向かうか、どちらかにしなさい。富が神ならば、富に仕えなさい。主が神ならば、主に仕えなさい。けれども、心をつくしてでなければ、どちらに仕えようとも決して考えてはなりません。

（一四） 道理をわきまえる人、ものを考える人ならだれでも、神と富とに兼ね仕えることなど、とうていできないと分かるのではないでしょうか。両者の間には、最も絶対的な対立が、最も和解しがたい敵意があるからです。地上で最も相反するもの、すなわち火と水、やみと光の間の対立も、神と富との間の対立に比べれば、無に等しくなります。ですから、どの点で一方に仕えるにしても、あなたは必ず他方を捨てることになります。あなたは、キリストを通して神を信じていますか。あなたの力、助け、盾、はなはだ大きい報い（創世記一五・一）として、神に信頼していますか。あなたの幸い、すべてにおけるあなたの目的として、何にもまさって神に信頼していますか。それなら、あなたは富に頼ることはできません。神へのこの信仰を持っているかぎり、富に頼ることは絶対にできないのです。あなたはこのように富に頼っていますか。それなら、あなたは信仰を捨てたのです（第一テモテ五・八）。あなたは生ける神に頼っていません（第一テモテ四・一〇）。あなたは神を愛していますか。神のうちに幸いを求め、見い

だしていますか。それなら、あなたは世も世にあるものも愛することはできません（第一ヨハネ二・一五）。あなたは世に対して十字架につけられ、世もあなたに対して十字架につけられているのです。あなたは世を愛していますか。あなたの心の思いは下にあるものに向けられていますか（コロサイ三・二）。地上のもののうちに幸いを求めていますか。それなら、あなたが神を愛することはできません。それなら、父の愛はあなたのうちにありません（第一ヨハネ二・一五）。あなたは神に似ていますか。あなたの父が慈悲深いように、あなたも慈悲深いですか（ルカ六・三六）。あなたは心を新たにすることによって造りかえられ（ローマ一二・二）、あなたを造られた方のかたちに変えられていますか（コロサイ三・一〇）。それなら、あなたは今の世と同じ姿になることはできません。あなたは、世のあらゆる心の思いと欲とを捨てたのです。あなたは世と同じ姿になっていますか。あなたの魂は、なお土に属している形をとっていますか（第一コリント一五・四九）。それなら、あなたは心の霊において新たにされていません。天に属している形をとっていないのです（第一コリント一五・四九）。あなたは神に従っていますか。御使たちが天で行うように、地で神のみこころを行うことに熱心ですか（マタイ六・一〇）。それなら、あなたが富に従うことはできません。それなら、あなたは世に公然と挑んでいるのです。世の習慣と格言を足で踏みにじり、それに従うことも、それに導かれることもしないのです。あなたは世に従っていますか。ほかの人々と同じように生きていますか。人に喜ばれようとしていますか。自分を喜ばせていますか。それなら、あなたは神の僕であることはできません（ガラテヤ一・一〇）。あなたは、あなたの主人であり父である悪魔から出た者です（ヨハネ八・四四）。

（一五）ですから、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕え」なさい（マタイ四・一〇）。ふたりの主人に従おうとする考え、神と富とに兼ね仕えようとする考えを、すべて捨てなければなりません。神のほかには、どんな目的も、どんな助けも、どんな幸いも、自分の前に置いてはなりません。地においても天においても、神のほかに何も求めてはなりません。神を知り、神を愛し、神を楽しむことのほかに、何も目指してはなりません。これこそが、地上でのあなたがたの務めのすべてです。あなたがたが道理にかなって持ちうるただ一つの目当てであり、すべてのことにおいて追い求めるべきただ一つの目論見です。だからこそ、主は話を続けてこう言われるのです。「それだから、あなたがたに言っておきます。何を食べようか、何を飲もうかと、自分のいのちのことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらってはなりません」（マタイ六・二五）。これは深く重い指示です。私たちはこれをよく考え、徹底的に理解しなければなりません。

（一六）私たちの主はここで、この世の生活の事柄についてさえ、まったく何も考えないことを求めておられるのではありません。浮ついた、無頓着な気質は、イエス・キリストの宗教全体から最も遠く離れたものです。また主は、私たちが仕事を怠り、仕事にだらしなく、ぐずぐずしていることを求めておられるのでもありません（ローマ一二・一一）。これもまた、主の宗教の精神と特質の全体に反しています。クリスチャンは、泥酔を忌みきらうのと同じように怠惰を忌みきらい、姦淫から逃げるのと同じように無為から逃げます。クリスチャンは、神が喜ばれる一種の思いと配慮があることを、よく知っています。それは、神の摂理が自分を召した外の仕事を、ふさわしく果たすためにどうしても必要なものです。

だれもが働いて自分で得たパンを食べること（第二テサロニケ三・一二）、それが神のみこころです。そうです、だれもが自分の親族のために、ことに自分の家族のために備えること（第一テモテ五・八）も、神のみこころです。また、私たちが「何人にも借りがあってはならない」こと（ローマ一三・八）、すべての人の前で正しいものを備えること（ローマ一二・一七）も、神のみこころです。けれども、これは、いくらか考えをめぐらし、心にいくらかの配慮を持たなければできません。そうです、しばしば、長く真剣に考え、多くの熱心な配慮をしなければできないのです。したがって、私たちの祝福された主は、自分と家族のために備えようとするこの配慮を責めてはおられません。すべての人にその当然受けるべきものを返そうとするこの思いも、責めてはおられません。そうです、それは、私たちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことです（第一テモテ二・三）。

手がけていることについて、何をしようとしているのかがはっきり分かるように考えをめぐらすこと。仕事に取りかかる前に、その計画を立てること。それは、神にとって良いことであり、みこころにかなうことです。また、その仕事でどんな手順を踏むべきかを、そのつど注意深く考えるのは正しいことです。最も効果的な仕方で仕事を進めるために、すべてを前もって準備するのも正しいことです。ある人々が「頭の配慮」と呼ぶこの配慮を責めることは、決して私たちの主の意図ではありませんでした。

（一七）　主がここで責めておられるのは、心の配慮です。すなわち、気をもむ不安な心配、苦しみを伴う心配、魂にであれ体にであれ害を与えるあらゆる心配です。主が禁じておられるのは、悲しい経験が示すように、血をすり減らし、気力を飲み尽くす心配です。恐れているあらゆる悲惨を先取りし、まだその時ではないのに来て、私たちを苦しめる心配です（マタイ八・二九）。主が禁じておられるのは、あすに起こるかもしれないことを恐れて、きょうの恵みに毒を盛る心配だけです。将来の欠乏を案じるあまり、今の豊かさを楽しめない心配だけです。このような心配は、ひどい病、魂の重い病であるだけではありません。神に対する憎むべき罪過であり、最も深く染まった罪なのです。それは、恵み深い統治者、万物を賢く配する方に対する、大きな侮辱です。それは必ず、偉大な審判者が公義を行われない（創世記一八・二五）、万物を良く整えられない、ということを含んでいます。それは、神には知恵か善かのどちらかが欠けている、ということをはっきりと含んでいます。私たちに何が必要かを神がご存じないなら、知恵が欠けていることになります。神に信頼するすべての人に、神がそれを備えてくださらないなら、善が欠けていることになります。ですから、この意味で思いわずらわないように気をつけなさい。何事も思いわずらってはなりません（ピリピ四・六）。不安な思いわずらいをしてはなりません。不安な心配は許されない心配である、というのが、はっきりとした確かな規則です。澄んだ目でただ神だけを見つめ、すべての人の前で正しいものを備えるために、自分にできるかぎりのことをしなさい。そのうえで、すべてをもっと良い手にゆだね、結果はすべて神にまかせなさい。

（一八）　この種の思いわずらい、すなわち不安な思いわずらいは、自分のいのちのことでさえ、してはなりません。「何を食べようか、何を飲もうかと、自分のいのちのことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらってはなりません。いのちは食物にまさり、からだは着物にまさるではありませんか」（マタイ六・二五）。では、神がより大きな賜物であるいのちを与えられたのなら、それを支える食物を与えてくださらないはずがあるでしょうか。神があなたがたに体を与えられたのなら、それをおおう着物を与えてくださることを、どうして疑えるでしょうか。あなたがたが自分を神にゆだね、心をつくして神に仕えるなら、なおさらです。目の前の「空の鳥を見」なさい（マタイ六・二六）。「まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしません」（マタイ六・二六）。それでも、何一つ欠けていません。「それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていてくださいます。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではありませんか」（マタイ六・二六）。神を受け入れることのできる被造物であるあなたがたは、神の目に、もっと重んじられているのではありませんか。存在の階段の中で、もっと高い位にあるのではありませんか。「あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができるでしょうか」（マタイ六・二七）。それなら、このように気をもんで思いわずらうことから、何の益があるでしょうか。それは、どの点から見ても実りがなく、役に立ちません。

「また、なぜ、着物のことで思いわずらうのですか」（マタイ六・二八）。どこに目を向けても、毎日、忠告を受けているではありませんか。「野の花がどうして育っているか、考えて見なさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、あなたがたに言いますが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいませんでした」（マタイ六・二八～二九）。「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草」は、刈り取られ、焼かれ、もう二度と見られなくなります。その草「でさえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるでしょうか。ああ、信仰の薄い者たちよ」（マタイ六・三〇）。神は、あなたがたを、いつまでも存続するように、ご自分の永遠の姿を映すものとして造られたのです！　あなたがたは、

まことに信仰の薄い者です。そうでなければ、神の愛と配慮を疑うことはできないはずです。そうです、一瞬たりとも疑えないはずです。

（一九）地上に宝をたくわえないとしたら、「何を食べようか」（マタイ六・三一）。力をつくして神に仕え、目をただ神だけに据えるとしたら、「何を飲もうか」。世と同じ姿にならず、自分に益を与えてくれるかもしれない人々の機嫌をそこねるとしたら、「何を着ようか」。「だから」、そう「言って思いわずらってはなりません」（マタイ六・三一）。「これらのものはみな、異邦人が切に求めているもの」です（マタイ六・三二）。異邦人とは、神を知らない異教徒です（第一テサロニケ四・五）。けれども、あなたがたは、「あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである」（マタイ六・三二）ことを知っています。そして神は、それらを絶えず与えられるための、誤ることのない道を示してくださいました。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるでしょう」（マタイ六・三三）。

（二〇）「まず神の国」を「求めなさい」（マタイ六・三三）。ほかのどんな思いや配慮にも場所を与える前に、次のことを心にかけなさい。私たちの主イエス・キリストの父なる神が（エペソ一・三）、あなたがたの心を治めてくださることです。あなたがたの魂にご自分を現し、そこに住んで支配してくださることです。この神は、「そのひとり子を賜わった」方です（ヨハネ三・一六）。それは、あなたがたが御子を信じて、「滅びないで、永遠のいのちを得るため」でした（ヨハネ三・一六）。また、神が、「神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」てくださることです（第二コリント一〇・五）。神だけがあなたがたを支配されるようにしなさい。競う者なしに神が治められるようにしなさい。神があなたがたの心のすべてを所有し、ただひとりで支配されるようにしなさい。神を、あなたがたのただ一つの願い、喜び、愛としなさい。そうして、あなたがたのうちにあるすべてのものが、絶えず、「全能者にして主なる」神は「王なる支配者であられる」（黙示録一九・六）と叫ぶようにしなさい。

「神の国と神の義とを求めなさい」（マタイ六・三三）。義とは、神が心を治められることの実です。そして、義とは愛にほかなりません。すなわち、神への愛とすべての人への愛です。その愛はイエス・キリストへの信仰から流れ出て、謙そん、柔和、慈愛、寛容（コロサイ三・一二、ガラテヤ五・二二～二三）、忍耐、世に対して死んでいることを生み出します。また、神に対しても人に対しても、心のあらゆる正しい性向を生み出すのです。そして、これらによって、義はあらゆる聖い行いを生み出します。すべて愛すべきこと、ほまれあること（ピリピ四・八）を生み出します。神に受け入れられ、人に益となる、あらゆる信仰の働きと愛の労苦（第一テサロニケ一・三）を生み出すのです。

「神の義」（マタイ六・三三）。これは、どこまでも神の義です。それは、義なるイエス・キリスト（第一ヨハネ二・一）のゆえに与えられる、神ご自身の価なしの賜物です。ただキリストによってだけ、それは私たちのために買い取られたのです。また、それは神のわざです。聖霊の息吹によって、それを私たちのうちに成し遂げてくださるのは、ただ神だけです。

（二一）このことをよくわきまえるなら、私たちがいつもそれほどはっきりとは理解してこなかったほかの聖句にも、光が当たるかもしれません。聖パウロは、ローマ人への手紙の中で、信じないユダヤ人について語って、こう言っています。「彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかった」のです（ローマ一〇・三）。私は、この言葉の一つの意味は次のことだと思います。彼らは「神の義を知らない」のでした（ローマ一〇・三）。それは、すべての信者に帰せられるキリストの義を知らなかったというだけではありません。その義によって、信者のすべての罪は消し去られ、信者は神の恵みへと和解させられるのです。けれども、それだけでなく（ここではこちらのほうが、より直接に意味されているようですが）、彼らはあの内なる義を、あの心の聖性を知らなかったのです。それは、まさにふさわしく神の義と呼ばれるものです。キリストを通して与えられる神ご自身の価なしの賜物であり、また全能の御霊による神ご自身のわざだからです。そして、このことを「知らない」ので（ローマ一〇・三）、彼らは「自分の義を立てようと努め」たのです（ローマ一〇・三）。彼らは、まさに自分の義と呼ぶのがふさわしい、あの外側の義を立てようと骨折

りました。その義は、神の御霊によって成し遂げられたものでもなく、神に認められ、受け入れられたものでもなかったからです。彼らは、生れながらの自分の力で、それを行うことができたかもしれません。けれども、行い終えたとき、それは神の鼻にとって悪臭だったのです。それでも彼らは、これに頼って、「神の義に従わなかった」のです（ローマ一〇・三）。そうです、彼らは、神の義を得ることのできるただ一つの道である信仰に対して、心をかたくなにしたのです。「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられた」のです（ローマ一〇・四）。キリストは、「すべてが終った」と言われたとき（ヨハネ一九・三〇）、あの律法を、すなわち外面の儀式と祭儀の律法を終わらせられました。それは、もっとすぐれた義を、すなわち神のかたちを、信じるすべての者の魂の奥底にもたらすためでした。ご自分の血により、ただ一度ささげられた、ご自身という一つの供え物によってです。

（二二）　これと深く関わっているのが、ピリピ人への手紙にある使徒の言葉です。「わたしは」いっさいのものを「ふん土のように思っています。それは、わたしがキリストを得るため」です（ピリピ三・八）。すなわち、キリストの永遠の御国に入るためです。また、キリストを信じて、「キリストのうちに自分を見いだすようになるため」です（ピリピ三・九）。そのとき、私は「律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて」いるのです（ピリピ三・九）。「律法による自分の義ではなく」（ピリピ三・九）。それは、ただ外面だけの義、私が以前持っていた外側の宗教です。そのころ私は、「律法の義については落ち度のない者」（ピリピ三・六）であるから神に受け入れられる、と望んでいました。「キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義」です（ピリピ三・九）。それは、あの心の聖性、魂のすべての願いと気質と心の思いとが新たにされることです。それは「神から」の義であり（それは神のわざであって、人のわざではありません）、「信仰に基く」のです（ピリピ三・九）。すなわち、キリストを信じる信仰によるのです。私たちのうちにイエス・キリストが啓示されることにより、キリストの血を信じる信仰によるのです。ただこの信仰によってだけ、私たちは罪の赦しを得、聖別された人々に加わって受け継ぐものを得るのです（使徒二六・一八）。

（二三）　「まず」この「神の国」を、あなたがたの心のうちに「求めなさい」（マタイ六・三三）。また、この義を求めなさい。それは神の賜物であり、神のわざであり、あなたがたの魂のうちに新たにされた神のかたちです。「そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるでしょう」（マタイ六・三三）。すなわち、体に必要なすべてのものが与えられます。神が、ご自分の御国を進めるのに最もふさわしいと見られる量だけ、すべてが与えられるのです。これらのものは添えて与えられます。おまけとして、余分に与えられるのです。神の平安と神の愛とを求めるなら、あなたがたは、より直接に求めているもの、すなわち震われない国（ヘブル一二・二八）を見いだすだけではありません。求めていないもの、すなわち、それ自体のためには決して求めず、ただ前者との関わりにおいてだけ求めるものも、見いだすのです。あなたがたは御国への道の途中で、外のあらゆるものを、それがあなたがたのためになるかぎり、見いだすでしょう。この配慮を、神はご自分で引き受けてくださいました。自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねなさい（第一ペテロ五・七）。神は、あなたがたに必要なものをご存じです。欠けているものは何であれ、必ず満たしてくださいます。

（二四）　「だから、あすのことを思いわずらってはなりません」（マタイ六・三四）。地上にどう宝をたくわえ、どう世の財産を増やすかを、思いわずらってはなりません。食べられる以上の食物を、着られる以上の着物を、どう手に入れるかを思いわずらってはなりません。けれども、それだけではありません。体にどうしても必要なものについてさえ、不安な思いわずらいをしてはならないのです。まだずっと先の時期に何をするかを考えて、今から思い悩んではなりません。その時期は、おそらく決して来ないでしょう。あるいは、来てもあなたには関わりのないことでしょう。その前に、あなたはすべての波を越えて、永遠の岸に着いているでしょう。そのような遠い見通しは、どれもあなたのものではありません。あなたは、一日だけの被造物にすぎないからです。いや、もっと厳密に言えば、あすがあなたに何の関わり

があるでしょうか。なぜ、必要もないのに思い悩むのですか。神は、ご自分が与えられたいのちを支えるのに必要なものを、きょう、あなたのために備えてくださいます。それで十分です。自分を神の手にゆだねなさい。もう一日生きるなら、神はその日のためにも備えてくださるでしょう。

（二五）何よりも、将来のことへの心配を、今の務めを怠る口実にしてはなりません。これは、「あすのことを思いわずら」う（マタイ六・三四）最も致命的な仕方です。しかも、それは人々の間に何とありふれていることでしょう！私たちが多くの人に、良心に責められることのない状態を保つように（使徒二四・一六）、悪だと確信していることを控えるように、と勧めるとします。すると、彼らはためらわずにこう答えます。「それなら、どうやって生きていけというのか。自分と家族の面倒を見なくてもよいというのか」。そして彼らは、これが、知りながら故意に罪を犯し続ける十分な理由になると思い込んでいます。彼らは、やがて食べるパンを失うのでなければ、今すぐにでも神に仕えるのだが、と言います。おそらく、そう思ってもいるのでしょう。永遠に備えたいとは思っていても、生活の必需品に事欠くことを恐れているのです。こうして彼らは、一切れのパンのために悪魔に仕えます。欠乏を恐れて地獄へ突き進みます。いつか体に必要なものに事欠くことがないようにと、自分の哀れな魂を投げ捨てるのです！

このように事を神の手から取り上げる人々が、求めているまさにそのものを、しばしば得られずに失望するのは、不思議ではありません。地上のものを確保しようとして天を投げ捨てながら、天は失い、地上のものは得られないのも、不思議ではありません。ねたむ神は、ご自分の摂理の賢い道筋において、しばしばこのことを許されます。自分の思いわずらいを神にゆだねようとしない人々がいます。この世のものを思いわずらって、永遠のものにはほとんど関心を持たない人々です。ですから、彼らは自分で選んだその分け前そのものを失うのです。彼らのすべての企てには、目に見える枯れが臨みます。何をしても、栄えないのです。そのため、世のために神を捨てたあと、彼らは求めていなかったものだけでなく、求めていたものも失います。彼らは、神の国と神の義とに達しません。そのうえ、ほかのものも添えて与えられないのです。

（二六）「あすのことを思いわずら」う（マタイ六・三四）もう一つの仕方があります。それも、この言葉で同じように禁じられています。霊的な事柄についてさえ、誤った仕方で思いわずらうことがありうるのです。やがて起こるかもしれないことにあまりに気を取られて、今、私たちの手に求められていることを怠ってしまうのです。絶えず目をさまして祈っていないなら、私たちは何と知らず知らずのうちに、これに滑り込んでしまうことでしょう！　私たちは何とたやすく、一種の白昼夢に運び去られ、遠い計画を立て、自分の想像の中ですばらしい場面を描いてしまうことでしょう！　私たちは考えます。こういう所にいるようになったら、こういう時が来たら、どんなに善いことをするだろうか、と。暮らし向きがもっと楽になったら、どんなに役に立つ者となり、良きわざにどんなに富む者となるだろうか、と。こういう妨げがいったん取り除かれたら、どんなに熱心に神に仕えるだろうか、と。

あるいは、あなたは今、魂が重く沈んでいるかもしれません。神が、いわば御顔をあなたから隠しておられるのです。神の御顔の光が、ほとんど見えません。神のあがないの愛を味わうことができません。そのような心の状態にあるとき、こう言うのは何と自然なことでしょう。「ああ、神が再び御顔の光を私の魂の上に照されるとき（詩篇四・六）、私はどんなに神をほめたたえることだろう！神の愛が再び私の心に注がれるとき（ローマ五・五）、私はどんなに人々に、神をほめたたえるよう勧めることだろう！　そのときには、こうもし、ああもしよう。どこででも神のために語ろう。キリストの福音を恥としない（ローマ一・一六）。そのときには、時を生かして用いよう（エペソ五・一六）。受けたすべてのタラントを、余すところなく用いよう」。自分を信じてはなりません。今しないなら、そのときにもしないでしょう。「小事に忠実な人は」、それがどんな種類のものであれ、すなわち世の財産であれ、神への恐れや愛であれ、「大事にも忠実です」（ルカ一六・一〇）。けれども、もしあなたが今、一タラントを地の中に隠すなら（マタイ二五・二五）、そのときには五タラントを隠すでしょう。もちろん、それがいつか与えられるならの話です。けれども、それが与えられると期待する理由は、ほとんどありません。まことに、「持っている人は」、すなわち持っているものを用いる人は、「与えられて、いよいよ豊かになる」のです（マタイ

二五・二九)。けれども、「持っていない人は」、すなわち、多かれ少なかれすでに受けている恵みを用いない人は、「持っているものまでも取り上げられる」でしょう(マタイ二五・二九)。

(二七) また、あすの誘惑のことを思いわずらってはなりません。これもまた、危険なわなです。「こういう誘惑が来たら、私はどうしたらよいのか。どうして立っていられよう。私には抵抗する力がないと感じる。あの敵に勝つことはできない」と考えてはなりません。まったくそのとおりです。今必要としていない力を、あなたは今持っていません。あなたは今、その敵に勝つことはできません。そして今、その敵はあなたを襲ってはいないのです。今持っている恵みでは、今受けていない誘惑に立ち向かうことはできないでしょう。けれども、誘惑が来るときには、恵みも来ます。もっと大きな試練の中では、もっと大きな力が与えられます。苦難が満ちあふれるときには、神の慰めも、それに比例して満ちあふれるでしょう(第二コリント一・五)。ですから、どんな状況においても、神の恵みはあなたに対して十分です(第二コリント一二・九)。神は、きょう、あなたを「耐えられないような試錬に会わせる」ことはなさいません(第一コリント一〇・一三)。そして、どの試錬においても、「のがれる道も備えて」くださるのです(第一コリント一〇・一三)。あなたの日々に応じて、あなたの力もあるでしょう(申命記三三・二五)。

(二八) ですから、「あすのことは、あす自身が思いわずらう」にまかせなさい(マタイ六・三四)。すなわち、あすが来たら、そのときにあすのことを考えなさい。あなたは、きょうを生きなさい。今この時を生かすことを、あなたの熱心な心がけとしなさい。今この時は、あなたのものです。それがあなたのすべてです。過去は無に等しく、まるでなかったかのようです。未来は、あなたにとって何ものでもありません。それはあなたのものではなく、おそらく決してあなたのものにはならないでしょう。これから来るものに頼ることはできません。あなたは、「一日のうちに何がおこるかを知ることができない」からです(箴言二七・一)。ですから、きょうを生きなさい。一時間もむだにしてはなりません。この瞬間を用いなさい。それがあなたの分だからです。だれが、自分より前にあったことや、自分のあとに日の下にあることを知っているでしょうか(伝道六・一二)。世の初めからあった世代は、今どこにいるのでしょうか。過ぎ去り、忘れられました。彼らはいました。自分の日を生きました。そして、木から葉が振り落とされるように、地から振り落とされました。朽ち果てて、ありふれたちりとなったのです! 次々に別の世代が続きました。そして彼らも、「おのれの先祖の仲間に連な」りました(詩篇四九・一九)。「彼らは絶えて光を見ることが」ありません(詩篇四九・一九)。今は、地上でのあなたの番です。「若い者よ、あなたの若い時に楽しみ」なさい(伝道一一・九)。「よわいは終ることがない方(詩篇一〇二・二七)を楽しむことによって、まさに今この時を楽しみなさい。今、あなたの目を、ただこの方だけに据えなさい。この方には、「変化とか回転の影とかいうものはない」のです(ヤコブ一・一七)。今、この方にあなたの心をささげなさい。今、この方により頼みなさい。今、この方が聖なる方であるように、あなたも聖なる者となりなさい(第一ペテロ一・一六)。今、神に喜ばれる全きみこころ(ローマ一二・二)を行う、この祝福された機会をとらえなさい。今、「すべてを失」うことを喜びなさい(ピリピ三・八)。そうして、「キリストを得る」のです(ピリピ三・八)!

(二九) 神がきょうあなたに臨むのを許されることは、何であれ、御名のために(使徒五・四一)、きょう喜んで忍びなさい。けれども、あすの苦しみに目を向けてはなりません。「一日の苦労は、その日一日だけで十分です」(マタイ六・三四)。人間の言い方で言えば、それは悪です(英語の聖書は、この「苦労」を「悪」と訳しています)。そしりであれ欠乏であれ、痛みであれ病であれ、そうです。けれども、神の言葉で言えば、すべては祝福です。それは、神の知恵によって調合され、神の子供たちの魂のさまざまな病に応じて、さまざまに分け与えられる、尊い香油です。そして神は、一日に、その日に十分なだけを与えてくださいます。病人の必要と体力とに釣り合うだけを与えてくださるのです。ですから、もしあなたが、あすに属するものをきょうつかみ取り、すでに与えられているものにそれを加えるとします。それは、あなたが負いきれないものとなるでしょう。これは、自分の魂をいやすのではなく、滅ぼす道です。ですから、神がきょうあなたに与えてくださる分だけを、受け取りなさい。きょう、神のみこころを行い、忍びなさい! きょう、キリスト・イエスを通して、あなた自身を、

あなたの体と魂と霊とを、神にささげなさい。あなたのあり方のすべて、行いのすべて、苦しみのすべてにおいて、神が栄光をお受けになること。それ以外には何も願わないようにしなさい。永遠の御霊（ヘブル九・一四）によって、神とその御子イエス・キリストとを知ること。それ以外には何も求めないようにしなさい。今この時も永遠に至るまでも、神を愛し、神に仕え、神を楽しむこと。それ以外には何も追い求めないようにしなさい！

「私とすべての世界とを造られた父なる神」に、「私とすべての人とをあがなわれた子なる神」に、「私と神のすべての選びの民とをきよめられる聖霊なる神」に（祈祷書「教理問答」）、ほまれと賛美と、威光と主権とが、世々限りなくありますように！　アーメン。

説教三十　山上の説教（十）

「人をさばいてはなりません。自分がさばかれないためです。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるでしょう。なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのですか。自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えるでしょうか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるでしょう。聖なるものを犬にやってはなりません。また真珠を豚に投げてやってはなりません。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるでしょう。求めよ、そうすれば、与えられるでしょう。捜せ、そうすれば、見いだすでしょう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるでしょう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからです。あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるでしょうか。魚を求めるのに、へびを与える者があるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものをくださらないことがあるでしょうか。だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにしなさい。これが律法であり預言者です」（マタイ七・一～一二）

（一）　私たちの祝福された主は、今や、そのおもな目的を果たし終えられました。まず、真の宗教の要点を述べ、人々が神の言葉を無にしようとする（マルコ七・一三）注釈から、それを注意深く守られました。次に、私たちがあらゆる外面の行いにおいて保つべき、正しい意図についての規則を定められました。そして今、この宗教を妨げるおもなものを指摘し、最後にふさわしい適用をもって全体を結ばれます。

（二）　第五章で、私たちの偉大な教師は、内なる宗教を、そのさまざまな枝に分けて十分に描き出されました。そこで主は、真のキリスト教を形づくる魂の性向を、私たちの前に示されました。それは、聖性に含まれる気質です。この聖性について、「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」と言われています（ヘブル一二・一四）。また、それは心の思いです。その心の思いは、本来の泉から流れ出るとき、それ自体として、本質的に善であり、神に受け入れられるものです。本来の泉とは、キリスト・イエスを通して神を信じる生きた信仰です。第六章では、私たちのすべての行いも同じようになりうることを示されました。純粋で聖い意図によって、聖く、良い、神に受け入れられるものとなりうるのです。それ自体の性質では善でも悪でもない行いでさえ、そうなるのです。この意図なしに行われることは何であれ、神の前に何の価値もない、と主は宣言されます。これに対して、このように神にささげられた外面のわざは何であれ、神の目に大きな価値があるのです。

（三）　この章の前半で、主は、この聖性を妨げる、最もありふれた、最も致命的なものを指摘されます。後半では、さまざまな動機を示して、それらすべてを突き破るよう私たちに勧められます。そして、上に召してくださる神の賞与（ピリピ三・一四）を確かに得るよう勧められるのです。

（四）　主が私たちに警告される第一の妨げは、さばくことです。「人をさばいてはなりません。自分がさばかれないためです」（マタイ七・一）。他人をさばいてはなりません。主にさばかれないためです。自分の頭上に報復を招かないためです。「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるでしょう」（マタイ七・二）。これは、はっきりとした公平な規則です。大いなる日のさばき（ユダ六）で、神はあなたがたをどう扱われるでしょうか。この規則によって、神はそれをあなたがた自身が決めることを許しておられます。

（五） 神の子はだれでも、どんな境遇にあっても、どんな時期にあっても、この警告を必要とします。それは、初めて悔い改めて福音を信じた（マルコ一・一五）ときから、愛において全うされる（第一ヨハネ四・一八）ときまで変わりません。さばく機会は、決してなくならないからです。そして、さばきへの誘惑は数えきれません。その多くは実に巧みに偽装されているので、私たちは何の危険も疑わないうちに、その罪に陥ってしまいます。これによって生じる害は、言いようもないほどです。他人をさばく者は、いつも害を受けます。こうして自分の魂を傷つけ、自分を神の正しいさばき（ローマ二・五）にさらすのです。さばかれる者も、しばしば害を受けます。その人の手はなえ（ヘブル一二・一二）、その歩みは弱められ、妨げられます。まったく道を踏みはずし（ヘブル一二・一三）、滅びにまで引き返してしまうのでなくても、そうなるのです。この「苦い根がはえ出て」（ヘブル一二・一五）、「それによって多くの人が汚される」（ヘブル一二・一五）ことがあります。そのために、真理の道そのものがそしりを受け（第二ペテロ二・二）、私たちに対して唱えられたあの尊い御名が汚されます（ヤコブ二・七）。そうです、そうしたことが、何としばしばあることでしょう！

（六） けれども、主がこの警告を、神の子たちだけに、あるいはおもに神の子たちに向けられたとは思えません。むしろ、この世の子たち、神を知らない人々（第一テサロニケ四・五）に向けられたのです。この人々は、世のものでない人々のことを耳にせずにはいられません。その人々は、先に述べた宗教を追い求めています。謙遜で、まじめで、柔和で、あわれみ深く、心の清い者であろうと努めています。これらの聖い気質を、まだ到達していない程度にまで得たいと、熱心に願っています。そして、すべての人にあらゆる善を行い、忍耐して悪を耐え忍びながら、それを待ち望んでいるのです。ここまで進んだだけの人でも、だれであれ、隠れることができません。それは、「山の上にある町」（マタイ五・一四）と同じです。では、なぜ、その人々の「よいおこないを見」る者たちが、「天にいます」その「父をあがめ」ないのでしょうか（マタイ五・一六）。その人々の足跡に従わないことに、どんな言い訳があるのでしょうか。その人々はキリストにならう者です。それなのに、その模範に倣わず、その人々にならう者とならない（第一コリント一一・一）ことに、どんな言い訳があるのでしょうか。実は、彼らは自分のための言い訳を用意しようとして、倣うべき人々を責めるのです。自分の欠点を正す代わりに、隣人の欠点を探し出すことに時間を費やします。他人が道からそれることにかかりきりになって、自分ではまったくその道に入りません。少なくとも、決して前に進みません。力のない、哀れな、死んだ敬虔の形（第二テモテ三・五）から、決して先へ進まないのです。

（七） 主が次のように言われるのは、とりわけこの人々に対してです。「なぜ、兄弟の目にあるちりを見」るのですか（マタイ七・三）。そのちりとは、神の子たちの弱さ、誤り、軽率さ、力のなさです。「自分の目にある梁を認めないのですか」（マタイ七・三）。あなたは、自分のうちにあるものを認めていません。滅びに定められるべき悔い改めのなさ、悪魔的な高慢、のろわれたわがまま、偶像礼拝のような世への愛です。それらが、あなたの生涯全体を、主の忌みきらうものとしているのです。何よりも、あなたは何という怠惰な無頓着と無関心のうちに、地獄の口の上で踊っていることでしょう！ それなのに、「どうして」、どんな顔をして、どんな礼儀や慎みがあって、「兄弟にむかって」（マタイ七・四）こう言えるでしょうか。「あなたの目からちりを取らせてください」（マタイ七・四）と。そのちりとは、神への熱心の行き過ぎ、極端な自己否定、世の心配事や仕事からの離れすぎです。また、昼も夜も祈っていたい、永遠のいのちの言葉（ヨハネ六・六八）を聞いていたいという願いです。見よ、「自分の目には梁がある」のです（マタイ七・四）！ これらのようなちりではありません。「偽善者よ」（マタイ七・五）！ あなたは他人を気づかうふりをしながら、自分の魂のことは気にもかけていません。神の大義に熱心なように見せかけながら、実は神を愛しても恐れてもいないのです。「まず自分の目から梁を取りのけなさい」（マタイ七・五）。悔い改めのなさという梁を取りのけなさい！ 自分自身を知りなさい！ 自分が罪人であることを見て、感じなさい！ あなたの内側がはなはだしく悪であることを感じなさい。あなたがまったく腐敗した、忌まわしい者であること、神の怒りがあなたの上にとどまっていること（ヨハネ三・三六）を感じなさい。高慢という梁を取りのけなさい。自分を忌みきらい、ちりと灰の中に沈むようにへりくだりなさい。自分の目に、ますます小さく、卑しく、

さもしく、つまらない者となりなさい。わがままという梁を取りのけなさい！次の言葉の意味を学びなさい。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て」なさい（マタイ一六・二四）。自分を捨て、日々自分の十字架を負いなさい（ルカ九・二三）。あなたの魂全体に、こう叫ばせなさい。「わたしが天から下ってきたのは、自分のこころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためです」（ヨハネ六・三八）。死ぬことのない霊であるあなたは、知っていても知らなくても、実際に天から下ってきたのです。世への愛という梁を取りのけなさい！　世も世にあるものも、愛してはなりません（第一ヨハネ二・一五）。世に対して十字架につけられ、世もあなたに対して十字架につけられた者となりなさい。世はただ用いるだけにして、神を楽しみなさい。あなたの幸いのすべてを、神のうちに求めなさい。何よりも、あの大きな梁、すなわち怠惰な無頓着と無関心を取りのけなさい！「無くてならぬもの」は「一つだけ」（ルカ一〇・四二）であることを、深く考えなさい。それは、あなたがこれまでほとんど考えたこともない、ただ一つのことです。あなたは、大きな淵の上で震えている、哀れな、卑しい、罪ある虫けらです。そのことを知り、感じなさい！　あなたは何者でしょうか。死ぬために生れた罪人です。風に吹き回される木の葉です（ヨブ一三・二五）。しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧（ヤコブ四・一四）、空中に散って、もう二度と見られなくなる霧です。このことを見なさい。「そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるでしょう」（マタイ七・五）。そのとき、自分の魂の事柄から手が空いているなら、兄弟をも正す方法が分かるでしょう。

（八）　けれども、「人をさばくな」（マタイ七・一）というこの言葉の本当の意味は何でしょうか。ここで禁じられているさばきとは、何でしょうか。それは、しばしば悪口と結びついてはいますが、悪口と同じではありません。悪口とは、その場にいない人について、何か悪いことを語ることです。一方、さばくことは、その場にいない人にも、いる人にも、同じように関わりえます。また、さばくことは、語ることを必ずしも含みません。含まれるのは、他人を悪く思うことだけです。とはいえ、他人を悪く思うことがすべて、主が責めておられるさばきだというのではありません。ある人が強盗や殺人を犯すのを見たり、神の御名を汚すのを聞いたりするとします。そのとき私は、その強盗や殺人者を悪く思わずにはいられません。けれども、これは悪いさばきではありません。これには何の罪もなく、優しい愛情に反するものも何もありません。

（九）　ここで責められているさばきとは、愛に反する仕方で他人のことを考えることです。そして、これにはさまざまな種類があります。第一に、私たちは、他人に責められるべき点がないのに、あると考えることがあります。その人に罪のないことを、（少なくとも自分の心の中で）その人のせいにすることがあります。その人が一度も語ったことのない言葉や、一度もしたことのない行いを、その人に負わせるのです。あるいは、その人の行いの仕方が間違っていたと考えることがあります。実際には間違っていなかったのにです。また、行いそのものにも、その仕方にも、正当に責められる点が何もないことがあります。そのようなときでさえ、私たちは、その人の意図が良くなかったと推測し、それを理由にその人を責めることがあります。そのとき、人の心を探り知るかた（ローマ八・二七）は、その人の単純さと、神にかなう誠実さとをご覧になっているのです。

（一〇）　けれども、私たちがさばきの罪に陥るのは、罪のない人を責めることによってだけではありません。第二に、罪のある人を、その人が受けるべき以上に責めることによっても陥るのです。この種のさばきも、あわれみに背くだけでなく、正義にも背く罪過です。しかも、最も強く、最も優しい愛情のほかには、何もこの罪過から私たちを守ることができません。この愛情がなければ、私たちは、落ち度があると認められている人を、実際よりも大きな落ち度があるものと、すぐに思い込みます。その人のうちに見いだされる善は何であれ、低く見積もります。いや、何か悪いところを見つけた人のうちに、何か良いものが残っているとは、なかなか信じる気になれないのです。

（一一）　これはみな、あの愛が明らかに欠けていることを示しています。その愛は、ウー・ロギゼタイ・カコン（οὐ λογίζεται κακόν）、すなわち悪を思いません（第一コリント一三・五）。どんな前提からも、不正な結論や不親切な結論を決して引き出しません。ある人が一度あからさまな罪に陥ったとします。愛は、それだけで、その人がいつもそうしている、習慣的にその罪を犯している、

と推論したりはしません。また、その人がかつて習慣的にその罪を犯していたとしても、愛は、今もそうだと結論づけはしません。まして、今この罪を犯しているなら、ほかの罪も犯しているはずだ、などと結論づけはしません。こうした悪い推論はみな、主がここで私たちに警戒させておられる、罪深いさばきに属します。私たちが神を、あるいは自分の魂を愛しているなら、このさばきを避けることは、私たちにとって何よりも重大なことです。

（一二）けれども、私たちが罪のない人を責めず、罪のある人をも受けるべき以上には責めないとします。それでも、わなからまったく逃れているとはかぎりません。罪深いさばきには第三の種類があるからです。それは、十分な証拠がないのに、だれかを少しでも責めることです。私たちが想定する事実が、どれほど真実であったとしても、それで私たちが無罪になるわけではありません。それらは想定されるべきではなく、証明されるべきだったからです。そして、証明されるまでは、私たちは何の判断も下すべきではなかったのです。私は「証明されるまでは」と言います。事実がどれほど強く証明できるものであっても、それだけでは私たちは許されないからです。判決を下す前にその証拠が示され、相手側の証拠と比べられなければ、許されません。また、訴えられた人が自分で弁明する前に最終的な判決を下すなら、私たちは決して許されません。このことは、あわれみや兄弟愛を抜きにした、単なる正義の教えとしてなら、ユダヤ人でさえ私たちに教えることができます。ニコデモはこう言っています。「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではありませんか」（ヨハネ七・五一）。そうです、ユダヤ民族のおもだった人々が、ある異教徒に、彼が預かっている囚人に不利な判決を求めました。そのとき、その異教徒でさえ、こう答えることができました。「訴えられた者が、訴えた者の前に立って、告訴に対し弁明する機会を与えられない前に」、人をさばくのは、「ローマ人の慣例にはないこと」です（使徒二五・一六）。

（一三）実際、あの異教のローマ人たちの中のもうひとり〔セネカ〕が、自分の行いの尺度であったと断言している規則があります。その規則を守りさえすれば、私たちはたやすく罪深いさばきに陥ることはないでしょう。彼はこう言います。「私は、ある人がほかの人に不利な証言をするとき、それがだれの証言であっても、軽々しく信じたりはしません。それどころか、人が自分自身に不利な証言をしても、たやすく、すぐには信じないのです。私はいつも、その人に考え直す時間を与え、しばしば人に相談する機会も与えます」。クリスチャンと呼ばれているあなたも、行って同じようにしなさい（ルカ一〇・三七）。そうでないと、かの日に異教徒が立ち上がって、あなたを罪に定めるでしょう（マタイ一二・四一）！

（一四）けれども、主ご自身が、あの明白で、はっきりと言い表された規則を教えてくださいました。それに従って歩むなら、私たちが互いに責めたり、さばいたりすることは、どれほどまれになるでしょう。少なくとも、その悪はどれほど早く正されるでしょう。「もしあなたの兄弟が」あなたに対して「罪を犯すなら」（マタイ一八・一五）、あるいは罪を犯したと聞いたり信じたりするなら、「行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（マタイ一八・一五）。これが、あなたが踏むべき第一の段階です。「もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためです」（マタイ一八・一六）。これが第二の段階です。「もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい」（マタイ一八・一七）。教会の監督たちにでも、会衆全体にでも申し出るのです。そのとき、あなたは自分の務めを果たしたのです。それからは、もうそのことを考えず、すべてを神にゆだねなさい。

（一五）けれども、あなたが神の恵みによって「自分の目から梁を取りのけ」（マタイ七・五）、今は「兄弟の目にあるちり」（マタイ七・三）や梁が「はっきり見える」（マタイ七・五）とします。それでも、兄弟を助けようと努めることで、自分が害を受けないように気をつけなさい。やはり、「聖なるものを犬にやってはなりません」（マタイ七・六）。だれであれ、軽々しくこの部類に数えてはなりません。けれども、その呼び名に値することが明らかになったなら、そのときは、「真珠を豚に投げてやってはなりません」（マタイ七・六）。深い知識によらない熱心（ローマ一〇・二）に気をつけなさい。これは、「天の父が完全であられるように」、「完全な者と」（マタイ五・四八）なろうとする人々の道にあ

る、もう一つの大きな妨げだからです。これを願う人々は、すべての人が共通の祝福にあずかることを願わずにはいられません。私たち自身が初めて天よりの賜物（ヘブル六・四）にあずかるときのことです。それは、神から与えられる、「まだ見ていない事実を確認すること」です（ヘブル一一・一）。そのとき私たちは、自分にはこれほどはっきり見えている事柄を、すべての人が見ていないことに驚きます。そして、少しでも交わりのある人々の目を、みな開くことができると、少しも疑わないのです。そのため、私たちは出会う人をだれかれなく、すぐさま攻め立て、相手が望もうと望むまいと、無理にでも見させようとします。そして、この節度のない熱心が失敗に終わることで、私たちはしばしば自分の魂に痛手を受けます。私たちがこのように力をむだに費やすことのないよう、主はこの必要な警告を付け加えられます（これはすべての人に必要ですが、今、初めの愛に燃えている人々には、ことに必要です）。「聖なるものを犬にやってはなりません。また真珠を豚に投げてやってはなりません。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるでしょう」（マタイ七・六）。

（一六）「聖なるものを犬にやってはなりません」（マタイ七・六）。だれかがこの呼び名に値すると考えないように気をつけなさい。十分で、反論の余地のない証拠、もはや抗しきれないほどの証拠があるまでは、そう考えてはなりません。けれども、その人々が聖くない、悪い人々であることが、はっきりと疑いなく証明されたとします。神に対しても、すべての義とまことの聖性に対しても、無縁であるだけでなく、敵であることが証明されたとします。そのときは、こういう人々に「聖なるもの」を「やってはなりません」（マタイ七・六）。「聖なるもの」とは、ト・ハギオン（τὸ ἅγιον）、すなわち、とりわけそう呼ばれる「聖なるもの」です。福音の聖なる、独特の教理は、昔は「代々にわたって」「隠されていた」ものです（コロサイ一・二六）。それは今、ただイエス・キリストの啓示と、その聖霊の息吹によってだけ、私たちに知らされています。このような教理を、聖霊なるものがあることさえ知らない（使徒一九・二）人々に、安売りしてはならないのです。もっとも、キリストの使者たち（第二コリント五・二〇）は、大いなる会衆の中では、その教理を語らずにはいられません。その会衆の中に、こういう人々が何人かいるかもしれないとしてもです。私たちは、人々が聞いても、拒んでも（エゼキエル二・七）、語らなければなりません。けれども、一般のクリスチャンの場合はそうではありません。一般のクリスチャンは、あの畏るべき職務を帯びてはいません。また、反対し、神を汚す言葉を吐き、これらの真理に根深い敵意を抱いている人々がいます。そういう人々に、この偉大で栄光ある真理を押しつける義務は、少しもありません。いや、そうすべきではありません。むしろ、相手が耐えられる程度に応じて導くべきです。こういう人々と、罪の赦しや聖霊の賜物（使徒二・三八）について話し始めてはなりません。むしろ、彼ら自身の流儀で、彼ら自身の原理に立って語り合いなさい。理性的で、名誉を重んじるが、不正な快楽主義者とは、「正義、節制、未来の審判」について論じなさい（使徒二四・二五）。これが、ペリクスを震えあがらせる、最も見込みのある方法です。もっと高い主題は、もっと高く到達した人々のために取っておきなさい。

（一七）「また真珠を豚に投げてやってはなりません」（マタイ七・六）。だれに対しても、この判断を下すことには、ひどく慎重でありなさい。けれども、その事実が明白で否定しようがないとします。少しの議論の余地もなく明らかだとします。豚が自分を偽ろうともせず、かえって自分の恥を誇る（ピリピ三・一九）とします。心にも生活にも清さを装うことすらせず、ほしいままにあらゆる不潔な行いをしている（エペソ四・一九）とします。そのときは、彼らの前に真珠を「投げてやって」はなりません（マタイ七・六）。彼らに御国の奥義を語ってはなりません。目がまだ見ず、耳がまだ聞かなかったことを語ってはなりません（第一コリント二・九）。彼らには、ほかに知識の入り口がなく、霊的な感覚もないので、そうしたことは当然、彼らの心に思い浮びもしないのです。神がその愛する御子（コロサイ一・一三）にあって私たちに与えてくださった、「尊く、大いなる約束」（第二ペテロ一・四）を、彼らに語ってはなりません。彼らは、世にある欲のために滅びることを免れたいとさえ願いません。その彼らが、神の性質にあずかる者となる（第二ペテロ一・四）ことを、どうして思い描けるでしょうか。この世の泥沼に、すなわち世の快楽と欲望と心配事に、浸りきっている人々がいます。彼らが神の深み（第一コリント二・一〇）を味わい、福音の

奥義を知る程度は、豚が真珠を知り、真珠を味わう程度とちょうど同じです。ああ、これらの真珠を、こういう人々の前に投げてはなりません。「恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ」るでしょう（マタイ七・六）！　すなわち、自分に理解できないものをまったく軽んじ、自分が知りもしないことをそしるでしょう（ユダ一〇）。いや、起こる不都合はおそらく、それだけではないでしょう。彼らが、その本性のままに、「向きなおってあなたがたにかみついてくる」（マタイ七・六）としても、不思議ではありません。善に悪をもって報い（詩篇一〇九・五）、祝福にのろいをもって、好意に憎しみをもって報いたとしても、不思議ではないのです。肉の思いは、神と、神に関わるすべてのことに、これほど敵するのです（ローマ八・七）。あなたがたは、彼らの魂を死から救い出そうとし（ヤコブ五・二〇）、火の中から燃えさしを取り出すように（ゼカリヤ三・二）彼らを救い出そうとします。それは、彼らにとって赦しがたい侮辱なのです。そのような侮辱を加えるなら、こういう人々からはこのような扱いを受けるものと覚悟しなければなりません。

（一八）　それでも、今は「向きなおってあなたがたにかみついてくる」（マタイ七・六）こういう人々についてさえ、まったく望みを捨てる必要はありません。あなたがたの議論や説得がすべて失敗しても、まだもう一つの手だてが残っているからです。ほかのどんな方法も役に立たないときに、しばしば効き目のあることが分かる手だてです。それは祈りです。ですから、ほかの人のためであれ、自分の魂のためであれ、何を願うときも、何が足りないときも、こうしなさい。「求めよ、そうすれば、与えられるでしょう。捜せ、そうすれば、見いだすでしょう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるでしょう」（マタイ七・七）。これを怠ることが、聖性を妨げる第三の大きなものです。私たちは今もなお、「求めないから得られない」のです（ヤコブ四・二）。ああ、あなたがたがただ求めてさえいたなら、常に祈り続けていたなら（ローマ一二・一二）、今日、どれほど柔和で優しく、心へりくだり、神と人への愛に満ちていられたことでしょう！　ですから、少なくとも今からは、「求めよ、そうすれば、与えられるでしょう」（マタイ七・七）。求めなさい。私たちの主がここでこれほど美しく描かれた宗教の全体を、徹底して経験し、完全に実践できるように求めなさい。そうすれば、主が聖であられるように聖なる者となることが、あなたがたに与えられるでしょう。心においても、あらゆるふるまいにおいても、聖なる者となるのです（第一ペテロ一・一五）。主が定められた道で捜しなさい。聖書を調べ（ヨハネ五・三九）、主のみことばを聞き、それを思いめぐらし、断食し、主の晩餐にあずかることによって捜しなさい。そうすれば、必ず見いだすでしょう。あの高価な真珠（マタイ一三・四六）を見いだすでしょう。世に勝つ信仰（第一ヨハネ五・四）、世が与えることのできない平安（ヨハネ一四・二七）、あなたがたが受け継ぐものの保証である愛（エペソ一・一四）を見いだすでしょう。門をたたきなさい。祈り続け、主のほかのあらゆる道を歩み続けなさい。弱り果てて意気そそうしてはなりません（ヘブル一二・三）。目標を目ざして進みなさい（ピリピ三・一四）。拒まれても引き下がってはなりません。主が祝福してくださるまで、主を去らせてはなりません（創世記三二・二六）。そうすれば、あわれみの門、聖性の門、天の門が、あなたがたのために開かれるでしょう。

（一九）　私たちの心はかたくなで、神の善をなかなか信じようとしません。主はそれをあわれんで、この点について詳しく語り、言われたことを繰り返し、確かなものとしてくださいます。主はこう言われます。「すべて求める者は得」るのです（マタイ七・八）。ですから、だれも祝福にあずかりそこなう必要はありません。「捜す者は」、すなわち捜す者はだれでも、神の愛と神のかたちとを「見いだし」ます（マタイ七・八）。「門をたたく者は」（マタイ七・八）、すなわち門をたたく者はだれでも、義の門をあけてもらえるのです（詩篇一一八・一九）。ですから、だれかが落胆する余地は、ここにはまったくありません。求めても、捜しても、門をたたいても、むだに終わるかのように思う必要はないのです。ただ、失望せずに、常に祈り、捜し、門をたたくことを忘れないようにしなさい（ルカ一八・一）。そうすれば、約束は確かに立ちます。それは天の柱のように堅固です。いや、もっと堅固です。天地は滅びますが、主の言葉は滅びることがないからです（マタイ二四・三五）。

（二〇）　私たちの祝福された主は、不信仰のあらゆる口実を断つために、続く節で、言われたことをさらに説き明かされます。私たち自身の胸のうちに起こることに訴えるのです。主は言われます。「あなたがたのうちで、自分の子がパ

ンを求めるのに、石を与える者があるでしょうか」（マタイ七・九）。自然な情愛でさえ、愛する者のもっともな願いを拒むことを、あなたがたに許すでしょうか。「魚を求めるのに、へびを与える者があるでしょうか」（マタイ七・一〇）。益になるものの代わりに、害になるものを与えるでしょうか。ですから、あなたがたは、自分自身が感じ、行っていることからさえ、このうえない確信を得ることができます。一方では、求めることに悪い結果が伴うことはありえない、という確信です。他方では、求めることには良い結果が、すなわちあらゆる必要が十分に満たされるという結果が伴う、という確信です。「あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものをくださらないことがあるでしょうか」（マタイ七・一一）。この父は、純粋で、混じりけのない、善そのものである方です。あるいは、主が別の折に言い表されたように、「求めて来る者に聖霊をくださらないことがあるでしょうか」（ルカ一一・一三）。聖霊のうちに、あらゆる良いものが含まれています。あらゆる知恵、平安、喜び、愛、聖性と幸いとの宝のすべてが含まれています。神がご自分を愛する者たちのために備えられたすべてのもの（第一コリント二・九）が含まれているのです。

（二一） けれども、あなたがたの祈りが神の前で十分な重みを持つように、すべての人と愛のうちにあるよう心がけなさい。そうでなければ、祈りは、あなたがた自身の頭上に、祝福よりもむしろのろいを招くでしょう。隣人に対して愛を持っていない間は、神から何の祝福も受けることを期待できません。ですから、この妨げを、ためらわずに取り除きなさい。互いへの愛と、すべての人への愛を確かなものにしなさい。そして、言葉だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛しなさい（第一ヨハネ三・一八）。「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにしなさい。これが律法であり預言者です」（マタイ七・一二）。

（二二） これこそ、あのきわめて尊い律法（ヤコブ二・八）、正義だけでなくあわれみの黄金律です。異教徒の皇帝でさえ、これを宮殿の門の上に書かせました。多くの人は、この規則が、世に生れてくるすべての人の心に、生れつき刻み込まれていると信じています。少なくとも次のことは確かです。この規則は、聞いたとたんに、すべての人の良心と理解力とに受け入れられます。ですから、だれも、知りながらこれに背くなら、自分の胸のうちで罪に定められずにはいられないのです。

（二三） 「これが律法であり預言者です」（マタイ七・一二）。神が昔、人類に示された律法に書かれていることは、何であれ、この短い言葉のうちに要約されています。神が「古くから、聖なる預言者たち」（ルカ一・七〇）によって与えられた戒めも、何であれ、そうです。それらはすべて、この簡潔な指示のうちに含まれているのです。そして、これを正しく理解するなら、主が地上に打ち立てるために来られた宗教の全体が、ここに含まれています。

（二四） これは、肯定の意味にも、否定の意味にも理解できます。否定の意味に理解すれば、こういう意味です。「人々からしてほしくないと思うことは何事でも、人々にもしてはなりません」。ここに、いつも手もとにあり、いつもたやすく当てはめられる、明白な規則があります。隣人に関わるすべての場合に、その人の立場を自分の立場としなさい。境遇が入れ替わって、自分がちょうど今のその人のようになったと考えてみなさい。そのうえで、もしそのように境遇が入れ替わっていたら、その人のうちに見て責めたであろうことを考えなさい。そのような気質や思いを、自分に許さないように気をつけなさい。そのような言葉が一つも口から出ないように、そのような一歩を一つも踏み出さないように気をつけなさい。直接的な、肯定の意味に理解すれば、その明白な意味は次のとおりです。「自分がその人の境遇にいると考えてみなさい。そのとき、その人に道理にかなって望めることは何でも、力の限りを尽くして、すべての人の子に行いなさい」。

（二五） これを、一つ二つの分かりやすい例に当てはめてみましょう。だれでも自分の良心に照らして明らかなように、私たちは、ほかの人にさばかれたくはありません。理由もなく、あるいは軽々しく、悪く思われたくはありません。まして、だれかに悪口を言われたくはありません。私たちの本当の欠点や弱さを言いふらされたくはないのです。これを自分に当てはめなさい。人からしてほしくないことを、ほかの人にしてはなりません。そうすれば、もう決して隣人をさばかず、だれのことも、理由もなく、あるいは軽々しく悪く思わなくなるでしょ

う。まして悪口を言うことはないでしょう。その場にいない人の本当の欠点でさえ、口にしなくなるでしょう。ただ、ほかの人々の魂の益のためにどうしても必要だと確信するかぎりでは、別です。

（二六）また、私たちは、すべての人が自分を愛し、重んじ、正義とあわれみと真実とをもって自分に接してくれることを望みます。そして、人々が自分を損なわずにできるかぎりの善を、私たちにしてくれることを、道理にかなって望むことができます。そうです、外のものについては、よく知られた規則のとおりにしてくれることさえ望めます。すなわち、彼らの余分なものは私たちの便利のために、彼らの便利は私たちの必要のために譲られることを望めます。彼らの必要は私たちの窮乏のために譲られることを望めるのです。それなら、私たちも同じ規則に従って歩みましょう。人々にしてほしいと望むとおりに、すべての人にしましょう。すべての人を愛し、敬いましょう。正義とあわれみと真実とが、私たちの思いと行いのすべてを治めるようにしましょう。私たちの余分なものを、隣人の便利のために譲りましょう（そうすれば、だれに余分なものが残るでしょうか）。私たちの便利を隣人の必要のために、私たちの必要を隣人の窮乏のために譲りましょう。

（二七）これこそ、純粋で真正な道徳です。これを行いなさい。そうすれば、いのちが得られます（ルカ一〇・二八）。「この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがありますように」（ガラテヤ六・一六）。彼らは「神のイスラエル」だからです（ガラテヤ六・一六）。けれども、次のことに注意しなければなりません。まず神を愛するのでなければ、だれもこの規則に従って歩むことはできません（世の初めから、神を愛さずにそう歩んだ者はいません）。自分を愛するように隣り人を愛する（マタイ二二・三九）こともできないのです。そして、キリストを信じるのでなければ、だれも神を愛することはできません。キリストの血によるあがない（エペソ一・七）を受けていなければ、愛することはできません。神の御霊が、自分の霊と共に、自分が神の子であることをあかししてくださる（ローマ八・一六）のでなければ、愛することはできないのです。ですから、信仰はどこまでも、すべての根です。将来の救いの根であるだけでなく、今の救いの根でもあるのです。私たちは今もなお、すべての罪人に言わなければなりません。「主イエス」キリスト「を信じなさい。そうしたら」、あなたは「救われます」（使徒一六・三一）。あなたは今救われます。それは、永遠に救われるためです。地上で救われます。それは、天で救われるためです。キリストを信じなさい。そうすれば、あなたの信仰は、愛によって働くでしょう（ガラテヤ五・六）。あなたは、主なるあなたの神を愛するでしょう（マタイ二二・三七）。神があなたを愛してくださったからです（第一ヨハネ四・一九）。また、自分を愛するように、あなたの隣り人を愛するでしょう（マタイ二二・三九）。そのとき、この愛を働かせ、増し加えることが、あなたの誇りと喜びとなるでしょう。それは、愛に反することを、すなわち不親切な思いと言葉と行いをすべて、ただ避けることによってだけではありません。人にしてほしいと望むあらゆる親切を、すべての人に示すことによってなのです。

説教三十一　山上の説教（十一）

「狭い門からはいりなさい。滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちにいたる門は狭く、その道は細いのです。そして、それを見いだす者が少ないのです」（マタイ七・一三～一四）

（一）　私たちの主は、真の宗教に初めて入るときに、たやすく私たちにまといつく危険について警告されました。それは、内側から、すなわち私たち自身の心の悪から自然に生じる妨げでした。そして今、主は、外側からの妨げ、とりわけ悪い模範と悪い助言とについて、私たちに知らせようとされます。そのどちらかによって、かつてはよく走っていた（ガラテヤ五・七）何千もの人々が、信仰を捨てて滅びてしまいました（ヘブル一〇・三九）。そうです、宗教の初心者ではなく、義においていくらか進んでいた人々の多くも、そうなったのです。ですから、主は、これらに対する警告を、できるかぎりの熱心さをもって私たちに迫られます。そして、さまざまな言い表し方で、繰り返し語られます。私たちが万一にもそれを聞き流してしまうことのないためです。こうして、前者から私たちを確かに守るために、主は言われます。「狭い門からはいりなさい。滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちにいたる門は狭く、その道は細いのです。そして、それを見いだす者が少ないのです」（マタイ七・一三～一四）。後者から私たちを守るためには、「にせ預言者を警戒しなさい」（マタイ七・一五）と言われます。今は、前者だけを考えることにします。

（二）　私たちの祝福された主は言われます。「狭い門からはいりなさい。滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちにいたる門は狭く、その道は細いのです。そして、それを見いだす者が少ないのです」（マタイ七・一三～一四）。

（三）　この言葉の中に、私たちは次のことを認めることができます。第一に、地獄への道の切り離せない特質です。「滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです」（マタイ七・一三）。第二に、天国への道の切り離せない特質です。「門は狭く」、「それを見いだす者が少ないのです」（マタイ七・一四）。第三に、それに基づく真剣な勧めです。「狭い門からはいりなさい」（マタイ七・一三）。

【一】　地獄への道の切り離せない特質

（一）　第一に、私たちは、地獄への道の切り離せない特質を認めることができます。「滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです」（マタイ七・一三）。

（二）　まことに、滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです（マタイ七・一三）！　罪が地獄の門であり、悪が滅びへの道だからです。罪の門は、何と大きいことでしょう！　悪の道は、何と広いことでしょう！　神の「戒めは限りなく広いのです」（詩篇一一九・九六）。それは、私たちのすべての行いに及ぶだけではありません。唇から出るすべての言葉にも、そうです、心にわき起こるすべての思いにも及ぶのです。そして、罪は戒めと同じだけ広いのです。戒めを破ることは、どんなものでも罪だからです。いや、むしろ、罪は千倍も広いのです。戒めを守る道は一つしかないからです。行う事柄も、その行い方も、ほかのすべての事情も正しいのでなければ、私たちは戒めを本当に守ってはいないのです。けれども、どの戒めにも、それを破る道は千もあります。ですから、この門はまことに大きいのです。

（三） このことを、もう少し詳しく考えてみましょう。ほかのすべての罪を生み出す、あの親である罪は、何と広く及ぶことでしょう！ それは、神に敵する肉の思い（ローマ八・七）、心の高慢、わがまま、世への愛です。私たちは、それらに何かの境を定めることができるでしょうか。それらは、私たちのすべての思いに広がり、すべての気質に入り混じっているではありませんか。それらは、多かれ少なかれ、私たちの心の思いのかたまり全体をふくらませるパン種（第一コリント五・六）ではないでしょうか。自分自身を綿密に、誠実に調べるなら、これらの苦い根（ヘブル一二・一五）が絶えずはえ出ているのに気づくのではないでしょうか。それが、私たちのすべての言葉を毒し、すべての行いを汚しているのに気づくのではないでしょうか。そして、それらは、どの時代にも、どの国民の中にも、何と数えきれない子孫を生み出すことでしょう！ それは、全地を暗やみと暴力のすまい（詩篇七四・二〇）とでおおうほどです。

（四） ああ、だれが、そののろわれた実を数え上げることができるでしょうか。神に対するものであれ、隣人に対するものであれ、すべての罪を数えることができるでしょうか。想像が描き出すような罪ではありません。日々の、痛ましい経験となりうる罪です。それを見つけるのに、全地を巡り歩く必要はありません。どれか一つの王国、ただ一つの地方、あるいは都市や町を見渡してみなさい。この収穫は何と豊かなことでしょう！ しかも、いまだにイスラム教や異教の暗やみにおおわれている国を選んではなりません。キリストの名を呼び、その栄光の福音の光（第二コリント四・四）を見ていると公言する国を選びなさい。私たちの属するこの王国、今私たちのいるこの都市より先へ行く必要はありません。私たちは、自分をクリスチャンと呼んでいます。しかも、最も純粋な種類のクリスチャンだと言っています。私たちはプロテスタントであり、改革されたクリスチャンなのだ、と！ けれども、ああ、だれが、私たちの見解の改革を、心と生活にまで推し進めるのでしょうか。そう問うだけの理由がないと言えるでしょうか。私たちの罪は、何と数えきれないことでしょう。しかも、最も深い色に染まった罪です！ あらゆる種類の最もひどい忌まわしいことが、日ごとに私たちの間にはびこっているではありませんか。水が海をおおっているように（イザヤ一一・九）、あらゆる種類の罪が国土をおおっているではありませんか。だれがそれを数えることができるでしょうか。それよりは、行って雨のしずくや、海辺の砂を数えるほうがたやすいでしょう。それほど「滅びにいたる門は大きく、その道は広い」のです（マタイ七・一三）！

（五） その門から「はいって行く者が多い」のです（マタイ七・一三）。その道を歩む者が多いのです。死の門をくぐる者、墓のへやに沈んでいく者と、ほとんど同じほど多いのです。次のことは否定できないからです（もっとも、恥と心の悲しみなしに、これを認めることもできません）。キリスト教国と呼ばれるこの国においてさえ、人々の大部分が滅びの道を歩んでいるのです。あらゆる年齢と性別、あらゆる職業と仕事、あらゆる身分と階級において、そうです。身分の高い者も低い者も、富む者も貧しい者も、そうなのです。この都市の住民のはるかに大部分は、今日に至るまで罪のうちに生きています。守ると公言している律法に対する、何かあからさまな、習慣的な、それと知りながらの違反のうちに生きているのです。そうです、何か外面の違反、ひどい、目に見える不信心や不義のうちに生きています。神に対する務めであれ、人に対する務めであれ、何かの務めを公然と破っているのです。ですから、だれも否定できないことですが、この人々はみな、滅びにいたる道にいるのです。この人々に、次の人々を加えなさい。生きているというのは名だけで、まだ一度も神に対して生きたことのない人々です。外側は人に美しく見えても、内側はあらゆる不潔なものでいっぱいの人々です（マタイ二三・二七～二八）。高慢や虚栄、怒りや復讐心、野心や貪欲でいっぱいの人々です。自分を愛する者、世を愛する者、神よりも快楽を愛する者です（第二テモテ三・二、四）。確かに、この人々は人の間で尊ばれるかもしれません。けれども、主のみまえでは忌みきらわれる者です（ルカ一六・一五）。これらの世の聖人たちは、地獄の子（マタイ二三・一五）の数を、何と大きくふくらませることでしょう。そうです、さらに次の人々をみな加えなさい。ほかの点ではどうであれ、また、敬虔の形（第二テモテ三・五）を多く持っていても少なく持っていても、みな加えるのです。その人々は、「神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め」る人々です（ローマ一〇・三）。彼らは、神と和解し、神に受け入れられる根拠として、自分の義を立てようとするのです。その結果、信仰による「神からの義」（ピリピ三・九）に「従わなかった」のです

（ローマ一〇・三）。さて、これらをすべて一つに合わせるなら、主の次の断言は、何と恐ろしいほど真実でしょう。「滅びにいたる門は大きく、その道は広いのです。そして、そこからはいって行く者が多いのです」（マタイ七・一三）。

（六）　また、これは卑しい群衆、すなわち人類の中の貧しく、卑しく、愚かな部分だけに関わることではありません。世の中で名の知れた人々、多くの畑や何対もの牛を持つ人々も、これだけは断ろうとはしません。それどころか、人間的に知恵のある者、すなわち人間の判断の仕方で知恵があるとされる者が、多く召されています。権力や勇気や富において力のある者が多く、身分の高い者が多く、召されています（第一コリント一・二六）。世と肉と悪魔によって、広い道へと召されているのです。そして、彼らはその召しにそむきません。そうです、富と権力において高く上げられるほど、彼らは深く悪に沈みます。神から多くの祝福を受けるほど、多くの罪を犯します。名誉や富、学識や知恵を、自分の救いの達成に努める（ピリピ二・一二）手段としてではなく、むしろ悪徳にひいでる手段として用います。こうして、自分の滅びを確かなものにしてしまうのです！

【二】　天国への道の切り離せない特質

（一）　これらの人々の多くが、広い道をこれほど安心して進んで行く理由は、まさに、その道が広いからです。それが滅びへの道の切り離せない特質であることを、考えないのです。主は、「そこからはいって行く者が多い」（マタイ七・一三）と言われます。彼らは、まさにそこから逃げるべき理由のために、そこへはいって行くのです。逃げるべきなのは、「いのちにいたる門は狭く、その道は細い」（マタイ七・一四）からです。「それを見いだす者が少ない」からです（マタイ七・一四）。

（二）　これが、天国への道の切り離せない特質です。いのちに、すなわち永遠のいのちにいたる道は、それほど細く、その門はそれほど狭いのです。汚れたものも、聖くないものも、何一つはいることができません（黙示録二一・二七）。罪人はだれも、すべての罪から救われるまでは、その門を通ることができません。外面の罪から、すなわち「先祖伝来の」悪い「生活」（第一ペテロ一・一八）から救われるだけではありません。「悪を行うことをやめ」（イザヤ一・一六）、「善を行うことをなら」った（イザヤ一・一七）だけでは足りません。その人は、あらゆる罪深い行いから、また、あらゆる悪い、むだな話から救われなければなりません。それだけでなく、内側から変えられ、心の深みまで、すっかり新たにされなければなりません（エペソ四・二三）。そうでなければ、いのちの門を通ることはできず、栄光にはいることはできません。

（三）　なぜなら、いのちにいたる「その道は細い」からです（マタイ七・一四）。それは、あらゆる面にわたる聖性の道です。まことに、こころの貧しさの道は細いのです。聖い悲しみの道、柔和の道、義に飢えかわく（マタイ五・六）道も細いのです。あわれみ深さの道、偽りのない愛（第二コリント六・六）の道、心の清さの道は細いのです。すべての人に善を行う道、義のために（マタイ五・一〇）悪を、あらゆる悪を喜んで耐え忍ぶ道も細いのです。

（四）　「そして、それを見いだす者が少ないのです」（マタイ七・一四）。ああ、異教徒の正直さの道さえ、見いだす者は何と少ないことでしょう！　自分が人からしてほしくないことを、人にしない者は、何と少ないことでしょう。神の前で、不正な行いからも不親切な行いからも潔白な者は、何と少ないことでしょう！　「舌をもって罪を犯さない」（詩篇三九・一）者、不親切なことも偽りも何一つ語らない者は、何と少ないことでしょう。外面の違反についてさえ罪のない者は、人類のうちの何とわずかな割合でしょう！　まして、神の前に心が正しく、神の目に清く聖い者は、何とさらにわずかなことでしょう。すべてを探り知る神の目が、次のような者と見分ける人々は、どこにいるのでしょうか。本当に謙遜な人々、救い主なる神の前で、ちりと灰の中で自分を忌みきらう人々です。自分の欠乏を感じ、「宿っている間を、おそれの心をもって過ご」し（第一ペテロ一・一七）、深く、変わることなくまじめな人々です。本当に柔和で優しく、決して「悪に負け」ず、かえって「善をもって悪に勝」つ（ローマ一二・二一）人々です。心から神を慕いかわき（詩篇四二・二）、神のかたちに新たにされることを絶えずあえぎ求める人々です。次のような人々は、地上に何とまばらにしか散らばっていないことでしょう。魂がすべての人への愛に広げられ、力をつくして神を愛し（マルコ一二・三〇）、神に心をささげ、天にも地にも神のほかに

何も慕わない（詩篇七三・二五）人々です。神と人とを愛する人々で、すべての人に善を行うために全力を費やす者は、何と少ないことでしょう。一つの魂を永遠の死から救い出す（ヤコブ五・二〇）ために、すべてを、そうです、死そのものをも忍ぶ覚悟のある者は、何と少ないことでしょう！

（五）けれども、いのちの道に見いだされる者はこれほど少なく、滅びの道にいる者はこれほど多いのです。ですから、模範の激流が私たちをも彼らと一緒に押し流してしまう、大きな危険があります。ただ一つの模範でさえ、いつも目の前にあれば、私たちに強い印象を与えがちです。とりわけ、それが生れながらの性質を味方につけているとき、私たち自身の好みと一致するときは、そうです。それなら、これほど多くの模範が絶えず目の前にあるのです。そのすべてが私たち自身の心と一緒になって、私たちを生れながらの性質の流れに押し流そうとするのです。その力は何と大きいことでしょう！　その潮流に逆らい、自分を「世の汚れに染まずに」保つ（ヤコブ一・二七）ことは、何と難しいことでしょう！

（六）この困難をさらに大きくするのは、次のことです。私たちに模範を示し、下り坂の道に群がっているのは、人類の中の粗野で無分別な人々ではありません。少なくとも、その人々だけではありません。洗練された人々、育ちのよい人々、上品な人々、賢い人々、世の中を心得た人々です。知識があり、深く多方面にわたる学識を持つ人々、理性的な人々、雄弁な人々です。この人々はみな、あるいはほとんどみな、私たちに反対しています。私たちは、どうしてこの人々に立ち向かえるでしょうか。彼らの舌からはマナがしたたるではありませんか。彼らは、柔らかな説得のあらゆる術を身につけているではありませんか。推論の術も身につけています。彼らは、あらゆる論議と言葉の争い（第一テモテ六・四）に通じているのです。ですから、彼らにとっては、次のことを証明するのはたやすいことです。道は広いのだから正しい。多数に従う者が悪を行うはずはなく、多数に従おうとしない者だけが悪を行うのだ。あなたの道は細く、それを見いだす者がこれほど少ないのだから、間違っているに違いない、と。彼らは、悪は善であり、善は悪である（イザヤ五・二〇）ことを、論証によって明らかにしてみせます。聖性の道は滅びの道であり、世の道こそ天国へのただ一つの道であることを、明らかにしてみせるのです。

（七）ああ、無学な、ただの人たち（使徒四・一三）が、このような相手に対して、どうして自分の主張を守れるでしょうか！　しかも、彼らが戦わなければならない相手は、これだけではありません。その務めにどれほど力が及ばなくても、戦わなければならないのです。滅びにいたる道には、賢い人々だけでなく、力ある人々、身分の高い人々、権力のある人々も大勢いるからです。そして、この人々には、理性や議論よりも手っ取り早い論破の仕方があります。彼らはたいてい、自分に反対する者の理解力にではなく、恐れに訴えます。これは、議論が何の役にも立たないところでさえ、めったに失敗しない方法です。すべての人の能力に見合っているからです。推論ができてもできなくても、だれでも恐れることはできるのです。神を堅く信頼せず、神の力と愛とに確かに寄り頼んでいない者がいます。そういう者はみな、世の権力を手にしている人々の機嫌を少しでも損ねることを、恐れずにはいられません。ですから、この人々の模範が、神を知らないすべての人にとっておきてとなるとしても、何の不思議があるでしょうか。

（八）同じように、多くの富んだ人々も広い道にいます。そして、この人々は、人々の望みと、あらゆる愚かな欲とに訴えます。力ある人々や身分の高い人々が恐れに訴えるのと同じほど、強く、効果的に訴えるのです。ですから、下界のすべてに対して死んでいなければ、あなたが御国の道を歩み続けることは困難です。世に対して十字架につけられ、世もあなたに対して十字架につけられていなければ、困難です。神のほかに何も望まないのでなければ、困難なのです。

（九）反対側の眺めは、何と暗く、何と慰めがなく、何と近寄りがたいことでしょう！　狭い門！　細い道！　しかも、その門を見いだす者はわずかです！　その道を歩む者はわずかです。そのうえ、そのわずかな人々でさえ、賢い人々ではなく、学識や雄弁のある人々でもありません。力強く推論することも、はっきり推論することもできません。議論を持ち出しても、少しも有利に運べません。自分が信じていると公言することを、どう証明すればよいか分かりません。自分が経験していると言うことさえ、説明できません。確かに、このような弁護者た

ちは、自分の支持する主張を人に勧めるどころか、かえってその信用を落とすでしょう。

（一〇） これに加えて、彼らは身分の高い人々でも、地位のある人々でもありません。もしそうなら、彼らの愚かさを我慢できるかもしれません。彼らは、世の中で何の勢力も、何の権威もなく、物の数にも入らない人々です。卑しく、さもしく、身分の低い人々です。たとえその気があっても、あなたを害する力のない人々です。ですから、彼らから恐れるべきものは何もありません。望むべきものも何もありません。彼らの大部分は、「金銀はわたしには無い」（使徒三・六）と言えるからです。少なくとも、ごくわずかしか持っていません。いや、中には、食べる物も着る物もろくにない人々もいます。このために、また、その歩みがほかの人々の歩みと違っているために、彼らはいたるところで反対され（使徒二八・二二）、軽んじられます。汚名を着せられ（ルカ六・二二）、さまざまに迫害されます。そして、この世のちり、人間のくずのように扱われるのです（第一コリント四・一三）。ですから、あなたの恐れも、望みも、すべての欲求も（神から直接与えられたものは別です）、絶えずあなたを広い道に戻るように傾けます。そうです、生れながらのすべての情念が、そうするのです。

【三】 この特質に基づく真剣な勧め

（一） だからこそ、主はこれほど熱心に勧められるのです。「狭い門からはいりなさい」（マタイ七・一三）。あるいは（同じ勧めが別の箇所で言い表されているように）、「はいるように努めなさい」（ルカ一三・二四）。原語はアゴーニゼステ・エイセルテイン（ἀγωνίζεσθε εἰσελθεῖν）です。すなわち、「苦闘するように努めなさい」（ルカ一三・二四）ということです。主は言われます。「はいろうとしても」、すなわち怠惰に努めても、「はいれない人が多い」のです（ルカ一三・二四）。

（二） 確かに、主は、これにすぐ続く言葉の中で、彼らがはいれないことについて、別の理由と思えるものをほのめかしておられます。主は、「はいろうとしても、はいれない人が多い」（ルカ一三・二四）と、あなたがたに言っておく、と言われました。そのあとで、こう付け加えられるのです。「家の主人が立って戸を閉じてしまってから、あなたがたが外に立ち戸をたたき始めて、『ご主人様、どうぞあけてください』と言っても、主人はそれに答えて、『わたしは知らない。悪事を働く者どもよ、みんな行ってしまえ』と言うでしょう」（ルカ一三・二五、二七）。原文はアルクセーステ・エクソー・ヘスタナイ（ἄρξησθε ἔξω ἑστάναι）で、直訳すれば『外に立ち始め』です。けれども、むしろ『外に立ち』と読むべきでしょう。アルクセーステ（始める）は、文を整える優美な虚辞にすぎないと思われるからです。

（三） この言葉をざっと見ると、こう見えるかもしれません。彼らがはいれなかった理由は、その求め方よりも、むしろ求めること自体を遅らせたことにあった、と。けれども、結局は同じことになるのです。彼らが立ち去るよう命じられたのは、「悪事を働く者ども」（ルカ一三・二七）だったからです。広い道を歩んできたからです。言いかえれば、苦闘して「狭い戸口からはいる」ように努めなかったからです（ルカ一三・二四）。おそらく彼らは、戸が閉じられる前に求めはしたのでしょう。けれども、それでは足りませんでした。そして、戸が閉じられたあとには、確かに努めました。けれども、そのときにはもう遅すぎたのです。

（四） ですから、あなたがたは今、あなたがたのこの日に、「狭い戸口からはいる」（ルカ一三・二四）ように努めなさい。そのために、次のことを心に定め、いつも思いの一番上に置きなさい。もしあなたが広い道にいるなら、あなたは滅びにいたる道にいるのだ、ということです。多くの人があなたと一緒に行くなら、神が真実であるのと同じほど確かに、彼らもあなたも地獄へ向かっています！ 大多数の人が歩むように歩んでいるなら、あなたは底知れぬ所（黙示録二〇・一）へ向かって歩んでいるのです！ 多くの賢い人、多くの富んだ人、多くの力ある人や身分の高い人が、同じ道をあなたと一緒に旅しているでしょうか。それなら、このしるしによって、それ以上進まなくても、その道がいのちに至らないことが分かります。ここに、細かいことに立ち入る前の、短く、明白で、誤ることのない規則があります。あなたがどんな職業についていても、人と違う者とならなければ、滅びに定められます！ 地獄への道には、人と違うところが何

もありません。けれども、天国への道は、どこまでも人と違うことばかりです。神に向かって一歩でも進むなら、あなたはもう、ほかの人たちのようではなくなります（ルカ一八・一一）。けれども、そのことを気にしてはなりません。穴に落ちるよりは、ひとりで立つほうがはるかにましです。ですから、その競走の仲間はわずかでも、あなたの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬきなさい（ヘブル一二・一）。仲間がいつまでもわずかなわけではありません。もうしばらくすれば、あなたは「無数の天使の祝会」（ヘブル一二・二二）、「長子たちの教会」、「全うされた義人の霊」（ヘブル一二・二三）に近づくのです。

（五）それでは今、「狭い戸口からはいるように努め」なさい（ルカ一三・二四）。あなたの魂が置かれている言いようのない危険を、心の底まで深く感じながら、努めなさい。広い道にいるかぎり、あなたの魂はその危険の中にあるのです。こころの貧しさを欠き、あの内なる宗教のすべてを欠いているかぎり、そうなのです。その内なる宗教を、多くの人々、富んだ人々、賢い人々は狂気と見なします。「はいるように努めなさい」（ルカ一三・二四）。これほど長い間、考えのない群衆と一緒に走り続けてきたことへの悲しみと恥とに刺し通されながら、努めなさい。その間、あなたは聖性を、軽んじてはいなかったとしても、まったくなおざりにしてきたのです。「きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」（ヘブル一二・一四）と言われる、あの聖性です。聖い恐れのうちに苦闘するようにして、努めなさい。あなたがたには「神の安息にはいるべき約束が」（ヘブル四・一）与えられています。それは、「神の民のためにまだ残されている」（ヘブル四・九）安息です。それなのに、万一にも「はいりそこなう」（ヘブル四・一）ことのないように、努めなさい。燃えるような願いを尽くし、「言葉にあらわせない切なるうめき」（ローマ八・二六）をもって、努めなさい。絶えず祈る（第一テサロニケ五・一七）ことによって、努めなさい。いつでも、どこでも、心を神に向けて上げ、神を休ませずに（イザヤ六二・七）、努めなさい。神のみかたちに似た者として目ざめ、それに満ち足りるまで、努めなさい。

（六）結びに申します。「狭い戸口からはいるように努め」なさい（ルカ一三・二四）。魂のこの苦闘、すなわち罪の自覚と、悲しみと、恥と、願いと、恐れと、絶えざる祈りとの苦闘によって努めるだけではありません。自分のふるまいを正しく整え、力を尽くして神のすべての道を歩むことによっても、努めなさい。罪のない道、敬虔の道、あわれみの道を歩むのです。あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい（第一テサロニケ五・二二）。すべての人に、できるかぎりの善を行いなさい。すべてのことにおいて自分を、自分の意志を捨て、日々自分の十字架を負いなさい（ルカ九・二三）。右の手を切り、右の目を抜き出して捨てる（マタイ五・二九～三〇）覚悟をしなさい。財産も、友も、健康も、地上のすべてのものを失う（ピリピ三・八）覚悟をしなさい。天国にはいることさえできるなら、それでよいのです！

説教三十二　山上の説教（十二）

「にせ預言者を警戒しなさい。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来ますが、その内側は強欲なおおかみです。あなたがたは、その実によって彼らを見わけるでしょう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるでしょうか。そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできません。良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれます。このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのです」（マタイ七・一五～二〇）

（一）どれほど多くの魂が滅びへと走って行ったかは、言い表すことも、思い描くこともほとんどできません。彼らは、細い道を歩むように説き伏せられようとしなかったのです。たとえ、それが永遠の救いへの道であってもです。そして、同じことを、私たちは今も日々見ることができます。人類の愚かさと狂気はそれほどのもので、何千もの人々が、今も地獄への道を突き進んでいます。ただ、それが広い道だというだけの理由で、そうするのです。ほかの人々がそうするから、自分もその道を歩むのです。これほど多くの人が滅びるので、自分もその数に加わろうとするのです。弱く、みじめな人の子らに対して、模範はこれほど驚くべき影響力を持っているのです！　それは絶えず死の国を人で満たし、数えきれない魂を永遠の滅びの中に沈めています！

（二）神は、このことを人類に警告し、この広がっていく伝染病からできるだけ多くの人を守ろうとされました。そのために、ご自分の見守る者たち（エゼキエル三三・七）に命じられました。大いに呼ばわって（イザヤ五八・一）、民がどんな危険の中にいるかを示すように、と。この目的のために、神は、ご自分のしもべである預言者たちを、代々にわたってつかわされました。細い道を指し示し、この世と妥協しない（ローマ一二・二）ように、すべての人に勧めさせるためです。けれども、もし見守る者たち自身が、ほかの人々に警告すべきそのわなに陥ったら、どうでしょうか。もし預言者たちが「迷わしごとを預言」したら（イザヤ三〇・一〇）、どうでしょうか。もし彼らが、民を惑わして道からそらしたら（エレミヤ二三・三二）、どうでしょうか。もし彼らが、実は永遠の死への道であるものを、永遠のいのちへの道として指し示したら、どうしたらよいでしょうか。そして、自分が歩んでいるように、細い道ではなく広い道を歩むように、ほかの人々に勧めたら、どうしたらよいでしょうか。

（三）これは前代未聞のことでしょうか。まれなことでしょうか。いいえ、そうでないことは、神がご存じです。その例はほとんど数えきれません。どの時代にも、どの国民の中にも、それを見いだすことができます。けれども、これは何と恐ろしいことでしょう！　神の使節が悪魔の手先になるのです！　人々に天国への道を教えるよう任じられた者たちが、実際には地獄への道を教えるのです！　この人々は、エジプトのいなごのようです。「雹を免れて、残されているものを食い尽」すいなごです（出エジプト一〇・五）。彼らは、免れて残された人々、すなわち悪い模範によって滅ぼされなかった人々までも食い尽くすのです。ですから、賢く恵み深い私たちの主人が、これほどおごそかに彼らのことを警告されるのは、理由のないことではありません。主は言われます。「にせ預言者を警戒しなさい。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来ますが、その内側は強欲なおおかみです」（マタイ七・一五）。

（四）これは、この上なく重要な警告です。それがいっそう確かに私たちの心にしみ込むように、次のことを調べてみましょう。

第一に、このにせ預言者とはだれか。

第二に、彼らはどんな外見を装うか。

第三に、そのうるわしい外見にもかかわらず、彼らの本当の姿をどうすれば知ることができるか。

【一】 このにせ預言者とはだれか

（一） 第一に、このにせ預言者とはだれかを調べなければなりません。このことは、なおさら念入りに行う必要があります。ほかならぬこの人々が、ひどく骨折ってこの聖句に「無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」からです（第二ペテロ三・一六）。もっとも、彼らが招いているのは、自分だけの滅亡ではありません。ですから、すべての論争を断ち切るために、私は（ある人々がよくするように）ほこりを巻き上げて目をくらますことはしません。純朴な人々の心を欺く（ローマ一六・一八）ために、しまりのない、修辞的な感嘆の言葉を用いることもしません。飾りのない、明白な真理を語ります。理解力か慎みがいくらかでも残っている者ならだれも否定できない真理です。この言葉に先立つ説教全体の流れと、最も密接につながっている真理です。ところが、あまりにも多くの人々が、それより前のことにまったく注意を払わずに、この言葉を解釈してきました。まるで、この言葉が、その結びに置かれている説教と何の関係もないかのようにです。

（二） ここで預言者と言われているのは（聖書のほかの多くの箇所、とりわけ新約聖書でそうであるように）、来るべきことを予告する人々ではありません。神の名によって語る人々、すなわち、ほかの人々に天国への道を教えるために、神からつかわされたと公言する人々のことです。

天国への偽りの道、すなわちそこに通じていない道を教える人々は、にせ預言者です。あるいは（結局は同じことになりますが）、まことの道を教えない人々は、にせ預言者です。

（三） 広い道はみな、間違いなく偽りの道です。ですから、これが一つの明白で確かな規則です。「人々に広い道を、すなわち多くの人の歩む道を歩むように教える者は、にせ預言者です」。

さらに、天国へのまことの道は細い道です。ですから、これがもう一つの明白で確かな規則です。「人々に細い道を歩むように、すなわち人と違う者となるように教えない者は、にせ預言者です」。

（四） もっと詳しく言いましょう。天国へのただ一つのまことの道は、この言葉に先立つ説教で指し示された道です。ですから、人々にこの道を歩むように教えない者は、にせ預言者です。

さて、先立つ説教で指し示された天国への道とは、謙遜と、悲しみと、柔和と、聖い願いの道です。神と隣人とを愛し、善を行い、キリストのために悪を忍ぶ道です。ですから、これ以外の道を天国への道として教える者は、にせ預言者です。

（五） 彼らがその別の道を何と呼ぶかは問題ではありません。彼らはそれを信仰と呼ぶかもしれません。あるいは良きわざ、信仰とわざ、悔い改め、あるいは悔い改めと信仰と新しい服従と呼ぶかもしれません。これらはみな良い言葉です。けれども、これらの言葉であれ、ほかのどんな言葉であれ、この道と異なる道を人々に教えるなら、彼らはまさしくにせ預言者です。

（六） まして、この良い道をそしる者は、どれほど、その罪の宣告を受けることでしょう。とりわけ、正反対の道を教える者はそうです。高慢の道、軽薄の道、激情の道、世の欲の道、神よりも快楽を愛する（第二テモテ三・四）道です。隣人への不親切の道、良きわざへの無関心の道、義のために（マタイ五・一〇）何の悪も、何の迫害も忍ばない道です！

（七） 「いったい、だれがこれを天国への道として教えたことがあるのか。だれが今教えているのか」と問う人があるかもしれません。私は答えます。何万もの賢く地位のある人々です。どの教派に属していようと、次のような人々に、自分は天国への道にいると思い込ませる者はみな、そうです。高慢な者、軽薄な者、激しやすい者、世を愛する者、快楽にふける者、不正な者や不親切な者です。気楽で、のんきで、害もなく、役にも立たない者、義のためにそしりを何一つ受けない者です。この人々こそ、その言葉の最も強い意味でのにせ預言者です。神と人とに対する裏切り者です。彼らは、まさにサタンの初子、滅ぼす者アポルオン（黙示録九・一一）の長男たちです。彼らは、ありふれた人殺しよりもはるかに上の位にいます。人の魂を殺すからです。彼らは絶えず夜の国を人で満たしています。そして、彼らが自分の滅ぼしたあわれな魂たちのあとを追って行

くときには、いつでも、「下の陰府は」彼らの「ために動いて」、彼らの「来るのを迎え」るでしょう（イザヤ一四・九）！

【二】 にせ預言者が装う外見

（一） けれども、彼らは今、自分の本当の姿で来るでしょうか。決してそうではありません。もしそうなら、滅ぼすことはできないでしょう。あなたは危険を察して、必死に逃げ出すでしょう。ですから、彼らはまったく正反対の外見を装います（これが、考えるべき第二のことでした）。「彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来ますが、その内側は強欲なおおかみです」（マタイ七・一五）。

（二） 「彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来」ます（マタイ七・一五）。すなわち、害のない外見をして来るのです。彼らは、この上なく穏やかで、人の気にさわらない態度で来ます。敵意のしるしや気配は少しもありません。この物静かな者たちが、だれかに何かの害を加えるなどと、だれが想像できるでしょうか。もしかすると、彼らは、そうあってほしいと願うほどには、善を行うことに熱心でも活発でもないかもしれません。それでも、彼らが害を加えようという願いさえ持っていると疑う理由は、あなたには見当たりません。けれども、これだけではありません。

（三） 第二に、彼らは役に立つ者の外見をして来ます。実際、彼らは、このこと、すなわち善を行うことのために、特に召されています。まさにこのことのために、取り分けられているのです。彼らは、あなたの魂を見守り、あなたを永遠のいのちへと育てるように、特に任じられています。彼らの仕事のすべては、「よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々を」「いやしながら、巡回」することです（使徒一〇・三八）。そして、あなたはいつも、彼らをそのような目で見ることに慣れてきました。あなたに祝福をもたらすためにつかわされた、神の使者として見てきたのです。

（四） 第三に、彼らは宗教の外見をして来ます。彼らのすることはみな、良心のためなのです！ 彼らは、自分が神を偽り者としている（第一ヨハネ五・一〇）のは、ひたすら神への熱心からだ、とあなたに請け合います。彼らが宗教を根こそぎ滅ぼそうとするのは、純粋に宗教を思う心からなのです。彼らの語ることはみな、ただ真理への愛と、真理がそこなわれはしないかという恐れから出ています。また、おそらく、教会への敬意と、教会をそのすべての敵から守りたいという願いから出ているのです。

（五） 何よりも、彼らは愛の外見をして来ます。彼らがこれほど骨を折るのは、ただあなたのためなのです。あなたに好意を持っているのでなければ、あなたのことで心をわずらわせたりはしないでしょう。彼らは、自分の善意を大いに言い立てます。あなたの置かれている危険を案じていることを言い立てます。あなたを誤りから、新奇で有害な教えに巻き込まれることから守りたいと、切に願っていることを言い立てるのです。これほど善意のある人が何かの極端に走るのを見るのは、とても残念だ、と彼らは言います。奇妙で分かりにくい考えに混乱させられたり、惑わされて熱狂に陥ったりするのを見るのも、残念だと言うのです。だからこそ、彼らはあなたに、平凡な中道にじっととどまるよう勧めます。「義に過ぎ」ることのないように、それで「自分を滅ぼ」すことのないように（伝道七・一六）、気をつけなさいと勧めるのです。

【三】 にせ預言者の本当の姿を知る方法

（一） けれども、そのうるわしい外見にもかかわらず、彼らの本当の姿をどうすれば知ることができるでしょうか。これが、調べようと予告した第三のことでした。私たちの祝福された主は、にせ預言者を見分けることが、すべての人にとってどれほど必要かを見ておられました。どのように変装していても、見分けなければならないのです。また、ほとんどの人が、長い推論の連鎖をたどって真理を導き出すことがどれほどできないかも、見ておられました。ですから、主は私たちに、短く明白な規則を与えてくださいます。最も能力の乏しい人にもたやすく理解でき、どんな場合にもたやすく当てはめられる規則です。「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるでしょう」（マタイ七・一六）。

（二） どんな場合にも、あなたはこの規則をたやすく当てはめることができます。神の名によって語るだれかが、にせ預言者か、まことの預言者かを知るために、次のことをたやすく観察できます。第一に、彼らの教えが彼ら自身にどんな実を結んでいるかです。それは彼らの生活にどんな効果をもたらしたでしょうか。彼らは、すべてのことにおいて聖く、責められるところがないでしょうか。それは彼らの心にどんな効果をもたらしたでしょうか。彼らのふるまい全体の流れから見て、彼らの気質は聖く、天的で、神々しいでしょうか。キリスト・イエスのうちにあった思い（ピリピ二・五）が、彼らのうちにあるでしょうか。彼らは柔和で、謙遜で、忍耐強く、神と人とを愛し、良いわざに熱心（テトス二・一四）でしょうか。

（三） 第二に、彼らの教えが、それを聞く人々にどんな実を結んでいるかを、たやすく観察できます。すべての人にではなくても、少なくとも多くの人に結んでいるかです。使徒たち自身も、聞いた人をみな回心させたわけではないからです。この聞き手たちは、キリストのうちにあった思い（ピリピ二・五）を持っているでしょうか。キリストが歩かれたように歩んでいる（第一ヨハネ二・六）でしょうか。そして、この人々に聞くことによって、そうし始めたのでしょうか。彼らに聞くまでは、内も外も悪い者だったのでしょうか。もしそうなら、それは、その人々がまことの預言者、神からつかわされた教師であることの明らかな証拠です。けれども、もしそうでなく、彼らが自分にも他人にも、神を愛し神に仕えることを実際に教えていないとします。それは、彼らがにせ預言者であることの明らかな証拠です。神が彼らをつかわされなかったのです。

（四） これは厳しい言葉です！ これに耐えられる人は、何と少ないことでしょう！ 主はこのことをよくご存じでした。ですから、へりくだって、いくつかの明白で説得力のある論拠によって、これを詳しく証明してくださいます。主は言われます。「茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるでしょうか」（マタイ七・一六）。この悪い人々が良い実を結ぶことを、あなたは期待するのですか。それは、茨がぶどうを実らせ、あざみにいちじくがなるのを期待するのと同じことです。「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます」（マタイ七・一七）。まことの預言者はみな、わたしがつかわした教師はみな、聖性という良い実を結びます。けれども、にせ預言者、すなわちわたしがつかわさなかった教師は、罪と悪だけを結びます。「良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできません」（マタイ七・一八）。まことの預言者、神からつかわされた教師は、ときどき良い実を結ぶだけではなく、いつも結びます。たまたま結ぶのではなく、一種の必然によって結ぶのです。同じように、にせ預言者、すなわち神がつかわされなかった者は、たまたま、あるいはときどき悪い実を結ぶのではありません。いつも、必然的に結ぶのです。「良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれます」（マタイ七・一九）。良い実を結ばない預言者、魂を罪から救わず、罪人を悔い改めに導かない預言者の運命は、間違いなくそうなるでしょう。これを永遠の規則として立てましょう。「このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのです」（マタイ七・二〇）。高慢な者、激しやすい者、無慈悲な者、世を愛する者を、実際に変える人々がいます。謙遜で、優しく、神と人とを愛する者に変えるのです。その人々こそまことの預言者です。彼らは神からつかわされています。だからこそ、神は彼らの言葉を確かなものとされるのです。他方、聞き手が以前に不義な者だったなら、今も不義なままでいるとします。あるいは少なくとも、「律法学者やパリサイ人の義にまさ」る義（マタイ五・二〇）を少しも持たないままでいるとします。そのような聞き手を持つ人々は、にせ預言者です。彼らは神からつかわされていません。ですから、彼らの言葉は地に落ちます（サムエル記上三・一九）。そして、恵みの奇跡がないかぎり、彼らもその聞き手も、ともに底知れぬ所（黙示録二〇・一）に落ちるのです！

（五） ああ、このような「にせ預言者を警戒しなさい」（マタイ七・一五）！ 彼らは「羊の衣を着て」来ますが、「その内側は強欲なおおかみ」なのです（マタイ七・一五）。彼らは、ただ群れを滅ぼし、食い尽くすだけです。助ける者がいなければ、群れを引き裂きます。彼らは、あなたを天国への道に導こうとしませんし、導くこともできません。自分自身がその道を知らないのに、どうして導けるでしょうか。ああ、彼らがあなたを道から外れさせ、「働いて得た成果を失う」（第二ヨハネ八）ようにさせることのないよう、気をつけなさい！

（六）けれども、あなたはこう尋ねるかもしれません。「彼らに聞くことにそれほどの危険があるなら、そもそも彼らに聞くべきなのか」。これは重大な問いです。最も深く考えるに値し、最も冷静に考え、最も慎重に思いめぐらしたうえでなければ、答えるべきではない問いです。長年の間、私はこのことについて何かを語ることさえ、ほとんど恐れてきました。どちらとも決めかね、何の判断も下せなかったのです。すぐに思い浮かび、「彼らに聞いてはならない」と言いたい気にさせる理由は、たくさんあります。けれども、主がご自分の時代のにせ預言者について語られたことは、その反対を意味しているように思われます。「そのときイエスは、群衆と弟子たちとに語って言われた、『律法学者とパリサイ人とは、モーセの座にすわっている』」（マタイ二三・一～二）。すなわち、彼らはあなたがたの教会の、正規の、定まった教師だということです。「だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないからです」（マタイ二三・三）。さて、この人々が最も強い意味でのにせ預言者であったことを、主はその公生涯の全体を通して示されました。まさに「彼らは言うだけで、実行しない」（マタイ二三・三）という言葉でも、示しておられます。ですから、弟子たちは、彼らの実によって彼らを見分けないわけにはいきませんでした。その実は、すべての人の目にさらされていたからです。それで、主は弟子たちに、このにせ預言者たちを警戒するよう、何度も警告されます。それなのに、主は、この人々に聞くことさえ禁じてはおられません。いや、実際には、聞くように命じておられるのです。「だから、彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい」（マタイ二三・三）という言葉によってです。彼らに聞かなければ、彼らが行うように言うことを知ることはできず、まして守ることなどできなかったからです。それなら、ここで主ご自身が、使徒たちにも群衆全体にも、はっきりした指示を与えておられるのです。ある状況のもとでは、にせ預言者に、それもにせ預言者だと知られ、認められている者にさえ、聞きなさいという指示です。

（七）けれども、こう言われるかもしれません。「主が彼らに聞くように指示されたのは、彼らが会衆に聖書を朗読するときだけだ」。私は答えます。彼らはこうして聖書を朗読すると同時に、たいていその解き明かしもしていました。そして、ここには、朗読には聞いても、解き明かしには聞くべきでない、というほのめかしは少しもありません。いや、「彼らがあなたがたに言うことは、みな」（マタイ二三・三）という言葉そのものが、そのような制限をまったく締め出しているのです。

（八）さらに、彼らに、すなわち否定しようもないにせ預言者たちに、しばしば聖餐の執行までもゆだねられています。ああ、これは口にするのも悲しいことです。まことに、このような事は、あるべきではありません（ヤコブ三・一〇）。ですから、人々に彼らに聞かないよう指示することは、実際には、人々を神の定めから断ち切ることになるでしょう。けれども、私たちには、あえてそうすることはできません。神の定めの効力は、それを執り行う者の善良さによるのではなく、それを定めた方の真実によるからです。その方は、ご自分の定めた道で、私たちに会おうとされ、実際に会ってくださいます。ですから、この理由からも、私は「にせ預言者にさえ聞いてはならない」と言うことをためらうのです。自分自身はのろいの下にある者たちを通してさえ、神は私たちに祝福を与えることがおできになり、実際に与えてくださいます。彼らがさくパンが、「キリストのからだにあずかること」（第一コリント一〇・一六）であることを、私たちは経験によって知っているからです。そして、彼らの汚れた唇を通してさえ神が祝福された杯は、私たちにとって、キリストの血にあずかること（第一コリント一〇・一六）だったのです。

（九）ですから、私の言えることは、これだけです。個々の場合に、へりくだった切なる祈りをもって神を待ち望み、そのうえで、自分の持っている最善の光に従って行動しなさい。全体として見て、自分の霊の益に最もなると確信することに従って、行動しなさい。軽率にさばくことのないよう、よく気をつけなさい。だれかを、軽々しくにせ預言者と思うことのないようにしなさい。そして、十分な証拠をつかんだときにも、怒りや軽蔑が心に少しも入り込まないようにしなさい。そのうえで、神のみまえで、神を恐れつつ、自分で決めなさい。私はただ、こう言えるだけです。彼らに聞くことが自分の魂を害すると経験によって分かったなら、彼らに聞いてはなりません。そのときは、静かに控え、自分の益になる人々に聞きなさい。反対に、それが自分の魂を害さないと分かったなら、そ

のまま彼らに聞き続けてもかまいません。ただ、「どう聞くかに注意」しなさい（ルカ八・一八）。彼らと彼らの教えとを警戒しなさい。恐れおののきつつ（ピリピ二・一二）聞きなさい。欺かれて、彼らと同じように迷わす力（第二テサロニケ二・一一）に引き渡されることのないためです。彼らは絶えず真理と偽りとを混ぜ合わせているのですから、あなたは両方を一緒に何とたやすく取り込んでしまうことでしょう！　人に知恵を教えるただひとりの方に、熱心に絶えず祈りながら聞きなさい。そして、聞くことは何でも、「教とあかしと」（イザヤ八・二〇）に照らすようにしなさい。試していないものは何一つ受け入れてはなりません。聖所のはかりで量ってみるまでは、何も受け入れてはなりません。彼らの言うことは、聖書の言葉によってはっきり確かめられないかぎり、何も信じてはなりません。聖書と異なるもの、聖書によって確かめられないものは、何であれすっかり退けなさい。救いの道として説かれるもののうち、主が先立つ説教で示された道と異なるもの、それに及ばないものがあれば、とりわけそれを、この上ない嫌悪をもって退けなさい。

（一〇）結ぶにあたって、今まで語ってきた人々に、飾りのない言葉を少し語らないわけにはいきません。ああ、にせ預言者たちよ！　枯れた骨よ！　せめて一度は、主の言葉を聞きなさい（エゼキエル三七・四）！　あなたがたは、いつまで神の名によって偽りを語るのですか。神があなたがたを通して語られたのではないのに、いつまで「神が語られた」と言うのですか。いつまで、主のまっすぐな道を曲げ（使徒一三・一〇）、暗やみを光とし、光を暗やみとする（イザヤ五・二〇）のですか。いつまで死の道を教え、それをいのちの道と呼ぶのですか。神のもとに導くと公言している魂を、いつまでサタンに引き渡す（第一コリント五・五）のですか。

（一一）「盲人を手引きする盲人」（マタイ一五・一四）たちよ、「あなたがたは、わざわいです。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせません。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしないのです」（マタイ二三・一三）。「狭い戸口からはいるように努め」（ルカ一三・二四）ようとする人々を、あなたがたは広い道へ呼び戻します。神の道をやっと一歩踏み出したばかりの人々に、あなたがたは悪魔のように、行き過ぎないよう注意します。やっと「義に飢えかわ」き（マタイ五・六）始めた人々に、あなたがたは「義に過ぎないよう（伝道七・一六）警告します。こうして、あなたがたは、彼らを入口そのものでつまずかせます。そうです、倒れて二度と起き上がれないようにするのです。ああ、なぜ、あなたがたはこんなことをするのですか。彼らが墓に下るとき、その血に何の益があるでしょうか（詩篇三〇・九）。あなたがたにとって、みじめな益です！　彼らは「自分の罪によって死」にます。「しかし」神は「その血を」あなたがたの「手に求め」られるのです（エゼキエル三三・八）！

（一二）あなたがたの目はどこにあるのですか。あなたがたの理解力はどこにあるのですか。ほかの人々を欺いているうちに、自分自身をも欺いてしまったのですか。自分の知りもしない道を教えることを、だれが、あなたがたに求めたのですか（イザヤ一・一二）。あなたがたは、「迷わす力」に引き渡されて、偽りを教えるだけでなく、「偽りを信じる」までになっているのですか（第二テサロニケ二・一一）。そして、神があなたがたをつかわした、あなたがたは神の使者だと、本当に信じることができるのですか。いいえ。もし主があなたがたをつかわされたのなら、主のわざはあなたがたの手によって栄えるはずです。主は生きておられます。もしあなたがたが神の使者なら、神はその使者の言葉を確かなものとされるはずです。けれども、主のわざは、あなたがたの手によって栄えていません。あなたがたは、罪人をひとりも悔い改めに導いていません。主は、あなたがたの言葉を確かなものとされません。あなたがたは、一つの魂も死から救っていないからです。

（一三）これほど十分で、これほど強く、これほどはっきりした主の言葉の力から、どうして逃れることができるでしょうか。自分の実によって、すなわち悪い木の悪い実によって、自分自身を知ることから、どうして逃れられるでしょうか。そして、ほかになりようがあるでしょうか。「茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるでしょうか」（マタイ七・一六）。これが当てはまる人々よ、これを自分のこととして受けとめなさい！　ああ、実を結ばない木々よ、なぜ土地をむだにふさいでいるのですか（ルカ一三・七）。「すべて良い木は良い実を結びます」（マタイ七・一七）。ここには例外がないことが分からないのですか。それなら、あなたがたは良い木ではないことを知りなさい。良い実を結

んでいないからです。「悪い木は悪い実を結びます」（マタイ七・一七）。そして、あなたがたは初めからそうしてきました。あなたがたは、神から出たかのように語ってきました。その結果、聞いた人々は、悪魔のわざにではないとしても、悪魔の気質に固められただけでした。ああ、あなたがたがその名によって語っている方から、警告を受けなさい。その方が宣告された判決が執行される前にです。「良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれます」（マタイ七・一九）。

（一四）愛する兄弟たち、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけません（ヘブル三・八）！　あなたがたは、あまりにも長い間、光に対して目を閉ざしてきました。手遅れにならないうちに、外のやみ（マタイ八・一二）に投げ出されないうちに、今、目を開きなさい！　この世のどんな配慮にも、心を動かされてはなりません。永遠がかかっているのです。あなたがたは、つかわされる前に走ったのです（エレミヤ二三・二一）。ああ、もうこれ以上進んではなりません！　自分自身と、自分に聞く人々とを滅びに定めることを、続けてはなりません！　あなたがたの労苦には、何の実もありません。それはなぜでしょうか。ほかでもなく、主があなたがたと共におられないからです。けれども、あなたがたは、自分で費用を出して、この戦いを続けることができるでしょうか（第一コリント九・七）。それはできません。それなら、主の前にへりくだりなさい。ちりの中から主に叫び求めなさい。主がまず、あなたの魂を生かし、愛によって働く信仰（ガラテヤ五・六）を与えてくださるためです。それは、謙遜で柔和な、清くあわれみ深い信仰、良いわざに熱心な（テトス二・一四）信仰です。患難の中でも、そしりの中でも、苦しみの中でも、義のための迫害（マタイ五・一〇）の中でも喜ぶ信仰です！　そうすれば、「栄光の霊」、キリストの霊が、あなたに「宿る」でしょう（第一ペテロ四・一四）。そして、神があなたをつかわされたことが明らかになるでしょう。そうすれば、あなたは本当に、「伝道者のわざをなし、自分の務を全う」するでしょう（第二テモテ四・五）。そうすれば、あなたの口にある神の言葉は、「岩を打ち砕く鎚」となるでしょう（エレミヤ二三・二九）！　そのとき、あなたの実によって、あなたが主の預言者であることが知られるでしょう。神があなたに賜わった子たち（イザヤ八・一八）によって、知られるのです。そして、「多くの人を義に導」いたあなたは、「星のようになって永遠に」輝くのです（ダニエル一二・三）！

説教三十三　山上の説教（十三）

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのです。その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うでしょう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言います、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはありません。岩を土台としているからです。また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいます。そしてその倒れ方はひどいのです」（マタイ七・二一～二七）

（一）　神である私たちの教師は、救いの道について神のみ旨をあますところなく告げ知らせ（使徒二〇・二七）、その道を歩もうと願う人々の主な妨げをも指摘されました。そして今、この重みのある言葉で全体を結ばれます。それによって、いわばご自分の預言に封印をし、語ってきたことにご自分の全権威を刻みつけられるのです。それが代々にわたって堅く立つためです。

（二）　主はこう言われます。これ以外に道があるなどと、だれも決して思わないためです。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのです。その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うでしょう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言います、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』」（マタイ七・二一～二三）。ですから、「わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいます。そしてその倒れ方はひどいのです」（マタイ七・二六～二七）。

（三）　この説教で、私は次のことをするつもりです。

第一に、このように砂の上に自分の家を建てる人のありさまを考えます。

第二に、岩の上に建てる人の知恵を示します。

第三に、実践への適用をもって結びます。

【一】　砂の上に家を建てる人のありさま

（一）　まず第一に、砂の上に自分の家を建てる人のありさまを考えなければなりません。主が次のように言われるのは、この人のことです。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではありません」（マタイ七・二一）。そして、これは過ぎ去ることのない定めです。世々限りなく堅く立つ定めです。ですから、この言葉の力を徹底して理解することは、私たちにとってこの上なく重要です。では、「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う」（マタイ七・二一）という言い方を、どう理解すべきでしょうか。それは疑いなく、わたしが今述べてきた道以外の道によって天国に行こうと考える者、という意味です。ですから、それは（最も低いところから始めるなら）あらゆる良い言葉、あらゆる口先だけの宗教を含みます。私たちが唱える信条も、私たちがする信仰告白も、それが何であれ含みます。私たちが繰り返す祈りの数や、神に読み上げ、あるいは口で述べる感謝も、それがどれほどであれ含むのです。私たちは、神の御名をほめたたえ、人の子らに神のいつくしみをあらわすこともできます。神のすべての力あるわざを語り、日ごとにその救を宣べ伝える（詩篇九六・

二）こともできます。霊によって霊のことを解釈し（第一コリント二・一三）、神の言（ローマ三・二）の意味を示すこともできます。世の初めから隠されていた（マタイ一三・三五）、神の国の奥義を説き明かすこともできます。神の深みの（第一コリント二・一〇）について、人の言葉というより、むしろ御使たちの言葉（第一コリント一三・一）で語ることもできます。罪人たちに、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ一・二九）と宣べ伝えることもできます。そうです、私たちは、これほどの神の力と、これほどの御霊の証明（第一コリント二・四）とをもって、これをすることもできます。多くの魂を死から救い出し、多くの罪をおおう（ヤコブ五・二〇）ほどにです。それでも、これらすべてが、「主よ、主よ」（マタイ七・二一）と言うことにすぎない、ということは十分にありうるのです。このように、ほかの人に宣べ伝えて成果をあげておきながら、なお私自身は失格者になるかもしれません（第一コリント九・二七）。私は、神の御手に用いられて多くの魂を地獄から奪い取りながら、それを終えたとき、自分がそこへ落ちるかもしれません。ほかの多くの人を天国に導きながら、私自身は決してそこにはいれないかもしれません。読者よ、もし神が私の言葉を通してあなたの魂を祝福されたことがあるなら、罪人の私を神があわれんでくださるように祈ってください！

（二）第二に、「主よ、主よ」（マタイ七・二一）と言うことには、害を行わないことが含まれることもあります。私たちは、あらゆる故意の罪から、あらゆる種類の外的な悪から、遠ざかることができます。聖書で禁じられているあらゆるふるまいや語り方を、控えることができます。私たちは、共に暮らしているすべての人々に、「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのですか」（ヨハネ八・四六）と言うことさえできるかもしれません。神に対しまた人に対して、外的な点では良心に責められることのない状態（使徒二四・一六）を保つこともできます。外的な行いについては、あらゆる汚れ、不信心、不義から潔白であることもできます。あるいは（使徒が自分についてあかししているように）、「律法の義については」、すなわち外的な義については、「落ち度のない者」であることもできます（ピリピ三・六）。けれども、私たちはこれによって義とされるのではありません。これもまた、「主よ、主よ」（マタイ七・二一）と言うことにすぎません。もしこれより先に進まないなら、私たちは決して「天国にはいる」ことはできません（マタイ七・二一）。

（三）第三に、「主よ、主よ」（マタイ七・二一）と言うことには、ふつう良きわざと呼ばれているものの多くが含まれることもあります。人は主の晩餐に連なり、すぐれた説教をたくさん聞き、ほかのすべての神の定めにあずかる機会を一つも逃さないこともできます。私は、隣人に善を行い、飢えた者に自分のパンを分け与え、裸の者に着物を着せる（イザヤ五八・七）こともできます。良いわざに熱心な（テトス二・一四）あまり、「自分の全財産を人に施」す（第一コリント一三・三）ほどになることさえできます。そうです、私は、神に喜ばれたいと願って、これらすべてをすることもできるのです。それによって本当に神に喜ばれていると、心から信じてすることもできるのです。主が登場させておられる、主に「主よ、主よ」（マタイ七・二二）と言う人々は、否定しようもなく、まさにそうでした。それでもなお、私は、やがて現される栄光（ローマ八・一八）に何のかかわりも持たないかもしれません。

（四）もし、このことを不思議に思う人がいるなら、その人は、自分がイエス・キリストの宗教の全体を知らない者であることを認めるべきです。とりわけ、主がこの説教で私たちの前に示された、その宗教の完全な肖像を知らない者であることを、認めるべきです。これらすべては、主がそこに描かれた真の義と聖（エペソ四・二四）に、何と遠く及ばないことでしょう！　信じる魂のうちに今開かれている内なる天国から、何と遠く隔たっていることでしょう。その天国は、初めは一粒のからし種のように心にまかれますが、やがて大きな枝を張ります（マルコ四・三一～三二）。その枝には、義のあらゆる実が、すなわちあらゆる良い気質と、良い言葉と、良いわざが実るのです。

（五）主はこのことをはっきりと告げ、何度も繰り返してこられました。自分のうちにこの神の国を持たない者は、だれも天国にはいれない、と。それでも主は、多くの人がこの言葉を受け入れないことをよくご存じでした。ですから、もう一度これを確かなものとされます。主は言われます。「その日には、多くの者が、わたしにむかって」言うでしょう（マタイ七・二二）。ひとりではありません。少数だけでもありません。これはまれなことでも、珍しいことでもないの

です。彼らはこう言うだけではありません。私たちは多くの祈りをささげました。あなたを賛美しました。悪から遠ざかりました。善を行うことに励みました、と。それよりもはるかに大きなことを言うのです。「わたしたちはあなたの名によって預言し」、「あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行」いました（マタイ七・二二）、と。「わたしたちは」「預言し」ました（マタイ七・二二）。すなわち、私たちは、あなたの御旨を人々に告げ知らせました。罪人たちに、平和と栄光への道を示しました。そして、私たちはこれを「あなたの名によって」（マタイ七・二二）しました。あなたの福音の真理に従ってしました。そうです、あなたの権威によってしたのです。あなたは、天からつかわされた聖霊（第一ペテロ一・一二）によって、御言の確かなことをお示しになりました（マルコ一六・二〇）。私たちは、あなたの名において、またあなたの名によって、すなわちあなたの言葉と御霊の力によって、「悪霊を追い出し」ました（マタイ七・二二）。悪霊が長い間自分のものだと言い張り、完全に、平穏に占領していた魂から、追い出したのです。「あなたの名によって」、すなわち私たちの力ではなく、あなたの力によって、「多くの力あるわざを行」いました（マタイ七・二二）。私たちを通して語る「神の子の声を」、「死んだ人たち」さえ「聞」いて、生きたほどです（ヨハネ五・二五）。「そのとき、わたしは」この人々にさえ「はっきり、こう言います、『あなたがたを全く知らない』」（マタイ七・二三）。そうです、あなたがたがわたしの名によって「悪霊を追い出し」ていた（マタイ七・二二）そのときでさえ、知らなかったのです。そのときでさえ、わたしは、あなたがたをわたしのものとして知ってはいませんでした。あなたがたの心が神の前に正しくなかった（使徒八・二一）からです。あなたがた自身は、柔和でも謙遜でもありませんでした。神とすべての人とを愛する者ではありませんでした。神のかたちに新しくされていませんでした。わたしが聖であるように聖ではありませんでした。これらすべてにもかかわらず、「不法を働く者どもよ、行ってしまえ」（マタイ七・二三）。「不法」と訳された語は、原語ではアノミア（ἀνομία）です。あなたがたは、わたしの律法、すなわち聖く完全な愛の律法にそむく者なのです。

（六）　このことに反論の余地をまったく残さないために、主は、あのぴったりとした譬によってこれを確かなものとされます。主は言われます。「わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけ」ます（マタイ七・二六～二七）。遅かれ早かれ、それらは必ず、すべての人の魂に打ちつけます。外からの苦難や内からの誘惑という洪水が、高慢、怒り、恐れ、欲望という嵐が打ちつけるのです。すると、「倒れてしまいます。そしてその倒れ方はひどいのです」（マタイ七・二七）。こうして、その家は永遠に滅びてしまいます。上に述べた宗教に及ばない何かに安んじている人々はみな、必ずこのような運命をたどります。しかも、彼らの倒れ方はいっそうひどくなるでしょう。彼らは「これらの言葉を聞いても」、なお「行わない」からです（マタイ七・二六）。

【二】　岩の上に家を建てる人の知恵

（一）　第二に、主の言葉を行う人、すなわち岩の上に自分の家を建てる人の知恵を示さなければなりません。「天にいますわが父の御旨を行う者」（マタイ七・二一）こそ、まことに賢い人です。その「義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていい」る人（マタイ五・二〇）こそ、本当に賢い人です。この人は、ここの貧しい人（マタイ五・三）です。自分が知られているように、自分を知っています（第一コリント一三・一二）。あがないの血によって洗い流されるまで、自分のすべての罪と、すべての罪責とを見、また感じています。自分が滅びた状態にあること、神の怒りが自分の上にとどまっている（ヨハネ三・三六）ことを自覚しています。自分で自分を救うことがまったくできないことも自覚しています。聖霊における平和と喜び（ローマ一四・一七）に満たされるまで、そうなのです。この人は、柔和で優しく、すべての人に対して寛容です（第一テサロニケ五・一四）。「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報い」て（第一ペテロ三・九）、ついには善をもって悪に勝つ（ローマ一二・二一）のです。彼の魂は、地上の何ものをも慕わず、ただ神を、いける

神を慕っています（詩篇四二・二）。すべての人に対して深い愛の心を持ち、自分の敵のためにさえ、いのちを捨てる用意があります。心をつくし、思いをつくし、精神をつくし、力をつくして、主なる自分の神を愛しています（マルコ一二・三〇）。天国にはいるのは、この精神をもって、すべての人に善を行う人だけです。そのために人に侮られて捨てられ（イザヤ五三・三）、憎まれ、そしられ、迫害されても、喜び、「よろこ」ぶ（マタイ五・一二）人だけです。この人は、自分の信じてきたかたを知っています（第二テモテ一・一二）。そして、このしばらくの軽い患難が、「永遠の重い栄光を」自分に「得させる」ことを確信しているのです（第二コリント四・一七）。

（二） この人は、何と本当に賢いことでしょう！ この人は自分を知っています。自分は、神から出て、泥の家（ヨブ四・一九）の中に送り込まれた、永遠の霊であることを知っているのです。それは、自分のこころのままを行うためではなく、自分をつかわされたかたのみこころを行うため（ヨハネ六・三八）でした。この人は世を知っています。世は、永遠のすまい（ルカ一六・九）へ向かう途中で、わずかな日々か年月を過ごす場所です。そこに住む者としてではなく、旅人であり寄留者として（第一ペテロ二・一一）過ごす場所なのです。ですから、この人は、世と交渉を持っても深入りしません。この世の有様は過ぎ去る（第一コリント七・三一）ことを知っているからです。この人は神を知っています。神は、彼の父であり友です。すべての善の源、すべての肉なる者の霊の中心、知性を持つすべての者のただ一つの幸いです。この人は、真昼の太陽の光よりもはっきりと見ています。人の目的とは、人をご自分のために造られた方の栄光をあらわし、その方を永遠に愛し、喜ぶことだ、と。そして、同じようにはっきりと、その目的に、すなわち栄光のうちに神を喜ぶことに至る手段を見ています。それは、今このときから、神を知り、神を愛し、神にならい、神がつかわされたイエス・キリスト（ヨハネ一七・三）を信じることです。

（三） この人は、神の目から見てさえ賢い人です。「岩の上に自分の家を建て」るからです（マタイ七・二四）。千歳の岩、とこしえの岩（イザヤ二六・四）、すなわち主イエス・キリストの上に建てるのです。主がそう呼ばれるのは、ふさわしいことです。主は変ることがないからです。主は、「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」方です（ヘブル一三・八）。昔の神の人も、その言葉を引く使徒も、主についてこうあかししています。「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになりました。もろもろの天も、み手のわざです。これらのものは滅びてしまいますが、あなたは、いつまでもいますかたです。すべてのものは衣のように古び、それらをあなたは、外套のように巻かれます。これらのものは、衣のように変りますが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがありません」（ヘブル一・一〇～一二）。ですから、主の上に建てる人は賢いのです。主をただ一つの土台としてすえ（第一コリント三・一一）、ただ主の血と義の上に、すなわち主が私たちのために行い、また苦しまれたことの上に建てる人です。この人は、この隅のかしら石（エペソ二・二〇）に信仰をすえ、その上に魂の重みのすべてを置きます。この人は、神に教えられて（ヨハネ六・四五）、こう言います。「主よ、私は罪を犯しました。私は最も深い地獄に値する者です。けれども、私は、価なしに、あなたの恵みにより、イエス・キリストによるあがないによって義とされています（ローマ三・二四）。そして、私がいま生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をささげられた方を信じる信仰によって、生きているのです（ガラテヤ二・二〇）。私がいま生きているいのちとは、神からの、天的ないのちです。キリストと共に神のうちに隠されているいのち（コロサイ三・三）です。私はいま、肉にあってさえ、愛のいのちを、神と人とに対する純粋な愛のいのちを生きています。聖性と幸いのいのちを生き、神を賛美し、すべてを神の栄光のためにしているのです（第一コリント一〇・三一）」。

（四） けれども、このような人も、もう戦いに会うことはないとか、今はもう誘惑の届かないところにいるとか、考えてはなりません。神は、なお、ご自分が与えた恵みを試されます。この人は、火の中の金のように試されるでしょう。この人は、神を知らない人々に劣らず誘惑を受けるでしょう。もしかすると、はるかに多く受けるかもしれません。サタンは、滅ぼすことのできない者を、とことんまで試さずにはおかないからです。ですから、「雨」は激しく「降」ります（マタイ七・二五）。ただし、それが降るのは、ある方がよしとされるときに、よしとされる仕方でだけです。それは、空中の権をもつ君（エペソ二・二）では

なく、「そのまつりごとはすべての物を統べ治める」方（詩篇一〇三・一九）です。「洪水」、すなわち激流が「押し寄せ」ます（マタイ七・二五）。洪水は大波をあげ、恐ろしく荒れ狂います。けれども、洪水の上に座し、とこしえに王であられる主（詩篇二九・一〇）は、それらにもこう言われます。「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」、あなたがたの「高波はここにとどまるのだ」（ヨブ三八・一一）、と。「風が吹いてその家に打ちつけ」ます（マタイ七・二五）。まるで、家を土台から引き抜こうとするかのようです。けれども、風は打ち勝つことができません。家は倒れません。岩を土台としているからです（マタイ七・二五）。この人は、信仰と愛によってキリストの上に建てています。ですから、倒されることはありません。彼は、「たとい地は変り、山は海の真中に移るとも」、「恐れない」でしょう（詩篇四六・二）。「たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも」（詩篇四六・三）、彼はなお、「いと高き者のもとにある隠れ場に住」み、「全能者の陰に」あって安全です（詩篇九一・一）。

【三】 実践への適用

（一） それなら、これらのことを実際に自分に当てはめることは、すべての人の子にとって、何と切実なことでしょう！ 自分が何の土台の上に、岩の上にか砂の上にか、建てているかを念入りに調べることは、何と切実なことでしょう！ あなたにとって、次のように問うことは、何と深くかかわることでしょう。「私の望みの土台は何か。天国にはいるという期待を、私は何の上に建てているのか。それは砂の上に建てられているのではないか。私の正統信仰、すなわち正しい意見の上に建てられているのではないか。私は、言葉をひどく乱用して、それを信仰と呼んできた。ほかの人々の考えよりも合理的で、聖書的だと思われる一組の考えを持っていることの上に、建てられているのではないか」。ああ、これは何という狂気でしょう！ これは確かに砂の上に、いや、むしろ海の泡の上に建てることです！ こう言いなさい。「私はこのことを確信した。だが、私はまたしても、同じように望みを支えることのできないものの上に、望みを建ててはいないか。もしかすると、『これほどすぐれた教会、まことの聖書の型に従って改革され、最も純粋な教理と、最も初代教会に近い典礼と、最も使徒的な教会政治とに恵まれた教会！』に属していることの上に、建ててはいないか。これらは、疑いもなく、どれも神を賛美する理由だ。どれも聖性への助けになりうるからだ。けれども、それは聖性そのものではない。そして、もしそれが聖性から切り離されているなら、私に何の益にもならない。いや、私をいっそう弁解の余地のない者（ローマ一・二〇）とし、もっときびしいさばき（マタイ二三・一四）にさらすだろう。だから、もし私がこの土台の上に望みを建てるなら、私はやはり砂の上に建てているのだ」。

（二） あなたは、ここに安んじることはできません。安んじてはならないのです。次には、救いの望みを何の上に建てるのでしょうか。自分の潔白の上にでしょうか。害を行わないこと、だれにも不正をせず、だれも傷つけないことの上にでしょうか。よろしい。その申し立てが本当だとしましょう。あなたは、あらゆる取引で公正です。まったく正直な人です。だれにでも受けるべきものを支払います。だましもせず、ゆすり取りもしません。すべての人に公平にふるまいます。そして、神に対して良心を持っています。分かっている罪の中に生きてはいません。ここまでは結構です。けれども、それはまだ肝心のものではありません。ここまで進んでも、決して天国に行き着かないことがありうるのです。この害のなさがすべて正しい原理から流れ出ているときでも、それはキリストの宗教のいちばん小さな部分です。けれども、あなたの場合、それは正しい原理から流れ出ていません。ですから、宗教の一部でさえまったくないのです。ですから、この上に救いの望みを置くなら、あなたはやはり砂の上に建てているのです。

（三） あなたは、さらに先へ進んでいるでしょうか。害を行わないことに、すべての神の定めに連なることを加えているでしょうか。あらゆる機会に主の晩餐にあずかっているでしょうか。公の祈りと個人の祈りをしているでしょうか。しばしば断食しているでしょうか。聖書を聞き、調べ、それを思いめぐらしているでしょうか。これらのことも、あなたが初めて天国に顔を向けたときから、しなければならなかったことです。けれども、これらのことも、それだけでは無に等しいのです。「律法の中でもっと重要な」こと（マタイ二三・二三）がなけれ

ば、無に等しいのです。そして、それをあなたは忘れてしまいました。少なくとも、それを体験していません。それは、信仰と、あわれみと、神への愛です。心の聖性です。魂のうちに開かれた天国です。ですから、あなたはやはり砂の上に建てているのです。

（四） これらすべてに加えて、あなたは良いわざに熱心（テトス二・一四）でしょうか。機会のあるごとに、だれに対しても善を行っているでしょうか（ガラテヤ六・一〇）。飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、困っている孤児や、やもめを見舞っているでしょうか（ヤコブ一・二七）。病気の人を見舞い、獄にいる人を助けているでしょうか。旅人がいれば、宿を貸しているでしょうか（マタイ二五・三五～三六）。友よ、もっと上の方へ進みなさい（ルカ一四・一〇）！ あなたはキリストの「名によって」「預言し」ているでしょうか（マタイ七・二二）。イエスにある真理（エペソ四・二一）を宣べ伝えているでしょうか。そして、キリストの御霊の働きがあなたの言葉に伴い、それを救を得させる神の力（ローマ一・一六）としているでしょうか。キリストは、罪人たちをやみから光へ、サタンの支配から神のみもとへ（使徒二六・一八）連れ帰ることができるように、あなたを強めておられるでしょうか。それなら、行って、あなたがあれほどたびたび教えてきたことを学んできなさい。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのです」（エペソ二・八）。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって」、「わたしたちは救われた」のです（テトス三・五）。自分のしてきたことをすべて、ふん土のように、かすのように思って（ピリピ三・八）、裸のままキリストの十字架にすがることを学びなさい。死に臨んだ強盗（ルカ二三・四二）の心で、七つの悪霊につかれていた遊女の心で、そのままキリストに頼りなさい！ そうしなければ、あなたはなお砂の上にいます。ほかの人を救ったあとで、自分の魂を失うでしょう。

（五） 主よ、もし私が今信じているなら、私の信仰を増してください（ルカ一七・五）！ そうでないなら、からし種一粒ほどの（マタイ一七・二〇）信仰でもかまいません、私に信仰を与えてください！ けれども、「ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つでしょうか。その信仰は彼を救うことができるでしょうか」（ヤコブ二・一四）。ああ、できません！ 次のような信仰は、福音の信仰ではありません。行いのない信仰、内と外との聖性を生み出さない信仰です。神のかたちの全体を心に刻まず、神がきよくあられるように私たちをきよくしない（第一ヨハネ三・三）信仰です。これまでの章に述べられた宗教の全体を生み出さない信仰は、福音の信仰でも、キリスト教の信仰でも、栄光に導く信仰でもないのです。ああ、悪魔のほかのどんなわなにもまして、このわなに気をつけなさい。聖くない、救わない信仰に安んじることに、気をつけなさい！ もしこれに頼るなら、あなたは永遠に滅びます。あなたはなお、砂の上に自分の家を建てているのです。「雨が降り、洪水が押し寄せ」るとき、その家は必ず「倒れてしまいます。そしてその倒れ方はひどい」のです（マタイ七・二七）。

（六） ですから、今、岩の上に建てなさい。神の恵みによって、自分を知りなさい。あなたは不義のなかに生れ、あなたの母は罪のうちにあなたをみごもった（詩篇五一・五）ことを、知り、また感じなさい。そして、善悪を見わけることができるようになってからずっと、あなた自身が罪に罪を積み重ねてきたことを、知り、また感じなさい。自分が永遠の死に当たる罪を負っていることを認めなさい。そして、自分で自分を救えるという望みを、すべて捨てなさい。キリストの血で洗われ、その御霊によってきよめられることを、あなたの望みのすべてとしなさい。この方は、「十字架にかかって」、あなたのすべての「罪をご自分の身に負われた」のです（第一ペテロ二・二四）。そして、主があなたの罪を取り除いてくださったことを知っているなら、なおさら主の前に自分を低くしなさい。良い思いも、良い言葉も、良いわざも、すべて主にまったく頼っていることを、絶えず感じていなさい。主があなたに「常に水をそそ」いでくださらなければ（イザヤ二七・三）、どんな善もまったくできないことを、絶えず感じていなさい。

（七） 今、自分の罪のために泣き、神を慕って悲しみなさい。神があなたの憂いを喜びに変えてくださる（ヨハネ一六・二〇）までです。そして、そのときにも、泣く者と共に泣きなさい（ローマ一二・一五）。自分のために泣かない人々のためにも泣きなさい。人々の罪と悲惨のために悲しみなさい。そして、すぐ目の前に、永遠という果てしない大洋を見なさい。底も岸もない大洋です。そ

れはすでに幾億幾千万の人々を呑み込み、まだ残っている人々を呑み込もうと口を開けているのです！　こちらには、天にある神の永遠の家（第二コリント五・一）を見なさい！　あちらには、おおい隠すもののない陰府と滅びの穴（ヨブ二六・六）を見なさい！　そして、そこから、一瞬一瞬の重さを学びなさい。一瞬は現れたかと思うと、永遠に過ぎ去ってしまうのです！

（八）　今、あなたの真剣さに、知恵にかなう柔和（ヤコブ三・一三）を加えなさい。すべての感情について、とりわけ怒りと悲しみと恐れについて、はかりを平らに保ちなさい。何であれ神の御旨であることに、静かに従いなさい。どんな境遇にあっても、足ることを学びなさい（ピリピ四・一一）。善良な人に穏やかでありなさい。すべての人に対して優しくありなさい。とりわけ、悪人や恩を知らぬ者（ルカ六・三五）に対して優しくありなさい。兄弟にむかってラカとか、ばか者とか言う（マタイ五・二二）ような、外に表れる怒りに気をつけるだけではいけません。愛に反する内なる感情のすべてに気をつけなさい。たとえ、それが心の中にとどまるとしてもです。罪に対しては、天の大いなる方への侮辱として怒りなさい。けれども、罪人はなお愛しなさい。私たちの主のようにしなさい。主は「怒りを含んで」パリサイ人たちを「見まわし、その心のかたくなのを嘆」かれました（マルコ三・五）。主は、罪人を嘆き、罪を怒られたのです。このように、あなたも「怒ることがあっても、罪を犯して」はなりません（エペソ四・二六）！

（九）　今、「朽ちる食物」にではなく、「永遠のいのちに至る朽ちない食物」に飢えかわきなさい（ヨハネ六・二七）。世と、世にあるもの（第一ヨハネ二・一五）とを、すなわちこれらすべての富と、誉れと、快楽とを、足の下に踏みつけなさい。世があなたにとって何でしょうか。死人を葬ることは、死人に任せておきなさい（マタイ八・二二）。あなたは神のかたちを追い求めなさい。あの祝福された渇きが、すでにあなたの魂のうちにかき立てられているかもしれません。そうなら、俗に宗教と呼ばれているものによって、それを消してしまわないよう気をつけなさい。それは、みすぼらしく退屈な茶番です。形だけの宗教、うわべを見せるだけの宗教です。それは、心をなおちりについたままにしておき（詩篇一一九・二五）、相変わらず地につくもの、肉に属するもの（ヤコブ三・一五）のままにしておくのです。敬虔の力のほかには、霊であり、またいのちである（ヨハネ六・六三）宗教のほかには、何ものにも満足してはなりません。それは、あなたが神におり、神もあなたにいます（第一ヨハネ四・一六）ことです。永遠に住む者となることです。そそがれた血（ヘブル一二・二四）によって「幕の内」にはいり（ヘブル六・一九）、「キリスト・イエスにあって」「共に天上で座につ」くことです（エペソ二・六）！

（一〇）　あなたは、自分を強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができます（ピリピ四・一三）。ですから、今、天の父が慈悲深いように、あなたも慈悲深い者となりなさい（ルカ六・三六）！　自分を愛するようにあなたの隣り人を愛しなさい（マタイ二二・三九）！　友も敵も、自分の魂のように愛しなさい！　そして、あなたの愛を、すべての人に対して寛容で、忍耐強いものとしなさい。その愛を、情深く、穏やかで、優しいものとしなさい。この上なく愛らしいやわらかさと、この上なく熱く細やかな愛情とを、あなたに吹き込むものとしなさい。その愛が、どこに見いだされるものであれ、真理を喜ぶ（第一コリント一三・六）ようにしなさい。信心にかなう真理（テトス一・一）を喜ぶようにしなさい。何であれ、神に栄光を帰し、人々の間に平和と善意とを広めるものを、喜びなさい。愛をもって、すべてをおおいなさい。死んだ人や居合わせない人については、良いことのほかは何も語ってはなりません。隣人の人柄の疑いを晴らすのに少しでも役立つことは、すべて信じなさい。隣人に有利なことは、すべて望みなさい。そして、すべてを耐え、あらゆる反対に打ち勝ちなさい（第一コリント一三・七）。まことの愛は、この世でも永遠でも、いつまでも絶えることがないからです（第一コリント一三・八）。

（一一）　今、心の清い者（マタイ五・八）となりなさい。信仰によって、あらゆる聖くない情からきよめられた者（使徒一五・九）となりなさい。「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清く」なりなさい（第二コリント七・一）。神の恵みの力によって、深いこころの貧しさによって高慢からきよめられなさい。柔和とあわれみによって、怒りから、あらゆる不親切な激情や荒々しい激情からきよめられなさい。義に飢えかわく（マタイ五・六）ことによって、神に喜ばれ、神を喜ぶこと以外のあらゆる願いからきよめられなさ

い。そのうえで、今、「心をつくし」、「力をつくして、主なるあなたの神を愛し」なさい（マルコ一二・三〇）！

（一二） 一言で言えば、あなたの宗教を心の宗教としなさい。それを、魂のいちばん奥深くに置きなさい。自分の目に（言葉で言い表せないほど）小さく、卑しく、取るに足りない、つまらない者となりなさい。キリスト・イエスにおける神の愛（ローマ八・三九）に驚き、ちりにまで低くされなさい。真剣でありなさい。あなたの思いと言葉と行いの流れのすべてを、最も深い確信から流れ出させなさい。あなたも、すべての人の子らも、大きな淵（ルカ一六・二六）のふちに立っていて、今にも落ち込もうとしている、という確信です。落ちる先は、永遠の栄光か、とこしえの燃える火（イザヤ三三・一四）かのどちらかです！ あなたの魂を、すべての人に対する穏やかさと、優しさと、忍耐と、寛容とで満たしなさい。同時に、あなたのうちにあるすべてのものが、神を、いける神を慕う（詩篇四二・二）ようにしなさい。目ざめるとき、神のみかたちを見て、満ち足りる（詩篇一七・一五）ことを切に願うようにしなさい！ 神とすべての人とを愛する者となりなさい！ この精神をもって、すべてを行い、すべてを忍びなさい！ このようにして、行いによって信仰を見せなさい（ヤコブ二・一八）。このようにして、「天にいます」あなたの「父の御旨を行」いなさい（マタイ七・二一）！ そして、あなたが今地上で神とともに歩んでいる（創世記五・二四）のが確かであるように、栄光のうちに神とともに支配することも確かなのです！

説教三十四　律法の起源と性質と特質と用途

「このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものです」（ローマ七・一二）

（一）　宗教の全領域の中でも、これほど理解されていない主題は、おそらくほとんどないでしょう。この手紙の読者は、ふつう、聖パウロが律法と言うのはユダヤ人の律法のことだと教えられます。そこで、自分にはかかわりのないものだと思い、それ以上考えずに読み過ごしてしまいます。もっとも、この説明に満足しない人々もいます。彼らは、この手紙がローマ人にあてられていることに目をとめます。そして、そこから、使徒はこの章の初めで昔のローマの法をほのめかしているのだ、と推論します。けれども、彼らにとってこの法は、モーセの儀式律法と同じく、自分にかかわりのないものです。ですから、ほかのことを説明するためについでに触れられたにすぎないと思うものに、あまり心を用いません。

（二）　けれども、使徒の論述を注意深く見る人は、このような軽い説明では満足しないでしょう。そして、言葉をよく考えれば考えるほど、確信するでしょう。聖パウロがこの章で言う律法は、昔のローマの法でも、モーセの儀式律法でもない、と。このことは、使徒の論述の流れに注意を払う人には、だれにでもはっきりと分かるでしょう。使徒はこの章をこう書き始めます。「兄弟たちよ。あなたがたは知らないのですか。わたしは律法を知っている人々」、すなわち若いときから律法を教えられてきた人々「に語るのですが、律法は人をその生きている期間だけ支配するものです」（ローマ七・一）。何と、ローマの法だけがそうなのでしょうか。あるいは儀式律法がでしょうか。決してそうではありません。道徳律法がそうなのです。分かりやすい例をあげれば、「すなわち、夫のある女は、夫が生きている間は」、道徳「律法によって彼につながれています。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放されます。であるから、夫の生存中に他の男に行けば、その女は淫婦と呼ばれますが、もし夫が死ねば、その律法から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはなりません」（ローマ七・二～三）。使徒は、この一つの例から進んで、あの一般的な結論を引き出します。「わたしの兄弟たちよ。このように」、明らかに同じ理屈によって、「あなたがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのです」（ローマ七・四）。この律法とは、モーセの制度全体のことです。キリストのからだは、あなたがたのためにさげられ、あなたがたを新しい制度のもとに置きました。「それは、あなたがたが」何のとがめも受けずに「他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのもの」となるためです（ローマ七・四）。この方は、よみがえりによって、この変更をする権威を示されました。それはまた、「わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのです」（ローマ七・四）。以前はできなかったこのことが、今はできるのです。「というのは、わたしたちが肉にあった時には、律法による罪の欲情が、死のために実を結ばせようとして、わたしたちの肢体のうちに働いていた」のです（ローマ七・五）。「肉にあった」（ローマ七・五）とは、肉の力、すなわち腐敗した性質の力のもとにあったということです。キリストの復活の力（ピリピ三・一〇）を知るまでは、必ずそうでした。「律法による罪の欲情」（ローマ七・五）とは、モーセの律法によって示され、あおられはしても、征服はされなかった罪の欲情のことです。それが「わたしたちの肢体のうちに働いて」（ローマ七・五）、いろいろな形で噴き出していたのです。「しかし今は」、「わたしたちは律法から解放され」ています（ローマ七・六）。儀式の体制だけでなく道徳の体制をも含む、あの体制全体から解放されているのです。私たちをつないでいたものが死んだからです。すなわち、その制度全体は今はいわば死んでおり、死んだ夫が妻に対して持つ以上の権威を、私たちに対して持っていないのです。それは、私たちのために死んでよみがえられた方に、「新しい霊によって」、すなわち新しい霊的な制度において「仕え」るためです（ローマ七・六）。

「古い文字によってではなく」、すなわちモーセの制度の文字に従った、ただ外的な奉仕によってではありません（ローマ七・六）。

（三） 使徒は、ここまで論証を進めてきました。キリスト教の制度がユダヤ教の制度を廃したことを、論証してきたのです。また、道徳律法そのものは、決して過ぎ去ることはありえないとはいえ、以前とは違う土台の上に立っていることも、論証しました。そして今、立ち止まって、一つの反論を持ち出し、それに答えます。「それでは、わたしたちは、なんと言いましょうか。律法は罪なのでしょうか」（ローマ七・七）。「律法による罪の欲情」（ローマ七・五）という言葉を誤解して、そう推論する人がいるかもしれないのです。使徒は、「断じてそうではない」（ローマ七・七）と言います。私たちがそう言うことなど、とんでもないことです。いや、律法は、罪と決して和解することのない敵です。「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。すなわち、もし律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしは」むさぼり、つまり悪い欲望が罪であることを「知らなかったでしょう」（ローマ七・七）。使徒は、続く四つの節でこれをさらに説き明かしたあと、次の一般的な結論を付け加えます。それは、先の例が取られた道徳律法について、とりわけ言われていることです。「このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものです」（ローマ七・一二）。

（四） この深い言葉は、ほとんど理解されていないために、ほとんど顧みられていません。そこで、この言葉を説き明かし、強く訴えるために、私は次のことを示すように努めます。

第一に、この律法の起源。

第二に、その性質。

第三に、その特質。すなわち、それが聖であって、正しく、かつ善なるものであること（ローマ七・一二）。

第四に、その用途。

【一】 律法の起源

（一） まず第一に、道徳律法の起源を示すように努めます。道徳律法は、とりわけすぐれたものとして、しばしばただ律法と呼ばれます。さて、この律法は、ある人々が想像したかもしれないように、モーセの時代になってようやく定められたものではありません。ノアは、そのときよりずっと前に、これを人々に告げ知らせました。ノアより前には、エノクが告げ知らせました。けれども、その起源は、さらにさかのぼり、世の基が置かれる前にまでたどることができます。それは、人には知られていないものの、疑いなく永遠の年代記にしるされているときです。そのとき、新たに存在へと呼び出された「明けの星」が、初めて「相共に歌」いました（ヨブ三八・七）。偉大な創造者は、これらの者を、すなわちご自分の長子たちを、知性を持つ者として造ることをよしとされました。彼らが、自分を造られた方を知るためです。この目的のために、神は彼らに悟りを授け、真理と偽り、善と悪とを見分けられるようにされました。また、その必然の結果として、自由を授けられました。すなわち、一方を選び、他方を退ける力です。これによって、彼らはまた、神に自由で喜んでする奉仕をささげることができるようになりました。それは、それ自体として報いに値する奉仕であり、また、恵み深い主人に何より喜ばれる奉仕でした。

（二） 神は、ご自分が与えたすべての能力を、とりわけ悟りと自由とを、彼らが用いるように、彼らに律法を与えられました。それは、有限な者に理解できる限りでの、あらゆる真理の完全な模範でした。また、御使の心が受け入れられる限りでの、あらゆる善の完全な模範でした。慈しみ深い統治者は、これによって、彼らの幸いが絶えず増していく道を開くこともお考えになりました。その律法に一つ従うたびに、彼らの性質の完全さが増し、またいっそう高い報いを受ける資格が与えられるからです。その報いは、正しい審判者が、時が来れば与えてくださるものでした。

（三） 同じように、神は、定められたときに、知性を持つ者の新しい種族を造られました。土のちりから人を起こし、いのちの息を吹きいれて、生きた者とされました（創世記二・七）。善と悪とを選ぶ力を授けられた者としてです。そ

のとき、神は、この自由で知性を持つ被造物に、長子たちに与えたのと同じ律法を与えられました。もっとも、それは石の板や、朽ちる何かの物質に書かれたのではありません。神の指によって人の心に刻まれたのです。それは、人と御使との霊のいちばん奥に書かれました。律法が決して遠いものでも、わかりにくいものでもない（申命記三〇・一一）ためです。いつも手近にあって、中天の太陽のように、いつも澄んだ光で輝いているためです。

（四）　神の律法の起源は、このようなものでした。人について言えば、律法は人の性質と同じときに始まりました。けれども、神の年長の子らについて言えば、律法はもっと前から、その輝きを余すところなく放っていました。「山がまだ生れず」、地と世界とがまだ「造られなかったとき」（詩篇九〇・二）に、すでに輝いていたのです。けれども、まもなく人は神にそむき、この栄光ある律法を破って、自分の心からそれをほとんど消し去ってしまいました。人の魂が「神のいのちから遠く離れ」た（エペソ四・一八）のと同じだけ、その悟りの目も暗くなったのです。それでも、神は、ご自分のみ手のわざを捨てられませんでした（詩篇一三八・八）。愛する御子（コロサイ一・一三）を通して人と和解し、暗く罪深い被造物の心に、ある程度、律法をふたたび書きしるされたのです。「人よ、彼は」ふたたび「よい事のなんであるかをあなたに告げられ」ました。初めのようにではありませんが、「ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むこと」を告げられたのです（ミカ六・八）。

（五）　神は、これを私たちの最初の先祖にだけでなく、その子孫のすべてにも示されました。世に来る「すべての人を照すまことの光」（ヨハネ一・九）によってです。けれども、この光があったにもかかわらず、時がたつうちに、すべての人が神の前に「その道を乱し」ました（創世記六・一二）。そこで、ついに神は人々の中から一つの特別な民を選び、ご自分の律法についてのいっそう完全な知識をお与えになりました。そして、この民は悟りが鈍かったので、律法の要点を二枚の石の板に書かれました。また、父たちに、後に続くすべての世代にわたって、それを子供たちに教えるよう命じられました。

（六）　こうして今、神を知らない人々にも、神の律法が知らされているのです。彼らは、私たちの教えのために、これまでに書かれた事がら（ローマ一五・四）を、耳で聞いています。けれども、これでは十分ではありません。彼らは、これによって律法の高さ、深さ、長さ、広さ（エペソ三・一八）を理解することはできないのです。神だけが、御霊によってこれを啓示することができます（第一コリント二・一〇）。そして、神は、本当に信じるすべての人に、そうしてくださいます。神のイスラエル（ガラテヤ六・一六）のすべてに与えられた、あの恵み深い約束によるのです。「主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家に新しい契約を立てる日が来ます。わたしが立てる契約はこれです。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるします。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となります」（エレミヤ三一・三一～三三）。

【二】　律法の性質

（一）　私が示そうとした第二のことは、律法の性質です。それは、初めに天の御使たちと楽園の人とに与えられた律法です。また神が、本当に信じるすべての人の心に新しく書きしるすと、あわれみ深く約束された律法です。そのために、まず指摘しておきたいことがあります。「律法」と「戒め」（ローマ七・一二）とは、違う意味にとられることもあります。そのとき、戒めは律法の一部分だけを指します。けれども、この聖句では、二つは同じ意味の言葉として用いられ、一つの同じものを指しています。けれども、ここでは、そのどちらによっても、儀式律法を指していると理解することはできません。使徒が先に引いた言葉で、「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかった」（ローマ七・七）と言っているのは、儀式律法のことではありません。これは、証明するまでもなく明らかです。そのすぐあとに続く言葉で「むさぼるな」（ローマ七・七）と言っているのも、儀式律法ではありません。ですから、儀式律法は、いまの問題には何の関係もありません。

（二）　また、この聖句に出てくる律法を、モーセの制度と理解することもできません。確かに、この言葉がそのように理解されることもあります。たとえば、使徒はガラテヤ人に語って、こう言います。「あらかじめ立てられた契約」（ガラテヤ三・一七）、すなわち信仰の父アブラハムとの契約は、「四百三十年の

後にできた律法によって破棄され」ることはない（ガラテヤ三・一七）、と。この「律法」（ガラテヤ三・一七）とは、モーセの制度のことです。けれども、この聖句では、そのように理解することはできません。使徒は、あの不完全で影のような制度に、これほど高い賛辞を与えることは決してないからです。使徒は、モーセの制度が霊的な律法である（ローマ七・一四）とも、それが聖であって、正しく、かつ善なるもの（ローマ七・一二）であるとも、どこにも言っていません。また、神が、もはやその罪を思い出されない人々（ヘブル八・一二）の心に、その律法を書きしるされる、というのも本当ではありません。こうして、とりわけ律法と呼ばれるものは、道徳律法にほかならないことになります。

（三） さて、この律法は、とこしえに住む、いと高く聖なる方（イザヤ五七・一五）の、朽ちることのない肖像です。それは、その本質においてはだれも見た者がなく、見ることもできない方（第一テモテ六・一六）が、人と御使とに見えるようにされたものです。それは、おおいを取られた神の御顔です。被造物が耐えられる程度に、被造物に現された神です。いのちを滅ぼすためではなく、いのちを与えるために現された神です。被造物が神を見て、なお生きるためです。それは、人に明かされた神の御心です。そうです、ある意味では、使徒が神の御子について言っていることを、この律法に当てはめてもよいでしょう。この律法は、アパウガスマ・テース・ドクセース、カイ・カラクテール・テース・ヒュポスタセオース・アウトゥー（ἀπαύγασμα τῆς δόξης, καὶ χαρακτὴρ τῆς ὑποστάσεως αὐτοῦ）です（ヘブル一・三）。すなわち、神の栄光から流れ出るもの、輝き出るものであり、「神の本質の真の姿」です（ヘブル一・三）。

（四） 昔の異教徒はこう言いました。「もし徳が、私たちの目で見ることのできるような姿をとることができたなら、私たちのうちに、何とすばらしい愛をかき立てることだろう！」もし徳にそれができたなら、と言うのですか。それは、もうなされています。神の律法は、あらゆる徳を一つにしたものです。それは、神が目を明らかにしてくださったすべての人が、顔おおいなしに（第二コリント三・一八）見ることのできる姿をとっています。律法とは、目に見える形をとった神の徳と知恵でなくて、何でしょうか。それは、真理と善との原型でなくて、何でしょうか。その原型は、永遠の昔から、造られたのではない神の心のうちに宿っていました。それが今、引き出され、人の悟りにさえ見えるような衣をまとったのです。

（五） 神の律法を別の視点から眺めるなら、それは至高の、変わることのない理性です。変えることのできない正しさです。存在するもの、またかつて造られたすべてのものの、永遠の適合性です。私たちは、こうしたかすかな絵で、神の深み（第一コリント二・一〇）を描き出そうと努めます。そのとき、これらの言葉にも、人間のほかのどんな言葉にも、どれほど足りないところがあるかを、私はわきまえています。不適切なところさえあるのです。それでも、私たちがこの幼な子のような状態にある間は、これよりよい道はありません。いや、ほかに道はないのです。私たちは今、「一部分」しか「知る」ことができません（第一コリント一三・九）。それと同じように、神のことを「一部分」だけ「預言する」、すなわち語るほかはないのです（第一コリント一三・九）。この泥の家（ヨブ四・一九）にいる間は、「われわれは暗くて、言葉をつらねることはできません」（ヨブ三七・一九）。私は「幼な子」である間は、「幼な子らしく語」らなければなりません（第一コリント一三・一一）。けれども、まもなく「幼な子らしいことを捨て」るでしょう（第一コリント一三・一一）。「全きものが来る時には、部分的なものはすたれる」（第一コリント一三・一〇）からです。

（六） 話をもとに戻しましょう。人間的な言い方をするなら（ローマ六・一九）、神の律法は、永遠の知性の写しであり、神の本性の写本です。そうです、それは、永遠の父の最も美しい子であり、父の本質である知恵の最も輝かしい流出であり、いと高き方の目に見える美しさです。それは、ケルビムとセラピムと天の全会衆との喜びであり、驚きです。また、地上のすべての賢い信者、よく教えられたすべての神の子の、栄光であり喜びです。

【三】 律法の特質

（一） とこしえにほむべき神の律法の性質は、このようなものです。第三に、その特質を示さなければなりません。すべての特質ではありません。それは御使の知恵をも超えることでしょう。この聖句に挙げられている特質だけです。

それは三つあります。律法は聖であって、正しく、かつ善なるものです（ローマ七・一二）。まず第一に、律法は聖です。

（二） この言い方で、使徒は、律法の効果についてではなく、むしろその性質について語っているように思われます。聖ヤコブも、同じものを別の名で呼んで、「上からの知恵は、第一に清く」と言っています（ヤコブ三・一七）。この上からの知恵とは、私たちの心に書かれたこの律法にほかなりません。「清く」（ヤコブ三・一七）と訳された語は、原語ではハグネー（ἁγνὴ）です。純潔で、しみがなく、永遠に、また本質的に聖である、ということです。ですから、それが魂だけでなく生活にも写しとられるとき、それは、同じ使徒の言葉で言えば、トレースケイア・カタラ・カイ・アミアントス（θρησκεία καθαρὰ καὶ ἀμίαντος）です（ヤコブ一・二七）。すなわち、「清く汚れのない信心」（ヤコブ一・二七）であり、清く、きよらかで、汚れのない神礼拝です。

（三） まことに、律法はこの上なく清く、純潔で、きよらかで、聖です。そうでなければ、律法は、本質的に聖である神から直接に生まれたものではありえず、まして神の生き写しではありえません。律法は、あらゆる罪から清く、どんな悪にも触れず、汚れもしみもありません。律法は清らかなおとめであり、どんな汚れも受けず、汚れたもの、聖くないものと混じり合うこともありえません。律法は、どんな種類の罪とも交わりを持ちません。「光とやみとなんの交わりがあるでしょうか」（第二コリント六・一四）。罪がその本性からして神に敵するものであるように、神の律法は罪に敵するものです。

（四） ですから、使徒は、ある冒涜的な想定を、これほどの嫌悪をもって退けるのです。神の律法が罪そのものである、あるいは罪の原因である、という想定です。律法が罪を見つけ出すからといって、律法を罪の原因だと考えることなど、決してあってはなりません。律法が、やみに隠れたことを見破り、白日のもとに引き出すからといって、そう考えてはならないのです。確かに、使徒が指摘しているように、これによって「罪の罪たることが現れ」ます（ローマ七・一三）。罪の変装はすべてはぎ取られ、罪は生まれつきの醜さのままで現れます。また、確かに、「罪は、戒めによって、はなはだしく悪性なものとな」ります（ローマ七・一三）。罪は、今や光と知識とに逆らって犯されるのであり、知らなかったというみじめな言い訳さえはぎ取られています。こうして、罪は、変装だけでなく弁解をも失い、神にも人にもはるかに憎むべきものとなるのです。そうです、罪が「善なるものによって」人を「死に至らせ」る（ローマ七・一三）ことも、確かです。その善なるものは、それ自体としては清く、聖なるものです。罪は、明るみに引き出されると、いっそう荒れ狂います。抑えられると、いっそう激しく噴き出します。こうして使徒は、罪を自覚しながら、まだそこから解放されていない人の立場で語ります。「罪は戒めによって機会を捕え」たのです（ローマ七・八）。その戒めは、罪を見破り、抑えようとするものでした。罪はその抑えをあなどって、なおさら「わたしの内に働いて、あらゆるむさぼりを起させ」ました（ローマ七・八）。すなわち、あらゆる愚かで有害な欲を起こさせたのです。それは、あの戒めが抑えようとした欲でした。こうして、「戒めが来るに及んで、罪は生き返」りました（ローマ七・九）。罪はいっそういら立ち、荒れ狂ったのです。けれども、これは戒めの汚点ではありません。戒めは、悪用されても、汚されることはありえません。これは、ただ人の「心は」「はなはだしく悪に染まっている」（エレミヤ一七・九）ことを証明するだけです。けれども、神の「律法」は、なお「聖なるもの」です（ローマ七・一二）。

（五） 第二に、律法は正しいものです。律法は、すべての者にその受けるべきものを与えます。律法は、何が正しいかを正確に定めます。何をし、何を言い、何を思うべきかを、きっちりと定めるのです。私たちの存在の造り主に対しても、私たち自身に対しても、また神が造られたすべての被造物に対しても、そうです。律法は、あらゆる点で、ものごとの本性に、すなわち宇宙全体と一つ一つの個物との本性にかなっています。律法は、それぞれのあらゆる事情に、また互いのあらゆる関係に、ふさわしいものです。その関係が、初めから存在してきたものであっても、その後のいつかに始まったものであっても、そうです。律法は、ものごとの適合性に、本質的なものであれ偶然的なものであれ、正確にかなっています。律法は、そのどれとも少しも衝突しません。また、そのどれとも無関係であることはありません。恣意的という言葉を、ものごとと無関係という意味にとるなら、神の律法には、恣意的なものは何もありません。とはいえ、律法の全体もその一部分も、すべてまったく神の御旨にかかっています。ですか

ら、「みこころが」「行われますように」（マタイ六・一〇）ということが、地においても天においても、至高の、普遍の律法なのです。

（六）「しかし、神の御旨が神の律法の原因なのか。神の御旨が正と不正との起源なのか。神がそれを望まれるから、ものごとは正しいのか。それとも、それが正しいから、神はそれを望まれるのか」。

この有名な問いは、役に立つというより、好奇心をそそるだけのものではないかと思います。そして、ふつう論じられているような仕方では、おそらく、ふさわしい敬意とあまりよく調和しないでしょう。被造物が、万物の創造者であり統治者である方に払うべき敬意とです。人が至高の神を呼び出して、自分に申し開きをさせるのは、礼儀にかなったこととはとても言えません。それでも、畏れとうやうやしさをもってなら、少しは語ってもよいでしょう。もし私たちの語ることが間違っていたら、主が赦してくださいますように！

（七）それでは、難しさはすべて、神の御旨を神から区別して考えることから生じているように思われます。そうでなければ、難しさは消えてしまうのです。神が神の律法の原因であることを、だれも疑うことはできないからです。けれども、神の御旨とは、神ご自身なのです。それは、このように、あるいはあのように望んでおられる者として考えられた神です。したがって、神の御旨が律法の原因であると言うことと、神ご自身が律法の原因であると言うこととは、一つの同じことです。

（八）また、律法は、正と不正との変わることのない規準です。その律法が、ものごとの本性と適合性とに、また互いの本質的な関係に、かかっているとします（永遠の関係とは言いません。時間の中に存在するものの永遠の関係というのは、ほとんど矛盾だからです）。繰り返しますが、律法がものごとの本性と関係とにかかっているなら、律法は神に、あるいは神の御旨に、かかっているのでなければなりません。ものごとそれ自体が、そのあらゆる関係とともに、神のみ手のわざだからです。万物はみな、神の御旨によって、すなわちただ神のみこころのままに、「存在し、また造られた」のです（黙示録四・一一）。

（九）それでも、次のことは認めてよいでしょう。おそらく、思慮深い人が主張したいのは、これだけでしょう。すなわち、一つ一つの場合において、神がこのこと、あるいはあのことを望まれるのは、それが正しいからだ、ということです。たとえば、人が父母を敬うことがそうです。それが、ものごとの適合性に、すなわち、人が置かれている関係にかなっているからです。

（一〇）こうして、律法は、すべてのことについて正しく、公正です。そして、律法は、正しいだけでなく、善なるものでもあります。このことは、律法が流れ出た泉から、たやすく推し量ることができます。その泉とは、神の善でなくて、何だったでしょうか。善のほかに何が、神を動かして、ご自分の写しであるあの神聖なものを、聖なる御使たちに分け与えさせたでしょうか。神がご自分の本性の同じ写しを人に授けられたことを、ほかの何に帰することができるでしょうか。また、優しい愛のほかに何が、神に迫って、堕落した人にふたたび御旨を現させたでしょうか。アダムにも、アダムと同じように「神の栄光を受けられなくなって」いた（ローマ三・二三）その子孫のだれにも、です。人の悟りが暗くなったあとで、神を動かしてご自分の律法を公にさせたのは、ただ愛ではなかったでしょうか。預言者たちをつかわして、目の見えない、思慮のない人の子らにその律法を告げさせたのも、ただ愛ではなかったでしょうか。疑いなく、神の善が、エノクとノアを起こして義の宣伝者（第二ペテロ二・五）としたのです。神の善が、神の友アブラハムと、イサクと、ヤコブとに、神の真理をあかしさせたのです。「暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおお」っていた（イザヤ六〇・二）とき、モーセに、またモーセを通して神の選ばれた民に、書かれた律法を与えたのは、ただ神の善でした。ダビデと、それに続くすべての預言者とによって、この生ける御言葉（使徒七・三八）を説き明かしたのは、愛でした。そしてついに、時が満ちるに及んで（ガラテヤ四・四）、神はひとり子をつかわされました。律法を「廃するためではなく、成就するため」（マタイ五・一七）、その一点一画（マタイ五・一八）までも確かなものとするためです。この愛は、やがて御子が律法をすべての神の子らの心に書きしるし、あらゆる敵をその足もとに置く（第一コリント一五・二五）ときまで続きます。そのとき、御子は仲保者としての「国を父」に「渡される」のです（第一コリント一五・二四）。それは、「神がすべての者にあって、すべてとなられるため」です（第一コリント一五・二八）。

（一一）この律法は、神の善が初めに与え、あらゆる時代を通して保ってきたものです。それは、そのわき出る泉と同じように、善と慈しみとに満ちています。律法は穏やかで、親切です。詩篇の作者が言うように、「蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い」のです（詩篇一九・一〇）。律法は人をひきつけ、愛すべきものです。律法は、「すべて愛すべきこと、すべてほまれあること」を含んでいます（ピリピ四・八）。神とその聖なる御使たちの前に「徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば」（ピリピ四・八）、それらはみな律法に含まれています。律法のうちには、神の知恵と知識と愛との宝が、いっさい隠されているのです（コロサイ二・三）。

（一二）そして、律法は、その性質においてだけでなく、その効果においても善なるものです。木がそうであるように、その実もそうです。心に書かれた神の律法の実は、義と、平和と、とこしえの信頼です（イザヤ三二・一七）。いや、むしろ律法そのものが義です。律法は、人知ではとうてい測り知ることのできない平安（ピリピ四・七）で魂を満たします。そして、神に対する正しい良心のあかしのうちに、私たちをいつも喜ばせます（第一テサロニケ五・一六）。それは、担保と言うより、むしろ「わたしたちが神の国をつぐことの保証」（エペソ一・一四）、すなわち手付けです。あがなわれた所有物の一部だからです。それは、私たちの肉において現された神であり、永遠のいのちを携えて来られる神です。神は、あの清く完全な愛によって、私たちが「あがないの日のために」「証印を受けた」（エペソ四・三〇）ことを確信させてくださいます。また、神は、「人が自分に仕える子をあわれむように」私たちを「あわれ」んでくださる（マラキ三・一七）ことを確信させてくださいます。それは、神がご自分の宝を集められるその日のことです。そして、私たちには「しぼむことのない栄光の冠」（第一ペテロ五・四）が残されていることを、確信させてくださるのです。

【四】律法の用途

（一）残っているのは、第四に、そして最後に、律法の用途を示すことだけです。律法の第一の用途は、疑いもなく、罪について世の人の目を開くこと（ヨハネ一六・八）です。これは、確かに聖霊に特有のわざです。聖霊は、何の手段もなしにこれをなさることもできます。あるいは、ご自分のよしとされるどんな手段によってでも、なさることができます。その手段が、それ自体としては、そのような効果を生むのに不十分であっても、不適当でさえあっても、そうです。ですから、病気のときであれ健康なときであれ、目に見える原因も外的な手段も何もないのに、一瞬のうちに心を打ち砕かれた人々もいます。また、ほかの人々（一つの時代にひとりほどですが）は、「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」た（第二コリント五・一九）と聞いて目ざめました。そして、「神の怒り」が自分の「上にとどまる」（ヨハネ三・三六）ことを感じるようになったのです。けれども、神の御霊がふつう用いられる方法は、律法によって罪人に罪を悟らせることです。良心に深く突きつけられて、たいてい岩を打ち砕く（エレミヤ二三・二九）のは、この律法です。神の言のうちでも、とりわけこの部分こそが、ゾーン・カイ・エネルゲース（ζῶν καὶ ἐνεργὴς）です（ヘブル四・一二）。すなわち、生きていて、力があり、いのちと力に満ち、「もろ刃のつるぎよりも鋭」いのです（ヘブル四・一二）。この律法は、神の御手に、また神のつかわされた人々の手に用いられて、欺く心のあらゆるひだを刺し通します。そして、「精神と霊魂と」をさえ「切り離す」のです（ヘブル四・一二）。そうです、いわば「関節と骨髄と」をさえ切り離すのです（ヘブル四・一二）。これによって、罪人は自分の姿を見せられます。彼のいちじくの葉（創世記三・七）はすべてはぎ取られます。そして、自分が「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者」（黙示録三・一七）であることを見るのです。律法は、四方から罪の自覚の光を放ちます。彼は、自分がまったくの罪人であると感じます。彼には、支払うものが何もありません。その「口がふさがれ」（ローマ三・一九）、彼は神の前に罪ある者として立つのです。

（二）こうして、罪人を殺すことが、律法の第一の用途です。罪人が頼みとしているいのちと力とを打ち壊し、彼が生きながら死んでいることを悟らせることです。彼は、死の宣告のもとにあるだけでなく、実際に神に対して死んでいて、霊的ないのちをまったく欠いています。「罪過と罪とによって死んで」いるのです（エペソ二・一）。律法の第二の用途は、罪人をいのちへと、キリストへ

と導いて、生きるようにすることです。確かに、この二つの務めを果たすとき、律法はきびしい養育掛（ガラテヤ三・二四）の役を演じます。律法は、愛によって私たちを引き寄せるというより、力によって私たちを追い立てます。それでも、すべての源は愛なのです。愛の霊が、この痛ましい手段によって、肉を頼みとする（ピリピ三・三）私たちの心をはぎ取ります。頼みとする折れかけた葦（イザヤ三六・六）さえ、私たちに残しません。こうして愛の霊は、すべてをはぎ取られた罪人に迫って、魂の苦しみのうちに叫ばせ、あるいは心の奥底でうめかせるのです。

私はほかのあらゆる申し立てを捨てます。

主よ、私は罪に定められています。けれども、あなたは死んでくださいました。

（三）律法の第三の用途は、私たちを生かし続けることです。律法は、ほむべき御霊が、神のいのちをさらに豊かに分け与えるために、信者を備えさせる大いなる手段です。

この大切で重要な真理は、ほとんど理解されていないのではないかと思います。世の人々にだけでなく、神が世から取り出された多くの人々にさえ、そうなのです。彼らは、信仰による本当の神の子たちなのですが。その多くの人々は、疑う余地のない真理として、こう決めてかかっています。私たちはキリストのもとに来たとき、律法とは縁が切れたのだ、そしてこの意味で、「キリストは、すべて信じる者に」「律法の終り」なのだ（ローマ一〇・四）、と。「律法の終り」（ローマ一〇・四）。確かにキリストはそうです。「すべて信じる者に義を得させるために」、すなわち義認のために、「律法の終りとなられた」のです（ローマ一〇・四）。この点で、律法は終わっています。律法はだれをも義としません。ただ人々をキリストのもとに連れて行くだけです。そして、キリストはまた、別の点でも律法の終わり、すなわち目標です。律法が絶えず目ざしている的なのです。けれども、律法は私たちをキリストのもとに連れて行ったあとにも、なお務めを持っています。私たちをキリストのもとにとどめておくことです。律法は、すべての信者を絶えずかき立てて、互いにいよいよ励まし合うようにさせるからです。信者たちが、律法の高さと深さと長さと広さとを見れば見るほど、そうなのです。

いよいよ近く、すがりつきましょう
主の愛の抱擁に。
主の満ちあふれるものを受けることを、
恵みに応える恵みを、待ち望みましょう。

（四）それでは、こう認めましょう。律法がユダヤ教の儀式律法を、あるいはモーセの制度全体を意味するなら、すべての信者は律法と縁が切れています。キリストがそれらを取り除かれた（コロサイ二・一四）からです。そうです、義認を得る手段としては、私たちは道徳律法とも縁が切れている、と認めましょう。私たちは、「価なしに、神の恵みにより」、イエス「によるあがないによって義とされる」からです（ローマ三・二四）。けれども、別の意味では、私たちはこの律法と縁が切れていません。律法は、今もなお言い尽くせないほど役に立つからです。第一に、律法は、私たちの心と生活とになお残っている罪を悟らせ、それによって私たちをキリストのそばにとどめるのに役立ちます。キリストの血が、絶えず私たちをきよめる（第一ヨハネ一・七）ためです。第二に、私たちのかしらであるキリストから、その生きた肢体に力を引き出すのに役立ちます。その力によって、キリストは肢体に、ご自分の律法が命じることを行えるようにされるのです。第三に、律法が命じていながら私たちがまだ達していないことについて、私たちの望みを確かにするのに役立ちます。すなわち、キリストの約束の満ちあふれるものを実際に手にするまで、恵みに恵みを（ヨハネ一・一六）受けるという望みです。

（五）このことは、本当の信者すべての経験と、何とはっきり一致していることでしょう。信者は、「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」（詩篇一一九・九七）と叫びます。そう叫びながら、あの神の鏡のうちに、自分の罪深さを日ごとにますます見ていくのです。彼は、いよいよはっきりと見ます。自分は、すべての点でなお罪人であることを見ます。自分の心も道も神の前に正しくないことを見ます。そして、その一瞬一瞬が自分をキリストのもとへ送ることを見るのです。これによって、彼は次のように書かれていることの意味を知ります。「あなたはまた純金の板を造り」、「その上に『主に聖なる者』と刻みなさい。これはアロンの額にあり」

（アロンは、私たちの偉大な大祭司の型です）、「そしてアロンはイスラエルの人々がささげる聖なる物、すなわち彼らのもろもろの聖なる供え物についての罪の責めを負うでしょう」。私たちの祈りや聖なる物は、私たちに残っている罪をあがなうどころではないのです！「これは主の前にそれらの受けいれられるため、常にアロンの額になければなりません」（出エジプト二八・三六、三八）。

（六）ただ一つの例でこれを説明しましょう。律法は、「あなたは殺してはならない」（出エジプト二〇・一三）と言います。そして、主が教えておられるように（マタイ五・二一～二二）、律法はこれによって、外的な行いだけでなく、あらゆる不親切な言葉や思いをも禁じています。さて、私は、この完全な律法をのぞき込めばのぞき込むほど、自分がどれほどそれに及ばないかを感じます。そして、それを感じれば感じるほど、キリストの血と御霊とを必要としていることを感じます。私のすべての罪をあがなう血と、私の心をきよめ、私を「完全な、でき上がった」、「なんら欠点のない」者（ヤコブ一・四）としてくださる御霊とをです。

（七）ですから、私は、キリストなしにやっていけないのと同じく、律法なしにも一瞬たりともやっていけません。かつて私は、キリストのもとに連れて行かれるために律法を必要としました。今も、それと同じだけ、キリストのもとにとどまるために律法を必要としているからです。そうでなければ、この「不信仰な悪い心」は、たちまち「生ける神から離れ去る」でしょう（ヘブル三・一二）。実際、それぞれが私を絶えずもう一方へ送ります。律法はキリストへ、キリストは律法へと送るのです。一方では、律法の高さと深さが私に迫って、キリストにある神の愛へと逃れさせます。他方では、キリストにある神の愛が、律法を私にとって「金よりも」、宝石よりも慕わしいものにします（詩篇一一九・一二七）。律法のどの部分も、私の主が時に応じて成就してくださる恵みの約束だと知っているからです。

（八）それなら、「ああ人よ」（ローマ九・二〇）、「律法をさばき」、「律法をそし」る（ヤコブ四・一一）あなたは、いったい何者なのでしょうか。律法を罪やサタンや死と同列に置き、それらをみな一緒に地獄へ送ってしまうあなたは、いったい何者なのでしょうか。使徒ヤコブは、律法をさばくこと、すなわち「律法をそし」ること（ヤコブ四・一一）を、きわめて大きな悪だと考えました。ですから、兄弟をさばく罪がこれを含むことを示すよりほかに、その罪の重さを強調する方法を知らなかったのです。ヤコブは言います。それなら、あなたは「律法の実行者ではなくて、その審判者なのです」（ヤコブ四・一一）。神があなたをさばくために定められたものの、審判者なのです！　こうしてあなたは、キリストのさばきの座（第二コリント五・一〇）に自分をすえ、キリストが世をさばかれる規準を投げ捨ててしまったのです。ああ、サタンがあなたに対してどれほど優位に立ったかを悟りなさい。そして、これから後は、神の恵みのこの祝福された器を、決して軽んじて考えたり語ったりしてはなりません。まして、かかしに仕立て上げてはなりません。そうです、律法を愛し、重んじなさい。律法がそこから出てきた方のために、また律法が導いていく方のためにです。キリストの十字架に次いで、律法をあなたの誇りとし、喜びとしなさい。律法をほめたたえ、すべての人の前でそれを尊いものとしなさい。

（九）そして、あなたが、律法は神から生まれたものであり、まねのできない神のすべての完全さの写しであると、深く確信しているとします。また、律法は「聖であって、正しく、かつ善なるもの」であり（ローマ七・一二）、とりわけ信じる者にとってそうであると、深く確信しているとします。それなら、律法を汚れたもののように投げ捨てるのではなく、いよいよそれにすがるようにしなさい。あわれみとまことの律法、神と人とを愛する律法、謙遜と柔和と清さの律法が、決してあなたから離れることのないようにしなさい。「それをあなたの首に結び、心の碑にしるしなさい」（箴言三・三）。キリストのそばにいたいなら、律法のそばにいなさい。それをかたくとらえて、離してはなりません（箴言四・一三）。律法が、あなたを絶えずあがないの血へ導き、あなたの望みを絶えず確かにするようにしなさい。「律法の要求が」あなたのうちに残らず「満たされ」（ローマ八・四）、あなたが「神に満ちているもののすべてをもって」「満たされる」（エペソ三・一九）ときまでです。

（一〇）そして、あなたの主は、すでにその言葉を成就してくださったかもしれません。すでにご自分の「律法を」あなたの「心にしる」してくださった（エレミヤ三一・三三）かもしれません。そうなら、キリストがあなたを自由に

してくださった、その自由のうちに「堅く立って」いなさい（ガラテヤ五・一）。あなたは、ユダヤ教の儀式から、罪責から、地獄への恐れから自由にされただけではありません。これらは、クリスチャンの自由の全体どころか、そのいちばん小さく、いちばん低い部分です。それよりはるかに大きなこととして、罪の力から、悪魔に仕えることから、神を怒らせることから、自由にされたのです。ああ、この自由のうちに堅く立ちなさい。これに比べれば、ほかのすべては、名を挙げる値打ちさえありません！　心をつくして神を愛し、力をつくして神に仕えることのうちに、堅く立ちなさい。これこそ完全な自由です。このように神の律法を守り、神のすべての戒めを落ち度なく行う（ルカ一・六）ことです。「二度と奴隷のくびきにつながれてはなりません」（ガラテヤ五・一）。私が言うのは、ユダヤ教の奴隷の状態のことではありません。地獄への恐れの奴隷となることでもありません。それらは、あなたから遠く離れていると信じます。けれども、罪のくびきに、すなわち律法に対する内外のどんな違反にも、ふたたびつながれないよう気をつけなさい。死や地獄よりもはるかに、罪を忌みきらいなさい。罪の罰よりもはるかに、罪そのものを忌みきらいなさい。高慢の、欲望の、怒りの奴隷とならないよう、またあらゆる悪い気質と言葉とわざの奴隷とならないよう、気をつけなさい。「イエスを仰ぎ見」なさい（ヘブル一二・二）。そのために、完全な律法を、「自由の律法」（ヤコブ一・二五）を、ますますのぞき込み、それに「たゆま」ずにいなさい（ヤコブ一・二五）。そうすれば、あなたは日ごとに、「わたしたちの主」「イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かに」なるでしょう（第二ペテロ三・一八）。

説教三十五　信仰による律法の確立（一）

「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのでしょうか。断じてそうではない。かえって、律法を確立するのです」（ローマ三・三一）

（一）　聖パウロは、この手紙の初めに、一般的な命題を示しました。すなわち、キリストの福音は「すべて信じる者に、救を得させる神の力」である（ローマ一・一六）、ということです。福音は力ある手段であり、神はこれによって、すべての信者を、今の救いと永遠の救いとにあずからせてくださるのです。そのうえで使徒は、天下には人が救われる道がほかにないことを示していきます。使徒がとりわけ語るのは、罪責からの救いです。使徒はふつう、これを義認と呼びます。すべての人がこの救いを必要としています。だれも自分の潔白を申し立てることはできません。使徒はこのことを、さまざまな議論によって詳しく証明します。その議論は、異邦人にもユダヤ人にも向けられています。そこから使徒は、この章の一九節で、こう推論します。ユダヤ人の口であれ異邦人の口であれ、「すべての口が」、自分を弁解したり義としたりできないよう、「ふさがれ」なければなりません（ローマ三・一九）。そして、全世界が神の前に罪ある者とならなければならないのです。それゆえ、と使徒は言います。人は自分の従順によって、すなわち「律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられない」のです（ローマ三・二〇）。「しかし今や、神の義が、律法とは別に」、すなわち私たちが先に律法に従うこととは別に、「現され」ました（ローマ三・二一）。「それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるもの」です（ローマ三・二二）。「そこにはなんらの差別も」ありません（ローマ三・二二）。義認を必要とすることにおいても、それを得る仕方においても、差別はないのです。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって」いるからです（ローマ三・二三）。この神の栄光とは、人が造られたときの、栄光ある神のかたちのことです。そして、（義認を得る）すべての人は、「価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる」のです（ローマ三・二四）。「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされ」ました（ローマ三・二五）。「こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされる」のです（ローマ三・二六）。すなわち、ご自分の正しさを少しも損なうことなく、あの供え物のゆえに、その人にあわれみを示されるのです。そこで、「わたしたちは、こう思う」（ローマ三・二八）と使徒は結論します。これこそ、使徒が確立しようとした大きな命題でした。「人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による」のです（ローマ三・二八）。

（二）　これには反論が出ることが、たやすく予想されました。実際、その反論は、どの時代にも出されてきました。すなわち、私たちが律法の行いなしに義とされると言うのは、律法を廃することだ、という反論です。使徒は、正式な論争にはいらず、ただその非難を否定します。使徒はこう言います。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのでしょうか。断じてそうではない。かえって、律法を確立するのです」（ローマ三・三一）。

（三）　聖パウロは、「人が義とされるのは、律法の行いによるのではな」い（ローマ三・二八）と言います。ある人々は、それは儀式律法のことだけを言っているのだ、と考えます。この奇妙な考えは、先に引いた三一節の言葉そのものによって、十分に論破されます。聖パウロは、儀式律法を確立したでしょうか。明らかに、確立しませんでした。使徒は、信仰のゆえに、あの律法を無効にしました。そして、そうしていることを公然と認めました。私たちは信仰のゆえにこれを無効にするのではなく、確立するのだ、と使徒が本当に言うことのできたのは、道徳律法だけでした。

（四）　けれども、この点で、すべての人が使徒と同じ考えなのではありません。これに同意しようとしない人が、たくさんいます。教会のどの時代にも、クリスチャンの名を負う人々の中にさえ、多くの人がこう主張してきました。聖徒

たちに「ひとたび伝えられた信仰」（ユダ三）は、律法全体を無効にするためのものだ、と。彼らは、儀式律法と同じく、道徳律法をも容赦しようとしません。いわば両方とも「主の前に」「寸断」しようとするのです（サムエル記上一五・三三）。そして、激しくこう主張します。「何かの律法を確立するなら、『キリストはあなたがたに用のないものになろう』（ガラテヤ五・二）。あなたがたは『キリストから離れてしまっている。恵みから落ちている』（ガラテヤ五・四）」。

（五） けれども、この人々の熱心は、深い知識による（ローマ一〇・二）ものでしょうか。彼らは、律法と信仰との結びつきに目をとめたでしょうか。そして、両者が固く結びついていることを考えるなら、一方を滅ぼすことは、実は両方を滅ぼすことだ、と気づいたでしょうか。道徳律法を廃することは、実は信仰と律法とをともに廃することだ、と気づいたでしょうか。私たちを信仰に導く手段も、魂のうちにあるあの神の賜物を燃え立たせる（第二テモテ一・六）手段も、ふさわしいものが何も残らなくなるからです。

（六） ですから、キリストのもとに来たいと願う人も、受け入れたキリストにあって歩みたい（コロサイ二・六）と願う人も、みな気をつけなければなりません。「信仰のゆえに」「律法を無効にする」（ローマ三・三一）ことのないようにです。そうならないよう確かに身を守るために、次のことを調べてみましょう。

第一に、「信仰のゆえに」「律法を無効にする」（ローマ三・三一）最もありふれたやり方は何か。

第二に、どうすれば使徒にならって、信仰によって「律法を確立する」（ローマ三・三一）ことができるか。

【一】 律法を説教しないこと

（一） まず第一に、信仰のゆえに律法を無効にする最もありふれたやり方は何か、を調べてみましょう。さて、説教者が律法を一挙にすべて無効にするやり方は、律法をまったく説教しないことです。これは、律法を神の言（ローマ三・二）から消し去るのとまったく同じことです。それがわざとなされるときは、なおさらです。律法を説教しないことが規則とされ、「律法の説教者」という言葉そのものが、ののしりの言葉として使われるときです。まるで、それが福音の敵とほとんど変わらないものを意味するかのようにです。

（二） これはすべて、律法の性質と特質と用途とについての、まったくの無知から出ています。そして、このようにふるまう人々について、次のどちらかを証明しています。彼らがキリストを知らず、生きた信仰をまったく知らないことです。そうでなければ、少なくとも、彼らがキリストにある幼な子（第一コリント三・一）にすぎず、それゆえ「義の言葉」に通じていない（ヘブル五・一三）ことです。

（三） 彼らの大きな言い分はこうです。福音を説教することが、律法のあらゆる目的を果たす、というのです。福音を説教するとは、彼らの判断によれば、キリストの苦しみと功績のほかは何も語らないことです。けれども、私たちはこれをまったく否定します。それは、律法のいちばん最初の目的さえ果たしません。すなわち、人に罪を悟らせること、地獄のふちでなお眠っている人々を目ざめさせることです。あちこちに、例外はあったかもしれません。千人にひとりは、福音によって目ざめさせられたかもしれません。けれども、これは一般的な規則ではありません。神がふつう用いられる方法は、律法によって、ただ律法だけによって、罪人に罪を悟らせることです。福音は、神がこの目的のために定められた手段ではありません。主ご自身がこの目的のために用いられた手段でもありません。福音をこのように用いてよいという権威は、聖書のどこにもありません。それが効果をあげると考える根拠もありません。事の性質から見ても、それを期待する根拠はやはりありません。主ご自身が言われるとおり、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人です」（マタイ九・一二）。ですから、丈夫な人に、あるいは少なくとも自分は丈夫だと思っている人に、医者をすすめるのはばかげたことです。まず、その人が病気であることを納得させなければなりません。そうしなければ、あなたが骨を折っても、その人は感謝しないでしょう。同じように、まだ一度も砕かれたことのない、無傷の心の人にキリストをすすめるのも、ばかげたことです。それは、本当の意味で、「真珠を豚に投げてやる」（マタイ七・六）ことです。疑いもなく、彼らはそれを「足で踏みつけ」るでしょう

（マタイ七・六）。さらに「向きなおってあなたがたにかみついてくる」（マタイ七・六）としても、それは当然予想すべきことにすぎません。

（四）「しかし、無関心な罪人にキリストをすすめよという命令は、聖書にはないとしても、聖書にその先例はあるのではないか」。私はないと思います。一つも知りません。あなたは、四つの福音書からも、使徒行伝からも、一つも先例を出すことはできないと思います。また、使徒たちの書いたもののどの箇所からも、使徒のだれかがそうしていたことを証明することはできません。

（五）「いや、使徒パウロは、コリント人への第一の手紙で、『わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える』（第一コリント一・二三）と言っているではないか。また第二の手紙で、『わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える』（第二コリント四・五）と言っているではないか」。

私たちは、この点に決着をゆだねることに同意します。すなわち、パウロの足跡に従い、パウロの模範にならうことにです。ただパウロが説教したとおりに、あなたも説教しなさい。そうすれば、論争は終わります。

パウロが、あの大使徒たち（第二コリント一一・五）にも劣らず完全な仕方でキリストを宣べ伝えたことは、確かです。それでも、聖パウロ以上に律法を説教した人がいたでしょうか。ですから、パウロは、福音が律法と同じ目的を果たすとは考えていなかったのです。

（六）記録に残っている聖パウロのいちばん最初の説教は、次の言葉で結ばれています。「モーセの律法では義とされることができなかったすべての事についても、信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのです。だから預言者たちの書にかいてある次のようなことが、あなたがたの身に起らないように気をつけなさい。『見よ、侮る者たちよ。驚け、そして滅び去れ。わたしは、あなたがたの時代に一つの事をする。それは、人がどんなに説明して聞かせても、あなたがたのとうてい信じないような事なのです』」（使徒一三・三八～四一）。さて、明らかに、これはすべて、あなたがたがこの言葉を理解している意味での、律法の説教です。パウロの聞き手は、全部ではないにしても大部分が、ユダヤ人か信心深い改宗者たち（使徒一三・四三）でした。ですから、おそらくその多くは、少なくともある程度、すでに罪を悟っていたでしょう。それでも、これは律法の説教なのです。パウロはまず、彼らに思い起こさせます。人はモーセの律法によっては義とされず、ただキリストを信じる信仰によって義とされる、ということをです。そのうえで、神のさばきをもって彼らを厳しく警告します。これは、最も強い意味で、律法の説教です。

（七）次の説教は、ルステラで異邦人に向けて語ったものです（使徒一四・一五～一七）。そこには、キリストの名さえ見あたりません。その趣旨はすべて、彼らがむなしい偶像を捨てて、「生ける神に立ち帰る」（使徒一四・一五）ように、ということです。さあ、本当のことを白状しなさい。もしあなたがその場にいたら、パウロよりずっと上手に説教できただろうと思うのではありませんか。あなたがさらにこう考えたとしても、私は驚きません。パウロがあれほどひどい扱いを受けたのは、あれほどまずい説教をしたからだ、と。パウロが石で打たれたのは、キリストを宣べ伝えなかったことへの正当なさばきだった、と！

（八）確かに、獄吏は「獄に駆け込んできて、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏し」（使徒一六・二九）、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」（使徒一六・三〇）と言いました。そのとき、パウロはすぐに、「主イエス」キリスト「を信じなさい」（使徒一六・三一）と言いました。これほど深く罪を悟った人に対してなら、だれでも同じことを言ったでしょう。けれども、アテネの人々には、パウロはまったく違う仕方で語っています。彼らの迷信と無知と偶像礼拝とを責めています。そして、来たるべきさばきと、死人の中からのよみがえりとを考えさせて、悔い改めるよう強く促しているのです（使徒一七・二四～三一）。同じように、ペリクスは、キリストに対する「信仰のことを、彼から聞」くために（使徒二四・二四）、わざわざパウロを呼び出しました。そのとき、パウロは、あなたがたの言う意味でキリストを宣べ伝えることはしませんでした。そうしていたら、おそらく総督は、あざけるか、反対してののしるかしたでしょう。パウロは、「正義、節制、未来の審判」について「論じ」ました（使徒二四・二五）。そしてついに、ペリクスは、あれほどかたくなな人であったのに、震えたのです。あなたも行って、パウロの足跡に従いな

さい。「正義、節制、未来の審判」（使徒二四・二五）について論じることによって、無関心な罪人にキリストを宣べ伝えなさい！

（九）あなたが「しかし、パウロは手紙の中では、違う仕方でキリストを宣べ伝えたではないか」と言うなら、私はこう答えます。

一、パウロは、手紙の中では、そもそも説教していません。少なくとも、私たちが言う意味では説教していません。いまの問題で説教というのは、会衆の前で語ることだからです。けれども、このことはおくとしても、こう答えます。

二、パウロの手紙は、いま話しているような不信者にあてられたのではありません。ローマやコリントやピリピなどにいる神の「聖徒」たち（ローマ一・七、第一コリント一・二、ピリピ一・一）にあてられています。疑いもなく、パウロは、この世の中で神もない者（エペソ二・一二）に対してよりも、この人々に対して、キリストのことを多く語ったでしょう。

三、それでも、これらの手紙は、どれも律法に満ちています。ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙でさえ、そうです。この二つの手紙で、パウロは、あなたがたが「律法の説教」と呼ぶことをしています。しかも、不信者に対してだけでなく、信者に対してもしているのです。

（一〇）このことから明らかなように、あなたがたは、使徒の言う意味でキリストを宣べ伝えるとはどういうことかを、知らないのです。疑いもなく、聖パウロは、自分はキリストを宣べ伝えていると考えていました。ペリクスに対しても、アンテオケでもルステラでもアテネでも、そうです。この模範から、考える人ならだれでも、こう推論しなければなりません。罪人へのキリストの愛を告げることは、使徒の言う意味でキリストを宣べ伝えることです。それだけでなく、キリストが炎の中で天から来られる（第二テサロニケ一・七）と告げることも、そうなのです。そうです、聖書が言うこの言葉の十分な意味で、そうなのです。キリストを宣べ伝えるとは、旧約聖書であれ新約聖書であれ、キリストが啓示されたことを宣べ伝えることです。ですから、あなたが「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ一・二九）と言うとき、あなたは本当にキリストを宣べ伝えています。それと同じように、「悪しき者、また神を忘れるもろもろの国民は陰府へ去って行きます」（詩篇九・一七）と言うときも、本当にキリストを宣べ伝えているのです。

（一一）このことをよく考えなさい。キリストを宣べ伝えるとは、キリストが語られたすべてのことを宣べ伝えることです。キリストのすべての約束、すべての警告と命令、キリストの書にしるされているすべてのことを宣べ伝えることです。そうすれば、律法を無効にすることなしにキリストを宣べ伝えるにはどうすればよいかが、分かるでしょう。

（一二）「しかし、キリストの功績と苦しみをとりわけ語る説教にこそ、最大の祝福が伴うのではないか」。

嘆き悲しむ人々の会衆、あるいは信者の会衆に説教するときには、おそらく、そうした説教に最大の祝福が伴うでしょう。そういう説教は、彼らの状態にとりわけふさわしいからです。少なくとも、そうした説教は、たいてい最も多くの慰めを与えるでしょう。けれども、それがいつも最大の祝福だとは限りません。私は、ときには、心を刺し、私をちりにまでへりくだらせる説教によって、はるかに大きな祝福を受けることがあります。また、もし私が、キリストの苦しみについての説教のほかは何も語らず、何も聞かないとしたら、あの慰めさえ受けないでしょう。そうした説教は、絶えず繰り返されるうちに力を失い、ますます気が抜けて生気を失っていくでしょう。そしてついには、霊もいのちも力もない、退屈な言葉の繰り返しになってしまうでしょう。ですから、このようにキリストを宣べ伝えることは、時がたつうちに、律法だけでなく福音をも無効にしてしまうに違いありません。

【二】信仰が聖性を不要にすると教えること

（一）信仰のゆえに律法を無効にする第二のやり方は、信仰があれば聖性は必要なくなる、と教えることです。この道は、千もの細い小道に分かれています。そして、そこを歩く人がたくさんいます。実際、これをまったく免れる人はほとんどいません。私たちが信仰によって救われると確信した人は、ほとんどみな、遅かれ早かれ、多かれ少なかれ、このわき道に引き込まれるのです。

（二）　次のような人々は、みなこのわき道に引き込まれています。キリストを信じる信仰があれば、キリストの律法を守る必要はまったくなくなる。彼らは、そうはっきり判断してはいないかもしれません。それでも、次のどれかを想定しているのです。

一、聖性は、キリストが来られる前ほどには、今は必要でない。

二、今は、より低い程度の聖性で足りる。

三、聖性は、ほかの人々ほどには、信者には必要でない。そうです、次のような人々もみなそうです。一般論としては判断が正しくても、個々の場合には、信じる前にできた以上の自由をとってもよいと考える人々です。実際、自由という言葉をこのように、従順や聖性からの自由という意味で使うことは、すぐに示しています。彼らの判断がゆがんでいること、そして、自分からは遠いと思っていた罪を犯していることをです。すなわち、信仰があれば聖性は必要なくなると想定して、信仰のゆえに律法を無効にするという罪です。

（三）　これをはっきりと教える人々の第一の言い分は、こうです。私たちは今、行いの契約ではなく、恵みの契約のもとにある。だから、もはや律法の行いをする必要はない、と。

では、いったいだれが行いの契約のもとにあったでしょうか。堕落する前のアダムのほかには、だれもいません。アダムは、完全に、また本来の意味で、あの契約のもとにありました。その契約は、受け入れられるためのただ一つの条件として、完全で全面的な従順を求めました。そして、ほんの小さな違反にも、赦しの余地を残しませんでした。けれども、ほかにはだれも、この契約のもとにあったことはありません。ユダヤ人も異邦人も、キリスト以前の人もそれ以後の人もです。アダムの子らはみな、恵みの契約のもとにあったのであり、今もそうです。彼らが受け入れられる仕方は、こうです。神の価なしの恵みが、キリストの功績によって、信じる者に赦しを与えます。その信じる者とは、愛によって働き（ガラテヤ五・六）、あらゆる従順と聖性とを生み出す信仰をもって信じる者です。

（四）　ですから、事情は、あなたが想定しているようなものではありません。人はかつて、今よりも、神に従い、神の律法のわざを行う義務を多く負っていた、というのではないのです。これは、あなたが立証できない想定です。そうではなく、もし私たちが行いの契約のもとにあったなら、受け入れられる前に、そのわざを行わなければならなかったでしょう。ところが今は、すべての良きわざは、以前と同じように必要ではあっても、受け入れられることに先立つのではありません。それに続くものなのです。ですから、恵みの契約の性質を理由に、どんな場合や程度の従順も、聖性のどんな部分や分量も、退けてよいことにはなりません。恵みの契約は、その根拠も励ましも、少しもあなたに与えないのです。

（五）　「しかし、私たちは、律法の行いなしに、信仰によって義とされるのではないか」。疑いもなく、そうです。儀式律法の行いも道徳律法の行いもなしに、義とされるのです。すべての人がこのことを確信してくれたらと、心から願います。そうすれば、数えきれない悪が防がれるでしょう。とりわけ、律法廃棄論が防がれるでしょう。一般的に言って、律法廃棄論者を生み出すのはパリサイ人だからです。パリサイ人は、聖書にこれほど明らかに反する極端に走ることで、ほかの人々を反対の極端に走らせるのです。パリサイ人は、行いによって義とされようとします。そのために、ほかの人々をおびえさせ、行いに少しの場所も認めないようにさせてしまうのです。

（六）　けれども、真理は両者の間にあります。疑いもなく、私たちは信仰によって義とされます。これは、キリスト教という建物全体の隅のかしら石です。私たちは、義認に先立つ条件としての律法の行いなしに、義とされます。けれども、行いは、私たちを義とするあの信仰の、直接の実なのです。ですから、もし良きわざが、すなわち内と外とのあらゆる聖性が、私たちの信仰に続かないとします。そのときは、私たちの信仰に何の値打ちもないことは明らかです。私たちは、いまなお罪の中にいるのです（第一コリント一五・一七）。私たちは信仰によって、しかも行いによらない信仰によって義とされます。けれども、ここまで見てきたように、そのことは、信仰のゆえに律法を無効にする根拠にはなりません。信仰があれば、どんな種類、どんな程度の聖性も免除される、と思う根拠にもなりません。

（七）「いや、聖パウロははっきりこう言っているではないか。『働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められる』（ローマ四・五）。そこから、信仰は信者にとって、義の代わりに、義の場所に置かれる、ということにならないか。しかし、信仰が義あるいは聖性の代わりになるなら、そのうえ義や聖性まで、何の必要があるのか」。

認めなければなりませんが、これは要点を突いています。実際、これは律法廃棄論の主柱です。それでも、長い答えや骨の折れる答えは必要ありません。私たちは、次のことを認めます。

一、神は不信心な者を義とされます（ローマ四・五）。すなわち、そのときまでまったく不信心であった者です。あらゆる悪に満ち、あらゆる善を欠いている者です。

二、神は、働きのない（ローマ四・五）不信心な者を義とされます。すなわち、その瞬間まで、何一つ良いわざをしない者です。また、することもできない者です。悪い木が良い実をならせることはできない（マタイ七・一八）からです。

三、神は、先立つどんな善も義もなしに、ただ信仰によってその人を義とされます。

四、そのとき、信仰がその人の義と認められます（ローマ四・五）。すなわち、先立つ義と認められるのです。言いかえれば、神は、キリストの功績によって、信じる者を受け入れてくださるのです。その人がすでにすべての義を果たしたかのようにです。けれども、これがみな、あなたの論点と何のかかわりがあるでしょうか。使徒は、ここでもほかのところでも、この信仰がその人の後に続く義と認められる、とは言っていません。使徒は、信仰の前には義がないと確かに教えています。けれども、信仰の後にも義がないと、どこで教えているでしょうか。使徒は、聖性が義認に先立つことはありえないと確かに主張しています。けれども、聖性が義認に続く必要はない、とは主張していません。ですから、聖パウロは、信仰があれば聖性は必要なくなると教えて律法を無効にする口実を、あなたに少しも与えていないのです。

【三】 実際の生活で律法を無効にすること

（一） 信仰のゆえに律法を無効にするやり方は、まだほかにもあります。それは、前の二つのどちらよりもありふれています。それは、実際の生活でそうすることです。原則の上ではなくても、事実の上で律法を無効にすることです。信仰が私たちを聖性から免除するためのものであるかのように生きることです。

使徒は、あのよく知られた言葉で、私たちがそうならないよう、何と熱心に守っていることでしょう。「それでは、どうなのでしょうか。律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきでしょうか。断じてそうではない」（ローマ六・一五）。これは、徹底的に考える必要のある警告です。この上なく重要だからです。

（二）「律法の下に」（ローマ六・一五）あるとは、ここでは次のような意味にとることができます。

一、儀式律法を守る義務を負っていること。

二、モーセの制度全体に従う義務を負っていること。

三、神に受け入れられる条件として、道徳律法全体を守る義務を負っていること。

四、神の怒りとのろいのもとにあること。すなわち、永遠の死の宣告のもとにあり、罪責と罪に定められることとを感じて、恐怖と奴隷のような恐れに満ちていることです。

（三） さて、信者は「神の律法の外にあるのではなく、キリストの律法の中にある」のです（第一コリント九・二一）。それでも、信じたその瞬間から、いま述べたどの意味でも「律法の下に」（ローマ六・一五）はありません。それどころか、信者は「恵みの下に」（ローマ六・一五）あります。すなわち、もっと慈しみ深い、恵みの制度のもとにあるのです。信者は、もはや儀式律法のもとにも、モーセの制度のもとにもありません。受け入れられる条件として道徳律法を守る義務さえ負っていません。それと同じように、信者は、神の怒りとのろいから救い出されています。罪責と罪に定められることとを感じることからも、すっかり救い出されています。以前、信者は、死と地獄へのあの恐怖と恐れのため

に、一生涯、奴隷となっていました（ヘブル二・一五）。その恐怖と恐れのすべてからも、救い出されているのです。そして信者は今、喜んでする全面的な従順をささげます。これは、「律法の下に」（ローマ六・一五）あった間はできなかったことです。信者が従うのは、奴隷のような恐れが動機なのではありません。もっと高貴な原理によるのです。すなわち、神の恵みが心を治め、すべてのわざを愛のうちに行わせてくださるのです。

（四）それでは、どうでしょうか。この福音的な行動の原理は、律法的な原理よりも力が弱いのでしょうか。私たちは、奴隷のような恐れから神に従っていたほどには、子としての愛からは神に従わない、というのでしょうか。

これがありふれた事態でなければよいのですが。この実際上の律法廃棄論が、何千人もの信者に感染していなければよいのですが。これは、信仰のゆえに律法を無効にする、気づかれないやり方です。

それは、あなたに感染していないでしょうか。正直に、念入りに、自分を調べなさい。あなたは「律法の下に」（ローマ六・一五）、すなわち、私たちがふつう言う罪の自覚のもとにあったとき、あえてしなかったことがあるでしょう。それを、今はしているのではありませんか。たとえば、そのとき、あなたは食べ物でぜいたくをしようとはしませんでした。必要なだけを、しかも最も安いものを取りました。今は、自分にもっと勝手を許していないでしょうか。以前より少し多く、自分を甘やかしていないでしょうか。ああ、「律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって」、「罪を犯す」（ローマ六・一五）ことのないように気をつけなさい！

（五）罪の自覚のもとにあったとき、あなたは、目の欲（第一ヨハネ二・一六）を少しも満たそうとはしませんでした。ただ好奇心を満たすためだけに、大小を問わず何かをすることはありませんでした。家具でも衣服でも、清潔さと必要だけを、せいぜいごく控えめな便利さだけを考えていました。どんな種類のものであれ、余分なものや飾り立てたものは、あなたにとって恐ろしいものであり、忌まわしいものでした。流行の優雅さも、同じでした。

今もそうでしょうか。これらのことで、あなたの良心は、今もあのときと同じように敏感でしょうか。今も家具と衣服とで同じ規則に従っているでしょうか。あらゆる飾り立てたもの、あらゆる余分なもの、無用なもの、ただ飾りのためだけのものを、足の下に踏みつけているでしょうか。どれほど流行しているものでもです。むしろ、いったん捨てたものを、また使うようになっていないでしょうか。あのときには、良心を傷つけずには使えなかったものをです。そして、「いや、私は今はそれほど気にしなくなった」と言うことを覚えたのではありませんか。あなたが今も気にしていればよいのにと、心から願います！　そうすれば、「律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって」（ローマ六・一五）、このように罪を犯すことはないでしょう！

（六）あなたはかつて、人を面と向かってほめることも気にしていました。人にほめられるままにしておくことは、なおさら気にしていました。それは、あなたの心を刺す一突きでした。あなたはそれに耐えられませんでした。ただひとりの神からの誉れ（ヨハネ五・四四）だけを求めていたのです。あなたは、そのような会話に耐えられませんでした。人の徳を高めるのに役立たない（エペソ四・二九）会話には、どんなものにも耐えられませんでした。むだ話も、くだらないおしゃべりも、すべて忌みきらっていました。恐れるだけでなく、憎んでいました。時間の価値を、尊く過ぎ去っていく一瞬一瞬の価値を、深く感じていたからです。同じように、むだな出費を恐れ、忌みきらっていました。お金を、時間の次に大切にしていました。そして、不正の富（ルカ一六・一一）についてさえ、不忠実な管理人とされることのないよう、おののいていたのです。

今も、あなたは称賛を、死に至る毒と見ているでしょうか。魂を危険にさらさずには、与えることも受けることもできない毒とです。今も、徳を高めるのに役立たない（エペソ四・二九）会話をすべて恐れ、忌みきらっているでしょうか。一瞬一瞬を生かそうと努め、どの一瞬も、あなたを前よりよくしないまま過ぎ去ることのないようにしているでしょうか。お金と時間との使い方に、前ほど気をつけなくなっていないでしょうか。今は、かつてはできなかったような仕方で、そのどちらをも使えるようになっていないでしょうか。ああ、何と、「あなたの益となるべきであったものが、あなたのつまずきの機会となってしまった」ことでしょう。あなたは何と、「律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって」「罪を犯」した（ローマ六・一五）ことでしょう！

（七）　あなたがこれ以上このように「神の恵みを放縦な生活に変え」（ユダ四）続けることなど、決してあってはなりません！　ああ、これらすべてのことについて、かつてあなたがどれほど明らかで強い確信を持っていたかを、思い起こしなさい。そして同時に、その確信がだれから来たのかも、あなたはよく分かっていました。世の人々は、あなたが惑わしに陥っていると言いました。けれども、あなたは、それが神の声であることを知っていました。これらのことで、あのとき、あなたは気にしすぎていたのではありません。今、あなたは十分に気にしていないのです。神は、あなたをあのつらい学校に長くとどめられました。あなたがあの大切な教えを、いっそう完全に学ぶためです。それなのに、あなたはもう、それを忘れてしまったのですか。ああ、手遅れにならないうちに、それを思い出しなさい。あなたがあれほど多くの苦しみを受けたのは、むだだったのでしょうか。まだむだではないと、私は信じます。今こそ、苦しみなしにあの確信を用いなさい！　むちなしにあの教えを実行しなさい。以前は、神の燃える憤りがあなたを動かしました。今、神のあわれみを、それより軽く受けとめることのないようにしなさい。愛は、恐れよりも力の弱い動機なのでしょうか。そうでないなら、これを変わることのない規則としなさい。「私は今『恵みの下に』（ローマ六・一五）あるのだから、『律法の下に』（ローマ六・一五）あったときにあえてしなかったことは、何もしない」。

（八）　この項を結ぶにあたって、怠りの罪についても自分を調べるよう、あなたに勧めないわけにはいきません。「恵みの下に」（ローマ六・一五）ある今、あなたは「律法の下に」（ローマ六・一五）あったときと同じように、この罪を免れているでしょうか。あのとき、あなたは何と熱心に神の言葉を聞いたことでしょう。一つの機会でもおろそかにしたでしょうか。昼も夜も、それに通ったではありませんか。ちょっとした妨げで、あなたが来なくなることがあったでしょうか。少しの用事で、来客で、軽い体の不調で、柔らかい寝床で、暗い朝や寒い朝で、来なくなることがあったでしょうか。あのとき、あなたはたびたび断食したではありませんか。あるいは、できる限りの節制をしたではありませんか。地獄の口の上にぶら下がっていた間、心は冷たく重かったとはいえ、あなたは多くの時を祈りに費やしたではありませんか。知られない神（使徒一七・二三）のためにさえ、あなたはためらわずに語ったではありませんか。大胆にその方のために弁じ、罪人を責め、邪悪な時代（マルコ八・三八）の前で真理を公言したではありませんか。そして今、あなたはキリストを信じる者なのでしょうか。世に勝つ信仰（第一ヨハネ五・四）を持っているのでしょうか。何ということでしょう。それなのに、今あなたは、主人を知らなかったときよりも、主人のために熱心でなくなっているのですか。断食にも、祈りにも、主人の言葉を聞くことにも、罪人を神に招くことにも、前ほど励まなくなっているのですか。ああ、悔い改めなさい！　自分のいたましい損失を見て、感じなさい！　どこから落ちたかを思い起こしなさい（黙示録二・五）！　自分の不忠実を嘆きなさい！　今こそ熱心になって（黙示録三・一九）、初めのわざを行いなさい（黙示録二・五）。もし「信仰のゆえに」「律法を無効にする」（ローマ三・三一）ことを続けるなら、神はあなたを断ち、不信者たちと同じ目にあわせられるでしょう！

説教三十六　信仰による律法の確立（二）

「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのでしょうか。断じてそうではない。かえって、律法を確立するのです」（ローマ三・三一）

（一）　前の説教では、信仰のゆえに律法を無効にする最もありふれたやり方は何か、を示しました。それは次のやり方です。第一に、律法をまったく説教しないことです。これは、律法を一挙に、事実上すべて無効にします。しかも、キリストを宣べ伝え、福音をあがめるという口実のもとにそうするのです。実際には、そのどちらをも滅ぼしているのですが。第二に、直接にであれ間接にであれ、信仰があれば聖性は必要なくなる、と教えることです。聖性は、キリストが来られる前ほどには、今は必要でない。あるいは、今はより低い程度の聖性で足りる。私たちは信じているのだから、そうでなかった場合ほどには、聖性は必要でない。あるいは、クリスチャンの自由とは、どんな種類、どんな程度の聖性からも自由になることだ。そう教えることです。これは、次の大切な真理をゆがめることです。私たちは今、行いの契約ではなく、恵みの契約のもとにある。人は律法の行いなしに、信仰によって義とされる。そして、「働きはなくても」、「信じる人は、その信仰が義と認められる」（ローマ四・五）。第三に、実際の生活でそうすることです。原則の上ではなくても、実際に律法を無効にすることです。信仰が私たちを聖性から免除するためのものであるかのように、生き、ふるまうことです。「律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって」（ローマ六・一五）、自分に罪を許すことです。残っているのは、どうすれば私たちがもっとよい模範に従えるかを調べることです。どうすれば、使徒とともに、こう言えるかです。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのでしょうか。断じてそうではない。かえって、律法を確立するのです」（ローマ三・三一）。

（二）　確かに、私たちは古い儀式律法を確立するのではありません。それが永久に廃されたことを、私たちは知っています。モーセの制度全体を確立するのでは、なおさらありません。主がそれを十字架につけてしまわれた（コロサイ二・一四）ことを、私たちは知っています。また、私たちは道徳律法を確立します。けれども、それを果たすこと、すなわちすべての戒めを守ることが、義認の条件であるかのようにではありません。残念ながら、そのように確立する人があまりにも多いのですが。もしそうなら、確かに「生ける者はひとりもみ前に義とされない」でしょう（詩篇一四三・二）。けれども、これをすべて認めたうえで、私たちはなお、使徒の言う意味で「律法を確立する」（ローマ三・三一）のです。すなわち、道徳律法を確立するのです。

【一】　教えによって律法を確立する

（一）　私たちは、第一に、教えによって律法を確立します。律法をその全範囲にわたって説教し、そのすべての部分を説き明かし、強く勧めようと努めることによってです。私たちの偉大な教師が地上におられたときになさったのと、同じ仕方でです。私たちは、聖ペテロの勧めに従うことによって、律法を確立します。「語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語り」なさい（第一ペテロ四・一一）、という勧めです。昔の聖なる人々は、聖霊に感じて（第二ペテロ一・二一）、私たちを教えるために語り、また書きました。ほむべき主の使徒たちも、同じ御霊の導きによって、そうしました。私たちも、そのように語るのです。主の名によって語るときはいつでも、私たちは律法を確立します。聞く人々に何一つ隠さず、何の制限も留保もなしに、神の御旨のすべてを告げる（使徒二〇・二七）ことによってです。そして、律法をさらに効果的に確立するために、私たちは、この点できわめて率直に語ります。私たちは、「多くの人のように神の言を売物に」しません（第二コリント二・一七）。この「売物にする」と訳されてい

る語は、原語ではカペーレウオンテス（καπηλεύοντες）です。ずる賢い商人が、悪いぶどう酒をごまかして売るように、ということです。聞く人の好みに合わせるために、みことばをごまかして売ることはしません。混ぜものをしたり、質を落としたり、和らげたりもしません。かえって、「真心をこめて、神につかわされた者として神のみまえで、キリストにあって語る」のです（第二コリント二・一七）。「真理を明らかにし、神のみまえに、すべての人の良心に自分を推薦する」（第二コリント四・二）ほかには、何の目的も持たないからです。

（二） 私たちが教えによって律法を確立するのは、このように律法をすべての人に公然と告げるときです。しかも、ほむべき主と使徒たちが伝えたとおりの豊かさで告げるときです。律法を、その高さ、深さ、長さ、広さ（エペソ三・一八）のすべてにわたって宣べ伝えるときです。また、私たちが律法を確立するのは、律法のすべての部分、そこに含まれるすべての戒めを告げるときです。文字どおりの十分な意味においてだけでなく、霊的な意味においても告げるときです。律法が禁じたり命じたりする外の行いについてだけでなく、内なる原理、すなわち心の思いと願いと志とについても告げるときです。

（三） 実際、私たちは、このことをなおさら熱心にします。それは、これがきわめて重要だからというだけではありません。すべての実、すべての言葉と行いは、いつも悪い事ばかり（創世記六・五）でしかありえないからです。木が悪ければ（マタイ一二・三三）、すなわち心の性向と気質とが神の前に正しくなければ、そうなるのです。そればかりでなく、これらのことは、これほど重要であるのに、ほとんど考えられも理解されもしていないからです。あまりにも理解されていないので、律法についても、その十分な霊的な意味でとらえるなら、本当にこう言えるほどです。律法は、世の初めから「代々にわたってこの世から隠されていた」（コロサイ一・二六）奥義である、と。律法は、異教の世界からはまったく隠されていました。異教徒は、誇る知恵をすべて持ちながら、神を見いださず、神の律法も見いだしませんでした。律法の文字さえ見いだされず、その霊はなおさらです。「その無知な心は」ますます「暗くなった」のです（ローマ一・二一）。彼らは「自ら知者と称しながら、愚かになり」ました（ローマ一・二二）。また、律法は、その霊的な意味については、ユダヤ民族の大部分からも、ほとんど同じように隠されていました。ユダヤ人は、ほかの人々について、すぐに「律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」（ヨハネ七・四九）と言いました。けれども、そう言うことで、自分自身に宣告を下したのです。彼ら自身が、同じのろい、同じ恐ろしい無知のもとにあったからです。その証拠に、主は、彼らの中で最も賢い人々を、律法をひどく曲解していると、絶えず責められました。また、その証拠に、彼らのほとんどすべてが、杯の外側をきよめる（マタイ二三・二五）だけでよい、と思い込んでいました。はっか、いのんど、クミンの十分の一を納める（マタイ二三・二三）こと、すなわち外面のきちょうめんさが、内面の汚れを償うと思っていたのです。公平とあわれみとを、信仰と神への愛とをまったくなおざりにしても、それで償いになると思っていたのです。そうです、律法の霊的な意味は、彼らの中で最も賢い人々からさえ、まったく隠されていました。詩篇の作者は、「もしわたしが心に不義をいだいていたならば、主はお聞きにならないであろう」（詩篇六六・一八）と言います。彼らの最も高名なラビのひとりは、この言葉にこう注釈しているほどなのです。彼は言います。「すなわち、それが私の心の中だけにあり、外に現れる悪を行わないなら、主は心に留められない。私が外の行いにまで進まない限り、主は私を罰されない！」

（四） けれども、ああ、神の律法の内なる霊的な意味は、ユダヤ人や異教徒から隠されているだけではありません。キリスト教世界と呼ばれているものからさえ、少なくともその大多数からは、隠されているのです。神の戒めの霊的な意味は、この人々にとっても、いまなお奥義なのです。しかも、これは、ローマ・カトリックの暗やみと無知とにおおわれた国々にだけ見られることではありません。残念ながら、これは確かなことです。宗教改革を経たクリスチャンと呼ばれる人々でさえ、その大部分は、今日、キリストの律法の清さと霊性とをまったく知らないのです。

（五） そのため、今日に至るまで、「パリサイ人と律法学者たち」（マタイ一五・一）は、これを「聞いてつまず」きます（マタイ一五・一二）。彼らは、宗教の形はあってもその力のない人々です。たいてい、自分を見て賢いと思い（箴言三・七）、自分は正しいとうぬぼれている人々です。私たちが心の宗教につい

て語るとき、彼らは深くつまずきます。とりわけ、心の宗教がなければ、たとい私たちが「自分の全財産を人に施しても」（第一コリント一三・三）、何の益にもならないと示すときです。けれども、彼らはつまずくほかありません。私たちは、イエスにある真理（エペソ四・二一）を、そのまま語らずにはいられないからです。彼らが聞いても、拒んでも（エゼキエル二・七）、自分の魂を救うことが、私たちの務めです。神の書にしるされていることは、すべて告げなければなりません。人に喜ばれるためではなく、主に喜ばれるように（第一テサロニケ二・四）です。そこに見いだされるすべての約束だけでなく、すべての警告をも告げなければなりません。神は、ご自分の子供たちのために、あらゆる祝福と特権とを備えられました。私たちは、それを宣べ伝えるとき、同時に、主が「命じておいたいっさいのこと」を「教え」なければなりません（マタイ二八・二〇）。そして、私たちは、これらがみな役に立つことを知っています。眠っている人々を目ざめさせ、無知な人々を教えるためです。小心な者を励まし（第一テサロニケ五・一四）、あるいは聖徒たちを建て上げて完全にするためです。私たちは知っています。「聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって」（第二テモテ三・一六）、「人を教え」るにも、「戒め」るにも、また「正しくし、義に導くのに」も、「有益」です（第二テモテ三・一六）。また、「神の人が」（第二テモテ三・一七）、魂のうちで神のわざが進んでいく間、聖書のすべての部分を必要とすることも知っています。それは、ついに「あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になる」ためです（第二テモテ三・一七）。

（六）　このように、キリストが啓示されたすべてのことを宣べ伝えることによって、キリストを宣べ伝えるのが、私たちの務めです。確かに、私たちが主イエス・キリストの愛を告げることは、とがめられません。そうです、それには神からの特別な祝福が伴います。また、「主はわれわれの正義」（エレミヤ二三・六）と呼ばれる方について、もっと特別な仕方で語ってもよいのです。神が「キリストにおいて世をご自分に和解させ」てくださった（第二コリント五・一九）恵みについて、詳しく語ってもよいのです。ふさわしい機会には、キリストをたたえることに心を注いでもよいのです。キリストは「われわれすべての者の不義を」負われました（イザヤ五三・六）。「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれた」のです（イザヤ五三・五）。それは、「その打たれた傷によって、われわれはいや」されるためでした（イザヤ五三・五）。けれども、もしまったくこれだけにとどまるなら、みことばに従ってキリストを宣べ伝えていることにはならないでしょう。キリストをそのすべての職務において宣べ伝えるのでなければ、私たち自身、神の前に責任を免れません。恥じるところのない働き人（第二テモテ二・一五）としてキリストを宣べ伝えるとは、キリストを次のような方として宣べ伝えることです。まず、私たちの偉大な大祭司としてです。この大祭司は、「人間の中から選ばれて」、「人々のために神に仕える役に任じられた」方です（ヘブル五・一）。そのような方として、ご自分の血によって私たちを神と和解させ、「いつも生きていて」私たちの「ためにとりなしておられる」（ヘブル七・二五）方です。それだけでなく、主の預言者としても宣べ伝えることです。この方は、「神に立てられて、わたしたちの知恵となり」ました（第一コリント一・三〇）。また、みことばと御霊とによって、いつも私たちとともにいて（マタイ二八・二〇）、私たちを「あらゆる真理に導いて」くださいます（ヨハネ一六・一三）。そうです、さらに、とこしえに王であり続ける方として宣べ伝えることです。キリストは、ご自分の血であがなわれたすべての人に、律法を与えられます。まずご自分の恵みのうちに立ち返らせた人々を、神のかたちに回復させられます。そして、信じるすべての心の中を治められます。「万物をご自身に従わせ」る（ピリピ三・二一）まで、すなわちすべての罪をすっかり追い出し、永遠の義をもたらす（ダニエル九・二四）まで、治められるのです。

【二】　聖性を生み出す信仰を説く

（一）　第二に、私たちが律法を確立するのは、キリストを信じる信仰を説教するときです。聖性を不要にするのではなく、生み出すものとして説教するときです。あらゆる種類の聖性を生み出すものとして説くときです。禁じられたことをしない聖性も、命じられたことを行う聖性も、心の聖性も生活の聖性もです。

そのために、私たちは絶えず告げます。信仰そのものは、やはり愛のはしためにすぎない、と。キリスト教の信仰、神に選ばれた者たちの信仰（テトス一・一）、神の働きによる信仰でさえ、そうなのです。このことは、「信仰のゆえに」「律法を無効にする」（ローマ三・三一）ことを望まないすべての人が、たびたび深く考えるべきことです。信仰は、どれほど栄光に満ち、尊いものであっても、戒めの目標ではありません。神は、この誉れを愛だけに与えられました。愛こそが、神のすべての戒めの目標なのです（第一テモテ一・五）。愛は、世の初めから万物の完成に至るまで、神のあらゆる制度の目標、ただ一つの目標です。そして、天と地が逃げ去る（黙示録二〇・一一）ときにも、愛は残ります。ただ「愛」だけが「いつまでも絶えることがない」からです（第一コリント一三・八）。信仰は、まったくすたれます。信仰は、見ることのうちに、すなわち神を永遠に見ることのうちに、のみ込まれてしまうのです。けれども、そのときにも、愛は、

その本性も務めも変わることなく、
その灯は絶えず、その炎は尽きることなく、
死ぬことのない勝利のうちに、とこしえに生き、
尽きない善を注ぎ、尽きない賛美を受けるのです。

（二）信仰については、非常にすぐれたことが語られています。信仰にあずかる人はだれでも、使徒とともに、こう言ってよいのです。「言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝」します（第二コリント九・一五）。それでも、愛と比べられると、信仰はそのすぐれた点をすべて失います。聖パウロは、福音の栄光が律法の栄光にまさっていることについて述べています。それは、愛の栄光が信仰の栄光にまさっていることについても、まさにふさわしく言えることです。「すでに栄光を受けたものも、この場合、はるかにまさった栄光のまえに、その栄光を失ったのです。もし消え去るべきものが栄光をもって現れたのなら、まして永存すべきものは、もっと栄光のあるべきものです」（第二コリント三・一〇～一一）。そうです、信仰が消え去る前に持つ栄光は、すべて、信仰が愛に仕えることから生じるのです。信仰は、あの永遠の目標を推し進めるために神が定められた、一時的な大いなる手段なのです。

（三）信仰を度を越してあがめ、ほかのすべてを信仰にのみ込ませてしまう人々がいます。信仰の性質をまったく取り違え、信仰が愛の代わりになると思い込む人々です。そういう人々は、さらに次のことを考えるべきです。愛は、信仰の後にも存在するのと同じように、信仰よりもはるか前にも存在していました。御使たちは、造られた瞬間から、天にいます父の御顔を仰いできました（マタイ一八・一〇）。ですから、一般的な意味での信仰、すなわち見ていない事実を確認すること（ヘブル一一・一）としての信仰を、必要としませんでした。また、もっと特別な意味での信仰、すなわちイエスの血を信じる信仰も、必要としませんでした。キリストは、御使の性質をとられたのではなく、ただアブラハムの子孫の性質をとられたからです。ですから、世界の基が据えられる前には、一般的な意味でも特別な意味でも、信仰の場所はありませんでした。けれども、愛の場所はありました。愛は永遠の昔から、愛の大海である神のうちに存在していました。神のすべての子らのうちにも、造られた瞬間から、愛の場所がありました。彼らは、恵み深い創造主から、存在することと愛することとを、同時に受けたのです。

（四）また、一般的な意味での信仰でさえ、楽園に場所があったかどうかは確かではありません。このことについて、多くの人が巧みに、もっともらしく論じてはきましたが。聖書にある記事は短く、詳しく述べていません。その記事から見て、アダムは神に背く前、信仰によらず、見ることによって神とともに歩んでいた可能性がきわめて高いのです。

そのとき、彼の理性の目は強く澄んでいて、
（鷲が太陽を見つめることができるように）
造り主の御顔を間近に見ることができたであろう、
知性ある御使たちが見ることができたのと同じほどに。

そのときアダムは、神と顔を合わせて語る（出エジプト三三・一一）ことができました。今の私たちは、その御顔を見て、なお生きていることはできません（出エジプト三三・二〇）。ですから、アダムには、見えないことを補うのが務めである、あの信仰は必要なかったのです。

（五）　他方、特別な意味での信仰が、そのとき場所を持たなかったことは、まったく確かです。その意味での信仰は、罪と、罪人に対して示された神の怒りとを、必ず前提とするからです。それがなければ、罪人が神と和解するために、罪のあがないは必要ありません。したがって、堕落の前にはあがないの必要がなかったのと同じように、そのあがないを信じる信仰の場所もありませんでした。そのとき、人は罪のどんな汚れもなく清く、神が聖であるように聖だったからです。けれども、そのときでさえ、愛は人の心を満たしていました。愛は、競うものもなく人の内を治めていました。そして、罪によって愛が失われたときになって、はじめて信仰が加えられたのです。信仰は、それ自体のために加えられたのではありません。定められた目的を果たした後まで存在させるつもりで、加えられたのでもありません。その目的とは、堕落した人を、もとの愛に回復させることです。ですから、堕落のときに、見ていない事実を確認するこの信仰（ヘブル一一・一）が加えられました。それは、以前はまったく必要のないものでした。あがないの愛へのこの信頼が加えられたのです。この信頼は、「女のすえ」が蛇の「かしらを砕」く（創世記三・一五）という約束が与えられるまでは、場所を持つはずがありませんでした。

（六）　ですから、信仰は、もともと愛の律法を確立し直すために、神が計画されたものです。したがって、このように語るとき、私たちは信仰を軽んじているのでも、信仰が受けるべき称賛を奪っているのでもありません。かえって、信仰の本当の値打ちを示し、ふさわしい釣り合いで信仰をあがめているのです。神の知恵が初めから信仰に割り当てられた、まさにその場所を信仰に与えているのです。信仰は、人がもともとそのうちに造られた、あの聖い愛を回復させる大いなる手段です。ここから、次のことが導かれます。信仰は、それ自体では何の価値もありません。ほかのどんな手段もそうです。それでも、信仰はあの目的、すなわち私たちの心に愛の律法を新たに確立することへと導きます。また、今の状態では、それを成しとげる天下でただ一つの手段です。そのために、信仰は人にとって言いつくせない祝福であり、神の前に言いつくせない価値を持つのです。

【三】　自分の心と生活に律法を確立する

（一）　このことから、私たちは自然に、第三の、律法を確立する最も重要なやり方に目を向けることになります。すなわち、自分自身の心と生活とに律法を確立することです。実際、これがなければ、ほかのすべては何の役に立つでしょうか。私たちは、教えによって律法を確立するかもしれません。律法をその全範囲にわたって説教し、そのすべての部分を説き明かし、強く勧めるかもしれません。律法をその最も霊的な意味において解き明かし、御国の奥義を告げるかもしれません。キリストをそのすべての職務において宣べ伝えるかもしれません。キリストを信じる信仰を、キリストの愛のすべての宝を開くものとして宣べ伝えるかもしれません。それでも、その間ずっと、説教している律法が自分の心に確立されていないとします。そのとき、私たちは、神の前に「やかましい鐘や騒がしい鐃鉢」（第一コリント一三・一）ほどの値打ちもないでしょう。私たちの説教はすべて、自分の益になるどころか、自分の受けるさばきを重くするだけでしょう。

（二）　ですから、考えるべき要点はこれです。どうすれば、律法を自分の心に確立し、律法が私たちの生活に十分な影響を及ぼすようにできるでしょうか。そして、これは信仰によってだけできることです。

日々の経験から分かるとおり、この目的を効果的に果たすのは、ただ信仰だけです。私たちが、見えるものによらないで、信仰によって歩いている（第二コリント五・七）限り、聖性の道を速やかに進んでいくからです。見えるものにではなく、見えないものにしっかりと目を注いでいる（第二コリント四・一八）間、私たちはますます世に対して十字架につけられます。世も私たちに対して十字架につけられるのです。魂の目が、一時的なものにではなく、永遠のもの（第二コリント四・一八）に絶えず据えられてさえいるとします。そうすれば、私たちの思いは、ますます地上から解き放たれ、上にあるもの（コロサイ三・二）に据えられます。ですから、一般的な意味での信仰は、すべての真の義と聖（エペソ四・二四）とを推し進める、最も直接で効果的な手段です。聖なる霊的な律法を、信じる者の心に確立する手段なのです。

（三） また、信仰を、もっと特別な意味で、赦してくださる神への信頼ととるとします。私たちは、その信仰によって、神の律法を自分の心にさらに効果的に確立します。キリストにおける神の愛を感じることほど、神を愛するように私たちを強く傾ける動機はないからです。この愛を、心を刺し通すほど深く確信することほど、私たちのために与えられた方に、自分の心をささげさせるものはありません。そして、神への感謝の愛というこの原理から、兄弟への愛も生じます。神が私たちを愛してくださった、その愛を本当に信じるなら、私たちは隣り人を愛さないではいられません。さて、信仰と神への愛とに基づくこの人への愛は、「隣り人に害を加えることはない」のです（ローマ一三・一〇）。したがって、使徒が言うとおり、それは禁止の「律法」全体を「完成するもの」です（ローマ一三・一〇）。なぜなら、「姦淫するな、殺すな、盗むな」、偽証するな、「むさぼるな」など、「そのほかに、どんな戒めがあっても、結局『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』というこの言葉に帰する」からです（ローマ一三・九）。また、愛は、隣り人に悪を行わないだけでは満足しません。愛は、時と機会のあるごとに（ガラテヤ六・一〇）、善を行うよう、絶えず私たちを促します。できる限りのあらゆる種類の善を、できる限りのあらゆる程度で、すべての人に行うよう促すのです。ですから、愛は、神の禁止の律法だけでなく、命令の律法をも完成するものなのです。

（四） また、信仰は、禁止の律法も命令の律法も、外面の部分についてだけ果たすのではありません。信仰は、愛によって（ガラテヤ五・六）内側で働き、心をきよめ（使徒一五・九）、あらゆる卑しい情欲を心から取り除きます。この信仰を自分のうちに持つ人はみな、「彼がきよくあられるように、自らをきよく」します（第一ヨハネ三・三）。すなわち、地上のあらゆる肉的な欲望から、あらゆる卑しく度を越した情欲から、自らをきよくするのです。そうです、神に敵する肉の思い（ローマ八・七）全体から、きよくするのです。同時に、信仰が完全に働くなら、それはその人をあらゆる善意と正義と真実（エペソ五・九）とで満たします。信仰は、天のすべてをその人の魂にもたらします。そして、神が光の中にいますように、光の中を歩ませる（第一ヨハネ一・七）のです。

（五） このように、自分自身のうちに律法を確立するよう努めましょう。「恵みの下にある」（ローマ六・一五）からといって罪を犯すのではありません。むしろ、恵みによって受けるすべての力を、「すべての正しいことを成就する」（マタイ三・一五）ために用いるのです。神の御霊が私たちに罪を悟らせていた間、神からどんな光を受けたかを思い起こしましょう。そして、その光を消さないよう気をつけましょう。そのとき達し得たところ（ピリピ三・一六）を、しっかり保ちましょう。何ものにも動かされて、いったん打ちこわしたものを、再び建てる（ガラテヤ二・一八）ことのないようにしましょう。そのとき、神の栄光のためにも自分の魂の益のためにもならないと、はっきり分かったものがあります。大きなものでも小さなものでも、それを再び取り上げないようにしましょう。大小を問わず、そのとき良心に責められずには怠ることのできなかったことを、怠ることのないようにしましょう。以前に持っていた光を増し加え、完全にするために、今、信仰の光を加えましょう。神が以前に与えてくださった賜物を、確かなものにしましょう。神がそのとき示してくださったことを、さらに深く感じることによってです。良心をさらに敏感にし、罪をいっそう鋭く感じ取ることによってです。今、恐れではなく喜びをもって、永遠のものをはっきりと揺るがずに見つめて歩むとします。そのとき、私たちは、快楽も富も称賛も、地上のすべてのものを、水の上の泡のように見るでしょう。何も重要だとは思わず、何も望ましいとは思わず、何もよく考えるに値するとは思わないでしょう。ただ「幕の内」（ヘブル六・一九）、すなわちイエスが「神の右に座しておられる」（コロサイ三・一）ところにあるものだけは別です。

（六） あなたは神に向かって、「あなたは私の不義をあわれみ、もはや私の罪を思い出されません」（ヘブル八・一二）と言えるでしょうか。それなら、これからは、蛇の前から逃げるように、罪から逃げなさい！ 今のあなたには、罪が何とはなはだしく悪性なもの（ローマ七・一三）に見えることでしょう。どんな言葉でも言い表せないほど、何と憎むべきものに見えることでしょう。他方、あなたは今、神の聖く完全な御旨を、何と好ましい光のうちに見ていることでしょう！ ですから今、その御旨が、あなたのうちに、あなたによって、あなたの上に成就するよう励みなさい！ 今、目をさまして祈っていなさい（マタイ二六・

四一）。もう罪を犯さないように、神の律法へのどんな小さな違反をも見分けて避けるように、祈っていなさい。暗い所に日が差し込むと、以前は見えなかったちりが見えます。同じように、義の太陽（マラキ四・二）があなたの心に輝く今、以前は見えなかった罪が見えるのです。ですから今、受けた光に従って、あらゆる点で歩むよう、力の限りを尽くしなさい！　今、日ごとにさらに多くの光を受けるよう熱心になりなさい。神を知る知識と神への愛とを、キリストの御霊を、キリストのいのちとその復活の力（ピリピ三・一〇）とを、さらに多く受けるよう熱心になりなさい。今、すでに得た知識も愛もいのちも力も、すべて用いなさい。そうすれば、あなたは絶えず信仰から信仰へと進んでいきます。日ごとに聖い愛のうちに成長していきます。そしてついには、信仰は見ることのうちにのみ込まれ、愛の律法がとこしえに確立されるのです！

説教三十七　熱狂の性質

「フェストは大声で言った、『パウロよ、おまえは気が狂っている』」（使徒二六・二四）

（一）　世の人々はみな、神を知らない人々はみな、パウロと同じ宗教に属するすべての人について、そう言います。パウロがキリストにならう者であったように、パウロにならう者（第一コリント一一・一）となっている人について、だれでもそう言うのです。確かに、そのような非難を受けずに実践できる一種の宗教があります。いや、それもキリスト教と呼ばれているのです。それは、常識と矛盾しないと一般に認められている宗教です。すなわち、形式の宗教、外面の務めを、見苦しくなく規則正しく繰り返す宗教です。それに正統信仰、すなわち正しい意見の体系を加えてもかまいません。そうです、異教の道徳をいくらか加えてもかまいません。それでも、「宗教に凝りすぎて、おまえは狂ってしまった」と言いだす人は、多くないでしょう。けれども、あなたが心の宗教を目ざし、「義と、平和と、聖霊における喜びと」（ローマ一四・一七）について語るとします。そのときは、まもなく「おまえは気が狂っている」（使徒二六・二四）という判決が下されるでしょう。

（二）　これは、世の人々があなたにお世辞を言っているのではありません。このときばかりは、彼らは本気でそう言っているのです。彼らは、こう言い張るだけでなく、心から信じています。自分に「賜わっている聖霊によって、神の愛が」自分の「心に注がれている」（ローマ五・五）と言う人は、だれでも気が狂っている。神によって、キリストにあって「言葉につくせない、輝きにみちた喜び」（第一ペテロ一・八）をもって喜べるようにされた、と言う人も、気が狂っている。そう信じているのです。ある人が本当に神に生きていて（ローマ六・一一）、この地上のすべてのものに対して死んでいるとします。いつも見えないかたを見ていて（ヘブル一一・二七）、そのため、見えるものによらないで、信仰によって歩いている（第二コリント五・七）とします。そうなると、彼らはそれを明白なことと見なします。議論の余地なく、「宗教に凝りすぎて、あの男は狂ってしまった」と言うのです。

（三）　世が狂気と見なしているものが、はっきり何であるかは、すぐに分かります。それは、一時的なものをすべてまったく軽んじ、永遠のものをひたすら追い求めることです。まだ見ていない事実（ヘブル一一・一）についての、神から与えられる確信です。神の恵みを喜ぶこと、神への幸いな聖い愛です。そして、御霊が私たちの霊とともに、私たちが神の子であることをあかししてくださること（ローマ八・一六）です。それは、実のところ、イエス・キリストの宗教の霊と、いのちと、力とのすべてなのです。

（四）　とはいえ、ほかの点では、その人が正気の人のようにふるまい、話すことを、彼らも認めます。ほかのことでは道理をわきまえた人なのに、こういう点でだけ頭がおかしくなっている、と言うのです。ですから、その人がかかっている狂気は特別な種類のものだ、と認められています。そのため、彼らはふつう、それを特別な名で呼び分けます。「熱狂」という名です。

（五）　これは、きわめてひんぱんに使われる言葉です。ある人々の口からは、ほとんど離れることがありません。それなのに、この言葉が理解されていることはきわめてまれです。いちばんよく使う人々でさえ、理解していないのです。ですから、私がこの言葉の意味を説き明かし、熱狂とは何かを示そうと努めるなら、まじめな人々には受けいれてもらえるでしょう。自分が語り、聞くことを理解したいと願うすべての人にも、受けいれてもらえるでしょう。それは、不当に熱狂だと責められている人々の励ましになるかもしれません。正当に熱狂だと責められている人々にも、もしかすると役に立つかもしれません。少なくとも、警告されなければ、そう責められることになりかねない人々には、役に立つかもしれません。

（六）　言葉そのものについて言えば、それがギリシャ語に由来することは一般に認められています。けれども、そのギリシャ語エントゥーシアスモス（ἐνθουσιασμος）が何に由来するかは、まだだれも示すことができていません。これを、エン・テオー（ἐν θεῷ）、すなわち「神のうちに」から導こうとした人々もいます。熱狂はみな神にかかわるから、というのです。けれども、これはまったくのこじつけです。導かれる語と、そのもとだとされる語との間に、ほとんど似たところがないからです。また、これをエン・テュシアー（ἐν θυσίᾳ）、すなわち「いけにえのうちに」から導こうとする人々もいます。昔の熱狂者の多くは、いけにえをささげている間に、最も激しく心を揺さぶられたから、というのです。もしかすると、これは、そのように揺さぶられた人々のある者があげた声をもとに、作り出された語なのかもしれません。

（七）　このなじみにくい語が、これほど多くの言語にそのまま残されてきたのは、なぜでしょうか。その理由の一つは、人々が、その由来についてと同じく、その意味についても一致していなかったからでしょう。それは十分ありうることです。ですから、人々はこのギリシャ語をそのまま取り入れました。理解していなかったからです。自分の国の言葉に訳さなかったのは、どう訳せばよいか分からなかったからです。この語は、いつもしまりのない、あいまいな意味の語で、はっきりした意味が定められていなかったのです。

（八）　ですから、今日この語がさまざまにとられているのも、少しも驚くにはあたりません。人によって、互いにまったく相いれない、違う意味に理解しているのです。ある人々は、これを良い意味にとります。神から来る衝動や印象で、生れながらのどんな能力にもまさるもの、という意味です。それは、しばらくの間、理性も外の感覚も、全部または一部、停止させるのです。この意味でなら、昔の預言者たちも使徒たちも、まさしく熱狂者でした。彼らは、何度も御霊に満たされ、心に住まわれる方の影響を強く受けました。そのため、自分の理性も感覚も、生れながらのすべての能力も、働きを止められました。そして、まったく神の力に動かされ、ただ「聖霊に感じ」て「語った」のです（第二ペテロ一・二一）。

（九）　ほかの人々は、この語を良くも悪くもない意味、すなわち道徳的に善でも悪でもない意味にとります。そのように、詩人たちの熱狂、とりわけホメロスやウェルギリウスの熱狂ということを言います。近年亡くなった、ある著名な著述家は、この意味をさらに広げ、こう言いきるほどです。どんな職業であれ、その道ですぐれた人で、気質に熱狂の色を濃く帯びていない者はいない、と。この人々は、熱狂ということで、次のようなものを考えているようです。並はずれた思考の力、独特の霊の熱さ、ふつうの人には見られない活気と力です。それは、冷静な理性では届かなかったような、もっと大きく高いものへと魂を引き上げるのです。

（一〇）　けれども、そのどちらも、「熱狂」という語が最もふつうに理解されている意味ではありません。たいていの人は、それ以上には一致していないとしても、少なくとも、熱狂は何か悪いものだ、という点では一致しています。心の宗教を「熱狂」と呼ぶ人々がみなそう考えていることは、明らかです。ですから、私も以下では、熱狂を悪いものとして扱います。過ちとは言わないまでも、不幸として扱うのです。

（一一）　熱狂の性質について言えば、それは疑いもなく心の病です。しかも、理性の働きを大いに妨げる病です。いや、ときには理性をまったく退けてしまいます。悟りの目をかすませるだけでなく、閉ざしてしまうのです。ですから、熱狂は狂気の一種と見なしてよいでしょう。愚かさではなく、狂気です。愚か者とは、本来、正しい前提から誤った結論を引き出す者だからです。それに対して、狂人は正しい結論を引き出しますが、誤った前提から引き出すのです。熱狂者もそうです。その人の前提が正しいと仮定するなら、その結論は必ず導かれるでしょう。けれども、ここにその人の誤りがあります。前提がまちがっているのです。その人は、自分でないものを自分だと思い込んでいます。ですから、出発点がまちがっているので、遠くへ進めば進むほど、ますます道からそれていくのです。

（一二）　ですから、熱狂者はみな、まさしく狂人です。けれども、その狂気はふつうの狂気ではなく、宗教的な狂気です。「宗教的な」と言っても、それが宗教の一部だという意味ではありません。まったく逆です。宗教とは健全な心の

霊です。ですから、あらゆる種類の狂気と真っ向から対立するのです。そうではなく、それが宗教を対象にしている、宗教にかかわっている、という意味です。ですから、熱狂者はたいてい、宗教について、神について、神のことについて話しています。けれども、その話し方を聞けば、道理をわきまえたクリスチャンならだれでも、その人の心の病を見分けることができるのです。そこで、熱狂一般は、たとえば次のように言い表せるでしょう。熱狂とは、神からの影響や霊感を誤って思い込むことから生じる、宗教的な狂気である。少なくとも、神に帰すべきでないことを神に帰したり、神に期待すべきでないことを神に期待したりすることから生じる、宗教的な狂気である、と。

（一三）熱狂には、数えきれないほどの種類があります。そのうち、最もよく見られ、そのために最も危険なものを、いくつかの大きな項目にまとめてみようと思います。そうすれば、もっと理解しやすく、避けやすくなるでしょう。

私が最初に挙げる熱狂は、持っていない恵みを持っていると思い込む人々の熱狂です。たとえば、ある人々は、実際はそうでないのに、キリストによるあがない、「すなわち、罪のゆるし」（コロサイ一・一四）を受けていると思い込みます。こういう人々は、たいてい「自分の中に根がない」（マルコ四・一七）人々です。深い悔い改めも、徹底した罪の自覚もないのです。ですから、彼らは「御言を」、「喜んで受ける」のです（マルコ四・一六）。そして、「土が深くないので」（マタイ一三・五）、すなわち心の中に深いわざがないので、種は「すぐ芽を出」すのです（マルコ四・五）。すぐに、うわべの変化が起こります。この変化は、あの軽い喜びと一緒になり、砕かれていない心の高ぶりや、度を越した自己愛と結びつきます。そして、自分たちはもう「神の良きみ言葉と、きたるべき世の力とを味わった」（ヘブル六・五）と、たやすく思い込ませるのです。

（一四）これは、まさしく第一の種類の熱狂の例です。本当は持っていない恵みを持っていると思い込むことから生じる、一種の狂気です。ですから、彼らはただ自分の魂を欺いているにすぎません。これを狂気と呼ぶのは正当です。このあわれな人々の推論は、前提が確かなら、筋が通っているからです。けれども、前提はただ自分の想像が生み出したものにすぎません。ですから、その上に築かれたものは、みな崩れ落ちるのです。彼らの空想すべての土台は、これです。自分はキリストを信じる信仰を持っている、と思い込んでいることです。もし本当にこの信仰を持っていたなら、彼らは神のための王、また「祭司」（黙示録一・六）となるでしょう。「震われない国」（ヘブル一二・二八）を持つ者となるでしょう。けれども、彼らはそれを持っていません。ですから、それに続く彼らのふるまいは、みな真実からも正気からもかけ離れています。自分を地上の王だと思い込み、王になりきって話したりふるまったりする、ふつうの狂人と同じです。

（一五）この種の熱狂者は、ほかにもたくさんいます。たとえば、宗教のために燃え立つ熱心家がそうです。もっと正確に言えば、自分が宗教という名で飾り立てている意見や礼拝の様式のために燃え立つ人です。この人も、自分はイエスを信じる者だと強く思い込んでいます。そうです、自分こそ、聖徒たちに「ひとたび伝えられた信仰」（ユダ三）のために戦う闘士だ、と思い込んでいるのです。ですから、その人のふるまいはみな、そのむなしい思い込みの上に形づくられています。その人の想定が正しいと認めるなら、そのふるまいにも、まずまずの言い分があるでしょう。けれども実際には、そのふるまいは明らかに、病んだ心と病んだ頭とから生じているのです。

（一六）けれども、この種の熱狂者の中で最もよく見られるのは、自分をクリスチャンだと思い込んでいて、実はそうでない人々です。こういう人々は、私たちの国の至るところにいるだけでなく、人の住む地のほとんどどこにでも大勢います。神の言（ローマ三・二）を信じるなら、彼らがクリスチャンでないことは、明白で否定のしようがありません。なぜなら、クリスチャンは聖いのですが、この人々は聖くありません。クリスチャンは神を愛しますが、この人々は世を愛します。クリスチャンはへりくだっていますが、この人々は高ぶっています。クリスチャンは穏やかですが、この人々は怒りっぽいのです。クリスチャンはキリストのうちにあった思いを持っていますが、この人々はそれから最も遠く離れています。ですから、彼らは、天使のかしらでないのと同じように、クリスチャンでもありません。それなのに、彼らは自分がクリスチャンだと思い込んでいます。そして、その理由をいくつも挙げることができます。物心ついたときからずっと、クリスチャンと呼ばれてきた。何年も前に洗礼を受けた。キリスト教

の意見、俗にキリスト教の信仰とか公同の信仰とか呼ばれているものを奉じている。父祖たちと同じように、キリスト教の礼拝の様式を守っている。近所のほかの人々と同じように、いわゆる善良なクリスチャンの生活を送っている、というのです。それなら、この人々がクリスチャンでないなどと、だれがあえて考えたり言ったりするでしょうか。たとえ、キリストを信じる真の信仰も、本当の内なる聖性も、一粒も持っていなくてもです。神の愛を味わったことも、「聖霊にあずかる者と」なったこと（ヘブル六・四）も、一度もなくてもです！

（一七）ああ、自分を欺くあわれな人々よ。あなたがたはクリスチャンではありません。けれども、あなたがたは、はなはだしい熱狂者です。医者たちよ、自分自身をいやしなさい（ルカ四・二三）。けれども、まず自分の病を知りなさい。あなたがたの生活全体が熱狂なのです。それはすべて、持っていない神の恵みを受けている、という思い込みに合わせたものだからです。この大きな誤りのために、あなたがたは来る日も来る日も、まごつきながら進んでいきます。自分にまったくふさわしくない役柄のままで、話し、ふるまっているのです。そこから、あなたがたのふるまい全体を貫く、あの見え透いた、ひどい矛盾が生じます。それは、本物の異教と想像上のキリスト教とを、ぎこちなく混ぜ合わせたものです。それでも、あなたがたには圧倒的な多数が味方しているので、ただ数の力で、いつも押し通すでしょう。「正気なのは自分たちだけで、自分たちのようでない者はみな気が狂っている」と。けれども、それでものごとの本質が変わるわけではありません。神と聖なる御使たちの目から見れば、あなたがたはみな、まったくの狂人、まったくの熱狂者です。そうです、地上のすべての神の子たちの目から見ても、そうなのです。あなたがたは、そうではありませんか。「影のように、さまよ」っている（詩篇三九・六）のではありませんか。宗教の影、幸いの影の中を、さまよっているのではありませんか。あなたがたは今も、不幸のことで「むなしい事のために騒ぎまわ」っている（詩篇三九・六）のではありませんか。その不幸は、あなたがたの幸いや宗教と同じく、想像上のものにすぎないのです。あなたがたは、自分が偉い者だ、善い者だと、とても物知りで、とても賢い者だと、思い込んでいるのではありませんか。いつまでそうしているのですか。おそらく、死があなたがたを正気に引き戻し、自分の愚かさを永遠に嘆かせるときまででしょう！

（一八）第二の種類の熱狂は、神から受けていない賜物を受けていると思い込む人々の熱狂です。たとえば、ある人々は、自分には奇跡を行う力が授けられていると思い込みました。一言で、あるいは手を触れて病人をいやし、盲人の目を見えるようにする力です。そうです、死人をよみがえらせる力さえ授けられていると思い込んだのです。その悪名高い例は、私たちの国の歴史に、まだ記憶に新しく残っています。また、ある人々は、預言すること、すなわち将来のことを予告することを企てました。しかも、この上なく確実に、正確に予告しようとしたのです。けれども、たいていは、しばらくたてば、この熱狂者たちも思い知ります。明白な事実が予告と食い違うと、理性にはできなかったことを経験がなしとげ、彼らを正気に引き戻すのです。

（一九）同じ部類に入るのは、説教や祈りのときに、実際にはそうでないのに、神の御霊にそのように動かされていると思い込む人々です。確かに、私もよく分かっています。神を離れては、私たちは何一つできません（ヨハネ一五・五）。公の務めにおいては、なおさらそうです。私たちの説教は、神の力が伴わなければ、すべてまったくむなしいものです。私たちの祈りも、神の御霊が祈りのうちに弱い私たちを助けてくださる（ローマ八・二六）のでなければ、すべてむなしいのです。私は知っています。御霊によって説教し、祈るのでなければ、それはみな、むだ骨にすぎません。地上でなされる助けは、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる（第一コリント一二・六）神が、ご自分でなさるからです。けれども、このことは、いま扱っている問題には影響しません。神の御霊の本当の影響があるとはいえ、想像上の影響もあるのです。そして、一方を他方と取り違える人が大勢います。多くの人は、実際にはそうでないのに、その影響がまったく及んでいないのに、自分はその影響のもとにあると思っています。また、ほかの多くの人は、実際以上にその影響を受けていると思っています。残念ながら、その中には、自分の語る言葉そのものを神が口授してくださると思い込む人々も、みな含まれていると思います。そういう人々は、だから自分が何かまちがったことを語るはずはない、内容においても語り方においても、と思い込

んでいるのです。今世紀に、この種の熱狂者もどれほど多く現れたかは、よく知られています。そのある者は、聖パウロやどの使徒よりも、はるかに権威ありげに語るのです。

（二〇）同じ種類の熱狂は、程度は低いとしても、公の務めを持たない人々にもよく見られます。こういう人々も同じように、実際にはそうでないのに、御霊に動かされ、導かれていると思い込むことがあります。私も認めます。「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのもの」ではありません（ローマ八・九）。また、私たちが正しく考え、語り、行うことがあるとすれば、それはあのほむべき御霊の助けによるのです。けれども、理性の根拠も聖書の根拠もないのに、御霊に物事を帰したり、御霊に物事を期待したりする人が、何と多いことでしょう。そういうのは、神から個々の指図を受けている、あるいは受けるだろうと思い込む人々です。大切な点についてだけでなく、どうでもよいことについても、生活の最もささいな事情についてもです。けれども、こうした場合には、神は私たち自身の理性を導き手として与えてくださっているのです。とはいえ、それは御霊のひそかな助けを決して締め出すものではありません。

（二一）この種の熱狂に特に陥りやすいのは、まさに尋常でないと言うべき仕方で、神に導かれることを期待する人々です。霊的なことであれ日常の生活であれ、そう期待するのです。すなわち、幻や夢によって、心への強い印象や突然の衝動によって、導かれることを期待する人々です。神が昔、このような仕方で御旨を示されたことを、私は否定しません。今もそうすることがおできになることも否定しません。いや、ごくまれな場合には、今もそうしておられると信じています。けれども、人々はこの点で、何とたびたび誤ることでしょう。高ぶりと熱した想像力に惑わされて、神にまったくふさわしくない衝動や印象、夢や幻を、何と神に帰してしまうことでしょう。これはみな、まったくの熱狂です。真実からも正気からもかけ離れているのと同じように、宗教からもかけ離れているのです。

（二二）ある人は、こう尋ねるかもしれません。「それなら、私たちは、すべてのことにおいて、神の御旨は何かを尋ね求めるべきではないか。神の御旨こそ、私たちの行いの規則であるべきではないか」。確かに、そうあるべきです。けれども、冷静なクリスチャンは、神の御旨が何かを知るために、どのようにこの尋ね求めをすればよいのでしょうか。超自然的な夢を待つことによってではありません。神が幻のうちに御旨を示してくださるのを期待することによってでもありません。心に何か特別な印象や突然の衝動が来るのを待ち望むことによってでもありません。そうではなく、神の言（ローマ三・二）に尋ねることによってです。「教とあかしと」（イザヤ八・二〇）に求めなさい。これが、聖であって「神に喜ばれ」る「御旨」（ローマ一二・二）を知る、一般的な方法です。

（二三）「けれども、これこれの特定の場合に、神の御旨が何であるかを、私はどうやって知ればよいのか。持ちかけられていることは、それ自体としては良くも悪くもない性質のもので、だから聖書でも決められていないのだ」。私は答えます。聖書そのものが、あらゆる特定の場合にあてはまる一般的な規則を、あなたに与えています。「神のみこころは」、私たちが「清くなることである」（第一テサロニケ四・三）という規則です。私たちが内にも外にも聖くなること、それが神の御旨です。あらゆる種類において、私たちにできる最高の程度において、善い者となり、善を行うこと、それが神の御旨なのです。ここまでは、私たちは確かな地盤の上を歩いています。これは、太陽の輝きのように明らかです。ですから、特定の場合に神の御旨が何であるかを知るには、この一般的な規則をあてはめさえすればよいのです。

（二四）たとえば、道理をわきまえた人に、結婚する、あるいは新しい仕事を始める、という話が持ちかけられたとします。その人は、「私についての神の御旨は、私ができるだけ聖くなり、できるだけ多くの善を行うことだ」と確信しています。それなら、これが神の御旨かどうかを知るには、どうすればよいでしょうか。ただ「どちらの身分でいるほうが、私はいちばん聖くなり、いちばん多くの善を行えるか」と問いさえすればよいのです。そして、これは、一つには理性によって、一つには経験によって決められます。経験は、善い者となるためにも善を行うためにも、今の身分にどんな利点があるかを教えます。理性は、持ちかけられた身分になれば、どんな利点が確実に、あるいはおそらく得られるかを示すのです。その人は、これらを比べて、二つのうちどちらが、自分が善い者

となり善を行うのに最も役立つかを判断すればよいのです。そして、それが分かる限りにおいて、神の御旨が何であるかも確かに分かるのです。

（二五）その間、この尋ね求めの過程全体を通じて、神の御霊の助けがあることが前提されています。実際、その助けがどれほど多くの仕方で与えられるかは、簡単には言えません。御霊は、多くの事情を私たちに思い出させてくださるかもしれません。ほかの事情を、もっと強く、はっきりした光の中に置いてくださるかもしれません。知らず知らずのうちに私たちの心を開いて確信を受けいれさせ、その確信を心にしっかり据えてくださるかもしれません。そして、御前に喜ばれることを支持する、こうした多くの事情が重なることがあります。御霊はそこに、言葉にできない心の平安と、並はずれた量の神の愛とを加えてくださるかもしれません。それは、これこそ、まさにこれこそ、私たちについての神の御旨だと、疑う余地をまったく残さないほどの平安と愛です。

（二六）これが、特定の場合に神の御旨が何であるかを知る、平明で、聖書にかない、理にかなった道です。けれども、この道がどれほどまれにしかとられないかを考えてください。また、聖書にかなわない、理に合わない方法で神の御旨を知ろうとする人々がいます。その人々に、どれほどの熱狂が洪水のように押し寄せるに違いないかを考えてください。それを考えると、「神の御旨」という言い方そのものを、もっとずっと控えめに使ってほしいものです。ある人々のように、最もつまらない場合にこの言い方を使うのは、第三の戒めをはっきり破ることです。それは、神の名をみだりに唱える（出エジプト二〇・七）ひどいやり方であり、神へのはなはだしい不敬を表しています。それなら、そのような非難を受けるおそれのない、ほかの言い方を使うほうが、はるかによいのではないでしょうか。たとえば、何かの場合に、「神の御旨が何かを知りたい」と言うとします。その代わりに、こう言うほうが、よいのではないでしょうか。「何が私の成長にいちばん役立つか、何をすれば私がいちばん役に立つ者になれるかを知りたい」。この言い方は明快で、非の打ちどころがありません。それは、問題を平明で聖書にかなった論点の上に置くことです。しかも、熱狂に陥る危険がまったくないのです。

（二七）第三の、非常によく見られる種類の熱狂は、手段を用いずに、神の直接の力によって目的を達しようと考える人々の熱狂です。もっとも、これは前の種類と重なるかもしれませんが。確かに、摂理によってその手段が与えられていないのなら、彼らはこの非難にはあたらないでしょう。このような場合、神はご自分の直接の力を働かせることがおできになり、ときには実際にそうなさいます。けれども、その手段を持っていながら用いようとせず、神の直接の力を期待する人々は、まさしく熱狂者です。たとえば、聖書を読まず、思いめぐらしもしないで、聖書を理解できると期待する人々がそうです。そうです、自分の手の届く助け、その目的におそらく役立つ助けを、すべて用いることもしないで、理解できると期待する人々です。また、公の集会で、わざと何の準備もせずに語る人々もそうです。「わざと」と言うのは、ときには、そうせざるをえない事情もありうるからです。けれども、益になるように語るためのあの大切な手段を軽んじる人は、だれでも、その限りにおいて熱狂者です。

（二八）ある人々が第四の種類の熱狂と見なしてきたものを、私が挙げることを期待されるかもしれません。すなわち、神の摂理によらないことを、神の摂理によると思い込むことです。けれども、私は疑問に思います。神の摂理によらないものとは、どんなものなのか、私には分かりません。摂理が、直接にも間接にも、それを定めること、少なくとも治めることにかかわっていないものなど、私は知らないのです。私は、罪のほかには何も例外としません。そして、ほかの人々の罪の中にさえ、私に対する神の摂理を見るのです。私は、神の一般的な摂理と言っているのではありません。それは、響きはよくても何の意味もない言葉だと思うからです。そして、もし個別の摂理があるなら、それはすべての人、すべてのものに及ぶはずです。主もそのように理解しておられました。そうでなければ、主は決して、「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている」（マタイ一〇・三〇）とは言われなかったでしょう。また、すずめについて、こうも言われなかったでしょう。天にいます「あなたがたの父の」御旨「がなければ、その一羽も地に落ちることはない」（マタイ一〇・二九）。けれども、もしそうだとします。すなわち、神は次のように治めておられるとします。universis tanquam singulis, et singulis tanquam universis（全宇宙を一人の人のように、一人の

人を全宇宙のように）そうなら、私たち自身の罪だけを除いて、私たちが神の摂理に帰してはならないものとは、いったい何でしょうか。ですから、ここに熱狂という非難の入る余地があるとは、私には思えません。

（二九）ある人は、非難はこの点にあるのだ、と言うかもしれません。「あなたがこれを摂理に帰するとき、あなたは自分を天の特別なお気に入りだと思い込んでいるのだ」。私は答えます。あなたは、私がつい先ほど語った言葉の一部を忘れています。Praesidet universis tanquam singulis.（神の摂理は、どの一人の人の上にも及んでいるのと同じだけ、宇宙のすべての人の上に及んでいる）これを信じて、自分の身に起こることを何でも摂理に帰する人がいます。その人は、天の下のすべての人も同じように天のお気に入りだと考えています。ですから、摂理に帰しても、自分だけを天のお気に入りにしているわけではありません。それが分からないのですか。ですから、この理由で、その人を熱狂だと責める口実は、あなたにはまったくないのです。

（三〇）私たちは、あらゆる種類の熱狂に対して、細心の注意を払って身を守らなければなりません。熱狂がこれまでたびたび生み出してきた恐ろしい結果を、考えるべきです。実際、それは熱狂から自然に生じる結果なのです。熱狂がじかに生み出すのは高ぶりです。熱狂は、自分が流れ出てくるこの源を、絶えず大きくします。こうして、熱狂は私たちを、神の恵みから、また神のいのちから、ますます遠く離れさせる（エペソ四・一八）のです。熱狂は、信仰と愛との、真の義と聖と（エペソ四・二四）の泉そのものを、干上がらせます。これらはみな、恵みから流れ出るものだからです。けれども、「神は高ぶる者をしりぞけ」、ただ「へりくだる者に恵みを賜う」のです（ヤコブ四・六）。

（三一）高ぶりとともに、忠告を受けつけず、説得にも応じない心が、自然に生じます。ですから、熱狂者がどんな誤りや過ちに陥っても、立ち直る望みはほとんどありません。自分はもっと高い導き手に、すなわち神の直接の知恵に導かれている、と思い込んでいる人がいます。たびたび、また正しくも指摘されてきたとおり、そういう人には、理性はほとんど重みを持たないからです。そして、高ぶりが増すにつれて、その人は忠告を受けつけなくなり、かたくなにもなっていくほかありません。ますます納得させることができなくなり、説得に応じなくなります。ますます自分の判断と自分の意志に固執し、ついには、まったく凝り固まって動かなくなってしまうのです。

（三二）こうして、その人は、神の恵みに対しても、人からのあらゆる忠告や助けに対しても、守りを固めてしまいます。そのため、まったく自分の心の導きにゆだねられ、すべての誇り高ぶる者の王（ヨブ四一・三四）の導きにゆだねられてしまうのです。ですから、その人が日ごとにますます根を下ろし、そこに立つようになるのも不思議ではありません。すべての人へのさげすみに、激しい怒りに、あらゆる不親切な性向に、あらゆる地につく、悪魔的な気質に、です。また、そういう性向から、どの時代にも恐ろしい外面の結果が流れ出てきたのも、不思議ではありません。すなわち、自分をクリスチャンと呼ぶ人々が犯してきた、あらゆる種類の悪、あらゆるやみのわざ（ローマ一三・一二）です。彼らは、異教徒の間でさえほとんど口にされないようなことを、むさぼるように行ってきたのです。

以上が、熱狂という、多くの頭を持つ怪物の性質であり、その恐ろしい結果です。そこで今、これを考えたことから、私たち自身の実践について、いくつかの明白な結論を引き出すことができます。

（三三）第一に、熱狂という言葉は、これほどひんぱんに使われながら、これほどまれにしか理解されていないとします。それなら、自分の知らないことについて話さないように気をつけなさい。理解するまでは、この言葉を使わないようにしなさい。ほかのすべての点と同じように、この点でも、話す前に考えることを学びなさい。まず、この難しい言葉の意味を知りなさい。そのうえで、必要があれば使いなさい。

（三四）けれども、この暗くあいまいな言葉を理解している人は、教育と学問のある人々の中でさえ、これほど少ないとします。その意味について定まった考えを持っている人も、これほど少ないとします。ふつうの人々の中では、まして少ないとします。それなら、第二に、うわさだけで、だれかを熱狂者だと判断したり、呼んだりしないように気をつけなさい。うわさは、だれかに非難の名をつける十分な根拠には決してなりません。まして、これほどひどい非難の言葉をつける根拠には、なおさらなりません。その言葉が含む悪が大きければ大きいほ

ど、だれかにそれをあてはめるときには、ますます慎重であるべきです。十分な証拠もなしに、これほど重い告発をするのは、正義にもあわれみにもかなわないからです。

（三五）けれども、熱狂がこれほど大きな悪なら、あなた自身がそれに巻き込まれないように気をつけなさい。誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい（マタイ二六・四一）。熱狂は、神を恐れる人や神を愛する人に、たやすくまとわりつきます。ああ、思うべき限度を越えて思いあがる（ローマ一二・三）ことのないように気をつけなさい。達していない神の恵みに達したと思い込んではなりません。あなたには大きな喜びがあるかもしれません。ある程度の愛があるかもしれません。それでも、生きた信仰を持っていないことがありうるのです。神に叫び求めなさい。盲目のあなたが道からそれるのを、神が許されないように、と祈るのです。また、自分をキリストを信じる者だと決して思い込まないように、と祈るのです。キリストがあなたの内に啓示される（ガラテヤ一・一六）までは、そう思い込まないように祈るのです。神の御霊があなたの霊とともに、あなたが神の子であることをあかししてくださる（ローマ八・一六）までは、です。

（三六）燃え立って人を迫害する熱狂者にならないように気をつけなさい。神があなたを召されたのは、人のいのちを滅ぼすためであって、救うためではない、などと思い込んではなりません。それは、あなたが主人と呼ぶ方の霊とは、まったく正反対です。人を力ずくで神の道に入らせようなどとは、夢にも思ってはなりません。自分で考え、人にも考えさせなさい。宗教のことでは、強制を用いてはなりません。道から最も遠く離れている人々でさえ、理性と真理と愛による以外の方法で、決して無理やりに連れて来ようとしてはなりません。

（三七）ありふれた熱狂者の群れと一緒になって、クリスチャンでないのにクリスチャンだと思い込むことのないように気をつけなさい。その尊い名を名のる、はっきりした聖書の資格があるのでなければ、あえてその名を名のってはなりません。キリストのうちにあった思いを持ち、キリストが歩かれたように歩く（第一ヨハネ二・六）のでなければ、名のってはならないのです。

（三八）第二の種類の熱狂、すなわち神から受けていない賜物を受けていると思い込む熱狂に陥らないように気をつけなさい。幻や夢を、どんな種類のものであれ突然の印象や強い衝動を、頼りにしてはなりません。思い起こしなさい。特定の場合に神の御旨が何かを知るのは、こういうものによってではありません。聖書の平明な規則をあてはめることによってです。経験と理性の助けと、神の御霊のふつうの助けとを受けて、あてはめるのです。軽々しく神の名を口にしてはなりません。どんなつまらない場合にも神の御旨を口にする、ということをしてはなりません。行いと同じように、言葉もみな、敬いと、恐れかしこむ心（ヘブル一二・二八）とで、ととのえなさい。

（三九）最後に、目的に役立つ手段を用いずに、目的を達するだろうと思い込まないように気をつけなさい。神は、何の手段もなしに目的を与えることがおできになります。けれども、神がそうなさるだろうと考える理由は、あなたにはありません。ですから、神がご自分の恵みのふつうの通り道として定められた手段を、すべて絶えず注意深く用いなさい。理性か聖書が勧める手段は、すべて用いなさい。それは、神の賜物のどれかを得たり増したりするのに役立つものとして、勧められている手段です。ただし、役立つのは、キリストにある神の価なしの愛によってです。そのようにして、あの清く聖い宗教のうちに、日ごとに成長することを期待しなさい。世は、この宗教をいつも「熱狂」と呼んできましたし、これからもいつもそう呼ぶでしょう。けれども、本当の熱狂から、名ばかりのキリスト教から救われたすべての人にとっては、この宗教は「神の知恵」であり「神の力」です（第一コリント一・二四）。いと高き方の栄光あるかたちであり、「義と、平和」（ローマ一四・一七）です。「永遠のいのちに至る水が、わきあがる」（ヨハネ四・一四）、生ける水の泉なのです！

説教三十八　偏狭への戒め

「ヨハネがイエスに言った、『先生、わたしたちについてこない者が、あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました』。イエスは言われた、『やめさせないがよい』」（マルコ九・三八～三九）

（一）　この前の節に、こう書かれています。十二弟子が「だれが一ばん偉いか」（マルコ九・三四）と論じ合っていたあとのことです。イエスはひとりの幼な子をとりあげて、彼らのまん中に立たせ、それを抱いて言われました（マルコ九・三六）。「だれでも、このような幼な子のひとりを、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのです。そして、わたしを受けいれる者は、わたしを」受けいれるだけ「ではなく、わたしをおつかわしになったかたを受けいれるのです」（マルコ九・三七）。そこで「ヨハネが答えて」（ルカ九・四九）、すなわち、主がその直前に語られたことを受けて、こう言いました。「先生、」ある者が「あなたの名を使って悪霊を追い出しているのを見ましたが、その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」（マルコ九・三八）。まるで、こう言ったかのようです。「私たちは、その人を受けいれるべきだったのでしょうか。その人を受けいれたら、あなたを受けいれたことになったのでしょうか。むしろ、やめさせるべきだったのではありませんか。私たちは、それでよかったのではありませんか」。けれども、イエスは「やめさせないがよい」（マルコ九・三九）と言われました。

（二）　同じ出来事は、聖ルカも、ほとんど同じ言葉で記しています（ルカ九・四九～五〇）。けれども、こう尋ねる人がいるかもしれません。「それが私たちに何のかかわりがあるのか。今では、悪霊を追い出す者などだれもいないではないか。そうする力は、千二百年か千四百年も前から、教会から取り去られているではないか。それなら、ここに持ち出されている事例に、また、それに対する主の判断に、私たちがどうかかわるというのか」。

（三）　おそらく、ふつう考えられている以上に、深くかかわっているのです。持ち出されている事例は、決して珍しい事例ではないからです。私たちがそこから十分な益を刈り取れるように、私は次のことを示すつもりです。

第一に、今、人はどういう意味で悪霊を追い出すことができ、また実際に追い出しているのか。

第二に、「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）ということを、どう理解すればよいのか。

第三に、主の指図「やめさせないがよい」（マルコ九・三九）を説き明かします。

そして、全体から一つの結論を引き出して結びとします。

【一】　今、人はどういう意味で悪霊を追い出すのか

（一）　第一に、今、人はどういう意味で悪霊を追い出すことができ、また実際に追い出しているのかを示します。

このことを最もはっきり見るために、思い起こすべきことがあります。聖書の記すところによれば、神が光の子らのうちに住み、働かれるように、悪魔はやみの子らのうちに住み、働いているのです。聖霊が善い人々の魂を占めておられるように、悪の霊は悪人たちの魂を占めています。そこで、使徒は悪魔を「この世の神」（第二コリント四・四）と呼んでいます。世の人々に対して、悪魔がだれにも抑えられない力を持っているからです。そこで、ほむべき主も悪魔を「この世の君」（ヨハネ一二・三一）と呼ばれます。それほど、この世に対する悪魔の支配は絶対的なのです。そこで、聖ヨハネもこう言います。「わたしたちは神から出た者であり」、神から出ていないすべての人、すなわち「全世界は」エン・トー・ポネーロー・ケイタイ（ἐν τῷ πονηρῷ κεῖται）であることを、「知っている」（第一ヨハネ五・一九）のです。これは、悪のうちに横たわっている、とい

う意味ではありません。「悪しき者の」うちに横たわっている、という意味です。世のものでない人々が神のうちに生き、動いているように、彼らは悪しき者のうちに生き、動いているのです。

（二）というのは、悪魔は、「ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」（第一ペテロ五・八）者とだけ考えてはならないからです。あわれな魂に不意に襲いかかり、自分の「欲するままに」（第二テモテ二・二六）とりこにして連れて行く、ずる賢い敵とだけ考えてもなりません。悪魔は、彼らのうちに住み、彼らのうちを歩む者です。この世のやみ、すなわち悪を支配する者です。この世とは、世の人々と、その暗いたくらみと行いのすべてのことです。悪魔は、彼らの心を占め続け、そこに自分の王座をすえ、すべての思いを自分に服従させることによって、支配するのです。こうして、「強い人が」、「武装して自分の」家「を守っている」（ルカ一一・二一）のです。この「汚れた霊が人から出る」（ルカ一一・二四）ことが、ときにはあるかもしれません。それでも、悪霊はたびたび戻ってきます。「自分以上に悪い」「七つの霊を」連れて戻り、「中にはいり、そこに住み込む」（ルカ一一・二六）のです。悪魔は、その住まいでなまけていることもできません。悪魔は、この「不従順の子らの中に」絶えず「働いている」（エペソ二・二）のです。力をもって、強大な勢いをもって、彼らのうちに働きます。彼らを自分に似た姿に変え、神のかたちの名残をすべてぬぐい去り、あらゆる悪い言葉と悪いわざへと備えさせるのです。

（三）ですから、この世の神であり君である者が、今も、神を知らないすべての人を占めていることは、疑う余地のない真理です。ただ、今、彼らを占めている仕方が、昔そうしていた仕方と違うだけです。当時は、魂だけでなく体もたびたび苦しめました。しかも、何の偽装もせず、あからさまに苦しめたのです。今は、まれな場合を除いて、魂だけを苦しめます。しかも、できるだけひそかに苦しめるのです。この違いの理由は明白です。当時、悪魔のねらいは人類を迷信に追い込むことでした。ですから、できるだけあからさまに働いたのです。けれども、今の悪魔のねらいは、私たちを不信仰に追い込むことです。ですから、できるだけひそかに働きます。隠れていればいるほど、ますます勝ちを得るからです。

（四）とはいえ、歴史家の言うことを信じてよいなら、今でも、悪魔が以前と同じようにあからさまに働いている国々があります。「しかし、なぜ未開で野蛮な国々でだけなのか。なぜイタリアやフランスやイギリスではないのか」。ごく明白な理由からです。悪魔は相手をよく知っていて、それぞれをどう扱えばよいかを知っているのです。ラップランド人には、素顔のまま現れます。彼らを迷信とひどい偶像礼拝に縛りつけておくことがねらいだからです。けれども、あなたがたに対しては、違うねらいを追っています。あなたがたに自分自身を偶像として拝ませることです。あなたがたを、自分の目に、神ご自身よりも、神の言（ローマ三・二）のすべてよりも、賢い者にすることです。ところで、そうするためには、悪魔は自分の姿で現れてはなりません。そんなことをすれば、自分のもくろみがくじかれてしまうからです。そうではありません。悪魔はあらゆる術を使って、あなたがたに自分の存在を否定させます。ついには、あなたがたを自分の場所にしっかり捕えてしまうまで、そうするのです。

（五）ですから、悪魔は、仕方こそ違え、どちらの国でも同じように絶対的に支配しています。陽気なイタリアの不信者も、荒々しいタタール人と同じように、しっかりと悪魔の牙にくわえられています。けれども、その不信者は獅子の口の中でぐっすり眠っています。獅子は賢いので、彼を眠りから覚ましたりはしません。ですから、獅子は今のところ彼をもてあそんでいるだけで、気が向けば、彼をのみ込んでしまうのです！

この世の神は、イギリス人の礼拝者を、ラップランドの礼拝者とまったく同じようにしっかり捕えています。けれども、彼らを驚かすことは、悪魔の仕事ではありません。驚かせば、彼らが天の神のもとへ逃げて行くかもしれないからです。ですから、やみの君は、自分から進んで従うこの臣下たちを支配している間、姿を現しません。征服者は、捕虜たちを、それだけいっそう確かに捕えています。捕虜たちが、自分は自由だと思い込んでいるからです。こうして、「強い人が」、「武装して自分の」家「を守って」いて、「その持ち物は安全」（ルカ一一・二一）なのです。理神論者も名ばかりのクリスチャンも、悪魔がそこにいる

ことを疑いもしません。ですから、悪魔と彼らは、互いにまったく平和に過ごしているのです。

（六）その間ずっと、悪魔は彼らのうちで力強く働いています。彼らの悟りの目をくらませるので、キリストの栄光の福音の光（第二コリント四・四）が、彼らを照すことができません。悪魔は、彼ら自身の卑しい情の鎖で、彼らの魂を地と地獄につなぎとめます。世への愛、金銭への愛、快楽への愛、称賛への愛によって、彼らを地に縛りつけます。また、高ぶり、ねたみ、怒り、憎しみ、復讐心によって、彼らの魂を地獄に近づかせます。彼らは悪魔が働いていることさえ知らないので、悪魔はそれだけ安心して、思うままに働くのです。

（七）けれども、その結果から、原因を何とたやすく知ることができるでしょう。その結果は、ときにはひどく、はっきり目に見えるものです。異教の国々のうちで最も洗練された国でも、そうでした。称賛され、徳が高いとされたローマ人を見るだけで十分です。学問と栄光の絶頂にあったときのローマ人が、どうであったかが分かるでしょう。「あらゆる不義と」淫行と「悪と貪欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、そしる者」、「不遜な者、高慢な者、大言壮語する者」、「親に逆らう者」、「不誠実、無情」、和らぎがたい者、「無慈悲な者となっている」（ローマ一・二九～三一）のです。

（八）この描写の最も強い部分は、ある人によって裏づけられています。ある人々には、もっと文句のつけようのない証人と思われるかもしれない人です。それは、彼らと同じ異教徒のディオン・カッシオスのことです。彼はこう述べています。カエサルがガリアから帰る前には、あらゆる種類の暴食と淫らさが、隠されもせず、あからさまに行われていた。偽りと不正と無慈悲が、家庭だけでなく公の法廷にもあふれていた。それだけでなく、このうえなく乱暴な強盗、略奪、殺人がローマの至るところであまりにも頻繁に起こった。そのため、遺言を書かずに外出する人はほとんどいなかった。生きて帰れるかどうか分からなかったからだ、と。

（九）今日の異教徒の、すべてとは言わないまでも多くの間でも、悪魔のわざは同じようにひどく、はっきり目に見えます。クリーク族、チェロキー族、チカソー族、そのほか、私たちの南部の植民地に接するすべてのインディアンの自然宗教があります。少数の個人の宗教ではなく、部族全体の宗教です。その宗教とは、捕虜をみな朝から晩まで拷問にかけ、ついには火あぶりにして殺すことです。また、ほんのささいな、悪気のない挑発を受けただけで、自分の同胞のだれであれ、後ろから近づいて撃ち殺すことです。そうです、彼らの間では、よくあることなのです。息子は、父親が長生きしすぎると思えば、その頭を打ち砕きます。母親は、子供たちに嫌気がさせば、その首に石をくくりつけ、三、四人を次々に川に投げ込むのです！

（一〇）このようなひどい、目に見える悪魔のわざを行ってきたのが、異教徒だけであればよかったのですが。けれども、私たちは、そうだとはとても言えません。残虐と流血においてさえ、クリスチャンは何と異教徒に引けを取っていないことでしょう。南アメリカで何千人もの人を虐殺したスペイン人やポルトガル人だけではありません。スペイン人に一歩一歩ならった、東インドのオランダ人や北アメリカのフランス人だけでもありません。私たちの同胞も、血にふけり、部族をまるごと絶滅させてきました。それによって、不従順の子らの中に住み、働いている（エペソ二・二）のがどんな霊であるかを、はっきり証明してきたのです。

（一一）こうした怪物たちのことを考えると、私たち自身の国で行われている悪魔のわざを、見過ごしてしまいそうになるかもしれません。けれども、ああ、この国でも、目を開けば、至るところにそれが見えてしまうのです。今も私たちの国の至るところに、こういう人々が見られます。いつも神の名をみだりに口にする者、酒に酔う者、不品行な者、姦淫する者、盗む者、強盗、男色をする者、人殺しです。これは、悪魔の力を示す小さな証拠でしょうか。この世の君（ヨハネ一二・三一）は、こうした不従順の子ら（エペソ二・二）のすべてのうちで、何と勝ち誇って支配していることでしょう！

（一二）悪魔は、それほどあからさまではなくても、同じように効果的に働いています。偽る者、告げ口する者、うそつき、中傷する者のうちにです。しいたげる者や暴利をむさぼる者、偽りの誓いをする者、自分の友や名誉や良心や祖国を売る者のうちにも働いています。それなのに、こうした人々が、今も宗教や

良心について、名誉や徳や公共心について語ることがあるのです。けれども、彼らが神を欺けないのと同じように、サタンを欺くこともできません。サタンもまた、自分の者たちを知っています。それは、あらゆる国民、民族のうちからの大ぜいの群衆で、今日、サタンは彼らを完全に占めているのです。

（一三）　このことを考えるなら、人が今も、どういう意味で悪霊を追い出すことができるかが、分からないはずはありません。そうです、キリストの教役者はみな、主のわざがその手によって栄える（イザヤ五三・一〇）なら、実際に悪霊を追い出しているのです。

その言葉に伴う神の力によって、教役者はこうした罪人を悔い改めに導きます。悔い改めとは、外だけでなく内も完全に変わること、あらゆる悪からあらゆる善へと変わることです。そして、これこそ、健全な意味で、悪霊を追い出すことです。悪霊がそれまで住んでいた魂から、追い出すのです。強い人は、もう自分の家を守ることができません。もっと強い者が襲ってきて（ルカ一一・二二）、彼を追い出し、その家を自分のものとし、御霊による神のすまい（エペソ二・二二）としたのです。ですから、ここでサタンの力は終わり、神の御子が「悪魔のわざを滅ぼして」（第一ヨハネ三・八）しまわれるのです。今や、罪人の悟りは照され、その心は神へと優しく引き寄せられます。その人の願いは高められ、情はきよめられます。そして、聖霊に満たされて、恵みのうちに成長します。ついには、心において聖いだけでなく、あらゆる行いにおいて聖なる者（第一ペテロ一・一五）となるのです。

（一四）　これはみな、まことに神のわざです。サタンを追い出すことがおできになるのは、神だけです。けれども、神はたいてい、人をご自分の手の道具として、これをなさることを喜ばれます。そのとき、その人は、神の名によって、神の力と権威によって、悪霊を追い出すと言われるのです。神は、この大きなわざに、ご自分がつかわそうと思われる者をつかわされます。けれども、それはたいてい、人が思いもよらなかったような者です。神の「道」は私たちの「道」とは異なり、神の「思い」は私たちの「思い」とは異なっている（イザヤ五五・八）からです。ですから、神は、強い者をはずかしめるために弱い者を選び、知者をはずかしめるために愚かな者を選ばれます（第一コリント一・二七）。その理由は明白です。栄光を確かにご自分のものとし、「どんな人間でも、神のみまえに誇ることがない」（第一コリント一・二九）ようにするためです。

【二】「わたしたちについてこない」の意味

（一）　けれども、このように「悪霊を追い出している」（マルコ九・三八）者でも、もし「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）なら、やめさせるべきではないでしょうか。これが、使徒の判断であり、行いでもあったようです。この事例を自分の主人にゆだねるまでは、そうだったのです。ヨハネは、「その人はわたしたちについてこなかったので、やめさせました」（マルコ九・三八）と言います。ヨハネは、それで十分すぎるほどの理由になると思っていたのです。この「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）という言い方を、どう理解すればよいか。これが、次に考えるべき点です。

これによって理解できる最も軽い事情は、その人が私たちと外面的なつながりを持っていない、ということです。私たちは、互いに協力して働いているのではありません。その人は、福音における私たちの協力者ではありません。実際、主が多くの働き人を収穫のために送り出す（マタイ九・三八）ことをよしとされるときがあります。そのときには、その全員が、互いに従属したり、つながったりして働くことはできません。いや、互いに個人的に知り合いになることも、互いに名を知られることさえも、できないのです。収穫の畑のあちこちには、どうしても、こういう働き人が大勢いることになります。互いに行き来がないどころか、まるで違う時代に生きていたかのように、まったく見知らぬ者どうしなのです。そして、私たちの知らないこうした人々のだれについても、疑いなく、「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）と言えるのです。

（二）　この言い方の第二の意味は、その人が私たちの党派に属していない、ということでしょう。エルサレムのために平安を祈る（詩篇一二二・六）すべての人にとって、長い間、悲しい思いで考えずにはいられないことがあります。みなクリスチャンと呼ばれている人々の間に、今もこれほど多くの党派が分かれて存在していることです。これは、とりわけ私たちの同胞に見られることでした。

彼らは、どうでもよい点をめぐって、しかもたびたび宗教とは何のかかわりもない点をめぐって、絶えず互いに分かれてきたのです。ごくささいな事情から、さまざまな党派が生まれ、それが何世代も続いてきました。そして、どの党派も、向こう側にいる人に対して、すぐに「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）と言って反対するでしょう。

（三） 第三に、この言い方は、その人が宗教上の意見において私たちと違っている、という意味かもしれません。すべてのクリスチャンが、心を一つにし思いを一つにしていた（使徒四・三二）ときがありました。彼らが初めて聖霊に満たされたとき、大きなめぐみが彼ら一同に注がれていた（使徒四・三三）のです。けれども、この祝福は何と短い間しか続かなかったことでしょう。あの一致は、何と早く失われたことでしょう。そして、キリストの教会の中にさえ、ふたたび意見の違いが生じました。しかも、名ばかりのクリスチャンではなく、本物のクリスチャンの間に生じたのです。いや、その最もおもだった人々、使徒たち自身の間にさえ生じたのです。そのとき始まった違いが、完全に取り除かれたことがあったとも思えません。神の宮のあの柱たちでさえ、地上にとどまっている間に、同じように考え、思いを一つにするようになったとは見えません。とりわけ、儀式律法についてはそうです。ですから、今、キリスト教会の中に限りなく多様な意見が見られるのも、少しも驚くにはあたりません。その結果として、大いにありうることがあります。だれかが「悪霊を追い出している」（マルコ九・三八）のを見るときにはいつも、その人がこの意味で「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）者だ、ということです。すなわち、私たちと意見が同じでない者だということです。その人が、すべての点で、宗教の点でさえ、私たちと同じ考えであるとは、ほとんど考えられません。重要な問題のいくつかについてさえ、その人は私たちと違う考え方をしている可能性が大いにあります。たとえば、道徳律法の性質と用途、神の永遠の聖定、神の恵みの十分さと効力、神の子たちの堅忍などです。

（四） 第四に、その人は、意見においてだけでなく、実践のある点においても、私たちと違っているかもしれません。私たちの会衆で行われている神の礼拝の仕方を、よしとしないかもしれません。カルヴァンやマルティン・ルターに由来する礼拝の仕方のほうが、自分の魂にとって益になると判断するかもしれません。私たちがほかの何よりも良いと認めている礼拝式文に、多くの異議を持っているかもしれません。私たちが使徒的で聖書的だと重んじている教会の統治の形に、多くの疑いを抱いているかもしれません。もしかすると、さらに私たちから遠ざかるかもしれません。良心の原則から、私たちがキリストの定めと信じているもののいくつかを、控えるかもしれないのです。あるいは、それが神に定められたものだという点では、私たちとその人の意見が一致するとします。それでも、その定めを執り行う仕方について、あるいはそれを授けるべき人について、なお違いが残るかもしれません。ところで、こうした違いのどれからも、避けられない結果が生じます。このように私たちと違う人は、その点について、私たちの交わりから離れざるをえないのです。ですから、この点で、その人は「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）のです。私たちの言い方をすれば、その人は私たちの教会に属していないのです。

（五） けれども、もっとずっと強い意味で「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）人もいます。違う教会に属しているだけでなく、私たちが多くの点で反聖書的、反キリスト教的と見なしている教会に属している人です。それは、教えにおいてまったく偽りで誤っており、実践においてもきわめて危険なほどまちがっている、と私たちが信じている教会です。偶像礼拝だけでなく、ひどい迷信の罪も犯している教会です。聖徒たちにひとたび伝えられた信仰（ユダ三）に、多くの信条を付け加えた教会です。神の戒めを一つまるごと落とし、ほかのいくつかの戒めを、その言伝えによって無にしてきた（マルコ七・一三）教会です。古代の教会を最も深く敬い、最も厳密にそれに従うと称している教会です。それなのに、古代にも聖書にも何の根拠もない、数えきれない新しいことを持ち込んできたのです。これほど私たちから遠く隔たっている人は、まったく確かに、「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）のです。

（六） けれども、これよりさらに大きな違いもありえます。判断や実践において私たちと違う人が、判断においてよりも、感情においてもっと遠く私たちから隔たっていることもありえます。実際、これは、判断の違いからきわめて自然に、きわめてよく生じる結果です。意見の点で始まった違いは、そこで終わるこ

とはめったにありません。たいていは感情にまで広がり、そうなると親しい友を離れさせる（箴言一六・二八）のです。また、宗教の不一致から生じる敵意ほど、深く、和解しがたい敵意はありません。そのために、人の最もひどい敵は、その家の者（マタイ一〇・三六）となるのです。そのために、父は自分の子に、子は父に逆らって立ち（マタイ一〇・二一）、ことによると互いに死に至るまで迫害し合います。しかもその間ずっと、自分たちは神に仕えているのだと思っている（ヨハネ一六・二）のです。ですから、次のようなことは、私たちが予想できることにすぎません。宗教上の意見や実践において私たちと違う人々が、やがて私たちに対して、とげとげしさを、いや、苦々しさを抱くようになることです。また、彼らが私たちにますます偏見を抱くようになることです。ついには、私たちの主義についてと同じように、私たちの人柄についても、悪い考えを抱くようになるのです。そうなれば、ほとんど必然的に、彼らは私たちについて考えているとおりに語るようになるでしょう。彼らは私たちに逆らって立ち、できる限り私たちのわざを妨げるでしょう。そのわざが、彼らには神のわざではなく、人のわざか悪魔のわざに見えるからです。このように考え、語り、ふるまう人は、最も強い意味で、「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）のです。

（七）確かに、本文で使徒が語っている人が、ここまで進んでいたとは、私は思いません。もっとも、その人については、前後の文脈にも、聖書のほかのどの箇所にも、詳しい記述はないのですが。その人と使徒たちとの間に何か大きな違いがあったと考える根拠は、何もありません。まして、その人が使徒たちやその主人に対して何か偏見を持っていたと考える根拠など、ありません。このことは、本文のすぐあとに続く主ご自身の言葉から、くみ取れるように思われます。「だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしることはできません」（マルコ九・三九）。けれども、私はわざと、この事例を最も強い光の中に置き、考えうるかぎりの事情をすべて加えました。誘惑がその全力で来ることをあらかじめ警告されて、どんな場合にもその誘惑に屈せず、神を敵にまわす（使徒五・三九）ことのないようにするためです。

【三】「やめさせないがよい」という主の指図

（一）それでは、ある人が私たちと何の行き来もないとします。私たちの党派に属していないとします。私たちの教会から離れているとします。そうです、判断においても実践においても感情においても、私たちと大きく違っているとします。それでも、そういう人でさえ「悪霊を追い出している」（マルコ九・三八）のを見るなら、イエスは「やめさせないがよい」（マルコ九・三九）と言われるのです。主のこの大切な指図を、第三に説き明かしたいと思います。

（二）「そういう人が悪霊を追い出しているのを見るなら」と言いました。けれども、そういう場合には、自分の目で見たことさえ信じられれば、自分の感覚をうそつき呼ばわりしなければ、上出来なのです。上に述べたすべての意味で、あるいはそのほとんどの意味で、「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）人がいるとします。その人が本当に悪霊を追い出していると信じることに、私たちがどれほどひどく気が進まないかは、すぐに分かるはずです。それが分からない人は、人間の本性をよく知らないに違いありません。いや、上の意味のどれか一つにおいてでも、と言いそうになりました。人は、すべての点で自分と一致しない人のうちに、何か良いものを認めることを、ひどく嫌がります。そのことは、自分の胸のうちで起こることからさえ、たやすく学べるからです。

（三）「しかし、ある人が（上に述べた意味で）悪霊を追い出していることの、十分で理にかなった証拠とは何か」。答えは簡単です。次のことに、十分な証拠があるでしょうか。

一、私たちの前にいるある人が、以前はひどい、あからさまな罪人だったこと。

二、その人が今はそうでなく、罪を断ち切って、クリスチャンの生活を送っていること。

三、この変化が、その人がこの人の説教を聞いたことによって生じたこと。

この三つの点が明白で否定できないなら、あなたには、この人が悪霊を追い出していることの、十分で理にかなった証拠があります。故意の罪を犯さずには逆らえない証拠です。

（四） それなら、「やめさせないがよい」（マルコ九・三九）のです。権威によってであれ、議論によってであれ、説得によってであれ、その人を妨げようとしないように気をつけなさい。神がその人に与えられた力をすべて用いることを、どんな仕方でも妨げようとしてはなりません。その人に対して権威を持っているなら、その権威を、神のわざを止めるために用いてはなりません。もうイエスの名によって語るべきでない理由を、その人に与えてはなりません。あなたがサタンに加勢しなくても、サタンは必ずそういう理由をその人に与えるでしょう。そのわざから離れるように、その人を説き伏せてはなりません。もしその人が悪魔とあなたに譲ってしまうなら、多くの魂が自分の悪のために滅びるかもしれません。けれども、神はその血を、あなたの手から求められるでしょう（エゼキエル三・一八）。

（五） 「しかし、悪霊を追い出しているのが、ただの信徒だったらどうなのか。それなら、やめさせるべきではないか」。

その事実は認められているでしょうか。この人が悪霊を追い出したこと、あるいは今追い出していることに、理にかなった証拠があるでしょうか。あるなら、その人をやめさせてはなりません。いいえ、自分の魂を危うくしたくなければ、決してやめさせてはなりません。神は、ご自分が用いようと思われる者によって働かれるのではないでしょうか。神がともにおられるのでなければ、だれもこういうわざを行うことはできません（ヨハネ三・二）。神がまさにこのためにその人をつかわされたのでなければ、できないのです。けれども、神がその人をつかわされたのなら、あなたはその人を呼び戻すのですか。行くことを、やめさせるのですか。

（六） 「しかし、私は、その人が神からつかわされていることを知らないのだ」。その人の使命の印である人々のだれもが、すなわち、その人がサタンから神へと立ち帰らせた人々のだれもが、こう言うかもしれません。「わたしの目をあけて下さったのに、そのかたがどこからきたか、ご存じないとは、不思議千万です。もしあのかたが神からきた人でなかったら、何一つできなかったはずです」（ヨハネ九・三〇、三三）。その事実を疑うなら、その人の両親を呼びなさい（ヨハネ九・一八）。兄弟や友人や知人を呼びなさい。けれども、それを疑うことができないとします。「著しいしるしが行われた」（使徒四・一六）ことを、どうしても認めざるをえないとします。それなら、どんな良心で、どんな顔をして、神がつかわされた人に命じることができるでしょうか。「今後は」神の名によって「語ってはいけない」（使徒四・一七）と。

（七） 確かに、神の名によって説教する人はだれでも、内なる召しだけでなく外からの召しも受けているのが、きわめて望ましいことです。私もそれは認めます。けれども、それが絶対に必要だということは、私は否定します。

「いや、聖書ははっきりこう言っているではないか。『だれもこの栄誉ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである』（ヘブル五・四）」。

この聖句は、この問題で、主張の力そのものを含んでいるかのように、数えきれないほど引かれてきました。けれども、これほど的はずれな引用は、確かにかつてありませんでした。というのは、第一に、アロンは説教するために召されたのではまったくないからです。「罪のために供え物といけにえとをささげる」（ヘブル五・一）ために召されたのです。それが、アロンに固有の務めでした。第二に、この人々はいけにえをまったくささげず、ただ説教するだけです。そして、説教することは、アロンはしませんでした。ですから、聖書全体のうちに、これほど論点からかけ離れた聖句を一つでも見つけることはできません。

（八） 「しかし、使徒の時代の慣行はどうだったのか」。それは、使徒行伝を見ればすぐに分かります。第八章によれば、エルサレムにある教会に対して大迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの地方に散らされて行きました（使徒八・一）。そこで、「散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」（使徒八・四）のです。では、この人々はみな、説教するために外からの召しを受けていたのでしょうか。正気の人なら、だれもそうは考えられません。ですから、ここに、使徒の時代の慣行がどうであったかの、否定できない証拠があります。ここには、一人ではなく、大勢の信徒説教者がいます。ただ神だけからつかわされた人々です。

（九） 実際、使徒の時代の慣行は、按手を受ける前に説教するのは不法だった、と私たちに思わせるどころではありません。むしろ、当時は按手の前に説教

することが必要だと見なされていた、と考える理由があるのです。確かに、使徒パウロの慣行と指示は、人がそもそも按手を受ける前に、その人を調べる、というものでした。パウロは言います。「彼らは」、すなわち執事たちは、「まず調べられて」、「それから執事の職につかすべき」（第一テモテ三・一〇）です。調べるとは、どのようにでしょうか。ギリシャ語の文を一つ訳させ、ありきたりの質問をいくつかすることによってでしょうか。ああ、キリストの教役者を調べる、何と驚くべき方法でしょう！　いいえ、そうではありません。はっきりした、公然の試験をすることによってです。ヨーロッパのプロテスタント教会のほとんどが、今もそうしています。その試験では、彼らの生活が聖く、責められるところのないものかどうかを調べます。それだけでなく、キリストの教会の徳を高めるのにどうしても欠かせない賜物を、持っているかどうかを調べるのです。

（一〇）けれども、ある人がそういう賜物を持ち、罪人を悔い改めに導いてきたのに、主教がその人に按手しようとしないなら、どうでしょうか。そのとき、主教は、その人が悪霊を追い出すのをやめさせているのです。けれども、私には、あえてその人をやめさせることはできません。私はその理由を、全世界に向けて公にしてきました。それでも、私はそうすべきだと、今も言い張られています。そう言い張るあなたがたは、その理由に答えなさい。私の知る限り、これまでだれもそうしたことはなく、そうしようと試みた人さえいません。ただ、ある人々が、それをきわめて弱い、取るに足りない理由だと言っただけです。そして、それはなかなか賢明なことでした。議論に答えるよりも、それを軽んじるほうが、少なくとも軽んじているふりをするほうが、はるかにたやすいからです。それでも、そういう理由への答えがなされるまでは、私はこう言わなければなりません。だれかが悪霊を追い出していることに、理にかなった証拠があるとします。そのときは、ほかの人々がどうしようと、私には、あえてその人をやめさせることはできません。そうすれば、神を敵にまわすことにさえなる（使徒五・三九）かもしれないからです。

（一一）あなたがだれであれ、神を恐れる人よ、「やめさせないがよい」（マルコ九・三九）。直接にも間接にも、やめさせてはなりません。やめさせる方法はたくさんあります。神がその人の手によってなさったわざを、まったく否定するとします。あるいは、軽んじて重く見ないとします。そのとき、あなたは間接にその人をやめさせているのです。その人のわざに水をさすとき、あなたは間接にその人をやめさせています。議論に引き込んだり、異議を唱えたり、おそらく起こらない結果で脅したりして、水をさすときです。言葉においてであれ、ふるまいにおいてであれ、その人に何か不親切なことをするとき、あなたはその人をやめさせています。ほかの人々に向かって、その人のことを不親切に、あるいは軽蔑して語るときは、なおさらです。だれかに向かって、その人を憎むべき者、あるいは卑しむべき者として描こうと努めるときも、そうです。その人の悪口を言っている間、あるいはその人の労苦を重く見ないでいる間、あなたはずっとその人をやめさせているのです。ああ、こうしたどの方法でも、その人をやめさせてはなりません。ほかの人々がその人の話を聞くのをやめさせることによっても、やめさせてはなりません。すなわち、罪人が自分の魂を救う力のある御言（ヤコブ一・二一）を聞こうとするのに、水をさしてはならないのです！

（一二）そうです、主の指図を、その意味と範囲のすべてにわたって守ろうとするなら、主の言葉を思い起こしなさい。わたしたち「の味方でない者は」、わたしたち「に反対するものであり、わたしと共に集めない者は、散らすものです」（ルカ一一・二三）。人々を神の国へと集めない者は、確かに人々をそこから散らしているのです。この戦いには、中立の者はありえないからです。だれもが、神の側にいるか、サタンの側にいるかのどちらかです。あなたは神の側にいるでしょうか。それなら、悪霊を追い出す人をだれもやめさせないだけでなく、力の限りを尽くして、その人のわざを進めようと努めるでしょう。あなたは、それが神のわざであることを進んで認め、その大きさを言い表すでしょう。できる限り、その人の道からあらゆる困難と異議を取り除くでしょう。すべての人の前でその人のことを敬意をもって語り、自分の見たこと聞いたこと（使徒四・二〇）を公に言い表して、その人の手を強めるでしょう。ほかの人々がその人の言葉に耳を傾け、神がつかわされた人に聞くように、励ますでしょう。そして、その人に優しい愛を実際に示す機会を神が与えてくださるなら、その一つも逃さないでしょう。

【四】 全体からの結論

（一） もし私たちが、こうした点のどれかで、わざと怠るとします。「わたしたちについてこない」（マルコ九・三八）からといって、直接にでも間接にでも、その人をやめさせるとします。それなら、私たちは偏狭な人です。これが、これまで述べてきたことから私が引き出す結論です。けれども、「偏狭」という言葉は、これほどひんぱんに使われています。それなのに、「熱狂」という言葉とほとんど同じくらい理解されていないのではないかと思います。偏狭とは、自分の党派、意見、教会、宗教に、あまりにも強く執着すること、それを好みすぎることです。ですから、偏狭な人とは、こうしたもののどれかをあまりにも好み、強く執着している人です。そのため、悪霊を追い出す人がいても、これらの点のどれか、あるいはすべてにおいて自分と違うからといって、やめさせるのです。

（二） あなたは、これに気をつけなさい。注意しなさい。一、自分と違う人が悪霊を追い出していることを、なかなか信じようとしないとします。そのことで、自分が偏狭であることを自分で明らかにしてしまわないようにしなさい。そして、ここまでは潔白で、その事実を認めているなら、次に自分を吟味しなさい。二、私は、直接にでも間接にでもその人をやめさせることで、偏狭であることが明らかになっているのではないでしょうか。私は、ある理由で、直接にその人をやめさせているのではないでしょうか。その人が私の党派に属していないから、私の意見に同調しないから、という理由です。あるいは、私が父祖から受け継いだ宗教の体系に従って神を礼拝しないから、という理由です。

（三） 自分を吟味しなさい。私は、こうした理由のどれかで、少なくとも間接には、その人をやめさせているのではないでしょうか。このようなまちがった意見を持つ人を、神がこのように認め、祝福されることを、私は残念に思っているのではないでしょうか。その人が私の教会に属していないからといって、その人に水をさしているのではないでしょうか。そのことについて議論を仕掛けたり、異議を唱えたり、遠い先の帰結を持ち出して心を惑わせたりして、です。言葉においてであれ、行いにおいてであれ、私は、怒りや軽蔑や、どんな種類の不親切も示していないでしょうか。その人のいないところで、その人の過ち、すなわち欠点や弱さを口にしているのではないでしょうか。それが本当の過ちであれ、そう思われているだけの過ちであれ、です。罪人がその人の言葉を聞くのを、私は妨げているのではないでしょうか。こうしたことのどれかをしているなら、あなたは今もなお偏狭な人なのです。

（四） 「主よ、わたしをためし、わたしの心と思いとを練りきよめてください」（詩篇二六・二）。「わたしに」偏狭の「道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」（詩篇一三九・二四）。自分を徹底的に吟味するために、この事例を最も強い形で持ち出してみましょう。もし私が、ローマ・カトリック教徒やアリウス派やソッツィーニ派の人が、悪霊を追い出しているのを見たとしたら、どうでしょうか。そのときでも、私はその人をやめさせることはできません。やめさせれば、自分が偏狭であることを明らかにしてしまうからです。そうです、ユダヤ人や、理神論者や、トルコ人が同じことをしているのを私が見る、ということを仮に想定できるとします。そのときでも、直接にでも間接にでもその人をやめさせるなら、私はやはり偏狭な人にすぎないのです。

（五） ああ、このことから身を離していなさい。けれども、悪霊を追い出す人をやめさせないだけで満足してはなりません。ここまで進むのはよいことです。けれども、ここで止まってはなりません。あらゆる偏狭を避けたいなら、先へ進みなさい。このような例ではいつも、用いられた道具がだれであっても、神の指（ルカ一一・二〇）を認めなさい。認めるだけでなく、神のわざを喜び、感謝をもって神の名をほめたたえなさい。神が用いることをよしとされる人がだれであっても、その人がそのわざに全身をささげるように励ましなさい。どこにいても、その人のことを良く言いなさい。その人の人柄と使命を弁護しなさい。できる限り、その人の働きの場を広げなさい。言葉においても行いにおいても、あらゆる親切を示しなさい。そして、その人のために、絶えず神に叫び求めなさい。その人が、自分自身と自分の教えを聞く者たちとを救う（第一テモテ四・一六）ことができるように、と。

（六）付け加える必要がある戒めは、一つだけです。他人の偏狭が、あなた自身の偏狭の言い訳になると思ってはなりません。自分では悪霊を追い出している人が、それでもあなたにはそうすることをやめさせる、ということもありえないことではありません。お気づきのとおり、これはまさに本文で取り上げられている事例です。使徒たちは、自分たちがしていることを、ほかの人がするのをやめさせたのです。けれども、仕返しをしないように気をつけなさい。悪をもって悪に報いる（ローマ一二・一七）のは、あなたのすべきことではありません。ほかの人が主の指図を守らないことは、あなたがそれをなおざりにしてよい理由にはなりません。いや、偏狭はすべてその人だけのものにさせておきなさい。その人があなたをやめさせても、あなたはその人をやめさせてはなりません。むしろ、その人への愛を固めるために、いっそう努め、目をさまし、祈りなさい。その人があなたについて様々の悪口を言う（マタイ五・一一）なら、あなたはその人について、様々の良いことを言いなさい。ただし、本当のことをです。この点で、ある偉大な人の、あの輝かしい言葉にならいなさい（ああ、その人がいつも同じ精神を持っていたらよかったのですが）。「ルターが私を百の悪魔と呼んでもかまいません。それでも私は、ルターを神の使者として敬います」。

説教三十九　公同の精神

「エヒウはそこを立って行ったが、自分を迎えにきたレカブの子ヨナダブに会ったので、彼にあいさつして、『あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか』と言うと、ヨナダブは『真実です』と答えました。するとエヒウは『それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい』と言いました」（列王紀下一〇・一五）

（一）愛がすべての人に対して負うべき負債であることは、この大きな負債を払っていない人々でさえ認めています。「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」（ヤコブ二・八）というきわめて尊い律法は、それを聞くすべての人にとって、それ自体で明らかだからです。しかもそれは、昔の熱心家たちがこの律法に加えたみじめな解釈に従ってのことではありません。「隣り人を愛し」、すなわち親族や知人や友を愛し、「敵を憎め」（マタイ五・四三）という解釈ではないのです。そうではありません。「わたしはあなたがたに言います」（マタイ五・四四）と主は言われました。「敵を愛し」、「のろう者を祝福し」、「憎む者に親切に」し、「はずかしめる」者と「迫害する者のために祈」りなさい（ルカ六・二七～二八、マタイ五・四四）。それは、「天にいますあなたがたの父の子と」なり、すべての人にもそう見えるようになる「ためです。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らしてくださるからです」（マタイ五・四五）。

（二）けれども、神を愛する人々に対して私たちが負っている、特別な愛があることも確かです。ダビデもそう言っています。「地にある聖徒は、すべてわたしの喜ぶすぐれた人々です」（詩篇一六・三）。ダビデにまさる方も、こう言われました。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるでしょう」（ヨハネ一三・三四～三五）。これこそ、使徒ヨハネがたびたび、力強く説いている愛です。ヨハネはこう言います。「わたしたちは互に愛し合うべきです。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれです」（第一ヨハネ三・一一）。「主は、わたしたちのためにいのちを捨ててくださいました。それによって、わたしたちは愛ということを知りました。それゆえに、わたしたちもまた、愛がそう求めるなら、「兄弟のためにいのちを捨てるべきです」（第一ヨハネ三・一六）。また、こうも言います。「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではありませんか。愛は、神から出たものなのです」。「愛さない者は、神を知りません。神は愛です」（第一ヨハネ四・七～八）。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛してくださって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになりました」。「愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛してくださったのですから、わたしたちも互に愛し合うべきです」（第一ヨハネ四・一〇～一一）。

（三）だれもがこれをよしとします。けれども、だれもがそれを実行しているでしょうか。日々の経験が、その反対を示しています。「わたしたちに命じられたように、互に愛し合う」（第一ヨハネ三・二三）クリスチャンでさえ、どこにいるでしょうか。その道には、何と多くの妨げがあることでしょう。大きな、全般的な妨げは二つあります。第一に、みなが同じように考えることはできない、ということです。第二に、その結果として、みなが同じように歩むことはできない、ということです。いくつかの小さな点で、考えの違いに応じて、実践も違ってこざるをえないのです。

（四）けれども、意見や礼拝の様式の違いのために、外面的に完全に一つになることは妨げられるかもしれません。それでも、心情において一つになることまで、それに妨げられる必要があるでしょうか。同じように考えることはできなくても、同じように愛することはできないでしょうか。意見は一つでなくても、心を一つにすることはできないでしょうか。疑いもなく、できるのです。この点

で、神の子たちはみな、こうした小さな違いがあっても、一つになることができます。違いはそのままにしておいて、愛と良きわざにおいて互いに励まし合うことができるのです。

（五）確かに、この点では、エヒウ自身の模範も、真剣なクリスチャンならだれもが心にとめ、見習うに十分値します。エヒウは善悪の入りまじった人物でしたが、それでもそうなのです。「エヒウはそこを立って行ったが、自分を迎えにきたレカブの子ヨナダブに会ったので、彼にあいさつして、『あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか』と言うと、ヨナダブは『真実です』と答えました。するとエヒウは『それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい』と言いました」（列王紀下一〇・一五）。

この本文は、おのずから二つの部分に分かれます。

第一に、エヒウがヨナダブに出した「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」（列王紀下一〇・一五）という問いです。

第二に、ヨナダブが「真実です」と答えたのを受けて、エヒウが出した「それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい」（列王紀下一〇・一五）という申し出です。

【一】エヒウがヨナダブに出した問い

（一）まず第一に、エヒウがヨナダブに出した問い、「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」（列王紀下一〇・一五）を考えましょう。

この言葉について、まず気づくことがあります。ここでは、ヨナダブの意見については何も尋ねられていない、ということです。しかし、ヨナダブがきわめて珍しい、実に彼独特の意見をいくつか持っていたことは確かです。また、その実践に深くかかわる意見も持っていました。ヨナダブはそうした意見をきわめて重んじたので、それを子の子に、最後の子孫に至るまで受け継がせたのです。このことは、ヨナダブの死から何年も後にエレミヤが記した記事から明らかです。「わたしはヤザニヤと、その兄弟と、そのむすこたち、およびレカブびとの全家を連れ、レカブびとの前に酒を満たしたつぼと杯を置き、彼らに、『酒を飲みなさい』と言いました。彼らは答えました、『われわれは酒を飲みません。それは、レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じて、「あなたがたとあなたがたの子孫はいつまでも酒を飲んではならない。また家を建てず、種をまかず、またぶどう畑を植えてはならない。またこれを所有してはならない。あなたがたは生きながらえる間は幕屋に住んでいなさい」と言ったからです。こうしてわれわれは、すべてわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じたところに従い、そのように行いました』」（エレミヤ三五・三〜一〇）。この「レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブ」という言葉は、英語の聖書の語順では、レカブが「われわれの先祖」であるようにも読めます。「われわれの先祖ヨナダブ、レカブの子」と並べたほうが、まぎれが少ないでしょう。ヨナダブは父レカブを愛し敬っていたので、子孫がレカブの名で呼ばれることを望んだのでしょう。

（二）それなのに、エヒウはこうしたことに少しもかかわろうとせず、ヨナダブを自分の考えのままにさせています。エヒウは、世のことでも宗教のことでも、「猛烈な勢いで」（列王紀下九・二〇）事を進めるのが常だったようですが、それでもそうなのです。どちらも、自分の持つ意見のことで、相手を少しも煩わせなかったようです。

（三）今も、多くの善い人々が独特な意見を抱いていることは、大いにありうることです。その中には、この点で、ヨナダブと同じくらい人と違っている人もいるかもしれません。そして、私たちの知るところが一部分である（第一コリント一三・九）間は、すべての人がすべてのことを同じように見るわけではないことは確かです。人がそれぞれ、日常の生活においてと同じように、宗教においても違う考えを持つことになるのは、避けられない結果です。人間の悟りが、今は弱く、足りないからです。世の初めからそうでしたし、「万物更新の時まで」（使徒三・二一）そうでしょう。

（四）いや、さらに言えば、だれでも、自分の抱いている一つ一つの意見が正しいと、必然的に信じています。ある意見が正しくないと信じることは、その意見を抱いていないのと同じことだからです。それでも、自分の意見がすべてひっくるめて正しいと確信できる人は、だれもいません。いや、ものを考える人ならだれでも、そうでないことを確信しています。人間とは、次のようなものだ

からです。humanum est errare et nescire（多くのことを知らず、いくつかのことでまちがうのは、人間の避けられない条件である）ですから、自分もそうだ、とその人は気づいています。自分がまちがっていることを、全体としては知っています。けれども、どの点でまちがっているかは、知りません。おそらく、知ることができないのです。

（五）私は「おそらく、知ることができない」と言いました。克服できない無知が、あるいは、同じことになりますが、克服できない偏見が、どこまで及ぶかを、だれが言えるでしょうか。偏見は、幼い心にしばしばしっかり根づいてしまいます。そうなると、後になって、それほど深く根を張ったものを引き抜くことは、できなくなるのです。また、ある誤りにどれほど責められるべきところがあるかを、だれが言えるでしょうか。それに伴うあらゆる事情を知っているのでなければ、言えません。すべての罪責は、何らかの意志の同意を前提とするからです。そして、それを判断できるのは、人の心を探り知る方（ローマ八・二七）だけです。

（六）ですから、賢い人はだれでも、ほかの人々が自分に認めてほしいと願うのと同じ考える自由を、ほかの人々に認めます。ほかの人々に、彼らの意見を受けいれるように自分に強いてほしくはありません。それと同じように、自分の意見を受けいれるように彼らに強いることもしません。自分と違う人々を忍び、愛において一つになりたいと願う相手には、ただ一つのことを尋ねるだけです。「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」（列王紀下一〇・一五）。

（七）第二に、ここではヨナダブの礼拝の様式について何も尋ねられていないことに、気づきます。この点でも、二人の間にはきわめて大きな違いがあった可能性が高いのですが、それでも尋ねていないのです。というのは、ヨナダブは、その子孫のすべてと同じように、エルサレムで神を礼拝していたと考えてよいからです。けれども、エヒウはそうではありませんでした。エヒウは、宗教よりも国の政策を重んじたのです。ですから、エヒウはバアルの礼拝者たちを殺し、「イスラエルのうちからバアルを一掃し」ました（列王紀下一〇・二八）。けれども、ヤラベアムの都合のよい罪、すなわち「金の子牛」の礼拝は「やめなかった」のです（列王紀下一〇・二九）。

（八）けれども、心のまっすぐな人々がいます。「良心に責められることのないように」（使徒二四・一六）と願う人々です。そういう人々の間でさえ、さまざまな意見がある限り、神を礼拝するさまざまな仕方があるのは避けられません。意見の多様さは、必然的に実践の多様さを伴うからです。いつの時代にも、人々の間で、至高の存在についての意見ほど違ってきたものはありません。同じように、その方を礼拝する仕方ほど、互いに違ってきたものもないのです。これが異教の世界だけのことであったなら、少しも驚くにはあたらなかったでしょう。ご承知のように、異教徒は自分の「知恵によって神を認めるに至らなかった」（第一コリント一・二一）のですから、神をどう礼拝すべきかも知りえなかったのです。けれども、キリスト教の世界でさえそうなのは、不思議ではないでしょうか。キリスト教の世界ではみな、全体としては、「神は霊ですから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきです」（ヨハネ四・二四）という点で一致しています。それなのに、神を礼拝する個々の様式は、異教徒の間とほとんど同じくらい多様なのです。

（九）では、これほど多様なものの中から、どう選べばよいのでしょうか。だれも、ほかの人のために選んだり、ほかの人に指図したりすることはできません。各自が、単純さと、神にかなう誠実さとをもって、自分の良心の命じるところに従わなければなりません。各自がそれぞれ心の中で確信を持ち（ローマ一四・五）、それから、自分の持っている最善の光に従って行動しなければなりません。また、どんな被造物にも、自分の規則に従って歩むように、ほかの者に強いる力はありません。神は、人の子らのだれにも、このように兄弟の良心を支配する権利を与えておられません。だれもが、自分で判断しなければなりません。だれもが、神に対して自分の言いひらきをしなければならない（ローマ一四・一二）からです。

（一〇）ですから、キリストに従う者はだれでも、どこかの特定の会衆に属さなければなりません。ふつう言われるように、どこかの教会に属さなければならないのです。それは、キリスト教の制度そのものの性質によることです。そし

て、それは神を礼拝する特定の仕方を含んでいます。「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩く」ことはできないからです（アモス三・三）。けれども、ある会衆をほかの会衆より、ある礼拝の仕方をほかの仕方より選ぶように人を強いることができるのは、その人自身の良心だけです。地上のほかのどんな力にも、それはできません。ふつう、こう考えられていることは、私も知っています。生まれた場所によって、属すべき教会が決まる。たとえば、イギリスに生まれた人は、英国国教会と呼ばれている教会の一員となるべきだ。したがって、その教会が定めている特定の仕方で神を礼拝すべきだ、というのです。私もかつては、この考えを熱心に支持していました。けれども、この熱心を和らげるべき理由を、数多く見いだしています。この考えには、理性ある人ならだれも乗り越えられないような難点が伴うのではないかと思います。その中でも決して小さくない難点は、こうです。もしこの規則が行われていたなら、教皇制からの宗教改革はありえなかったでしょう。この規則は、個人が判断する権利をすっかり打ち壊してしまうからです。あの宗教改革全体は、その権利の上に立っているのです。

（一一）ですから、私は、自分の礼拝の様式をほかのだれかに押しつけることなど、あえてしません。私は、それが本当に初代教会のもので、使徒的なものだと信じています。けれども、私がそう信じていることは、ほかの人にとっての規則ではありません。ですから、愛において一つになりたい相手に、私は尋ねません。「あなたは私の教会に、私の会衆に属していますか。私と同じ教会の統治の形を受けいれ、同じ教会の役職を認めていますか。私が神を礼拝するのと同じ祈りの形式に加わっていますか」。「あなたは、私と同じ姿勢と仕方で主の晩餐を受けていますか」とも尋ねません。また、洗礼の執行において、私と一致しているかどうかも尋ねません。受洗者のために代父母を立てることで、執行の仕方で、あるいは洗礼を授けるべき人の年齢で、一致しているかどうかを尋ねないのです。いや、あなたが洗礼と主の晩餐をそもそも認めているかどうかさえ、尋ねません。私自身は、このことについて心の中ではっきりしているのですが、それでも尋ねないのです。こうしたことはみな、わきに置いておきましょう。必要なら、もっと都合のよいときに話し合いましょう。今、私が尋ねるのは、ただこのことだけです。「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」（列王紀下一〇・一五）。

（一二）けれども、この問いには、本来どういうことが含まれているのでしょうか。エヒウがそこにどういう意味を込めたか、ということではありません。キリストに従う者がこの問いを兄弟のだれかに出すとき、それによってどういうことを理解すべきか、ということです。

そこに含まれている第一のことは、こうです。あなたの心は、神に対して真実ですか。あなたは、神の存在と、その完全な属性とを信じていますか。神の永遠、無限、知恵、力を、神の正義、あわれみ、真実を信じていますか。神が今も「その力ある言葉をもって万物を保っておられる」（ヘブル一・三）ことを、信じていますか。また、神が、最も小さなものさえ、最も有害なものさえ治めておられることを、信じていますか。神は、それをご自分の栄光と、神を愛する者たちの益（ローマ八・二八）とに役立てておられるのです。あなたは、神のことについて、神からの証拠を、超自然的な確信を持っていますか。あなたは、「見えるものによらないで、信仰によって歩いて」（第二コリント五・七）いますか。一時的なものにではなく、永遠のものに目を注いで（第二コリント四・一八）いますか。

（一三）あなたは、主イエス・キリストを、「万物の上にいます神」、「永遠にほむべき」方（ローマ九・五）と信じていますか。キリストは、あなたの魂の内に啓示されて（ガラテヤ一・一六）いますか。あなたは、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストを（第一コリント二・二）知っていますか。キリストはあなたのうちに住み、あなたはキリストのうちに住んでいますか。キリストの形が、信仰によって、あなたの心のうちにできていますか（ガラテヤ四・一九）。あなたは、自分のわざ、自分の義をすべてまったく捨てて、「神の義に従」いましたか（ローマ一〇・三）。それは、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」（ローマ三・二二）です。あなたは、「自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義」を受けて、「キリストのうちに自分を見いだす」ようになっていますか（ピリピ三・九）。そして、キリストによって、「信仰の戦いを

りっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得」しようとしていますか（第一テモテ六・一二）。

（一四）　あなたの信仰は、エネルグーメネー・ディ・アガペース（ἐνεργουμένη δι᾽ ἀγάπης）ですか。すなわち、愛の力に満ちていますか（ガラテヤ五・六）。あなたは神を、「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして」愛していますか（マルコ一二・三〇）。私は「何にもまして」とは言いません。それは聖書にない言い方で、あいまいな言い方でもあるからです。あなたは、自分の幸いのすべてを、ただ神のうちにだけ求めていますか。そして、求めているものを見いだしていますか。あなたの魂は、絶えず「主をあがめ」、あなたの霊は「救主なる神を」喜んでいますか（ルカ一・四六～四七）。「すべての事について、感謝」すること（第一テサロニケ五・一八）を学んで、「感謝するのは、喜ばしく楽しいことです」と分かっていますか。神は、あなたの魂の中心であり、あなたのあらゆる願いのすべてですか。それに従って、あなたは天に宝をたくわえ（マタイ六・二〇）、ほかのすべてのものをふん土やかすのように思っていますか（ピリピ三・八）。神への愛が、あなたの魂から世への愛を追い出しましたか。それなら、あなたは世に対して十字架につけられています。地上のすべてのものに対して死んでいます。そして、あなたの「いのちは、キリストと共に神のうちに隠されている」のです（コロサイ三・三）。

（一五）　あなたは、「自分のこころのままを行う」のではなく、あなたを「つかわされたかたのみこころを行う」（ヨハネ六・三八）ことに、励んでいますか。その方は、あなたを地上につかわして、しばらくここに寄留させ、見知らぬ国でわずかな日々を過ごさせておられます。与えられたわざをあなたがなし遂げて、父の家に帰るまで、そうさせておられるのです。「天にいます」あなたの「父のみこころを行う」こと（マタイ一二・五〇）が、あなたの食物（ヨハネ四・三四）であり、飲み物ですか。あなたの目は、すべてのことにおいて澄んで（マタイ六・二二）いますか。いつも神に注がれ、いつもイエスを仰ぎ見て（ヘブル一二・二）いますか。あなたは、何をするにも、すべての労働、仕事、ふるまいにおいて、神を目指していますか。すべてにおいて、ただ神の栄光だけをねらっていますか。「あなたのすることはすべて、言葉によるとわざによるとを問わず、いっさい主イエスの名によってなし、彼によって父なる神に感謝して」いますか（コロサイ三・一七）。

（一六）　神への愛に促されて、あなたは恐れをもって神に仕え（詩篇二・一一）、「畏敬をもって神を喜んで」いますか。あなたは、死や地獄よりも、神の不興を買うことのほうを恐れていますか。神の栄光の御目をおかす（イザヤ三・八）と考えることほど、あなたにとって恐ろしいことはありませんか。この理由から、あなたは「すべての悪い道を憎み」、神の聖く完全な律法へのあらゆる違反を憎んでいますか。そして、この点で、「神に対しまた人に対して、良心に責められることのないように」努めていますか（使徒二四・一六）。

（一七）　あなたの心は、隣り人に対して真実ですか。あなたは、すべての人を例外なく、自分のように愛していますか。「自分を愛してくれる者を」だけ「愛したからとて、どれほどの手柄になるでしょうか」（ルカ六・三二）。あなたは「敵を愛し」ていますか（マタイ五・四四）。あなたの魂は、敵に対する善意と、細やかな愛情とに満ちていますか。神の敵さえ、すなわち恩を知らない者や聖くない者さえ、愛していますか。あなたの心は、彼らのために痛んでいますか。彼らのためなら、現世において「この身がのろわれて」も「いとわない」と思えますか（ローマ九・三）。そして、「のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈」り（ルカ六・二八）、「迫害する者のために祈」る（マタイ五・四四）ことによって、それを示していますか。

（一八）　あなたは、行いによって愛を示していますか。時のある間に、機会のあるごとに、実際に「だれに対しても」「善を行」っていますか（ガラテヤ六・一〇）。隣人にも見知らぬ人にも、友にも敵にも、善人にも悪人にも、そうしていますか。彼らに、できる限りのあらゆる善を行っていますか。彼らのあらゆる必要を満たそうと努めていますか。力の限り、体においても魂においても彼らを助けていますか。クリスチャンならだれでも、こう言ってよいでしょう。あなたがこのような思いでいるなら、「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実です」（列王紀下一〇・一五）。いや、ただ心からそれを願い、それを得るまで追い求めているだけでも、そうなのです。

【二】 ヨナダブの答えを受けたエヒウの申し出

（一）「それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい」（列王紀下一〇・一五）。私は、「私の意見に従いなさい」という意味で言っているのではありません。その必要はありません。私はそれを期待もせず、望みもしません。また、「私があなたの意見に従います」という意味でもありません。私にはできません。それは私の選択によることではないのです。見ることや聞くことを思いのままにできないのと同じように、考えることも思いのままにはできません。あなたは自分の意見を保ちなさい。私は私の意見を保ちます。しかも、これまでと同じように、しっかりと保つのです。私の側に移ろうとしたり、私をあなたの側に移らせようとしたりする必要さえありません。そうした点について議論することも、それについて一言でも聞いたり話したりすることも、私はあなたに望みません。どちらの側の意見も、すべてそのままにしておきましょう。ただ、「あなたの手をわたしに伸べなさい」（列王紀下一〇・一五）。

（二） 私は、「私の礼拝の様式を受けいれなさい」とか、「私があなたの様式を受けいれます」とかいう意味で言っているのではありません。これもまた、あなたの選択にも私の選択にもよらないことです。私たちは二人とも、各自が心の中で確信を持っている（ローマ一四・五）とおりに、行動しなければなりません。あなたは、神に最も喜ばれると信じるものを、しっかり守りなさい。私もそうします。私は、主教制の教会の統治の形が、聖書的で使徒的であると信じています。あなたが、長老制や独立派の形のほうが良いと考えるなら、そのまま考え続け、それに従って行動しなさい。私は、幼児に洗礼を授けるべきだと信じています。また、それは水に浸すことによっても、水を振りかけることによっても行ってよいと信じています。あなたが違う確信を持っているなら、そのまま持ち続け、自分の確信に従いなさい。私には、定式の祈りが、とりわけ大きな会衆の中で、すぐれた役に立つように思われます。あなたが、即興の祈りのほうが役に立つと判断するなら、自分の判断にふさわしく行動しなさい。私の考えはこうです。人々が洗礼を受けるための水を、私はこばむべきではない（使徒一〇・四七）。また、死なれた私の主人を記念して（第一コリント一一・二四～二五）、パンを食べ、ぶどう酒を飲むべきだ。けれども、あなたがこれに納得していないなら、自分の持っている光に従って行動しなさい。これまでに挙げたどの項目についても、私はあなたと一瞬たりとも議論したいとは思いません。こうした小さな点は、みなわきに置いておきましょう。それが決して目に入らないようにしましょう。あなたの心が私の心と同じであるなら、すなわち、あなたが神とすべての人を愛しているなら、私はそれ以上何も求めません。「あなたの手をわたしに伸べなさい」（列王紀下一〇・一五）。

（三） 私が言うのは、第一に、私を愛してください、ということです。それも、あなたがすべての人を愛するようにだけではありません。あなたの敵を、あるいは神の敵を、すなわち、あなたを憎み、あなたを「はずかしめる者」（ルカ六・二八）や「迫害する者」（マタイ五・四四）を愛するようにだけでもありません。見知らぬ人として、善い人とも悪い人とも知らない人として愛するようにだけでもありません。私はそれでは満足しません。そうではありません。あなたの心が、「わたしがあなたに対するように真実」であるなら（列王紀下一〇・一五）、私をきわめて細やかな愛情をもって愛してください。兄弟よりもたのもしい友（箴言一八・二四）として、キリストにある兄弟として、新しいエルサレムの同じ国籍の者（エペソ二・一九）として愛してください。同じ救いの君（ヘブル二・一〇）のもとで、同じ戦いに加わっている戦友として愛してください。イエスの御国と忍耐とにあずかる仲間（黙示録一・九）として、キリストと栄光を共にする共同の相続人（ローマ八・一七）として、私を愛してください。

（四） 大多数の人々を愛するよりも高い程度で、寛容で情深い愛（第一コリント一三・四）をもって、私を愛してください。その愛は忍耐深く、私が無知で迷っている（ヘブル五・二）ときには、私の重荷を負い（ガラテヤ六・二）、それを増し加えることをしません。そして、なおも優しく、穏やかで、思いやり深いのです。また、その愛はねたむことをしません（第一コリント一三・四）。神が、ご自分のわざにおいて、ときにあなたよりも私をいっそう栄えさせることをよしとされても、ねたまないのです。いらだたない（第一コリント一三・五）愛をもって、私を愛してください。私の愚かさや弱さにいらだたない愛です。私が神の御旨に従わずに行動しているように、ときにあなたに見えることがあって

も、それにさえいらだたない愛です。私について悪を思わないように、私を愛してください。あらゆる疑いと邪推を捨てるように、愛してください。すべてをおおう愛をもって、私を愛してください。私の欠点も弱さも決して言いふらさない愛です。すべてを信じる（第一コリント一三・七）愛です。いつも最善に考え、私のすべての言葉と行いを最も好意的に解釈しようとする愛です。すべてを望む（第一コリント一三・七）愛です。すなわち、話に聞いたことは実はなかったのだと望みます。あるいは、話に聞いたような事情のもとで行われたのではないと望みます。あるいは少なくとも、善い意図から、あるいは急な誘惑に迫られて行われたのだと望むのです。そして、最後まで望んでください。まちがっていることは、神の恵みによって正される、と望んでください。欠けているものは、キリスト・イエスにある神のあわれみの豊かさによって満たされる、と望んでください。

（五）　私が言うのは、第二に、あなたのすべての祈りの中で、私を神にゆだねてください、ということです。私のために神と格闘してください。神が私のうちに見られるまちがいを速やかに正し、私に欠けているものを満たしてくださるように、祈ってください。恵みの御座（ヘブル四・一六）に最も近づくときには、そのときあなたのすぐそばにおられる方に、こう願ってください。私の心がもっとあなたの心のようになり、神に対しても人に対しても、もっと真実になりますように。私が、まだ見ていない事実（ヘブル一一・一）についてもっと十分な確信を持ち、キリスト・イエスにある神の愛をもっと力強く見ることができますように。見えるものによらないで、信仰によって（第二コリント五・七）もっと着実に歩み、もっと熱心に永遠のいのちをつかむことができますように。神への愛とすべての人への愛が、私の心にもっと豊かに注がれる（ローマ五・五）ように祈ってください。私が、天にいます父のみこころを行う（マタイ一二・五〇）ことにもっと熱心で活発になるように、祈ってください。良いわざにもっと熱心になり（テトス二・一四）、悪のどんな見かけからも遠ざかることにもっと注意深くなるように、祈ってください。

（六）　私が言うのは、第三に、愛と善行とを励むように私を促してください（ヘブル一〇・二四）、ということです。機会のあるごとに、私の魂の健康のためになると信じることは何でも、愛をもって私に語ってください。そうして、あなたの祈りを後押ししてください。神が私に与えられたわざにおいて、私を奮い立たせてください。それをもっと完全に行う方法を、私に教えてください。そうです、「いつくしみをもってわたしを打」ち、「わたしを責め」てください（詩篇一四一・五）。私をつかわされた方のみこころよりも、むしろ自分の思いを行っているように私が見えるところでは、どこででも、そうしてください。ああ、たためらわずに語ってください。私の欠点を改め、私の弱さを強め、私を愛において築き上げるのに役立つと信じることは、何でも語ってください。私をあらゆる点で主人に役立つもの（第二テモテ二・二一）にすると信じることも、語ってください。

（七）　私が言うのは、最後に、言葉だけでなく、行いと真実とをもって（第一ヨハネ三・一八）私を愛してください、ということです。あなたの良心が許す限り、神のわざにおいて私と協力してください。あなた自身の意見と、あなた自身の神を礼拝する仕方は、そのまま保っていてかまいません。そして、手をたずさえて進んで行きましょう。ここまでなら、確かに、あなたは進むことができます。どこにいても、神のわざについては、神がだれを通して働かれるにしても、敬意をもって語ってください。神の使者たちについては、好意をもって語ってください。そして、もしできるなら、彼らが困難や苦しみの中にあるときに同情するだけでなく、快く、実際に役立つ助けを彼らに与えてください。それは、彼らがあなたのことで神に栄光を帰す（第二コリント九・一三）ためです。

（八）　この最後の項目で述べたことについて、二つのことに注意すべきです。一つは、こうです。私は、心が私に対して真実な人、私の心がその人に対してそうであるように真実な人に、愛や愛のつとめを、霊的な助けやこの世の助けを求めます。何を求めるにしても、それと同じものを、私も、神の恵みによって、自分の分に応じて、その人に与える用意があるのです。もう一つは、私がこう求めるのは、私自身のためだけではない、ということです。神と人とに対して心が真実なすべての人のためでもあるのです。それは、キリストが私たちを愛してくださったように（ヨハネ一三・三四）、私たちがみな互いに愛し合うためです。

【三】 公同の精神とは何か

（一） これまで述べてきたことから、一つの結論を引き出すことができます。ここから、公同の精神とは何かを学ぶことができるのです。

この言葉ほど、ひどく誤解され、危険なほど誤用されてきた言葉は、ほとんどありません。けれども、これまで述べてきたことを落ち着いて考える人なら、だれでもできることがあります。そうした誤解をたやすく正し、そうした誤用を防ぐことです。

というのは、ここから、第一に、公同の精神は理論上の広教主義ではない、ということを学べるからです。公同の精神は、あらゆる意見に無関心であることではありません。そのような無関心は地獄の落とし子であって、天の子ではありません。この考えの定まらなさ、この「様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたり」（エペソ四・一四）することは、祝福ではなく大きなのろいです。真の公同性にとって、友ではなく、和解しがたい敵なのです。本当に公同の精神を持つ人は、今さら自分の宗教を探し求めたりはしません。キリスト教の教理の主要な部分についての判断において、その人は太陽のように揺るぎません。確かに、その人は、自分の原則に反して持ち出されることは何でも、いつでも喜んで聞き、よく考えます。けれども、それは、その人の心の動揺を示すものではなく、また、動揺を引き起こすものでもありません。その人は、二つのものの間に迷う（列王紀上一八・二一）ことはなく、二つの意見をむなしく一つに混ぜ合わせようとすることもしません。自分がどんな霊の者か知らないあなたがたは、このことに注意しなさい。あなたがたは、自分を公同の精神の人と呼んでいます。けれども、それはただ、悟りが濁っているからにすぎません。心がすっかり霧に包まれているからにすぎません。定まった一貫した原則を持たず、あらゆる意見をごちゃ混ぜにしようとしているからにすぎないのです。あなたがたは、すっかり道を踏み外していることを悟りなさい。自分がどこにいるのかさえ分かっていないのです。あなたがたは、キリストの霊そのものに入ったと思っています。けれども実際には、反キリストの霊（第一ヨハネ四・三）のほうに近いのです。まず行って、キリストの福音の初歩を学びなさい。そうすれば、本当に公同の精神を持つことを学ぶでしょう。

（二） これまで述べてきたことから、第二に、公同の精神は、どんな種類の実践上の広教主義でもない、ということを学べます。それは、公の礼拝に、あるいはその外面的な執り行い方に、無関心であることではありません。これもまた、祝福ではなく、のろいでしょう。そのような無関心は、霊とまことをもって神を礼拝する（ヨハネ四・二四）ことの助けになるどころではありません。それが続く限り、言いようのない妨げとなるでしょう。けれども、本当に公同の精神を持つ人は、すべてのものを聖所のはかりで量っています。そのうえで、自分が加わっている特定の礼拝の様式について、何の疑いも、ためらいもまったく持っていません。神を礼拝するこの仕方は、聖書的でもあり、理にかなってもいると、はっきり確信しています。これ以上聖書的な仕方も、これ以上理にかなった仕方も、世に一つもないことを知っています。ですから、あちこちさまよい歩くことなく、その仕方にしっかりと付きます。そして、そうする機会が与えられていることを、神に感謝してほめたたえるのです。

（三） ここから、第三に、公同の精神は、あらゆる会衆に無関心であることではない、ということを学べます。それは別の種類の広教主義で、前に述べたものに劣らず不合理で、聖書に反しています。けれども、本当に公同の精神を持つ人は、それからほど遠いのです。その人は、原則においてと同じように、会衆においても揺るぎません。一つの会衆に、霊においてだけでなく、クリスチャンの交わりのあらゆる外面的なきずなによって結ばれています。そこで、その人は、神の定めのすべてにあずかります。そこで、主の晩餐を受けます。そこで、公の祈りの中で魂を注ぎ出し、公の賛美と感謝に加わります。そこで、和解の福音（第二コリント五・一九）を、神のめぐみの福音（使徒二〇・二四）を聞くことを喜びます。この最も近い、最も愛する兄弟たちとともに、厳粛なときには、断食して神を求めます。とりわけこの兄弟たちを、その人は愛をもって見守ります。兄弟たちも、その人の魂を見守ります。互いに諭し、勧め、慰め、忠告し、あらゆる仕方で、信仰において互いの徳を高めるのです。この兄弟たちを、その人は自分の家族（第一テモテ五・八）と見なしています。ですから、神が与えて

くださった力に応じて、おのずから彼らを顧みます。そして、彼らが、いのちと信心とにかかわるすべてのもの（第二ペテロ一・三）を持てるように備えるのです。

（四）けれども、その人は、自分の宗教上の原則に、すなわちイエスにある真理（エペソ四・二一）と信じるものに、しっかりと立っています。神の目に最も喜ばれると判断する神の礼拝に、かたく付いています。最も細やかで最も緊密なきずなによって、一つの特定の会衆に結ばれています。それでいて、その人の心は、すべての人に向かって、知っている人にも知らない人にも、広くなっている（第二コリント六・一一）のです。隣人も見知らぬ人も、友も敵も、強い心からの愛情をもって抱きしめます。これが、公同の、すなわち普遍的な愛です。そして、この愛を持つ人が、公同の精神を持つ人なのです。愛だけが、この呼び名にふさわしい資格を与えるからです。公同の愛こそ、公同の精神なのです。

（五）ですから、この言葉を最も厳密な意味でとるなら、公同の精神の人とは、次のような人です。上に述べた仕方で、心が自分の心に対して真実なすべての人に、手を伸べる人です。自分の受けているあらゆる恵まれた点を重んじ、それを神に感謝してほめたたえることを知っている人です。その恵まれた点とは、神のことについての知識と、神を礼拝する真に聖書的な仕方です。そして何よりも、神を敬い義を行う（使徒一〇・三五）会衆と一つに結ばれていることです。こうした祝福を最も注意深く保ち、目のひとみのように（申命記三二・一〇）守りながら、同時に、主イエス・キリストを信じるすべての人を愛する人です。どんな意見の人でも、どんな礼拝の人でも、どんな会衆の人でもかまいません。その人々を、友として、主にある兄弟として、キリストの肢体として、神の子として愛するのです。今ある神の国にともにあずかる者として、神の永遠の御国をともに受け継ぐ者として愛するのです。その人々とは、神と人とを愛する人々です。神を喜ばせることを喜び、神の不興を買うことを恐れて、悪から遠ざかることに注意深く、良いわざに熱心な（テトス二・一四）人々です。本当に公同の精神を持つ人とは、こうした人々をみな、いつも心にかけている人です。その人々一人一人に言いようのない優しさをいだき、その幸いを切に願う人です。人々の前で彼らを弁護するだけでなく、祈りの中で彼らを神にゆだねることをやめない人です。彼らに慰めの言葉をかけ、あらゆる言葉によって、神によって彼らを力づけ（サムエル記上二三・一六）ようと努める人です。霊的なことでもこの世のことでも、あらゆることにおいて、力の限り彼らを助けます。彼らのために、「費用を使い」、自分「自身をも使いつくす」（第二コリント一二・一五）用意があります。そうです、彼らのためにいのちを捨てる（第一ヨハネ三・一六）用意さえあるのです。

（六）神の人よ（第一テモテ六・一一）、あなたは、これらのことを心にとめなさい（ピリピ四・八）。もしあなたがすでにこの道にいるなら、進み続けなさい。もしこれまで道を誤っていたなら、あなたを連れ戻してくださった神をほめたたえなさい。そして今、普遍的な愛という王の道において、あなたの前に置かれている競走を走りなさい。判断において揺れ動くことのないように、また、心をせばめる（第二コリント六・一二）ことのないように気をつけなさい。むしろ、着実な歩みを保ちなさい。聖徒たちにひとたび伝えられた信仰（ユダ三）に根ざし、愛を、真の公同の愛を基として（エペソ三・一七）歩みなさい。ついには、永遠に愛のうちにのみ込まれるまで、そうしなさい！

〔版によっては、ここにチャールズ・ウェスレーの讃美歌「公同の愛」が加えられています。〕

この言葉ばかりの争いに疲れ、
観念や、形式や、様式や、名前に疲れて、
道であり、真理であり、いのちであるあなたへ、
その愛が私の素朴な心を燃え立たせるあなたへ、
神に教えられて、私はついに飛んで行きます。
あなたとあなたの民とともに、生き、また死ぬために。

バベルのただ中から連れ出され、
私は党派も分派も後ろに捨てます。
心は広げられ、思いは自由にされて、
隠れた真理をどこに見いだしても、
その隠れた真理を喜んで認め、
ただイエスの名の前にだけ、ひれ伏します。

あなたの全能の恵みにあがなわれて、
私は栄光の自由を味わいます。
両腕を広げて世を抱きしめ、
けれども、あなたに付き従う人々にこそ付き従い、
ただあなたの聖徒たちだけを喜びとします。
最も清い白い衣を着て、神とともに歩む人々を。
　小さな群れと一つになって、私は憩います。
かしらにしっかりと連なる、健やかな肢体たちと。
赦しに恵まれた、選ばれた少数の人々、
油を注ぐ御霊に導かれて、
あなたのうちにあった思いへ、
神の深みへと入って行く人々と。
　この人々こそ、私の兄弟、友、親族です。
天にいます私の父のみこころを行う人々です。
完全な聖性を目指し、
あなたのご計画をすべて成し遂げようとし、
あなたがおられるとおりの者になることを渇き求め、
心をつくして自分の神を愛する人々です。
　この人々に対して、肉においてはどれほど離れていても、
地上のどこに散らされていても、
私は、偽りのない、限りない愛をいだきます。
それは、神のいのちのように変わらない愛です。
いのちの泉、そこからこの愛はわき出ました。
その泉と同じように清く、むらがなく、強い愛です。
　人に知られない、隠れた教会に結ばれて、
この確かな完全のきずなのうちに、
人目につかず安らかに、私はひとり住み、
一つに結ぶ恵みを誇ります。
私に、一人一人の信者に与えられ、
地と天にいる、あなたのすべての聖徒たちに与えられた恵みを。
（チャールズ・ウェスレー）

説教四十　クリスチャンの完全

「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく」（ピリピ三・一二）

（一）　聖書の中で、この言葉ほど人の反感を買ってきた言葉は、ほとんどありません。「完全」という語に、多くの人は耐えられません。その響きを聞くだけで、彼らは忌みきらいます。よく言われるように、完全を説く者、すなわち、完全はこの世で到達できると主張する者がいます。そういう者はだれでも、彼らから、異邦人や取税人（マタイ一八・一七）よりも悪い者とみなされる大きな危険を冒すのです。

（二）　そのため、こうした言葉を使うのをすっかりやめるように勧めた人々もいます。「それはあまりにも大きな反感を買ってきたから」というのです。けれども、こうした言葉は、神のみことばの中にあるのではないでしょうか。そうなら、たとえすべての人が反感をいだくとしても、神の使者は、どんな権威によってそれをわきに置けるでしょうか。私たちは、そのようにキリストに学んだのではありません（エペソ四・二〇）。また、そのようにして悪魔に機会を与えてはなりません（エペソ四・二七）。神が語られたことは何でも、私たちも語ります。人々が聞いても、拒んでも（エゼキエル二・七）、語るのです。私たちは知っているのです。キリストの教役者は、「神のみ旨を皆あますところなく」人々に「伝えておいた」（使徒二〇・二七）ときにだけ、「すべての人の血について、なんら責任がない」（使徒二〇・二六）者となれる、と。

（三）　ですから、私たちはこうした言葉をわきに置いてはなりません。これは人の言葉ではなく、神の言葉だからです。けれども、その意味を説明することはできますし、またそうすべきです。それは、心の誠実な人々が、上に召してくださる神の賞与を得る目標（ピリピ三・一四）から、右にも左にもそれないためです。そして、このことはなおさら必要です。先に読んだ節で、使徒は自分のことを、完全ではないと言っているからです。使徒は、「すでに完全な者になっているとか言うのではなく」（ピリピ三・一二）と言います。それなのに、そのすぐ後の一五節では、自分を、いや、ほかの多くの人々をも、完全な者として語っています。「わたしたちの中で全き人たちは、そのように考えるべきです」（ピリピ三・一五）と言うのです。

（四）　ですから、この見かけの矛盾から生じる難点を取り除きたいと思います。また、目標を目ざして走っている（ピリピ三・一四）人々に光を与え、足のなえている者が踏みはずすことのない（ヘブル一二・一三）ようにしたいと思います。そのために、私は次のことを示すように努めます。

第一に、クリスチャンはどういう意味で完全でないか。

第二に、どういう意味で完全であるか、です。

【一】　クリスチャンはどういう意味で完全でないか

（一）　第一に、クリスチャンがどういう意味で完全でないかを示すように努めます。経験からも聖書からも、次のことが明らかです。第一に、クリスチャンは知識において完全ではありません。この世では、無知から解放されるほど完全ではないのです。クリスチャンは、ほかの人々と同じように、今の世にかかわる多くのことを知っているかもしれません。また、来るべき世については、神が啓示された全般的な真理を知っています。同じように、クリスチャンは、「神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わった」（第一ヨハネ三・一）かを知っています。これは、生れながらの人が受けいれないことです（第一コリント二・一四）。こうしたことは、御霊によって判断されるべきものだからです。彼らは、自分の心のうちで御霊が力強く働かれる（エペソ三・一六）ことを知っています。また、神の摂理の知恵を知っています。その摂理は、彼らのすべての道をまっすぐにし（箴言三・六）、万事を益となるようにしてくださる（ローマ八・二八）のです。そうです、彼らは、生活のどんな場合にも、主が自

分に何を求めておられるかを知っています。また、どうすれば神に対しまた人に対して、良心に責められることのない状態を保てるか（使徒二四・一六）を知っています。

（二） けれども、彼らの知らないことは数えきれません。全能者ご自身については、彼らは、その限界を窮めることができません（ヨブ一一・七）。「見よ、これらはただ彼の道の端にすぎません」。「しかし、その力のとどろきに至っては、だれが悟ることができるでしょうか」（ヨブ二六・一四）。彼らには悟れません。天においてあかしをするものが三つ、すなわち父と子と聖霊とがあり、この三つが一つである（第一ヨハネ五・七）のは、どうしてなのか。永遠の神の御子が、どのようにして「僕のかたちをと」られた（ピリピ二・七）のか。こうしたことが悟れないのは、言うまでもありません。神の性質（第二ペテロ一・四）の属性の一つさえ、事情の一つさえ、悟れないのです。また、神が地上でその大いなるわざを行われる時期や場合は、彼らの知る限りではありません（使徒一・七）。神が世の初めから、そのしもべである預言者たちによって部分的に示してこられた（アモス三・七）ことさえ、知りえないのです。まして、神が「選ばれた者の数を満たして、御国を早められる」（祈祷書「埋葬式」）のは、いつなのか。「天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ」る（第二ペテロ三・一〇）のは、いつなのか。それは、なおさら知りません。

（三） 神が今、人の子らを扱っておられる多くのわざについてさえ、彼らはその理由を知りません。ただ、次のことに安んじるほかないのです。「雲と暗やみとはそのまわりにあり」ますが、「義と正とはそのみくらの基です」（詩篇九七・二）。そうです、彼ら自身に対する神の扱いについても、主はしばしばこう言われます。「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるでしょう」（ヨハネ一三・七）。いつも目の前にあるもの、神の御手による目に見えるわざについてさえ、彼らは何と少ししか知らないことでしょう！ 神が「北の天を空間に張り、地を何もない所に掛けられる」（ヨブ二六・七）のは、どのようにしてなのか。この巨大な機械のすべての部分を、断ち切れない秘密の鎖でどのように結び合わせておられるのか。最も善い人々でさえ、その無知はこれほど大きく、その知識はこれほど乏しいのです！

（四） ですから、この世で無知から解放されるほど完全な人は、だれもいません。第二に、誤りから解放されるほど完全な人もいません。誤りは、実に、無知からほとんど避けがたく生じるものです。「知るところは、今は一部分にすぎない」（第一コリント一三・一二）者は、知らないことについて、いつもまちがいやすいからです。確かに、神の子たちは、救いに欠かせないことについてはまちがいません。「暗きを光とし、光を暗し」とする（イザヤ五・二〇）ことはありません。また、「自分の生活の迷いによって死を求める」こともありません。彼らは「神に教えられる」（ヨハネ六・四五）からです。そして、神が彼らに教える道、すなわち聖なる道は、きわめて明らかです。旅人は、たとえ「愚かなる者」でも、「そこに迷い入ることはない」（イザヤ三五・八）ほどなのです。けれども、救いに欠かせないものでないことについては、彼らもまちがいます。しかも、たびたびまちがうのです。最も善く、最も賢い人々も、事実についてさえ、たびたびまちがいます。本当にあったことをなかったと信じたり、なされなかったことをなされたと信じたりするのです。あるいは、事実そのものについてはまちがわないとします。それでも、その事情についてはまちがうことがありえます。その事情の全部か多くが、実際とはまったく違っていたと信じるのです。そこから、さらに多くの誤りが生じないわけにはいきません。そのために、過去や現在の悪い行いを善いと信じ、善い行いを悪いと信じることがありえます。またそのために、人の人柄について、真実に従わない判断を下すことがありえます。善い人を実際より善いと思ったり、悪い人を実際より悪いと思ったりするだけではありません。ひどく悪い人を善い人だと信じることもあります。あるいは、聖く、責められるところのない人を、悪い人だと信じることもあるかもしれません。

（五） いや、聖書そのものについても、最も善い人々でさえ、まちがいやすく、実際に日々まちがっています。どれほど注意して避けようとしても、そうなのです。とりわけ、実践にあまり直接かかわらない部分については、そうです。ですから、神の子たちでさえ、聖書の多くの箇所の解釈について一致していません。けれども、意見が違うことは、どちらかの側が神の子でないという証拠には

なりません。それはむしろ、生きている人のだれにも誤りがないことは期待できない、という証拠です。全知であることを期待できないのと同じです。

（六）この項目と前の項目で述べたことに対して、次のような反論があるとします。使徒ヨハネは信仰の兄弟たちに語って、こう言っているではないか。あなたがたは「聖なる者に油を注がれている」ので、すべてのことを知っている（第一ヨハネ二・二〇）、と。答えは明らかです。「あなたがたは、自分の魂の健康に必要なすべてのことを知っている」という意味です。使徒がこの言葉をそれ以上に広げるつもりは決してなかったこと、絶対的な意味で言うことはできなかったことは、明らかです。第一に、そうでなければ、使徒は弟子を「その師以上のもの」（マタイ一〇・二四）として描くことになるからです。キリストご自身でさえ、人としては、すべてのことを知っておられたわけではないのです。キリストはこう言われました。「その時は、だれも知りません」。「子も知らない、ただ父だけが知っておられます」（マルコ一三・三二）。第二に、そのあとに続く使徒自身の言葉から明らかです。「わたしは、あなたがたを惑わす者たちについて、これらのことを書きおくりました」（第一ヨハネ二・二六）。また、使徒がたびたび繰り返している「だれにも惑わされてはなりません」（第一ヨハネ三・七）という戒めからも明らかです。もし、聖なる者から油を注がれた（第一ヨハネ二・二〇）まさにその人々が、無知だけでなく誤りにも陥りやすいのでなかったとします。それなら、この戒めはまったく不要だったでしょう。

（七）ですから、クリスチャンでさえ、無知からも誤りからも解放されるほど完全ではありません。第三に、弱さからも解放されていない、と付け加えることができます。ただ、この語を正しく理解するように気をつけましょう。ある人々がするように、自分で知っている罪に、この穏やかな名前を付けないようにしましょう。たとえば、ある人は私たちに、「人にはだれでも弱さがある。私の弱さは酒に酔うことだ」と言います。別の人には汚れの弱さがあり、また別の人には、神の聖なる御名をみだりに唱える（出エジプト二〇・七）弱さがあります。さらに別の人には、兄弟に「ばか者」と言う（マタイ五・二二）弱さや、「悪口をもって悪口に報い」る（第一ペテロ三・九）弱さがあります。このように言うあなたがたはみな、悔い改めないなら、その弱さを抱えたまま、生きながら地獄に下ることは明らかです。けれども、私がここで弱さと言うのは、本来、体の弱さと呼ばれるものだけではありません。道徳的な性質を持たない、内面や外面のあらゆる不完全さのことです。たとえば、悟りの弱さや遅さ、理解の鈍さや混乱、思考のまとまりのなさ、想像力の不規則な速さや重さがそうです。この種のものをこれ以上は挙げませんが、すぐに思い出す記憶力や、よく覚えておく記憶力が欠けていることもそうです。別の種類では、ふつうこれらからある程度生じるものがそうです。すなわち、話すことの遅さ、言葉づかいの不適切さ、発音の見苦しさです。これに、人との交わりやふるまいにおける名もない無数の欠点を、加えることもできるでしょう。これらが、最も善い人々にも、多かれ少なかれ見られる弱さです。そして、だれも、霊がこれを授けた神に帰る（伝道一二・七）ときまでは、これらから完全に解放されることを望めません。

（八）また、そのときまでは、誘惑からすっかり解放されることも期待できません。そのような完全は、この世のものではありません。確かに、ほしいままにあらゆる不潔な行いをすることに身をゆだねている（エペソ四・一九）人々がいます。彼らは、抵抗しない誘惑にほとんど気づかないので、誘惑がないように見えます。また、死んだ敬虔の形（第二テモテ三・五）の中でぐっすり眠りこんでいる人々も、多くいます。魂の賢い敵は、彼らがそうなのを見て、ひどい罪へは誘惑しません。彼らがとこしえの燃える火（イザヤ三三・一四）の中に落ちる前に、目を覚ましてしまわないためです。私は、次のことも知っています。神の子たちの中には、今は価なしに義とされ（ローマ三・二四）、キリストの血によるあがない（エペソ一・七）を見いだした人々がいます。彼らは、さしあたり何の誘惑も感じていません。神は彼らの敵に、「わが油そそがれた者たちにさわってはならない」、わが子らに「害を加えてはならない」（第一歴代一六・二二）と言われました。そしてこの期間、それは何週間か何か月かでしょうが、神は彼らに「高き所を乗り通らせ」ます（申命記三二・一三）。鷲の翼に載せる（出エジプト一九・四）ようにして、悪しき者の放つあらゆる火の矢（エペソ六・一六）の上に、彼らを運ばれるのです。けれども、この状態がいつまでも続くわけではありません。そのことは、ただ一つのことを考えるだけで分かります。神の御子ご自身が、肉の生活のとき（ヘブル五・七）、生涯の終わりまで誘惑を受けられ

た（ヘブル四・一五）ということです。ですから、そのしもべも同じことを覚悟すべきです。「僕がその主人のようであれば、それで十分」だからです（マタイ一〇・二五）。

（九） ですから、クリスチャンの完全は、無知や誤り、弱さや誘惑を免れることを意味するのではありません。ある人々は、そう想像してきたようです。実に、それは聖性の別名にすぎません。この二つは、同じものの二つの名前なのです。ですから、完全な人はみな聖く、聖い人はみな、聖書の意味で完全です。けれども、最後に、この点でも地上には絶対的な完全はない、ということに注意しておきます。いわゆる段階の完全はありません。絶えず増し加わる余地のない完全は、一つもないのです。ですから、人がどれほど到達していても、どれほど高い程度で完全であっても、なお「恵み」において「ますます豊かにな」る（第二ペテロ三・一八）必要があります。また、日々、救主なる神を知る知識と、神への愛とにおいて、進んで行く必要があるのです。

【二】 クリスチャンはどういう意味で完全であるか

（一） では、クリスチャンはどういう意味で完全なのでしょうか。これを第二に示すように努めます。けれども、前もって言っておくべきことがあります。肉体の一生と同じように、クリスチャンの生活にもいくつかの段階がある、ということです。神の子たちのある者は、まだ生れたばかりの乳飲み子（第一ペテロ二・二）にすぎません。ほかの者は、もっと成熟に達しています。それに応じて、ヨハネはその第一の手紙で（第一ヨハネ二・一二～一四）、子たちと呼ぶ人々、若者たちと呼ぶ人々、父たちと呼ぶ人々に、それぞれ語りかけています。使徒は言います。「子たちよ。あなたがたにこれを書きおくるのは」、あなたがたの「罪がゆるされたから」です（第一ヨハネ二・一二）。あなたがたは、ここまで到達したのです。「価なしに義とされ」（ローマ三・二四）、「イエス・キリストにより、神に対して平和を得て」いる（ローマ五・一）のです。「若者たちよ。あなたがたに書きおくるのは、あなたがたが、悪しき者にうち勝ったから」です（第一ヨハネ二・一三）。あるいは、後で付け加えているように、「あなたがたが強い者であり、神の言があなたがたに宿」っている「から」です（第一ヨハネ二・一四）。あなたがたは、悪しき者の放つ火の矢を消しました（エペソ六・一六）。それは、悪しき者があなたがたの最初の平和をかき乱した疑いと恐れです。そして、あなたがたの罪が赦されたという神のあかしが、今、あなたがたの心にとどまっています。「父たちよ。あなたがたに書きおくるのは、あなたがたが、初めからいますかたを知ったから」です（第一ヨハネ二・一三）。あなたがたは、魂の最も奥深いところで、父をも子をもキリストの霊をも知りました。あなたがたは、「全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで」至っています（エペソ四・一三）。

（二） この説教の後半で私が主に語るのは、この人々のことです。この人々だけが、本来の意味でクリスチャンだからです。けれども、キリストにある幼な子（第一コリント三・一）でさえ、第一に、罪を犯さないという意味で完全です。言いかえれば、そういう意味で神から生れているのです（この言い方も、さまざまな意味でとられます）。神の子たちのこの特権を疑う人がいるとします。その問題は、抽象的な推論によって決めるべきではありません。そうした推論は果てしなく引き延ばされ、問題を前とまったく同じままに残しかねないからです。また、あれこれの特定の人の経験によって決めるべきでもありません。多くの人は、罪を犯しているのに、犯していないと思いこむかもしれません。けれども、それはどちらの側にとっても、何の証明にもなりません。私たちは、教えとあかしとに訴えます（イザヤ八・二〇）。「あらゆる人を偽り者としても、神を真実なものとすべきです」（ローマ三・四）。私たちは神の言葉に、ただそれだけに、とどまります。それによって、私たちは判断されるべきです。

（三） さて、神の言葉は、はっきりとこう宣言しています。義とされた人々、最も低い意味で新しく生れた人々でさえ、「罪にとどまる」ことはなく、「なお、その中に生き」ることはできない（ローマ六・一～二）。彼らは、キリストに「結びついてその死の様にひとしく」なっている（ローマ六・五）。彼らの「古き人はキリストと共に十字架につけられ」、罪のからだは滅ぼされて、もはや罪の奴隷となることはない。キリストと共に死んだので、罪から解放されている（ローマ六・六～七）。彼らは「罪に対して死んだ者であり」、「神に生きて

いる者」である（ローマ六・一一）。「律法の下にあるのではなく、恵みの下にある」彼らは、「罪に支配されることはない」（ローマ六・一四）。それどころか、彼らは「罪から解放され、義の僕となった」（ローマ六・一八）。神の言葉はこう宣言しているのです。

（四）これらの言葉に含まれていることとして、どんなに少なく見ても、次のことは言えます。ここで語られている人々、すなわち、すべての真のクリスチャンは、外面の罪から解放されている、ということです。真のクリスチャンとは、言いかえれば、キリストを信じる者のことです。パウロがここでさまざまな言い方で表している同じ解放を、ペテロは次の一つの言い方で表しています。「肉において苦しんだ人は」、「罪からのがれたの」です。それは、「もはや人間の欲情によらず、神の御旨によって過ごすため」です（第一ペテロ四・一～二）。というのは、この罪からのがれることを、最も低い意味で、外面のふるまいだけにかかわるものと解釈するとします。それでも、それは外面の行為から、律法に対する外面のあらゆる違反から離れることを、意味するはずだからです。

（五）けれども、最もはっきりしているのは、ヨハネの第一の手紙三章八節以下の、よく知られた言葉です。「罪を犯す者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためです。すべて神から生れた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができません」（第一ヨハネ三・八～九）。また、五章の言葉もそうです。「すべて神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは知っています」。神から生れた者は自分を守り、「悪しき者が手を触れるようなことはありません」（第一ヨハネ五・一八）。

（六）確かに、これはただ次のような意味だと言われます。その人は故意には罪を犯さない。あるいは、習慣的には罪を犯さない。あるいは、ほかの人々のようには犯さない。あるいは、以前のようには犯さない、と。けれども、だれがそう言うのでしょうか。ヨハネがでしょうか。そうではありません。本文には、そのような言葉はありません。その章全体にも、その手紙全体にも、ヨハネの書いたもののどこにもありません。それなら、大胆な主張に答える最善の方法は、ただそれを否定することです。そして、もしだれかがそれを神の言葉から証明できるなら、その人に有力な論拠を持ち出してもらいましょう。

（七）そして、こうした奇妙な主張を支えるために、たびたび持ち出されてきた論拠のようなものがあります。神の言葉に記されている実例から引き出されたものです。彼らは言います。「何だって！　アブラハム自身、罪を犯したではないか。言い逃れをして、自分の妻を妻ではないと言ったではないか（創世記一二・一三、二〇・二）。モーセも、争いの水のほとりで神を怒らせたとき（民数記二〇・一〇～一三）、罪を犯したではないか。いや、一人ですべてを代表させるなら、神の『心にかなう人』（サムエル記上一三・一四）であるダビデでさえ、ヘテびとウリヤのことで罪を犯したではないか。殺人と姦淫さえ犯したではないか」。確かに、ダビデは罪を犯しました。これはみな本当です。けれども、あなたはここから何を推論しようとするのでしょうか。次のことは認めてよいでしょう。第一に、ダビデは、生涯の大筋において、ユダヤ人の中で最も聖い人の一人でした。第二に、ユダヤ人の中で最も聖い人々も、ときには罪を犯しました。けれども、あなたがここから、次のように推論しようとするとします。すべてのクリスチャンは生きている限り罪を犯しているし、犯さなければならない、と。そういう結論を、私たちはまったく否定します。その前提から、それは決して出てきません。

（八）このように論じる人々は、主の次の宣言を一度も考えたことがないようです。「あなたがたによく言っておきます。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起りませんでした。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きいのです」（マタイ一一・一一）。実に、ここで言う「天国」（マタイ一一・一一）を、栄光の御国の意味だと想像してきた人々もいるのではないかと思います。まるで神の御子が、ただ次のことを私たちに明かされたにすぎないかのようです。天で栄光を受けた最も小さな聖徒も、地上のどんな人より大きい、ということです。これは、口にするだけで十分に反駁になります。ですから、疑いの余地はありません。ここで言う「天国」は、あるいはルカの言い方では「神の国」（ルカ七・二八）は、地上の神の国です。キリストを信じるすべての真の信者、すべての真のクリスチャンが属している国です。次の節で、天国が

激しく襲われ、奪い取られる（マタイ一一・一二）と言われているのと同じです。ですから、この言葉で、主は二つのことを宣言しておられます。第一に、主が肉体をとって来られる前には、すべての人の子らの中で、バプテスマのヨハネより大きい者は一人もいなかった、ということです。そこから明らかに、アブラハムもダビデも、どのユダヤ人も、ヨハネより大きくはなかった、ということになります。第二に、主は、神の国で最も小さい者も、ヨハネよりは大きい、と宣言しておられます。この神の国とは、主が地上に打ち立てるために来られた御国で、激しく襲う者たちが今、奪い取り始めていた御国です。ある人々が解釈したように、もっと大きな預言者だというのではありません。それは、事実として明らかにまちがいです。そうではなく、神の恵みにおいて、また私たちの主イエス・キリストを知る知識において、大きいのです。ですから、真のクリスチャンの特権を、昔ユダヤ人に与えられた特権で測ることはできません。彼らの「務」、すなわち制度が、「栄光のうちに行われ」たことを、私たちは認めます。けれども、私たちの務めは「はるかに栄光に満ちたもの」です（第二コリント三・七～九）。ですから、キリスト教の制度をユダヤ教の水準まで引き下げようとする人がいます。律法と預言者に記された弱さの実例を拾い集め、そこから、「キリストを着た」（ガラテヤ三・二七）人々もそれ以上の力を与えられていない、と推論する人がいます。そういう人はだれでも、「聖書も神の力も知らないから、思い違いをして」いるのです（マタイ二二・二九）。

（九）「しかし、たとえあの実例から推論できないとしても、同じことを証明する言明が聖書にあるではないか。聖書ははっきりと、『正しい人でさえ、一日に七たび罪を犯す』と言っているではないか」。私は答えます。いいえ。聖書は、そのようなことを言っていません。聖書全体のどこにも、そのような本文はありません。意図されているのは、箴言二四章一六節のようです。その言葉はこうです。「正しい者は七たび倒れても、また起きあがります」（箴言二四・一六）。けれども、これはまったく別のことです。というのは、第一に、「一日に」という語は本文にないからです。ですから、正しい人が生涯に七たび倒れるなら、ここで言われていることは、それで満たされます。第二に、ここでは罪に陥ることは、まったく述べられていません。ここで述べられているのは、この世の苦難に陥ることです。そのことは、前の節から明らかです。その言葉はこうです。悪しき者よ、「正しい者の家をうかがってはならない、その住む所に乱暴をしてはなりません」（箴言二四・一五）。続いて、こうあります。「正しい者は七たび倒れても、また起きあがる、しかし、悪しき者は災によって滅びます」（箴言二四・一六）。これは、こう言っているかのようです。「神は正しい者を、その苦難から救い出されます。けれども、あなたが倒れるときには、あなたを救い出す者はだれもいません」。

（一〇）反対者たちは続けます。「しかし、ほかの箇所では、ソロモンははっきりと、『罪を犯さない者はない』（列王紀上八・四六、第二歴代六・三六）と言っている。いや、『善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない』（伝道七・二〇）と言っているではないか」。私は答えます。疑いもなく、ソロモンの時代にはそうでした。そうです、アダムからモーセまで、モーセからソロモンまで、ソロモンからキリストまで、そうでした。そのころは、罪を犯さない人はいませんでした。罪がこの世にはいった（ローマ五・一二）その日から、善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいませんでした。神の御子が私たちの罪をとり除くために現れた（第一ヨハネ三・五）ときまで、そうだったのです。「相続人が子供である間は」、「僕となんの差別も」ない（ガラテヤ四・一）ことは、疑いもなく本当です。また、それと同じく、彼らが教会のあの幼い状態の間、この世の初歩的なものの下に縛られていた（ガラテヤ四・三）ことも、本当です。彼らとは、ユダヤ教の制度の下にあった昔の聖徒たちすべてのことです。「しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を」、「律法の下に生れさせて、おつかわしになりました。それは、律法の下にある者をあがない出すため」、彼らに「子たる身分を授けるためでした」（ガラテヤ四・四～五）。すなわち、彼らが「今や、わたしたちの救主キリスト・イエスの出現によって明らかにされた恵み」（第二テモテ一・一〇）を受けるためでした。「キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのです」（第二テモテ一・一〇）。ですから今、彼らは「もはや僕ではなく、子です」（ガラテヤ四・七）。ですから、律法の下にあった人々がどうであったにせよ、私たちはヨハネとともに、安心してこう断言できま

す。福音が与えられてからは、「神から生れた者は罪を犯さない」（第一ヨハネ五・一八）のです。

（一一）　ユダヤ教の制度とキリスト教の制度との間にある大きな違いに注意することは、きわめて重要です。しかも、ふつうなされているよりもっと注意深く、注意すべきです。また、同じ使徒がその福音書の七章で示している、その違いの根拠にも注意すべきです（ヨハネ七・三八～三九）。ヨハネはそこで、ほむべき主の言葉を記しています。「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るでしょう」（ヨハネ七・三八）。そのすぐ後に、こう付け加えています。「これは」、「御霊をさして言われたの」です。それは、フー・エメッロン・ランバネイン・ホイ・ピステウオンテス・エイス・アウトン（οὗ ἔμελλον λαμβάνειν οἱ πιστεύοντες εἰς αὐτόν）、すなわち、イエスを信じる人々が後になって受けることになっていた御霊です。「すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのです」（ヨハネ七・三九）。さて、ある人々は、ここで使徒が、奇跡を行う聖霊の力はまだ与えられていなかった、と言っているのだと教えてきました。けれども、使徒がそういう意味で言っているはずはありません。その力は与えられていたからです。主は、最初に使徒たちを福音を宣べ伝えるためにつかわされたとき、その力を使徒たち全員に与えておられました。主はそのとき、彼らに汚れた霊を追い出す権威（マタイ一〇・一）を与え、病人をいやし、さらに死人をよみがえらせる（マタイ一〇・八）力を与えられたのです。けれども、聖霊は、人を聖くする恵みとしては、まだ与えられていませんでした。イエスが栄光を受けられた後に与えられたようには、与えられていなかったのです。主は、「高いところに上った時、とりこを捕えて引き行」かれた（エペソ四・八）、まさにそのときに、人々のための贈り物を受けられたのです。いや、そむく者のためにさえ、受けられたのです。それは、主なる神が彼らの間に住まわれるためでした（詩篇六八・一八）。そして、五旬節の日がきた（使徒二・一）とき、そのとき初めて、それが起こりました。「父の約束を待っ」ていた（使徒一・四）人々が、与えられた聖霊によって、罪に勝ち得て余りある者（ローマ八・三七）とされたのです。

（一二）　罪からのこの大いなる救いが、イエスが栄光を受けられるまでは与えられなかったことを、ペテロもはっきりとあかししています。ペテロは、肉による兄弟たちが今、「信仰の結果なるたましいの救を得ている」（第一ペテロ一・九）ことを語って、こう付け加えています。「この救については、あなたがたに対する恵み」、すなわち恵みの制度、「のことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べました。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光」、すなわち栄光ある救い、「とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのです。彼らには、「自分たちのためではなくて」、私たちのための「奉仕であることを示されました。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのです」（第一ペテロ一・一〇～一二）。聖霊は、五旬節の日につかわされ、そうして、あらゆる時代に、すべての真の信者の心につかわされたのです。この根拠、すなわち、イエス・キリストの現れによって彼らにもたらされた恵みの上に、使徒はあの力強い勧めを築くことができました。「それだから、心の腰に帯を締め」なさい（第一ペテロ一・一三）。「あなたがたを召してくださった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい」（第一ペテロ一・一五）。

（一三）　これらのことをよく考えた人々は、認めざるをえません。クリスチャンの特権は、ユダヤ教の制度の下にあった人々について旧約聖書が記していることによっては、決して測れないのです。今や時が満ち、今や聖霊が与えられ、神の大いなる救いがイエス・キリストの現れによって人々にもたらされているからです。天国は今、地上に打ち立てられています。この天国について、神の御霊は昔、こう宣言されました。「彼らの中の弱い者も、その日には、ダビデのようになります。またダビデの家は神のように、彼らに先だつ主の使のようになります」（ゼカリヤ一二・八）。ダビデは、クリスチャンの完全の模範や基準であるどころではないのです。

（一四）　ですから、あなたが、こう証明したいとします。「神から生れた者は罪を犯さない」（第一ヨハネ五・一八）という使徒の言葉は、その平明で自然

な、明白な意味に従って理解すべきではない、と。それなら、新約聖書から証拠を持ってこなければなりません。そうでなければ、空を打つような拳闘をする（第一コリント九・二六）ことになるでしょう。そうした証拠の中で、ふつう最初に持ち出されるのは、新約聖書に記されている実例から取られたものです。こう言われます。「使徒たち自身が罪を犯したではないか。いや、使徒の中で最も大いなるペテロとパウロでさえ、罪を犯した。パウロはバルナバとの激論によって（使徒一五・三九）、ペテロはアンテオケでの偽善によって（ガラテヤ二・一一～一三）罪を犯したのだ」。よろしい。ペテロもパウロも、そのとき罪を犯したとしましょう。あなたはそこから何を推論しようとするのですか。ほかの使徒たちもみな、ときには罪を犯した、ということでしょうか。そこには、証明の影もありません。あるいは、そこから、使徒時代のほかのクリスチャンもみな罪を犯した、と推論するのでしょうか。ますます悪くなります。それは、正気の人なら決して思いつかないだろうと思われるような推論です。あるいは、こう論じるのでしょうか。「使徒のうちの二人が一度罪を犯したのなら、あらゆる時代のほかのクリスチャンもみな、生きている限り罪を犯しているし、これからも犯すのだ」。ああ、兄弟よ！　人並みの悟りのある子供でも、このような論じ方は恥ずかしく思うでしょう。まして、だれかが罪を犯さなければならない、などと、もっともらしい論拠をもって推論することは、なおさらできません。そうではありません。私たちがそのように言うことなど、断じてありません！　使徒たちに、罪を犯す必然が負わされていたのではありません。神の恵みは、確かに彼らに対して十分でした（第二コリント一二・九）。そして今日、私たちに対しても十分です。彼らに臨んだ試練と同時に、のがれる道がありました（第一コリント一〇・一三）。どんな試練においても、どの人の魂にも、のがれる道があるのと同じです。ですから、どんな罪へ誘惑される人も、屈する必要はありません。だれも、耐えられないような試練に会わされることはないからです（第一コリント一〇・一三）。

（一五）「しかし、パウロは三度も主に祈ったが、それでも自分の試錬からのがれることができなかったではないか」。パウロ自身の言葉を、文字どおりに訳して考えてみましょう。「わたしの肉に対するとげ、サタンの使い」、すなわち使者、「がわたしに与えられました。わたしを打つためです。このことについて、わたしは、それが」、あるいは彼が、「わたしから離れ去るようにと、三度も主に祈りました。すると主は、わたしに言われました。『わたしの恵みはあなたに対して十分です。わたしの力は弱さのうちに完全にされるのです』。それだから、わたしはむしろ大いに喜んで」、これらの「わたしの弱さを誇りましょう。キリストの力がわたしに宿るためです。だから、わたしは弱さを喜びとします。わたしが弱いときにこそ、わたしは強いからです」（第二コリント一二・七～一〇）。

（一六）　この聖句は、罪を擁護する人々のとりでの一つですから、十分に吟味するのがよいでしょう。では、次のことに注意しましょう。第一に、このとげが何であったにせよ、それがパウロに罪を犯させたとは、決して見えません。まして、パウロに罪を犯す必然を負わせたとは、なおさら見えません。ですから、ここから、クリスチャンのだれかが罪を犯さなければならない、と証明することは決してできません。第二に、古代の教父たちは、それが体の痛みであったと伝えています。テルトゥリアヌスは、「激しい頭痛」だと言います（『貞潔について』）。クリュソストモスもヒエロニムスも、それに同意しています。キュプリアヌスは（『死について』）、もう少し一般的に、こう言い表しています。Carnis et corporis multa ac gravia tormenta（肉と体の多くの重い苦しみ）第三に、使徒自身の言葉が、これにぴったり一致します。「わたしを打ち、たたき、こぶしで打つための、肉に対するとげ」（第二コリント一二・七）。「わたしの力は弱さのうちに完全にされる」（第二コリント一二・九）。この「弱さ」という同じ語が、この二つの節だけで四度も出てきます。けれども、第四に、それが何であったにせよ、内面の罪でも外面の罪でもありえませんでした。それは、高ぶりや怒りや情欲の外面の表れでありえなかったのと同じように、その内面のうごめきでもありえませんでした。このことは、すぐ後に続く言葉から、どんな異論の余地もなく明らかです。「わたしは大いに喜んで」これらの「わたしの弱さを誇りましょう。キリストの力がわたしに宿るためです」（第二コリント一二・九）。何ですって！　パウロは高ぶりを、怒りを、情欲を誇ったのでしょうか。こうした弱さによって、キリストの力がパウロに宿ったのでしょうか。パウロは続けます。「だから、わたしは弱さを喜びとします。わたしが弱いときにこそ、わたしは強

いからです」（第二コリント一二・一〇）。すなわち、体において弱いときにこそ、霊において強いのです。けれども、だれが、「私が高ぶりや情欲によって弱いときにこそ、私は霊において強い」などと、あえて言うでしょうか。キリストの力が自分に宿っているのを知っているあなたがたすべてを、私はきょう証人として呼びます。あなたがたは、怒りや高ぶりや情欲を誇ることができますか。こうした弱さを喜びとすることができますか。こうした弱さが、あなたがたを強くしますか。もしできるなら、それから逃れるために、地獄に飛びこんでもよいとさえ思うのではないでしょうか。それなら、使徒がそれを誇り、喜びとすることができたかどうか、あなたがた自身で判断してください。最後に、次のことに注意しましょう。このとげがパウロに与えられたのは、パウロがこの手紙を書くより十四年以上も前でした（第二コリント一二・二）。そして、この手紙そのものも、パウロが走るべき行程を走りつくす（第二テモテ四・七）何年も前に書かれたのです。ですから、パウロにはその後、走るべき長い行程があり、戦うべき多くの戦いがあり、得るべき多くの勝利がありました。神のあらゆる賜物と、イエス・キリストを知る知識とにおいて、大きく増し加わることもあったのです。ですから、パウロがそのとき感じた霊的な弱さから、もしそういうものだったとしても、次のように推論することは決してできません。パウロが決して強くされなかった。老年になったパウロ（ピレモン九）、キリストにある父が、なお同じ弱さに苦しんでいた。死ぬ日まで、もっと高い状態にはなかった、と。これらすべてから、パウロのこの例はこの問題とはまったく無関係であることが、明らかです。「神から生れた者は罪を犯さない」（第一ヨハネ五・一八）というヨハネの断言とも、決してぶつからないのです。

（一七）「しかし、ヤコブはこれに真っ向から反対しているではないか。ヤコブは『わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである』（ヤコブ三・二）と言っている。そして、あやまちを犯すことは、罪を犯すことと同じではないか」。この箇所では同じだと、私も認めます。ここで語られている人々が罪を犯したことを、認めます。いや、彼らがみな多くの罪を犯したことを、認めます。けれども、ここで語られている人々とは、だれでしょうか。それは、神がつかわされなかった多くの師、すなわち教師たちです。おそらく、前の章で厳しくとがめられている、行いのない信仰を教えた、あのむなしい人々と同じ人々でしょう。使徒自身でも、真のクリスチャンのだれかでもありません。「わたしたち」という語は、霊感による書物だけでなく、ほかのすべての書物にも共通する言葉のあやで使われています。この語に、使徒が自分自身やほかの真の信者を含めることがありえなかったことは、明らかです。第一に、九節の同じ語から明らかです。使徒は言います。「わたしたちは、この舌で」神「をさんびし、また、その同じ舌で」、「人間をのろって」います。「同じ口から、さんびとのろいとが出て来」ます（ヤコブ三・九〜一〇）。そのとおりです。けれども、それは使徒の口からでもなく、キリストにある新しく造られた者（第二コリント五・一七）のだれの口からでもありません。第二に、本文のすぐ前にあって、本文と明らかにつながっている節から明らかです。「わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの者は」、師に、すなわち「教師にならないがよい。わたしたち」が、「もっときびしいさばきを受けることが、よくわかっているから」です（ヤコブ三・一）。「わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものです」（ヤコブ三・二）。「わたしたち」とは！　だれのことでしょうか。使徒たちでも、真の信者でもありません。あの多くのあやまちのゆえに、もっときびしいさばきを受けることを知っている人々です。けれども、これは使徒自身についても、その足跡に従って歩んだ人々についても、言われたはずがありません。肉によらず霊によって歩く（ローマ八・四）者は、「罪に定められることがない」（ローマ八・一）からです。いや、第三に、この節そのものが証明しています。「わたしたちは皆」、「あやまちを犯す」（ヤコブ三・二）という言葉は、すべての人についても、すべてのクリスチャンについても言われたものではありえません。その節では、すぐに続いて、最初に挙げられた「わたしたち」のようにはあやまちを犯さない人のことが述べられているからです。ですから、その人は、あの「わたしたち」とはっきり区別されて、「完全な人」（ヤコブ三・二）と宣言されているのです。

（一八）　このように、ヤコブは自分の言葉をはっきりと説明し、その意味を定めています。それでも、なお疑う人がいないように、ヨハネは、先に挙げたはっきりした宣言によって、この問題にまったく決着をつけています。ヨハネは、ヤコブより何年も後に書いたのです。けれども、ここで新しい難点が生じる

かもしれません。ヨハネを、ヨハネ自身とどう調和させればよいのか、という難点です。ある箇所では、ヨハネは「すべて神から生れた者は、罪を犯さない」（第一ヨハネ三・九）と宣言しています。また、「神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは知っている」（第一ヨハネ五・一八）とも言っています。それなのに、別の箇所では、「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」（第一ヨハネ一・八）と言っています。また、「もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない」（第一ヨハネ一・一〇）とも言っています。

（一九）これは、初めは大きな難点に見えるかもしれません。けれども、次のことに注意すれば、消えうせます。第一に、一〇節が八節の意味を定めています。前の節の「もし、罪がないと言うなら」（第一ヨハネ一・八）は、後の節の「もし、罪を犯したことがないと言うなら」（第一ヨハネ一・一〇）によって説明されているのです。第二に、今考えている問題は、私たちが以前に罪を犯したかどうかではありません。そして、この二つの節のどちらも、私たちが今罪を犯している、とは断言していません。第三に、九節が八節と一〇節の両方を説明しています。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださいます」（第一ヨハネ一・九）。これは、ヨハネがこう言っているかのようです。「わたしは前に、イエス・キリストの血が、『すべての罪からわたしたちをきよめる』（第一ヨハネ一・七）と断言しました。けれども、だれも、自分にはそれは要らない、自分にはきよめられるべき罪などない、と言ってはなりません。罪がないと言うなら、罪を犯したことがないと言うなら、わたしたちは自分を欺き、神を偽り者とするのです。しかし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、『神は真実で正しいかた』です。神は『その罪をゆるし』てくださるだけでなく、『すべての不義からわたしたちをきよめて』くださいます（第一ヨハネ一・八～一〇）。それは、わたしたちが『今後はもう罪を犯さない』（ヨハネ八・一一）ためです」。

（二〇）ですから、ヨハネは、ほかの聖なる記者たちとも、ヨハネ自身とも、よく一致しています。このことについてのヨハネの断言をすべて、一目で見渡せるように並べれば、そのことはいっそう明らかになるでしょう。ヨハネは、第一に、イエス・キリストの血がすべての罪から私たちをきよめる（第一ヨハネ一・七）と宣言しています。第二に、だれも、私は罪を犯したことがない、私にはきよめられるべき罪がない、と言うことはできません。第三に、けれども神は、私たちの過去の罪を赦し、これから先も罪から救ってくださる用意がおありです（第一ヨハネ一・七～一〇）。第四に、使徒は、「これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もし、罪を犯す者があれば」（第一ヨハネ二・一）と言います。この語は、「罪を犯した者があれば」と訳すこともできます。そういう人も、罪にとどまっている必要はありません。「父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられ」るからです（第一ヨハネ二・一）。ここまでは、すべて明らかです。けれども、これほど重大な点に疑いが残らないように、使徒は三章でこの主題をもう一度取り上げ、自分の意味を詳しく説明しています。使徒は言います。「子たちよ。だれにも惑わされてはなりません」（第一ヨハネ三・七）。使徒がこう言うのは、自分が罪にとどまる者たちを少しでも励ましたかのように受け取られないためです。「彼が義人であると同様に、義を行う者は義人です。罪を犯す者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまうためです。すべて神から生れた者は、罪を犯しません。神の種が、その人のうちにとどまっているからです。また、その人は、神から生れた者であるから、罪を犯すことができません。神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかです」（第一ヨハネ三・七～一〇）。ここで、この点に決着がつけられています。それまでは、弱い心にはいくらか疑いの余地があったかもしれない点です。霊感を受けた記者たちの最後の人が、わざわざ決着をつけ、最もはっきりした仕方で決めているのです。ですから、ヨハネの教えにも、新約聖書全体の趣旨にも従って、私たちはこの結論を定めます。クリスチャンは、罪を犯さないという点で完全です。

（二一）　これは、すべてのクリスチャンの栄光ある特権です。そうです、キリストにある幼な子にすぎない人でも、そうなのです。けれども、第二の意味で完全だと断言できるのは、一部の人々についてだけです。主にあって強い（エペソ六・一〇）人々、「悪しき者にうち勝った」（第一ヨハネ二・一三）人々、いやむしろ「初めからいますかたを知った」（第一ヨハネ二・一四）人々です。第二の意味とは、悪い思いと悪い気質から解放されている、という意味です。まず、悪い思い、罪深い思いからの解放です。けれども、ここで注意しておきます。悪についての思いが、いつも悪い思いであるとは限りません。罪についての思いと、罪深い思いとは、大きく違うのです。たとえば、人は、ほかの人が犯した殺人のことを考えることがあります。けれども、これは悪い思いでも、罪深い思いでもありません。同じように、悪魔は、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」（マタイ四・九）と言いました。そのとき、ほむべき主ご自身も、確かにその言葉のことを考え、理解されました。それでも、主には悪い思いも、罪深い思いもありませんでした。実に、そのような思いをいだくことなど、ありえなかったのです。そして、まさにここから、真のクリスチャンにもそのような思いはない、ということになります。完全な者はみな、その師のようだ（ルカ六・四〇）からです。ですから、主が悪い思いや罪深い思いから解放されておられたのなら、彼らも同じように解放されているのです。

（二二）　そして、実に、その主人のようになった僕の中で、悪い思いがどこから出て来るでしょうか。「人の心の中から」、もし出て来るとすればですが、「悪い思いが出て来る」のです（マルコ七・二一）。ですから、もしその人の心がもはや悪くないなら、悪い思いがもはやそこから出て来ることはありえません。もし木が悪ければ、実も悪いでしょう。けれども、木は良いのです。ですから、実も良いのです（マタイ一二・三三）。主ご自身が、こうあかししておられます。「すべて良い木は良い実を結」びます。「良い木が悪い実をならせることはない」のです。「悪い木が良い実をならせることはできない」のと同じです（マタイ七・一七～一八）。

（二三）　真のクリスチャンのこの同じ幸いな特権を、パウロは自分の経験から断言しています。パウロは言います。「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく」、神によって「要塞をも破壊するほどの力あるものです。わたしたちはさまざまな議論を破り」ます（第二コリント一〇・四）。ここで「議論」と訳されている語は、英語の聖書では「想像」となっていますが、むしろ「議論」です。ロギスムース（λογισμους）という語は、そういう意味だからです。神の宣言や約束や賜物に逆らう、高ぶりと不信仰のあらゆる議論のことです。さらに、神を知る知識に「逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」ます（第二コリント一〇・五）。

（二四）　そして、クリスチャンは実に悪い思いから解放されているように、第二に、悪い気質からも解放されています。このことは、先に挙げた主ご自身の宣言から明らかです。「弟子はその師以上のものではない」が、完全な者はみな、その師のようになります（ルカ六・四〇）。主はその直前に、キリスト教の最も崇高な教えのいくつかを語っておられました。それは、血肉にとって最もつらい教えでもありました。「あなたがたに言います。敵を愛し、憎む者に親切にしなさい（ルカ六・二七）。「あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けて」やりなさい（ルカ六・二九）。主は、世がこれを受けいれないことをよく知っておられました。ですから、すぐに付け加えられます。「盲人は盲人の手引ができるでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないでしょうか」（ルカ六・三九）。これは、主がこう言われたかのようです。「こうしたことについて、血肉に相談してはなりません（ガラテヤ一・一六）。霊的な判断力のない人々、神がその心の目を開いておられない（エペソ一・一八）人々に、相談してはなりません。彼らもあなたがたも、ともに滅びることのないためです」。次の節で、主は、こうした賢い愚か者たちがいたるところで私たちに持ち出す、二つの大きな反論を取り除かれます。「これは重すぎて負いきれない」という反論と、「これは高すぎて到達できない」という反論です。主はこう言われます。「『弟子はその師以上のものではない』（ルカ六・四〇）。ですから、わたしが苦しんだのなら、わたしの足跡に従うことに甘んじなさい。そして、わたしが自分の言葉を成就することを、疑ってはなりません。完全な者はみな、その師のようになるのです」（ルカ六・四〇）。け

れども、その師は、あらゆる罪深い気質から解放されておられました。ですから、その弟子も、すなわちすべての真のクリスチャンも、そうなのです。

（二五）この人々はみな、パウロとともにこう言うことができます。「わたしはキリストと共に十字架につけられました」（ガラテヤ二・一九）。「生きているのは、もはや、わたしではありません。キリストが、わたしのうちに生きておられるのです」（ガラテヤ二・二〇）。これは、外面の罪からだけでなく、内面の罪からの解放をも、明らかに述べている言葉です。このことは、否定的にも肯定的にも表されています。否定的には、私は生きていない、と表されています。すなわち、私の悪い性質、罪のからだが滅ぼされたのです。肯定的には、キリストが私のうちに生きておられる、と表されています。したがって、聖であって、正しく、かつ善なる（ローマ七・一二）すべてのものが、私のうちに生きているのです。実に、キリストが私のうちに生きておられることと、私が生きていないこととの二つは、切り離せないほど結びついています。「光とやみとなんの交わりがあるでしょうか。キリストとベリアルとなんの調和があるでしょうか」（第二コリント六・一四～一五）。

（二六）ですから、真の信者のうちに生きておられる方は、「その信仰によって彼らの心をきよめ」られました（使徒一五・九）。それで、栄光の望みであるキリスト（コロサイ一・二七）を自分のうちに持つ人はみな、「彼がきよくあられるように、自らをきよく」するのです（第一ヨハネ三・三）。その人は、高ぶりからきよめられています。キリストは、心のへりくだった方だった（マタイ一一・二九）からです。その人は、我意から、すなわち自分の欲するままを行うことから、きよめられています。キリストは、ただ父のみこころを行い、そのみわざをなし遂げる（ヨハネ四・三四）ことだけを望まれたからです。そして、ふつうの意味での怒りから、きよめられています。キリストは柔和で優しく、忍耐深く、寛容な方だったからです。私は、ふつうの意味での、と言います。すべての怒りが悪いわけではないからです。主ご自身についても、主があるとき「怒りを含んで彼らを見まわし」た（マルコ三・五）と書かれています。けれども、それはどんな種類の怒りだったでしょうか。次の語がそれを示しています。シュルリュプーメノス（συλλυπούμενος）、すなわち、主は同時に「その心のかたくなのを嘆いて」おられたのです（マルコ三・五）。ですから、主は罪に対して怒り、同じ瞬間に、罪人たちのために嘆かれたのです。罪過に対しては怒り、あるいは不快に思われましたが、罪を犯す者たちのためには悲しまれたのです。主は、その行為を、怒りをもって、いや憎しみをもって見られました。その人々を、悲しみと愛をもって見られました。完全な人よ、あなたも行って同じようにしなさい（ルカ一〇・三七）。このように怒りなさい。そうすれば、あなたは罪を犯しません（エペソ四・二六）。神に対するあらゆる罪過には不快を覚えても、罪を犯す者に対しては、ただ愛と優しいあわれみだけをいだくのです。

（二七）このようにして、イエスは「おのれの民をそのもろもろの罪から救われます（マタイ一・二一）。外面の罪からだけでなく、心の罪からも、悪い思いからも悪い気質からも救われるのです。ある人々は言います。「そのとおりだ。私たちはそのように罪から救われるだろう。けれども、死ぬまではそうならない。この世ではそうならない」。けれども、これを、ヨハネのはっきりした言葉と、どう調和させればよいのでしょうか。「わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができます。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのです」（第一ヨハネ四・一七）。使徒はここで、反論の余地なく、自分自身とほかの生きているクリスチャンについて語っています。まるでこの言い逃れを見越して、それを根底から覆そうとしたかのように、使徒はきっぱり断言しています。彼らは、死ぬときや死んだ後だけでなく、この世において、その主人のようである（第一ヨハネ四・一七）、と。

（二八）この手紙の一章のヨハネの言葉は、これとぴったり一致しています。「神は光であって、神には少しの暗いところもありません」（第一ヨハネ一・五）。「わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのです」（第一ヨハネ一・七）。また、こうも言います。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめてくださいます」（第一ヨハネ一・九）。さて、使徒がここでも、この世でなされる解放について語っていることは明らかです。使徒は、キリ

ストの血が死ぬときに、あるいはさばきの日にきよめるだろう、とは言っていないからです。そうではなく、生きているクリスチャンである「わたしたち」を、今このとき、「すべての罪から」「きよめる」と言っているのです（第一ヨハネ一・七）。そして、同じように明らかなことがあります。もし何かの罪が残っているなら、私たちはすべての罪からきよめられてはいません。もし何かの不義が魂に残っているなら、その魂は、すべての不義からきよめられてはいないのです。また、自分の魂に対して罪を犯す者はだれも、これは義認だけにかかわる、と言ってはなりません。罪の罪責から私たちをきよめることだけにかかわる、と言ってはならないのです。第一に、それは、使徒がはっきり区別しているものを混同することだからです。使徒は、まず私たちの罪を赦すことを挙げ、次に、すべての不義から私たちをきよめることを挙げています。第二に、それは、考えうる最も強い意味で、行いによる義認を主張することだからです。外面の聖性だけでなく内面の聖性もすべて、必ず義認に先立つものにすることになるのです。というのは、ここで言われているきよめが、罪の罪責から私たちをきよめることにほかならないとします。それなら、「神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩く」（第一ヨハネ一・七）ことが条件になります。そうしなければ、私たちは罪責からきよめられない、すなわち義とされないのです。ですから、残る結論はこうです。クリスチャンは、この世において、すべての罪から、すべての不義から救われています。今、罪を犯さず、悪い思いと悪い気質から解放されているという意味で、完全なのです。

（二九）　このようにして、主は、古くから聖なる預言者たちの口によってお語りになった（ルカ一・七〇）ことを、成就されました。とりわけ、モーセによって、こう言われました。わたしは「あなたの心とあなたの子孫の心に割礼を施し、あなたをして、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主を愛させ」ます（申命記三〇・六）。ダビデによっては、こう叫ぶ言葉で語られました。「わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」（詩篇五一・一〇）。そして、最も著しくは、エゼキエルによって、次の言葉で語られました。「わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、またあなたがたを、すべての偶像から清めます。わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせます。あなたがたは、わが民となり、わたしはあなたがたの神となります。わたしはあなたがたをそのすべての汚れから救います」（エゼキエル三六・二五～二九）。あなたがたの神、主はこう言われます。わたしが「あなたがたのすべての罪を清める日に」、「諸国民は主なるわたしがくずれた所を建て直し」たことを「悟るようになります。主なるわたしがこれを言い、これをなすのです」（エゼキエル三六・三三～三六）。

（三〇）　「愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられている」のです（第二コリント七・一）。その約束は、律法にも預言者にも与えられています。また、預言の言葉は、福音において、ほむべき主とその使徒たちによって、私たちに確かにされています。ですから、「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではありませんか」（第二コリント七・一）。これほど多くの「神の安息にはいるべき約束が」、私たちに与えられています。その安息にはいった者は、自分のわざを休んだのです（ヘブル四・一〇）。ですから、「万一にも、はいりそこなう者が」、私たちの「中から出ることがないように、注意しようではありませんか」（ヘブル四・一）。「ただこの一事を努め」ましょう。「後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞与を得ようと努め」ましょう（ピリピ三・一三～一四）。そして、私たちもまた「滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る」（ローマ八・二一）ときまで、昼も夜も神に叫び求めましょう！

「聖化の約束」（エゼキエル三六・二五以下）　チャールズ・ウェスレー作

すべての力と、真実と、恵みとの神よ、
あなたは代々に変わらずにおられます。
天と地が過ぎ去るときにも、あなたの言葉は
残り、とこしえに確かに立ちます。
私の魂は、静かにあなたを仰ぎ、
あなたの約束を身をもって知るときを待ちます。

その約束こそ、私の揺るがない望みの的、
あなたの永遠の愛の証印です。
　私があなたのあわれみを告げ知らせ、
すべての人があなたの真実を見るように、
あなたの大いなる栄光の御名を聖としてください。
私のうちに、聖性を全うしてください。
　もし私が今、世から選び出されて、
神の義をまとって立っているなら、
もし約束の地に連れて来られて、
救主を正しく私のものと呼べるなら、
　あなたが始められたわざを成し遂げ、
私の魂の奥底までも、あなたに立ち帰らせてください。
私を愛してください。ご自分のものを、とこしえに愛してください。
あなたの血を、私の心に注いでください。
　きよめてくださるあなたの御霊を注いで、
私の渇きをいやし、私を洗い清めてください。
父よ、今、恵みの雨を
降らせ、私を罪から清くしてください。
　罪のしみを残らず除いて、私を清めてください。
私の偶像を、みな捨て去ってください。
あらゆる悪い思いから、私を清めてください。
自我と高ぶりの、あらゆる汚れから。
　新しい心を、全き心を、私に与えてください。
疑いからも、恐れからも、悲しみからも解き放たれた心を。
キリストのうちにあった思いを分け与え、
私の霊を、あなたに堅く結びつけてください。
　ああ、この石の心を取り去ってください。
（それは、あなたの支配に従わず、従うこともできません。）
もはや私のうちにとどまらせないでください。
ああ、この石の心を取り去ってください。
　私の肉の思いの敵意を、
私の肉から、ただちに取り除いてください。
柔らかな心を、ゆだねきった心を与えてください。
清く、信仰と愛とに満ちた心を。
　あなたの良い御霊を、私のうちに置いてください。
健やかさと、愛と、力との御霊を。
あなたの勝利の恵みを、私のうちに植えてください。
そうすれば、罪は二度と入って来ません。
　私の道であるキリストに、歩ませてください。
そうすれば、私はあなたの定めを守り行い、
あらゆる点で、あなたのおきてに従い、
あなたのみこころを全く行います。
　偽ることのできないあなたは、言われたではありませんか。
私があなたのおきてを守り行うようになる、と。
主よ、人が否んでも、私は信じます。
人はみな偽り者でも、あなたは真実です。
　ああ、私が今、罪から解き放たれて、
あなたの言葉を、極みまで身をもって知ることができますように！
約束された安息に、
あなたの全き愛のカナンに、はいることができますように！
　そこに私を、いつまでも、いつまでも住まわせてください。
どうか私の神となってください。そうすれば私は
あなたのしもべとなります。ああ、証印を押してください！
あなたにある永遠のいのちを、私に与えてください。
　私のうちに残る、あらゆる汚れから、
あなたにあって、救を得させてください。

自罪からも、生れながらの罪からも、
あがなわれた私の魂を、どこまでも救ってください。
　私の古い原罪のしみを、洗い去ってください。
もう私に「それはありえない」と言うな、
悪霊よ、人よ！　小羊はほふられた。
その血は、すべて私のために注ぎ出されたのだ！
　イエスよ、その血を私の心に注いでください。
すべてを清めるあなたの血の、ただ一滴が、
私の罪深さを去らせ、
私を神のいのちで満たします。
　父よ、私のすべての必要を満たしてください。
あなたご自身が与えられたいのちを、支えてください。
穀物を、生きたパンを、呼びよせてください。
天から下ってくるマナを。
　恵みによる義の実を、
尽きることのない、あなたの祝福の蓄えを、
私のうちに豊かに増し加えてください。
もう二度と、飢えることのないようにしてください。
　もう二度と、深い嘆きのうちに、
「わたしはやせ衰える、わたしはやせ衰える」と叫ばせないでください。
乏しさにやつれ、衰え果てているのは、
父の子らのうちで、ただ私ひとりだ、と。
　苦しい渇きも、切なる願いも、
喜びに満ちたあなたの臨在が取り去ります。
けれども、満たされた私の魂は、なお求め続けます。
あなたの愛の、永遠のすべてを。

　聖なる、真実な、正しい主よ、
私は、あなたの全きみこころを、わきまえ知るときを待ちます。
あなたの恵みの言葉を心に留め、
あなたの御霊の証印を、私に押してください！
　あなたの真実なあわれみを、私に見いださせてください。
あなたが私に頼ませてくださる、そのあわれみを。
柔和でへりくだった心を、私に与え、
私の霊を、ちりの中に伏させてください。
　私の心がどれほど汚れていたかを、私に示してください。
私が恵みによって、すっかり新しくされたときに。
あなたが私を罪から空にしてくださったときに、
私の恥の大きさを、余すところなく示してください。
　私の信仰の内なる目を開き、
上からあなたの栄光を現してください。
そうすれば、私のすべては沈み、死にます。
驚きと愛とのうちに、我を忘れて。
　あなたの恵みで、私を恥じ入らせ、圧倒してください。
私は、自分で自分を忌みきらう者となりたいのです。
（すべての力も、すべての威光も、すべての賛美も、
すべての栄光も、私の主キリストにあるように！）
　今こそ、完全の高みに至らせてください！
今こそ、無の中に落ちさせてください！
あなたの前で、無よりも小さな者となり、
キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますことを、感じさせてください！

説教四十一　さまよう思い

「すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」（第二コリント一〇・五）

（一）　けれども、神は「すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」てくださる（第二コリント一〇・五）のでしょうか。それも、私たちがまだ肉体のうちにいる間でさえ、さまよう思いが心に入りこむ余地がまったくないほどにでしょうか。ある人々は、そうだと激しく主張してきました。いや、こう断言してきました。すべてのさまよう思いがなくなるほどに悟りにおいても全うされていなければ、だれも愛において全うされてはいない、と。すべての情愛と気質が聖く、正しく、善いだけでは足りない、と言うのです。心に浮かぶ思いの一つ一つまでが賢く、秩序正しくなければ、愛において全うされてはいない、と。

（二）　これは、決して小さくない問題です。というのも、神を恐れ、いや、おそらく心をつくして神を愛している人々の中にさえ、このことでひどく苦しんできた人が、何と多いことでしょう。これを正しく理解しなかったために、苦しんだだけでなく、魂にひどい傷を負った人も、何と多いことでしょう。彼らは、益のない、いや、害のある理屈に投げこまれました。その理屈は、神に向かう彼らの歩みをゆるめ、参加すべき競走（ヘブル一二・一）を走る力を弱めたのです。いや、まさにこのことを誤解したために、神の尊い賜物を捨ててしまった人も多いのです。彼らは、神が自分の魂になされたわざを、まず疑い、次には否定するように誘われました。こうして神の御霊を悲しませ（エペソ四・三〇）、ついに御霊は退いて、彼らをまったくの暗やみに残されたのです！

（三）　では、どうしたことでしょうか。近ごろは、ほとんどあらゆる主題について多くの本が出版されています。それなのに、さまよう思いについての本は一冊もありません。少なくとも、落ち着いた真剣な心を少しでも満足させる本は、一冊もないのです。そこで、いくらかでもその心を満足させるために、私は次のことを調べようと思います。

第一に、さまよう思いには、どんな種類があるか。

第二に、さまよう思いは、一般に何によって生じるか。

第三に、そのうちどれが罪であり、どれが罪でないか。

第四に、そのうちどれから解放されることを期待し、祈り求めてよいか、です。

【一】　さまよう思いには、どんな種類があるか

（一）　第一に、さまよう思いにはどんな種類があるかを調べます。細かな種類は数えきれません。けれども、大きく分ければ二種類です。神からさまよう思いと、今取り組んでいる特定の事柄からさまよう思いです。

（二）　前者について言えば、私たちの思いは、生れながらにすべてこの種類のものです。私たちの思いは、絶えず神からさまよっているからです。私たちは、神のことを何も考えません。私たちの思いのどこにも、神はいません（詩篇一〇・四）。使徒が言うように、私たちは一人残らず、「この世の中で」「神もない者」（エペソ二・一二）です。私たちは、自分の愛するものを思います。けれども、神を愛してはいません。ですから、神のことを思わないのです。あるいは、ときおり、しばらく神のことを考えないわけにいかなくなるとします。それでも、私たちはそれを喜びとしません。いや、むしろ、その思いは味気ないだけでなく、いとわしく、わずらわしいものです。それで、私たちはできるだけ早くその思いを追い出し、思うのが好きなものへと戻るのです。こうして、世と世にあるもの（第一ヨハネ二・一五）が、私たちの時間をすべて奪い、思いをすべて占めてしまいます。何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか（マタイ六・三一）。何を見ようか、何を聞こうか、何を得ようか。どうやって感覚や想像を楽しませようか、ということです。ですから、世を愛している限り、すなわち生れながらの状態にある限り、私たちの思いはすべて、さまよう思いにほかなりません。朝から晩まで、晩から朝まで、そうなのです。

（三）　けれども、多くの場合、私たちは「この世の中で」「神もない者」（エペソ二・一二）であるだけではありません。神に逆らって戦ってもいます。すべての人のうちには、生れつき「肉の思い」があり、それは「神に敵する」からです（ローマ八・七）。ですから、人が不信仰な思いにあふれているのも、不思議ではありません。人は、心のうちに「神はない」（詩篇一四・一）と言ったり、神の力や知恵、あわれみや正義や聖性を、否定しないまでも疑ったりするのです。人が神の摂理を、少なくとも摂理がすべての出来事に及ぶことを、たびたび疑うのも、不思議ではありません。また、摂理を認めていても、なお不平や不満の思いをいだくのも、不思議ではありません。これらに近く、またしばしばこれらと結びついているのが、高慢でむなしい想像です。また、人はときには、怒りや悪意や復讐の思いにとらわれます。別のときには、感覚であれ想像であれ、快楽のとりとめのない光景にとらわれます。それによって、地につく肉的な心は、ますます地につき、肉的になるのです。さて、これらすべてによって、人は神に公然と戦いをいどんでいます。これらは、最もひどい種類のさまよう思いです。

（四）　これらと大きく違うのが、もう一つの種類のさまよう思いです。そこでは、心が神からさまようのではなく、悟りが、そのとき目の前にあった特定の事柄からさまようのです。たとえば、私は腰をおろして、主題聖句の前の節の言葉を考えます。「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく」、神によって力あるものです（第二コリント一〇・四）。私は思います。「クリスチャンと呼ばれる者はみな、こうあるべきだ。ところが、実際は何とかけ離れていることか。キリスト教世界と呼ばれるところの、ほとんどどの部分でもよい、見回してみるがよい。この人々は、どんな武器を使っているのか。どんな戦いをしているのか。

人々は悪鬼のように互いに引き裂き合う、
地獄のような戦いの狂乱のただ中で。

「見よ、このクリスチャンたちが、互いに何と愛し合っていることか！　彼らは、トルコ人や異教徒より、どこがまさっているのか。イスラム教徒や異教徒のうちに見られる忌まわしいことで、クリスチャンのうちにも見られないものが、何かあるだろうか」。こうして、私の心は、気づかないうちに、一つの事柄から別の事柄へと走って行きます。さて、これらはみな、ある意味でさまよう思いです。神からさまようのではなく、まして神に逆らって戦うのでもありません。それでも、私が目の前に置いていた特定の事柄からは、確かにさまよっているからです。

【二】　さまよう思いは、一般に何によって生じるか

以上が、さまよう思いの性質であり、種類です。哲学的にというより、役に立つように言えば、そうなります。では、さまよう思いは、一般に何によって生じるのでしょうか。これを第二に考えなければなりません。

（一）　前者の種類の思いとは、神に逆らい、神からさまよう思いです。それが一般に罪深い気質から生じることは、たやすく見てとれます。たとえば、生れながらの人の思いのどこにも、いや、どの一つの思いにも、神がいないのはなぜでしょうか。理由は明らかです。富んでいても貧しくても、学があってもなくても、その人は無神論者だからです。世間ではそう呼ばれていなくても、そうなのです。その人は、神を知りもせず、愛しもしません。その人の思いが、絶えず世を追ってさまようのはなぜでしょうか。偶像礼拝者だからです。確かに、像を拝んだり、木のはしくれの前にひれ伏したり（イザヤ四四・一九）はしません。それでも、同じように滅びに値する偶像礼拝に沈んでいます。世を愛しているのです。すなわち、世を拝んでいるのです。その人は、見えるもの（第二コリント四・一八）のうちに、使えば尽きてしまう（コロサイ二・二二）快楽のうちに、幸いを求めます。その人の存在のまさに目的は、キリストにある神を知ることです。その人の思いが、その目的からいつもさまよっているのはなぜでしょうか。不信仰な者だからです。信仰を持っていないからです。少なくとも、悪魔以上の信仰は持っていないからです。こうして、これらのさまよう思いはみな、不信仰という悪い根から、たやすく自然に生じるのです。

（二）　ほかの場合も同じです。高慢、怒り、復讐心、虚栄、情欲、貪欲は、どれもみな、それぞれの性質にふさわしい思いを生じさせます。人の心が持ちうる罪深い気質は、どれもそうです。その一つ一つを数え上げることは、ほとんどできませんし、その必要もありません。次のことに注意すれば十分です。ある魂

のうちに悪い気質が住みついていれば、その数と同じだけの道で、その魂は神から離れて行きます。最も悪い種類のさまよう思いによって離れるのです。

（三） 後者の種類のさまよう思いを生じさせるものは、きわめてさまざまです。その多くは、魂と体との自然の結びつきによって生じます。病んだ体によって、悟りは何とすぐに、何と深く影響を受けることでしょう！ 脳の中で血が不規則に動きさえすれば、秩序だった思考はすべて終わってしまいます。激しい狂気が起こります。そうなれば、落ち着いた思考には、もう別れを告げるほかありません。そうです、ただ精気がある程度まで急き立てられたり、かき乱されたりするだけで、一時的な狂気、すなわちせん妄が起こります。そして、定まった思考はすべて妨げられます。また、同じ思考の乱れは、ある程度まで、あらゆる神経の病によっても生じるのではないでしょうか。こうして、「朽ちる体は魂を押さえつけ、多くのことに思いをめぐらさせる」のです。

（四） けれども、体がこうした思考の乱れを生じさせるのは、病気のときや、異常な不調のときだけでしょうか。いいえ、程度の差はあっても、いつでも、完全に健康な状態のときでさえ、そうなのです。どれほど健康な人でも、二十四時間ごとに、多かれ少なかれせん妄状態になります。というのは、人は眠るのではありませんか。そして、眠っている間は、夢を見がちではありませんか。そのとき、だれが自分の思いの主人でいられるでしょうか。だれが思いの秩序とつながりを保てるでしょうか。だれがそのとき、思いを一つの事柄に固定しておけるでしょうか。思いが地の果てから果てまでさまようのを、だれが防げるでしょうか。

（五） けれども、目を覚ましているとします。それでも、私たちはいつも、自分の思いをしっかり治められるほど目覚めているでしょうか。体というこの機械の性質そのものによって、私たちは、反対の両極端に避けがたくさらされているのではないでしょうか。ときには、重すぎ、鈍すぎ、だるすぎて、思考の筋道を少しもたどれません。またときには、逆に、活発すぎます。想像は、許しも得ずにあちこちへ飛び出し、私たちが望もうと望むまいと、私たちをあちらこちらへ連れ去ります。しかも、これはみな、ただ精気の自然な動きや、神経の振動から起こるのです。

（六） さらに、私たちの観念のさまざまな連合からも、何と多くの思考のさまよいが生じうることでしょう。この連合は、私たちのまったく知らないうちに、私たちの選択とはかかわりなく作られます。このつながりがどのようにしてできるのかは、分かりません。けれども、それは無数の違ったしかたでできるのです。最も賢い人、最も聖い人でさえ、その連合を断ち切ることはできません。また、その必然の結果、日々目にする結果を防ぐこともできません。火が導火線の一端に触れさえすれば、火はたちまち他の端まで走ります。

（七） もう一つあります。私たちが、ある主題に、できる限り熱心に注意を集中しているとします。それでも、快楽か苦痛が生じれば、特にそれが激しいものなら、それはすぐに私たちの注意を求め、思いを自分に引きつけます。それは、最も落ち着いた黙想をも妨げ、心を好きな主題からそらします。

（八） さまよう思いを生じさせるこれらのものは、内にあって、私たちの本性そのものに織りこまれています。けれども、さまよう思いは、同じように、外の物のさまざまな刺激からも、自然に、また必然的に生じます。目や耳といった感覚の器官を打つものは何でも、心に知覚を起こします。それで、見たり聞いたりするものは何でも、それまでの思考の流れに割りこんできます。ですから、私たちの目の前で何かをし、私たちの聞こえるところで何かを話す人はだれでも、私たちの心をさまよわせます。それまで考えていた事柄から、多かれ少なかれ離れさせるのです。

（九） また、疑いもなく、悪霊どもは、これまで述べたあらゆる機会を利用して、私たちの心を急き立て、かき乱します。この悪霊どもは、食いつくすべきものを絶えず求めている（第一ペテロ五・八）のです。彼らは、ときにはこの手段で、ときにはあの手段で、私たちを悩ませ、まごつかせます。そして、神の許される限り、私たちの思いを妨げます。特に、思いが最も良い主題に向けられているときに、そうするのです。これは少しも不思議ではありません。彼らは、思考の源そのものを理解しているに違いありません。また、想像も悟りも、心のほかのあらゆる働きも、体のどの器官により直接に依存しているかを知っているに違いありません。それによって、彼らは、その器官に働きかけて、それに依存する働きを左右するすべを知っています。これに加えて、彼らは、これまで述べた

手段を何も使わずに、無数の思いを注ぎこむことができます。物質が物質に働きかけるのと同じように、霊が霊に働きかけるのは自然なことだからです。これらのことを考えれば、私たちの思いが、目の前に置いた事柄から、これほどたびたびさまようのも、驚くにはあたりません。

【三】 どれが罪であり、どれが罪でないか

（一） どんな種類のさまよう思いが罪であり、どれが罪でないかが、第三に調べるべきことです。まず第一に、神からさまよう思い、私たちの心に神の場所を残さない思いは、みな疑いもなく罪です。これらはみな、実践上の無神論を含んでおり、これらによって、私たちは、この世の中で神もない者（エペソ二・一二）となるからです。まして、神に反する思い、神への反抗や敵意を含む思いは、なおさら罪です。不平や不満の思いはみなそうです。それは事実上、あなたが「王になるのをわれわれは望んでいない」（ルカ一九・一四）と言っているのです。不信仰な思いもみなそうです。それが神の存在についてであっても、神の属性や摂理についてであっても、そうです。私の言う摂理とは、宇宙のすべての人々だけでなく、すべての物にも及ぶ、神の個別の摂理のことです。それなしには、すずめの「一羽も地に落ちることはない」（マタイ一〇・二九）摂理です。それによって、私たちの「頭の毛」が「みな数えられている」（マタイ一〇・三〇）摂理です。というのは、世間で言う一般的な摂理、つまり個別の摂理と区別されたものは、体裁がよく響きのよい言葉にすぎないからです。それは、まったく何も意味しません。

（二） また、罪深い気質から生じる思いは、みな疑いもなく罪です。たとえば、復讐心に満ちた気質から、高慢や情欲や虚栄から生じる思いが、そうです。「悪い木が良い実をならせることはできません」（マタイ七・一八）。ですから、木が悪ければ、その実も悪いはずです。

（三） 罪深い気質を生み出したり、養ったりする思いも、同じく罪であるはずです。高慢や虚栄、怒りや世への愛を生じさせる思いも、そうです。これらの、あるいはほかの聖くない気質や情念や情愛を強め、増す思いも、そうです。悪から流れ出るものだけでなく、悪へ導くものも、みな悪だからです。魂を神から遠ざけ、魂を地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なもの（ヤコブ三・一五）にし、またそうしておこうとするものは、みな悪なのです。

（四） ですから、弱さや病気、体の自然のしくみ、魂と体の生命の結びつきの法則によって生じる思いでさえ、罪となります。それは、その思いが私たちのうちに何かの罪深い気質を生み出したり、はぐくんで増したりするときです。その思いは、それ自体ではどれほど罪のないものであっても、そのときには罪となるのです。たとえば、肉の欲、目の欲、持ち物の誇（第一ヨハネ二・一六）がそうです。同じように、ほかの人の言葉や行いによって生じるさまよう思いもあります。それが何かのまちがった性向を生じさせたり、養ったりするなら、そのときから罪となります。悪魔によってささやかれたり、注ぎこまれたりする思いについても、同じことが言えます。その思いが、何かの地につく気質や悪魔的な気質に仕えるとき、それは、仕えている気質と同じように罪となります。私たちがその思いに場所を与え、それによって自分のものにするときには、いつでもそうなるのです。

（五） けれども、こうした場合を別にすれば、後者の意味でのさまよう思いは、少しも罪ではありません。後者の意味とは、悟りが目の前の事柄からさまよう思いのことです。血管の中の血の動きや、脳の中の精気の動きが罪でないのと同じです。その思いが、弱い体質から、あるいは偶然の弱さや不調から生じるとします。それなら、弱い体質や不調な体を持つことが罪でないのと同じく、その思いにも罪はありません。神経の具合の悪さも、どんな種類の熱も、一時的なせん妄も長く続くせん妄も、まったく罪のない状態と両立しえます。確かに、だれもそれを疑いません。また、健康な体と結ばれた魂のうちに、さまよう思いが生じるとします。それは、体と魂の自然な結びつきから生じることもあるでしょう。思考に仕える体の器官に起こりうる無数の変化の、どれかから生じることもあるでしょう。そのどの場合にも、その思いは、それが生じた原因と同じく、まったく罪がありません。観念の偶然の、意志によらない連合から生じるときも、同じです。

（六）　ほかの人々がさまざまに私たちの感覚に働きかけることによって、私たちの思いが目の前の事柄からさまようとします。その場合も、その思いには同じく罪がありません。私が見たり聞いたりするものを理解するのは、目や耳を持つことが罪でないのと同じく、罪ではないからです。多くの場合、私は、見ること、聞くこと、理解することを避けられないのです。「しかし、悪魔がさまよう思いを注ぎこむなら、その思いは悪いのではないか」。その思いは、わずらわしいものです。その意味では悪いものです。けれども、罪ではありません。悪魔が、耳に聞こえる声で主に語ったのかどうかは、私には分かりません。悪魔は、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」（マタイ四・九）と言いました。そのとき、おそらく主の心にだけ語ったのでしょう。けれども、悪魔が内に語ったにせよ外に語ったにせよ、主は疑いもなく、悪魔の言ったことを理解されました。ですから、主は、その言葉に対応する思いを持たれたのです。けれども、それは罪深い思いだったでしょうか。そうでなかったことを、私たちは知っています。主には、行いにも、言葉にも、思いにも、なんらの罪もありませんでした（第一ヨハネ三・五）。サタンは、主に従うだれにでも、同じ種類の無数の思いを注ぎこむかもしれません。けれども、その思いにも何の罪もありません。

（七）　ですから、こうしたさまよう思いは、どれも完全な愛と矛盾しません。不注意な人々が何と断言してきたにせよ、そうなのです。彼らはそう断言して、主が悩ますことをなさらなかった人々を悩ましてきました（エゼキエル一三・二二）。実に、もし矛盾するなら、激しい痛みだけでなく、眠りそのものも、完全な愛と矛盾することになるでしょう。激しい痛みがそうなるのは、次の理由からです。痛みが起こるときにはいつも、それまで何を考えていたにせよ、思考が妨げられ、当然、思いが別の流れへ引きこまれるのです。そうです、眠りそのものも矛盾することになります。眠りは、何も感じず、何も分からない状態だからです。また、ふつう、地上をさまよう、とりとめのない、でたらめな、まとまりのない思いが混じる状態だからです。けれども、確かに、これらは完全な愛と両立します。それなら、この種のさまよう思いも、みな両立するのです。

【四】　どれから解放されることを期待し、祈り求めてよいか

（一）　これまで述べたことから、最後の問いにはっきり答えるのはたやすいことです。どんな種類のさまよう思いから解放されることを期待し、祈り求めてよいか、という問いです。

前者の種類のさまよう思いとは、心が神からさまよう思いです。神の御旨に反する思い、私たちをこの世の中で神もない者（エペソ二・一二）にしておく思いです。愛において全うされた人はみな、こうした思いから、疑いもなく解放されています。ですから、この解放は期待してよいのです。これを祈り求めてよいのです。いや、祈り求めるべきなのです。この種のさまよう思いは、神への敵意とまではいかなくても、不信仰を含んでいます。けれども、神はこの両方を滅ぼし、すっかり終わらせてくださいます。実に、罪深いさまよう思いのすべてから、私たちは完全に解放されるのです。愛において全うされた人はみな、これから解放されています。そうでなければ、罪から救われてはいないことになります。人も悪霊も、あらゆるしかたで彼らを誘惑するでしょう。けれども、彼らに打ち勝つことはできません。

（二）　後者の種類のさまよう思いについては、事情が大きく違います。原因が取り除かれるまでは、結果がやむことを期待するのは、道理に合いません。けれども、これらの原因やきっかけは、私たちが肉体のうちにいる限り残ります。ですから、その間は、結果も残ると信じる十分な理由があるのです。

（三）　もっと具体的に言いましょう。ある魂が、どれほど聖くても、不調な体に住んでいるとします。脳がすっかり乱れて、激しい狂気が生じるとします。その乱れが続く限り、思いはみな、でたらめで、つながりのないものになるのではないでしょうか。熱のために、せん妄と呼ばれる一時的な狂気が生じるとします。そのせん妄が去るまで、思考に正しいつながりがありうるでしょうか。そうです、神経の病と呼ばれるものが高じて、少なくとも部分的な狂気を生じさせるとします。そのとき、無数のさまよう思いが生じるのではないでしょうか。そして、この乱れた思いは、それを生じさせる病が続く限り、続かないわけにはいかないのではないでしょうか。

（四） 激しい痛みから必然的に生じる思いについても、同じではないでしょうか。その思いは、自然の犯すことのできない秩序によって、痛みが続く間は、多かれ少なかれ続きます。理解力や判断力や想像力に、体の生れつきの体質から来る欠陥があって、思考が乱され、断たれ、妨げられることがあります。その場合にも、同じようにこの秩序が当てはまります。また、説明のつかない、意志によらない観念の連合から、何と多くの妨げが生じうることでしょう。さて、これらはみな、直接にせよ間接にせよ、朽ちる体が心を押さえつけることによって生じます。ですから、「この朽ちるものが朽ちないものを着」る（第一コリント一五・五四）ときまでは、それが取り除かれることも期待できません。

（五） 今、私たちは人々に取り囲まれていて、その中で見たり聞いたりするものによって、さまよう思いが生じます。そうした思いから解放されるのは、私たちがちりの中に横たわるときだけです。これを避けるには、この世から出て行かねばなりません（第一コリント五・一〇）。私たちが世にとどまり、まわりに男や女がいて、私たちに見る目と聞く耳がある限り、日々見聞きするものは必ず心に働きかけるからです。そして、多かれ少なかれ、それまでの思考に割りこみ、それを妨げるのです。

（六） また、悪霊どもがこのみじめで乱れた世をあちこち歩きまわっている限り、彼らは、血肉を持つすべての住人を襲うでしょう。打ち勝てても、打ち勝てなくても、襲うのです。彼らは、滅ぼすことのできない人々さえ悩ませます。征服できなくても、攻撃するのです。休むことも疲れることも知らないこの敵の攻撃から、すっかり解放されることは期待できません。「悪人も、あばれることをやめ、うみ疲れた者も、休みを得」る（ヨブ三・一七）所に宿るまでは、そうなのです。

（七） 全体をまとめましょう。悪霊によって生じるさまよう思いから解放されることを期待するとします。それは、悪魔が死ぬか、眠りこむか、少なくとも、もはやほえたけるししのように歩き回らない（第一ペテロ五・八）ことを期待するのと同じです。ほかの人々によって生じる思いから解放されることを期待するのは、人が地上からいなくなることを期待するのと同じです。あるいは、私たちが人々からまったく隔てられ、何の交わりも持たなくなることを期待するのと同じです。あるいは、目があっても見ず、耳で聞かず、木や石のように何も感じなくなることを期待するのと同じです。そして、体によって生じる思いから解放されるように祈るのは、事実上、体を離れられるように祈ることです。そうでなければ、それは、不可能でばかげたことを祈ることになります。矛盾を両立させてくださるようにと、神に祈ることになるのです。朽ちる体との結びつきを続けさせながら、その結びつきの自然で必然的な結果を取り除いてくださるように、と。それは、御使いであると同時に人であり、死ぬものであると同時に死なないものであるように祈るようなものです。いいえ！ 死なないものが来るとき、死ぬべきものはすたれるのです。

（八） むしろ、霊で祈ると共に、知性でも祈りましょう（第一コリント一四・一五）。これらすべてのことが、共に働いて私たちの益となるように（ローマ八・二八）と祈るのです。本性のあらゆる弱さ、人々によるあらゆる妨げ、悪霊のあらゆる攻撃とささやきを、私たちが耐え忍ぶように祈りましょう。そのすべてにおいて「勝ち得て余りがある」（ローマ八・三七）者となるように祈りましょう。すべての罪から解放されるように祈りましょう。根も枝も滅ぼされるように祈りましょう。「肉と霊とのいっさいの汚れから」（第二コリント七・一）、すべての悪い気質と言葉と行いから、きよめられるように祈りましょう。私たちが「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なる」私たちの「神を愛」する（マルコ一二・三〇）ように祈りましょう。御霊の実（ガラテヤ五・二二）のすべてが私たちのうちに見いだされるように祈りましょう。愛、喜び、平和だけでなく、「寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ五・二二〜二三）も見いだされるように祈るのです。これらすべてのものが栄え、満ちあふれ、あなたがたのうちにますます増し加わるように祈りなさい。私たちの主イエス・キリストの永遠の国にはいる恵みが、あなたがたに豊かに与えられる（第二ペテロ一・一一）ときまで、そう祈りなさい！

説教四十二　サタンの策略

「わたしたちは、彼の策略を知らないわけではありません」（第二コリント二・一一）

（一）　この世の神（第二コリント四・四）は狡猾で、神の子たちを滅ぼそうと骨折ります。少なくとも、滅ぼせない者を苦しめ、彼らが参加すべき競走（ヘブル一二・一）を走るのをまごつかせ、妨げようとします。そのための策略は、天の星や浜べの砂（創世記二二・一七）のように数えきれません。けれども、私が今語ろうとするのは、そのうちの一つだけです。その策略はさまざまな形で用いられます。サタンはそれによって、福音を内部で分れ争わせ（マタイ一二・二五）、福音の一部によって他の部分をくつがえそうとするのです。

（二）　内なる天国は、悔い改めて福音を信じる（マルコ一・一五）すべての人の心のうちに建てられます。それは、「義と、平和と、聖霊における喜びと」（ローマ一四・一七）にほかなりません。キリストにある幼な子（第一コリント三・一）はみな、私たちがイエスを信じたまさにそのときに、これらにあずかる者とされることを知っています。けれども、これらは御霊の最初の実（ローマ八・二三）にすぎません。刈り入れはまだです。これらの祝福は考えも及ばないほど大きなものですが、それでも私たちは、これよりも大きなものを見ると確信しています。私たちは、主なる私たちの神を愛するようになると確信しています。今のように、弱いけれども真実な情愛で愛するだけではありません。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして」（マルコ一二・三〇）愛するようになるのです。私たちは、「いつも喜んで」いる力（第一テサロニケ五・一六）、「絶えず祈」る力（第一テサロニケ五・一七）、「すべての事について、感謝」する力（第一テサロニケ五・一八）を待ち望んでいます。「これが、キリスト・イエスにあって、神が」私たちに「求めておられること」だと知っているからです（第一テサロニケ五・一八）。

（三）　私たちは、愛において全うされる（第一ヨハネ四・一八）ことを期待しています。それは、苦しみを伴うすべての恐れをとり除く愛です（第一ヨハネ四・一八）。また、愛する方の栄光を現し、その方をますます愛し、仕えるという願いのほかは、すべての願いをとり除く愛です。私たちは、私たちの救主なる神を体験によって知る知識と、その神への愛とが、大きく増し加わることを待ち望んでいます。それによって、いつも、「神が光の中にいますように」、「光の中を歩く」（第一ヨハネ一・七）ことができるほどにです。私たちは、キリスト・イエスのうちにもあった思い（ピリピ二・五）が、余すところなく私たちのうちに宿るようになると信じています。また、すべての人を愛し、その人のためにいのちを捨てる（第一ヨハネ三・一六）用意ができるようになると信じています。この愛によって、怒りからも、高ぶりからも、あらゆる不親切な情愛からも解放されるほどになると信じるのです。私たちは、「すべての偶像から清め」られ、「すべての汚れから清め」られる（エゼキエル三六・二五）ことを期待しています。その汚れが「肉」のものであれ「霊」のものであれ（第二コリント七・一）、そうです。また、内のものであれ外のものであれ、「すべての汚れから救」われる（エゼキエル三六・二九）ことを期待しています。「彼がきよくあられるように」、きよくされる（第一ヨハネ三・三）ことを期待するのです。

（四）　私たちは、偽りのない神（テトス一・二）の約束に信頼しています。そのときは必ず来る、という約束です。そのとき、私たちは、どの言葉においても、どのわざにおいても、神の祝福されたみこころを行うようになります。天に行われるとおり、地でも行う（マタイ六・一〇）のです。そのとき、私たちのふるまいはすべて、塩で味つけられ（コロサイ四・六）、すべて聞いている者の益になる（エペソ四・二九）ものとなります。そのとき、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためになされる（第一コリント一〇・三一）ようになります。そのとき、私たちの言葉とわざはすべて、「主イエスの名

によって」なされ、「彼によって父なる神に感謝」するものとなるのです（コロサイ三・一七）。

（五）　さて、サタンの大きな策略とは、こうです。あのもっと大きなわざへの私たちの期待によって、魂のうちにある神の最初のわざを滅ぼすこと、少なくとも、その成長を妨げることです。ですから、私が今しようとしているのは、次のことです。

第一に、サタンが神の最初のわざを滅ぼそうとする、いくつかのやり方を指摘すること。

第二に、悪しき者の放つ火の矢（エペソ六・一六）を、どうすれば投げ返せるかを考えること。すなわち、サタンが私たちを倒すきっかけにしようとすることによって、どうすればかえっていっそう高く上がれるかを考えることです。

【一】　サタンが神の最初のわざを滅ぼそうとするやり方

（一）　第一に、いくつかのやり方を指摘します。サタンはそれによって、魂のうちにある神の最初のわざを滅ぼそうとし、少なくともその成長を妨げようとします。サタンは、あのもっと大きなわざへの私たちの期待によって、そうするのです。

一、サタンは、主にある私たちの喜びに水を差そうとします。私たちに、自分の卑しさ、罪深さ、ふさわしくなさを考えさせるのです。そのうえ、今よりもはるかに大きな変化がなければ、主を見ることはできない（ヘブル一二・一四）ということも考えさせます。もし、死ぬ日まで今のままでいなければならないと分かっていたとします。それなら、そのやむをえなさから、乏しいながらも一種の慰めを引き出せたかもしれません。けれども、私たちは、この状態にとどまっている必要がないことを知っています。もっと大きな変化が来ることを、確信しています。また、この世で罪がすっかり取り除かれなければ、栄光のうちに神を見ることはできないことも、確信しています。それで、あの狡猾な敵は、私たちがまだ得ていないものと、それを得ることの絶対の必要とを、ゆがめて描いてみせます。そうして、すでに得たものについて本来なら感じるはずの喜びに、しばし

ば水を差すのです。こうして、私たちは、持っているものを喜べなくなります。まだ持っていないものが、もっとあるからです。神は私たちのために大いなる事をなされました（詩篇一二六・三）。それなのに、私たちは神のいつくしみを正しく味わえません。神がまだなされていない、もっとはるかに大いなる事があるからです。同じように、神は私たちのうちに、今の自分が聖くないことを自覚させてくださいます。また私たちは、神が約束された全き聖性を、心のうちで願います。その自覚が深いほど、その願いが激しいほど、私たちは、神の今の賜物を軽く考えるように誘惑されます。まだ受けていないもののために、すでに受けたものを低く見るように誘惑されるのです。

（二）　サタンがここまでうまくいけば、つまり私たちの喜びに水を差すことができれば、すぐに私たちの平安にも攻撃をしかけてきます。サタンはこうささやきます。「あなたは神を見るのにふさわしいのか。神は目が清く、不義を見られない方だ（ハバク一・一三）。それなのに、どうして、神があなたを喜んで見ておられるなどと、都合よく思いこめるのか。神は聖であり、あなたは聖くない。光とやみとなんの交わりがあるか（第二コリント六・一四）。これほど汚れているあなたが、神に受けいれられた状態にいるなどということが、どうしてありうるのか。確かに、あなたは目標を、上に召してくださる神の賞与を見ているのか（ピリピ三・一四）。だが、それがはるか遠くにあることが見えないのか。それなら、どうして、あなたの罪がもうすべてぬぐい去られている（使徒三・一九）などと思い上がれるのか。もっと神に近づけられるまで、もっと神に似た者になるまで、どうしてそんなことがありえようか」。こうして、サタンは、あなたの平安を揺るがすだけでなく、その土台そのものまでくつがえそうとします。気づかないほど少しずつ、あなたを最初の出発点に連れもどそうとするのです。すなわち、行いによって、あるいは自分自身の義によって義認を求めるところへ、です。自分のうちにある何かを、神に受けいれられる根拠にさせようとします。少なくとも、受けいれられる前に必ずなければならない条件にさせようとするのです。

（三）　あるいは、私たちがこう堅く信じているとします。「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできません。そして、この土台は

イエス・キリストです」（第一コリント三・一一）。また、私は「価なしに、神の恵みにより」、イエス「によるあがないによって義とされて」います（ローマ三・二四）、と。それでもサタンは、しきりにこう迫ってやみません。「だが、木はその実でわかる（マタイ一二・三三）。あなたには義認の実があるのか。キリスト・イエスのうちにあった思い（ピリピ二・五）が、あなたのうちにあるのか。あなたは罪に死に、義に生きている（第一ペテロ二・二四）のか。キリストの死のさまとひとしくなり、その復活の力を知っている（ピリピ三・一〇）のか」。すると私たちは、自分の魂のうちに感じるわずかな実を、約束の豊かさと比べて、こう結論しそうになります。「きっと神は、私の罪が赦されたとは言われなかったのだ。きっと私は、罪の赦しを受けてはいないのだ。聖別された人々の中で（使徒二六・一八）、私に何の分があるだろうか」。

（四）　とりわけ、病気や痛みのときには、サタンは全力でこれを押しつけてきます。「偽りのない方の言葉に、『きよくならなければ、だれも主を見ることはできない』（ヘブル一二・一四）とあるではないか。だが、あなたは聖くない。あなたはそれをよく知っている。聖性とは神のかたちが完全に備わることだと知っている。それは何と高く、あなたの目の届かないところにあることか。あなたはそれに達することはできない。だから、あなたの労苦はすべてむだだった。あなたが苦しんできたこともみな、むだだった。あなたはむなしく力を費した（イザヤ四九・四）のだ。あなたはいまなお罪の中にいる（第一コリント一五・一七）。だから、最後には滅びるほかないのだ」。こうして、あなたが、あなたの罪をすべてご自分の身に負われた方（第一ペテロ二・二四）に、目をしっかり注いでいないとします。そのとき、サタンは、あなたを再びあの恐怖の下に連れもどします。あなたは長い間、その「死の恐怖のために」「奴隷となっていた」（ヘブル二・一五）のです。こうしてサタンは、主にあるあなたの喜びだけでなく平安をも、すっかり滅ぼさないまでも、損なうのです。

（五）　けれども、サタンの狡猾さの最高傑作は、まだ後に控えています。サタンは、あなたの平安と喜びを打つだけでは満足せず、その企てをさらに先へ進めます。あなたの義にも攻撃の矛先を向けるのです。サタンは、あなたがすでに受けた聖性を揺るがそうとします。いや、できることなら滅ぼそうとします。しかも、もっと受けること、神のかたちのすべてに達することへの、あなたの期待そのものによってです。

（六）　サタンがこれをどのようにして企てるかは、すでに述べたことから、いくらか明らかでしょう。というのは、第一に、サタンは主にある私たちの喜びを打つことによって、私たちの聖性をも打つからです。聖霊における喜び（ローマ一四・一七）は、あらゆる聖い気質を育てる尊い手段だからです。それは神の選り抜きの道具であり、神はそれによって、信じる魂のうちでご自分のわざの多くを進められます。そして、それは内なる聖性だけでなく、外なる聖性にも大きな助けとなります。喜びは私たちの手を強め、信仰の働きと愛の労苦（第一テサロニケ一・三）を続けさせます。雄々しく「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得」させます（第一テモテ六・一二）。喜びは、内と外の両方の苦しみに対する釣り合いの重りとなるように、神によって特に定められています。「なえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐに」するためです（ヘブル一二・一二）。ですから、主にある私たちの喜びに水を差すものは何でも、それに比例して私たちの聖性を妨げます。それで、サタンは、私たちの喜びを揺るがす分だけ、私たちの聖性をも妨げるのです。

（七）　サタンが何らかの手段で私たちの平安を滅ぼすか、揺るがすことができれば、同じ結果が生じます。神の平安（ピリピ四・七）は、私たちのうちに神のかたちを進ませる、もう一つの尊い手段だからです。聖性にとって、これ以上の助けはほとんどありません。すなわち、霊の絶えざる静けさ、神により頼む心の落ち着き、イエスの血のうちでの穏やかな安らぎです。これがなければ、「わたしたちの主」「イエス・キリストの恵みと」生きた「知識とにおいて、ますます豊かにな」る（第二ペテロ三・一八）ことは、ほとんどできません。恐れはすべて、魂を凍らせ、しびれさせるからです。ただし、優しい、子としての恐れは別です。恐れは、霊のいのちのあらゆる泉をせき止め、神に向かう心のあらゆる動きを止めてしまいます。また、疑いは、いわば魂を泥まみれにします。それで魂は、深い泥にはまりこんで動けなくなるのです。ですから、このどちらかが力をふるうのに比例して、聖性における私たちの成長は妨げられます。

（八） 私たちの賢い敵は、完全な愛の必要についての私たちの確信を、疑いと恐れで平安を揺るがすきっかけにしようとします。それと同時に、私たちの信仰を、滅ぼさないまでも弱めようとします。実に、平安と信仰とは切り離せないほど結びついていて、立つも倒れるも一緒です。信仰が続く限り、私たちは平安のうちにとどまります。心が主に信頼している間は、心はゆるぎません（詩篇一一二・七）。けれども、信仰を手放すなら、すなわち、愛し、赦してくださる神への子としての信頼を手放すなら、平安は終わります。平安が立っていた土台そのものが、くつがえされるからです。そして、信仰は、平安のただ一つの土台であり、聖性のただ一つの土台でもあります。ですから、信仰を打つものは何でも、あらゆる聖性の根そのものを打つのです。この信仰がなければ、私が神を愛することはできないからです。キリストが私を愛し、私のためにご自身をささげられた（ガラテヤ二・二〇）という、変わらない実感がなければ、そうです。神がキリストのゆえに罪人の私をあわれんでくださるという、変わらない確信がなければ、そうなのです。私たちが神を愛するのは、「神がまずわたしたちを愛してくださった」からです（第一ヨハネ四・一九）。そして、私たちの神への愛は、神が私たちを愛し、御子にあって受けいれてくださったという確信の強さと明らかさに比例します。そして、神を愛さなければ、自分を愛するように隣り人を愛する（マタイ二二・三九）ことはできません。したがって、神に対しても人に対しても、正しい情愛を持つことはできません。ここから明らかに、私たちの信仰を弱めるものは何でも、同じ程度に私たちの聖性を妨げるはずだ、ということになります。そして、これは、あらゆる聖性を滅ぼすのに最も効果的であるだけでなく、最も手っ取り早いやり方でもあります。これは、クリスチャンの気質の一つ、恵みや御霊の実（ガラテヤ五・二二）の一つだけを損なうのではないからです。うまくいく限り、神のわざ全体の根そのものを引き抜いてしまうのです。

（九） ですから、やみの世の主権者（エペソ六・一二）が、ここで全力をふるうのも不思議ではありません。実際、私たちも経験からそれを知っています。義に飢えかわいている人たち（マタイ五・六）に、この誘惑がしばしば言いようのない激しさで押しつけられるからです。その激しさは、言い表すよりも、思い描くほうがはるかにたやすいのです。彼らが、強く明るい光のうちに見るとしまのを見ます。他方では、キリスト・イエスにあって召されている、しみのない聖す。一方では、自分の心がはなはだしく悪に染まっている（エレミヤ一七・九）性を見ます。一方では、自分の腐敗の深さ、神からまったく離れていることの深さを見、他方では、神の栄光の高さ、聖なる方のかたちを見ます。そのかたちに、彼らは新しくされることになっているのです。そのとき、しばしば彼らのうちには、もはや元気もなくなります。彼らは、「神にもこれはできない！」と叫びそうになるのです。彼らは、信仰も望みも捨ててしまいそうになります。まさにあの確信を放棄しそうになるのです（ヘブル一〇・三五）。その確信によってこそ、彼らは、自分を強くしてくださるキリストによって（ピリピ四・一三）、すべてに打ち勝ち、何事でもすることができるはずなのです。またその確信によって、彼らは「神の御旨を行って」、「約束のものを受ける」（ヘブル一〇・三六）はずなのです。

（一〇） そして、彼らが「最初の確信を、最後までしっかりと持ち続ける」（ヘブル三・一四）なら、疑いもなく神の約束を受けます。その約束は、この世から永遠にまで及ぶのです。けれども、ここに、私たちの足もとに仕掛けられた、もう一つのわながあります。私たちは、約束のうち、この世で成就する部分を、すなわち「神の子たちの栄光の自由」（ローマ八・二一）を、熱心に慕い求めます。その間に、やがて現される栄光（ローマ八・一八）を思うことから、知らないうちにそらされてしまうかもしれません。私たちの目は、気づかないうちに、あの冠からそらされるかもしれません。それは、公平な審判者が、かの日に、「主の出現を」愛する「すべての人」に授けてくださる（第二テモテ四・八）と約束された冠です。また、私たちのために天にたくわえてある、朽ちない資産（第一ペテロ一・四）を見ることから、引き離されるかもしれません。けれども、これもまた、私たちの魂にとって損失となり、私たちの聖性の妨げとなるでしょう。目ざすところを絶えず見ながら歩むことは、私たちの参加すべき競走（ヘブル一二・一）を走るのに、必要な助けだからです。昔、モーセを励ましたのも、これでした。モーセは「報いを望み見ていた」（ヘブル一一・二六）ので、「罪のはかない歓楽にふけるよりは」、むしろ「神の民と共に虐待される」道

を選び、「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考え」たのです（ヘブル一一・二五～二六）。いや、モーセにまさる方についても、はっきりこう言われています。その方は、「自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び」、ついに「神の御座の右に座するに至った」のです（ヘブル一二・二）。ここから、たやすく推し量ることができます。私たちにとっては、前におかれているあの喜びを見ることが、どれほどなおさら必要であることでしょう。それは、神の知恵が私たちに負わせるどんな十字架をも忍び、聖性を通って栄光へと進み続けるためです。

（一一）けれども、私たちは、この栄光を目ざし、またその備えとなるあの栄光の自由をも目ざして、手を伸ばしています。その間に、悪魔のもう一つのわなに陥る危険にさらされるかもしれません。悪魔はそのわなで、神の子たちを絡め取ろうと骨折るのです。私たちは、あすのことを思いわずらいすぎて（マタイ六・三四）、今日を生かすことをおろそかにするかもしれません。完全な愛を待ち望むあまり、すでに私たちの心に注がれている愛（ローマ五・五）を用いないかもしれません。このために大きな損失をこうむった人々の例は、事欠きません。その人々は、これから受けるものに心を奪われるあまり、すでに受けていたものをまったくおろそかにしました。あと五タラントをもらえると期待して、自分の一タラントを地の中に隠したのです（マタイ二五・二五）。少なくとも、神の栄光と自分の魂の益のために、生かせたはずのようには、それを生かしませんでした。

（一二）こうして、神と人との狡猾な敵は、神のみこころを無にしよう（ルカ七・三〇）とします。福音を内部で分れ争わせ、福音の一部に他の部分をくつがえさせることによってです。そのとき、魂のうちにある神の最初のわざは、神の完全なわざへの期待によって滅ぼされるのです。私たちは、敵がいわば聖性の泉を断つことによってこれを企てる、いくつかのやり方を見てきました。けれども、敵はまた、あの祝福に満ちた望み（テトス二・一三）を聖くない気質のきっかけにすることによって、もっと直接にもこれを行います。

（一三）たとえば、私たちの心が、尊く、大いなる約束（第二ペテロ一・四）のすべてを熱心に渇き求めるとします。しかが谷川を慕いあえぐように（詩篇四二・一）、神の満ちあふれる豊かさを慕いあえぐとします。私たちの魂が、熱い願いのあまり、「どうして彼の車の来るのがおそいのか」（士師記五・二八）と叫び出すとします。そのようなときにはいつも、敵は、私たちを誘惑して神に向かってつぶやかせる機会を逃しません。敵は、あらゆる知恵と力を使います。油断したときに、私たちが主に不平を言うように仕向けられるかもしれない、と思うからです。主がこのように来られるのを遅らせておられる、という不平です。少なくとも、いくらかのいらだちや焦りを起こさせようと骨折ります。またおそらく、上に召してくださる神の賞与（ピリピ三・一四）をすでに得たと私たちが信じる人々へのねたみを、起こさせようとします。こうした気質のどれかに身をまかせれば、私たちは、建てようとしているものそのものを引き倒していることになります。敵はそれをよく知っています。こうして完全な聖性を追い求めることによって、私たちは前よりも聖くなくなってしまいます。そうです、私たちの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる（第二ペテロ二・二〇）大きな危険があります。使徒があの恐ろしい言葉で語っている人々のようになるのです。「義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよいのです」（第二ペテロ二・二一）。

（一四）そして、敵はここから、もう一つの利益を得ようと望んでいます。すなわち、良い道について悪いうわさを立てることです。ある教えの偶然の濫用と、その本来の傾向とを区別できる人は、何と少ないことでしょう。また、区別しようとしない人も、あまりに多いのです。敵はそれを承知しています。ですから、敵は、クリスチャンの完全の教えについて、この二つを絶えず混ぜ合わせます。不注意な人々の心に、神の栄光ある約束に対する偏見をいだかせるためです。そして、敵はこのことで、何とたびたび、何と広く、ほとんど至るところと言いたいほどに、成功してきたことでしょう。というのは、この教えから偶然生じた悪い結果のどれかを見る人は、だれでも、すぐに結論するからです。これがこの教えの本来の傾向だ、と。そして、たちまち「見よ、これがあのような教えの実だ」と叫ぶのです。ここで実と言うのは、本来の、必然的な実という意味です。そうではありません。それは、大いなる尊い真理を濫用することから、偶然生じうる実です。けれども、この教えであれ、ほかの聖書の教えであれ、それ

を濫用しても、その正しい用い方が損なわれることは決してありません。また、人が自分の正しい道を曲げる不真実によって、神の約束が無になることがあるでしょうか（ローマ三・三）。断じてそうではありません。あらゆる人を偽り者としても、神を真実なものとすべきです（ローマ三・四）。主の言葉は、必ず立ちます。「約束をしてくださったのは忠実なかたです」（ヘブル一〇・二三）。神は「このことをしてくださるでしょう」（第一テサロニケ五・二四）。ですから、私たちは、「福音の望みから移り行く」（コロサイ一・二三）ことのないようにしましょう。むしろ、第二に予告したことを考えましょう。悪しき者の放つ火の矢（エペソ六・一六）を、どうすれば投げ返せるか。敵が私たちを倒すきっかけにしようとすることによって、どうすればかえっていっそう高く上がれるか、ということです。

【二】 悪しき者の放つ火の矢を、どうすれば投げ返せるか

（一） 第一に、サタンが、主にあるあなたの喜びに水を差そうとするとします。あなたに自分の罪深さを考えさせ、そのうえ、全き、あらゆる点での聖性がなければ、だれも主を見ることはできない（ヘブル一二・一四）と考えさせるのです。あなたは、この矢をサタン自身の頭に投げ返すことができます。神の恵みによって、自分の卑しさを感じれば感じるほど、そのすべてが取り除かれるという確かな望みをいだいて、ますます喜ぶのです。この望みを堅く保っている間は、あなたが感じる悪い気質はどれも、へりくだった喜びを減らすのでなく、むしろ増す手段となりえます。たとえあなたがその気質を全く憎んでいても（詩篇一三九・二二）、そうなのです。あなたはこう言うことができます。「これも、あれも、同じように主の前から滅び去ります。ろうが火の前に溶けるように、これも主の御顔の前に溶け去ります」。こうして、あなたの魂のうちには、まだなされずに残っている変化があります。それが大きければ大きいほど、あなたはますます主にあって勝ち誇ることができます。あなたの救の神によって喜ぶ（ハバク三・一八）ことができるのです。この神は、すでにあなたのために大いなる事をなされました（詩篇一二六・三）。そして、これよりもはるかに大いなる事をなさるのです。

（二） 第二に、サタンが、あのささやきで、あなたの平安を激しく攻撃するとします。「神は聖であり、あなたは聖くない。あなたは、あの聖性からはかり知れないほど遠く離れている。その聖性がなければ、神を見ることはできない（ヘブル一二・一四）。それなら、どうして神の恵みのうちにいられるのか。どうして自分が義とされていると思いこめるのか」。攻撃が激しければ激しいほど、あなたは、いっそう真剣に注意して、次のことを堅く保ちなさい。「私は、自分の行った義のわざによってではなく（テトス三・五）、キリストのうちに見いだされています（ピリピ三・九）。愛する御子によって受けいれられています（エペソ一・六）。私は、自分の義を持っているのではありません（ピリピ三・九）」。ここで言う自分の義とは、神の前での私たちの義認の、全体であれ一部であれ、原因となる義のことです。「私が持っているのは、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義です（ピリピ三・九）」。ああ、これをあなたの首に結びなさい。あなたの心の碑にしるしなさい（箴言三・三）。これを腕輪のように腕につけ、目の間の覚えとしなさい（申命記六・八）。「私は、『価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされ』ています（ローマ三・二四）」。私たちは「恵みにより、信仰によ」って救われている（エペソ二・八）という尊い真理を、ますます重んじ、大切にしなさい。神の価なしの恵みに、ますます感嘆しなさい。神はこの世をこれほど愛して、「そのひとり子を賜わった」（ヨハネ三・一六）のです。「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠のいのちを得るため」です（ヨハネ三・一六）。そうすれば、一方では、あなたが感じる罪深さの自覚が、他方では、あなたが待ち望む聖性の自覚が、どちらも助けとなるでしょう。あなたの平安を確かなものにし、平安を川のように流れさせる（イザヤ四八・一八）助けとなるのです。そうすれば、その平安は、不信心のあらゆる山々があっても、穏やかな流れとなって流れ続けるでしょう。その山々は、主があなたの心を完全にご自分のものにしようと来られる日に、平地となる（ゼカリヤ四・七）のです。病気も痛みも、死が近づくことも、疑いや恐れを引き起こすことはないでしょう。神にあっ

ては、一日も、一時間も、一瞬も、千年のようである（第二ペテロ三・八）ことを、あなたは知っています。あなたの魂のうちに、まだなされずに残っていることを行われるのに、神が時間に追われることはありえません。そして、神のときは、いつも最善のときです。ですから、何事も思いわずらってはなりません。ただ、あなたの求めるところを神に申し上げなさい（ピリピ四・六）。しかも、疑いや恐れをもってではなく、感謝をもって申し上げなさい。神があなたに良い物を何一つ拒まれるはずがない（詩篇八四・一一）と、前もって確信しているからです。

（三） 第三に、あなたが、自分のたて（エペソ六・一六）を手放すように、自分の信仰を、神の愛への確信を捨てるように誘惑されるとします。誘惑が強ければ強いほど、ますます注意して、達し得たところ（ピリピ三・一六）を堅く保ちなさい。ますます励んで、あなたのうちにある神の賜物を、再び燃えたたせなさい（第二テモテ一・六）。次のことを決して手放してはなりません。「私には、『父のみもとには』、『助け主、すなわち、義なるイエス・キリスト』がおられます（第一ヨハネ二・一）。また、『わたしがいま』『生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのです』（ガラテヤ二・二〇）」。これを、あなたの誇りとし、喜びの冠としなさい（第一テサロニケ二・一九）。そして、あなたの冠がだれにも奪われないようにしなさい（黙示録三・一一）。次のことを堅く保ちなさい。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は」「地の上に立たれます」（ヨブ一九・二五）。また、「私はいま、『その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受け』ています（エペソ一・七）」。こうして、信仰から来るあらゆる喜びと平安とに満たされて（ローマ一五・一三）、信仰の平安と喜びのうちに進み続けなさい。あなたの魂全体が、あなたを造られた方のかたちに従って新しくされる（コロサイ三・一〇）ところまで、進み続けなさい。その間、絶えず神に叫び求めなさい。上に召してくださる神の賞与（ピリピ三・一四）を見ることができるように、と。サタンが描いてみせるような、身の毛のよだつ恐ろしい姿でではなく、その本来のありのままの美しさのうちに見ることができるように、と。なければ地獄に行くことになる、なくてはならないものとしてではありません。あなたを天国へ導くために与えられうるものとして見ることができるように、と。それを、神の豊かなあわれみの倉のすべての中で、最も望ましい賜物とみなしなさい。この正しい光の中でそれを見るなら、あなたはますますそれに飢え求めるでしょう。あなたの魂全体が、神を渇き求め、神に似た者となるこの栄光ある姿を渇き求めるでしょう。そして、このことについての確かな望み（第二テサロニケ二・一六）と、恵みによる力強い励まし（ヘブル六・一八）とを受けて、あなたはもはや弱り果てて意気そそうする（ヘブル一二・三）ことなく、達するまで追い求め続けるでしょう。

（四） 同じ信仰の力のうちに、栄光へと進み続けなさい。実に、これはやはり同じ一つの見通しなのです。神は初めから、赦しと聖性と天国とを合わせられました。それなのに、なぜ人がそれを離してよいでしょうか（マタイ一九・六）。ああ、このことに気をつけなさい！ この金の鎖の輪の一つも、断ち切られてはなりません。「神は、キリストのゆえに私を赦してくださいました（エペソ四・三二）。神は今、私をご自分のかたちに新しくしておられます。まもなく神は、私をご自分にふさわしい者とし、御顔の前に立たせるために私を迎えてくださいます。神は御子の血によって私を義としてくださいました。その私は、御霊によってすっかりきよめられて、すぐにも『新しいエルサレム』（黙示録二一・二）、『生ける神の都』（ヘブル一二・二二）へ上って行きます。もうしばらくすれば（ヘブル一〇・三七）、私は、『長子たちの』大いなる集いと『教会』に、『万民の審判者なる神』に、『新しい契約の仲保者イエス』に近づきます（ヘブル一二・二三〜二四）。この影は何とすぐに消え去り、永遠の日が私の上に明けそめることでしょう。私は何とすぐに、『神と小羊との御座から出て』いる『いのちの水の川』から飲むことでしょう（黙示録二二・一）。そこでは、『その僕たちは』みな、神をほめたたえ、『御顔を仰ぎ見る』のです（黙示録二二・三〜四）。『彼らの額には、御名がしるされている』のです（黙示録二二・四）。『夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する』のです（黙示録二二・五）」。

（五） あなたがこうして、神の「良きみ言葉と、きたるべき世の力とを味わう（ヘブル六・五）とします。そうすれば、まだ「光のうちにある聖徒たちの特

権にあずかるに足る者」（コロサイ一・一二）になっていないからといって、神に向かってつぶやくことはないでしょう。まだすっかり解放されていないことに不平を言うかわりに、ここまで解放してくださったことのゆえに、神をほめたたえるでしょう。神がなされたことのゆえに神をあがめ、それを、神がこれからなさることの保証（第二コリント一・二二）として受け取るでしょう。まだ新しくされていないからといって、神にいらだつことはなく、やがて新しくされるのだからと、神をたたえるでしょう。また、「今は」すべての罪からのあなたの「救が、初め信じた時よりも、もっと近づいている」（ローマ一三・一一）からと、神をたたえるでしょう。まだそのときが十分に満ちていないからといって、むだに自分を苦しめるかわりに、落ち着いて静かにそのときを待つでしょう。それが「臨む。滞りはしない」（ハバクク二・三）ことを知っているからです。ですから、あなたは、まだあなたのうちに残っている罪の重荷を、今しばらくは、なおさら快く耐え忍ぶことができます。それはいつまでも残るわけではないからです。もうしばらくすれば、それはすっかりなくなります。ただ、「主のときを待ち望みなさい」。強くありなさい。そうすれば、「主はあなたの心を慰めてくださいます」。そして、主に信頼しなさい！

（六）　また、すでに自分の望みにあずかり、すでに愛において全うされた（第一ヨハネ四・一八）ように見える人々を、あなたが見るとします。ただし、それは人が判断できる限りでのことです。心を探るのは、ただ神だけです（エレミヤ一七・一〇）。その人々のうちにある神の恵みをねたむどころか、それによってあなたの心を喜ばせ、慰めなさい。その人々のゆえに、神をあがめなさい。「一つの肢体が尊ばれると」、「ほかの肢体もみな共に喜ぶ」（第一コリント一二・二六）のではないでしょうか。その人々について、ねたんだり悪く勘ぐったりするかわりに、その慰めのゆえに神をほめたたえなさい。神がすべての約束を成就される真実の、新しい証拠を得たことを喜びなさい。そして、あなたも「キリスト・イエスによって捕えられている」その目的を「捕え」る（ピリピ三・一二）ために、いっそう奮い立ちなさい！

（七）　そのために、時を生かして用いなさい（エペソ五・一六）。今この瞬間を生かしなさい。恵みにおいて成長する機会、善を行う機会を、一つ残らず買い取りなさい。あすもっと恵みを受けるという思いのために、今日をおろそかにしてはなりません。あなたは今、一タラントを持っています。あと五タラントを期待するなら、なおさら、持っているものを生かしなさい。これから受けることを期待すればするほど、今、神のためにいっそう働きなさい。その日の恵みは、その日一日だけで十分です。神は今、あなたの上に祝福を注いでおられます。今こそ、今の神の恵みの忠実な管理人であることを示しなさい（第一ペテロ四・一〇）。あすがどうであれ、今日、力の限りをつくして、あなたの信仰に、勇気と節制と忍耐と兄弟愛とを加えなさい（第二ペテロ一・五～七）。そして、神を恐れる心をも加えなさい。あの清く完全な愛に達するときまで、そうしなさい。今、これらのものが「あなたがたに備わって、いよいよ豊かに」なるようにしなさい（第二ペテロ一・八）。今、怠る者、実を結ばない者となってはなりません（第二ペテロ一・八）。「こうして、わたしたちの主」「イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが」与えられるのです（第二ペテロ一・一一）！

（八）　最後に、神が聖であるように聖くなる（第一ペテロ一・一五～一六）というこの祝福に満ちた望みを、あなたが以前に濫用したことがあるとします。それでも、だからといって、それを捨ててはなりません。濫用はやめ、正しく用いることは続けなさい。今、神のいっそう豊かな栄光と、自分の魂の益のために、それを用いなさい。あなたがたは、揺るがない信仰のうちに、霊の穏やかな静けさのうちに、望みの全き確信のうちに、進みなさい。神のなされたことを、いつも喜びながら（第一テサロニケ五・一六）、完全を目ざして進みなさい（ヘブル六・一）。日ごとに、私たちの主イエス・キリストを知る知識において成長しなさい（第二ペテロ三・一八）。ゆだねる心と忍耐のうちに、また、すでに得たものとこれから得るものとへのへりくだった感謝のうちに、力から力に進みなさい（詩篇八四・七）。そして、「イエスを仰ぎ見つつ」（ヘブル一二・二）、あなたがたの参加すべき競走（ヘブル一二・一）を走りなさい。完全な愛を通して、主の栄光にはいるときまで、走り続けなさい！

説教四十四　原罪

「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られました」（創世記六・五）

（一）これは、人々があらゆる時代に描いてきた人間性の美しい絵と、何とかけ離れていることでしょう。古代の多くの人々の書物には、人間の尊厳についての華やかな描写があふれています。そのうちのある人々は、人間をこう描きます。人間は、あらゆる徳と幸いを、自分の成り立ちのうちに備えている。少なくとも、ほかのどんな存在の世話にもならずに、それをすっかり自分の力のうちに持っている、と。いや、人間は自足していて、自分の蓄えで生きることができ、神ご自身にもほとんど劣らない、とさえ描くのです。

（二）そのように語ってきたのは、異教徒だけではありません。異教徒は、探究にあたって、理性のほの暗い光ぐらいにしか導かれない人々です。けれども、キリストの名を負い、神の言をゆだねられた（ローマ三・二）多くの人々も、同じように人間の本性について大げさに語ってきました。まるで、人間の本性がまったく無垢で完全であるかのようにです。この種の説明は、今世紀に特に多く見られます。そしておそらく、世界のどこよりも私たちの国で多く見られます。この国では、すぐれた知性と広い学識を持つ少なからぬ人々が、持てる力を尽くしてきました。自分たちが「人間性の美しい面」と呼ぶものを示そうとしてきたのです。そして、認めなければなりません。もし彼らの人間についての説明が正しいとします。それなら、人間は今もなお、御使いよりも少し低いだけの者です。あるいは、この言葉をもっと文字どおりに訳せば、「ただ少しく」「神よりも低く」造られた者です（詩篇八・五）。

（三）こうした説明が、世の大多数の人々にたやすく受けいれられるのは、不思議なことでしょうか。自分のことを良く思うように、たやすく説き伏せられない人がいるでしょうか。それで、この種の著者たちは、ほとんど至るところで読まれ、賞賛され、喝采を受けています。彼らが自分の説に引き入れた人々は、数えきれません。華やかな社交界だけでなく、学問の世界にもいるのです。こうして今では、別の語り方をすること、人間性をおとしめるようなことを少しでも言うことは、まったくはやらなくなりました。人間性は、少しの弱さはあっても、きわめて無垢で、賢く、徳の高いものだと、一般に認められているのです！

（四）けれども、それなら、私たちは自分の聖書をどうすればよいのでしょうか。聖書は、決してこれと一致しないからです。こうした説明は、どれほど血肉を喜ばせても、聖書の説明とはまったく相いれません。聖書は断言しています。「ひとりの人の不従順によって」、すべての人が「罪人とされた」（ローマ五・一九）と。また、「アダムにあってすべての人が死んで」しまった（第一コリント一五・二二）と断言しています。霊的に死に、神のいのちと神のかたちを失ったのです。また、堕落して罪深くなったアダムが、それから「自分のかたちのような男の子を生」んだ（創世記五・三）と断言しています。アダムがそれ以外のかたちで子を生むことは、ありえませんでした。「だれが汚れたもののうちから清いものを出すことができ」ましょうか（ヨブ一四・四）。また、したがって私たちもほかの人々と同じく、生れながら「罪過と罪とによって死んでいた者」（エペソ二・一）であったと断言しています。「この世の中で希望もなく神もない者」（エペソ二・一二）であり、それゆえ「怒りの子」（エペソ二・三）であった、と断言しているのです。また、だれでも、「わたしは不義のなかに生れました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました」（詩篇五一・五）と言うことができる、と断言しています。また、「なんらの差別もない」（ローマ三・二二）と断言しています。「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって」いる（ローマ三・二三）からです。すなわち、人が初めに造られたときの、あの神の栄光あるかたちに、届かなくなっているのです。そこで、「主は天から人の子らを見おろして」（詩篇一四・二）、彼らが「みな迷い、みなひとしく腐れた」（詩篇一四・三）のを見られました。「義人はいない、ひとりも

いない」（ローマ三・一〇）のでした。本当に神を求める人は、いなかったのです（ローマ三・一一）。これは、聖霊が先に引いた言葉で宣言しておられることと、まさに一致します。以前にも天から見おろされたとき、神は、「人の悪が地にはびこ」るのを見られました（創世記六・五）。その悪はあまりに大きく、「すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりである」ほどでした（創世記六・五）。

これが、人間についての神の説明です。私はここから機会を得て、次のことをしようと思います。

第一に、洪水の前の人々がどのようであったかを示すこと。

第二に、人々が今も同じではないかを調べること。

第三に、いくつかの推論を加えることです。

【一】 洪水の前の人々はどのようであったか

（一） 第一に、聖句の言葉を解き明かして、洪水の前の人々がどのようであったかを示します。ここに示された説明には、まったく信頼することができます。神がそれを見られたのであり、神が欺かれることはありえないからです。神は、「人の悪が」「はびこ」るのを見られました（創世記六・五）。それは、あれこれの人の悪ではありません。わずかな人々だけの悪でもありません。大部分の人々の悪というだけでもありません。人間全体の悪、例外なくすべての人の悪です。この「人」という語は、人類全体を、人間の本性にあずかるすべての者を含んでいます。そして、その数を計算し、彼らが何千、何百万人いたかを言うのは、たやすいことではありません。当時の地は、太古の美しさと本来の豊かな実りを、まだ多く保っていました。地の表は、今のように裂けて引き裂かれてはいませんでした。春と夏とが、手を携えて進んでいたのです。ですから、地は、今養うことのできるよりもはるかに多くの住民に、糧を与えていたと考えられます。そして、人々が七百年、八百年にもわたって息子や娘を生んでいたのですから、住民はとてつもなく増えたに違いありません。それなのに、この想像もできないほどの数の中で、ただノアだけが、神の前に「恵みを得た」のです（創世記六・八）。ノアだけが（おそらく家族の一部も含めて）、世界中に広がった悪の例外でした。その悪は、神の正しいさばきによって、間もなく世界中の滅びを招きました。ほかの人々はみな、同じ罰にあずかったように、同じ罪責にもあずかっていたのです。

（二） 神は、人が「すべてその心に思いはかること」を見られました（創世記六・五）。この「心」とは、人の魂、内なる人（ローマ七・二二）、人のうちにある霊、人の内と外のあらゆる動きの源のことです。神は、「すべて」の「思いはかること」を見られたのです（創世記六・五）。英語の聖書がここで「想像」（imagination）と訳している語ほど、意味の広い語は見つかりません。この語は、内に形づくられ、造られ、こしらえられるものを何でも含みます。魂のうちにあるもの、魂のうちを過ぎて行くもののすべてを含みます。あらゆる傾き、情愛、情念、欲求を含み、あらゆる気質、意図、思いを含みます。したがって、この語は、あらゆる言葉と行いをも含むはずです。言葉と行いは、これらの泉から自然に流れ出るものであり、それぞれが流れ出る泉に応じて、善にも悪にもなるからです。

（三） さて、神は、これらすべて、その全体が悪であることを見られました。それは、道徳的な正しさに反しています。神の本性に反しています。神の本性は、必然的にあらゆる善を含んでいるのです。それは、神の御旨に反しています。神の御旨は、善悪の永遠の基準です。それは、清く聖い神のかたちに反しています。人は初めに、そのかたちに造られました。そして、神がご自分の手のわざを見渡し、そのすべてがはなはだ良い（創世記一・三一）のを見られたとき、人はそのかたちのうちに立っていたのです。それは、正義とあわれみと真実に反しています。また、一人一人の人が、自分の造り主に対して、また仲間の被造物に対して持っていた、本質的な関係に反しています。

（四） けれども、悪の中に善が混じっていたのではないでしょうか。やみの中に光が混じっていたのではないでしょうか。いいえ、まったく混じっていませんでした。神は、人が「その心に思いはかること」の全体が「悪い事ばかりである」のを見られたのです（創世記六・五）。確かに、彼らの多くが、おそらくすべての者が、心のうちに良い促しを与えられていたことは、否定できません。神

の霊は、そのときも、人が悔い改めることもあろうかと、人と争われた（創世記六・三）からです。とりわけ、あの恵み深い猶予の期間、すなわち、箱舟が造られていた間（第一ペテロ三・二〇）の百二十年は、そうでした。それでもなお、人の「肉の内には、善なるものが宿っていな」かったのです（ローマ七・一八）。人の本性全体が、純粋に悪でした。それは、どこまでもそれ自身と一貫しており、反対の性質のものは何も混じっていませんでした。

（五）けれども、なおこう問う人がいるかもしれません。「この悪には、途切れることがなかったのか。人の心のうちに何か良いものが見いだされるような、正気に返るときはなかったのか」。ここでは、神の恵みが時おり人の魂のうちに働かれたかもしれないことは、考えないことにします。それを別にすれば、あの悪に途切れがあったと信じる理由はありません。神は、人が「その心に思いはかること」の全体が「悪い事ばかりである」のを見られました。そして、それがいつも同じであることも見られたからです。すなわち、それが「いつも悪い事ばかりである」のを見られたのです（創世記六・五）。毎年、毎日、毎時間、一瞬一瞬がそうでした。人が道をそれて善に向かうことは、一度もありませんでした。

【二】人々は今も同じではないか

以上が、全人類についての確かな説明です。これは、人の心の中にあることを知っておられる方（エレミヤ一七・一〇）が、私たちを教えるために記録に残してくださったのです。神が地に洪水をもたらされる前、すべての人はこのようでした。第二に、人々が今も同じであるかどうかを調べなければなりません。

（一）確かなのは、今の人々について別の考え方をする理由を、聖書が少しも与えていないことです。むしろ反対に、先に引いた聖書の箇所はみな、洪水の後に生きた人々について語っています。神がダビデによって人の子らについて宣言されたのは、洪水から千年以上も後のことでした。「彼らはみな迷い」、真理と聖性の道から外れました（詩篇一四・三）。「義人はいない、ひとりもいない」のです（ローマ三・一〇）。すべての預言者も、それぞれの時代に、このことをあかししています。イザヤも、神の特別な民について、こう言っています（異教徒の状態がこれよりましであったはずはありません）。「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかり」です（イザヤ一・五〜六）。すべての使徒も、同じ説明をしています。いや、神の言（ローマ三・二）の全体の趣旨が、同じことを示しています。これらすべてから、私たちは、神の恵みに助けられていない、生れながらの状態の人について、こう学びます。人が「すべてその心に思いはかること」は、今もなお「悪い事」、「悪い事ばかり」であり、しかも「いつも」そうなのです（創世記六・五）。

（二）そして、今の人間の状態についてのこの説明は、日々の経験によって確かめられます。確かに、生れながらの人はそれを見分けません。それは驚くにあたりません。生れつきの盲人は、盲目のままでいる限り、自分に欠けているものをほとんど感じません。まして、すべての人が目が見えずに生れる場所があるとします。そこの人々は、視力が欠けていることをなおさら感じないでしょう。同じように、人は、生れながらの悟りの盲目のうちにとどまっている限り、自分の霊的な欠乏を感じません。特に、この欠乏を感じません。けれども、神が彼らの悟りの目を開かれるやいなや、彼らは、自分が以前にいた状態を見ます。そのとき、彼らは深く確信します。「生きている人はみな」、とりわけ自分自身が、生れながら「まったくむなしい」ことを確信するのです。むなしいとは、愚かさと無知、罪と悪のことです。

（三）神が私たちの目を開かれるとき、私たちは悟ります。自分が以前、この世の中で神もない者（エペソ二・一二）、いや、むしろこの世の中の無神論者であったことを悟るのです。ギリシャ語ではアテオイ・エン・トー・コスモー（ἄθεοι ἐν τῷ κοσμῳ）です。私たちは、生れながら、神についての知識もなく、神と面識もありませんでした。確かに、私たちは、理性を用いるようになるとすぐに、「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性と」を、「被造物において」知りました（ローマ一・二〇）。見えるものから、見えない、永遠の力ある存在がいることを推し量りました。けれども、神がおられることは認めても、なお神と面識はありませんでした。私たちは、中国に皇帝がいることを知っ

ていても、その皇帝その人を知りません。それと同じように、全地の王（詩篇四七・七）がおられることを知っていても、その方を知らなかったのです。実に、私たちは、生れながらのどの能力によっても、神を知ることができませんでした。そのどれによっても、神を知る知識に達することはできなかったのです。生れながらの悟りによって神を認めることは、目で神を見ることと同じく、できませんでした。「父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」。また、「子を知る者は父」と、父が子をあらわされる者とのほかには、だれもいないからです（マタイ一一・二七）。

（四） 古代のある王について、こんな話が伝えられています。その王は、人間の生れながらの言葉が何であるかを知りたいと思いました。そして、この問題に確かな決着をつけるために、次のような実験をしたのです。王は、二人の幼児を生れるとすぐに、そのために用意した場所に移すよう命じました。二人はそこで、何も教えられず、人の声を一度も聞かずに育てられました。その結果はどうだったでしょうか。二人がついにその閉じこめられた場所から連れ出されたとき、何の言葉も話しませんでした。ほかの動物のような、言葉にならない音を発するだけだったのです。同じように、二人の幼児を、生れたときから何の宗教も教えずに育てたとします。（神の恵みが介入しない限り）結果がまったく同じになることは、ほとんど疑う余地がありません。二人は、何の宗教も持たないでしょう。神についての知識は、野の獣や野ろばの子（ヨブ一一・一二）と変わらないでしょう。伝えられた宗教と神の御霊の働きとを除いた、自然の宗教とは、このようなものなのです！

（五） そして、神を知らないのですから、私たちは神への愛を持つことができません。知らない方を愛することはできないのです。確かに、たいていの人は神を愛することを口にし、おそらく自分は愛していると思いこんでいます。少なくとも、自分は神を愛していないと認める人は、ほとんどいません。けれども、事実はあまりにも明らかで、否定できません。生れながらに神を愛する人はいません。石や、自分が踏んでいる土を愛さないのと同じです。私たちは、愛するものを喜びます。けれども、生れながらに神を喜ぶ人はいません。生れながらの状態では、どうしてだれかが神を喜ぶことができるのか、私たちには想像もつきません。私たちは、神にまったく楽しみを見いだしません。私たちにとって、神はまったく味気ない方です。神を愛すること！　それははるかに高く、私たちの目の届かないところにあります。私たちは生れながらには、そこに達することができません。

（六） 私たちは、生れながら、神への愛を持たないだけでなく、神を恐れる心も持っていません。確かに、たいていの人が、遅かれ早かれ、一種の無分別で理不尽な恐れを持つことは認められています。それは、正しくは迷信と呼ばれるものです。もっとも、思い違いをしたエピクロス派の人々は、それを宗教と呼びましたが。けれども、この恐れでさえ、生れながらのものではなく、後から身につけたものです。主として、人との交わりや手本から身につけたものです。生れながら、私たちの思いのどこにも、神はおられません（詩篇一〇・四）。私たちは、神には神の務めを処理させておきます。私たちの想像では、神は天に静かに座っておられ、地にいる私たちには私たちの務めを処理させておかれるのです。こうして、私たちの心に神への愛がないのと同じく、私たちの目の前には、神に対する恐れがありません（ローマ三・一八）。

（七） こうして、すべての人は「この世の中で」無神論者なのです（エペソ二・一二）。けれども、無神論であっても、偶像礼拝から守られるわけではありません。生れながらの状態では、この世に生れるすべての人が、まぎれもない偶像礼拝者です。もっとも、私たちは、この言葉の普通の意味での偶像礼拝者ではないかもしれません。私たちは、偶像を拝む異教徒のように、鋳た像や刻んだ像を拝みはしません。木のはしくれの前にひれ伏したり（イザヤ四四・一九）、自分の手のわざを拝んだり（イザヤ二・八）はしません。天にいる御使いや聖徒に祈ることもしません。地上にいる聖徒に祈らないのと同じです。けれども、それが何でしょう。私たちは、自分の偶像を心の中に持ち（エゼキエル一四・三）、それにひれ伏して拝んでいるのです。ただ神だけに帰すべき栄誉を自分に帰すとき、私たちは自分自身を拝んでいるのです。ですから、高ぶりはすべて偶像礼拝です。高ぶりとは、ただ神だけに帰すべきものを、自分に帰することだからです。そして、高ぶりは人のために造られたものではありません。それなのに、高ぶりを持たずに生れる人が、どこにいるでしょうか。けれども、私たちはこれに

よって、譲り渡すことのできない神の権利を奪います。偶像礼拝者として、神の栄光を横取りするのです。

（八）けれども、私たちがみな生れながらに犯している偶像礼拝は、高ぶりだけではありません。サタンは、我意においても、私たちの心に自分のかたちを刻みつけました。サタンは、天から投げ落とされる前に、こう言いました。「わたしは」、「わたしは北の果」「に座」そう（イザヤ一四・一三）。すなわち、造り主の意志とはかかわりなく、自分の意志と好みのままに行おう、と言ったのです。この世に生れるすべての人が、同じことを言います。しかも、何千という場合に言います。いや、それを公言さえします。そのことで顔を赤らめることもなく、恐れも恥もなく公言するのです。その人に、「なぜこんなことをしたのか」と尋ねてごらんなさい。その人は、「そうしたかったからだ」と答えます。これは、「自分の意志だったからだ」というのと、どこが違うでしょうか。それは、つまり、悪魔と自分の意見が一致したからだ、ということです。サタンと自分とが、一つの同じ原理によって行動を治めているからだ、ということです。その間、神の御旨は、その人の思いの中になく、少しも考慮されていません。神の御旨は、天にいるものであれ地にいるものであれ、知性あるすべての被造物にとって、最高の規範であるのにです。それは、すべての被造物がその造り主に対して持っている、本質的で変わることのない関係から生じる規範です。

（九）ここまでは、私たちは悪魔のかたちを帯び、悪魔の足跡を踏んでいます。けれども、次の一歩で、私たちはサタンを置き去りにします。サタン自身も犯していない偶像礼拝に走るのです。それは、世への愛のことです。世への愛は、今では、すべての人にとって、自分の意志を愛するのと同じほど自然なものです。造り主の代りに被造物のうちに（ローマ一・二五）幸いを求めること、ただ神のうちにだけ見いだせる満足を、神の手のわざのうちに求めること。これ以上に、私たちにとって自然なことがあるでしょうか。「肉の欲」（第一ヨハネ二・一六）、すなわち、あらゆる種類の感覚の快楽を求める欲ほど、自然なものがあるでしょうか。確かに、人々は、こうした低い快楽を軽蔑すると、大げさに語ります。特に、学問と教養のある人々がそうです。彼らは、こうした欲求を満たすことには無頓着であるかのように装います。その欲求においては、彼らは滅びうせる獣（詩篇四九・一二）と同じ水準に立っているのです。けれども、それはただの見せかけです。だれでも、この点では、自分が生れながら、まったくの獣であることを、心の中で自覚しているからです。肉の欲求は、最も低い種類のものでさえ、多かれ少なかれ人を支配しています。それは人をとりこにし、人がほこる理性をよそに、人をあちらこちらへ引きずり回します。人は、どれほど育ちがよく、ほかのたしなみを身につけていても、やぎにまさるところがありません（伝道三・一九）。いや、むしろ、獣のほうが人にまさっているのではないかと、大いに疑われます。彼らの近代の託宣者の一人に耳を傾けてよいなら、確かに獣のほうがまさっています。その人は、きわめて上品に、こう語っています。

獣も、季節に一度は恋を味わう。
ただ理性ある獣だけが、恋の奴隷となり、
その愚かさのうちに、一年中あくせくと働く。

確かに、人と人との間にかなりの違いがあることは、認めなければなりません。その違いは、（先行の恵みによって生じる違いのほかに）体質の違いや教育の違いから生じます。けれども、それにもかかわらず、この点で、だれがほかの人にまず石を投げつける（ヨハネ八・七）ことができるでしょうか。自分のことをまったく知らない人でない限り、できないはずです。祝福された私たちの主は、第七の戒めについて、こう解き明かされました。「情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのです」（マタイ五・二八）。この試しに、だれが耐えられるでしょうか。ですから、ある人々の無知と横柄さの、どちらにいちばん驚くべきか分かりません。その人々は、だれもが自分の胸のうちに感じたことのある欲望に負けた人々を、ひどく軽蔑して語るのです。罪のないものであれ、そうでないものであれ、あらゆる感覚の快楽を求める欲は、人の子のだれにとっても自然なものなのにです。

（一〇）そして、「目の欲」（第一ヨハネ二・一六）も同じく自然なものです。目の欲とは、想像の快楽を求める欲です。この快楽は、壮大なもの、美しいもの、あるいは珍しいものから生じます。もっとも、前の二つが、あとの一つと重なるのでなければの話です。というのは、念入りに調べれば、おそらく次のことが明らかになるからです。壮大なものも美しいものも、新しい間しか人を喜ば

せません。その新しさが過ぎ去ると、それが与える快楽も、少なくともその大部分は過ぎ去ります。そして、見慣れるにつれて、それに比例して、平凡で味気ないものになるのです。けれども、このことをどれほどたびたび経験しても、同じ欲はなお残ります。生れつきの渇きは、魂の中に根を下ろしたままです。いや、満たせば満たすほど増し加わり、次から次へと別のものを追い求めるように、私たちを駆り立てます。私たちは、どのものからも、実を結ばなかった望みと、裏切られた期待とをいだいて離れるのにです。そうです。

白髪の愚か者は、幾日も
絶え間ない悲しみと戦ってきたのに、
また望みを新たにし、愚かにも
あすに望みのない賭けをする。
あすが来る。昼になる。夜になる。
この日も、これまでの日と同じく飛び去る。
それでも彼は進み続け、喜びを求める、
あすこそは、と。今夜、死ぬそのときまで。

（一一）世への愛は、私たちの本性に深く根を下ろした致命的な病です。その第三の症状は、「持ち物の誇」（第一ヨハネ二・一六）です。すなわち、称賛を求める欲、人からの誉（ヨハネ五・四一）を求める欲です。人間性を最も賛美する人々も、この欲がまさに生れながらのものであることを認めています。視覚や聴覚、そのほかの外の感覚と同じほど、生れながらのものだと認めるのです。そして、彼らはそれを恥じているでしょうか。文人たち、洗練され磨かれた知性を持つ人々でさえ、恥じているでしょうか。恥じるどころか、それを誇っているのです。彼らは、称賛を愛する自分を、自分で称賛しているのです。そうです、クリスチャンと呼ばれる著名な人々も、昔のむなしい異教徒の、次の言葉を平気で取り入れています。Animi dissoluti est et nequam negligere quid de se homines sentiant.（人が自分のことをどう思うかを気にかけないのは、邪悪で放埒な心のしるしである）ですから、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても（第二コリント六・八）、落ち着いて動じずに進むとします。それは、彼らにとっては、まさに生かしおくべきではない者のしるしなのです。「こんな男は地上から取り除いてしまえ」（使徒二二・二二）というわけです。けれども、この人々が、イエス・キリストや使徒たちのことを聞いたことがあると、だれが思うでしょうか。「互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができ」ましょうか（ヨハネ五・四四）。こう言われたのがだれであるかを、彼らが知っていると、だれが思うでしょうか。けれども、もしこれが本当にそのとおりだとします。すなわち、私たちが互いに誉を受けたり求めたりして、ただひとりの神からの誉を求めないとします。その限り、信じることはできず、したがって神に喜ばれることもできない（ヘブル一一・六）とします。そうなら、全人類は何という状態にあることでしょう。異教徒だけでなく、クリスチャンも何という状態にあることでしょう。彼らはみな、互いに誉を求めているのですから。彼ら自身の判断でも、そうすることは、彼らにとって自然なことなのですから。目に当たる光を見たり、耳に入る音を聞いたりするのと同じほど、自然なことなのですから。いや、彼らは、人の称賛を求めることを、徳のある心のしるしとしているのですから。ただひとりの神からの誉で満足することを、悪い心のしるしとしているのですから！

【三】いくつかの推論

（一）次に、これまで述べたことから、いくつかの推論を引き出します。第一に、ここから、一つの大きな根本的な違いを学ぶことができます。教理の体系として見たキリスト教と、最も洗練された異教との違いです。古代の異教徒の多くは、個々の人の悪徳を詳しく描きました。人の貪欲や残酷さ、ぜいたくや浪費を、大いに非難しました。ある人々は、大胆にも、「何らかの悪徳を持たずに生れる者はいない」とさえ言いました。けれども、彼らのだれひとり、人の堕落を知らなかったように、人がまったく腐敗していることも知りませんでした。すべての人があらゆる善を欠き、あらゆる悪に満ちていることを、知らなかったのです。彼らは、人間の本性全体がまったく腐敗していることを、まるで知りませんでした。この世に生れるすべての人が、魂のあらゆる能力において腐敗している

のです。それは、個々の人を支配する個々の悪徳によるというよりも、全体にあふれる洪水によるのです。すなわち、無神論と偶像礼拝、高ぶりと我意と世への愛の洪水です。ですから、これが、異教とキリスト教とを分ける第一の大きな点です。異教は、多くの人が多くの悪徳に冒されており、悪徳への傾きを持って生れることさえあると認めます。けれども同時に、ある人々においては、生れながらの善が悪をはるかにしのいでいると考えます。キリスト教は宣言します。すべての人は「罪のうちに」みごもられ、「不義のなかに生れ」た（詩篇五一・五）、と。また、そのためにすべての人のうちには「肉の思い」がある、と宣言します。それは「神に敵する」もので、神の「律法に従わず、否、従い得ない」（ローマ八・七）、と宣言するのです。そして、この肉の思いは魂全体を冒している、と宣言します。そのため、人の「内に」、すなわち人の「肉の内には」、生れながらの状態では、「善なるものが宿っていない」（ローマ七・一八）、と宣言します。かえって、人が「すべてその心に思いはかること」は「悪い事」であり、ただ悪だけである、と宣言するのです。しかも「いつも」そうなのだ（創世記六・五）、と。

（二）第二に、ここから次のことを学ぶことができます。これを原罪と呼ぶにせよ、ほかのどんな名で呼ぶにせよ、これを否定する人はみな、いまなお異教徒にすぎないのです。異教とキリスト教とを分ける根本的な点において、そうなのです。確かに、その人々も認めるかもしれません。人には多くの悪徳がある。そのいくつかは生れつきのものだ。したがって、私たちは、本来あるべきほど賢く、徳の高い者として生れてはいない、と。「私たちは悪への傾きと同じほど善への傾きを持って生れる。すべての人は生れながら、造られたときのアダムと同じほど徳が高く賢い」と、はっきり断言する人は、ほとんどいないからです。けれども、ここに、見分けの合言葉「シボレテ」（士師記一二・六）があります。人は生れながら、あらゆる悪に満ちているでしょうか。あらゆる善を欠いているでしょうか。まったく堕落しているでしょうか。人の魂はまったく腐敗しているでしょうか。あるいは、聖句に戻って言えば、人が「すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりである」のでしょうか（創世記六・五）。これを認めるなら、あなたはその限りでクリスチャンです。これを否定するなら、あなたはいまなお異教徒にすぎません。

（三）第三に、ここから、宗教の、すなわちイエス・キリストの宗教の、本来の性質が何であるかを学ぶことができます。それは、テラペイア・プシューケース（θεραπεία ψυχῆς）、すなわち魂の治療です。このように病んでいる魂をいやす、神の方法なのです。これによって、魂の偉大な医者は、この病をいやすために薬を用いられます。あらゆる能力においてまったく腐敗した人間の本性を、回復させるためです。神は、ご自身と、ご自身がつかわされたイエス・キリストとを知る知識（ヨハネ一七・三）によって、私たちの無神論をすべていやされます。神は私たちに信仰を与えて、いやされます。信仰とは、神と神の事柄についての、神から与えられる証拠であり確信です。特に、キリストが「わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた」（ガラテヤ二・二〇）という、この大切な真理についての証拠であり確信です。悔い改めと心のへりくだりによって、高ぶりという死に至る病がいやされます。我意という病は、ゆだねる心によって、すなわち、神の御旨に柔和に、感謝して従うことによって、いやされます。そして、あらゆる枝葉に分かれた世への愛には、神への愛こそが特効薬です。さて、これこそが本来の宗教、すなわち、こうして「愛によって働く信仰」（ガラテヤ五・六）です。その信仰は、本物の柔和なへりくだりを生み出し、世に対して完全に死ぬことを生み出します。また、神の御旨とみことばのすべてに、愛と感謝をもって甘んじて従い、それにかなう者となることを生み出すのです。

（四）実に、もし人がこのように堕落していないなら、このようなことは何も必要ないでしょう。心のうちのこのわざ、すなわち心の深みまで新たにされること（エペソ四・二三）も、必要ないでしょう。英語の聖書は、「はなはだしい悪」（ヤコブ一・二一）を「あり余る悪」と訳しています。人が堕落していないなら、「あり余る悪」よりも、「あり余る敬虔」と言うほうが、ふさわしい言い方になるでしょう。敬虔が少しもない外面だけの宗教で、理性の目から見れば、どの点でも十分に足りるからです。実際、私たちの本性のこの腐敗を否定する人々の判断では、それで十分なのです。彼らは宗教を、あの有名なホッブズ氏が理性

を見たのと同じく、ほとんどそれ以上のものとは見ていません。ホッブズによれば、理性とは「よく秩序づけられた言葉の連なり」にすぎません。彼らによれば、宗教とは、よく秩序づけられた言葉と行いの連なりにすぎないのです。そして、彼らの言うことは筋が通っています。もし内側が悪に満ちていないなら、内側がすでにきよいなら、何が残るでしょうか。「杯」の「外側」を「きよめる」（マタイ二三・二五）ことだけです。彼らの仮定が正しいなら、外面の改善こそが、まさに無くてならぬ一つのもの（ルカ一〇・四二）です。

（五）　けれども、あなたがたは、そのように神の言を学んだのではありません。あなたがたは知っています。人の心の中にあることを見ておられる方は、生れながらの本性についても恵みについても、まるで違う説明をしておられます。私たちの堕落についても回復についても、そうです。あなたがたは知っています。宗教の大きな目的は、私たちの心を神のかたちに新しくすることです。私たちの最初の先祖の罪によってこうむった、真の義と聖と（エペソ四・二四）の全き喪失を、回復することです。この目的とは、私たちの魂が、魂を造られた方のかたちに従って（コロサイ三・一〇）、神のかたちに新しくされることです。あなたがたは知っています。この目的にかなわない宗教、この目的に届かずに止まる宗教は、どれもみな、あわれな茶番にすぎません。神をあざけるものにすぎません。そして、私たち自身の魂を滅ぼすものなのです。ああ、そんなものをキリスト教だと言って押しつけようとする、偽りを教える者たちすべてに気をつけなさい。たとえ彼らが、あらゆる不義の惑わし（第二テサロニケ二・一〇）をもってあなたがたのところに来ても、彼らに心を留めてはなりません。あらゆるなめらかな言葉、あらゆる上品さ、いや、美しく優雅な表現をもって来ても、そうです。あなたがたへの心からの好意と、聖書への敬意とを、どれほど言い表して来ても、そうです。聖徒たちに「ひとたび伝えられた」（ユダ三）、素朴な昔からの信仰を守りなさい。神の御霊によって私たちの心に伝えられた信仰を守りなさい。自分の病を知りなさい！　自分の治療法を知りなさい！　あなたがたは罪のうちに生れました。ですから、「あなたがたは新しく生れなければならない」（ヨハネ三・七）のです。神から生れなければならないのです。あなたがたは、生れながらには、まったく腐敗しています。恵みによって、まったく新しくされるのです。アダムにあって、あなたがたはみな死にました。第二のアダムにあって、すなわちキリストにあって、あなたがたはみな生かされています（第一コリント一五・二二）。神は、「罪過によって死んでいた」あなたがたを「生かし」てくださいました（エペソ二・五）。神はすでに、あなたがたにいのちの源を与えてくださいました。それは、あなたがたを愛し、あなたがたのためにご自身をささげられた方（ガラテヤ二・二〇）への信仰です。今、信仰から信仰へと進み続けなさい（ローマ一・一七）。あなたがたの病がすっかりいやされるまで、進み続けなさい。キリスト・イエスのうちにもあった思い（ピリピ二・五）が、余すところなくあなたがたのうちに宿るまで、進み続けなさい！

説教四十五　新生

「あなたがたは新しく生れなければなりません」（ヨハネ三・七）

（一）　キリスト教の全体の範囲の中で、根本的と呼ぶのがふさわしい教理があるとすれば、それは疑いなく次の二つです。義認の教理と、新生の教理です。前者は、神が私たちのためにしてくださる大きなわざにかかわります。私たちの罪を赦してくださるわざです。後者は、神が私たちのうちでしてくださる大きなわざにかかわります。私たちの堕落した本性を新しくしてくださるわざです。時の順序では、このどちらも、もう一方より先ではありません。私たちは、神の恵みにより、イエスによるあがないによって義とされる（ローマ三・二四）、その瞬間に、「霊から生れる」のでもあります（ヨハネ三・八）。けれども、いわゆる思考の順序では、義認が新生に先立ちます。私たちはまず、神の怒りが取り去られたと考え、それから、神の御霊が私たちの心のうちに働かれると考えるのです。

（二）　ですから、これらの根本的な教理を徹底して理解することは、人の子のだれにとっても、何と大切なことでしょう。多くのすぐれた人々が、このことを十分に確信して、義認について非常に詳しく書いてきました。義認にかかわるあらゆる点を説明し、義認を扱う聖書の箇所を解き明かしてきたのです。同じように、新生について書いた人々も多くいます。そのうちのある人々は、かなり詳しく書いています。けれども、望まれるほど明快にではなく、それほど深く正確にでもありませんでした。その人々は、新生について、暗くて難解な説明をしたか、軽くて表面的な説明をしたかのどちらかだったのです。ですから、新生について、十分で、しかも同時に明快な説明が、まだ欠けているように思われます。それは、次の三つの問いに満足のいく答えを与えられるような説明です。

第一に、なぜ私たちは新しく生れなければならないのか。この新生の教理の根拠は何か。

第二に、どのようにして私たちは新しく生れなければならないのか。新生の本質は何か。

第三に、何のために私たちは新しく生れなければならないのか。新生はどんな目的のために必要なのか。

これらの問いに、私は神の助けによって、手短に分かりやすく答えます。そのあとで、そこから自然に出てくるいくつかの推論を付け加えます。

【一】　なぜ新しく生れなければならないのか

（一）　第一に、なぜ私たちは新しく生れなければならないのでしょうか。この教理の根拠は何でしょうか。その根拠は、ほとんど世界の創造と同じほど深いところにあります。世界の創造についての聖書の記事に、こうあります。「神は」、すなわち三位一体の神は、「また言われ」ました。「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造」ろう、と。「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し」ました（創世記一・二六～二七）。人は、ただ神の自然のかたちに造られただけではありません。それは、神ご自身の不死を写した姿であり、悟りと意志の自由とさまざまな情愛とを授けられた、霊的な存在であることです。また、ただ神の統治のかたちに造られただけでもありません。それは、この下界を治める者として、「海の魚」と全地とを「治め」る（創世記一・二六）ことです。人は、何よりも神の道徳的なかたちに造られたのです。使徒によれば、それは「真の義と聖と」です（エペソ四・二四）。人は、この神のかたちに造られました。「神は愛です」（第一ヨハネ四・八）。それで、造られたときの人は、愛に満ちていました。その愛が、人のすべての気質、思い、言葉、行いの、ただ一つの源でした。神は、正義とあわれみと真実に満ちておられます。造り主の手から出たばかりの人も、そうでした。神は、しみ一つない清さです。そのように、人も初めは、罪のどんな汚れからも清かったのです。そうでなければ、神は、ご自分の手のほかのすべてのわざとともに、人をも「はなは

だ良」いと宣言することはできなかったでしょう（創世記一・三一）。人が罪から清く、真の義と聖と（エペソ四・二四）に満たされていなかったなら、人がはなはだ良い者であることはありえなかったはずです。そこに中間はないからです。知性ある被造物が神を愛さず、義でも聖でもないとします。それなら、必然的に、その被造物はまったく良くないとせざるをえません。まして、「はなはだ良」いはずがありません（創世記一・三一）。

（二） けれども、人は神のかたちに造られたとはいえ、変わることのない者として造られたのではありません。そうであれば、神が人を置くことをよしとされた試練の状態と、相いれなかったでしょう。ですから、人は、立ち続けることができる者として造られ、しかも倒れうる者として造られたのです。そして、神ご自身がこのことを人に知らせ、倒れないようにおごそかに警告されました。それにもかかわらず、人は栄華のうちにとどまりませんでした（詩篇四九・一二）。高い身分から落ちたのです。人は、主が「食べるな」と命じられた「木から取って食べた」のです（創世記三・一七）。人は、造り主に対するこの故意の不従順の行いによって、主権者に対するこのあからさまな反逆によって、公然と宣言しました。もはや神に自分を治めてもらうつもりはない、と。自分を造った方の意志ではなく、自分の意志によって治められるつもりだ、と宣言したのです。また、自分の幸いを、神のうちにではなく、世のうちに、神の手のわざのうちに求めるつもりだ、と宣言したのです。さて、神は前もって人に、その実を食べるその日に、「きっと死ぬであろう」と告げておられました（創世記二・一七）。そして、主の言葉が破られることはありえません。そのとおり、その日に人は死にました。神に対して死んだのです。それは、あらゆる死のうちで最も恐ろしい死です。人は、神のいのちを失いました。神から切り離されたのです。人の霊的ないのちは、神と結ばれていることにありました。からだは、魂から切り離されるときに死にます。魂は、神から切り離されるときに死にます。そして、アダムは、禁じられた実を食べたまさにその日、その時刻に、神からのこの切り離しをこうむったのです。アダムは、このことの証拠をすぐに示しました。神への愛が自分の魂のうちで消えてしまったことを、ただちに行動で示したのです。その魂は、今や「神のいのちから遠く離れ」ていました（エペソ四・一八）。神への愛の代りに、アダムは今や奴隷のような恐れの力の下にありました。そのため、主の前から逃げたのです。いや、アダムは、天と地とに満ちておられる方（エレミヤ二三・二四）についての知識さえ、ほとんど持ち続けていませんでした。そのため、「主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠」そうとしたのです（創世記三・八）。こうして、アダムは、神を知る知識も神への愛も失いました。それなしには、神のかたちは保たれません。ですから、アダムは同時に神のかたちを奪われ、幸いでない者となっただけでなく、聖くない者ともなったのです。神のかたちの代りに、アダムは高ぶりと我意に沈みました。それは、まさに悪魔のかたちです。また、肉の欲求と欲望に沈みました。それは、滅びうせる獣（詩篇四九・一二）のかたちです。

（三） こう言う人がいるとします。「いや、しかし、それを食べるその日に、『きっと死ぬであろう』というあの警告（創世記二・一七）は、この世の死を指しているのだ。それだけを、からだの死だけを指しているのだ」。答えは明らかです。こう断言することは、あからさまに、明白に、神を偽り者とすることです（第一ヨハネ五・一〇）。真実の神が、真実に反することをはっきり断言されたと言い張ることです。アダムが、この意味では、それを食べたその日に死ななかったことは、明らかだからです。この死と反対の意味では、アダムはその後、九百年以上も生きました。ですから、神の真実を疑うのでなければ、これをからだの死と解することは、とうていできません。したがって、これは霊的な死、すなわち神のいのちと神のかたちを失うことと解さなければなりません。

（四） そして、アダムにあってすべての人が死にました（第一コリント一五・二二）。全人類が、すなわち、そのときアダムの腰にあった人の子らがみな、死んだのです。その当然の結果として、アダムから出た者はだれでも、霊的に死んだ者としてこの世に来ます。神に対して死に、罪のうちにまったく死んだ者として来るのです。その者は、神のいのちをまったく欠き、神のかたちを欠いています。アダムが造られたときに備えていた、あの義と聖性のすべてを欠いているのです。その代りに、この世に生れるすべての人は、今や高ぶりと我意において悪魔のかたちを帯びています。肉の欲求と欲望においては、獣のかたちを帯びています。ですから、これが新生の根拠です。すなわち、私たちの本性がまっ

たく腐敗していることです。ここから、罪のうちに生れた私たちは、「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。ここから、女から生れる者（ヨブ一四・一）はだれでも、神の御霊から生れなければならないのです。

【二】 どのようにして新しく生れなければならないのか

（一） けれども、人はどのようにして新しく生れなければならないのでしょうか。新生の本質は何でしょうか。これが第二の問いです。そして、これは考えうる限り最も重大な問いです。ですから、これほど重い事柄において、軽く調べるだけで満足してはなりません。できる限りの注意を払ってそれを調べ、心の中で思いめぐらさなければなりません。この大切な点を十分に理解し、どのようにして新しく生れるのかをはっきり見るまで、そうしなければなりません。

（二） といっても、これがどのようにしてなされるのか、その仕方について、細かい哲学的な説明を期待してよいわけではありません。私たちの主は、聖句のすぐあとに続く言葉によって、そうした期待をいだかないように、十分に私たちを戒めておられます。主はそこで、ニコデモに一つの事実を思い起こさせておられます。それは、自然界の全体の中のどの事実にも劣らず、議論の余地のない事実です。それなのに、日の下で最も賢い人でさえ、それを十分に説明することはできないのです。「風は思いのままに吹」きます（ヨハネ三・八）。あなたの力や知恵によって吹くのではありません。「あなたはその音を聞」きます（ヨハネ三・八）。あなたは、風が吹いていることを、まったく疑いなく、絶対に確信しています。けれども、「それがどこからきて、どこへ行くかは知」りません（ヨハネ三・八）。風がどのように始まり、どのように終わり、どのように起こり、どのように静まるのか、その正確な仕方は、だれにも分かりません。「霊から生れる者もみな、それと同じ」です（ヨハネ三・八）。あなたは、風が吹いていることと同じく、この事実をも絶対に確信することができます。けれども、それがどのようにしてなされるのか、聖霊がどのようにして魂のうちにこれを行われるのか、その正確な仕方は説明できません。あなたにも、人の子らのうちで最も賢い者にも、説明することはできないのです。

（三） けれども、好奇心による細かい詮索に立ち入らなくても、新生の本質について、聖書に基づく分かりやすい説明を与えることはできます。理性にかなうどんな目的にも、キリスト教のどんな目的にも、それで十分です。ただ自分の魂の救いだけを願う、道理をわきまえた人なら、だれでもこれで満足するでしょう。「新しく生れる」（ヨハネ三・三）という表現は、私たちの主がニコデモとの会話で初めて用いられたのではありません。それ以前からよく知られており、私たちの救い主がユダヤ人の間に現れたころには、彼らの間で普通に用いられていました。大人の異教徒が、ユダヤ教は神から出たものだと確信し、それに加わりたいと願うようになると、割礼を許す前に、まずその人にバプテスマを施すのが習わしでした。そして、その人はバプテスマを受けると、新しく生れたと言われました。それによって彼らが意味したのは、次のことでした。以前は悪魔の子であった者が、今や神の家族の中に養子として迎えられ、神の子の一人に数えられた、ということです。ですから、私たちの主は、ニコデモと語り合う中で、この表現を用いられます。それは、「イスラエルの教師」（ヨハネ三・一〇）であるニコデモが、よく理解していてしかるべき表現でした。ただ、主は、ニコデモが慣れていたよりも強い意味で用いられるのです。そして、ニコデモが「どうして、そんなことがあり得ましょうか」（ヨハネ三・九）と尋ねた理由は、これだったのかもしれません。そういうことは、文字どおりにはありえません。人は、「もう一度、母の胎にはいって生れる」ことはできません（ヨハネ三・四）。けれども、霊的にはありえます。人は、上から生れ、神から生れ、霊から生れることができるのです。その生れ方は、肉体の誕生にきわめてよく似ています。

（四） 子供は、この世に生れる前には、目があっても見えず、耳があっても聞えません。ほかのどの感覚も、きわめて不完全にしか使えません。世のどんな事柄についても知識がなく、自然の悟りも少しも持っていません。その子がそのときに持っているあり方を、私たちは、いのちと呼ぶことさえしません。人が生れたときに初めて、私たちは、その人が生き始めると言うのです。生れるとすぐに、その子は光を見始め、自分を取り巻くさまざまなものを見始めるからです。そのとき、その子の耳は開かれ、次々に耳を打つ音を聞きます。同時に、ほかのすべての感覚器官も、それぞれにふさわしい対象に向かって働き始めます。ま

た、その子は呼吸をし、以前とはまったく違うあり方で生きるのです。これらのすべての点で、霊のことは、何とぴったりとこれに対応していることでしょう。人が、ただ生れながらの状態にあって、まだ神から生れていない間は、霊的な意味で、目があっても見えません（マルコ八・一八）。その目には、厚くて見通せないおおいがかかっています。耳があっても聞えません。何よりも聞く必要のあることに、まったく耳が聞えないのです。ほかの霊の感覚も、みな閉ざされています。その人は、それらを持っていないのと同じ状態にあります。ですから、その人は神を知りません。神との交わりもありません。神とまったく面識がないのです。神の事柄について、霊的な事柄についても永遠の事柄についても、本当の知識を持っていません。ですから、その人は、生きた人間ではあっても、死んだクリスチャンなのです。けれども、神から生れるやいなや、これらのすべての点で、まったくの変化が起こります。その人の「心の目」は「明らかに」されます（エペソ一・一八）。これは、偉大な使徒の言い方です。そして、昔「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神」が、その人の「心を照して」くださいます。その人は、「キリストの顔に輝く神の栄光」の光、すなわち神の栄光ある愛を見るのです（第二コリント四・六）。その人は耳が開かれたので、今や神の内なる声を聞くことができます。その声は言います。「しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのです」（マタイ九・二）。「お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」（ヨハネ八・一一）。これが、神がその人の心に語られることの趣旨です。もっとも、おそらく、まさにこの言葉どおりではないでしょうが。その人は今、人に知識を教える方（詩篇九四・一〇）が折にふれて示そうとされることを、何でも聞く用意ができています。私たちの教会の言葉を用いれば、その人は「神の御霊の力強い働きを心のうちに感じ」ます。それは、世の人々がこの表現を愚かに、また故意に誤解しているような、粗野で肉的な意味においてではありません。彼らは何度も何度も聞かされてきたのですが、私たちがこの表現で意味しているのは、それ以上でもそれ以下でもなく、次のことです。その人は、神の御霊が自分の心のうちに働かせてくださる恵みを感じます。内側で、はっきりと感じ取るのです。その人は、「人知ではとうてい測り知ることのできない」平安を感じ、自覚します（ピリピ四・七）。その人は、しばしば、神にある喜びを感じます。それは、「言葉につくせない、輝きにみちた」喜びです（第一ペテロ一・八）。その人は、自分に「賜わっている聖霊によって、神の愛が」自分の「心に注がれて」いるのを感じます（ローマ五・五）。そのとき、その人の霊の感覚はすべて働かされて、霊的な善悪を見わけるようになります（ヘブル五・一四）。これらの感覚を用いることによって、その人は日々、知識を増し加えていきます。神を知る知識、神がつかわされたイエス・キリスト（ヨハネ一七・三）を知る知識、神の内なる国にかかわるすべての事柄を知る知識です。そして今こそ、その人は生きていると言うのがふさわしいのです。神が御霊によってその人を生かしてくださったので、その人は、イエス・キリストによって神に生きています（ローマ六・一一）。その人は、世の知らないいのちを生きています。「キリストと共に神のうちに隠されている」いのちです（コロサイ三・三）。神は、いわば絶えず魂に息を吹きかけておられ、その人の魂は神に向かって息をしています。恵みはその人の心に下り、祈りと賛美は天に上ります。そして、神と人とのこの交わり、すなわち父と御子との交わり（第一ヨハネ一・三）によって、魂のうちにある神のいのちが保たれます。それは、一種の霊的な呼吸のようなものです。そして、神の子は成長し、ついに「キリストの満ちみちた徳の高さにまで」至るのです（エペソ四・一三）。

（五）　ここから、新生の本質が何であるかは明らかです。新生とは、神が魂をいのちへと導き入れられるときに、魂のうちに起こされるあの大きな変化です。神が魂を、罪の死から義のいのちへとよみがえらせられるときの変化です。それは、魂が新たに「キリスト・イエスにあって造られ」るとき（エペソ二・一〇）、全能の神の御霊によって魂全体に起こされる変化です。また、魂が神の「かたちに従って新しくされ」（コロサイ三・一〇）、「真の義と聖と」をそなえる（エペソ四・二四）ときの変化です。世への愛が神への愛に変えられ、高ぶりがへりくだりに、激情が柔和に変えられるときの変化です。憎しみ、ねたみ、悪意が、すべての人への、真実で、優しく、私心のない愛に変えられるときの変化です。一言で言えば、新生とは、地につき、肉に属し、悪魔的な心（ヤコブ三・一五）が、キリスト・イエスのうちにあった思い（ピリピ二・五）に変えられる

変化です。これが新生の本質です。「霊から生れる者もみな、それと同じ」です（ヨハネ三・八）。

【三】 何のために新しく生れなければならないのか

（一） これらのことをよく考えた人なら、だれでも、新生の必要をたやすく見て取ることができるでしょう。そして、第三の問いに答えることもたやすいでしょう。何のために、どんな目的のために、私たちは新しく生れる必要があるのか、という問いです。新生が、第一に、聖性のために必要であることは、ごくたやすく見分けられます。というのも、神の言（ローマ三・二）によれば、聖性とは何でしょうか。それは、ただの外面的な宗教ではありません。外面的な務めを型どおりにくり返すことでもありません。その務めがどれほど多く、どれほど正確に果たされても、そうです。そうではありません。福音の聖性とは、心に刻みつけられた神のかたちにほかなりません。キリスト・イエスのうちにあった思いのすべて（ピリピ二・五）にほかなりません。それは、あらゆる天的な情愛と気質とが、混じり合って一つになったものです。聖性には、私たちのために御子を、ひとり子をさえ惜しまれなかった方（ローマ八・三二）への、絶えざる感謝の愛が含まれます。その愛は、人の子のだれをも愛することを、私たちにとって自然なことにし、いわば必然のことにします。また、その愛は、私たちを「あわれみの心、慈愛」、「柔和、寛容」で満たします（コロサイ三・一二）。それは、あらゆるふるまいにおいて、責められるところのない者であるように、私たちに教える神への愛です。また、それは、私たちの魂とからだを、絶えざる供え物として神にささげさせる愛です。私たちのあるがままのすべてと持てるもののすべてを、私たちのすべての思いと言葉と行いを、ささげさせるのです。その供え物は、キリスト・イエスによって神に喜ばれるものです。さて、この聖性は、私たちが心の深みまで新たにされる（エペソ四・二三）までは、存在することができません。あの変化が起こされるまでは、聖性は魂のうちに始まることができません。その変化は、いと高き者の力が私たちをおおう（ルカ一・三五）ことによって起こります。私たちが「やみから光へ」、サタンの支配から「神のみもとへ帰」らされる（使徒二六・一八）までは、聖性は始まることができないのです。すなわち、私たちが新しく生れるまでは、始まることができません。ですから、新生は、聖性のためにどうしても必要なのです。

（二） ところで、「きよくならなければ、だれも主を見ることはできません」（ヘブル一二・一四）。栄光のうちに神の御顔を見ることはできないのです。したがって、新生は、永遠の救いのためにどうしても必要です。確かに、人々は都合よく考えるかもしれません。自分は最後の息を引き取るまで罪のうちに生きても、そのあとで神とともに生きることができる、と。人の心は、それほどまでに偽るもので、はなはだしく悪に染まっているのです（エレミヤ一七・九）。そして、何千という人々が、滅びにいたらない広い道を見つけたと、本当に信じています。彼らは言います。「これほど人を害さず、これほど徳の高い女に、何の危険があるだろうか。これほど正直な男、これほど品行の厳格な人が、天国に入りそこねる心配がどこにあるだろうか。特に、そのすべてに加えて、いつも教会と聖餐に通っているなら、なおさらだ」。そういう人のひとりは、自信たっぷりに尋ねるでしょう。「何だって！　私が隣人たちと同じくらいうまくいかないとでも言うのか」。そうです、あなたの聖くない隣人たちと同じくらいには、うまくいくでしょう。罪のうちに死ぬ隣人たちと同じくらいには、うまくいくでしょう。あなたがたはみな、いっしょに穴に、いちばん深い地獄に落ちるからです！　あなたがたはみな、いっしょに火の池に横たわるのです。「硫黄の燃えている火の池」にです（黙示録一九・二〇）。そのとき、ついにあなたは、栄光にいたるためには聖性が必要であること、したがって新生が必要であることを悟るでしょう（どうか神が、その前に悟らせてくださいますように）。新しく生れなければ、だれも聖くなることはできないからです。

（三） 同じ理由で、新しく生れなければ、だれもこの世においてさえ幸いになることはできません。聖くない人が幸いであることは、ものごとの本性上、ありえないからです。あのあわれな、不信心な詩人でさえ、こう言うことができました。Nemo malus felix.（悪人はだれも幸いでない）その理由は明らかです。聖くない気質は、どれも安らかでない気質だからです。悪意、憎しみ、ねたみ、嫉妬、復讐心が、胸のうちに今ここで地獄をつくり出すだけではありません。

もっと穏やかな情念でさえ、しかるべき限度のうちに保たれなければ、喜びの千倍もの苦しみを与えます。望みでさえ、「望みを得ることが長びくときは、心を悩ま」します（箴言一三・一二）。そういうことは、どれほどたびたび起こらざるをえないことでしょう。また、神の御旨にかなわない願いは、どれも、私たちを「多くの苦痛をもって」「刺しとお」しかねません（第一テモテ六・一〇）。そして、罪のあの一般的な源、すなわち高ぶりと我意と偶像礼拝は、それがはびこるのに比例して、悲惨の一般的な源となります。ですから、これらがどんな魂のうちでも支配している限り、そこに幸いの場所はありません。けれども、私たちの本性の傾きが変えられるまで、すなわち私たちが新しく生れるまでは、これらは支配し続けるほかありません。したがって、新生は、来るべき世での幸いのためだけでなく、この世での幸いのためにも、どうしても必要なのです。

【四】 いくつかの推論

最後に、私は、これまで述べたことから自然に出てくるいくつかの推論を、付け加えることにしていました。

（一） 第一に、バプテスマは新生ではない、ということになります。この二つは、一つの同じものではありません。確かに、多くの人は、この二つはまったく同じだと思いこんでいるようです。少なくとも、そう考えているかのように語ります。けれども、どんなクリスチャンの教派であれ、この意見を公に表明しているとは、私は聞いていません。少なくとも、この国々のどの教派も表明していないのは確かです。国教会であれ、国教会から分かれた教派であれ、そうです。後者の判断は、大教理問答の中ではっきりと宣言されています。「問　聖礼典の部分は何ですか。答　聖礼典の部分は二つです。一つは、外に見え、感覚でとらえられるしるしです。もう一つは、そのしるしによって表される、内なる霊的な恵みです。問　バプテスマとは何ですか。答　バプテスマは聖礼典です。キリストはそこで、水で洗うことを、御霊による再生のしるしと証印とするように定められました」（ウェストミンスター大教理問答 問一六二、一六五）。ここでは明らかに、しるしであるバプテスマが、しるしによって表されるものである再生とは別のものとして語られています。

同じように、教会の教理問答でも、私たちの教会の判断が、このうえなくはっきりと宣言されています。「問　聖礼典というこの言葉で、あなたは何を意味しますか。答　内なる霊的な恵みの、外なる目に見えるしるしを意味します。問　バプテスマの外の部分、すなわち形は何ですか。答　水です。人はその水で、父と子と聖霊との名によってバプテスマを受けます。問　内の部分、すなわち、しるしによって表されるものは何ですか。答　罪に対して死に、義に対して新しく生れることです」（祈祷書「教理問答」）。ですから、英国国教会によれば、バプテスマは新生ではありません。これほど明らかなことはないのです。

けれども、実のところ、事柄の道理がきわめて明らかなので、ほかのどんな権威も必要ありません。というのも、一方は目に見えるもの、もう一方は目に見えないものであり、したがって互いにまったく違うものだからです。これほど明らかなことがあるでしょうか。一方は、からだを清める人の行為です。もう一方は、神が魂のうちに起こされる変化です。ですから、前者は後者から、魂がからだから、また水が聖霊から区別されるのとまったく同じように、区別されるのです。

（二） 第二に、これまで考えてきたことから、次のことに気づきます。新生はバプテスマと同じものではないのと同じく、いつもバプテスマに伴うわけでもありません。この二つは、常にいっしょに起こるわけではないのです。人は、「水」から生れても（ヨハネ三・五）、「霊から生れ」ていない（ヨハネ三・六）ことがありえます。内なる恵みがないところに、外のしるしがあることも、ときにはありうるのです。ここで私は、幼児のことを言っているのではありません。確かに、私たちの教会は、幼いときにバプテスマを受ける者はみな、同時に新しく生れると考えています。そして、祈祷書の「幼児洗礼式」全体が、この考えに基づいて進められていることも認められています。また、このわざがどのようにして幼児のうちに起こされうるのか、私たちには理解できません。けれども、それは、これに反対する重みのある理由にはなりません。私たちは、このわざがどのようにして大人のうちに起こされるのかも、理解できないからです。けれど

も、幼児の場合はどうであれ、バプテスマを受ける大人が、みな同時に新しく生れるわけではないことは確かです。「木はその実でわかります」（マタイ一二・三三）。そして、これによって、否定できないほど明らかになります。バプテスマを受ける前に悪魔の子であった人々のうちの少なからぬ者が、バプテスマのあとも同じままでいるのです。彼らは、自分たちの「父のわざを行って」いるからです（ヨハネ八・四一）。彼らは、内の聖性も外の聖性も装うことさえせずに、罪の僕であり続けます。

（三） これまで述べたことから引き出せる第三の推論は、新生は聖化と同じではない、ということです。確かに、多くの人々は、両者が同じであることを当然のこととしています。特に、ある著名な著者は、近ごろの論文『キリスト教的再生の本質と根拠』の中で、そうしています。その小論に対して出しうる、ほかのいくつかの重大な反論はさておき、次の一つは明白な反論です。その小論は、終始、再生を、少しずつ進んでいくわざとして語っています。私たちが初めて神に立ち返ったときから、魂のうちでゆっくりと段階を追って進められるわざとして語るのです。このことは、聖化については否定できないほど真実です。けれども、再生、すなわち新生については、真実ではありません。新生は、聖化の一部であって、全体ではありません。聖化への門であり、聖化への入口です。私たちが新しく生れるとき、そのときに私たちの聖化、すなわち私たちの内と外の聖性が始まります。そしてそれ以後、私たちは、私たちのかしらである方にあって、徐々に「成長し」ていくのです（エペソ四・一五）。使徒のこの表現は、両者の違いをみごとに説き明かしています。さらに、自然の事柄と霊的な事柄との間にある、正確な類比をも指し示しています。子供は、女から一瞬のうちに、あるいは少なくともごく短い時間のうちに生れます。そのあとで、徐々にゆっくりと成長し、ついに大人の背丈に達します。同じように、神の子は、一瞬のうちにではないとしても、短い時間のうちに神から生れます。けれども、そのあとでキリストの満ちみちた徳の高さにまで（エペソ四・一三）成長するのは、ゆっくりと段階を追ってなのです。ですから、私たちの肉体の誕生と成長との間にあるのと同じ関係が、私たちの新生と聖化との間にもあるのです。

（四） これまで述べたことから、もう一つの点を学ぶことができます。それは、とても重要な点なので、ほかよりも注意深く考え、いくらか長く論じても許されるでしょう。人々の魂を愛し、そのだれかが滅びることを悲しむ人がいるとします。その人が、安息日を破り、酒に酔い、あるいはほかの故意の罪のうちに生きている人を見たとします。その相手に、何と言うべきでしょうか。これまで述べたことが真実なら、その人は相手に、あなたは「新しく生れなければならない」（ヨハネ三・七）と言うほかに、何が言えるでしょうか。ある熱心な人は言います。「いや、そんなことはありえない。どうしてその人に、そんなに愛のない話し方ができるのか。その人は、もうバプテスマを受けているではないか。今さら新しく生れることはできない」。その人は、新しく生れることができないのですか。あなたはそう断言するのですか。それなら、その人は救われることができません。たとえその人がニコデモと同じほど年をとっていても、「新しく生れなければ、神の国を見ることはでき」ません（ヨハネ三・三）。ですから、あなたは、「その人は新しく生れることができない」と言うことで、事実上、その人を滅びに引き渡しているのです。では、愛がないのは、今どちらでしょうか。私の側でしょうか、あなたの側でしょうか。私は言います。その人は新しく生れることができ、そうして救いを受け継ぐ者（ヘブル一・一四）となることができる、と。あなたは、「その人は新しく生れることができない」と言います。もしそうなら、その人は必ず滅びるほかありません。こうしてあなたは、その人の救いへの道をすっかりふさぎ、まったくの愛から、その人を地獄に送るのです！

けれども、私たちは、本当の愛から、罪人その人に、あなたは「新しく生れなければならない」（ヨハネ三・七）と言います。ところが、その罪人は、おそらく、こう言うように教えこまれているでしょう。「あなたの新しい教えなど知ったことか。私は新しく生れる必要などない。バプテスマを受けたときに新しく生れたのだ。何だって！　私に自分のバプテスマを否定しろと言うのか」。私は答えます。第一に、天の下には、うそを言い訳できるものは何一つありません。そうでなければ、私は公然と罪を犯している人に、こう言うでしょう。バプテスマを受けたのなら、それを認めてはなりません、と。というのも、それは、あなたの罪責をどれほど重くすることでしょう。あなたの受ける地獄の刑罰を、どれほ

ど増し加えることでしょう。あなたは、生後八日で神にささげられたのに、この長い年月、自分を悪魔にささげてきたのですか。あなたは、理性を使えるようになる前から、父なる神と子と聖霊とに聖別されていたのですか。それなのに、理性を使えるようになってからずっと、神に公然と逆らい、自分をサタンのために聖別してきたのですか。「荒らす憎むべきもの」が、「立ってはならぬ所に立」っているのですか（マルコ一三・一四）。それは、世への愛、高ぶり、怒り、情欲、愚かな欲望、そして卑しい情愛の長い連なりです。あなたは、かつて聖霊の宮（第一コリント六・一九）であった魂のうちに、のろわれたものをすべて据えたのですか。その魂は、「霊なる神のすまい」（エペソ二・二二）として取り分けられ、いや、おごそかに神にささげられたものだったのです。それなのに、あなたは、かつて神のものであったことを誇るのですか。ああ、恥じなさい！　顔を赤らめなさい！　地に身を隠しなさい！　あなたを混乱で満たし、神と人の前で恥じ入らせるはずのことを、二度と誇ってはなりません。私は答えます。第二に、あなたはすでに自分のバプテスマを否定しています。しかも、最も効果的なやり方で否定しているのです。あなたは、何千回、何万回とそれを否定してきました。そして、今も日ごとに否定しています。あなたは、バプテスマのとき、悪魔とそのすべてのわざとを捨てたからです。ですから、あなたが再び悪魔にすきを与えるときはいつでも、あなたは自分のバプテスマを否定しているのです。悪魔のわざのどれかを行うときはいつでも、否定しているのです。ですから、あなたは、故意の罪を犯すたびに、バプテスマを否定しています。汚れた行い、酔うこと、復讐をするたびに否定しています。みだらな言葉や神を汚す言葉を口にするたびに、口から誓いの言葉が出るたびに、否定しているのです。主の日を汚すたびに、あなたはそれによって自分のバプテスマを否定しています。いや、自分がしてほしくないことをほかの人にするたびに、否定しているのです。私は答えます。第三に、あなたがバプテスマを受けていても受けていなくても、あなたは「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。そうでなければ、あなたが内側から聖くなることはできません。そして、外の聖性だけでなく内の聖性もなければ、この世においてさえ幸いになることはできません。まして、来るべき世においては、なおさらです。あなたは、こう言うのですか。「いや、しかし、私はだれにも害を加えていない。すべての取引において正直で公正だ。のろいもしないし、主の名をみだりに唱えもしない（出エジプト二〇・七）。主の日を汚しもしない。酒に酔う者でもない。隣人を中傷もしないし、どんな故意の罪のうちにも生きていない」。もしそうなら、すべての人があなたと同じところまで進んでいればよいのにと、心から願わずにはいられません。けれども、あなたは、さらに先へ進まなければなりません。そうでなければ、救われることはできません。やはり、あなたは「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。あなたは、こう付け加えるのですか。「私は、さらに先へ進んでいる。害を加えないだけでなく、できる限りの善を行っているのだから」。私は、その事実を疑います。善を行う機会が何千回とあったのに、あなたはそれを生かさずに見過ごしてきたのではないかと思います。ですから、あなたはその機会について、神に申し開きをしなければなりません。けれども、もしあなたがそのすべてを生かしたとします。すべての人に対して、できる限りのすべての善を本当に行ったとします。それでも、事情は少しも変わりません。やはり、あなたは「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。新生がなければ、何をしても、あなたのあわれな、罪深い、汚れた魂のためにはなりません。「いや、しかし、私は神の定めのすべてに、いつも欠かさず出ている。教会と聖餐を守っている」。そうしているのは良いことです。けれども、新しく生れなければ、そのすべても、あなたを地獄から守りはしません。一日に二度、教会に行ってごらんなさい。毎週、主の食卓に行ってごらんなさい。ひとりで、いくらでも多くの祈りをささげ、いくらでも多くの良い説教を聞き、いくらでも多くの良い書物を読んでごらんなさい。それでも、あなたは「新しく生れなければならない」のです（ヨハネ三・七）。これらのどれも、新生の代りにはなりません。いや、天の下のどんなものも、新生の代りにはなりません。ですから、もしあなたが、神のこの内なるわざをまだ経験していないなら、これをあなたの絶えざる祈りとしなさい。「主よ、あなたのすべての祝福に、これを加えてください。私を新しく生れさせてください。何でもみこころのままに拒んでください。けれども、これだけは拒まないでください。私を上から生れさせてください。評判でも、財産でも、友でも、健康でも、あなたが良いと思われるものは何でも取り去ってください。

ただ、これだけは与えてください。霊から生れ、神の子らの中に受けいれられることを与えてください。私を、『朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける御言によ』って（第一ペテロ一・二三）生れさせてください。そして、日ごとに『わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かに』ならせてください（第二ペテロ三・一八）」。

説教四十六　荒野の状態

「あなたがたにも今は不安があります。しかし、わたしは再びあなたがたと会うでしょう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるでしょう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）

（一）神は、イスラエルを奴隷の家から導き出して、大いなる救いを施されました。けれども、そのあと、イスラエルはすぐに、神が先祖たちに約束された地にはいったのではありません。彼らは、道をはずれて「荒野にさまよい」（詩篇一〇七・四）、さまざまに試みられ、苦しめられたのです。同じように、神は、ご自分を恐れる者たちを、罪とサタンの束縛から救い出されます。彼らは、「価なしに、神の恵みにより」、イエス「によるあがないによって義とされ」ます（ローマ三・二四）。それでも、そのあとすぐに、「神の民のためにまだ残されている」休み（ヘブル四・九）にはいる者は、多くありません。彼らの大部分は、多かれ少なかれ、神が導き入れてくださった良い道から、さまよい出てしまいます。彼らは、いわば「獣のほえる荒れ地」（申命記三二・一〇）にはいり、そこで、さまざまに試みられ、苦しめられるのです。ある人々は、イスラエルの民の場合になぞらえて、これを「荒野の状態」と呼んできました。

（二）この人々が置かれている状態が、最も優しいあわれみを受けてしかるべきものであることは、確かです。彼らは、悪い重い病に苦しんでいます。けれども、その病は、一般には理解されていません。まさにそのために、彼らが治療法を見つけることは、いっそう難しいのです。彼ら自身はやみの中にいるので、自分の病の本質を理解しているとは考えられません。そして、その病が何であるか、どうすればそれをいやせるかを知っている人は、彼らの兄弟たちのうちにわずかしかいません。いや、おそらく彼らの教師たちのうちにさえ、わずかしかいないのです。それだけに、次のことを調べる必要が、なおさらあります。

第一に、この病の本質は何か。

第二に、その原因は何か。

第三に、その治療法は何か。

【一】この病の本質は何か

（一）第一に、信じたあとで、これほど多くの人が陥るこの病の本質は何でしょうか。それは、本来何にあるのでしょうか。その本当の症状は何でしょうか。それは、本来、かつて神が彼らの心のうちに造り出してくださった信仰を失うことにあります。荒野にいる人々は、かつて持っていたあの神からの「確認」（ヘブル一一・一）を、今は持っていません。「まだ見ていない事実」（ヘブル一一・一）についてのあの満ち足りた確信を、今は持っていないのです。御霊の内なる証明によって、以前は彼らのひとりひとりが、こう言うことができました。「わたしが生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのです」（ガラテヤ二・二〇）。けれども、今は、その証明を持っていません。天の光は、今はもう彼らの「心を照し」ていません（第二コリント四・六）。彼らは、「見えないかたを見て」もいません（ヘブル一一・二七）。かえって、やみが再び彼らの魂のおもてをおおい、盲目が再び彼らの心の目をおおっています。御霊は、もはや彼らの「霊と共に」、彼らが「神の子であることをあかし」してくださいません（ローマ八・一六）。御霊は、子たる身分を授ける霊（ローマ八・一五）として、彼らの心の中で「『アバ、父よ』と呼ぶ」こと（ガラテヤ四・六）も、もう続けておられません。彼らは今、神の愛への確かな信頼を持っていません。聖い大胆さをもって神に近づく自由も持っていません。たとい神が私を殺しても、私はなお神により頼む、ということは、もはや彼らの心の言葉ではありません。彼らは力をそぎ取られ、ほかの人のように弱くなり（士師記一六・一七）、気の弱い者となっています。

（二）　ここから、第二に、愛を失うことが生じます。愛は、真実な生きた信仰と同時に、また同じ割合で、増したり減ったりせずにはいないからです。それで、信仰を奪われた人々は、神への愛をも奪われています。彼らは今、こう言うことができません。「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」（ヨハネ二一・一七）。神を本当に愛している人はだれでも、神にあって幸いです。けれども、彼らは今、神にあって幸いではありません。彼らは、以前のように神を喜ぶことも、神のにおい油のかおりをかぐこともありません。かつては、彼らの「慕うもの」はすべて、神と神の「記念の名」でした（イザヤ二六・八）。けれども今は、その慕う思いさえ、すっかり消えてはいないとしても、冷えて死んでいます。そして、神への愛が冷えたのと同じように、隣人への愛も冷えています。彼らは今、人々の魂へのあの熱意を持っていません。人々の幸せを慕い求めるあの思いも、人々が神と和解することを願うあの熱く、休むことのない、活発な願いも持っていません。彼らは、失われた羊（マタイ一〇・六）に対するあの「あわれみの心」（コロサイ三・一二）を感じません。「無知な迷っている人々を、思いやる」（ヘブル五・二）あの優しい心を感じないのです。かつて彼らは、「だれに対しても親切であり」ました（第二テモテ二・二四）。真理に反対する者を、柔和な心で教え導いていました（第二テモテ二・二五）。また、「もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら」、「柔和な心をもって、その人を正し」ていました（ガラテヤ六・一）。けれども、怒りは、しばらく、おそらく何日ものあいだ鳴りをひそめたあとで、再び力を取り戻し始めます。いや、気むずかしさと短気とが、彼らをひどく押して倒そうとします（詩篇一一八・一三）。そして、彼らがときに、「悪をもって悪に報い」、「悪口をもって悪口に報い」る（第一ペテロ三・九）ところにまで追いやられないなら、上出来なのです。

（三）　信仰と愛を失った結果として、第三に、聖霊における喜び（ローマ一四・一七）を失うことが続きます。赦されたという愛に満ちた自覚がもはやないなら、そこから生じる喜びも残ることはできないからです。御霊が私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかししてくださらないとします（ローマ八・一六）。そうなら、その内なるあかしから流れ出た喜びも、終わらざるをえません。同じように、かつて「言葉につくせない」「喜びにあふれ」（第一ペテロ一・八）、「神の栄光にあずかる希望をもって」（ローマ五・二）喜んでいた人々がいます。その人々は、今やあの「不死に満ちた希望」を奪われているので、その希望が生んだ喜びをも奪われています。また、そのとき「神の愛が」彼らの「心に注がれて」いた（ローマ五・五）という自覚から生じた喜びをも、奪われているのです。原因が取り除かれれば、結果も取り除かれるからです。泉がせき止められれば、あの生ける水（ヨハネ四・一〇）は、もはやわき出て、渇いた魂をうるおすことはありません。

（四）　信仰と愛と喜びを失うことに、第四に、平安を失うことも加わります。それは、かつて、人知ではとうてい測り知ることのできなかった平安です（ピリピ四・七）。あの心の甘美な静けさ、あの霊の落ち着きは、消えうせています。苦しい疑いが戻ってきます。自分はいったい信じたことがあったのか、そしておそらく、これから信じることがあるのか、という疑いです。私たちは疑い始めます。自分は本当に、御霊の真実なあかしを心のうちに見いだしたことがあったのか、と。むしろ自分の魂を欺き、自分の本性の声を神の声と取り違えたのではないか、と。いや、おそらく、自分はいつか神の声を聞き、神の前に恵みを得ることがあるのか、とさえ疑うのです。そして、これらの疑いには、再び奴隷のような恐れが加わります。懲らしめを伴う恐れ（第一ヨハネ四・一八）です。私たちは、信じる前とちょうど同じように、神の怒りを恐れます。神の御前から捨てられるのではないかと恐れます。そして、そこから再び、死の恐怖（ヘブル二・一五）に沈むのです。以前には、それからまったく解き放たれていたというのに、です。

（五）　けれども、これでさえ、すべてではありません。平安を失うことには、力を失うことが伴うからです。私たちは知っています。イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている（ローマ五・一）者はだれでも、あらゆる罪に打ち勝つ力を持っています。けれども、その人が神の平安を失うときはいつでも、罪に打ち勝つ力も失うのです。その平安が残っている間は、力も残っていました。からみつく罪（ヘブル一二・一）に打ち勝つ力さえ残っていたのです。それが生れつきの罪であれ、体質の罪であれ、受けた教育による罪であれ、職業の

罪であれ、そうでした。いや、そのときまで打ち勝つことのできなかった悪い気質と欲望にさえ、打ち勝つ力が残っていました。そのときには、罪はもはやその人を支配していませんでした（ローマ六・一四）。けれども今は、その人がもはや罪を支配していません。確かに、その人はもがくかもしれません。けれども、打ち勝つことはできません。冠はその人のこうべから落ちたのです（哀歌五・一六）。その人の敵は再びその人にまさり、多かれ少なかれ、その人を束縛の中に引き込みます。栄光はその人を去りました（サムエル記上四・二一）。その人の心のうちにあった神の国が去ったのです。その人は、平和と聖霊における喜びだけでなく、義をも奪われているのです（ローマ一四・一七）。

【二】 その原因は何か

（一） 多くの人が「荒野の状態」と呼んできたものの本質は、このようなものです。この呼び名は、不適切ではありません。けれども、その本質は、第二に、その原因は何かを調べることによって、もっと十分に理解することができるでしょう。その原因は、確かにさまざまです。けれども、私は、神のただの、恣意的な、主権的な意志を、その原因の中に数えることは、とうていできません。神は、「そのしもべの幸福を喜ばれ」ます（詩篇三五・二七）。神は、「心から人の子を苦しめ悩ますことをされません」（哀歌三・三三）。神の変わることのない御旨は、私たちの聖化です。「平和と、聖霊における喜びと」（ローマ一四・一七）を伴う聖化です。これらは、神ご自身の価なしの賜物です。そして、「神の賜物」は、神の側では「変えられることがない」（ローマ一一・二九）と、私たちは保証されています。神は、ご自分がお与えになったものを悔いることは決してなさいません。それを私たちから取り戻そうと望まれることもありません。ですから、ある人々は、神が私たちを見捨てられると言いますが、神がそうされることは決してありません。神を見捨てるのは、ただ私たちのほうなのです。

〔一〕（二） 内なるやみの最もよくある原因は、何らかの種類の罪です。罪こそが、しばしば罪と悲惨の入り組んだものとなるこの状態を、たいてい引き起こすのです。第一に、行いの罪です。行いの罪は、しばしば一瞬のうちに魂を暗くすることが見て取れます。それが、知りながらの罪、故意の罪、思い上がった罪であれば、特にそうです。たとえば、今、神の御顔の澄んだ光の中を歩んでいる人がいるとします。その人が、何かのことで説き伏せられて、ただ一度でも酒に酔ったり、汚れた行いをしたりするとします。そうすれば、その人がまさにその時刻に、まったくのやみに落ちたとしても、少しも不思議ではないでしょう。確かに、ごくまれには、神が、ほとんどその瞬間に、赦しのあわれみを並はずれた仕方で示して、これを防がれた場合もありました。けれども、一般には、神の慈愛をこのように濫用し、神の愛をこれほどひどく侮辱すれば、すぐに神から遠ざかることになります。そして、「さわれるほど」の「くらやみ」（出エジプト一〇・二一）が生じるのです。

（三） けれども、こういう場合はあまり多くないと望んでよいでしょう。神の慈愛の富を軽んじて（ローマ二・四）、神の光の中を歩んでいながら、これほどひどく、思い上がって神に逆らう人は、多くないと望んでよいでしょう。その光は、怠りの罪に身をゆだねることによって失われることのほうが、はるかに多いのです。確かに、怠りの罪は、すぐに御霊を消す（第一テサロニケ五・一九）のではありません。徐々に、ゆっくりと消すのです。前者は、火に水を注ぐことにたとえられるでしょう。後者は、火から燃料を取り去ることにたとえられるでしょう。そして、あの愛に満ちた御霊は、私たちから去られる前に、私たちの怠りについて、何度も私たちに忠告してくださいます。御霊の感化が取り去られる前に、御霊は、多くの内なる制止と、ひそかな知らせとを与えてくださいます。ですから、私たちをまったくのやみに陥らせることができるのは、故意に続けられる怠りの連なりだけです。

（四） おそらく、どんな怠りの罪にもまして、ひそかな祈りを怠ることが、しばしばこのやみを引き起こします。ひそかな祈りが欠けているのを、ほかのどんな神の定めによっても補うことはできません。私たちが、神と語り合い、神の前に心を注ぎ出す（詩篇六二・八）機会をすべて用いないなら、魂のうちにある神のいのちは続きません。まして増し加わることはありません。これほど明らかなことはないのです。ですから、私たちがこれを怠るとします。仕事や人づきあいや、ほかのどんな用事にもせよ、それが魂のこのひそかな修練を妨げるのを許

すとします（あるいは、同じことですが、それによって、修練を軽く不注意に急いで済ませるようになるのを許すとします）。そうすれば、そのいのちは必ず衰えます。そして、私たちが修練を長く、あるいはたびたび中断するなら、そのいのちは徐々に死に絶えてしまうでしょう。

（五） しばしば信者の魂をやみに陥らせるもう一つの怠りの罪は、ユダヤ教の制度の下でさえ強く命じられていたことを怠ることです。「あなたの隣人をねんごろにいさめ」なさい（レビ記一九・一七）。隣人の上に罪をそのままにしておいてはなりません。「あなたは心に兄弟を憎んではなりません」（レビ記一九・一七）。さて、私たちが心に兄弟を憎むとします。兄弟が過ちを犯しているのを見ても、いさめずに、その上に罪をそのままにしておくとします。そうすれば、それはすぐに、私たち自身の魂をやせ衰えさせる（詩篇一〇六・一五）でしょう。それによって、私たちは兄弟の罪に加わることになるからです。隣人に忠告するのを怠ることによって、私たちは隣人の罪を自分の罪にしてしまいます。私たちは、その罪について、神に申し開きをしなければならなくなります。私たちは隣人の危険を見たのに、警告しなかったのです。ですから、その人が「自分の悪のために死ぬ」なら、神が「その血を」私たちの「手から求め」られる（エゼキエル三・一八）としても、当然なのです。それなら、このようにして御霊を悲しませる（エペソ四・三〇）ことによって、私たちが神の御顔の光を失うとしても、不思議はありません。

（六） 私たちがこの光を失う第三の原因は、何らかの種類の内なる罪に身をゆだねることです。たとえば、私たちは知っています。すべて「心に高ぶる者は主に憎まれ」ます（箴言一六・五）。心のこの高ぶりが、外のふるまいに現れていないとしても、そうです。さて、平安と喜びに満たされた魂は、何とたやすく、悪魔のこのわな（第一テモテ三・七）に陥ることでしょう！ その人が、自分には実際より多くの恵みや知恵や力があると思い込むのは、何と自然なことでしょう。「思うべき限度を越えて思いあがる」（ローマ一二・三）のは、何と自然なことでしょう。自分がもらったものを、もらっていないもののように誇る（第一コリント四・七）のは、何と自然なことでしょう。けれども、神は絶えず「高ぶる者をしりぞけ」、「へりくだる者」にだけ「恵みを賜う」のです（ヤコブ四・六）。ですから、この高ぶりは、以前その人の心を照していた光を、まったく滅ぼしはしないとしても、必ず暗くしてしまいます。

（七） 同じ結果は、怒りにすきを与えることによっても生じます。どんな挑発やきっかけがあったにしても、そうです。いや、その怒りが、真理への熱心とか、神の栄光への熱心とかいう名で飾られていても、そうです。実際、愛の炎でない熱心は、どれも、「地につくもの」、動物的なもの、「悪魔的なもの」です（ヤコブ三・一五）。それは憤りの炎です。それ以上でもそれ以下でもない、まったくの罪深い怒りです。そして、神への穏やかで優しい愛にとって、これ以上の敵はありません。この二つが一つの胸の中にいっしょに存在したことは一度もなく、これからも決してありえません。怒りがはびこるのと同じ割合で、愛と聖霊における喜びは減っていきます。このことは、感情を害する場合に、特に目につきます。すなわち、兄弟のだれかに対して、社会のきずなや宗教のきずなで私たちと結ばれている人のだれかに対して、怒る場合です。私たちが、感情を害する思いに、ほんの一時間でも身をゆだねるなら、聖霊の甘美な感化を失います。そのため、私たちは相手を正すどころか、自分自身を滅ぼし、私たちを襲うどんな敵にとっても、たやすい獲物となってしまうのです。

（八） けれども、私たちが悪魔のこのわなに気づいているとします。それでも、別の方面から攻撃されることがあります。激しさと怒りが眠っていて、愛だけが目ざめているときにも、私たちは欲望によって、それに劣らない危険にさらされることがあります。欲望も同じように、魂を暗くしがちだからです。魂が暗くなるのは、どんな愚かな欲望、どんなむなしい情愛や度を越えた情愛からでも、必ず生じる結果です。私たちが地上のものに心を引かれる（コロサイ三・二）とします。日の下のどんな人やものにでも、心を引かれるとします。神と、神に向かわせるもののほかに、何かを欲するとします。どんな被造物にでも、幸いを求めるとします。そうすれば、ねたむ神（出エジプト二〇・五）は、必ず私たちと争われます。神は、どんな競争相手も認めることがおできにならないからです。そして、私たちが神の警告の声を聞こうとせず、魂のすべてをもって神に立ち返ろうとしないとします。偶像によって神を悲しませ続け、ほかの神々を追い求め続けるとします。そうすれば、私たちはすぐに、冷たく、実を結ばない、

かわいた者となるでしょう。そして、この世の神（第二コリント四・四）が、私たちの心をくらませ、暗くするでしょう。

（九）けれども、この世の神は、私たちがはっきりとした罪に身をゆだねていないときにも、しばしばそうします。私たちが、「内にいただいた神の賜物を、再び燃えたたせ」ない（第二テモテ一・六）だけで十分です。それだけで、この世の神は十分につけ入るすきを得るのです。私たちが、絶えず苦闘して「狭い戸口からはいる」（ルカ一三・二四）ように努めないだけで十分です。私たちが、熱心に勝利を目ざして励まず、「天国」を「激しく襲」って「奪い取」ろうとしない（マタイ一一・一二）だけで十分です。戦わないでいるだけで足ります。そうすれば、私たちは必ず打ち負かされます。私たちがただ不注意になり、あるいは「意気そそう」し（ヘブル一二・三）、気楽に怠けているとします。そうすれば、私たちの生れながらのやみが、すぐに戻ってきて、私たちの魂をおおうでしょう。ですから、私たちが霊の怠惰に身をゆだねるだけで十分です。それは、確実に魂を暗くします。霊の怠惰は、殺人や姦淫ほど速やかにではないとしても、それらと同じほど確実に、神の光を滅ぼすのです。

（一〇）けれども、よく心に留めておくべきことがあります。私たちのやみの原因は（それが何であれ、怠りの罪であれ行いの罪であれ、内なる罪であれ外の罪であれ）、いつも手近にあるとは限りません。ときには、今の苦しみを引き起こした罪が、かなり離れたところにあることもあります。その罪は、何日も、何週間も、何か月も前に犯されたのかもしれません。そして、神がそれほど前に行われたことのために、今、ご自分の光と平安を取り去られるのは、（初めはそう思われるかもしれませんが）神の厳しさの例ではありません。むしろ、神の寛容と優しいあわれみの証拠なのです。神は、私たちが誤っていたことに気づき、それを認め、正すかもしれないと、この間ずっと待っておられました。そして、私たちがそうしなかったので、神はついに不興を示されるのです。こうして、ついには私たちを悔い改めに導くことができればと、願っておられるのです。

〔二〕（一）このやみのもう一つの一般的な原因は、無知です。無知も同じように、さまざまな種類があります。人々が聖書を知らないとします。旧約か新約の中に、ある箇所があると思い込んでいるとします。すべての信者が例外なく、ときにはやみの中にいなければならないと主張する箇所です。そうすれば、この無知は、当然、彼らが予期しているやみを彼らの上にもたらすでしょう。そして、このことは、私たちの間で何とありふれたことだったでしょう！　やみを予期していない人は、何と少ないことでしょう。それも不思議ではありません。彼らは、やみを予期するように教えられているからです。彼らの導き手たちが、彼らをこの道へ導いているからです。ローマ教会の神秘主義の著者たちだけではありません。私たちの教会の、最も霊的で経験に富んだ人々の多くも（前の世紀のごく少数の人々を除いて）、このことを説いています。彼らは、これを明白で疑う余地のない聖書の教理として、確信をもって主張しています。そして、それを証明するために多くの聖句を引いているのです。

（二）魂のうちにおける神のわざについての無知も、しばしばこのやみを引き起こします。人々は、次のように思い込んでいます（そう教えられてきたからです。特にローマ教会の著者たちから教えられてきました。あまりにも多くのプロテスタントが、その著者たちのもっともらしい主張を、十分に吟味しないまま受けいれてきたのです）。いつも輝く信仰のうちを歩むべきなのではない、と。それは一段低い段階にすぎない、と。高く上るにつれて、感じ取れる慰めを捨てられているなら、まさに裸です！）。光と喜びの状態は良いが、やみとかわきの状態はもっと良い、と。私たちが高ぶりや世への愛や度を越えた自己愛から清められるのは、ただやみとかわきによってだけだ、と。ですから、いつも光の中を歩むことを期待すべきでも、願うべきでもない、と思い込んでいるのです。ローマ教会の敬虔な人々の大部分は、たいてい暗く慰めのない道を歩んでいます。たとい神の光を受けることがあっても、すぐに失ってしまいます。それは、ここから来ているのです（ほかの理由も重なっているかもしれませんが）。

〔三〕（一）このやみの第三の一般的な原因は、誘惑です。主のともしびが初めて私たちの頭の上に輝く（ヨブ二九・三）とき、誘惑はしばしば逃げ去り、すっかり姿を消します。内側はすべて穏やかです。神が私たちの敵をも私たちと和らがせられる（箴言一六・七）間は、おそらく外側も穏やかでしょう。そうなると、もう戦いを見ることはないだろう、と考えるのはごく自然なことです。そ

して、この穏やかさが、何週間だけでなく、何か月も、何年も続いた例もあります。けれども、普通はそうではありません。まもなく、再び「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて」きます（マタイ七・二五）。子をも父をも知らず、そのために神の子らを憎む人々がいます。神が、その人々の歯にかませたくつわをゆるめられると、彼らはさまざまな形でその憎しみを表すでしょう。昔、「肉によって生れた者が、霊によって生れた者を迫害したように、今でも同様」です（ガラテヤ四・二九）。同じ原因が、今も同じ結果を生んでいるのです。そのとき、心のうちにまだ残っている悪も、新たに動きだします。怒りや、ほかの多くの苦い根が、はえ出ようとするでしょう（ヘブル一二・一五）。同時に、サタンも、火の矢（エペソ六・一六）を投げ込むことを怠らないでしょう。そして魂は、世とだけでなく、「血肉」とだけでもなく、「もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊」と格闘しなければならなくなります（エペソ六・一二）。さて、これほどさまざまな攻撃が一度に、しかもおそらくこのうえない激しさで加えられるとします。それが弱い信者のうちに、悩みだけでなく、やみさえも引き起こすとしても、不思議ではありません。その人が目をさましていなかった場合は、特にそうです。思いがけないときに攻撃が加えられた場合も、そうです。その人がそんなことを少しも予期せず、悪しき日（エペソ六・一三）はもう二度と戻ってこない、と愚かにも自分に言い聞かせていた場合は、なおさらです。

（二）　私たちが以前、まるですべての罪からきよめられた（第一ヨハネ一・七）かのように、自分を高く思いすぎていたとします。そうなら、内側から起こる誘惑の力は、ひどく強められるでしょう。そして、初めの愛（黙示録二・四）の熱さの中にある間、私たちは何と自然に、そう思い込むことでしょう。私たちは何とたやすく信じることでしょう。神が私たちのうちで「信仰の働き」のすべてを「力強く満たして」くださった（第二テサロニケ一・一一）、と。罪を感じないから、自分のうちに罪はなく、魂はすべて愛だ、と。そして、私たちが、打ち負かしただけでなく殺してしまったと思っていた敵から、鋭い攻撃を受けるとします。それが私たちを魂の深い悩みに投げ込み、いや、ときにはまったくのやみに投げ込むのも、もっともなことです。特に、私たちがすぐに神を呼び求め、単純な信仰によって神に身をゆだねるのでなく、この敵と論じ合うときは、そうです。ご自分の民を「試錬の中から救い出」す（第二ペテロ二・九）すべを知っておられるのは、ただ神だけなのです。

【三】　その治療法は何か

以上が、この二度目のやみのよくある原因です。第三に、その治療法は何かを調べましょう。

（一）　治療法がどの場合にも一つの同じものだと考えるのは、大きな、致命的な誤りです。それなのに、この誤りはきわめてありふれています。経験を積んだクリスチャンとして通っている多くの人々の間にさえ、ありふれています。いや、おそらく自分からイスラエルの教師（ヨハネ三・一〇）となり、ほかの魂の導き手となっている人々の間にさえ、ありふれているのです。それで、彼らは、病の原因が何であれ、ただ一つの薬しか知らず、それしか用いません。彼らは、すぐに約束を当てはめ始めます。彼らの言い方では、福音を説き始めるのです。慰めを与えることが、彼らのめざすただ一つの点です。そのために、彼らは、多くの柔らかく優しいことを語ります。あわれな無力な罪人への神の愛について、またキリストの血の効力について語るのです。さて、これはまさにやぶ医者のしわざです。しかも、たちの悪いほうのしわざです。人々のからだを殺しはしないとしても、神の特別なあわれみがなければ、人々の「からだも魂も地獄で滅ぼす」（マタイ一〇・二八）ことになりがちだからです。この「水しっくいをもって」「塗る」者たち（エゼキエル一三・一〇）、この約束の安売り人たちについて、ふさわしいだけのことを言うのは難しいことです。ほかの人々に対して、無知にも付けられてきた呼び名がありますが、彼らこそ、その呼び名にふさわしいのです。彼らは、霊のいかさま薬売りです。彼らは事実上、「契約の血を汚れたものと」しています（ヘブル一〇・二九）。彼らは、神の約束をこのようにだれにでも区別なく当てはめることによって、それを卑しく安売りしているのです。けれども実は、霊の病の治療も、からだの病の治療と同じく、その原因と同じほ

どさまざまでなければなりません。ですから、まずなすべきことは、原因を見つけ出すことです。そうすれば、原因がおのずから治療法を指し示すでしょう。

（二） たとえば、やみを引き起こしているのは罪でしょうか。どんな罪でしょうか。何かの外の罪でしょうか。あなたの良心は、あなたが何かの罪を犯して、神の聖霊を悲しませている（エペソ四・三〇）と責めていますか。このために、聖霊があなたから去り、喜びと平安も聖霊とともに去ったのでしょうか。それなら、あなたが滅ぼされるべきものを除き去るまで（ヨシュア七・一三）、どうして喜びと平安が戻ってくると期待できるでしょうか。「悪しき者はその道を捨て」なさい（イザヤ五五・七）。「罪人どもよ、手をきよめ」なさい（ヤコブ四・八）。「あなたがたの悪い行いを除き」なさい（イザヤ一・一六）。そうすれば、「あなたの光は暗きに輝き」（イザヤ五八・一〇）、主は帰って来られ、「豊かにゆるしを与えられ」ます（イザヤ五五・七）。

（三） 最も念入りに調べても、あなたの魂に雲をかけている行いの罪が見つからないとします。そうなら、次に、あなたと神との間を隔てている（イザヤ五九・二）怠りの罪がないかどうか、調べなさい。あなたは、兄弟の上に罪をそのままにしておかないようにしていますか。あなたの目の前で罪を犯す人に、忠告していますか。あなたは、神のすべての定めのうちを、すなわち公の祈り、家庭の祈り、ひそかな祈りのうちを歩んでいますか。もしそうでないとします。知っているこれらの務めの一つでも、習慣的に怠っているとします。それなら、どうして神の御顔の光があなたの上に照り続けると期待できるでしょうか。急いで、残っているものを「力づけ」なさい（黙示録三・二）。そうすれば、あなたの魂は生きます。「きょう、あなたがたが み声を聞いたなら」（ヘブル三・七）、神の恵みによって、欠けているものを補いなさい。「これは道だ、これに歩め」と言う声をうしろに聞く（イザヤ三〇・二一）とき、心をかたくなにしてはなりません（ヘブル三・八）。もはや、天からの召しにそむいてはなりません。罪が、怠りの罪であれ行いの罪であれ、取り除かれるまでは、どんな慰めも偽りで、人を欺くものです。それは、傷の表面に皮を張らせるだけのことです。その下では、傷がなおもうみ、ただれ続けているのです。神との間に平和を得るまでは、内なる平安を求めてはなりません。そして、神との平和は、「悔改めにふさわしい実」（マタイ三・八）なしにはありえないのです。

（四） けれども、おそらくあなたは、自分の平安と聖霊における喜びをそこなっている怠りの罪さえ、何一つ自覚していないかもしれません。それなら、何かの内なる罪が、苦い根のように、あなたの心にはえ出て、あなたを悩ましている（ヘブル一二・一五）のではありませんか。あなたの魂のかわきと不毛は、あなたの心が「生ける神から離れ去る」（ヘブル三・一二）ことによって引き起こされているのではありませんか。「高ぶる者の足が」あなたを「踏み」つけてはいませんか（詩篇三六・一一）。あなたは、自分について、「思うべき限度を越えて思いあが」ってはいませんか（ローマ一二・三）。あなたは、何かの点で、自分の「網に犠牲をささげ」、自分の「引き網に香をた」いてはいませんか（ハバク一・一六）。何かの企てがうまくいったのを、自分の勇気や力や知恵のおかげにしてはいませんか。あなたは、「もらっている」ものを、「もらっていないもののように」（第一コリント四・七）誇ってはいませんか。「わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に」（ガラテヤ六・一四）、何かを誇ってはいませんか。人の誉れを追い求めたり、望んだりしてはいませんか。それを喜んではいませんか。もしそうなら、あなたは自分の取るべき道が分かるはずです。あなたが高ぶりによって倒れたのなら、「神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神は」あなたを「高くしてくださるでしょう」（第一ペテロ五・六）。あなたは、怒りにすきを与えることによって、神をあなたから去らせてしまったのではありませんか。あなたは、「悪をなす者のゆえに、心を悩ま」したり、「不義を行う者のゆえに、ねたみを起」したりしてはいませんか（詩篇三七・一）。あなたは、兄弟のだれかの（本当の、あるいは思い込みの）罪を見て、その兄弟に対して感情を害してはいませんか。そして、心を兄弟から遠ざけることによって、愛の大いなる律法にそむいて、自分自身が罪を犯してはいませんか。それなら、主を仰ぎ見なさい。それは、あなたが新たな力を得るためです。この鋭さと冷たさがすべて取り除かれるためです。また、愛と平安と喜びがいっしょに戻ってくるためです。そして、あなたがたが互いに変わらず親切にするためです。「あわれみ深い者となり」、「神がキリストにあってあなたがたをゆるしてくだ

さったように」、「互にゆるし合」うようになるためです（エペソ四・三二）。あなたは、何かの愚かな欲望に身をゆだねてはいませんか。何かの種類の、あるいはいくらかでも、度を越えた情愛に身をゆだねてはいませんか。それなら、あなたが偶像を取り除くまで、どうして神への愛があなたの心のうちに場所を持つことができるでしょうか。「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではありません」（ガラテヤ六・七）。神は、分かれた心の中に住まわれることはありません。ですから、あなたが胸のうちにデリラを抱いている限り、神はそこに場所を持たれません。あなたが右の目を抜き出して捨てる（マタイ五・二九）までは、神の光を取り戻すことを望んでもむだです。ああ、もうこれ以上ぐずぐずしてはなりません！　そうできるようにしてくださるよう、神に叫び求めなさい。自分の無能と無力を嘆きなさい。そして、主を助け手として、狭い門からはいり（マタイ七・一三）、天国を激しく襲って奪い取りなさい（マタイ一一・一二）。神の聖所からあらゆる偶像を投げ出しなさい。そうすれば、主の栄光がすぐに現れるでしょう。

（五）　おそらく、あなたの魂をやみの中にとどめているのは、まさにこのこと、すなわち励まないこと、霊の怠惰かもしれません。あなたは、その地に安らかに住んでいます。あなたの領地には戦いがありません。それで、あなたは静かで、気にかけることもありません。あなたは、外面的な務めの同じ平らな道を進み、そこにとどまることに満足しています。それでいて、あなたは、自分の魂が死んでいることを不思議に思うのですか。ああ、主の前で自分を奮い立たせなさい！　起きて、身からちりを振り落しなさい（イザヤ五二・二）。大いなる祝福を求めて神と格闘しなさい。祈りのうちに神に魂を注ぎ出し、あくまでも祈り続けなさい！　目をさましていなさい！　眠りからさめ（ローマ一三・一一）、目をさまし続けなさい。そうでなければ、あなたが神の光と神のいのちから、ますます遠く離れていく（エペソ四・一八）ほかには、何も期待できません。

（六）　自分を最も十分に、最も公平に調べたとします。それでも、今、霊の怠惰にも、ほかのどんな内なる罪や外の罪にも身をゆだねていることが見分けられないとします。そうなら、過ぎ去った時を思い起こしなさい。以前のあなたの気質と言葉と行いを考えてみなさい。それらは、主の前に正しかったでしょうか。自分の部屋で主と語り合い、静まりなさい。そして、あなたの心の底を試し、これまでに主の栄光の目をおかした（イザヤ三・八）ことを何でも思い出させてくださるように、主に願いなさい。悔い改めていない罪の罪責が、何かあなたの魂に残っているとします。そうなら、あなたはやみの中にとどまるほかありません。悔い改めによって新たにされ、「罪と汚れとを清める」ために「開かれた「泉」（ゼカリヤ一三・一）で、信仰によって再び洗われるまでは、そうなのです。

（七）　病の原因が罪ではなく無知であるなら、治療の仕方はまったく違ってきます。それは、聖書の意味についての無知かもしれません。おそらく、無知な注解者たちによって引き起こされた無知です。その注解者たちは、ほかの点ではどれほど物知りで学識があっても、少なくともこの点では無知なのです。この場合には、無知から生じるやみを取り除くには、まずその無知を取り除かなければなりません。誤解されてきた聖句の本当の意味を示さなければなりません。この目的のために持ち出されてきた聖書の箇所をすべて考察することは、この説教のねらいからして、私にはできません。しばしば持ち出される箇所を、二つか三つだけ挙げることにします。すべての信者が遅かれ早かれ「暗い中を歩」かなければならない（イザヤ五〇・一〇）ことを証明するために、持ち出される箇所です。

（八）　その一つは、イザヤ書五〇章一〇節です。「あなたがたのうち主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い、暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、おのれの神にたよる者はだれですか」。けれども、ここで語られている人は、かつて光を持っていたのでしょうか。それが、この聖句からであれ前後の文脈からであれ、どうして分かるでしょうか。罪を自覚した人は、「主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い」ます（イザヤ五〇・一〇）。そして、その人の魂がまだ暗く、神の御顔の光を一度も見たことがないとします。それでも、私たちはその人に、「主の名を頼み、おのれの神にたよる」（イザヤ五〇・一〇）ように勧めるべきです。ですから、この聖句は、キリストを信じる者が、ときには「暗い中を歩」かなければならない（イザヤ五〇・一〇）、ということを、少しも証明していません。

（九） 同じ教理を語っていると考えられてきたもう一つの聖句は、ホセア書二章一四節です。「わたしは彼女をいざなって、荒野に導いて行き、ねんごろに彼女に語ります」。ここから、神はすべての信者を荒野に、すなわち死んだような、暗い状態に導かれるのだ、と推論されてきました。けれども、この聖句がそのようなことを何も語っていないのは確かです。この聖句は、そもそも個々の信者について語っているようには見えないからです。この聖句は、明らかにユダヤの民を指しています。おそらく、ユダヤの民だけを指しているのでしょう。けれども、もし個々の人に当てはまるとしても、その分かりやすい意味は、こうです。わたしは愛によってその人を引き寄せ、次にその人に罪を自覚させ、それから赦しのあわれみによってその人を慰めます。

（一〇） 同じ推論が引き出されてきた第三の聖句は、先に引いた次の聖句です。「あなたがたにも今は不安があります。しかし、わたしは再びあなたがたと会うでしょう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるでしょう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）。この聖句には、次のことが含まれていると考えられてきました。神は、しばらくすると、すべての信者から身を引かれる、と。そして、信者は、このように悲しんだあとでなければ、だれも取り去ることのできない喜びを持つことはできない、と。けれども、前後の文脈の全体が示しているのは、次のことです。私たちの主は、ここで使徒たちに、ほかのだれでもなく使徒たちだけに、直接語っておられるのです。そして、主は、あの特定の出来事、すなわちご自身の死と復活について語っておられるのです。主は言われます。「しばらくすれば、あなたがたはもうわたしを見なくなります」（ヨハネ一六・一六）。すなわち、わたしが墓の中にいる間です。「またしばらくすれば、わたしに会えるでしょう」（ヨハネ一六・一六）。わたしが死人の中からよみがえったときです。「あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶでしょう」（ヨハネ一六・二〇）。「その憂いは喜びに変るでしょう」（ヨハネ一六・二〇）。「あなたがたにも今は不安があります」。わたしが、あなたがたの上から取り去られようとしているからです。「しかし、わたしは再びあなたがたと会うでしょう」。わたしの復活のあとにです。「そして、あなたがたの心は喜びに満たされるでしょう。その喜び」、すなわち、そのときわたしがあなたがたに与える喜び「をあなたがたから取り去る者はいません」（ヨハネ一六・二二）。私たちが知っているとおり、これはすべて、使徒たちという特別な場合に、文字どおり成就しました。けれども、ここから、信者一般に対する神の扱いについて、何の推論も引き出すことはできません。

（一一） 同じ教理の証拠としてしばしば引かれてきた第四の聖句は（これ以上は挙げないことにします）、第一ペテロ四章一二節です。「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を」、「驚きあやしむことのないようにしなさい（第一ペテロ四・一二）。けれども、この聖句は、前の聖句とまったく同じほど、論点からはずれています。この聖句を文字どおりに訳すと、こうなります。「愛する者たちよ。あなたがたの間にある燃える火を、驚きあやしんではなりません。それは、あなたがたを試みるためのものです」（第一ペテロ四・一二）。さて、この聖句は、二次的な意味では、内なる試練に当てはめることもできるでしょう。けれども、第一には、疑いなく殉教と、それに伴う苦しみを指しています。ですから、この聖句も、それが引かれる目的には、まったく役に立ちません。そして、私たちは、すべての人に挑むことができます。旧約からであれ新約からであれ、この聖句よりも少しでも目的にかなう聖句を、一つでも持ってきなさい、と。

（一二） 「しかし、やみは光よりも、魂にとってはるかに益になるのではないか。心のうちにおける神のわざは、内なる苦しみの状態にあるときに、最も速やかに、最も効果的に進められるのではないか。信者は、喜びによってよりも悲しみによって、もっと速やかに、もっと徹底的に清められるのではないか。絶えざる平安によってよりも、もだえと痛みと苦悩と霊の殉教によって、清められるのではないか」。神秘主義者たちは、そう教えます。彼らの書物には、そう書かれています。けれども、神の言（ローマ三・二）には、そう書かれていません。神が離れておられることが、心のうちにおける神のわざを最もよく完成させるなどとは、聖書はどこにも言っていません。むしろ、神がともにいてくださること、父と御子との澄みきった交わり（第一ヨハネ一・三）こそが、神のわざを完成させるのです。このことを強く自覚するなら、それは一時間のうちに、神が長い年月離れておられることよりも多くのことをなしとげるでしょう。聖霊における喜

びは、その喜びがないことよりも、はるかに効果的に魂を清めます。そして、神の平安は、魂を練って、地上の情愛のかすを取り除くための、最もよい手段です。それなら、むなしい思い込みは捨ててしまいなさい。神の国が内部で分れ争っている（マタイ一二・二五）という思い込みです。神の平安と聖霊における喜びが、義を妨げるという思い込みです。私たちが救われるのは、信仰によってではなく不信仰によってであり、望みによってではなく絶望によってであるという思い込みです！

（一三）人々がこのように夢見ている限り、彼らが「暗い中を歩」く（イザヤ五〇・一〇）のも無理はありません。原因が取り除かれるまでは、結果がやむこともありえません。けれども、原因がなくなったときでさえ、結果がすぐにやむと思ってはなりません。無知か罪がやみを引き起こしたとします。その一方が取り除かれても、それによってさえぎられていた光は、すぐには戻ってこないかもしれません。光は神の価なしの賜物なので、神はみこころのままに、早くにでも遅くにでも、それを戻すことがおできになります。罪の場合には、光がすぐに戻ってくると期待するのは、道理にかないません。罪は罰より先に始まりました。ですから、罰が罪の終わったあとまで残ることがあっても、当然なのです。そして、自然の成り行きにおいてさえ、矢が肉に刺さっている間は、傷がいえることはありえません。けれども、矢が抜き取られたとたんに傷がいえるわけでもありません。そのあと長く、うずきと痛みが残ることもあるのです。

（一四）最後に、やみが、さまざまな、重い、予期しない誘惑によって引き起こされているとします。そうなら、それを取り除き、防ぐ最もよい方法は、信者に、いつも誘惑を予期しているように教えることです。信者は、悪い世の中に、邪悪で、ずる賢く、悪意に満ちた霊どもの間に住んでおり、あらゆる悪をなしうる心を持っているからです。聖化のわざの全体が、彼らが思っていたように一度になされるのではないことを、彼らに納得させなさい。彼らが初めて信じるときには、今生れたばかりの乳飲み子（第一ペテロ二・二）のようなものにすぎないことを、納得させなさい。乳飲み子は徐々に成長していくべきものであり、キリストの満ちみちた徳の高さ（エペソ四・一三）に達するまでには、多くの嵐を予期してよいのです。何よりも、嵐が襲ってきたときには、悪魔と論じ合わずに祈るように、彼らを教えなさい。神の前に魂を注ぎ出し、神の前に自分の悩みをあらわす（詩篇一四二・二）ように教えなさい。そして、尊く、大いなる約束（第二ペテロ一・四）を当てはめるべきなのは、おもにこの人々に対してです。無知な人々には、その無知が取り除かれるまでは当てはめるべきではありません。まして、悔い改めない罪人に当てはめるべきではありません。この人々には、私たちの救主なる神の慈悲（テトス三・四）を、ふんだんに、心をこめて告げ知らせてよいのです。いにしえから絶えることのなかった神のあわれみ（詩篇二五・六）について、詳しく語ってよいのです。ここで私たちは、神の真実について、じっくり語ってよいのです。神の言葉は「まことに確か」です（詩篇一一九・一四〇）。また、「すべての罪から」私たちを「きよめる」（第一ヨハネ一・七）ために、私たちのために流された血の力について、じっくり語ってよいのです。そのとき、神はご自分の言葉をあかしし、彼らの魂を悩みから救い出してくださるでしょう（詩篇一四三・一一）。神はこう言われるでしょう。「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったからです」（イザヤ六〇・一）。いや、あなたがへりくだって、神のすぐそばを歩むなら、その光は「いよいよ輝きを増して真昼となる」でしょう（箴言四・一八）。

説教四十七　さまざまな試練による悩み

「今しばらくのあいだは、さまざまな試錬で悩まねばならないかも知れません」（第一ペテロ一・六）

（一）　前の説教で、私は特に、心のやみについて語りました。かつて神の御顔の光の中を歩んでいた人々が、しばしば陥るのが見られるやみです。これと近い関係にあるのが、魂の悩みです。悩みは、信者の間でさえ、やみよりもさらにありふれています。実際、神の子らのほとんどすべてが、程度の差はあっても、これを経験します。そして、両者はたいへんよく似ているので、しばしば混同されます。私たちは、区別せずに、「あの人はやみの中にいる」とか、「あの人は悩みの中にいる」とか言いがちです。まるで二つが同じ意味の言葉で、一方が他方以上のことを含んでいないかのようです。けれども、二つは同じ意味からほど遠いのです。実にほど遠いのです。やみは一つのものであり、悩みは別のものです。前者と後者の間には違いがあります。いや、大きな、本質的な違いがあるのです。そして、それは、すべての神の子らにとって、理解しておくことがきわめて大切な違いです。そうでないと、彼らは、悩みからやみへと、何よりもたやすくすべり落ちてしまうでしょう。これを防ぐために、私は次のことを示すように努めます。

第一に、使徒が「悩まねばならない」（第一ペテロ一・六）と言っている相手は、どのような人々であったか。

第二に、彼らはどのような悩みの中にあったか。

第三に、その原因は何であったか。

第四に、その目的は何であったか。そして、いくつかの推論で結ぶことにします。

【一】　悩みの中にいたのはどのような人々であったか

（一）　私は、第一に、使徒が「悩まねばならない」（第一ペテロ一・六）と言っている相手が、どのような人々であったかを示さなければなりません。まず、使徒がこのように語りかけたとき、彼らが信者であったことは、まったく議論の余地がありません。使徒は、はっきりとこう言っているからです。「あなたがたは」、「救にあずかるために、信仰により神の御力に守られている」（第一ペテロ一・五）のです。また、使徒は、彼らの「信仰はためされて」、「朽ちる外はない金よりもはるかに尊い」（第一ペテロ一・七）ことに触れています。さらにまた、使徒は、彼らが「信仰の結果なるたましいの救を得ている」（第一ペテロ一・九）ことを語っています。ですから、彼らは、「悩まねばならない」（第一ペテロ一・六）ときにも、同時に生きた信仰を持っていたのです。彼らの悩みは、彼らの信仰を滅ぼしませんでした。彼らはなおも、「見えないかたを見ているようにして、忍びとおし」ていたのです（ヘブル一一・二七）。

（二）　彼らの悩みは、彼らの平安も滅ぼしませんでした。それは、「人知ではとうてい測り知ることのできない」「平安」（ピリピ四・七）であり、真実な生きた信仰と切り離すことのできないものです。このことは、第二節からたやすく推し量ることができます。そこで使徒は、恵みと平安が彼らに与えられるようにと祈っているのではありません。ただ、それが彼らに豊かに加えられるようにと祈っているのです。すなわち、彼らがすでに受けている祝福が、もっと豊かに彼らに授けられるようにと祈っているのです。

（三）　使徒がここで語りかけている人々は、また、生ける望みに満ちていました。使徒はこう言っているからです。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより」、「わたしたちを新たに生れさせ」てくださいました（第一ペテロ一・三）。新しく生れさせてくださったのは、私とあなたがたです。すなわち、「御霊のきよめにあずかって」い

て、イエス・キリストの「血のそそぎを受け」ている（第一ペテロ一・二）私たちすべてです。そして、「生ける望みをいだかせ」（第一ペテロ一・三）、「資産を受け継ぐ者としてくださった」のです（第一ペテロ一・四）。すなわち、「朽ちず汚れず、しぼむことのない」資産（第一ペテロ一・四）を受け継ぐ、生ける望みをいだかせてくださったのです。ですから、彼らは悩みの中にあっても、なお不死に満ちた希望を持ち続けていました。

（四）そして、彼らはなおも、「神の栄光にあずかる希望をもって喜んで」いました（ローマ五・二）。彼らは、聖霊における喜びに満たされていたのです。それで、使徒は、終わりの日に「イエス・キリストの現れるとき」（第一ペテロ一・七）のことに触れたばかりです。それは、主が世をさばくために来られるときです。そして、すぐにこう付け加えています。「現在、見てはいないけれども」、すなわち肉体の目では見ていないけれども、「信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれて」います（第一ペテロ一・八）。ですから、彼らの悩みは、生ける望みと両立していただけでなく、言葉につくせない喜びとも両立していました。彼らは、このように悩んでいたのと同時に、それでも、輝きにみちた喜びをもって喜んでいたのです。

（五）悩みのただ中で、彼らは同じように、なおも神の愛を味わっていました。その愛は、彼らの心に注がれていた（ローマ五・五）のです。使徒は言います。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛して」います（第一ペテロ一・八）。あなたがたは、まだ顔と顔とを合わせて主を見てはいません。けれども、信仰によって主を知って、「わが子よ、あなたの心をわたしに与え」よ（箴言二三・二六）という主の言葉に従ってきました。主は、あなたがたの神、あなたがたの愛、あなたがたの目の慕うもの、そして、あなたがたの「はなはだ大きい」報い（創世記一五・一）です。あなたがたは、主のうちに幸いを求め、見いだしました。あなたがたは「主によって喜び」（詩篇三七・四）、主はあなたがたの「心の願い」をかなえてくださいました（詩篇三七・四）。

（六）もう一つ挙げます。彼らは悩んでいましたが、それでも聖い者でした。罪に打ち勝つ同じ力を保っていたのです。彼らはなおも、罪から「神の御力に守られて」いました（第一ペテロ一・五）。彼らは、「従順な子供として」、以前の「欲情に従わ」ない者でした（第一ペテロ一・一四）。かえって、彼らを「召してくださった聖なるかたにならって」、彼ら自身も「あらゆる行いにおいて聖なる者」でした（第一ペテロ一・一五）。彼らは、自分たちが「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血」によって「あがない出された」（第一ペテロ一・一八～一九）ことを知っていました。そのため、神に対して持っている信仰と望みとによって、御霊により「たましいをきよめ」ていたのです（第一ペテロ一・二二）。ですから、全体として見れば、彼らの悩みは、信仰とも望みとも、神と人への愛とも、よく両立していました。神の平安とも、聖霊における喜びとも、内なる聖性とも外の聖性とも、両立していたのです。悩みは、彼らの心のうちにおける神のわざのどの部分も、少しもそこないませんでした。まして滅ぼすことはありませんでした。悩みは、すべての真の従順の根である「御霊のきよめ」（第一ペテロ一・二）を、少しも妨げませんでした。恵みと平安が心のうちを支配しているところから必ず生じる幸いをも、妨げなかったのです。

【二】彼らはどのような悩みの中にあったか

（一）ここから、彼らがどのような悩みの中にあったかを、たやすく知ることができます。これが、私が示そうとする第二のことです。原語は、ルペーテンテス（λυπηθεντες）で、悲しまされた、悲しんだ、という意味です。この語は、ルペー（λυπη）、すなわち悲嘆、悲しみから来ています。これが、この語のいつも変わらない、文字どおりの意味です。このことに注意すれば、この言い方にはあいまいなところもなく、理解するのに難しいところもありません。ここで語られている人々は、悲しんでいたのです。彼らがその中にあった悩みは、悲しみ、あるいは悲嘆そのものでした。それ以上でもそれ以下でもありません。それは、人の子ならだれでもよく知っている感情です。

（二）英語の聖書の訳者たちが、この語を「重苦しさ」と訳したのは（あまり普通ではない語ですが）、おそらく二つのことを示すためでしょう。第一に悲しみの程度、次にその持続です。確かに、ここで語られているのは、軽い、取るに足りない程度の悲しみではないように思われます。魂に強い印象を与え、魂の

奥深くまで沈み込む悲しみです。また、これは、一時間で過ぎ去るような、つかの間の悲しみでもないように思われます。むしろ、心をしっかりとらえていて、すぐには振り払えず、しばらくの間続く悲しみです。一時の感情というより、定着した気質として続くのです。キリストへの生きた信仰を持ち、神への本物の愛を心に持っている人々のうちにさえ、そうです。

（三）　こうした人々のうちにさえ、この悩みは、ときには魂全体をおおうほど深くなることがあります。いわば、すべての情愛に色をつけるほど深くなり、それがふるまい全体に現れるほどになることもあるのです。悩みは、同じように、からだにも影響を及ぼすことがあります。特に、生れつき体質の弱い人や、何かの偶然の病、とりわけ神経の病で弱っている人の場合は、そうです。多くの場合、「朽ちるからだは魂を押さえつける」ことが見られます。けれども、この場合には、むしろ魂がからだを押さえつけ、ますます弱らせるのです。いや、深く長く続く心の悲しみが、ときには強い体質をも弱らせることがない、とは言いません。たやすくは取り除けないからだの病の基を据えることがない、とも言いません。それでも、これらすべては、なおも愛によって働く信仰（ガラテヤ五・六）を、ある程度持っていることと両立しうるのです。

（四）　これは、「火のような試錬」（第一ペテロ四・一二）と呼ぶのにふさわしいものです。これは、使徒が第四章（第一ペテロ四章）で語っているものと同じではありません。けれども、そこで外からの苦しみについて使われている表現の多くは、この内なる苦しみにも当てはめることができます。確かに、それらの表現を、やみの中にいる人々に当てはめるのは、まったく適切ではありません。やみの中にいる人々は喜んでいませんし、喜ぶこともできません。また、「栄光の霊、神の霊が」彼らに「宿る」（第一ペテロ四・一四）というのも、本当ではありません。けれども、悩みの中にいる人々には、しばしばその霊が宿っておられます。ですから、彼らは悲しんでいても、常に喜んでいるのです（第二コリント六・一〇）。

【三】　その原因は何であったか

（一）　さて、第三の点に進みましょう。真の信者のうちに、このような悲しみ、あるいは悩みを引き起こす原因は何でしょうか。使徒ははっきりと教えています。「さまざまな試錬で悩まねばならない」（第一ペテロ一・六）と言っているのです。「さまざまな」と訳された語はポイキロイス（ποικίλοις）で、数が多いだけでなく、種類も多いという意味です。試練は、数えきれない事情が変わったり加わったりすることによって、千通りにも変化し、多様になりえます。そして、まさにこの多様さと変化のために、試練を防ぐことはいっそう難しくなるのです。試練の中には、からだのあらゆる病を数えることができます。特に急性の病や、あらゆる種類の激しい痛みです。からだ全体を冒すものであれ、ごく小さな一部を冒すものであれ、そうです。確かに、ずっと健康に恵まれてきて、こうしたものを何一つ感じたことのない人々は、それを軽く見るかもしれません。そして、病気やからだの痛みが心に悩みをもたらすことを、不思議に思うかもしれません。また、おそらく千人に一人は、ほかの人のようには痛みを感じない特異な体質を持っているでしょう。神は、このような自然の驚異とも言える人々を幾人か生み出して、ご自分の全能の力を示すことをよしとされました。その人々は、最も激しい痛みでさえ、まったく気にかけないように見えたのです。もっとも、その痛みの軽視は、一部は教育の力により、一部は異常な原因によっていたのかもしれません。すなわち、善い霊か悪い霊の力が、その人々を単なる自然の状態を越えたところに引き上げていたのかもしれないのです。けれども、これらの特別な場合を別にすれば、一般に、次のように言うのは正しい観察です。

苦痛はまったくの悲惨であり、激しい苦痛は
すべての忍耐をすっかりくつがえす

そして、神の恵みによってこれが防がれ、人々が「耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取」っている（ルカ二一・一九）とします。そういうところでさえ、痛みはそれでも、内なる深い悩みを引き起こすことがあります。魂がからだと苦しみを共にするからです。

（二） 長く続く病はみな、痛みはそれほどでなくても、同じ結果を生みやすいものです。神が私たちの上に肺病や、悪寒と高熱を伴う熱病を臨ませられるとします。それがすぐに取り除かれないなら、それは「目を見えなく」する（レビ記二六・一六）だけでなく、心に悲しみをもたらすでしょう。神経の病と呼ばれるものはどれも、とりわけそうです。そして、信仰は自然の成り行きをくつがえしはしません。自然の原因は、やはり自然の結果を生むのです。信仰が、ヒステリーの病で（いわゆる）精気が沈むのを妨げないのは、熱病で脈が上がるのを妨げないのと同じです。

（三） また、「災が、つむじ風のように臨み」（箴言一・二七）、貧しさが「つわもののように」来る（箴言六・一一）とき、これは小さな試練でしょうか。それが悲しみと悩みを引き起こすとしても、不思議でしょうか。これもまた、遠くに立っている人々や、見ても「向こう側を通って行」く（ルカ一〇・三一）人々には、小さなことに見えるかもしれません。けれども、それを身に感じている人々にとっては、そうではありません。神の愛が心のうちにあるなら、私たちは「衣食があれば、それで足れりとす」ることができます（第一テモテ六・八）。実は、「衣食」の「衣」にあたる語は、原語ではスケパスマタ（σκεπάσματα）で、衣服だけでなく住まいをも含んでいます。けれども、これらを何も持っていない人々は、どうすればよいのでしょうか。いわば、「しのぎ場もなく岩にすがる」（ヨブ二四・八）人々です。横たわるのは地面だけで、身をおおうのは空だけという人々です。自分と幼い子供たちのために、乾いた住まいも暖かい住まいも持たず、まして清潔な住まいなど持たない人々です。いや、自分自身や、自分の次に愛している者たちを、昼も夜も身を切る寒さから守る衣服さえ持たない人々です。私は、愚かな異教徒が次のように叫んでいるのを笑います。

Nil habet infelix paupertas durius in se, Quam quod ridiculos homines facit!（不幸な貧しさには、人を笑いものにすること以上につらいものはない）

貧しさには、人を笑われやすくすること以上に悪いものはないのでしょうか。これは、この浅はかな詩人が、自分の知らないことについて、受け売りで語っていたにしるしです。食物がないことは、これよりも悪いのではないでしょうか。神は、人が「顔に汗して」（創世記三・一九）食物を得なければならないことを、人へののろいとして宣告されました。けれども、このキリスト教国には、あくせく働き、骨折り、汗を流しても、結局は食物を得られない人が何と多いことでしょう。彼らは、疲れと飢えとに同時に苦しんでいるのです。ある人が、つらい一日の労働のあとで、貧しく、寒く、汚い、居心地の悪い住まいに帰って来るとします。そして、使い果たした力を回復するのに必要な食物さえ、そこにないのを見いだすとします。それは、もっと悪いことではないでしょうか。地上で安楽に暮らしているあなたがたには、神があなたがたをどれほど良く扱ってくださったかを見る目と、聞く耳と、悟る心のほかには、何一つ欠けていません。来る日も来る日も食物を求めても、何も見つからないのは、もっと悪いことではないでしょうか。そのうえ、おそらくは、慰めであるはずの五、六人の子供たちまでが泣いているのを、見なければならないのです。父親には与えるものがないのに、子供たちはそれを求めて泣いているのです。その人は、見えない手に引き止められていなければ、すぐに「神をのろって死」ぬ（ヨブ二・九）のではないでしょうか。ああ、食べるものがない！ 自分で味わったことのない者に、これがどういうことか分かるでしょうか。これが、信じている人々のうちにさえ、悩みしか引き起こさないことに、私は驚きます！

（四） おそらく、その次に置くことができるのは、私たちに近く親しい人々の死でしょう。優しい親、しかもまだそれほど老いの坂を下っていなかった親の死です。人生に踏み出したばかりで、私たちの心にまといついていた愛する子供の死です。自分の魂のような友の死です。そういう友は、神の恵みに次いで、天の最後の、最良の賜物なのです。そして、千もの事情が、その苦しみを増し加えることがあります。おそらく、その子供や友は、私たちの腕の中で死んだのです！ おそらく、思いがけないときに奪い去られたのです！ 花のように咲いていたのに、切り倒されたのです。このようなどの場合にも、私たちは心を動かされてよいだけでなく、動かされるべきです。私たちがそうなることが、神の意図なのです。神は、私たちが木石であることを望まれません。神は、私たちの情愛が消し去られることではなく、正しく整えられることを望んでおられます。ですは、人が「顔に汗して」（創世記三・一九）食物を得なければならないことを、

から、「自然の情は、とがめられることなく涙を落としてよい」のです。罪のない悲しみもありうるのです。

（五）　さらに深い悲しみを、私たちは、生けるしかばねとなっている人々（第一テモテ五・六）のために感じることがあります。最も固いきずなで私たちと結ばれていた人々の、不親切や、恩知らずや、背教のために感じる悲しみです。魂を愛する人が、神に対して死んでいる友や兄弟のために感じる思いを、だれが言い表すことができるでしょうか。夫や妻や親や子供が、戦場にはせ入る馬のように（エレミヤ八・六）、罪の中に突き進んでいるのです。どんな道理も説得も聞かずに、自分の滅びを達成しようと急いでいるのです。そういう人々のために感じる思いを、だれが言い表すことができるでしょうか。そして、この霊のもだえは、思いもよらないほどに高められることがあります。今、滅びへと急いでいるその人が、かつては、いのちの道をよく走っていた（ガラテヤ五・七）ことを考えるときです。その人が以前どのような人であったにせよ、それは今では、ただ一つのことに役立つだけです。その人の今の姿を思う私たちの心を、いっそう刺し貫き、苦しめることです。

（六）　これらのすべての場合に、私たちの大いなる敵が、その機会を生かすことを怠らないのは確かです。敵は、いつも「食いつくすべきものを求めて歩き回っている」（第一ペテロ五・八）者です。そのときには特に、あらゆる力とあらゆる技を用いるでしょう。すでにうなだれている魂に対して、何とかして少しでも有利な立場を得ようとするのです。敵は、火の矢（エペソ六・一六）を惜しまないでしょう。それは、心を襲っている試練にぴったり合っているために、最もはいり込みやすく、心に最も深く刺さりやすい矢です。敵は、不信仰な思いや、神を冒涜する思いや、不平の思いを注ぎ込もうと骨折るでしょう。神は地上に心を留めておられない、地上を治めておられない、とささやくでしょう。あるいは少なくとも、神は地上を正しく治めておられない、正義とあわれみの規則によって治めておられない、とささやくでしょう。敵は、心をあおって神に逆らわせ、神に対する私たちの生れながらの敵意を新たにさせようと努めるでしょう。そして、私たちが敵自身の武器で敵と戦おうとするとします。敵と論じ合い始めるとします。そうすれば、まったくのやみとまではいかなくても、疑いなく、ますます深い悩みが生じるでしょう。

（七）　もう一つの原因がある、としばしば考えられてきました。やみの原因ではないとしても、少なくとも悩みの原因がある、というのです。すなわち、それが神の主権的な意志だからという理由で、神が魂から身を引かれることです。確かに、私たちが外の罪や内なる罪によって神の聖霊を悲しませる（エペソ四・三〇）なら、神は身を引かれるでしょう。悪を行うことによってであれ、善を行うのを怠ることによってであれ、そうです。また、高ぶりや怒り、霊の怠惰、愚かな欲望、度を越えた情愛に身をゆだねることによってであれ、そうです。けれども、神がただそうしようと思われるから、ただそれがみこころだから身を引かれる、ということがあるでしょうか。私は、それを断じて否定します。聖書全体のどこにも、そのような推測に少しでも根拠を与える聖句はありません。いや、それは、多くの個々の聖句に反するだけでなく、聖書全体の趣旨に反する推測です。それは、神の本質そのものに相いれません。ある著名な著者は、これを強い言葉で言い表しています。「ご自分の被造物を相手に、いないいないばあをする」ことは、神の威厳と知恵にまったくふさわしくない、と。それは、神の正義とあわれみにも、神のすべての子らの健全な経験にも、矛盾します。

（八）　神秘主義の著者と呼ばれる人々の多くは、悩みの原因をもう一つ挙げています。そして、その考えは、どうしてかは分かりませんが、彼らの書物を知らない素朴な人々の間にさえ、忍び込んでいます。これを説明するには、近年亡くなったある著者の言葉を引くのがいちばんです。この著者は、これを自分自身の経験として語っています。「私は、愛するかたのうちにあって、たいへん幸せであり続けました。それで、たとい荒野でさすらい人として暮らすことを余儀なくされたとしても、少しも苦にならなかったでしょう。この状態が長く続かないうちに、私は、実際に荒野へ導かれていることに気づきました。私は、見捨てられたありさまにあり、まったく貧しく、みじめで、悲惨な者となっていました。この悲しみの本来の源は、自分自身を知ることです。それによって、私たちは、神と自分とがまったく似ていないことを見いだすのです。私たちは、自分が神に最も反するものであることを知ります。そして、自分の魂の奥底がまったく腐

り、ゆがんでいることを知るのです。それは、あらゆる悪と悪意、世と肉、あらゆる忌まわしいものに満ちているのです」。ここから、次のように推論されてきました。自分自身を知ることがなければ、私たちは永遠に滅びてしまう。その自分を知ることは、義とする信仰を得たあとでさえ、最も深い悩みを引き起こさずにはいない、と。

（九）けれども、これについて、私は次のことを指摘したいと思います。一、この著者は、その前の段落で、こう言っています。「私は、自分がキリストへの真の信仰を持っていないと聞いて、自分を神にささげました。すると、すぐに神の愛を感じたのです」。そうかもしれません。けれども、それが義認であったようには見えません。それは、普通、「父が引きよせて」くださること（ヨハネ六・四四）と呼ばれているものにすぎなかった可能性のほうが高いのです。そうだとすれば、そのあとに続いた悩みとやみは、罪の自覚にほかなりませんでした。罪の自覚は、ものごとの本性からして、私たちを義とする信仰に先立たなければならないものです。

二、彼女が、信仰の欠けていることを自覚したのとほとんど同じ瞬間に義とされたとします。そうなら、普通は義認に先立つ、徐々に深まる自己認識のための時がなかったことになります。ですから、この場合には、自己認識は義認のあとに来ました。そして、予期していなかっただけ、おそらくいっそう厳しいものとなったのです。

三、次のことは認められています。義認のあとには、私たちの内に宿る罪、生れながらのまったくの腐敗を、それ以前よりもはるかに深く知るようになります。はるかに明らかに、十分に知るようになるのです。けれども、これが魂のやみを引き起こす必要はありません。それが私たちを必ず悩みに陥らせる、とも私は言いません。もしそうなら、使徒は、「悩まねばならないかも知れない」（第一ペテロ一・六）という表現を使わなかったでしょう。自分自身を知ろうとするすべての人にとって、悩みは絶対に欠くことのできない必要なものとなるはずだからです。それは事実上、神の完全な愛を知ろうとするすべての人にとって、必要になるということです。その愛によって「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者と」されようとする（コロサイ一・一二）すべての人にとって、です。けれども、決してそうではありません。それどころか、神は、私たちの自己認識をどれほどにでも増し加えることがおできになります。そして、それと同じ割合で、神ご自身についての知識と、神の愛の経験をも増し加えることがおできになるのです。そして、この場合には、「荒野も、悲惨も、見捨てられたありさまも」ないでしょう。あるのは愛と平安と喜びであり、それが徐々にわき上がって、永遠のいのちに至るのです。

【四】 その目的は何であったか

（一）それでは、神は何の目的のために、これほど多くの神の子らに悩みが降りかかるのを許されるのでしょうか。これが、考察すべき第四のことでした。使徒は、この大切な問いに、分かりやすく、まっすぐな答えを与えています。それは、彼らの「信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変る」ためです（第一ペテロ一・七）。第四章のよく知られた箇所は、これを暗に指しているのかもしれません（もっとも、すでに述べたように、その箇所は第一には、まったく別のことにかかわっていますが）。「あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を」、「驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜」びなさい。「それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるため」です（第一ペテロ四・一二～一三）。

（二）ここから、私たちは次のことを学びます。神が、ご自分の子らに悩みをもたらす試練を許される第一の大いなる目的は、彼らの信仰をためすことです。金が火によってためされるように、信仰は試練によってためされるのです。さて、私たちが知っているとおり、火でためされた金は、それによって純化され、かすから分けられます。信仰も、試練の火の中で同じようになります。ためされればためされるほど、いっそう純化されるのです。いや、純化されるだけでなく、強められ、確かにされ、豊かに増し加えられるのです。神の知恵と力、神の愛と真実の証拠が、それだけ多く加わるからです。ですから、私たちの信仰を

増し加えることが、神がこのようなさまざまな試練を許される、恵み深い目的の一つなのです。

（三） 試練はまた、あの生ける望みをためし、純化し、確かにし、増し加えるのにも役立ちます。「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神」が、「その豊かなあわれみにより」、私たちを「新たに生れさせて」いただかせてくださった望みです（第一ペテロ一・三）。実際、私たちの望みは、信仰と同じ割合で増し加わらずにはいません。望みは、信仰という土台の上に立っているからです。私たちは、その御名を信じ、神の御子を信じる信仰によって生きている（ガラテヤ二・二〇）ので、やがて現れる栄光を望みます。それを確信をもって待ち望んでいるのです。したがって、私たちの信仰を強めるものは、何であれ、私たちの望みをも増し加えます。同時に、それは主にある私たちの喜びをも増し加えます。この喜びは、不死に満ちた希望に必ず伴うものです。この観点から、使徒は、もう一つの章で、信者たちにこう勧めています。「キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜」びなさい（第一ペテロ四・一三）。まさにこのために、「あなたがたはさいわい」です。「栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿るから」です（第一ペテロ四・一四）。そして、これによって、あなたがたは、苦しみのただ中にあってさえ、「言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれ」ることができるのです（第一ペテロ一・八）。

（四） 彼らがいっそう喜ぶのは、彼らの信仰と望みを増し加える試練が、彼らの愛をも増し加えるからです。神のすべてのあわれみに対する神への感謝も、すべての人に対する善意も、増し加えるのです。それで、彼らは、自分たちの救主なる神の慈悲（テトス三・四）を深く感じれば感じるほど、ますます愛に心を燃やします。「まずわたしたちを愛してくださった」（第一ヨハネ四・一九）かたへの愛です。また、やがて現れる栄光について、明らかで強い確証を持てば持つほど、彼らはますます主を愛します。彼らのためにその栄光を買い取り、その「保証として」、彼らの「心に」それを「賜わった」（第二コリント一・二二）かたを愛するのです。そして、彼らの愛を増し加えること、これが、彼らに降りかかるのを許された試練のもう一つの目的です。

（五） さらにもう一つの目的は、彼らが聖性において進むことです。心の聖性と、ふるまいの聖性においてです。後者は、自然に前者から生じます。良い木は良い実を結ぶからです（マタイ七・一七）。そして、内なる聖性はすべて、愛によって働く信仰（ガラテヤ五・六）の直接の実です。この信仰によって、ほむべき御霊は、心を高ぶりや我意や激情から清めてくださいます。世への愛や、愚かで有害な欲望や、卑しくむなしい情愛からも清めてくださるのです。そのうえ、聖別された苦難は、神の恵みによって、直接まっすぐに聖性へと向かう傾きを持っています。神の御霊の働きによって、苦難は、神の前で魂をますますへりくだらせ、低くします。苦難は、私たちの荒れ騒ぐ心を静めて柔和にし、私たちの本性の激しさを飼いならし、私たちの強情と我意を和らげます。また、私たちを世に対して十字架につけます。そして、私たちが、すべての力を神から期待し、すべての幸いを神のうちに求めるようにしてくれるのです。

（六） そして、これらはすべて、あの大いなる目的に行き着きます。それは、私たちの信仰と望みと愛と聖性とが、たとい今はまだ現れていなくても、やがて「変る」（第一ペテロ一・七）ことです。すなわち、神ご自身からの「さんび」、人々と御使たちからの「ほまれ」、そして「栄光」に変わることです。その栄光は、最後まで耐え忍んだすべての人に、偉大な審判者が与えるものです。そして、この栄光は、あの恐るべき日に、すべての人に、「そのわざにしたがって」（ローマ二・六）与えられます。すなわち、神がその人の心のうちに行われたわざと、その人が神のために行った外のわざとにしたがって、与えられるのです。また同じように、その人が苦しんだことにしたがって、与えられるのです。ですから、これらの試練はすべて、言葉につくせない益なのです。このように多くの仕方で、「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させる」（第二コリント四・一七）のです！

（七） これに加えて、苦難の中での私たちのふるまいを見ることによって、ほかの人々が受けるかもしれない益があります。私たちは経験によって知っています。手本は、しばしば教えよりも深い印象を私たちに与えるのです。そして、嵐のただ中で穏やかで静かな魂の手本ほど、強い影響を与える手本があるでしょうか。同じ尊い信仰を授かった人々（第二ペテロ一・一）に対してだけでなく、

神を知らない人々に対してさえ、そうです。その魂は、悲しんでいても、常に喜んでいます（第二コリント六・一〇）。神の御旨であることは何でも、生れつきの性質にとってどんなにつらくても、柔和に受けいれます。病気と痛みの中ではこう言います。「父がわたしにくださった杯は、飲むべきではないでしょうか」（ヨハネ一八・一一）。損失や欠乏の中ではこう言います。「主が与え、主が取られたのです。主のみ名はほむべきかな」（ヨブ一・二一）。

【五】 いくつかの推論

（一） 最後に、いくつかの推論で結ばなければなりません。第一に、魂のやみと悩みとの違いは、何と大きいことでしょう！ それなのに、この二つは、経験を積んだクリスチャンによってさえ、ごく一般に混同されているのです。やみ、すなわち荒野の状態は、聖霊における喜びをまったく失うことを意味します。悩みは、そうではありません。悩みのただ中でも、私たちは「言葉につくせない」「喜びにあふれ」る（第一ペテロ一・八）ことができるのです。やみの中にいる人々は、神の平安を失っています。悩みの中にいる人々は、失っていません。それどころか、まさにそのときにも、恵みと同じように平安も、彼らに豊かに加えられることがあるのです。前者では、神への愛は、まったく消えてはいないとしても、冷えています（マタイ二四・一二）。後者では、神への愛はその力をすべて保っています。いや、むしろ日ごとに増し加わっています。前者では、信仰そのものも、まったく失われてはいないとしても、ひどく衰えています。まだ見ていない事実（ヘブル一一・一）、特に赦してくださる神の愛についての彼らの確認と確信は、以前ほど明らかでも強くもありません。そして、神への彼らの信頼も、それに比例して弱まっています。後者は、神を見てはいなくても、神への明らかで揺るがない確信を持っています。また、自分のすべての罪を消し去ってくださったあの愛について、変わらない確認を持っています。ですから、私たちが信仰と不信仰、望みと絶望、平和と戦い、神への愛と世への愛とを見分けることができる限り、悩みとやみとを誤りなく見分けることができるのです！

（二） 第二に、ここから次のことを学ぶことができます。悩みが必要なことはありえても、やみが必要なことはありえない、ということです。私たちが「今しばらくのあいだは」「悩まねばならない」（第一ペテロ一・六）ことが、上に述べた目的のために必要なことはありうるのです。少なくとも、次の意味では必要です。悩みは、あの「さまざまな試錬」（第一ペテロ一・六）から自然に生じる結果です。そして、その試練は、私たちの信仰をためして増し加え、望みを確かにして広げるために必要です。また、心をあらゆる聖くない気質から清め、私たちを愛において全うするために必要なのです。したがって、試練は、私たちの冠をいっそう輝かせ、私たちの永遠の重い栄光（第二コリント四・一七）を増し加えるために必要なのです。けれども、やみがこれらの目的のどれかのために必要だとは言えません。やみは、これらの目的に少しも役立ちません。信仰と望みと愛を失うことは、確かに、聖性にも役立ちませんし、天における報いを増し加えることにも役立ちません。その報いは、地上での私たちの聖性に比例するのです。

（三） 第三に、使徒の語り方から、悩みでさえいつも必要なわけではない、と推し量ることができます。使徒は、「今しばらくのあいだは」「悩まねばならないかも知れない」（第一ペテロ一・六）と言っています。ですから、悩みは、すべての人に必要なわけではなく、どの人にもいつも必要なわけではありません。神は、みこころのときに、ほかの手段によって、どんな魂のうちにも同じ恵みのわざをなすことがおできになります。神は、そのための力も知恵も持っておられるのです。そして、ある場合には、神はそうなさいます。神は、みこころにかなう人々を、ほとんど何の悩みもなしに、力から力に進ませられる（詩篇八四・七）のです。彼らが「神をおそれて全く清く」なる（第二コリント七・一）まで、そうなさるのです。神は、人の心に対して絶対的な力を持っておられ、心のすべてのばねを、みこころのままに動かされるからです。けれども、このような場合はまれです。神は、たいてい、「受けいれられる人々を、苦難の炉で」ためすことをよしとされます。ですから、さまざまな試練と悩みは、多かれ少なかれ、神の最も愛する子らが普通に受ける分なのです。

（四）　ですから、最後に、私たちは目をさまして祈り（マタイ二六・四一）、やみに陥らないように、できる限りの努力をすべきです。けれども、悩みについては、それを避ける方法よりも、それによって益を得る方法に心を配るべきです。私たちが大いに心がけるべきことは、悩みの中で正しくふるまい、その中で主を待ち望むことです。そうして、悩みが私たちに降りかかるのを主が許された、その愛のねらいのすべてを、悩みが十分にかなえるようにするのです。悩みが、私たちの信仰を増し加え、望みを確かにし、私たちをあらゆる聖性において全うする手段となるようにするのです。悩みが来るときにはいつでも、悩みが許されている、この恵み深い目的に目を留めましょう。そして、自分たちに対する神のみこころを無にする（ルカ七・三〇）ことのないように、あらゆる努力をしましょう。神が絶えず与えてくださる恵みによって、熱心に神と共に働き（第二コリント六・一）、「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ」ましょう（第二コリント七・一）。そして、日ごとに、私たちの主イエス・キリストの恵みにおいて、ますます豊かになっていきましょう（第二ペテロ三・一八）。主の永遠の国（第二ペテロ一・一一）に迎え入れられるまで、そうしましょう！

説教四十八　自己否定

「それから、みんなの者に言われた、『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい』」（ルカ九・二三）

（一）　ここで与えられている指図は、もっぱらではないとしても主として、使徒たちにかかわるものだと、しばしば考えられてきました。少なくとも、初代のクリスチャンたちか、迫害の中にある人々にかかわるものだ、というのです。けれども、これはひどい誤りです。というのも、確かに私たちのほむべき主は、ここでは、ご自分の使徒たちと、ほかの弟子たちとに、より直接に語りかけておられます。その弟子たちとは、肉の生活のとき（ヘブル五・七）に主に付き従っていた人々です。しかし、主は彼らのうちにあって、私たちにも、すべての人にも、何の例外も制限もなく語っておられるからです。ここで命じられている義務は、使徒たちや初代のクリスチャンたちだけのものではありません。ものごとの道理そのものからして、それは議論の余地がないのです。この義務は、特定の国にかかわらないのと同じように、特定の身分の人々にも、特定の時代にもかかわりません。いいえ、この義務は、最も普遍的な性質のものです。すべての時、すべての人、いや、すべての事柄にかかわります。食べ物や飲み物や、感覚にかかわる事柄だけではありません。その意味はこうです。「だれでも」、どんな地位、身分、境遇にあっても、どの国、世のどの時代の人であっても、本当に「わたしについてきたいと思うなら、自分を捨て」なさい（ルカ九・二三）。すべてのことにおいて、そうしなさい。どんな種類のものであれ、「自分の十字架を負うて」、しかも「日々」そうして、「わたしに従ってきなさい」（ルカ九・二三）。

（二）　自分を捨て、自分の十字架を負うことは、この言葉の意味を十分に広くとるなら、小さな事柄ではありません。それは、宗教の付随的な事柄のいくつかのように、ただ望ましいというだけのものではありません。主の弟子となるためにも、弟子であり続けるためにも、絶対に、欠くことのできないほど必要なのです。ものごとの本性そのものからして、それは、私たちが主についていき、主に従うために絶対に必要です。私たちがそれを実行していない限りにおいて、私たちは主の弟子ではないほどです。絶えず自分を捨てていないなら、私たちは主に学んでいるのではなく、ほかの主人たちに学んでいるのです。日々自分の十字架を負っていないなら、私たちは主についていっているのではありません。世か、この世の君（ヨハネ一二・三一）か、自分の肉の思い（コロサイ二・一八）についていっているのです。十字架の道を歩んでいないなら、私たちは主に従ってはいません。主の御足の跡を踏み従って（第一ペテロ二・二一）はいません。主から離れて後戻りしているか、少なくとも主からそれているのです。

（三）　このために、これほど多くのキリストの教役者たちが、この大切な義務について、これほど詳しく書き、語ってきたのです。ほとんどあらゆる時代と国でそうであり、特に、教会に徐々に忍び込んだ新奇なことと腐敗から、教会が改革されて以来、そうです。公の説教でも、個人的な勧めでも、そうしてきました。このために、彼らは、この主題について多くの小冊子を広く配りもしました。私たちの国でも、いくつか配られました。彼らは、神の言（ローマ三・二）からも、自分自身の経験のあかしからも、知っていました。自分を捨てないなら、私たちの主人を否まないでいることは、どれほど不可能であるかを知っていたのです。また、日々自分の十字架を負わないなら、十字架につけられたかたに従おうとしても、どれほどむなしいかを知っていたのです。

（四）　けれども、まさにこのことを考えると、次のように問うのも、もっともではないでしょうか。この主題については、すでに多くのことが語られ、書かれてきたのなら、これ以上語ったり書いたりする必要がどこにあるのか、と。私は答えます。神を恐れる人々の中にさえ、この主題について語られてきたことを聞く機会がなかった人が、少なからずいるのです。書かれてきたことを読む機会もなかったのです。また、おそらく、書かれてきたものを多く読んだとしても、

それほど益を受けなかったでしょう。書いてきた人々の多くは（その中には大部の書物を書いた人もいます）、決してこの主題を理解していたようには見えません。ある人々は、その本質そのものについて不完全な見方しか持っていませんでした。それでは、ほかの人々に説明することなど、決してできませんでした。あるいは、それが本来どこまで及ぶのかを知りませんでした。この戒めが限りなく広い（詩篇一一九・九六）ことを、見ていなかったのです。あるいは、それが絶対に、欠くことのできないほど必要であることを、感じていませんでした。ほかの人々は、それについて、たいへん暗く、混乱した、込み入った、神秘的な仕方で語っています。まるで、普通の読者に説明するよりも、むしろ一般の人々から隠そうとしているかのようです。また、ほかの人々は、自己否定の必要について、たいへん明快に力強く、見事に語っています。けれども、彼らは一般論を扱うだけで、個々の具体例にまでは降りて来ません。そのため、大多数の人々、すなわち普通の能力と教育しか持たない人々には、ほとんど役に立たないのです。また、中には具体的な事柄にまで降りて来る人々もいます。しかし、それは、一般の人々にはかかわらない事柄ばかりです。そういう事柄は、普通の生活には、めったに、あるいはまったく起こらないからです。たとえば、投獄や拷問に耐えることです。文字どおりの意味で、家や土地、夫や妻、子供、あるいはいのちそのものを手放すことです。けれども、私たちはそのどれにも召されてはいませんし、召されることもなさそうです。神が、公の迫害の時代が再び来るのを許されるのでない限り、そうです。その一方で、私の知る限り、英語で書く著者の中に、次のような人はいません。自己否定の本質を、普通の理解力にかなう、平易で分かりやすい言葉で述べた人です。しかも、普通の生活で日々起こる、あの小さな具体的な事柄に、それを当てはめた人です。このような説教は、今もなお必要とされています。そして、ますます必要とされているのです。というのも、霊の生活のどの段階でも、恵みを得ることや恵みにおいて成長することを妨げるものは、個々にはいろいろあります。けれども、それらはすべて、次の一般的な妨げに帰着するからです。すなわち、私たちが自分を捨てないか、自分の十字架を負わないかです。

この欠けをいくらかでも補うために、私は次のことを示すように努めます。第一に、自分を捨てるとは、また自分の十字架を負うとは、どういうことか。第二に、人が完全にはキリストの弟子でないのは、いつも、これが欠けているためであること。

【一】 自分を捨てるとは、また自分の十字架を負うとは、どういうことか

（一） 私は、第一に、「自分を捨て、日々自分の十字架を負」う（ルカ九・二三）とはどういうことかを、示すように努めます。これは、ほかのどの点よりも、よく考え、徹底して理解する必要のある点です。それは、ほかのどの点よりも、数多くの強力な敵に反対されているからでもあります。私たちの本性全体が、自分を守るために、きっとこれに逆らって立ち上がるでしょう。したがって世も、すなわち恵みでなく本性を導き手とする人々も、その言葉の響きそのものを忌み嫌います。また、私たちの魂の大いなる敵は、その大切さをよく知っているので、これに逆らって、あらゆる手を尽くさずにはいません。けれども、それだけではありません。ある程度悪魔のくびきを振り捨てた人々がいます。特に近年、心のうちに本当の恵みのわざを経験した人々です。その人々でさえ、キリスト教のこの大切な教理の味方ではありません。彼らの主人が、とりわけ強く説いておられる教理なのに、です。彼らのある者は、聖書にそれについての言葉が一つもないかのように、それについて深く、まったく無知です。ほかの者は、さらに遠く離れています。知らないうちに、それに対する強い偏見を吸い込んでいるのです。彼らは、この偏見を、一部はうわべだけのクリスチャンたちから受けました。言葉もふるまいも美しいけれども、敬虔のうち力だけを欠き、宗教のうち霊だけを欠いている人々です。また一部は、今はそうでないとしても、かつては「きたるべき世の力」を「味わった」（ヘブル六・五）人々から受けたのです。けれども、彼らの中に、自分で自己否定を実行せず、ほかの人々にも勧めない人などいるのでしょうか。そういう人々がいることを疑うなら、あなたは人間というものをほとんど知らないのです。自己否定に向かって宣戦を布告していないと

いうだけの人々の団体が、いくつもあるのです。ロンドンより遠くへ行くまでもありません。予定論者の団体全体を見てみなさい。彼らは、神の価なしのあわれみによって、近ごろ、生れながらのやみから信仰の光へと召し出された人々です。彼らは自己否定の手本でしょうか。それを実行すると公言することさえしている人が、何と少ないことでしょう。自分でそれを勧めたり、勧める人々を喜んだりする人が、何と少ないことでしょう。むしろ、彼らは、絶えずそれを最も忌まわしい色で描いているのではないでしょうか。まるで、それが「行いによる救い」を求めることであり、「自分の義を立てよう」（ローマ一〇・三）と努めることであるかのようにです。そして、あらゆる種類の律法廃棄論者たちが、どれほど素早くこの叫びに加わることでしょう。口のなめらかなモラヴィア派から、騒がしく口汚いランター派に至るまで、そうです。律法主義だ、律法を説いている、という愚かで無意味な決まり文句を並べて加わるのです。ですから、あなたがたは、この教理に深く根ざしていないなら、絶えず危険にさらされています。言いくるめられ、脅され、あざけられて、福音のこの大切な教理から引き離される危険です。にせ教師によってか、にせの兄弟たち（福音の単純さから多かれ少なかれ惑わされた人々）によってです。それでは、熱心な祈りを、あなたがたが今から読むものの前に置き、それに伴わせ、その後に続かせなさい。それが神の指によってあなたがたの心に書き記され、決して消されることのないようにするためです。

（二）　けれども、自己否定とは何でしょうか。私たちは、どの点で自分を捨てるべきなのでしょうか。また、その必要はどこから生じるのでしょうか。私は答えます。神の御旨は、知性あるすべての被造物にとって、至高の、変わることのない規則です。天のすべての御使にも、地上のすべての人にも、等しく従うことを求めるものです。また、そうでしかありえません。これは、被造物とその創造者との関係から生じる、自然で必然的な結果です。けれども、神の御旨が、大小すべての事柄で私たちの唯一の行動の規則だとします。そうなら、否定できない帰結として、私たちはどんな事柄でも自分の意志を行ってはならない、ということになります。ですから、ここに私たちは、自己否定の本質と、その根拠と理由とを、一度に見ます。自己否定の本質が分かります。それは、神の御旨だけが私たちの行動の規則であるという確信から、自分の意志に従うことを否み、拒むことです。また、その理由も分かります。私たちが被造物だからです。「われらを造られたものは主であって」（詩篇一〇〇・三）、私たち自身ではないからです。

（三）　自己否定のこの理由は、天にいる神の御使たちについてさえ当てはまるはずです。また、創造者の手から出たばかりの、罪のない聖い人についても当てはまるはずです。けれども、さらにもう一つの理由が、堕落以来すべての人が置かれている状態から生じます。私たちはみな今、「不義のなかに生れ」、母は「罪のうちに」私たちを「みごもりました」（詩篇五一・五）。私たちの本性は、あらゆる力と機能において、まったく腐敗しています。そして、私たちの意志は、ほかのものと同じように腐敗していて、生れながらの腐敗をほしいままにすることにすっかり傾いています。他方、神の御旨は、私たちがその腐敗に抵抗し、それに逆らって働くことです。あるときに、あるいはある事柄においてだけではなく、いつでも、すべての事柄においてです。ですから、ここに、絶え間ない、あらゆることにわたる自己否定の、さらにもう一つの根拠があるのです。

（四）　これをもう少し例えで説明しましょう。神の御旨は、まっすぐ神へと通じる道です。人の意志は、かつてはこの道と平行して走っていました。けれども、今は別の道になっています。違っているだけでなく、今の私たちの状態では、まっこうから反しているのです。それは神から離れて行きます。ですから、一方の道を歩むなら、私たちは必ず他方の道を離れなければなりません。両方を歩むことはできないのです。確かに、気の弱い、手のなえた人は、二つの道を、かわるがわる行くことがあるかもしれません。けれども、同時に二つの道を歩むことはできません。同じ一つのときに、自分の意志に従い、しかも神の御旨に従うことはできないのです。どちらか一方を選ばなければなりません。神の御旨を否んで自分の意志に従うか、自分を捨てて神の御旨に従うかです。

（五）　さて、自分の意志に従うことは、確かに、そのときは楽しいものです。目の前に来るどんな場合にも、私たちの本性の腐敗をほしいままにして従うのです。けれども、何かの事柄でそれに従うなら、その分だけ、私たちは自分の意志のゆがみを強めます。それをほしいままにすれば、本性の腐敗を絶えず増し

加えることになります。ちょうど、口に合う食物によって、しばしばからだの病を重くするのと同じです。それは舌を喜ばせますが、病を悪化させます。楽しみをもたらしますが、死をももたらすのです。

（六） ですから、全体として言えば、自分の意志が神の御旨と一致しないとき、それを否むことです。しかも、それがどれほど楽しいものであっても、そうすることです。それは、神から出て神へと導くのでない楽しみは、どんなものでも自分に許さないことです。すなわち、事実上、歩むべき道からそれるのを拒むことです。たとい、それが快い、花の咲いた小道へそれることであっても、です。また、たとい舌に快くても、命取りの毒だと分かっているものを拒むことです。

（七） そして、キリストに従おうとする人、キリストの本当の弟子になろうとする人はだれでも、自分を捨てなければなりません。それだけでなく、自分の十字架をも負わなければなりません。十字架とは、私たちの意志に反するもの、私たちの本性にとって不快なもの、すべてです。ですから、自分の十字架を負うことは、自分を捨てることよりも少し先へ進んでいます。少し高く上り、血肉にとってもっと難しい務めなのです。楽しみを断つことは、苦痛に耐えることよりもたやすいからです。

（八） さて、神の御旨に従って、「わたしたちの参加すべき競走」（ヘブル一二・一）を走るときには、しばしば道に十字架が横たわっています。すなわち、喜ばしいものでないばかりか、悲しいもの（ヘブル一二・一一）が横たわっているのです。私たちの意志に反し、私たちの本性にとって不快なものです。それでは、どうすればよいのでしょうか。選ぶ道ははっきりしています。私たちは、自分の十字架を負うか、それとも神の道から、私たちに「授けられた聖なる戒め」（第二ペテロ二・二一）からそれるかの、どちらかです。まったく立ち止まったり、永遠の滅びへ引き返したりはしないとしても、です！

（九） だれもが、あの腐敗、あの悪い病をこの世に携えて来ます。それをいやすためには、いわば右の目を抜き出し、右の手を切って捨てる（マタイ五・二九〜三〇）ことが、しばしば必要です。行わなければならない事柄そのものか、それを行う唯一の手段かが、それほど苦痛に満ちているのです。たとえば、愚かな欲望や、度を越えた情愛と別れることです。あるいは、その対象から離れることです。そうしなければ、その欲望や情愛は決して消えないのです。前者の場合、そのような欲望や情愛が魂に深く根を下ろしているとします。そのときには、それを引き抜くことは、しばしば剣で刺し通されるようなものです。いや、「精神と霊魂と、関節と骨髄とを切り離す」（ヘブル四・一二）ようなものです。そのとき主は、精錬する者の火のように魂の上に座して、そのかすをすべて焼き尽くされます。そして、これはまさに十字架です。それは本質的に苦痛に満ちています。ものごとの本性そのものからして、そうでなければなりません。魂は、このように引き裂かれ、火の中を通るとき、苦痛を感じないではいられません。

（一〇） 後者の場合、罪に病む魂をいやし、愚かな欲望や度を越えた情愛を治す手段は、しばしば苦痛に満ちています。ものごとの本性からではなく、病の本性から苦痛に満ちているのです。たとえば、私たちの主が、富める青年に、「帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」（マタイ一九・二一）と言われたときがそうです。主は、これがその人の貪欲をいやす唯一の手段であることを、よくご存じでした。それを考えるだけで、青年はひどく苦しみ、「悲しみながら立ち去」ったのです（マタイ一九・二二）。地上の財産を手放すよりも、天国への望みを手放すほうを選んだのです。これは、彼が持ち上げることを承知できなかった重荷であり、負おうとしなかった十字架でした。そして、前者の場合であれ後者の場合であれ、キリストに従う人はだれでも、きっと「日々自分の十字架を負」う（ルカ九・二三）必要があるでしょう。

（一一） 十字架を「負う」（ルカ九・二三）ことは、自分の十字架を担うことは少し違います。自分で選んだのではないのに身に負わされたものを、柔和と忍従をもって耐えるとします。そのとき、私たちは、正しくは自分の十字架を担うと言われます。これに対して、私たちが正しく「自分の十字架を負」う（ルカ九・二三）と言えるのは、次のときだけです。避けようと思えば避けられるものを、自分から進んで苦しむときです。すなわち、自分の意志に反していても、神の御旨を喜んで受けいれるときです。苦痛に満ちたものを、それが賢く恵み深い創造者の御旨であるという理由で、選び取るときです。

（一二）　ですから、キリストの弟子はだれでも、自分の十字架を担うだけでなく、負うべきなのです。確かに、ある意味では、それはその人だけのものではありません。その人にも、ほかの多くの人々にも共通のものです。だれに臨む試練で、エイ・メー・アントローピノス（εἰ μὴ ἀνθρωπίνος）、すなわち「世の常で」ないものはないからです（第一コリント一〇・一三）。それは、この世にある人々の共通の本性と境遇に、起こりがちで、ふさわしいものなのです。けれども、別の意味では、そのあらゆる事情とともに考えるなら、それはその人のものです。その人だけに特有のものです。それは、神がその人のために備えられたものです。神がその人に、ご自分の愛のしるしとしてお与えになったものです。その人がそれをそのようなものとして受け取るとします。そして、キリスト教の知恵が指示する手段を用いて、その重圧を取り除こうと努めたとします。そのあとで、陶器師の手にある粘土（エレミヤ一八・六）のように身をゆだねるとします。そうすれば、それは、その人の益となるように、神によって配され、整えられます。その性質についても、その量と程度、その期間、そのほかのあらゆる事情についても、そうなのです。

（一三）　これらすべてにおいて、私たちのほむべき主は、私たちの魂の医者として行動しておられる、とたやすく考えることができます。ただご自分の喜びのためではなく、「わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために」（ヘブル一二・一〇）そうしておられるのです。主が私たちの傷を探って私たちに痛みをお与えになるとしても、それはただ傷をいやすためです。主は、健全な部分を守るために、腐ったところや不健全なところを切り取られます。そして、からだ全体が滅びるよりは、手足を一本失うほうを、私たちが進んで選ぶとします。それなら、魂全体が地獄に投げ入れられるよりは、たとえて言えば右の手を切って捨てるほう（マタイ五・三〇）を、どれほどいっそう選ぶべきでしょう！

（一四）　ですから、私たちは、自分の十字架を負うことの本質と根拠を、はっきりと見ます。それは、ある人々の言い方を借りれば、自分を鞭打つことを意味するのではありません。文字どおり自分の肉を引き裂くことでも、毛の粗布や鉄の帯を身に着けることでもありません。そのほか、からだの健康をそこなうようなことでもありません。もっとも、自分ではどうにもならない無知からそうしている人々を、神がどれほど大目に見られるかは、私たちには分かりません。十字架を負うとは、そうではなく、自分の意志に反していても、神の御旨を受けいれることです。苦くてもからだに良い薬を選ぶことです。また、一時的な苦痛を進んで受けいれることです。どんな種類、どんな程度の苦痛でもかまいません。それが永遠の楽しみのために、本質的に、あるいは付随的に必要であるときには、そうするのです。

【二】　人が完全にはキリストの弟子でないのは、いつも、これが欠けているためである

（一）　第二に、私は次のことを示さなければなりません。人が主に徹底して従わず、完全にはキリストの弟子でないことがあります。それは、いつも、自己否定か、自分の十字架を負うことが欠けているためなのです。

確かに、ある場合には、これは一部、恵みの手段が欠けているためかもしれません。力をもって語られる真の神の言葉を聞くことや、聖礼典や、クリスチャンの交わりが欠けているためかもしれません。けれども、これらのどれも欠けていないところでは、私たちが神の恵みを受け、恵みにおいて成長するのを大きく妨げるものは、いつも決まっています。自分を捨てないこと、あるいは自分の十字架を負わないことです。

（二）　いくつかの例を挙げれば、このことははっきりします。ある人が、自分の魂を救うことのできる言葉を聞きます。その人は、聞いたことをたいへん喜び、真理を認め、それに少し心を動かされます。それでも、その人は「罪過と罪とによって死んで」いて（エペソ二・一）、何も感じず、目覚めないままです。なぜでしょうか。その人が、胸に抱いている罪と別れようとしないからです。それが主に忌みきらわれるものだと、今は知っているのにです。その人は、情欲と汚れた欲望に満ちたまま、聞きに来ました。そして、それらと別れようとしません。ですから、その人は深い印象を受けず、その愚かな心は、なおかたくなにされたままです。すなわち、その人は、自分を捨てようとしないために、なおも何も感じず、目覚めないままでいるのです。

（三）　その人が眠りから覚め始め、目が少し開かれたとします。それなのに、どうしてその目は、こんなにすぐ再び閉じてしまうのでしょうか。なぜ、その人は再び死の眠り（詩篇一三・三）に陥るのでしょうか。その人が、再び胸に抱いている罪に屈するからです。快い毒を、再び飲むのです。ですから、その人の心に、長続きする印象が刻まれることはありえません。すなわち、その人は、自分を捨てようとしないために、命取りの無感覚に逆戻りするのです。

（四）　けれども、すべての人がこうではありません。いったん目覚めると、もう二度と眠らない人々の例も、たくさんあります。いったん受けた印象は、すり減りません。深いだけでなく、長続きするのです。それでも、そうした人々の多くは、求めているものを見いだしていません。彼らは悲しんでいるのに、慰められていません。では、なぜでしょうか。それは、彼らが「悔改めにふさわしい実を結」ばない（マタイ三・八）からです。自分の受けた恵みに応じて、「悪を離れて善をおこな」わない（詩篇三四・一四）からです。彼らは、からみつく罪（ヘブル一二・一）、すなわち、自分の体質や、受けた教育や、職業から来る罪をやめません。あるいは、自分にできる善、また、なすべきだと知っている善（ヤコブ四・一七）を、それに伴う何かの不快な事情のために怠ります。すなわち、彼らは、「自分を捨て」（ルカ九・二三）ようとせず、「自分の十字架を負」おう（ルカ九・二三）としないために、信仰に達しないのです。

（五）　けれども、この人は、確かに「天よりの賜物」（ヘブル六・四）を受けました。「きたるべき世の力」を確かに「味わった」（ヘブル六・五）のです。イエス・キリストの「顔に輝く神の栄光」（第二コリント四・六）を見ました。「人知ではとうてい測り知ることのできない」「平安」（ピリピ四・七）が、その人の「心と思いとを」（ピリピ四・七）「支配」していました（コロサイ三・一五）。そして、その人に「賜わっている聖霊によって、神の愛が」その心に「注がれて」いました（ローマ五・五）。それなのに、その人は今、ほかの人と同じように弱くなっています。その人は、再び地上のものを好み、見えないものよりも見えるもの（第二コリント四・一八）に心を引かれています。その人の心の目は再び閉ざされ、「見えないかたを見」る（ヘブル一一・二七）ことができません。その愛は冷え（マタイ二四・一二）、神の平安は、もはやその心を支配していません。それも不思議ではありません。その人は、再び悪魔に機会を与え（エペソ四・二七）、神の聖霊を悲しませた（エペソ四・三〇）からです。その人は、再び愚かさに、すなわち何かの快い罪に戻ってしまったのです。外の行いでそうしなかったとしても、心の中でそうしたのです。その人は、高ぶりや怒りや欲望に、我意や強情に、機会を与えてしまったのです。あるいは、内にいただいた神の賜物を、再び燃えたたせ（第二テモテ一・六）ませんでした。霊の怠惰に身をゆだね、「どんな時でも」「祈り、そのために目をさましてうむことがな」い（エペソ六・一八）ようにする骨折りを、しようとしなかったのです。すなわち、その人は、自己否定と、日々自分の十字架を負うことを欠いたために、信仰の破船に会った（第一テモテ一・一九）のです。

（六）　けれども、もしかすると、その人は信仰の破船には会っていないかもしれません。今もなお、子たる身分を授ける霊（ローマ八・一五）をある程度持っています。その霊は、その人が神の子であることを、その人の霊と共にあかしし続けておられます（ローマ八・一六）。それでも、その人は完全を目ざして進んではいません（ヘブル六・一）。以前のように、義に飢えかわいて（マタイ五・六）はいません。しかが谷川を慕いあえぐように（詩篇四二・一）、神のかたちのすべてと、神を十分に味わうこととを、慕いあえいではいないのです。むしろ、その人は弱り果てて意気そそうし（ヘブル一二・三）、いわば生と死の間をさまよっています。その人がこうなっているのは、神の言葉、「行いによって信仰が全うされ」る（ヤコブ二・二二）ということを忘れてしまったからではないでしょうか。その人は、神のわざを行うのに、あらゆる努力を尽くしていません。「常に祈」る（ローマ一二・一二）ことをしていません。公の祈りでも、ひそかな祈りでもそうです。聖餐にあずかること、説教を聞くこと、黙想、断食、信仰の語らいにおいても、そうです。たといこれらの手段のどれかをまったく怠っているのではないとしても、少なくとも、そのすべてを力を尽くして用いてはいません。あるいは、敬虔のわざに熱心であるのと同じようには、愛のわざに熱心ではありません。神から賜わる力（第一ペテロ四・一一）を十分に用いて、自分の力に応じてあわれみ深くあることをしていません。人々に善を行うことによって、熱心に主に仕えて（ローマ一二・一一）はいません。できる限りのあら

ゆる種類、あらゆる程度の善を、人々のからだだけでなく魂にも行うことによって、主に仕えてはいないのです。では、なぜ、その人は祈り続けないのでしょうか。かわきのときには、祈りがその人にとって苦痛であり、悲しみだからです。その人は、あらゆる機会に説教を聞き続けることをしません。眠りが快いから、あるいは、寒いから、暗いから、雨が降っているからです。では、なぜ、あわれみのわざを続けないのでしょうか。それは、飢えている人に食べさせ、裸の人に着せるには、自分の衣服の出費を切り詰めなければならないからです。あるいは、もっと安く、口に合わない食物で済ませなければならないからです。そのうえ、病人や獄にいる人々を訪ねること（マタイ二五・三六）には、多くの不快な事情が伴います。霊のあわれみのわざの多くも、そうです。とりわけ忠告がそうです。その人は、隣人に忠告しようと思います。けれども、ときには恥ずかしさが、ときには恐れが、間に入ってきます。忠告すれば、あざけりだけでなく、もっと重い不都合にも、身をさらすことになるかもしれないからです。こうした考えや、それに似た考えから、その人は、あわれみと敬虔のわざを怠ります。すべてではないとしても、その一つか、いくつかを怠るのです。ですから、その人の信仰は全うされず、恵みにおいて成長することもできません。すなわち、その人が自分を捨て、日々の十字架を負おうとしないからです。

（七）明らかに、次のことが帰結します。人が自分の主に徹底して従わず、完全にはキリストの弟子でないことがあります。それは、いつも、自己否定か、自分の十字架を負うことが欠けているためなのです。ラッパが吹き鳴らされても、罪の中に死んでいる人が目覚めないのは、このためです。眠りから覚め始めた人が、それでも深く長続きする罪の自覚を持たないのも、このためです。罪を深く長く自覚している人が罪の赦しに達しないのも、このためです。この天よりの賜物を受けた人々のある者が、それを保たずに信仰の破船に会う（第一テモテ一・一九）のも、このためです。また、ほかの人々は、たとい信仰を捨てて滅びる（ヘブル一〇・三九）ことはないとしても、弱り果てて意気そそうしています（ヘブル一二・三）。そして、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞与の目標（ピリピ三・一四）に達しません。これも、このためなのです。

【三】 いくつかの推論

（一）ここから、私たちは、何とたやすく次のことを学べることでしょう。直接にせよ間接にせよ、公にせよひそかにせよ、自己否定と日々の十字架の教理に反対する人々は、聖書も神の力も知らない（マタイ二二・二九）のです。彼らは、神の言の全体の趣旨についても、百もの個々の聖句についても、何とまったく無知なことでしょう。また、彼らは、真実で本物のクリスチャンの経験を、まったく知らないに違いありません。聖霊が、昔からいつも、また今日も、人々の魂のうちに働かれる、その働き方を知らないのです。確かに、彼らは、たいへん声高に、自信たっぷりに語るかもしれません（それは無知の自然な実です）。まるで、神の言葉か神の子らの経験を理解しているのは、自分たちだけであるかのようにです。けれども、彼らの言葉は、どの意味でもむなしい言葉です。彼らは、はかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた（ダニエル五・二七）のです。

（二）第二に、ここから、次のことの本当の原因を学ぶことができます。多くの個々の人々だけでなく、人々の団体までが、かつては燃えて輝くあかり（ヨハネ五・三五）でした。それなのに、今は光も熱も失ってしまったのです。彼らは、この尊い福音の教理を憎み、それに反対したわけではないとしても、少なくとも、それを軽んじました。彼らは、大胆にこう言いはしなかったかもしれません。Abnegationem omnem proculcamus, internecioni damus（私たちは、あらゆる自己否定を足の下に踏みにじり、それを滅びにゆだねる）それでも彼らは、この教理をその高い大切さにふさわしく重んじることもなく、それを実行するのに少しも骨折りませんでした。あの偉大な、しかし悪い人は、こう言いました。Hanc mystici docent（神秘主義の著者たちが、自己否定を教えている）いいえ、霊感を受けた著者たちが教えているのです！ そして、神は、ご自分の声を聞こうとするすべての魂に、それを教えておられるのです！

（三）第三に、ここから、次のことを学ぶことができます。福音の教役者は、自己否定の教理に反対しないだけでは、つまり、それについて何も言わないでいるだけでは十分ではありません。いや、それに好意的なことを少し言うだけ

でも、その務めを果たすことはできません。本当に、すべての人の血について責任がない（使徒二〇・二六）者でありたいなら、教役者は、それについて、しばしば詳しく語らなければなりません。その必要を、最も明らかに、最も力強く教え込まなければなりません。力を尽くして、すべての人に、いつでも、どこでも、それを強く説かなければなりません。「教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則」（イザヤ二八・一〇）と、重ねて教えなければなりません。そうすれば、その人は、良心に責められることのない状態（使徒二四・一六）を保つことができます。自分自身と、自分の言うことを聞く者たちとを救う（第一テモテ四・一六）ことになるのです。

（四） 最後に、あなたがたの一人一人が、これを自分自身の魂に当てはめるようにしなさい。ひそかなところにいるときに、これを黙想しなさい。これを心に留めて、思いめぐらしなさい（ルカ二・一九）！ これを十分に理解するだけでなく、生涯の終わりまで覚えているように気をつけなさい。強いかたに力を求めて叫びなさい。それを理解するやいなや、その実行に取りかかれるようにです。時を延ばさずに、今すぐ、まさにこのときから、それを実行しなさい！ 人生のあらゆる境遇で起こる千もの機会の一つ一つに、例外なく、それを実行しなさい！ 日々、絶え間なく、それを実行しなさい。初めて手をすきにかけた（ルカ九・六二）そのときから、最後まで耐え忍んで（マタイ一〇・二二）、あなたがたの霊が神に帰る（伝道一二・七）まで、そうしなさい！

説教四十九　悪口の治療法

「もしあなたの兄弟が」あなたに対して「罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになります。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためです。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」（マタイ一八・一五～一七）

（一）「だれをもそしらず」（テトス三・二）と、偉大な使徒は言っています。これは、「殺すな」（マタイ一九・一八）というのと同じくらい、はっきりした命令です。けれども、クリスチャンの間でさえ、だれがこの命令を重んじているでしょうか。いや、これを理解している人さえ、何と少ないことでしょう。悪口とは何でしょうか。それは、ある人々が考えているように、うそをつくことや中傷することと同じではありません。ある人の言うことが、すべて聖書のように真実であることもありえます。それでも、それを言うことが悪口なのです。というのも、悪口とは、まさに、その場にいない人について悪く言うことにほかならないからです。すなわち、ある人が実際に行い、あるいは言った悪いことを、その人がその場にいないときに話すことです。たとえば、ある人が酔っているのを見たとします。あるいは、その人がのろったり、みだりに誓ったりするのを聞いたとします。それを、その人がいないときに私が話すなら、それは悪口です。私たちの国の言葉では、これはまた、まことにふさわしい名で、「陰口」とも呼ばれています。また、これと、私たちが普通「告げ口」と呼んでいるものとの間にも、本質的な違いはありません。その話が、やわらかく静かに伝えられるとします（おそらく、その人への好意や、事態はそれほど悪くないかもしれないという希望の言葉を添えて伝えられるのです）。そのとき、私たちはそれを「ささやき」と呼びます。けれども、どのような仕方でなされても、事柄は同じです。状況においては違っても、中身においては同じなのです。やはり、それは悪口です。第三者がその場にいなくて自分を弁明できないときに、その人の過ちをほかの人に話すとします。そのときも、やはり、「だれをもそしらず」（テトス三・二）というこの命令は、足の下に踏みにじられているのです。

（二）そして、この罪は、あらゆる身分、あらゆる階層の人々の間に、何とありふれていることでしょう！　身分の高い者も低い者も、富む者も貧しい者も、何と絶えずこの罪に陥っていることでしょう。賢い者も愚かな者も、学のある者もない者も、そうなのです。ほかのあらゆる点で互いに違っている人々も、この点では一致しているのです。神の前で、次のようにあかしできる人は、何と少ないことでしょう。「私はこの事については潔白です。いつも自分の口に門守を置き、くちびるの戸を守ってきました（詩篇一四一・三）」。少しでも長い会話で、悪口がその成分の一つになっていないものを、あなたは聞いたことがあるでしょうか。しかも、次のような人々の間でさえ、そうなのです。その人々は、概して神を恐れる心を目の前に置いています。そして、神に対しても人に対しても、良心に責められることのない状態（使徒二四・一六）を保ちたいと本当に願っているのです。

（三）そして、この罪がありふれていることそのものが、この罪を避けにくくしています。私たちは、四方をこの罪に取り囲まれています。ですから、その危険を深く感じて、絶えずそれを警戒していないなら、私たちはその奔流に押し流されやすいのです。この点では、人類のほとんど全体が、いわば私たちに対して共謀しているのです。そして、人々の手本は、いつの間にか私たちに忍び寄ります。そのため、私たちは知らず知らずのうちに、それをまねるようになってしまうのです。そのうえ、この罪は、外からだけでなく内からも勧められます。人の心にある誤った気質で、ときに悪口によって満たされないものは、ほとんどありません。ですから、ほとんどどの気質も、私たちを悪口へと傾かせうるので

す。自分は犯していないと思っている他人の過ちを話すことは、私たちの高ぶりを満足させます。怒りや恨みや、あらゆる不親切な気質は、気に入らない人々を悪く言うことによって、ほしいままにされます。また、多くの場合、人々は隣人の罪を並べ立てることによって、自分自身の愚かで有害な欲望をほしいままにするのです。

（四） 悪口がいっそう避けにくいのは、それがしばしば変装して私たちを襲うからです。私たちは、高貴で寛大な（聖なる、とまで言わなければ上出来ですが）憤りから、こうした卑しい者どもに対して、このように語るのです！ 私たちは、罪をただ憎むあまりに、罪を犯すのです！ 神へのまったくの熱心から、悪魔に仕えるのです！ 悪人を罰するためだけに、私たちはこの悪に陥るのです。ある人の言うように、「情念は、こうしてみな自分を正当化」し、聖性のベールの下で、罪を私たちにつかませるのです！

（五） けれども、このわなを避ける道はないのでしょうか。疑いもなく、あります。私たちのほむべき主は、上に掲げた言葉で、ご自分に従う者たちのために、はっきりした道を示しておられます。注意深く、着実にこの道を歩む人は、だれも決して悪口に陥ることはありません。この規則は、悪口の確実な予防法であるか、あるいは確かな治療法であるかです。その前の節で、私たちの主は、「この世は、罪の誘惑があるから、わざわいです」（マタイ一八・七）と言っておられました。すなわち、この有害な泉から、言いようのない悲惨が世に生じるだろう、ということです。（「罪の誘惑」とは、人を神の道から外れさせたり、神の道で妨げたりするもの、すべてのことです。）「罪の誘惑は必ず来ます」（マタイ一八・七）。ものごとの本性とは、そういうものです。人類の邪悪と愚かさと弱さとは、そういうものなのです。「しかし、それをきたらせる人は、わざわいです」（マタイ一八・七）。そういう人は、みじめなのです。ですから、「もしあなたの片手または片足が」（マタイ一八・八）、また「片目が罪を犯させるなら」（マタイ一八・九）、「それを抜き出して」（マタイ一八・九）捨てなさい、と主は言われました。すなわち、最も大切な楽しみや、最も愛する人、最も役に立つ人であっても、あなたを道から外れさせたり、道で妨げたりするとします。そのときは、それを切り取って、あなたから捨てなさい、ということです。けれども、どうすれば、ある人々をつまずかせたり、ほかの人々につまずいたりすることを避けられるでしょうか。特に、その人々がまったく間違っていて、私たちがそれを自分の目で見ているとしたら、どうでしょうか。私たちの主は、ここで、その方法を教えておられます。主は、つまずきと悪口とを同時に避ける、確かな方法を定めておられるのです。「もしあなたの兄弟が」あなたに対して「罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになります。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためです。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」（マタイ一八・一五～一七）。

【一】 ふたりだけの所で忠告する

（一） 第一に、「もしあなたの兄弟が」あなたに対して「罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（マタイ一八・一五）。この第一の規則に従うには、それができる場合には、最も文字どおりの仕方が最善です。ですから、兄弟、すなわち仲間のクリスチャンが、否定しようのない罪を犯すのを、あなたが自分の目で見たとします。あるいは自分の耳で聞いて、その事実を疑うことができないとします。そうなら、あなたのなすべきことは、はっきりしています。最初の機会をとらえて、その人のところへ行きなさい。そして、会うことができるなら、「彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（マタイ一八・一五）。確かに、これが正しい心で、正しい仕方でなされるように、大いに気をつけなければなりません。忠告がうまくいくかどうかは、それがどんな心でなされるかに大きくかかっています。ですから、神への熱心な祈りを欠いてはなりません。忠告がへりくだった心でなされるように祈りなさい。あなたをほかの人と違ったものにしておられるのは、ただ神だけです。その深い、心を刺し通す確信をもってなされるように祈るのです。また、今語られることによって何か良いことがなされるなら、それをなさるのは神ご自身であるという確信をもってです。神があなたの

心を守り、あなたの思いを照してくださるように祈りなさい。また、神が祝福しようと思われるような言葉へと、あなたの舌を導いてくださるように祈るのです。へりくだった心だけでなく、柔和な心で語るようにしなさい。「人の怒りは、神の義を全うするものではない」（ヤコブ一・二〇）からです。その人が「罪過に陥っている」（ガラテヤ六・一）なら、「柔和な心をもって」（ガラテヤ六・一）しなければ、その人を正すことはできません。その人が真理に反対しているとしても、穏やかさによらなければ、その人に真理を知らせることはできません。いつも、優しい愛の心で語りなさい。「大水も消すことができない」（雅歌八・七）愛の心で語るのです。愛は、打ち負かされなければ、すべてのものを打ち負かします。だれが愛の力を言い表すことができるでしょうか。

愛は、かたくなな首をかがめさせ、
石を肉に変える。
やわらげ、溶かし、刺し通し、砕く、
金剛石のような心をも。

ですから、その人への愛を確かなものにしなさい。そうすれば、あなたはそれによって、「彼の頭に燃えさかる炭火を積む」（ローマ一二・二〇）ことになります。

（二）　けれども、あなたが語る仕方もまた、キリストの福音にかなうようにしなさい。顔つき、身ぶり、言葉、声の調子で、高ぶりやうぬぼれを感じさせるものは、すべて避けなさい。権威ぶったものや独断的なもの、横柄や出過ぎに見えるものは、すべて努めて避けなさい。軽蔑や威圧や侮りに、少しでも近づくことのないように気をつけなさい。同じように注意して、怒りと見えるものは、すべて避けなさい。たいへん率直に語るとしても、責める言葉や、ののしりの非難があってはなりません。愛の熱のほかには、どんな熱のしるしもあってはならないのです。何よりも、憎しみや悪意の影があってはなりません。言い方に苦さやとげとげしさがあってもなりません。穏やかさだけでなく、やさしさのある態度と言葉を用いなさい。すべてが心の愛から流れ出ていることが、明らかになるようにするためです。けれども、このやさしさがあるからといって、最も真剣に、おごそかに語ることが妨げられるわけではありません。できる限り、神の言（ローマ三・二）にある言葉そのままで語りなさい（それに並ぶ言葉はないからです）。そして、生きている者と死んだ者とをさばくために来られるかた（第二テモテ四・一）の目の前にいるように語りなさい。

（三）　その人に直接会って話す機会がないか、会うことができないなら、使いの者を通してそうしてもかまいません。あなたとその人との共通の友人で、正しさだけでなく思慮深さについても、あなたが十分に信頼できる人を通してです。そのような人があなたの名によって、上に述べた心と仕方で語るなら、同じ目的を果たすことができます。そして、あなたが奉仕のできなかった分を、かなりの程度まで補ってくれる（ピリピ二・三〇）でしょう。ただ、十字架を避けるために、機会がないふりをしないように気をつけなさい。また、一度も試みないで、会うことはできないと決めてかかってもいけません。自分で直接語ることができるなら、そのほうがはるかに良いのです。けれども、まったくしないよりは、むしろほかの人を通してするべきです。この方法でも、何もしないよりは良いのです。

（四）　けれども、自分で語ることもできず、信頼できるような使いの者も見つからないなら、どうでしょうか。本当にそうなら、あとは手紙を書くことだけが残ります。そして、事情によっては、これが最も勧められる語り方になることもあります。その事情の一つは、相手の人がたいへん激しやすく性急な気質で、忠告に容易に耐えられないときです。特に、同等の人や目下の人からの忠告には耐えられないときです。けれども、手紙でなら、忠告の切り出し方を工夫し、やわらげることで、ずっと受けいれやすいものにすることができます。そのうえ、多くの人は、聞くことには耐えられないまったく同じ言葉でも、読むことはするものです。手紙は、その人の高ぶりにそれほど激しい衝撃を与えませんし、その人の体面をそれほど強く傷つけることもないのです。また、最初はほとんど印象を与えなかったとします。それでも、その人は、おそらくもう一度読み返すでしょう。そして、さらによく考えて、前には顧みなかったことを心に留めるでしょう。あなたの名前を書き添えるなら、それはその人のところへ行って直接話すのとほとんど同じことです。そして、何かよほど特別な理由でふさわしくない場合でない限り、名前はいつも書き添えるべきです。

（五）　次のことをよく心に留めておくべきです。これは、私たちの主が、私たちに踏むように絶対的に命じておられる段階です。それだけでなく、ほかのどんな段階を試みる前にも、まずこの段階を踏むように命じておられるのです。ほかのやり方は許されていません。ほかの何かを選ぶこともできません。これが道であり、これに歩みなさい（イザヤ三〇・二一）、というのです。確かに、主は、必要があれば、ほかの二つの段階を踏むようにも命じておられます。けれども、それはこの段階のあとに順を追って踏むべきもので、どちらもこの段階より前に踏んではなりません。まして、この段階より前に、あるいはこの段階のほかに、別の段階を踏むことなど許されていないのです。ですから、ほかの何かをすることも、これをしないことも、等しく弁解の余地がないのです。

（六）　まったく別の段階を踏んだことを、次のように言って弁解しようと思ってはなりません。「いや、私は重荷に耐えかねて黙っていられなくなるまでは、だれにも話さなかったのだ」。重荷を感じた、というのですか！　良心が麻痺していない限り、あなたが重荷を感じたのは不思議ではありません。あなたは、罪の罪責、すなわち神の明白な戒めに背いた罪責の下にあったからです。あなたは、すぐに行って、あなたの兄弟に「彼とふたりだけの所で忠告」（マタイ一八・一五）するべきだったのです。もしそうしなかったなら、どうして重荷を感じないでいられたでしょうか（心がまったくかたくなになっていたのなら別ですが）。あなたは、神の命令を足の下に踏みにじり、「心に兄弟を憎んで」（レビ記一九・一七）いたのですから。それに、あなたは何という方法で重荷を下ろしたのでしょうか。神は、怠りの罪について、すなわち兄弟に過ちを忠告しなかったことについて、あなたを責めておられます。それなのに、あなたは、行いの罪によって、神の責めのもとにある自分を慰めているのです。すなわち、兄弟の過ちをほかの人に話すことによってです。罪によって買った安らぎは、高くつく買い物です！　私は神にあって、こう信じています。あなたは、兄弟のところに「行って」、ほかのだれでもなく、その兄弟に「忠告」する（マタイ一八・一五）までは、安らぎを得ないでしょう。かえって、ますます重荷を感じるでしょう。

（七）　この規則の例外を、私は一つだけ知っています。罪のない人を守るために、罪を犯した人を、その人がいなくても訴えなければならない、特別な場合がありうるのです。たとえば、ある人が隣人の財産やいのちをねらってたくらんでいることを、あなたが知っているとします。その場合、事情によっては、そのたくらみが実行されるのを防ぐ方法が、ほかにないこともありえます。ねらわれている人に、それを遅れずに知らせるほかにはないのです。ですから、この場合には、この規則はわきに置かれます。「だれをもそしらず」（テトス三・二）という使徒の規則も同じです。そして、その場にいない人について悪く言うことが許されます。いや、それは私たちの当然の義務なのです。その人が、ほかの人々と自分自身とに同時に悪を行うのを防ぐためです。けれども、そのときにも、すべての悪口は、それ自体の性質において命取りの毒であることを覚えていなさい。ですから、ときにやむをえず、それを薬として用いなければならないとしても、恐れおののいて（ピリピ二・一二）用いなさい。それはたいへん危険な薬なので、絶対的な必要のほかには、それを用いることを弁解できるものは何もないからです。したがって、できるだけまれにしか用いてはなりません。そのような必要があるときのほかは、決して用いてはなりません。そして、そのときでさえ、できるだけ少なく、目指す目的に必要なだけ用いなさい。そのほかのときにはいつも、「行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（マタイ一八・一五）。

【二】　ひとりふたりを一緒に連れて行く

（一）　けれども、「もし聞いてくれないなら」（マタイ一八・一六）、どうでしょうか。その人が悪をもって善に報いる（詩篇三五・一二）なら、どうでしょうか。罪を認めるよりも、むしろ激しく怒るなら、どうでしょうか。聞いてもむだで、なおもその悪い道を歩み続けるなら、どうでしょうか。しばしばそうなることを、私たちは覚悟しなければなりません。最も穏やかで優しい忠告も、何の効果もないことがあるのです。けれども、私たちがほかの人のために願った祝福は、私たち自身のふところに返って来るのです。では、そのとき私たちはどうすべきでしょうか。私たちの主は、明確で十分な指図を与えておられます。そのときは、「ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい」（マタイ一八・一六）。これが第二の段階です。愛の心を持ち、神と隣人とを愛していると、あな

たが知っている人を、ひとりかふたり連れて行きなさい。同じように、その人たちが、へりくだった心を持ち、「謙遜を身につけ」（第一ペテロ五・五）ている人であるようにしなさい。また、柔和で優しく、忍耐強く、寛容な人であるようにしなさい。「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報い」る（第一ペテロ三・九）人であるようにしなさい。その人たちは、上からの知恵（ヤコブ三・一七）を授けられた、分別のある人でなければなりません。また、かたよらず、えこひいきのない、どんな種類の偏見もない人でなければなりません。同じように、その人たち自身もその人柄も、相手によく知られているように気をつけるべきです。そして、ほかのだれよりも、相手が受けいれやすい人を選びなさい。

（二） その人たちがどのように事を運ぶべきかは、事の性質に応じて、愛が指図してくれるでしょう。すべての場合に当てはまる一つの特定の仕方を、定めることはできません。けれども、一般には、おそらく次のように勧めることができるでしょう。その人たちは、事柄そのものに取りかかる前に、穏やかに、愛情をこめて、こう言い表すとよいのです。自分たちは相手に対して何の怒りも偏見も持っていない、と。また、今やって来たのも、相手の事柄に少しでもかかわるのも、ただ好意という動機からなのだ、と。このことをいっそう明らかにするために、その人たちは、何かを判断しようとする前に、落ち着いて耳を傾けるとよいでしょう。あなたが前にその人と交わした話を繰り返すのを聞き、その人が自分を弁護して言ったことを聞くのです。そのあとでなら、その人たちは、どのように事を運ぶべきかを、よりよく判断できるでしょう。こうするのは、「ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるため」（マタイ一八・一六）です。すなわち、あなたの言ったことが何であれ、その人たちの権威の重みが加わって、十分な力を持つようになるためです。

（三） そのために、その人たちは、次のようにしてはどうでしょうか。

一、あなたが語ったことと、相手が答えたことを、手短に繰り返す。

二、あなたが示した理由を、詳しく述べ、説き明かし、裏づける。

三、あなたの忠告がどれほど正しく、親切で、時宜にかなっていたかを示して、その忠告に重みを加える。

最後に、あなたが忠告に添えた助言と説得に、さらに力を添える。また、この人たちは、必要があれば、のちに、語られたことについてあかしすることもできるでしょう。

（四） 前の規則と同じく、この規則についても、次のことに気づきます。私たちの主は、私たちに選択の余地を与えず、ほかのやり方を残しておられません。これを行い、その代わりにほかの何も行わないように、はっきりと命じておられるのです。主はまた、これをいつ行うべきかも指図しておられます。早すぎても遅すぎてもいけません。すなわち、第一の段階を踏んだあとで、第三の段階を踏む前に行うのです。そのときにだけ、私たちは、ほかの人が行った悪を、ある人々に話すことを許されています。兄弟愛のこの大切な実践で、私たちと共に役割を担ってほしいと願う人々に話すのです。けれども、この二つの段階を両方とも踏むまでは、ほかのだれかにそれを話すことのないように気をつけましょう。この二つの段階を踏むのを怠るか、ほかの段階を踏むとします。そうなら、私たちがなお重荷を感じるとしても、何の不思議があるでしょうか。私たちは、神に対しても隣人に対しても罪を犯している者だからです。私たちがそれをどれほどうまく取りつくろっても、少しでも良心があるなら、私たちの罪は必ず身に及びます（民数記三二・二三）。そして、私たちの魂に重荷を負わせるのです。

【三】 教会に申し出る

（一） この重大な事柄について、私たちが十分に教えられるように、私たちの主は、さらにもう一つの指図を与えておられます。「もし彼らの言うことを聞かないなら」（マタイ一八・一七）、そのときに、そのときになって初めて、「教会に申し出なさい」（マタイ一八・一七）。これが第三の段階です。ただ問題は、この「教会」（マタイ一八・一七）という言葉を、ここでどう理解すべきかです。けれども、事柄の性質そのものが、どんな理にかなった疑いも入れないほどに、これを決めてくれるでしょう。あなたは、国の教会に、すなわち「英国国教会」と呼ばれる人々の団体全体に、申し出ることはできません。また、たといできたとしても、それは何のキリスト教的な目的にもかなわないでしょう。ですか

ら、これはこの言葉の意味ではありません。また、あなたは、イングランドで、あなたがもっと直接につながっている人々の団体全体に申し出ることもできません。実際、これも何の良い目的にもかなわないでしょう。ですから、この言葉は、そのようには理解すべきではありません。また、ロンドンで結び合わされている会衆や会に、つまり（そう呼びたければ）教会に、一人一人の会員の過ちを申し出るとします。それも、何の価値ある目的にもかなわないでしょう。残るのは、あなたが教会の長老に、あるいは長老たちに申し出ることです。すなわち、あなたがたふたりが属しているキリストの群れの監督者（使徒二〇・二八）である人々に申し出るのです。その人々は、「言いひらきをすべき者として」（ヘブル一三・一七）、あなたの魂とその人の魂とを見守っています。そしてこれは、都合がつくなら、当人のいるところで行うべきです。また、はっきりとではあっても、事柄の性質が許す限りの優しさと愛とをもって行うべきです。自分たちの世話を受けている人々のふるまいについて判断することは、本来、その人たちの職務に属しています。その過ちの重さに応じて、十分な「権威をもって」（テトス二・一五）責めることも、そうです。ですから、これを行ったなら、あなたは、神の言葉、あるいは愛の律法があなたに求めることを、すべて行ったのです。あなたは、もはやその人の罪に加わる者（第一テモテ五・二二）ではありません。もしその人が滅びるなら、その血はその人自身のこうべに帰する（エゼキエル三三・四）のです。

（二） ここでもまた、次のことに注意しましょう。私たちが踏むべき第三の段階はこれであって、ほかの段階ではありません。そして、私たちはこれを、ほかの二つの段階のあとに、順序どおり踏まなければなりません。何かよほど特別な事情のない限り、第二の段階より前に踏んではなりません。まして、第一の段階より前に踏んではならないのです。確かに、ある場合には、第二の段階がこの段階と重なることがあります。二つが、ある意味で、一つの同じものになりうるのです。教会の長老、あるいは長老たちが、罪を犯した兄弟と深いつながりを持っていることがあります。そのときは、ひとりかふたりの証人を立てる必要がなくなり、長老がその代わりをすることもあるでしょう。そうなら、あなたが兄弟に「ふたりだけの所で」（マタイ一八・一五）忠告したあとで、長老たちに申し出るだけで十分なこともあるでしょう。

（三） これを行ったなら、あなたは自分の魂を救ったのです。「もし教会の言うことも聞かないなら」（マタイ一八・一七）、すなわち、その人が罪を犯し続けるなら、「その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」（マタイ一八・一七）。あなたは、もうその人のことを考える義務はありません。ただ、祈りの中でその人を神にゆだねるときだけは別です。もうその人について話す必要もありません。その人を、その人自身の主人にゆだねなさい。確かに、あなたはなおも、ほかのすべての異邦人に対するのと同じように、その人に対しても、真剣で優しい好意を負っています。その人に礼儀を尽くし、機会があれば、人としてのあらゆる務めを果たす責任があります。けれども、その人と親しく交わったり、なれなれしくしたりしてはなりません。公然の異邦人と付き合う以上の付き合いをしてはならないのです。

（四） けれども、これがクリスチャンの歩む規則だとすれば、クリスチャンの住んでいる国は、どこにあるのでしょうか。この規則を守ることを良心の務めとしている人々を、あちこちにわずかに見つけることは、あるいはできるかもしれません。けれども、何と少ないことでしょう！ 何とまばらに、地の面に散らばっていることでしょう！ また、この規則によって例外なく歩んでいる人々の団体が、どこにあるでしょうか。ヨーロッパに見いだせるでしょうか。あるいは、それほど遠くへ行かなくても、グレートブリテンやアイルランドに見いだせるでしょうか。見いだせないのではないかと思います。この国々を隅々まで探しても、むなしく探すことになるのではないかと、私は恐れます。キリスト教世界は、何と嘆かわしいことでしょう！ プロテスタントは、改革派のクリスチャンは、何と嘆かわしいことでしょう！ ああ、「だれが私と共に立ちあがって、悪しき者に逆らうでしょうか」。悪口を言う者たちに逆らって、「だれが神の側に立つでしょうか」。あなたがその人でしょうか。神の恵みによって、あなたは、奔流に押し流されない者になるでしょうか。あなたは、神に助けられて、まさにこのときから見張りを置こうと、固く決心しているでしょうか。絶えず「口に門守を置いて、くちびるの戸を守」ろう（詩篇一四一・三）と決心しているでしょう

か。このときから、あなたは、「だれをもそしらず」（テトス三・二）というこの規則によって歩むでしょうか。兄弟が悪を行うのを見たら、あなたは「彼とふたりだけの所で忠告」（マタイ一八・一五）するでしょうか。その後に、「ひとりふたり」（マタイ一八・一六）の証人を連れて行き、それから初めて「教会に申し出」る（マタイ一八・一七）でしょうか。これがあなたの心の固い決意なら、一つの教訓をよく学びなさい。「だれの悪口も聞くな」ということです。悪口を聞く者がいなければ、悪口を言う者もいなくなるでしょう。それに、（俗なことわざにあるように）盗品を受け取る者は、盗人と同じく悪いのではないでしょうか。ですから、だれかがあなたの聞いているところで悪口を言い始めたら、すぐにその人を止めなさい。まじない師が、たとい、どれほど甘く呪文を唱えても、その声を聞くのを拒みなさい。その人が、どれほどやわらかな態度、どれほど穏やかな口調を用いても、かまいません。暗やみで刺している相手、第五のあばら骨の下を打っている相手への好意を、どれほど言い表しても、かまいません。ささやく者が、「話すまでは重荷でたまらない」とこぼしても、断固として聞くのを拒みなさい。重荷だ、というのですか！　愚か者よ！　あなたは、女が子を産むときのように、その呪われた秘密を抱えて産みの苦しみをしているのですか。それなら、行って、主が定められた方法で、その重荷を産み落としなさい。まず、あなたの兄弟のところに「行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい」（マタイ一八・一五）。次に、共通の友人「ひとりふたりを、一緒に連れて行」き（マタイ一八・一六）、その人たちのいるところで兄弟に話しなさい。この二つの段階のどちらも効果がなければ、そのときに「教会に申し出なさい」（マタイ一八・一七）。けれども、その前にもあとにも、ほかのだれにも話してはなりません。話せば、あなたの魂が危うくなるのです。例外は、あの一つの場合、すなわち罪のない人を守るためにどうしても必要な場合だけです。どうして、ほかの人をあなたの罪に加わる者（第一テモテ五・二二）にして、自分だけでなくその人にまで重荷を負わせるのですか。

（五）　あなたがたは、キリストのそしり（ヘブル一一・二六）を身に負い、あざけってメソジストと呼ばれています。ああ、そのあなたがたすべてが、少なくともこの一つの点で、いわゆるキリスト教世界に手本を示してくれたらよいのですが。悪口も、告げ口も、ささやきも、捨て去りなさい。そのどれも、あなたがたの口から出してはなりません（エペソ四・二九）。「だれをもそしら」ない（テトス三・二）ようにしなさい。その場にいない人については、良いことのほかは何も言わないようにしなさい。あなたがたが、望むと望まないとにかかわらず、ほかの人々と区別されずにはいられないとします。それなら、これをメソジストの目じるしにしなさい。「彼は、陰でだれをも非難しない。この実によって、あなたがたは彼を見わけることができる（マタイ七・二〇）」。この自己否定の何と祝福された結果を、私たちはすぐに心に感じることでしょう。私たちがこうして「すべての人と相和」す（ヘブル一二・一四）とき、私たちの「平安は川のように」（イザヤ四八・一八）流れることでしょう。私たちがこうして兄弟たちへの愛を確かなものにするとき、私たち自身の魂の中で、神の愛が何と満ちあふれることでしょう。そして、主イエスの名によって結び合わされているすべての人々に、それは何という結果をもたらすことでしょう。兄弟愛のこの大きな妨げが取り除かれたら、兄弟愛は何と絶えず増し加わることでしょう。そのとき、キリストの神秘のからだのすべての肢体は、自然に互いにいたわり合う（第一コリント一二・二五）でしょう。「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ」（第一コリント一二・二六）ようになるでしょう。そして、だれもが自分の兄弟を、清い「心から熱く」（第一ペテロ一・二二）愛するでしょう。それだけではありません。これは、粗野で無思慮な世に対してさえ、何という結果をもたらすことでしょう。世の人々は、自分たちの何千という兄弟たちの間に見いだせなかったものを、何とすぐに私たちのうちに見つけることでしょう。そして、（背教者ユリアヌスが異教の廷臣たちに向かってしたように）「見よ、このクリスチャンたちが、どれほど互いに愛し合っているかを」と叫ぶことでしょう。神は、主としてこのことによって世を悟らせ、世の人々をもご自分の御国に備えてくださるでしょう。私たちの主の最後のおごそかな祈りにある、あの注目すべき言葉から、それはたやすく学ぶことができます。「わたしを信じている人々のために、お願いいたします」（ヨハネ一七・二〇）。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります」

（ヨハネ一七・二一）。「あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」（ヨハネ一七・二一）。主がそのときを早めてくださいますように！　主が私たちに、このように互いに愛し合うことができるようにしてくださいますように。「言葉や口先だけで」（第一ヨハネ三・一八）なく、「行いと真実とをもって」（第一ヨハネ三・一八）愛し合えるようにです。キリストが私たちを愛してくださったように（エペソ五・二）、愛し合えるようにです。

説教五十　富の使い方

「あなたがたに言います。不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくりなさい。そうすれば、あなたがたのいのちが尽きるとき、彼らがあなたがたを永遠のすまいに迎えてくれます」（ルカ一六・九）

（一）　私たちの主は、放蕩息子の美しいたとえを語り終えられました。このたとえは、主が取税人や罪人を受け入れられることにつぶやいていた人々に、特に向けられたものでした。主は続けて、種類の違う話をもう一つ加えられます。こちらはむしろ、神の子供たちに向けられた話です。主は、それまで話しておられた律法学者やパリサイ人よりも、むしろ「弟子たちに言われ」ました。「ある金持のところにひとりの家令がいましたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ口をする者がありました。そこで主人は彼を呼んで言いました。『あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから』」（ルカ一六・一～二）。主は、不正な家令が困窮の日に備えて取った手段を語られたあと、こう付け加えられます。「主人は、この不正な家令の利口なやり方をほめました」。ほめられたのは、時を逃さずに備えたという点です。さらに主は、重みのある言葉を添えられます。「この世の子らはその時代に対しては、光の子らよりも利口です」（ルカ一六・八）。この世のほかに何の分け前も求めない人々が、「利口」だと言われています。無条件にそうだというのではありません。彼らはひとり残らず、天下で最も愚かな者、最もひどく狂った者だからです。けれども、「その時代に対しては」、つまり彼らなりのやり方では利口なのです。彼らは光の子らよりも首尾一貫しています。自分が認めている原則に、より忠実です。目的を、よりたゆまず追い求めます。こうして彼らは「光の子らよりも」利口なのです。光の子らとは、「キリストの顔に輝く神の栄光」の光を見る人々のことです（第二コリント四・六）。それから、先に掲げた言葉が続きます。「あなたがたに言います」と言われるのは、神のひとり子です。天と地とその中にあるすべてのものの創造主であり、主であり、所有者である方です。すべての者の審判者です。あなたがたは、「もう家令をさせて置くわけにはいかない」と言われるとき、この方に「会計報告を出」さなければなりません（ルカ一六・二）。その方が言われます。この点では、不正な家令からさえ学びなさい。賢く時を逃さずに備えて、「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつく」りなさい（ルカ一六・九）。「富」（マモン）とは、財産や金銭のことです。これが「不正の富」と呼ばれるのは、不正なしかたで得られることが多いからです。また、正直に得たものでさえ、たいていは不正なしかたで使われるからです。この富で「友だちをつく」るとは、できるかぎりの善を、とりわけ神の子供たちに行うことです。「あなたがたのいのちが尽きるとき」とは、ちりに帰り、もはや日の下に居場所がなくなるときのことです。そのとき、先に逝った友だちが「あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれ」ます。喜んで迎え入れてくれるのです。

（二）　私たちの主はここで、すべての弟子に、クリスチャンの知恵のすぐれた一分野を説いておられます。それは金銭の正しい使い方です。世の人々は彼らなりのしかたで、この題目を盛んに論じてきました。けれども、神がこの世から選び出された人々は、十分に考えてきませんでした。この人々はたいてい、このすぐれたタラントの使い方を、題目の重要さにふさわしいほどには考えていません。また、それを最も有益に用いる方法もわかっていません。そもそも、金銭がこの世にもたらされたこと自体が、神の賢く恵み深い摂理を示す見事な一例なのです。じっさい、ほとんどあらゆる時代と国で、詩人や雄弁家や哲学者は金銭をののしってきました。金銭は世を堕落させる張本人、美徳をむしばむ毒、人間社会の疫病だというのです。ですから、次の句ほどよく耳にするものはありません。

Nocens ferrum, ferroque nocentius aurum.（鉄は害をなす。だが金は鉄よりもさらに害をなす）

そこから、こんな嘆きも聞かれます。

Effodiuntur opes, irritamenta malorum.（富が掘り出される。あらゆる悪へと誘うものが）

それどころか、ある名高い著作家は、すべての悪徳を一挙に追い払うために、「金銭を残らず海に投げ捨てよ」と、真顔で同胞に勧めています。

in mare proximum ... Summi materiem mali!（最寄りの海へ、最大の悪のもとを！）

しかし、これはみな空虚な大言壮語にすぎないのではないでしょうか。そこに確かな根拠があるでしょうか。決してありません。世がどれほど腐敗していようと、その責めは金や銀にあるでしょうか。私たちが知っているとおり、「金銭を愛することは、すべての悪の根です」（第一テモテ六・一〇）。けれども、金銭そのものが悪の根なのではありません。非は金銭にではなく、それを使う人にあります。金銭は悪く使われることがあります。けれども、悪く使われえないものがあるでしょうか。金銭は同じように、良く使うこともできます。最悪の用途にも、最善の用途にも、まったく同じように役立ちます。文明の開けたすべての国で、日常生活のあらゆることに、言い尽くせないほど役立っています。金銭は、あらゆる取引を行うための最も手軽な道具です。また（クリスチャンの知恵に従って使うなら）あらゆる善を行うための最も手軽な道具でもあります。確かに、人が無垢の状態のままであったなら、金銭はいらなかったでしょう。また、すべての人が「聖霊に満たされ」るなら（使徒四・三一）、金銭はいらなくなるでしょう。生まれたばかりのエルサレム教会のようになるからです。そこでは「だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく」（使徒四・三二）、「それぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられ」ました（使徒四・三五）。天に住む者たちの間に、金銭のようなものがあるとは考えられないのと同じです。けれども、人類の今の状態では、金銭は神のすぐれた賜物であり、最も崇高な目的にかなうものです。神の子供たちの手にあれば、金銭は飢えた者の食べ物、渇いた者の飲み物、裸の者の着物になります。旅人や寄留者に、まくらする所を与えます。金銭によって、私たちはやもめには夫の、みなしごには父の代わりになれます。しいたげられる者の守りとなれます。病気の者には健康を、痛みに苦しむ者には安らぎを得させる手段となれます。金銭は、目の見えない人の目となり、足の不自由な人の足となります。そうです、死の門から引き上げるものにさえなるのです！

（三）　ですから、神を恐れる人がみな、この貴重なタラントの用い方を知ることは、何より大切です。どうすればそれがこの栄光ある目的に、しかも最高の程度にかなうのかを、教えられることが大切です。そのために必要な教えは、おそらくすべて、三つのわかりやすい原則にまとめられるでしょう。それを厳密に守るなら、私たちは「不正の富」の忠実な管理人であることを示せます（ルカ一六・九）。

【一】　大いに獲得しなさい

（一）　第一の原則は（聞く者は悟りなさい！）、「大いに獲得しなさい」です。ここでは、私たちも世の子らと同じように語れます。彼らの土俵で彼らと向き合うのです。そうすることは、私たちの当然の義務です。得られるかぎりを得るべきです。ただし、金を高く買いすぎてはなりません。金の値打ち以上の代価を払ってはなりません。してはならないことは、はっきりしています。いのちを犠牲にして金銭を得てはなりません。また、（実際には同じことですが）健康を犠牲にして得てもなりません。ですから、どれほどの利益があっても、体を損なうような仕事に就いたり、とどまったりしてはなりません。仕事の性質によってそうなるものも、労働があまりに厳しく長いためにそうなるものも同じです。また、体の求めるだけの食事と睡眠を、適切なときに取れなくする仕事も、始めたり続けたりしてはなりません。もっとも、この点では仕事によって大きな違いがあります。ある種の仕事は、完全に、まったく健康に悪いものです。ヒ素や、それと同じほど有害な鉱物を多く扱う仕事がそうです。溶けた鉛の蒸気で汚れた空気を吸う仕事もそうです。これらは、どれほど丈夫な体もやがては必ず損ないます。ほかに、だれにとっても健康に悪いわけではなく、体の弱い人にだけ悪い仕事もあります。長い時間を書きものに費やさなければならない仕事がそうです。特に、座って書く人が腹を机に押しつけて前かがみになったり、無理な姿勢を長く続けたりする場合はそうです。理性や経験から見て、健康や体力を損なうとわ

かるものには、何であれ身をゆだねてはなりません。「命は食物にまさり、からだは着物にまさる」からです（マタイ六・二五）。もうそのような仕事に就いているなら、できるだけ早く、ほかの仕事に替えるべきです。収入は減っても、健康は損なわない仕事にです。

（二）第二に、体と同じように心も損なうことなく、大いに獲得しなさい。心もまた損なってはならないからです。何としても、健やかな精神を保たなければなりません。ですから、罪深い商売、神の律法や国の法律に反する商売を、始めたり続けたりしてはなりません。王の正当な関税を奪ったり、ごまかしたりせずには成り立たない商売は、みなそうです。王の権利をごまかすのは、同じ臣民から盗むのと少なくとも同じくらい罪深いからです。私たちが自分の家や衣服に対して持っている権利と同じだけの権利を、王は関税に対して持っています。ほかにも、それ自体はどれほど罪のないものでも、今では、少なくともイングランドでは、罪を犯さずには営めない商売があります。たとえば、ごまかしや嘘によらなければ、相応の暮らしを立てられない商売です。正しい良心と相いれない慣習に従わなければ、暮らしが成り立たない商売もそうです。これらも固く避けなければなりません。その商売の慣習に従えば、どれほどの利益が伴うとしてもです。金銭を得るために、自分の魂を失ってはならないからです。さらにほかにも、多くの人が体も心も損なわずに、まったく罪なく営んでいる仕事があります。けれども、あなたにはそれができないかもしれません。その仕事のために、あなたの魂を滅ぼすような仲間と関わらざるをえなくなるかもしれません。何度か試してみて、その仕事とその仲間とを切り離せないとわかることもあるでしょう。あるいは、あなたの魂に特異な体質があるのかもしれません。多くの人の体に特異な体質があるのと同じです。そのために、ほかの人なら安全に営める仕事が、あなたには命取りになることがあります。私自身、何度も試してみて確信していることがあります。数学や算術や代数を少しでも深く究めようとすれば、私は無神論者にならないまでも、理神論者になってしまうのです。ところが、ほかの人は一生これらを学んでも、何の害も受けないかもしれません。ですから、この点では、だれもほかの人のために決めることはできません。各自が自分で判断し、自分の魂に害があるとわかったものは何であれ、控えなければなりません。

（三）第三に、隣人を損なうことなく、大いに獲得しなさい。自分自身のように隣人を愛しているなら（マタイ二二・三九）、隣人を損なってはなりませんし、損なうこともできません。すべての人を自分自身のように愛しているなら、だれの財産も損なうことはできません。賭け事によって、隣人の土地の収益を、ことによると土地や家そのものまでも食いつぶすことはできません。法外な請求書によってもできません。医療費であれ、訴訟費用であれ、ほかの何であれ同じです。国の法律でさえ禁じているほどの利息を求めたり受け取ったりして、食いつぶすこともできません。これによって、質屋業はすべて除外されます。それによってどんな善がなされうるとしても、その善ははるかに大きな悪に打ち消されています。偏見のない人はみな、それを悲しみをもって認めています。たとえそうでなかったとしても、私たちは「善をきたらせるために」悪を行うことを許されていません（ローマ三・八）。兄弟愛と矛盾せずに、相場より安く品物を売ることはできません。自分の商売を伸ばすために、隣人の商売をつぶそうと図ることもできません。まして、隣人に必要な召使いや職人を誘い出したり、雇い入れたりすることはできません。隣人の財産を飲み込んで利益を得る者は、だれでも地獄の刑罰をも得ることになります！

（四）また、隣人の体を損なって利益を得てもなりません。ですから、健康を損なうものを売ってはなりません。とりわけ、あの液体の火がそうです。一般に火酒とか蒸留酒とか呼ばれているものです。確かに、これらは医薬として用いられることがあり、ある種の体の不調には役立つかもしれません。もっとも、医者の腕が未熟でなければ、それが必要になることはめったにないでしょう。ですから、もっぱら医療のためにこれを造り、売る人は、良心を清く保てます。けれども、そういう人はどこにいるでしょうか。もっぱら医療のためにこれを造って売る人が、いるでしょうか。そのような蒸留業者を、イングランドで十人でも知っていますか。それなら、その人たちは責めないでおきましょう。けれども、ふつうのやり方で、買う者にはだれにでもこれを売る人々は、みな無差別に毒を盛る者です。彼らは国王陛下の臣民を、まとめて大量に殺しています。その目は惜しむことも、あわれむこともありません。彼らは人々を、羊のように地獄へ追いやります。では、彼らの利益とは何でしょうか。この人々の血ではないでしょ

うか。それなら、だれが彼らの広い地所や豪華な邸宅をうらやむでしょうか。そのただ中には呪いがあります。神の呪いが、その石にも、材木にも、家具にもまといついています。神の呪いが、その庭にも、散歩道にも、木立にもあります。それは地獄の底にまで燃え行く火なのです。血です。そこには血があります。土台も、床も、壁も、屋根も、血に染まっています！　血を流す人よ、あなたは「緋の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮して」いるかもしれません（ルカ一六・一九）。けれども、その血の畑を三代目まで譲り渡せると望めるでしょうか。そうはいきません。天には神がおられるからです。ですから、あなたの名はまもなく根絶やしにされます。あなたが体も魂も滅ぼした人々と同じように、「あなたの記憶はあなたと共に消えうせる」のです（詩篇九・六）。

（五）　では、程度はより軽いとしても、同じ罪責にあずかっている人々がいるのではないでしょうか。外科医であれ、薬剤師であれ、内科医であれ、自分の利益を増やすために、人のいのちや健康をもてあそぶ人々です。すぐに取り除けるはずの痛みや病気を、わざと長引かせる人々です。患者の財産をかすめ取るために、その体の治療を引き延ばす人々です。あらゆる病気を「できるかぎり」短くし、あらゆる病と痛みを「できるかぎり早く」取り除こうとしない人が、神の前に潔白でいられるでしょうか。いられません。その人が「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という戒めを守っていないことは（マタイ二二・三九）、何よりも明らかだからです。「人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりに」していないことも明らかです（マタイ七・一二）。

（六）　これは高くついた利益です。隣人の魂を損なって得たものも、すべてそうです。たとえば、直接にであれ間接にであれ、隣人の不品行や不節制に手を貸して得たものです。神を少しでも恐れ、神に喜ばれたいと本当に願う人なら、決してそんなことはできません。居酒屋、飲食店、オペラハウス、劇場など、流行の娯楽のための公共の場所があります。そうした所に何らかの関わりを持つ人はみな、このことをよく考える必要があります。それは身に迫った問題なのです。これらが人の魂に益となるなら、あなたは潔白です。あなたの仕事は良いものです。その利益は罪のないものです。けれども、それ自体が罪深いものであるかもしれません。さまざまな罪へとおのずから通じる入口であるかもしれません。そうであれば、おそらく、あなたはつらい申し開きをすることになるでしょう。ああ、気をつけなさい。かの日に、神がこう言われないように。「彼らは自分の悪のために死にました。しかしその血を私はあなたの手から求めます」（エゼキエル三・一八）。

（七）　これらの注意と制限を守ったうえで、世の仕事に携わる人はみな、金銭についてのクリスチャンの知恵の第一の大原則を守る義務があります。「大いに獲得しなさい」。正直に勤勉に働いて、大いに獲得しなさい。自分の職業に、できるかぎりの勤勉を尽くしなさい。時間を少しもむだにしてはなりません。自分自身を知り、神と人に対する自分の関係を理解しているなら、余分な時間などないとわかるはずです。自分に与えられた職業をしかるべく理解しているなら、時間をもてあますことはないでしょう。どんな仕事にも、毎日、毎時間を満たすだけのなすべきことがあります。あなたの置かれている職業に本気で取り組むなら、くだらない無益な娯楽にふける暇はありません。あなたにはいつも、もっとよい、なすべきことがあります。多かれ少なかれ自分の益になることがあるのです。そして、「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくして」しなさい（伝道九・一〇）。それも、できるかぎり早くしなさい。ぐずぐずしてはなりません！　一日延ばし、一時間延ばしにしてはなりません！　今日できることを、明日に残してはなりません。しかも、できるかぎり上手にしなさい。居眠りやあくびをしながらしてはなりません。全力を仕事に注ぎなさい。労を惜しんではなりません。何事も中途半端に、いいかげんに、ぞんざいにしてはなりません。働けば、あるいは忍耐すればできることは、仕事の中で一つもやり残してはなりません。

（八）　常識を働かせ、神から与えられた知性をすべて仕事に用いて、大いに獲得しなさい。驚くべきことに、そうする人はほとんどいません。たいていの人は、先祖と同じ退屈な道をそのままたどっています。けれども、神を知らない人々が何をしていようと、それはあなたの規範ではありません。何に取りかかるにしても、彼らにまさる工夫をしないのは、クリスチャンの恥です。他の人の経験から、あるいは自分自身の経験や読書や思索から、絶えず学び続けなさい。なすべきことを何でも、昨日よりも今日、もっとうまくできるようになるためで

す。そして、学んだことを必ず実行しなさい。そうすれば、あなたの手にあるすべてのものを最もよく生かせます。

【二】 大いに節約しなさい

（一） 正直な知恵とたゆまぬ勤勉によって大いに獲得したなら、クリスチャンの思慮の第二の原則はこうです。「大いに節約しなさい」。この貴重なタラントを海に投げ捨ててはなりません。そんな愚かなことは、異教の哲学者に任せておきなさい。むだな出費でそれを捨ててもなりません。それは海に投げ捨てるのとまったく同じです。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」を満たすためだけに、その一部でも費やしてはなりません（第一ヨハネ二・一六）。

（二） これほど貴重なタラントのどの部分も、肉の欲を満たすためだけに浪費してはなりません。どんな種類のものであれ、感覚の快楽を得るために浪費してはなりません。とりわけ、味わう楽しみを増すために浪費してはなりません。私が言っているのは、大食や酒浸りを避けよということだけではありません。それなら正直な異教徒でさえ非難するでしょう。けれども、節度があり、世間体もよい種類の官能があります。上品な美食趣味です。それはすぐに胃をこわすわけではなく、（少なくとも目に見えては）知性を損なうわけでもありません。それでも（ほかの影響は今は言わないとしても）、かなりの出費なしには続けられません。こうした出費はすべて断ちなさい！ 美食や品数の多さを退け、飾らない自然が求めるもので満足しなさい。

（三） これほど貴重なタラントのどの部分も、目の欲を満たすためだけに浪費してはなりません。余計な服や高価な服、不要な装身具に浪費してはなりません。家を凝って飾り立てることに、少しも浪費してはなりません。余計な家具や高価な家具、高価な絵画、塗装、金めっき、本、役に立つというより優美なだけの庭園も同じです。これ以上よいことを知らない隣人たちには、そうさせておきなさい。「その死人を葬ることは、死人に任せて」おきなさい（マタイ八・二二）。私たちの主は言われます。「あなたにはなんの係わりがありますか。あなたは、私に従ってきなさい」（ヨハネ二一・二二）。その気がありますか。それなら、あなたにもそうできます。

（四） 持ち物の誇を満たすために、人に感心され、ほめられるために、何も費やしてはなりません。この出費の動機は、たいてい前の二つのどちらか、あるいは両方と絡み合っています。人が食事や衣服や家具に金をかけるのは、ただ食欲を満たしたり、目や想像力を楽しませたりするためだけではありません。虚栄心を満たすためでもあるのです。「あなたがみずから幸な時に、人々はあなたを称賛します」（詩篇四九・一八）。あなたが「紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮して」いるかぎり（ルカ一六・一九）、多くの人がきっとほめそやすでしょう。あなたの洗練された趣味や、気前のよさ、もてなしのよさをです。けれども、そんなに高い代価を払って、人の称賛を買ってはなりません。むしろ、「神からの誉」で満足しなさい（ヨハネ五・四四）。

（五） 欲望を満たせば欲望が増す。このことをよく考えるなら、だれがこうした欲望を満たすために何かを費やすでしょうか。これほど確かなことはありません。日々の経験が示すとおり、欲望はふければふけるほど増していきます。ですから、味覚やほかの感覚を喜ばせるために何かを費やすたびに、あなたはその額を払って官能を買っているのです。目を喜ばせるために金を使うたびに、あなたはその額を払って好奇心を増やしているのです。使えば尽きてしまう楽しみに、いっそう強く執着するようになるのです。人がほめそやすものを買うたびに、あなたはさらに虚栄を買っています。あなたには、虚栄も官能も好奇心も、もう十分にあったのではありませんか。それを増やす必要があったでしょうか。しかも、金を払ってまで増やすのでしょうか。これはどういう知恵でしょうか。文字どおり金を海に投げ捨てるほうが、まだ害の少ない愚かさではないでしょうか。

（六） 自分のためにしてはならないのと同じように、子供のためにも金銭を投げ捨ててはなりません。おいしい食べ物にも、派手な服や高価な服にも、そのほかどんなぜいたく品にも使ってはなりません。どうして子供のために、もっと多くの高ぶりや情欲、もっと多くの虚栄を買い与えるのでしょうか。「無分別な恐ろしいさまざまの情欲」を、どうして買い与えるのでしょうか。子供たちはこ

れ以上、何も必要としていません。もう十分に持っています。自然が十分に備えています。それなのにどうして、さらに金を使って、子供の「誘惑と、わな」を増やすのでしょうか。どうして、もっと多くの「苦痛をもって」子供を「刺しとおす」のでしょうか（第一テモテ六・九～一〇）。

（七）子供が投げ捨てるような財産を残してはなりません。今あなたが持っているものを、子供たちが浪費するだろうと考える十分な理由があるとしましょう。子供たちはそれを、肉の欲、目の欲、持ち物の誇を満たすために使い、かえってそうした欲を増し加えるでしょう。そうなれば、子供たち自身の魂もあなたの魂も危うくなります。それなら、子供たちの道にそのようなわなを置いてはなりません。息子や娘をモレクにささげてはならないのと同じように、ベリアルにもささげてはなりません。子供たちをあわれみなさい。罪を増し加え、その結果、永遠の滅びにいっそう深く沈ませると容易に予想できるものは、子供たちの道から取り除きなさい！　それにしても、子供にはいくら残しても足りないと考える親たちの心迷いには、まったく驚かされます！　何ということでしょう！　あなたは子供たちに、矢や燃え木や死を、まだ十分に残せないというのですか（箴言二六・一八）。愚かで有害な欲望を、まだ十分に残せないのですか。高ぶりや情欲や野心や虚栄を、まだ十分に残せないのですか。「とこしえの燃える火」を、まだ十分に残せないのですか（イザヤ三三・一四）。あわれな人よ！　あなたは「恐るべきことのない時に」恐れています（詩篇五三・五）。あなたも子供たちも、やがて地獄で目をあげるでしょう（ルカ一六・二三）。そのときにはきっと、「うじがつきず、火も消えることがない」苦しみを、十分すぎるほど味わうことになります（マルコ九・四八）。

（八）「では、もしあなたが私の立場だったらどうするのか。残すべき相当な財産があったらどうするのか」。私が実際にそうするかどうかはともかく、何をすべきかはわかっています。これには、まともな疑問の余地はありません。私の子供のうちに、上の子であれ下の子であれ、金銭の価値を知っている子がひとりいるとします。その子なら金銭を本当の用途に用いると信じられるとします。そのときには、その子に財産の大部分を残すことが、私の絶対の、欠かせない義務だと考えるでしょう。ほかの子供たちには、それまで慣れてきた暮らしを続けられるだけのものを残すべきだと考えます。「だが、子供たちがみな同じように金銭の本当の使い方を知らなかったら、どうなのか」。そのときには、子供たちのそれぞれに、困窮しないだけのものを与えるべきです。そして残りはすべて、神の栄光のために最もよいと私が判断するしかたで用いるべきです。「これは、ひどい言葉です。だれがそんなことを聞いていられるでしょうか」（ヨハネ六・六〇）。

【三】　大いに与えなさい

（一）けれども、ここまで進んだだけで、つまり「大いに獲得し、大いに節約し」ただけで止まるなら、何かをなし遂げたと思ってはなりません。さらに先へ進まないなら、これはみな無に等しいのです。これらすべてを、さらに先の目的に向けないなら、何にもなりません。ただ貯め込むだけなら、本当の意味で節約したとは言えません。金を地に埋めるのは、海に投げ捨てるのと同じです。金庫やイングランド銀行にしまっておくのは、地に埋めるのと同じです。使わないのは、実際には捨てるのと同じです。ですから、本当に「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつく」りたいなら（ルカ一六・九）、前の二つの原則に第三の原則を加えなさい。第一に大いに獲得し、第二に大いに節約したなら、そのうえで「大いに与えなさい」。

（二）その根拠と理由を知るために、考えてみなさい。天地の所有者である方は、あなたを存在させ、この世に置かれたとき、所有者としてではなく管理人として置かれました。管理人として、しばらくのあいだ、さまざまな財産をあなたに託されたのです。けれども、それらの所有権は今も神だけにあり、神から切り離されることはありえません。あなた自身があなたのものではなく神のものであるように（第一コリント六・一九）、あなたが享受しているすべてのものも神のものです。あなたの魂も体も、あなたのものではなく神のものです。とりわけ、あなたの財産はそうです。そして神は、それをご自分のためにどう用いるべきかを、この上なく明瞭に告げておられます。そのすべてが、キリスト・イエスによって神に喜ばれる、聖なる供え物となるように用いるのです（ローマ一二・

一）。この軽くたやすい奉仕に、神は「永遠の重い栄光」をもって報いると約束しておられます（第二コリント四・一七）。

（三） この世の財産の使い方について神が与えてくださった指示は、次のようにまとめられます。あなたの手には今、主の財産の一部が預けられています。ただし主は、望まれるときにはいつでもそれを取り戻す権利を持っておられます。あなたがその財産の忠実で賢い管理人でありたいと願うなら、その中から、第一に、自分自身に必要なものを備えなさい。食べる物、着る物、そのほか体を健やかに丈夫に保つために、自然が適度に求めるものです。第二に、妻や子供、召使い、そのほかあなたの家に属する人々のために、これらのものを備えなさい。そうしてなお余りがあれば、「信仰の仲間に対して、善を行」いなさい。それでもまだ余りがあれば、「機会のあるごとに、だれに対しても」善を行いなさい（ガラテヤ六・一〇）。こうするとき、あなたは大いに与えているのです。いや、正しい意味では、持っているすべてを与えているのです。このように用いるものはみな、実際には神にささげられているからです。あなたは「神のものは神に返」しているのです（マタイ二二・二一）。貧しい人に与えるものによってだけではありません。自分と家族に必要なものを備えるために使うものによってもです。

（四） では、自分自身や家族のだれかのために使おうとしているものについて、いつか心に疑いが起きたとしましょう。そのときには、それを取り除く簡単な方法があります。落ち着いて、真剣に自分に問いなさい。

一、これを使うとき、私は自分の立場にふさわしく行動しているだろうか。所有者としてではなく、主の財産の管理人として行動しているだろうか。

二、私はこれを、主のみことばに従って行っているだろうか。聖書のどこで、主は私にそうするよう求めておられるだろうか。

三、この行い、この出費を、イエス・キリストによって、神へのいけにえとしてささげられるだろうか。

四、まさにこのわざのために、「正しい人々の復活の際には」報いを受けると信じる理由があるだろうか（ルカ一四・一四）。

この点で疑いが起きても、それを取り除くのに、これ以上のものが必要になることはめったにないでしょう。この四つの問いによって、あなたは進むべき道について、はっきりした光を受けるはずです。

（五） それでもなお疑いが残るなら、今の四つの問いに沿って、祈りによってさらに自分を吟味するとよいでしょう。良心に責められることなく、心を探り知る方に、次のように言えるかどうか試してみなさい。「主よ、ご覧のとおり、私はこれだけの金額を、この食べ物に、衣服に、家具に使おうとしています。そしてあなたはご存じです。私はこの点で、あなたの財産の管理人として、澄んだ目で行動しています。あなたがこれを私に託されたときのご計画に従って、その一部をこのように使おうとしているのです。あなたはご存じです。私はあなたの命じられたとおりに、またあなたが命じられたからこそ、主に従ってこれを行います。どうかこれが、イエス・キリストによって喜ばれる、聖なる供え物となりますように！ 私のうちにあかしを与えてください。あなたがおのおのに、そのわざにしたがって報いられるとき、この愛の労苦のために私が報いを受けられるというあかしを」。もし良心が聖霊によって、この祈りは神に喜ばれるとあかしするなら、その出費が正しく良いものであることを疑う理由はありません。それは、決してあなたを恥じさせることのない出費です。

（六） これで、「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくる」とはどういうことか、おわかりでしょう。また、「あなたがたのいのちが尽きるとき、彼らがあなたがたを永遠のすまいに迎えてくれる」ためには、どうすればよいかもおわかりでしょう（ルカ一六・九）。金銭という大きなタラントの使い方に関するかぎり、本当にクリスチャンらしい思慮がどういうものかも、おわかりでしょう。それがどこまで及ぶのかも、おわかりでしょう。自分自身も隣人も、魂においても体においても損なうことなく、大いに獲得しなさい。そのために、絶え間ない勤勉と、神から与えられた知性のすべてを用いなさい。大いに節約しなさい。愚かな欲望にふけるためだけの出費、肉の欲、目の欲、持ち物の誇をみたすためだけの出費を、一つ残らず断ちなさい。生きている間も、死ぬときも、自分のためにも子供のためにも、罪や愚かなことに何一つ浪費してはなりません。そのうえで、大いに与えなさい。言い換えれば、持っているすべてを神にささげなさい。クリスチャンではなくユダヤ人のように、何分の一という割合に自

分を限ってはなりません。「神に返しなさい」（マタイ二二・二一）。十分の一でも、三分の一でも、半分でもなく、多くても少なくても、神のものすべてを返しなさい。そのすべてを、自分のため、家族のため、信仰の仲間のため、全人類のために用いなさい。もう管理人でいられなくなるときに、自分の管理についてよい申し開きができるように用いなさい。神のことばが一般の教えと個別の教えとによって指示するとおりに用いなさい。何をするにしても、それが「神へのかんばしいかおりのささげ物」となるように用いなさい（エペソ五・二）。そして、主がすべての聖なる者と共に来られる日に、一つひとつの行いが報われるように用いなさい。

（七）兄弟たちよ、私たちがこのように主の財産を管理しないなら、賢い管理人とも忠実な管理人とも言えるでしょうか。言えません。神のことばだけでなく、私たち自身の良心もそうあかししています。それなら、なぜためらうのでしょうか。なぜこれ以上、血肉や世の人々に相談するのでしょうか（ガラテヤ一・一六）。私たちの国も、私たちの知恵も、この世のものではありません（ヨハネ一八・三六）。異教徒の慣習は、私たちには何の関係もありません。私たちが人に従うのは、その人がキリストに従う者であるかぎりにおいてです。この方に聞きなさい（マタイ一七・五）。そうです、きょう、「きょう」というちに（ヘブル三・一三）、その御声を聞いて従いなさい！　今この時に、またこの時から、主のみこころを行いなさい。この点でも、すべてのことでも、主のみことばを実行しなさい！　主イエスの御名によって、あなたがたにお願いします。召されたその召しにふさわしく歩みなさい（エペソ四・一）。もう怠けてはなりません！「すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくして」しなさい（伝道九・一〇）。もう浪費してはなりません！　流行や気まぐれや血肉が求める出費は、すべて断ちなさい！　もう貪欲であってはなりません！　神から託されたものは何でも、善を行うために用いなさい。信仰の仲間に、すべての人に、あらゆる種類と程度で、できるかぎりの善を行いなさい！　これは「義人の知恵」の、決して小さくない一部です（ルカ一・一七）。あなたがたの持っているすべてを、あなたがた自身のすべてと共に、霊のいけにえとして神にささげなさい。神は、ご自分の御子を、ひとり子をさえ、あなたがたのために惜しまれなかったのです（ローマ八・三二）。こうして、「真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げ」なさい（第一テモテ六・一九）。

標準説教集

2026年11月23日版

著者　ジョン・ウェスレー

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/wesley-sermons/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/wesley-sermons

説教一と説教五十を除き、原文（Sermons on Several Occasions）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。